
An isolated black

袖雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

A n i s o l a t e d b l a c k

【Nコード】

N 3 6 6 5 0

【作者名】

袖雨

【あらすじ】

その少年の名は？黒神 怜？という。

彼は、二年前に才人がいた地球から姿を消した。 行き先は異世界。

彼は、そこで一つの……しかし、限らない幸せを見つけた。

それは儚い幻。

彼は、それでも不幸だった。 消えないでくれ、俺はお前を失いたくない。

彼は、そこで幸せは絶望に変わることを知った。 全ては絶望

になった。

彼は、一命を取りとめ、救いを……そして強さを得た。

もう、

あんな思いは御免だ。

彼は、その強さを持って、『ハルケギニア』へ召喚される。

正史では有り得ない英雄。

／／／／／ この話は、過去の悲しみを力に、今護りたい恋人や仲間のために尽力する、黒衣を身に纏う少年による影の英雄譚。そんなお話。

主人公紹介（前書き）

どうも、作者の柚雨です。

読み方は『ユウ』といたします。

ちなみに、作者は原作を知りません…。

アニメとssは見てるんですが。

なので、原作の設定や流れを無視しないように努力しますが、ズレてしまうこともあるかもしれません。

この点をご了承された上でお読みください。

まずは、主人公の紹介をどうぞ！

主人公紹介

『孤高の漆黒』 オリジナル主人公紹介

黒神 クロカミ 怜 レイ： 身長178cm、体重63kgの長身痩躯。

通常の日本人より、さらに真っ黒に見える、漆黒の髪と瞳が特徴。髪は所々ハネており、無造作ヘアといった感じ。

常に黒のシャツ、黒のズボン、黒の薄手ジャケットを着用。（季節によってジャケットを着なかつたり、さらに厚手のものを上に羽織つたりする。でも、結局黒）

本人曰く、シャツとズボンは7着、ジャケットは3着を着まわしており、全て少しずつデザインが違うらしい。

幼い頃に両親と妹を悲惨な事件によって亡くしており、その過去のせいか、常に凍てついた表情をしている。

凍てついた表情が災いし、怜に対して恐怖の感情を持つ者は多い。ちなみにその表情さえなければ、周りの評価が『怖い』から『カッコイイ』に変わる……らしい。

原作主人公の平賀 才人とは同い年、幼馴染で、親友同士だった。しかし怜は15歳になったばかりの頃に、日本で行方不明になっているため、2年近く会っていない。

行方不明の理由はゼロの使い魔の世界、『ハルケギニア』とは違う異世界（ミラーナという魔法世界）に迷い込んだため。

迷い込んだ異世界では、武術と魔法の訓練を二年間受け、その非凡過ぎる才能を開花させている。

戦闘能力（被召喚時）

力	3200（ミラーナの成人男性、平均は1400ほど）
耐久	1500（ミラーナの成人男性、平均の1.5倍ほど）
素早さ	31700（ミラーナの成人男性、平均1500。明らか

かに突出しすぎていて、もはや人外)

魔力 78600 (普通魔術師の平均は1800程度。ミラーナ史上最大の魔力)

魔法耐性 4000 (ミラーナでの平均1200。上級魔術師と同程度)

所有スキル > 『徒手空拳』 L V ・ 1 0 。 一応、L V ・ 1 0 が最高値と言われている。

『武器使い』 L V ・ 1 0 。 全ての武器を問題なく操ることが出来る。

『双剣使い』 L V ・ 1 0 。 亜空間から白と黒で対の双剣：黒羽と白羽を呼び出せる。L V ・ 1 0 の域

で扱うことが可能。(もし、10以上も数えるならば、L V ・ 3 0 程で操れる)

『魔法使い』 L V ・ 1 0 。 ミラーナにおける攻撃魔法全般を、とても高威力で行使可能。補助系も大抵覚えており、チート状態。(『双剣使い』と同じく10以上で、L V ・ 3 0 程度)

『二刀剣舞』 L V ・ 1 0 。 我流の二刀剣舞、きく拾の型までを完璧に使いこなす。型の数字が上がれば上がるほど習得は困難になり、性能も格段に上がる(『双剣使い』と同じく、実際は10以上で、大体L V ・ 3 5 くらい)

結局、完全なチート野郎。

しかも強さのインフレはまだまだ続いており、その成長は留まることを知らない。

被召喚時の強さの目安としては、ゼロ魔公式チート・烈風のカリンを、目を瞑って片手で瞬殺出来る程。もっと強い人物とも余裕で渡り合えるだろう。

正直、ゼロ魔の世界に敵はいない。

主人公紹介（後書き）

拙い文章になると思いますが、読んでいただけると幸いです。

プロローグ(前書き)

とりあえずプロローグもどつぞど！

プロローグ

「これでサヨナラだな、ジーさん…いや師匠。…世話になった」
漆黒の服で身を包んだ黒髪、黒目の少年は空になった小屋に向かつてそう呟いた。

何故、小屋が空かというと、小屋の持ち主であり、少年の師匠である老人が寿命によって息を引き取ったからだ。
それを機に、少年は旅立ちを迎えたのだ。

少年の凍てついた表情からは多くを読み取れないが、漆黒の瞳には深い悲しみが宿っているように見える。

悲しみの根源には、昔の事件が深く関わっているのだが、今はまた別の話。

「…死んだジーさんに伝わるはずもないか」

少年はもう一度、しかし先ほどよりも小さい声で呟く。

そして、必要最低限の荷物を持ち、小屋を後にするのだった。

とてもじゃないが、綺麗とはいえない道をひたすら歩く、歩く、歩く。

しかしこの少年、疲れというものを知らないのだろうか。

かれこれ三時間、ハイペース・休みなしで歩いているのに、疲れどころをみせるどころか汗一つかいていない。

春先であることを考えても、なかなかの体力だ。

さらに歩き続けること一時間、やっと街『レグリア』が見えてきた。
レグリアは、ギルドと呼ばれる機関があることで有名である。

ギルドとは、あらゆる人物からの依頼を登録者に紹介する機関で、

その依頼は草むしりなどの雑用からモンスター討伐まで多岐に渡り、依頼成功時には、ギルドから難易度に応じた報酬が支払われる。少年は、ギルドを指摘しているのだろうか、街に入ると大通りを通り、真っ直ぐギルドに向かって歩き出す。

実はこの少年、武器など持っておらず、戦いに向いているようには見えないのだが、凄腕の戦士であり、巷では二つ名まで出来ている。ちなみに武器は、魔法によって呼び出し可能な双剣だ。

歩くこと数分、少年はギルドに辿り着いた。

ギルド内は喧騒で溢れかえっており、少年は顔をしかめる。

だが少年は、そんな喧騒を完全に無視して受付へ向かった。

受付嬢はなかなかの美人だったが、そんなことは気にせず少年は冷たく訊ねる。

「依頼を受けたい」

「い、依頼でございますか？まず、確認のためにお名前を聞かせていただいてもよろしいでしょうか？」

凍てつく表情、物言いに若干慌てながらも、受付嬢はそう答えた。

「レイ・クロカミで登録している…騒がないでくれよ？」

「レイ?!ではあなたが『漆黒の悪魔』なのですか!!!?」

この大声にギルド内の喧騒はいきなり静まり、しばらくするとまた小声で話し始める。

「漆黒の悪魔？」

「本当に？」

「あれがあ有名な…」

「俺、ヤツが最近、盗賊団『赤い翼』をたった一人で潰したって聞いたぞ」

「赤い翼あ？あんなでかい組織を一人で壊滅させられるわけないじゃない」

「でも、その話は俺も聞いたぞ」

「それに赤い翼の連中、皆殺しされてたつて」

「盗賊とか、凶悪な犯罪人には容赦しないらしいぞ」

「だから『悪魔』なのね」

「わしは、ありえない量の魔獣を数分で全滅させたつて聞いたのう」

「そのなかにはドラゴンも混じつてたんだつてな」

「我輩は、漆黒の悪魔の戦つているところを見たことがあるのだが、本当に悪魔のような戦いぶりだつた…」

「しかし、女性や子供には優しいつて聞いたなあ」

「俺の知り合いは男だが、魔獣に襲われてる時にたまたま通りかつて、無愛想ながらも助けられた言つてたぞ」

「悪魔つていうよりは正義の味方じゃねーか？」

「あたしなんか、一日に10人は女を口説いて、しかも惚れさせてるつて聞いたわ！」

これが大体当たつているから、たちが悪い。

まあ、倒したドラゴンは、竜族の中では弱い部類に入るものであったが。

ちなみに、レイの威信のために一つ言わせてもらつと、最後のは根も葉もない、まるっきりの大嘘だ。

一通り情報交換を終えた人々は、今度は少年…レイの方に向かつてくる。

「だから、騒ぐなと言つたのに…」

レイはそう言つて、ルーンを詠唱して転移魔法を展開する。

…どうやら、人ごみは嫌いらしい。

少年は、レグリスから数百キロ離れた草原に転移していた。

ここは、レイがミラーナに迷い込んだときに、最初にいた場所である。

「久しぶりだな、ここも。……………才人はどうなったんだろうな」

少し寂しそうに独り、呟いた。

しばらくの間、望郷にいる親友のことを考えていると、目の前に突然、鏡のようなものが現れた。

「これは…？見たことないが転移のようなものか？……………ここでは有名になりすぎた。遠くに行くのもいいかもな」

そう言っただけでレイは鏡のようなものに突き進んでいき、…この世界から消えた。

地球にて。

「やっと直った！！ノートパソコンの修理って意外と時間かかるよなあ。でもこれで念願の出会い系が…」

パーカーを着たごく普通の…いや少しアホっぽい少年は呟いた。…わりとテンション高めに。

幸い、誰にも聞こえなかったようだ。

どうやらこの少年、平賀 才人はノートパソコンが壊れる前に出会

い系サイトに登録したらしい。

「ふう、でも本当に怜のヤツはどこ行っちゃったんだろうな。一番の親友だったのに……」

才人は悲しそうにもう一度呟く。…今度はしつかり小声で誰にも聞かれることはない。

感傷に浸りながら、東京の街並みを歩いていると目の前に突然、大きな鏡が現れた。…レイの前に現れたものと同じような鏡？だ。才人の興味はすぐにこっちに向かう。

「おおお！なんだこれ！？…鏡か？でもなんで誰も見ないんだろう？…もしかして俺にしか見えてない？」

そう、この鏡？は、才人にしか見えていないのだ。ここで、才人は鏡？に石を投げ入れたり、手を突っ込んだりして遊んでいる。

…いろいろと順応性に富んだ性格である。

「おおお、すげえ！突き抜けてるのに、後ろから突き抜けた分が見えねえ！！！」

周りの人は不審者を見るような目で才人の方を見る。しかも本人、気付かず。なかなか凶太い神経だ。

「ん？あれ？…！抜けない？…つか吸い込まれてる？…うわあああ」

そしてやはり才人もレイと同じように…しかし事後的に鏡の中に消えてゆき、地球から姿を消した。

プロローグ（後書き）

ハルケギニアは次です。

親友、再会。そしてルイズ。（前書き）

調子に乗って三連投です。

やっぱり、ハルケギニアに行くところまではいききたいと思ひまして
…。

ストックはまだまだあるので大丈夫かとは思いますが、ストックが
切れれば投稿スピードは一気に落ちると思われます。ご容赦くださ
い。

…と言っても、ストックの残りはたくさんあるので、しばらくは一
日一投稿させていただきます。

親友、再会。そしてルイズ。

「ちょっとあんた達、聞いてるの!!?」

「聞いてない。俺たちは一応、再会を喜んでる最中なんだ。邪魔するな」

「一応ってなんだよ。てか、ほんとにどこ行ってたんだ?!」

「ああ、驚くなよ?俺は...」私の話を聞きなさあぁい!!」「うるせえ...」

...このような状況に至ったのには、わけがある。
少し時間を遡ってみよう。

桃色の髪、低身長的美少女は焦っていた。

(ヤバイ、ヤバイ、ヤバイ。これじゃ使い魔の召喚が出来ないじゃない)

ここ、トリステイン魔法学校では二年生に進級する際、進級条件として使い魔を召喚する。

使い魔を召喚出来なければ、留年である。

...未だ、この試験にひっかかった者はいないが。

しかし、桃髪少女は召喚失敗の連続。

しかもなぜか爆発、爆発、爆発、爆発.....。

「ミス・ヴァリエール。次の授業に遅れてしまう。使い魔の召喚は明日、もう一度行いましょう」

頭がさびしい...もとい、頭がハゲて...さらにもとい.....とにかく、40歳ほどの眼鏡をかけた教師らしき男性が、桃髪少女に声

をかけた。

「そんな…。ミスタ・コルベール！もう一度やらせてください！！
…次に失敗したら学校を辞めます」

どうやら、ハゲ…いや、あの…：…もうハゲでいいか…ハゲはコルベールという名のようだ。

「ミス・ヴァリエール！退学など…！」

コッパゲール…：…コルベールは心配の声をあげるが、桃髪少女はもうルーンを唱えはじめている。

「我が名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。宇宙の果てにいる私の僕よ！気高い誇りを持ち、強大な使い魔よ！私は心より求め、訴えるわ！…：…：…私の導きに応えよ！！」

なんかもう、ずいぶんと元と違う詠唱だった。

またもや爆発…。

（失敗しちゃったのね…。お父様たちに顔向けできないわ。…：…つてあれ？なんか砂煙の向こうでなんか動いてる？！これって成功じゃない！どんな使い魔が…）
人間だった。

しかも、平民っぽい二人。

その二人は、片方は全身真っ黒い服装、もう片方はハルケギニアでは見慣れない服装をしている。

「おいおい、ルイズが平民を召喚したぞ！」

「しかも二人！」

「さすが『ゼロ』だ！俺たちとはやることが違うな！」

周りの生徒達がルイズをからかっている。

：「どうやらこれは毎回のことらしく、からかい方も手馴れたものである。」

「あんだ達、誰？」

桃髪少女、ルイズは、意識して回りの声を無視して（内心、相当イラつきながらも）訊ねる。

しかも、からかわれただけでなく、もっとすごい使い魔を期待していたこともあり、不機嫌値はmaxに近い。

「ん？ここはどこだ…？」

「イツテエ！尻餅つてイテエ！！」

冷静な声と慌てた声が呟いた。

：「片方はわりとテンション高めに。そして互いの顔を見る。」

「…才人？才人か？！」

「おおお！怜！！怜じゃん！！！」

「久しぶりだな、才人」

「おうっ、久しぶり！てか怜！！どこ行ってた「ちょっとあんだ達、聞いているの！！？」え？？？」

ガン無視されているルイズが怒鳴った。

ついに不機嫌メーターが振り切ったらしい。

「聞いてない。俺たちは一応、再会を喜んでる最中なんだ。邪魔するな」

「一応ってなんだよ。てか、ほんとにどこ行ってたんだ?!」

「ああ、驚くなよ？俺は…「私の話を聞きなさああい!!」うるせえ…」

うるさいのが嫌いなレイは、とりあえずルイズに話をふる。

「で？ここはどこだ、桃色？」

…逆にうるさいのを望んでいるかのような言い草だ。

「ちよ、あんたねえ！平民の分際で、貴族の私に向かったらミス・ヴァリエール！皆があなたを待っています。早くコントラクト・サーヴァントをすませなさい」でもミスタ・コルベール！こいつら平民なのに生意気です!!やり直しを要求します!!!!」

ルイズ、うるさくなる コルベールが諫める やり直し要求 なら俺らを帰せ(レイ&才人) てか、こいつらなんで魔法使いのコスプレしてんの?(才人)という状況になった。

ちなみに、ルイズたちは別にコスプレ教の信者というわけではなく、本当に魔法使い(この世界ではメイジと呼ばれている)だ。

「春の使い魔召喚は神聖なもの…。よって、どんなルールよりも優先されるのだよ。彼らを使い魔にしなさい。…少年達もいいかい？この子の進級がかかっているのだ、どうか受けてくれないかな？」

しかし、コルベールの言葉虚しく、レイが名乗った後、否定をする。

「名前はレイ・クロカミだ。このアホ面はサイト・ヒラガ。ついで

に言えば、俺は誰かにルーンで強制されて従う気なんてない。それにさつきから、ここはどこだと訊いている…いい加減に答えてくれ」
しかし、ルイズは気にも留めずに言う。

「ここはハルケギニア、トリステイン魔法学校。さあ契約よっ。…ミスタ・コルベールが言うから仕方なくやるんだからねっ！」
「ツンデレだ！リアルではレアだなあ」

才人はアホなことを言っていた。

「才人……。はあ、まあどうでもいいが、契約を結ぶのならこいつとやってくれ。こいつはここでは使い魔という立場がなければ、生きる事が難しそうだからな」

そう、レイはここが異世界であることには、すでに気がついていて、そして、武力をもつ自分と違って平和な日本で暮らしていた才人が、おそらく魔法世界であるここで生き残るために一番簡単な方法を見つけ出し、進言したのだ。

ちなみに、自分で才人を護るという手もあるが、レイはめんどくさいので言わなかった。

「えええー！俺だつて嫌だ！」

だから、才人の要求はシカトする。

「お前のためだ。死にたくはないだろう？…俺は、自衛が出来る。お前は出来ない。…だからだ」

「いや、さっぱり分らないんだけど。ってか、怜ってそんな強かったっけ？それに危険があるとは思えないけど」

「二年間で鍛えた。…さあ桃色、さつさと才人と契約しろ。俺はルーンなしで使い魔もどきをやってやるから。…その教師もそれでもいいな？」

レイは、なぜ危険なのかをはぐらかし（魔法の存在を言っても、才人はどうせ信じないため）、少しキツイ語調でコルベールに訊ねた。

「え、ええ。構わない。ちなみに私はジャン・コルベールだ。よろしく。…では、ミス・ヴァリエール、コントラクト・サーヴァントを」

すると、ルイズは顔を真っ赤にしながら、こんなことを言った。

「か、感謝なさい！普通、平民が貴族にこんなことしてもらえないんで一生ないんだからね！！」

そしてルイズはルーンを詠唱し、才人にキスをした。

魔法体系を作った人物は、一体なぜ契約にキスが必要と定めたのだろうか。

「お、おい。いきなりキスすんな！」

キスが終わると、才人は抗議した。

「嬉しそうにそんなこと言っても効果ないぞ」

レイの鋭いツツコミ。

才人に857のダメージ！

しかし、このダメージはレイのツツコミによるものではないらしい。

である。

「…さあ、私達も行くわよ」

悔しそうにルイズは言った。

「おおお！人が飛んでる！！なあ、お前は飛ばないのか？」

才人の禁句のようなお言葉。

空気読めない、まさにKY。

今の生徒達の言葉でルイズが飛ばないことに気付かないのだろうか。

「どうせ、あんた達もバカにしてるんでしょ?!」

レイはなにも言っていないのに、同じ扱いになっている。

(こいつ被害妄想癖でもあるのか?…いや、あんな風に罵られ続ければ当然か)

「おい、ルイズと言ったか?飛びたいのなら俺が魔法を使おうか？」

「へ、平民が魔法を使えるわけじゃないじゃない!バカにしないで!…それともあんた平民メイジなの?」

「えええーっ!怜、今魔法って言った?!なんで使えんの?!」

二人同時に言った　レイ、辟易、という状況である。

「同時に言つな。…まず才人、さっきも言ったが事情があるんだ。

それは後で話す。…それとルイズ、お前の言う『メイジ』が魔法使いという意味ならそうともいえるな。詳しいことは後で話す、今は飛ばか飛ばないか答える。…転移でもいいぞ」

「て、転移?! あんたそんなことも出来るの??!」

転移というハルケギニアではありえない魔法に驚き、被害妄想に歯止めをかけたルイズ。

代わりに、かなりびっくりしているが。

「ああ、記憶にある場所、もしくは知り合いのいる場所なら。今回転移するなら、お前の記憶にある場所に転移することになるな。:

その場合はお前の額に触れないといけないんだが、いいか?」

「し、仕方ないわね。いいわ。それと、あんた達とは少し話す必要があるみたいだから、私の部屋に転移して」

「授業はサボるんだな? :じゃあ、頭の中で自室を思い浮かべろ。

才人もちよつとこつち寄れ。その方が転移しやすい」

「なんか怜、すごいことになってんな...」

怜は、才人の呟きを無視して、ルイズの額に触れながらルーンの詠唱を始めた。

「《移せ、移せ。我が魔力よ、大いなる意志のもとに転移陣を解放し、私の望む地へ導け! テレポーテーション!》」

そして三人の輪郭は徐々に形を失くしていき、その一瞬後にはこの地から消え去った。

親友、再会。そしてルイズ。（後書き）

ちなみに作者、某雨的主人公最強小説をリスペクトしています。分かる方は分かると思いますが、ドラゴンスレイヤーな最強主人公の話です。

今作品の主人公レイは、某雨的主人公最強小説の主人公と酷似してしまう場合もあるかもしれませんが、ご了承ください。

とりあえず、四日先まで予約投稿させてもらっています。そのため、表示される文字数が四日先の分まで含まれていますが、気にしないでください。

使い魔の仕事とは……からのシエスタ（前書き）

あまり話は進みませんし、説明的文章かもしれませんが、よろしく
お願いします。

使い魔の仕事とは……からのシエスタ

ルイズの自室にて。

ちなみに、ルイズの部屋は広いとは言えないものの整っており、質の良い家具がそろっているような部屋だ。

「す、すごい。本当に私の部屋に来てる」

「え、え？ここどこ？？」

どうやら、才人は状況を理解出来ていないようだ。

「どうでもいいが、まずは改めて自己紹介しておこう。……俺はレイ・クロカミだ」

「俺は、平賀 才人だ！えーっと、怜みたいの名前先に言った方がいいか？…それならサイト・ヒラガだ！よろしくな！！」

「さつき名乗ってたときも思ったけど、二人とも変な名前ね。…私は、ヴァリエール公爵が三女、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールよ。あんたら二人は平民なんだから私に敬意を表しなさい！…一人は一応メイジみただけど」

レイは無愛想に、サイトは能天気な、そしてルイズはかなり高圧的に自己紹介を終えた。

「名前長いな。…まあ、覚えたが」

「お、覚えたの？！レイ、すげえ！！」

「フルネームを一回で覚えたの？…なかなかすごいわね……。えーっと、次は仕事について決めなきゃね」

そう言つてルイズは、仕事の説明を始める。

「じゃあ、とりあえず一般的な使い魔の仕事について話すわ。使い魔の仕事は、大まかに分けて三つ。一つ目は、主人の目となり、耳となること。…でもこれは無理そうね。何も見えないし、なにも聞こえないわ。そして、二つ目は秘薬調合のための材料を採取すること。出来る？」

「この土地勘がないから、しばらくは無理だろう。…そもそも異世界だしな」

「「異世界???!」」

サイトとルイズ、二人同時に声をあげる。

「そうだ。ルイズはともかく、サイトは気付かなかったのか?…髪色とか明らかに地球では有り得ないだろう」

「た、確かに…。ピンクの髪なんて普通ないよな…蒼とかもいたし」「ちよつと、異世界ってどういうことよ!」

ルイズがもう一度声をあげた。

「そのままの意味だ。…あとで説明するから、まずは使い魔についての説明を全部おわらせてくれないか?」

「勝手に話を進めないでよ」

異世界という言葉に勝手に反応したのはお前じゃないのか?と、レイは呆れながらそう思った。

「まあいいわ。…次は三つ目の仕事だったわね。三つ目は主人の護衛ね。これは、そつちのアホ面は無理だろうけど、真つ黒の方は出来そうね。…あの魔法からして。まあ、こつちも剣とかは扱えそ

うにないけど」

「護衛くらいなら働こう。一応、使い魔もどきだからな。…アホ面サイトだけじゃ、キツイだろう」

サイトは二人の言葉にツツコむ。

「アホ面とは何だ、アホ面とは！！？……てか、そうだ！レイ、異世界とか魔法とかどうということなんだ？！」

「じゃあ、今から説明しようか。まず、ここが異世界と分かった理由だが、貴族制度があることや、魔法体系の違いから判断した。そして何故、俺が魔法を使えるかと言うと、二年前に行方不明になった時、『ミラーナ』という、こことは違う異世界に迷い込んだ経験があるからだ。……分かったか？」

レイは簡潔に説明を終えた。

「簡潔すぎるわあああああ！！！！」

「そつよ、もう少し細かく説明しなさい！」

サイトの叫びと、ルイズの命令が鳴り響いた。

「しょうがない。じゃあ細かく、順を追って説明する。……まず、話は二年前に遡る。二年前、俺の誕生日の翌日、俺は気がつくとい見知らぬ草原にいた。あれは、本当に突然だったな。…それはまあいい。そこで俺は、自宅に帰るために草原から出て、ある村に辿り着いたんだが、そこは元々俺の住んでいた『東京』とは似ても似つかず、俺からすれば外国人といえるような人物達が暮らしていた。そのこの世界の名は『ミラーナ』というらしく、完全に異世界だった。しかも、東京とは違い、魔法が存在する世界だった」

「ってことは、トーキョーってところには魔法がないの？有り得ない

「!!」

「うるさい、ルイズ。無いものは仕方ないだろう? ……とにかく、そこでひよんなことから魔法、武術共に優れた人物に師事して修行することになり、習得した。その魔法体系はおそらくことは違う。……とりあえず特徴をあげておこう。俺が気付いた違いは、杖が必要かそうでないかという点だ。ミラーナの魔法は、杖は指向性を高める以外に必要としない。…俺が見た限りでは、お前たちは全員杖を持っていた。予想だがここでは杖、ないしは発動媒体なしでは魔法を行使出来ないだろう?」

「そうよ。…そのあんたが言うミラーナってここではホントに杖が必要ないの?」

「ああそうだ、ルイズ。このような魔法体系の違いから異世界だということ判断したんだ。以前に異世界迷い込みを経験している身だからか、その考えにはすぐに辿り着いたな。……これで、分かったか?」

レイは今度こそ、完全に説明を終えた。

「異世界だつてことは理解した。でもいろいろと質問したいんだけど」

サイトはレイに質問タイムを要求した。

「ああ、分かった。…ルイズも訊きたいことがあれば今の内に…いやもう夜も遅いから明日にするか。ということで質問は、とりあえずサイトの質問一つに答えよう」

「ずるいじゃない! 主人の質問にも答えなさいよ!」

ルイズは抗議の声をあげた。

わりと怒り気味で。

「俺は“もどき”だから、お前は主人でもなんでもない。…それに、特に何もなければ、明日に説明する」

「し、しょうがないわね。アホ面！早く質問なさい！！」

ルイズはサイトに八つ当たりした。

「俺に当たるなよ…。まあいいや、なんでミラーナが異世界って気付いたんだ？」

「…」

サイトの質問に二人して呆れて、言葉も出なかった。

「そんなのでいいのか？…魔法があつたから、そして世界の名前が違ったから。以上」

「え？え？ちよ…」もういい、なんか興ざめしちゃったわ。もう寝る。あんた達は床で寝なさい」え？？待って、なんで？！「分かった。…外じゃなくてもいいのか？」おーい！「そんなこと訊くなんて、少しは礼儀が分かってるのね。…でも風邪ひかれても困るし、外に出る必要はないわ。毛布はそこにあるから使いなさい」聞いてくださいーい！！「了解した。悪いな。…おやすみ」おおおい、無視ですかああ。終いには泣きますよおお…。「勝手に泣いてなさい。…おやすみ」……………おやすみ」

サイトは涙目になりながら、床に寝転がった。

その頃には、すでにルイズは疲れからか、熟睡していたし、レイも座った姿勢で毛布を被り、寝ていた。

まあ、レイの方は異常が少しでもあれば、すぐに起きそうな程に隙のない眠り方だったが。

「俺も寝よう…」

不満たらたらだったがサイトも意外とすぐ寝た。

…やはり、侮れない順応性である。

ちなみに、なぜ疲れてもおらず、順応性が異常に高いわけでもないレイが、すぐ寝られたかという点、それが『戦士』もしくは『旅人』の心得だからだ。

戦士や旅人は、休み時間、ひいては寝る時間を無駄に出来ない。

少しの時間で体力を回復しなければならず、そのせいで、ミラーナにおいて漆黒の悪魔と呼ばれるほどの戦士だったレイは、身に染み付いているのだ。

ついでに言えば、警戒するような寝方なのも戦士の特徴であり、魔獣から襲われた時に身を護るためだと言われている。

…実行できている戦士は少ないのだが。

以上、閑話休題。

翌朝、早朝4時半ごろ。

すでにレイは起きていた。

実は、昨日ルイズに、話の合間に洗濯を頼まれていたのだ。

まあレイには洗うつもりなどなく、今までやっていただけであろう使用人立場の者に任せようとしていたのだ。

もちろん、自分の服（じつは、旅立ちの際に、着替えは持っている

だけ持つてきていた。…全部黒だし、本人以外はデザインの違いを見抜く事が出来ないが）は自分で洗うつもりだし、そもそも早起きの理由は修行のためだった。

とりあえず、レイは二時間ほど修行をし（修行内容は…：すごく、とても、かなり壮絶なものだった、とだけ言っておこう）、使用人らしき人物を探し始めた。

レイが周りを見回していると、後ろから気配がした。

「後ろにいるのは誰だ？」

「えっ？あの、わ、私はシエスタといいます。…メイドですっ」

凍てつくような声音だったからか、レイは黒髪で可愛い顔立ちのメイド…：シエスタを怖がらせてしまったようだ。

「すまない、怖がらせたか？先ほどから後ろの気配が気になっていてな」

「いえ、こちらこそ失礼な反応を示してしまつて…。でも、後ろの人に気付くなんて、気配に敏感なんですね」

「ああ、職業柄な。…：自己紹介がまだだったな。俺の名はレイだ。レイ・クロカミという」

「家名があるということは、貴族様なのですか？」

「いや、俺は貴族じゃない。誰でも家名をもっている…：そういう文化圏に住んでいた。…：俺は、ルイズという人物に召喚された、使い魔“もどき”」

「ああ、ミス・ヴァリエールの！え、でも“もどき”…？」

“もどき”という言葉に疑問を呈したシエスタ。

「俺は、契約してないからな。契約したのは一緒に召喚されたサイトだ。だから“もどき”」

「そうなんですか。では、改めてよろしくお願いしますね」

「よろしく頼む。…ところで、貴族の洗濯物はいつもどうしてるんだ？」

ここで、押し付け案を実行するレイ。

「私達メイドが洗っています。…あのかごに入れてくだされば洗濯しておきますよ」

と、向こうにあるかごを指差しながらシエスタは言った。

「分かった。…自分の分はどこで洗えばいい？」

「それも、かごに入れといてくださって結構ですよ」

と、シエスタは親切に答えた。

「いや、それは悪いしな。…しょうがない、自分の体と同じく、魔法で洗おう」

レイがそう言うと、シエスタはいきなり顔面蒼白になって叫び始めた。

「やはり、貴族様じゃないですか！魔法が使えるんですもの。嘘つかないでください！！……ハッ、す、すみません！気が動転してしまっ……ど、どうか命だけは……！」

そして、最後にはすごい勢いで謝り始めた。

(おそらく、この世界は貴族の血が流れていないと魔法が使えないのだろう。シエスタの怯え方からして。確かに魔法が使えない者には、魔法は脅威だ。…それにしても、魔法の有無だけで、ここまで平民と貴族に格差があるとはな)

「悪かった。顔を上げてくれ。…ルイズが言うには平民メイジというものらしい。(平民なのに魔法が使える、特殊な人物の事か?)だから貴族ではない。というより、そんな制度がない異世界から来たんだ」

「…ふざけないでください。いくら田舎娘だからって異世界なんてないことくらい知っています」

どうやらシエスタは、レイが貴族ではないというところ“だけは”信じたらしく、少しすねたような口調でそう言った。だからレイは、シエスタの顔を覗き込みながら真剣に言う。

「いや、本当のことだ。信じてくれ」

シエスタは、レイの瞳をしばらく見た後、呟く。

「あなたの瞳は、…とても鋭いですけど…純粋で…とても嘘をついてるようには見えません。…だから…私は…あなたを信じます」

「ありがとう。…ん?もうここまで陽が昇ってきたか。…すまない、一応もどきでも使い魔だから、ルイズを起こしに行かないといけない…。また会おう」

「はい、また会いましょう!」

そして、レイはルイズの部屋へと歩いていった。

使い魔の仕事とは……からのシエスタ（後書き）

クドイようですが、ストックが切れれば一日一投稿が出来なくなります。

ストックが切れた後は三日に一投稿を心がけます。

また、拙い文ですが、これからもよろしくお願いいたします。

微熱なキュルケと会う……の後に賄い食（前書き）

どうでもいいかもしれませんが、感想を一般の方からも受け付けることにしました。

『この作品に対する不満』、『こうして欲しい！という要望』、『出来れば良い点』なんかを書いていただければ、作者にとってこれほど嬉しいことはありません！

ええ、前書きが少し長めになってしまいましたが、本文スタートです！どうぞ！！

微熱なキュルケと会う……の後に賄い食

レイが部屋に入っても二人はまだ寝ていた。

「まだ寝てるのか。…他の部屋の奴らは大抵、起きだしているというのに」

レイが、こんなことをわりと大きめな声で言っても、二人が起きる気配は無かった。

《起きろ!》

レイは声に少々の魔力を込めて言い放った。

こうすると意識が無い状態なら、大抵は従わせることが出来るのだ。

「はっ、えっ、なに?! なんて行方不明の怜が?!」

「えっ? ちよっ、なに?! あ、あんた達、誰よ?!」

「お前らが鳥頭だということは十二分に理解した。だが、さっさと起きてくれ。それとも説明が必要か? ……サイト。ここは、異世界。

二人一緒に召喚された。ルイズ「もういいっ! 思い出した!」
「二人で言うな、うっとうしい。…やっと起きたか」

「で、着替えとつて。そんでもって着替えさせなさい(今度は、私
がこいつらを慌てさせてやるんだから!)」

ルイズの恥も外聞もない命令が下された!

「お前は、脱ぎ魔だったのか…。俺にそういう趣味は無い。サイトにやっってもらうんだな」

しかし、レイにバツサリ切り捨てられてしまった！

「そうそう、脱ぎ魔かよ。…っておい！俺にもそんな趣味はない！」

サイトは、スキル・ノリツツコミを発動した！
だが、レイとルイズには効かないようだ。

「私にだってそんな趣味はないわよ！」

「じゃあ、なんであんなことを言ったんだ、脱ぎ魔？」

「なあ、レイ。その凍てついた表情でからかうのは、マジで怖いぞ」
「別にからかっているつもりはないんだが」

「天然？！一層たち悪いわ！！」

きれいにツツコミが重なった。

「ただの冗談だ。おい、サイト。外出るぞ」

（どこから、どこまでが冗談?!）

「わ、分かった」

そして二人して部屋の外に出た。

二人が部屋の外で待とうとしていると、褐色の肌でスタイル抜群、燃えるような真っ赤な髪的美少女が近づいてきた。

「あなた達、誰?…あら、もしかしてルイズの使い魔?ホントに人間だったのね!さすがゼロだわ」

なかなか失礼な赤髪少女だった。

「で、お前はルイズの知り合いなのか？」

レイはとりあえず質問してみた。

「あら、あなた表情怖いし、冷たいけど、なかなかすてきね 高身長だしい。真つ黒で鋭い目もすてきだわあ。私と、どうかしら？」

「俺は、お前に興味は無い。「えええっ?!」…おい、サイトそこまで驚くな。好みに合っていないだけだ。にぎやか過ぎるのはあまり好きじゃないんだ。すまない。(それに俺には、そんなこと考える資格はないからな…)」

「残念だわあ。ま、いいわ。とりあえず自己紹介ね。私の名前は、キユルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツェルプストーよ。ゲルマニアからの留学生で、二つ名は『微熱』。キユルケって呼んで。よろしくね」

やはり貴族の名前は長かった。次はレイたちが紹介を始める。

「レイ・クロカミ。不本意ながら、ルイズの使い魔“もどき”だ。よろしく」

「俺はサイト！平賀 オト…いや、サイト・ヒラガだな！よろしくな!」

「少し変わった名前なのね」

「ああ、よく言われる」

ちなみに、よく言われるのはレイの方だ。

日本にいた時は、女みたいな名前だとなんども言われたとか。

…まあ、レイは全く気にせず、シカトしていたが。

一通り、挨拶が終わるとルイズが部屋から出てきた。

「キユ、キユルケ！なんであんたが、ここにいるのよー!!」

「あら、隣の部屋なんだからしょうがないじゃない。それにレイとサイトと話してただけだわ」

「私の使い魔と勝手になれなれしくしないで！」

「そんなの私の勝手だし、使い魔の自由だわ。……でも、どうせ使い魔にするなら、こういうのが良いわね。……おいで、フレイル」

「きゅるきゅる」

キユルケの部屋から真つ赤で巨大なトカゲ？が出てきた。

「サラマンダーか。尻尾の炎もなかなかのもんだな。いい使い魔だ」

レイは素直に褒めた。

「ありがとう 平民なのにサラマンダー知ってるのね。…それにしてもこの炎見て！確実にブランドものよ。好事家に見せたら値段つけれないわよ」

「すげえ、このトカゲ！フレイルだっけ？可愛いなあ」

サイトはそう言ってフレイルに近づき、その頭を撫でた。

「きゅる」

「あら、珍しいわね。フレイルが私以外に懐くなんて。…きっと使い魔同士、気が合うのね。……それじゃあ、お先に。行くわよ、フレイル」

そう言ってキユルケは去っていった。

「くやしいい！なによあの女。自分がサラマンダー召喚した

からって!!」

実際はレイの方が強いので、ルイズの方がうらやましい状況なのが、ルイズは全く気付かない。

「なんでもいいけど、朝メシ食べに行くんだろ。さっさと行こうぜ」

「サイト、お前はメシのことしか頭にないのか…?」

レイは呆れの声をあげる。

「くうう、もう!早く食堂行くわよ!!」

一番だらだらしていたルイズが急かし始めたので、食堂に向かうことになった。

数分後、一行は食堂に着いた。

食堂はとても広く、具体的にいえば、あの稲妻傷を額に負った少年が通う、某魔法学校の大聖堂のようなところだ。

あそこと同じように、蝋燭とかが浮かんでいそうだ。

「広いなあ!朝食も豪華だし」

「当たり前よ!なんてつたってここと」そんなことはどうでもいい。…それにサイト、よく見る。おそらく、あそこに置いてある質素なものが俺たちの食事だろう。違うか、ルイズ?」

「そ、そうよ。平民は普通、このアルヴィーズの食堂に入ることすら許されないのよ!あんだ達は私の特別な計らいで床なの!!」

傲慢な物言いである。

「そうか。俺にそんな計らいは要らない。…厨房に賄いをもらえるか頼みに行くが、サイトも来るか？」

「ああ、行くよ。…さすがにあれはないわ」

「フンツ、勝手にしなさい！」

ということで二人は、厨房に向かった。

「おおい、そこのコックさん。頼みがあるんだけどいいかな」

サイトが、コック長らしき人物に声をかけた。

「なんでい。俺の厨房になんかようかい？」

これにはレイが答える。

「俺たちはルイズの使い魔なんだが、あいつの用意した朝食がひどくてな。賄いをもらえないか？…もちろん、礼はする」

「ミス・ヴァリエールねえ。じゃあお前さんらが、うわさの使い魔と“もどき”か。いいぜ、食ってきな。シエスタから悪いやつではないって聞いているしな。ちなみに俺はマルトーってんだ。よろしくな」

「レイ・クロカミ。恩にきる」

「俺はサイト・ヒラガだ。ありがとな！」

出された賄いはシチューだった。

「うまいっ、うまいよ、親父さん！」

「確かにうまいな。…ところで礼としては何をすればいい？」

「ああ、それは昼からでもいいぜ。シエスタの給仕を手伝ってやんな」

「了解した」

そうしてマルトーは、仕事に戻っていった。

「なあ、さっきから言ってたけど、シエスタって誰だ？」

マルトーがいなくなった後、サイトは気になっていたことを訊いた。

「このメイドだ。朝に会った」

「へえ、あつ、そうだ！最初の授業は一緒に出るんじゃないか？」

「そうだ、だから早く食べ」

「あれ、いつの間に食い終わった？」

そう、レイは雑談の間に食べ終わっていたのだ。

しばらく後、サイトは食事を終えた。

「遅い。やっと食ったか。普通に行ったら間に合わん。転移するぞ。

「え、ちょ、待って！」《移せ、移せ。我が魔力よ、大いなる意志のもとに転移陣を解放し、我の望む地へ導け！テレポーターシヨン
！》

レイは、そう言ってルーンを唱え、自分の記憶にある中で一番教室の近くにある廊下に転移した。

微熱なキュルケと会う……の後に賄い食（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

ついに次回は、タバサ登場です。

授業開始！そしてタバサ（前書き）

やっとのことでタバサを出せました。

……相変わらず話はまだ進みませんが。

とらつわけだ、とらつね。

授業開始！そしてタバサ

「うわあああ！」

「大声だすな、うつつうしい」

ルイズが廊下を歩いていると、使い魔ともどきがいきなり転移してきました。

「え、ちょ、なんでいきなり出てくんのよ！誰か見てたらどうするつもり？…明らかに怪しいじゃない！」

「大丈夫だ。ちゃんと気配は確認した」

「ところで、教室には行かなくていいのか？」

サイトが急かし始めた？のでさっさと教室へ向かうことになった。

教室は大学の講義室のようなところだった。

机が段々になっており、前の黒板が見やすいようになっている。

さらに、たくさんの使い魔達がおり、サイトは目を輝かせていた。

ルイズはいつもどおりに席に着いた。

そしてサイトも座ろうとするが、「平民は座っちゃダメなの。どうしても座りたいなら、床にすわりなさい」と言われてしまった。

「サイト、勝手に座ってやれ。……だがもう近くに他の席は空いてないな。俺が座れない」

レイはそう言って周りを見回す。

前列ではキュルケが男子生徒に群がられていて、まるで女王だ。

レイは、ふと窓際に目を向ける。
そこには、蒼髪で眼鏡をかけた小柄な美少女が、独りで座って本を
読んでいた。

「あそこでいいか」

そう呟き、レイは蒼髪少女の方へ向かう。

「すまない。隣、いいか？」

「（コクリ）」

「悪いな。俺はレイ・クロカミだ。ルイズの使い魔もどき。よろし
く」

「もどき？……………タバサ。よろしく」

「ああ、あいつはもう一人召喚された、サイトと契約したからな」
「そう」

蒼髪少女は無口だった。

さらに、無表情であり、その過去に何かを背負っているような凍て
つく雰囲気は、どこかレイに似たものだった。

レイがタバサの隣に座ると、教室に太っ…もとい、少しばかりデブ
…さらにもとい、あのー、その、あれ、え、えーっ…そう！ふく
よかな！！ふくよかな体型の女性教師が入ってきた。

「はじめまして、シユヴルーズです。みなさん、今回の使い魔召喚
は大成功のようですね。わたくし、毎年この時期の使い魔との対面
をととても楽しみにしていますのよ」

確かに、たくさんの種類の使い魔は見所満載だろう。

「おや、ミス・ヴァリエールはずいぶん珍しい使い魔を召喚しましたね」

この言葉に一部の生徒達から嘲笑の声があがる。

「おいおい、ゼロのルイズ！」

「平民召喚してどうするつもりだよ！」

「いや、爆発に乗じてそこらの平民を連れてきたんだろ？」
「なんせゼロだからな！」

ガキかよ、と思うような言葉オンパレードだ。

これに対し、ルイズが抗議する。

「ちゃんと召喚したもん！なによ、『かぜつびき』のマリコルヌのくせに！」

「なにー、僕の二つ名は『風上』だ！」

「いつも、風邪みたいなガラガラ声のあんたなんか、かぜつびきで充分よ！」

「ゼロのくせにー！」

言い合いが不毛のものになってきたところでレイが声をあげる。

「うるさい。俺は寝不足なんだ。静かにしろ」

「貴族の僕に対して…ひいつ」

最後に恐怖の声をあげる生徒。
理由は簡単だ。

レイが殺気を飛ばしたのだ。

「さっさと授業を始めたほうが実になるんじゃないか？…だから静

かにしろ」

「そ、そうだな。僕もすぐに授業を始めるのは吝かではない。さ、さあ授業を始めてください、ミセス・シュヴルーズ」

「そうですね。しかし、友人をゼロだの、かぜっぴきだの言っつけてはいけませんよ。…では、始めましょう」

先ほどの殺気に怯みつつも生徒が授業開始を促し、授業が始まった。

授業中、レイがボーっとしていると急に、上に羽織ったジャケットを引つ張られた。

どうやら、隣に座っているタバサが引つ張っていたようだ。

いつも読んでいる本も、珍しく閉じられている。

「なんだ？」

「さつき。助けるため？」

「なにがだ？」

「あの子、涙目だった」

「そうか、気付かなかったな。俺はただ、あいつらがうるさかったから止めただけだ」

「そう。あなた、優しい」

「…お前は俺の話をちゃんと聞いたか？」

「言葉の雰囲気嘘だと分かる」

「…まあ、そう思うのならそれでもいい」

レイとタバサの会話が一通り終わると、なぜかルイズが魔法で錬金をすることになっていた。

「机の下に隠れた方がいい」

なぜかタバサがレイに警告する。

「なぜだ？」

「いつも爆発」

「それはなかなか興味深いな。でも大丈夫だ。マジックシールドを展開する」

「まじつくしーるど？」

首をかしげながらタバサが問う。

「まあ、とりあえず見ている。…机の下に潜らないなら俺の近くの方が安全だ。来るか？」

「（コクリ）」

タバサは頷き、レイのすぐ近くに寄り添う。

「よし、ここでいい。…いくぞ。《護れ、護れ。我が魔力よ、大いなる意志のもとに障壁を創造し、攻撃を無力化せよ！マジックシールド！》」

するとレイが前方に右手を突き出し、そこから薄い光の壁のようなものが展開された。

そして、その瞬間にルイズも杖を振る。

【ドオオオオン！！】 【バチバチバチイイ！！】

魔力障壁が爆風を完全に防ぎきった。

しかし爆発はとても激しく、しかもシールドとは全く関係ない場所にいたシュヴルーズなどは気絶していたし、音にびっくりした使い魔達が暴れ、まさに阿鼻叫喚。

レイとタバサはそんなこと気にしていなかったが。

「あなたの魔法、すごい」

「そうか？大したことない。それより大丈夫だったか？」

レイは、いつもの凍てつく表情でなく、内心の優しさを滲ませながら、無事を確認した。

それは、タバサの雰囲気が自分に似ていたからか、“生きていれば” 同い年ほどであろう、15歳の妹とその姿が重なったのか、理由は分からないが。

とにかく、いつもと違った表情で語りかけたのだ。

「だ、大丈夫。あなたが護ってくれた／＼／＼」

「そうか、ならいい」

そしてレイは、いつもの表情に戻る。

「顔が少し赤いが？本当に大丈夫か？余波にでも当たったんじゃないか？」

「平気／＼／＼……それよりもどういう魔法？杖を使っていなかった」

「簡単に言えば、異世界の魔法だな」

「そう。すごい」

「信じるのか？」

「あなたは嘘をつかない」

「なぜ、そう思う？信じることはもちろんだが、疑うことも大切だぞ」

「なぜか、嘘ではないと思った。それに優しい。……今度その話を聴かせて欲しい」

「ああ、今度な。それより、授業中に『トライアングル』とか『スクエア』とか聞こえたがあれば何だ？…俺の知っている魔法知識に

はそんなものはないんだが」

「それはメイジの階級。属性を足せる数で決まる。階級の低い順に『ドット』、『ライン』、『トライアングル』、『スクエア』。魔法だけで判断するなら、普通は階級が高い方が強い」

「ほう、それはなかなか興味深い。この世界特有の魔法体系だな。

…分かりやすい説明だった。礼を言う」

「どういたしまして」

という風に、二人の間だけ和んでいたという。

授業開始！そしてタバサ（後書き）

タバサが少し積極的過ぎた気がしますが、気にしないでいただけると幸いです。

次回は決闘直前までです。

あくまで『直前』なので、戦いませんがよろしくお願いします。

それと、明日は二話投稿するかもしれまん。

相変わらず進行ペースが遅いですが、ご了承ください。

決闘！……とはいえ、戦闘は次回。（前書き）

今日は二つ投稿です。

二つ目はいつも通り七時に投稿させていただきますので、よろしく
お願いします。

オスマンとロングビルの話の所は要らないかも、と思い始めてしま
った作者ですが、本文をどうぞ！

決闘！……とはいえ、戦闘は次回。

一方、教室爆破された数時間後、学院長室では。

「年寄りの楽しみを取り上げるのかね？ミス・ロングビル」

「あなたの健康管理も仕事のうちなのですよ。オールド・オスマン」

学院長のオスマンと秘書のロングビルだ。

オスマンはロングビルにキセルを取り上げられてしまったのだ。

「こう平和な日々が続くと、時間の過ごし方というのが何より重要になってくるのじゃ」

「オールド・オスマン。暇だからといって、わたくしのお尻を撫でるのはやめて下さい」

「ふ〜、よちよち…」

「都合が悪くなると、ボケた振りをするのもやめて下さい」

「真実はどこにあるんじやろうか？考えたことはあるかね？ミス…」

…

「少なくとも、わたくしのスカートの中にはありませんので、机の下にネズミを忍ばせるのはやめて下さい」

ずいぶん間抜けな会話だった。

オスマンはいきなり語りだした。

「そうじゃ。今年もサモン・サーヴァントで使い魔がくる頃じゃったな。使い魔は一生の友であり、そして、目であり、耳でもある。」

ロングビルの机の下からネズミが現れ、オスマンの肩まで上る。

オスマンはポケットからナッツを取り出し、ネズミに与える。

「我が使い魔モートソグニルよ。お前とも長い付き合いじゃのう。ほれ、ナッツじゃぞ」

オスマンはネズミにナッツを与えた。

ネズミはナッツを齧り終わると、ちゅうちゅうと鳴いた。

「そうか、白か。純白とな？うむ。しかし、ミス・ロングビルは黒に限る。そう思わんかね。可愛いモートソグニルや」

「オールド・オスマン。今度やつたら、王室に報告します」

「カーツ！王室が怖くて魔法学院の学院長が務まるかああああ！下着を覗かれたぐらいでカツカしなさんな！そんな風だから、婚期を逃すのじゃ。って痛い！痛い！ごめん、許して！」

婚期を逃すと言われてからロングビルはオスマンを蹴りまくった。

どうやらロングビルは、結構気にしているようだ。

「オールド・オスマン！」

ドアを勢いよく開けて、中にコルベールが飛び込んできた。

「なんじゃね？」

ロングビルは机に座り、オスマンは腕を後ろに組んで、重々しくコルベールを迎え入れる。

まるで何もなかったかのように。

……超無駄な神技である。

「ただ、大変です！」

「いったいなんなんじゃ。騒々しい」

「ミス・ヴァリエールの使い魔達のこととは知ってますよね？」

「ああ、平民が召喚されたという話なら聞いたとるよ、ミスター・・・
なんだったかの？」

「コルベールです！お忘れですか！」

「そうそう。それでどうしたのじゃ？」

「いや、使い魔の一人、サイトという少年のルーンが、これと酷似
しています」

それを見た瞬間、オスマンの表情が変わった。

「ミス・ロングビル。席を外しなさい」

ロングビルは部屋を出ていく。

「詳しく説明するんじゃ。ミスタ・コルベール」

「「決闘だ！」」

アルヴィーズの食堂にこんな声が響いた。

なぜ、このような事態に陥ったか順を追って説明しよう。

教室を爆破してしまったルイズは罰として、“使い魔二人を伴って”
教室の片付けを命じられた。

「なあ、なんでレイの魔法使わないんだよ」

「魔法は使っちゃダメってミス・シユブルーズに言われてるの！」

シユブルーズの判断は正しい。

魔法を使えば罰にならないし、なによりルイズが魔法を使えば、さらに酷い教室が出来上がることは目に見えている。

「そんなことよりも、さっさと働け………」

結局はレイ以外、働いていなかった。

その言葉以降、“サイトは”真剣に片付けだして、昼前ほどに片付けは終わった。

「昼食には少し早いが、約束の手伝いもある。…サイト、行くぞ」

「分かった、行こう！」

レイ達はマルトーとの約束を果たすために、早々に厨房へ向かおうとしていた。

「約束って何よ！それにどこへ行くっていつの？！」

事情の知らないルイズが質問した。

わりと怒り気味に。

「厨房だよ、ちゅ・う・ぼ・う！」

「昼食のために行こうと思っている」

「食べ物なら、用意してるじゃない」

「あれは、もう食べ物とはいえない。…あれでも活動に支障はないがな」

「なら、あれでいいじゃない！」

「レイだって、あんなのよりちゃんとしたもの食べたいに決まっているだろ！」

「~~~~っ!!」

ルイズが押し黙ってしまったところで、レイが急かし始める。

「さあ、行くぞ。手伝いには、意外と時間がかかるかもしれない」

「おうっ!!」

「しょ、しょうがないわね。これからは厨房で食事を取ることを許すわ。か、感謝しなさい！」

どうやら、ルイズのお許しが出たようだ。

それに対し、レイとサイトは適当に返事をしておき、厨房へ向かった。

厨房に着くとシエスタが待っていた。

「あつ、レイさん。お話は何っています。賄いはこちらですよ。…そちらがミス・ヴァリエールと契約したと言っただけの方ですか？」

「ああ、サイトだ」

「俺は、サイト・ヒラガ！よろしくな!!」

「シエスタです。よろしくお願いしますね」

こうして挨拶を終え、賄いを食べ終わった二人は給仕を手伝い始めた。

レイとサイトは給仕を始めた。

「なあ、ギーシュ。お前は今、誰と付き合ってるんだ？」

最初は無難に給仕をこなしていたのだが、サイトの耳にこんな言葉が聞こえてきた頃から、話は不穏な方向に転がっていった。

「薔薇は全ての女性のために存在している。だから僕が特定の女性と付き合うなんてことはないのさ」

ずいぶんキザ&ナルシストな、薔薇をくわえた金髪少年…ギーシュが答えた。

なかなかイケメンなのだが、その服のセンスは……制服を改造しフリルのついた服装は、かなりいただけない。

サイトが、なんととはなしにそんな話を聞いているとシエスタが、ギーシュとその周りを囲っている少年達の方に、給仕をしに行った。

サイトが（あんなキザ野郎のところに給仕に行くなんて、シエスタは勇気あるなあ）と思いながら見ていると、ギーシュがポケットから小壘を落とした。

当然のようにシエスタがそれを拾い、ギーシュに渡す。

「貴族様、落とされましたよ」

「何だね、君は。僕はそんなもの知らないよ」

「ですが、あなた様のポケットから、ん？この鮮やかな紫色！これは、モンモランシーが自分のためだけに作っている香水の壘じゃないか？」えっ？」

シエスタが自身の言い分を告げようとしていると、周りの少年達の一人が声をあげた。

「な、何を言っているのだね？！僕は…うおわ、ケティ！」

一年生らしき少女、ケティがギーシュの近くに来ていた。

「ひどいです、ギーシュ様……。私だけだと言ってくださったのは嘘だったのですね?!」

どうやらギーシュはモンモランシー、ケティと二股をしていたようだ。

「い、いや違う！誤解だよ」聞きたくありません!」「うごあ!」

ケティは途中で遮り、ビンタをかまして帰っていった。

「へえ、ギーシュ。やっぱりあの一年の子となんかあったのね」

いつの間にか来ていた金髪縦ロールの少女がそんなことを言った。

「のお、モンモランシー!ち、違うんだよ。ケティとは少しラ・ロシエールまで遠乗りしただけで……」

「最低ね」

金髪縦ロールのモンモランシーはそう言い放ち、手に持っていたワインをギーシュに頭からかけて、去っていった。

「フツ、あの二人は薔薇の存在を理解していないようだ」

ギーシュは自分にかかったワインを拭きながらそんなことを言った。シエスタは修羅場を見て怖くなったのか、「し、失礼します」と言っ
つて去ろうとした。

「待ちたまえ」

しかし、ギーシュが待ったをかける。

「君が軽率に香水の壘を拾ったおかげで二人のレディを傷つけた。平民の分際で」

「す、すいません！」

シエスタは顔面蒼白で謝っていた。
見かねたサイトが間に割って入る。

「おいつ、そのキザ野郎！シエスタは何も悪くないだろーが。悪いのは二股をかけていたお前だろ？！シエスタに八つ当たりしてんじゃねえ！！」

「ハハツ、そうだぞギーシュ。その平民の言うとおりだ」

「そ、そんなことはない。僕は最初、知らないふりをしただろう？それに合わせる機転があつてもいいとは思わないかい？まあ、メイドなんかは貴族の機転を期待しない方がよかつたとは思うがね。……それと君は一体誰なんだ？……ああ、もしかしてルイズが召喚した平民の使い魔かい？それならここまで礼儀がなっていないのも頷けるね。主人がゼロなら、使い魔の礼儀もゼロだ」

「なんだと！ナルシスト野郎！！一生、女に恨まれてる！！！」
「~~~~~っ！！」

ギーシュとサイトはお互いに睨みあつた。

こうして話は戻る。

「決闘だ！！」

決闘！……とはいえ、戦闘は次回。（後書き）

根気よく読んでくださっている読者様方、本当にありがとうございます。

この先も読んでいただけると、作者にとってこれほど嬉しいことはありません。

前書きにも書きましたが、今回の分だけだと味気ないので、七時にもう一つ投稿させていただきます。

読んでいただけると幸いです。

『下げたくない頭は下げられねえ!』から始まる覚悟(前書き)

前回の分は本日の六時に投稿しております。

そちらをお先にお読みください。

では、本文をどうぞ!

『下げたくない頭は下げられねえ！』から始まる覚悟

「サイトさん：あなた、貴族様にあんな態度取ったら死んじゃう！怖くなったのか、シエスタはそんなことを言っただけで逃げてしまった。」

「シエスタ、大丈夫かなあ」

サイトがそんなことを呟くと、レイとルイズがやってきた。

「おい、サイト。どうしたんだ？決闘とか聞こえたが」

「そうよ！なに勝手に決闘なんか申し込んでるのよ。今ならギーシユも許してくれるかもしれないわ。…さっさと謝ってきちゃいなさい」

「なんで、俺が謝らないといけないんだ！…俺は決闘場所の、えっつと…ナントカ広場に行かなきゃいけないんだ！」

サイトは覚えていないようだが、決闘場所はヴェストリの広場というところだ。

「平民は貴族には敵わないの！普通は、貴族しか魔法は使えないんだから！早く謝ってきなさい」

ルイズは止める。
だがレイは違った。

「サイト。覚悟はあるんだな？」

「ああ、ある」

「ちよ、あんた何言ってるのよ！止めなさいよ」

「これは、サイトの問題だ。俺らが口出しすることじゃない。…サイト、覚悟があるんなら、あのいけすかない貴族と喧嘩してこい」
「おうっ！行ってくる。…なあ、ナントカ広場はどっちだ？」

サイトはまだ周りにいた貴族の少年に案内を頼んだ。

「ああ、こつちだ平民」

そう言っただけで広場の方に向かっていった。

「あんた親友って言ってたじゃない！心配じゃないの?!」

「あいつのルーンなら、俺が手助けすれば大丈夫だ。ちゃんと魔法でルーンの効果を調べたからな。まあ、覚悟が見えるまでは手助けしないが。…さあ、ヴェストリの広場まで行くぞ。しっかり見守らないとな」

こうして、レイとルイズも決闘場所まで行くことになった。

「では、諸君。決闘だ」

ギーシュが暇な観客達に決闘することをキザっぽく告げる。

「…この学院には、貴族と平民の決闘が暇つぶしになるほど娯楽が少ないのだろうか？」

「とりあえず、逃げなかったことを褒めてあげよう」

「そんなことはいいから、さっさと始めようぜ」

「君はせっかちなだね。まあいい、僕の二つ名は『青銅』。青銅のギ―シュだ。そして僕はメイジ…。よって……」

ギーシュはセリフをはきながら薔薇の杖を振る。
模造の薔薇の花びらが一枚散り、地面に落ちると青銅製の像が出てきた。

そして、ギーシュは話を続ける。

「……この青銅のゴーレム、戦乙女『ワルキューレ』がお相手するよ」

「その像、動くのか」

「当たり前じゃないか。…怖気づいたかい？」

「ハッ、まさか」

そうして決闘が始まった。

一方、レイはルイズとは違う場所…具体的には、タバサとキュルケが座っている木陰の方に来ていた。

「あら、サイトを助けなくてもいいの？」

キュルケがレイに訊ねた。

「ああ、今はな。だが、あいつの覚悟が見えれば、手助けはする。

…あんなヤツでも久しぶりに会った親友だからな」

「久しぶり？」

今度はタバサが疑問を呈する。

「ああ、お前たちになら言ってもいいかな…」

そう言ってレイは、行方不明から、召喚での再会までを簡単に説明

した。

「なかなか、信じがたい話ね…」

「私は信じる。異世界の魔法も見た」

「そうなの？見たかったわあ でも、それなら私も信じるわ！」

「ありがとう。……おっ、サイト、まだ立ち上がるか」

「もうボロボロじゃない」

「いや、あいつは大丈夫だ。絶対に覚悟をみせる」

「…信頼？」

「まあ、そうだな。…なんだかんだ言っつて、あいつはすごい」

そう言っつてレイ達は、サイトの方を見る。

「もうやめて、サイト！こんなに根性のある平民なんて始めて見たわ。すごいわよ！…でも、もう無理しなくていい！…ギーシュもやめて！！」

「何だい、ルイズ？君はその使い魔のことが好きなのかい？」

「なっ、違うわよ！ただ叩きのめされてる使い魔を見たくないだけよ！…ホントにそうなんだから！！」

ここでサイトがルイズに声をかける。

「なあ、ルイズ」

「な、なによ？」

「どうせ、もう俺は元の世界に帰れないんだろ？」

「そ、そうね。返還魔法は今のところないから。…でも今はそんなの関係ないじゃない！もう無理しないで！！」

「俺はまだ平気だ…。無理なんてしてねえよ。それになあ」

サイトの声はだんだんと大きく、自信に満ちたものになっつて……。

「いい加減むかつくんだよ。魔法は貴族しか使えないんだろ？でもそれが偉いのか？アホが」

それは叫びに変わってゆく。

「俺は元の世界には帰れねえ！ここで生きていくしかない。それでもっ！俺は使い魔でいい、寝るのは床でもいい、主人が妙に態度がでかくてもいい。生きるためだ、しょうがねえ。けどなあ！」

そしてサイトは覚悟をみせる。

「下げたくない頭は下げられねえ！！！」

そして、その言葉を聞いたレイが行動を起こす。

「サイト、ダサイな。さっさと潰してやれよ」

レイはいつの間にかサイトの隣に来ていた。

「うつせーなあ…って、えっ？！なんでレイがここに？」

「あの木陰から走って来ただけだ。それより…」

そう言いながら、レイは右手に、自身の双剣の片方、黒の魔剣・黒ク羽を亜空間から呼び出し、出現させる。

青き光芒が刀身を隈なく覆い、切れ味や耐久力を格段に上げている。これが、黒羽が『魔剣』たる所以の一つだ。そして言葉をつなげる。

「これを使え。俺の予測が正しければ、この武器にお前の左手のル

ーンが反応して、あのキザ野郎を倒せるはずだ」
「えっ？「いいから」お、おうっ！」

サイトが剣を握ると、いきなり左のルーンが光り出す。

「おお！なんか体が軽い！！」

「予想通りだな。…さあ、バカ貴族達に思い知らせてこい！」

「おうっ！！」

「フツ、剣を握ったくらいで…なに??！」

ギーシュのセリフの途中、サイトによってゴーレム…ワルキューレが、いとも簡単に切り裂かれていた。

「くそ、出でよ。ワルキューレエエエ！！」

ワルキューレが何体も出現する。

しかし！サイトはそれに怯みもせず、一瞬で全滅させ、それにギーシュが気付いた時には、すでに剣が首に突きつけられていた。

「ハッ！思い知ったかよ！！」

「ま、参った…」

その言葉を聞き、武器を手放した瞬間、剣は亜空間に消えて、サイトはぶっ倒れた。

「サイト！！！」

ルイズが叫ぶ。

「大丈夫だ。治癒はする。《癒せ。ヒール！》」

レイは、短縮詠唱で治癒魔法を行使し、応急処置を施す。

「誰か、こいつをレビテーションで医務室まで連れて行ってくれないか？」

これには、いつの間にか近寄っていたキュルケが答える。

「私が運ぶわ！……レイはどうするの？」

「俺は…こいつをつ」

レイは途中で言葉を切り、いきなり出現させた魔剣・黒羽を後ろに振りぬく。

【ヒュンツ】 【バシュツ】

そして、青い流星のような剣筋によって、飛んできていた風の魔法が相殺された。

「こいつをなんとかしよう」

「「「えっ???!」「」」

キュルケとルイズと、これまた近くに来ていたタバサが、驚きの声をあげる。

「後ろからいきなり攻撃とは礼儀がなっていないな、その貴族」

レイは後ろを振り返り、襲撃者に不敵な笑みで言葉を吐いた。

『下げたくない頭は下げられねえ!』から始まる覚悟(後書き)

次回もオスマンとコルベールの話があります。

ですが、入れても文章がマンネリ化するだけの気がしてしまいます

…。

とばした方がいいのでしょうか？

しかし、話をつなげるためにはあった方がいい気もするのです。

……………迷う。

意見がありましたら、教えていただけると嬉しいです。

“強さ”の定義（前書き）

結局、省かずに少し長めにすることにしました。

今回、レイの『神威真刀流』二刀剣舞を登場させます。

評価をつけてくださると、作者は大喜びします（笑）

“強さ”の定義

「フツ、選択を誤ったな、平民！今の一撃で死んでおけばよかったものを。それにしても、お前が余計なことをしなければ、もっと先ほどの平民が痛めつけられるところを見たというのに。揃いも揃って邪魔な平民だな！…礼儀がなっていないのはお前だろう！」

と、長いセリフをはきながら、先ほど風魔法を放ったと思われる少年が、野次馬の中から出てきた。

これに対し、意外な人物が反論する。

「ヴィリエ、やめてくれ。今回は僕が悪かった。…すまない」

とギーシュは言い、最後はレイに謝ってきた。

「本当に謝罪する気があるのなら、件の女子生徒二人とシエスタ、サイトに謝って来い」

「そ、そうだね。あの平民…いや、サイトはまだ寝ているだろうか、モンモランシーとケティに謝ってくるよ。…もちろんメイド…シエスタ？にもね」

そう言つて、ギーシュは学院の方へ走つていった。

ギーシュはただ、ガキ過ぎただけで、本質は悪い人間ではないのだつた。

ここで、ヴィリエと呼ばれた少年がまた話し出す。

「フンッ、ギーシュも所詮『ドット』か。…おい、真つ黒なお前！先の平民とギーシュの代わりに、風魔法で切り裂かれる」

ここでレイは、不意に諭すように話し出す。

「お前は、魔法を使える者が…いや強い者が偉いと思うか？」

「当たり前だろう。だが、少し違うな。貴族だから偉いのだ」

「それも、同じことだ。貴族ということは、それだけで権力という力を持っているからな。やはり権力者は強い」

「そうだ、貴族は強くて偉い。分かってるじゃないか」

「…しかし、強くなってもその先にあるのは空虚な孤独だけ。強くなればなる程周りは羨望の眼差しで見つめ、そして疎み、妬む。それでも強さを求める」

レイは独白するように呟く。

しかし、不思議とその声は広場中に響いた。

「お、おいつ！お前はさつきからなにを言ってるんだ！！？」

「過去の出来事に囚われ、その行為が無駄だと分かっているのに最強を目指す。例えその先に何もなくても、疎まれようと、妬まれようと、孤独になろうとも。…何もしなければ気が済まないから強くなろうとする。…さて、こんな無駄で愚かなことしか出来ないが、力を持つ者がいるとする。…お前はそいつを偉いと思うか？」

最後の質問が周りに響く。

「そんな奴、偉いわけないだろう？そいつは貴族ではないのだ。さあ、始めるぞ。…《エアハンマー！》」

ヴィリエはハッキリ言い返し、いきなり魔法を放つ。

レイは双魔剣・黒羽クロハと白羽シロハを手に出現させ、対の青の光が放たれた風魔法を打ち碎いた。

だが、ヴィリエはすでに次の魔法のルーンを唱えていた。それにも構わずレイは喋りだす。

「先ほど、そいつは偉くないと言ったな。……実は俺もそう思う。そして、強くもない。ただ過去から逃げている、弱い人間だ」

レイがそう言う間に、ヴィリエのルーン詠唱が終わる。

「《エアカッター！》」

鋭い風の刃がレイに殺到する。

しかし、レイはいきなり剣を構える。

『かむいしんとつらゆ神威真刀流』二刀剣舞、いち壱の型・瞬迅。

レイは、高速でヴィリエに向かって突撃しつつも、まるで舞のように完成された動きで剣を振り抜き、風魔法を吹き飛ばす。

……残念ながら、その剣筋を……いや“レイの動き自体を”目で追う事が出来たものは皆無であり、まるでいきなり消えたかのような状況だったが。

ようするに、それだけ速かったのだ。

レイ曰く、目で追えない程に早く走っている間にも、剣を自由自在に扱えるこの型は、とても汎用性に優れているらしい。

「やはり、強くて偉いとは言えないらしいな、俺の方が強いが、貴族より偉いわじゃない」

いつの間にやら、レイは左に持った魔剣・白羽をヴィリエの首にぴたりとくっつけていた。

…それこそ、薄く血が滲むほど。

「ひいつ！助けてくれ！いや、助けてくださいお願いします！！」

そんな言葉も構わず、レイは右の魔剣・黒羽を振り上げる。
場内騒然。

そして、ヴィリエは恐怖で失禁し、気絶した。

「さて、他に文句がある者はいるか？」

レイが言い放った。

この言葉に、その場にいた七割近くの者が首を横にブンブン振りつづけたらしい。

…レイがこの場を立ち去るまでずっと。

ちなみに、残りの三割は怖すぎて逃げた、もしくは気絶した者達とタバサらしい。

そして、タバサはその強さに憧れ、さらに前に見たレイの優しい表情を思い出して、顔を赤くするという珍しい反応を示していたという。

オスマンとコルベールは、遠見の呪文で一部始終を見終えると、顔を見合わせた。

「オールド・オスマン」

「うむ」

「あの平民、勝ってしまいました」

「うむ。そうじゃのう…。さらにその後のレイという少年も恐ろしく強かった」

「ギーシュ君は一番レベルの低いドットメイジですし、ヴィリエ君はラインです。それでもただの平民に後れをとるとは思えません。そしてあの身のこなし！あんな平民見たことない！やはり彼はガンダールヴ！…まあ、契約していない方の少年がなぜ強いかは不明ですが」

「うむむ…。とりあえず、後に戦った少年のことはあとで考えればよからう」

オスマンは、よく分からないレイのことは、その強さへの恐怖からか、それともあまりにも不明な強さの秘訣にめんどくさくなったのか…とりあえず、考えることを放棄した。

「では、オールド・オスマン。ガンダールヴですが、さっそく王室に報告して、指示を仰ぎしよう」

「それには及ばん」

「どうしてですか？これは世紀の大発見ですよ！現代に蘇ったガンダールヴ！」

「ミスタ・コルベール。ガンダールヴはただの使い魔ではない」

「そのとおりです。始祖ブリミルの用いたガンダールヴ。その姿形は記述がありませんが、主人の呪文詠唱の時間を守るために特化した存在と伝え聞きます」

「そうじゃ。始祖ブリミルは、呪文を唱える時間が長かった、その強力な呪文ゆえに。知つてのとおり、詠唱時間中

のメイジは無力じゃ。そんな無力な間、己の体を守るために始祖ブリミルが用いた使い魔がガンダールヴじゃ。その強さは…」

その後を、コルベールが実に熱中した様子で引き継いだ。

「千人もの軍隊を一人で壊滅させるほどの力を持ち、あまつさえ並のメイジではまったく歯が立たなかつたとか！」

「それで、ミスタ・コルベール」

「はい」

「その少年は、ほんとうにただの人間だったのかね？」

「はい。どこからどう見てもガンダールヴの方は、ただの平民の少年でした。ミス・ヴァリエールが呼び出した際に、念の為ディテクト・マジックで確かめたのですが、正真正銘、ただの平民の少年でした」

「そんなただの少年を、現代のガンダールヴにしたのは、誰なんじやね？」

「ミス・ヴァリエールですが……」

「彼女は、優秀なメイジなのかね？」

「いえ、むしろ無能というか……」

「さて、その二つが謎じゃ」「
「ですね」

「無能なメイジと契約したただの少年が、何故ガンダールヴになったのか。まったく謎じゃ。理由が見えん」

「そうですね」

「とにかく、王室のボンクラどもにガンダールヴとその主人を渡すわけにはいかん。そんなオモチャを与えてしまつては、またぞろ戦でも引き起こすじゃろうて。宮廷で暇をもてあましている連中はまったく、戦が好きじゃからな。そんなくだらないことにあの少年を巻き込みたくはない」

「はあ。学院長の深謀には恐れ入ります」

「この件は私が預かる。他言は無用じゃ。ミスタ・コルベール」

「は、はい！かしこまりました！」

「それにしても、伝説の使い魔、ガンダールヴか。いったいどのような姿をしておつたのじゃろうかのう」

コルベールは夢見るように呟く。

「ガンダールヴは、あらゆる武器を使いこなし、敵と対峙したとありますから…」

「ふむ」

「とりあえず腕と足はあったんでしようなあ」

全く先が見えてこない話し合いであった。

決闘騒ぎが終わった次の日の朝、レイはサイトの治療に来ていた。ルイズとシエスタも心配だったのか着いてきた。

「ねえ、大丈夫よね？サイト、死なないわよね？」

ルイズは、サイトの無事を懇願するように、レイに訊ねてきた。

「大丈夫だ。これくらいの症状ならすぐに治す魔法はすでに習得している」

「で、でもかなりの大怪我ですよ？！サイトさん、本当に大丈夫でしようか???!」

シエスタも、かばってもらった負い目を感じているのか、とても心配そうに訊ねた。

「まあ、見ている」

そう言つて、レイは左手をサイトの腹部辺りにかざし、ルーンを唱え始める。

「へ癒せ、癒せ。我が魔力よ、大いなる意志のもとに慈愛を発揮し、染み渡る癒しの光にて、全ての苦しみから解放せよ！オール・キユアライト！」

すると、レイの左手が淡く輝き、その光はサイトを包む。

力強く、それでいて慈しみに満ち溢れた光は、サイトの外傷だけでなく、内側のダメージまで染み渡り、治してゆく。

とても幻想的な光だが、それもすぐに止む。サイトが全快したのだ。

「これで大丈夫だろう。治癒魔法の中でも最上位のものを使ったからな」

「ほ、本当に???！」

「ああ、その証拠にほら、サイトが目を覚ますぞ」

全員でベッドを見ると、どんなにすごい秘薬を使つても回復に三日はかかるだろうと言われていたサイトが、すでに目を覚まそうとしていた。

「う、うん。ん?ここは?」

「サイト!...もう、使い魔のくせに心配かけないでよね!」

「サイトさん!大丈夫でしたか??！」

ルイズとシエスタが、心配そうにサイトに声をかけた。

「ルイズ?シエスタ?なんでここに?...ってあれ決闘!決闘は??」

「！」

どうやら勝ったことを覚えていないようだ。

そこに、レイが冗談で答える。

「残念だったな、サイト。まあ、あの根性は認めるに値する。気を落とさなくてもいいぞ。…それに敵は討った」

「そうか…俺、負けたのか…。…。って勝っただろうが…！」

「冗談だ。…よく頑張ったな」

「サンキュ」

そしてレイはニヤリと笑いながら、サイトは苦笑しながら互いに拳を合わせた。

「サイトさん…。あの時は、逃げ出してしまつてすみません。…魔法が怖かつたんです」

シエスタが申し訳なさそうにサイトに謝った。

「いって、気にすんな。シエスタは悪くないよ」

「サイトさん…。ありがとうございますっ／＼／＼」

シエスタはサイトの手を握り、顔を朱に染めながら礼を言った。

そして、サイトはそれに対して鼻の下を伸ばす。

「い、いやあ。男として当然のことをしたまだよ、うん」

「ルイズ。サイトが調子に乗ってるぞ。…良いのか？」

おもしろ半分でレイがルイズをそそのかし…。

「さ、さささ、サイトおおおおお～～～～！！！！」

ルイズが爆発した。

この時にルイズがサイトを攻撃したせいで、サイトはまたもうしばらく眠ることになったという。

“強さ”の定義（後書き）

どうだったでしょうか？

……………戦闘描写なんてほとんど出来ませんでした。

だいたいヴェリエじゃ、レイの相手をするには弱すぎた……………。

感想、お待ちしております。

レイのクオリティは高すぎると言っていていいでしょう。(前書き)

サブタイトルの由来は、某黒くて、土方の好きな調味料な芸人コンビの卑屈な方の名言……迷言?を参考にさせていただきました。

……どうでもいいですね。

それでは、本編をどうぞ。

レイのクオリティは高すぎると言っていていいでしょう。

サイトが完全に目を覚ましてから二日経った。

今日は『虚無の曜日』で学院が休みらしい。

レイ、ルイズ、サイトの三人は、現在は王都、トリスタニアに来ている。

そこに至るまでの経緯を語っておこう。

まず、食堂の一同だが、サイトのことを『我らの剣』と呼び、レイのことを『漆黒の悪魔』と呼ぶようになった。(ミラーナでの二つ名と同じとは、皮肉である) もちろん、食堂の連中は良い意味でそう呼んでいるらしいが。

なんでも『偉ぶる貴族にとっては悪魔だな』というマルトーの発言からこの名がついたらしい。

そして平民の意地を見せた二人は、マルトー親父に気に入られ、手伝いなしで賄いがもらえるようになった。

次にキュルケのことだ。

これは三人が王都に来ていることと深く関わっている。順を追って説明しよう。

なんでも、キュルケは決闘騒ぎの際に、サイトに惚れてしまったらしい。(シエスタに続き、サイトに惚れたのは二人目だ。∴ルイズも実は惚れているが、それに気付いていなかったり?)

そしてサラマンダーを使い、サイトを部屋に連れ込み∴ルイズに見つかってサイトはボコされた。

それだけで終われば良かったのだが、そうはいかない。

なぜなら、キュルケは五股くらい(いや、それ以上か?)しており、サイトのために残り五人と縁を切ったため、その恨みがサイトに向

くことになったのだ。

そして、なんとか自衛する手段はないかという話になり、レイが剣を与えればルーンの能力で強くなると助言し、剣をトリスタニアまで買いに行くことになり、今に至るといわけだ。

閑話休題。

トリスタニアには馬で来た。(レイは走って着いていった…いや、追いついていったが。しかも全く疲れていない)

「ああ、尻痛エ。なんで馬に乗って三時間もかかるんだよ。レイは全然つかれてないしさあ。また魔法かあ？俺にも教えるお」

サイトは不満たらたらであった。

サイトの剣を買いに来たというのに。

「調べたが、お前に魔法を操る才能はない。諦めるんだな。ミラーナの魔法を習っても、出来るのはマツチに火をつける程度だろう。…そして走って着いていけたのは魔法の力ではなく、修練の賜物だ」

レイが断言した。

「ががががん」

「ていうか、あんたは魔法もなしで馬に着いてきたわけ?! 本当に人間?!」

サイトが落ち込んでいるのに関係なく、ルイズはレイに人間じゃない宣告をしていた。

「ああ、まだ人間をやめたつもりはないな。あれくらいは全力で鍛えれば、誰にだって出来るようになるしな。……鍛えてやるうか？」
「激しく遠慮するわ（しますっ）！！」「」

ルイズとサイトは二人してすごい勢いで断ったという。

「ところでサイト。さっき預けた財布は盗まれてないでしょうね？」
「…あ、ないわ。どこいった?!」
「ちよ、なに言ってるのよ！今日はあれだけしか持ってきてきてないのよ?!」

サイトにルイズがなにやら叫んでいる。

ここでレイは一人、ニヤリと口の端を吊り上げ…。

「良い教訓になったな。これからはちゃんとスリを警戒しろよ、サイト」

先ほどよりも確実に中身の増えた財布を差し出した。

「え？なんで増えてるのよ？」
「本当だ！！魔法で金でも作れるのか??!!」
「そんなわけないだろう？増えた理由はそれじゃない」

この言葉にルイズとサイトは首を傾げる。

「つまり、スリからスツたということだ。…サイトもこれくらいは出来るようになっておけ」

「……もう、レイのクオリティについては、なんにも言わないことにするよ（するわ）」「」

やはり、レイのクオリティの高さは異常らしい。

虚無の曜日。

それは、現代日本において『日曜日』と同じような意味を持つ。

タバサにとって、その虚無の曜日は特別な日だ。

日がな一日読書をして過ごす。そして、その物語に入り込む。

物語の世界に身を預けることはタバサにとって、とても幸せな時間なのだ。

その日も、タバサは読書をしていた。

だが、物語がクライマックスに差し掛かった頃、扉がノックされる。…もちろん、普通に無視した。

【ドン、ドン、ドン、ドンドンドンドンドンドン！！！！】

だんだんうるさくなってきたので、『サイレント』の魔法をかける。

これで、ノック音はきれいに消え去った。

これでまたゆっくり本が読める、と思っているといきなり扉が開いた。

ノックの主が『アンロック』の魔法で鍵を開けたのだろう。

そして、扉はすごい勢いで開かれた。

『サイレント』が掛かっていたら、大きな音も聞こえていただろう。

鍵を開けてまで入ってくるとは何事か、とタバサは扉の方を見る。そこに立っていたのは艶のある赤い髪、薄く化粧されたきれいな顔、スタイル抜群の体型……そして、タバサの親友にしてお姉さんの存在、キュルケだった。

キュルケは、大きく口を開けて何かを訴えている。

タバサにとってキュルケが親友じゃなかったら、すぐに『エアハンマー』で部屋から追い出すところだ。

…だから、無視してもお咎めはなくてもおかしくはない……はず。そう思い、タバサが本を読み進めていると……キュルケに本を取り上げられた。

仕方がないので『サイレント』を解き、タバサはキュルケの話の聞くことにした。

「タバサ！あなたの力が必要なの！助けて！！」

「虚無の曜日」

いつもどおりに一言で返し、本を取り返そうとする。…しかし、絶対的な身長差がそれを許さない。

手を伸ばそうとも、全く手が届かないのだ。

「虚無の曜日が、あなたにとってすごく大事なことは分かっているわ！ごめんなさい。でも、これは恋なのよ、恋！私の『微熱』が疼くのだよ！恋とは微熱…つまり情熱なの！分かるでしょ？助けて！」

キュルケはこんなことを言っているが、正直言ってタバサにとって

は何をして欲しいのかが分からない。
だからタバサは、分からない、と首を横に振る。

「ああ、そういえばあなたはちゃんと理由も言わなきゃ駄目だったわね。あのね、ダーリン…サイトのことだけど、ダーリンがね、ルイズと馬でどっかに行っちゃったのよ。…レイはなぜか走って着いていって、しかも有り得ない程すごい速さだったけど。まあ、それは関係ないわ。とにかく、ダーリンたちを追いかけたいんだけど、あなたの使い魔じゃないと追いつけそうにないのよ！だから助けて！」

そしてタバサは、いつの間にか自身の使い魔である風竜のシルフィード（実際は知識を持つ風韻竜。ある事情により風韻竜であることを隠している）に跨っていた。

…レイがいると聞いた瞬間に動き出したのだから当然だ。

「あなたの使い魔は、いつ見てもほればれするわねえ。あ、本返すわね」

「どつち？」

タバサはなぜか急かすように訊く。
返してもらった本には見向きもしない。

「なんか、急いでるわね……急いでくれるのは嬉しいんだけど、どうしてかしら？」

「…なんでもない／＼／＼」

「ふ〜ん、まあいいわ」

キュルケはニヤつきながら答える。

ここで一つ言っておこう。

タバサは断じて、レイに惚れてなどいない!…たぶん…きっと…おそらく…メイビー。

「…それよりどっち?」

「ごめんなさい。覚えてないわ…。少し慌ててたから……」

タバサはキュルケの言葉を聞いて、自身の使い魔のシルフィードに指示を出す。

「馬、二頭。食べちゃダメ。…それと、走ってる人」

こうして、シルフィードは飛び立ち、レイたちに追いつくことに成功するのだった。

財布騒動の後、レイたちは大通りを歩いて武器屋の方に向かっていった。

「ところでサイト。気付いているか?」

「え、なにが?道が狭いこと?」

「いや、そうじゃない。まあ、確かに道は狭いが」

この会話にルイズは少し怒りながら割り込む。

「ちょっとあんたたち!王都トリスタニアの大通りなのよ!狭いなんて言わないでちょうだい!」

こんなことを言うが、狭いものはしょうがない。
何しろ、もし車が通るとすれば、一台が精一杯という程のスペース
しかないのだ。

現代日本の感覚を持つものからすれば、かなり狭いといえるだろう。

「それはすまなかつたな。…では、ルイズ。お前は気付いたか？」

レイは申し訳程度にルイズに謝り、質問をする。

「ちよつと、話をそらさないでよ！」

「そうか。分からないならいい。…放っておいても、俺には害はな
いだろうしな」

ちなみに、ルイズはまだ分からないとは言っていない。

「教えるよ」。気になるじゃん」

「自分で気付け。……武器屋に着いたぞ」

レイはそう言つて、さつさと武器屋に入つていつてしまった。

一方タバサたちは、財布騒動が終わつた頃からレイたちのあとをつ
けていた。

「なんか、ルイズが叫んでるわねえ。もう少し静かにできないのか
しら？」

……。

タバサは無言で、前にいる人物を見つめている。

「よっぽどのなね。……タバサ、レイとうまくやるのよ」

キュルケは優しい笑みを浮かべながらタバサに言った。
まるで、妹の成長を喜ぶお姉さんのように。

「……ありがとう／＼／＼」

「どういたしまして。……って、タバサ！さっき、レイがこっち見て
『気付いているぞ？』って口パクで……！」

どうやら、レイの『気付いているか？』という言葉はタバサたちの
ことだったらしい。

「あの人なら気付いて当然。……レイが武器屋に入った。もう、一
緒に武器屋に入った方がいい」

「それもそうね。……絶対にルイズは驚くわね！ルイズの驚く顔！
見ものだわ」

少し趣味が悪い気がするのをご愛嬌だ。

レイが入った後、ルイズとサイトも武器屋に入ろうとすると……。

「はあい、ダーリン それとルイズ」

「『それと』ってなによ、ツエルプストー！」

「あら、ヴァリエール。私の目的はダーリンだもの。こういう扱い
になるのはしょうがないわ」

これに対し、ルイズは『ツエルプストーには犬一匹だって渡さない
んだから！』とか、『サイトもデレデレしてんじゃないわよ、この
犬くさ！』とか言っているが、キュルケは涼しい顔で聞き流してい
る。

「早く」

タバサから急かす言葉が入った。

「その子、誰よ？」

「私の親友のタバサよ。ちなみにこの子はレイ目当て」

「…言わなくていい／＼／＼」

「へえ、レイってモテモテなんだなあ」

「あら、あなただって絶対モテるわあ　でも、おとすのは私だけだね」

「なに言ってるのよ！ツエルプストーには犬一匹たりとも渡さないって言ってるでしょ?!」

ルイズはぎゃーぎゃー喚く。

「……もう入る」

そして、タバサはレイと同じようにさっさと入って行ってしまった。

レイのクオリティは高すぎると言っているんですよ。(後書き)

どうだったでしょうか？

感想、お待ちしております。

評価なんかもしてくださると助かります。

空気の店主、哀れなサイト。そして土くれ登場！（前書き）

どうしてもサブタイトルが長くなってしまっ……。

空気の店主、哀れなサイト。そして土くれ登場！

タバサが武器屋に入ると、すでにレイが武器を物色していた。武器屋の店主は貴族がやってきたことに驚いて何か言っているが、タバサは気にせずにレイの方へ向かう。

「タバサか。久しぶりだな。…それと、尾行するならもっと気配を消せるように努力をした方がいいぞ。まあ、足音はうまく消せていたし、すぐ出来るようになるだろう」

「指摘、ありがとう。でも、いつから？」

いつから気付いていたのか、ということだろう。

「お前たちが竜に乗っていた頃から」

「…やっぱりあなたはすごい」

「訓練すれば、気配を読むことなんて簡単だ」

「なら、今度教えて欲しい」

「いいのか？ 厳しいぞ？」

「構わない。是非」

「いいだろう。では、また今度教えよう」

「ありがとう」

やはり、二人は和んでいた。

そして無視された店主は、少なからずへこんでいたという。

レイとタバサがしばらく話していると、やっとのことでルイズたちが入ってきた。

「……もう貴族様が入ってきてても、何も言いませんぜ」

店主は空気、店主は空気。気にせずに進めよう。

「随分と愛想のない店主なのね。でもまあいいわ。それで、レイ。サイトの剣で良いのはあつたの？」

ルイズもほとんど気にせずにレイに話しかける。

つまり、店主は空気……クドイ。

「ああ、その大剣だ。あれは見てくれこそ悪いが、かなりの業物だろう」

『ほ。その黒いのは見る目があるみてえだな。だが、お前みたいに弱そうなやつに振るわれる気はねえ！』

どこからともなく一昔前のチンピラのような声があがった。

どうやら、先ほどレイが業物と言った剣が喋っているようだ。

「な、剣が喋った?!もしかしてインテリジェンスソードかしら?」

キュルケは驚いている。他の者たちもレイとタバサを除いて、かなり驚いているようだ。

サイトなどは『すげえ!剣が喋ってる!』とか言ってる。ちなみに、インテリジェンスソードとは、魔法によって意思を持たされた剣のことだ。

そして、本来なら店主が、剣の態度の悪さについて何か言うはずなのだが、ネガティブモード中なので触れないでおこう。

つまり、わざわざ空気について語る必要がないということである。

「剣としては業物。でも性格に難がある。やめた方がいい」

タバサは、レイが弱いと言われたことで気を悪くしているようだ。言葉の節々に棘がある。

『ハツ、嬢ちゃん。性格に難があるのはどっちだよ！』

「いや、タバサの性格は充分に良いと思うぞ？」

レイのこの言葉に、タバサは心なしか嬉しそうな顔をしている。

「そして、お前を振るのは俺じゃない。そのアホ面だ」

「アホ面とはなんだ！アホ面とは！！」

『もつと弱そうじゃねえか！』

「ああ、弱いな」

「というより、レイより強い人なんて想像つかないわね」

「確かにそうね。実力主義のゲルマニアでも、レイほど強い人なんて見たことないわ」

「同意。レイは本当に強い」

『ああ？そんなわけねえだろ。こんなオーラもロクにない、目つきが悪いだけのヤツが……いえ、ナンデモアリマセン！すみませんでした！オレっちが間違ってた！まさかこんなに気を抑えてたとは！！』

いきなり、謝りだした。

もちろん、レイがインテリジェンスソードに向かって、ほんの少し殺気を放ったのだ。

「納得してくれて何よりだ。お前はサイトに使われる。いいな？」

『へい、分かりやした！…おい、アホ面。こっち来な』

「俺の扱いひどくね？」

哀れ、サイト。

そして、サイトはインテリジェンスソードを握る。
すると…。

『おでれーた！おめつ、使い手か？よし、お前！絶対オレを買え！』
「使い手え？なんだそりゃ？…まあ、いいや。ルイズ、これにする
！」

「ちょっと汚いけど、レイが言うならすごいんでしょうね。それを
買ってあげるわ。…店主！これいくら？」

やっこのことで、店主は話しかけてもらえた。

「へ、へい！貴族様に構ってもらえるなんて！光栄です！そいつあ
ボロ剣なんで、金貨百枚でお願いします！」

……喜び過ぎて、若干ひく。

「そ、そう。案外安いのね。…はい、これ」

ルイズはそう言って金貨を渡し、店から出て行くこととする。

「じゃあ、私はこの剣をダーリンにプレゼントさせてもらおうかし
ら」

しかし、キュルケのこの言葉でルイズは店内に戻り、叫ぶ。

「ちょっとツエルプストー！なに勝手にサイトに物を与えようとし
てんのよー！」

「うるさいわね。私がダーリンになにあげようと私の自由じゃない」
「確かにそうだな。だがキュルケ、その剣はやめておいた方がいい」

「同意。その剣は儀礼用。実戦には向いてない」

「二人が言うなら変えた方がいいわね。でも、どういふものがいいかしら？」

そして、今まで空気だった店主が品物を紹介しだした。

「ならば貴族様、この…」「ちょっとレイ！あんたもアドバイスなんてしてんじゃないわよ！」あの…「やかましい。もらえる物はもらっておいた方が得だろう？こいつには、どんな武器でも扱えるようになるルーンがある。得物が多いに越したことはない」…「ちょっとうるさいうるさいうるさい！サイトに勝手に物を与えちゃダメなの！調子にのっちゃうんだから！」…「すいませ」あら、調子にのってるのはあなたじゃないかしら、ヴァリエール？」…話しても「使い魔のめんどろは私が見るの！ツェルプストーは口出ししないでちようだい！」………」

ルイズとキュルケの言い争いはその後も長い間続いたらしい。

話を遮られ続けた店主は、もう涙目だ。

…いや、もう店主のことなど忘れた方が良さだろう。

「レイ〜。下ろしてくれよ〜」

サイトは現在、木に吊るし上げられている。

話が飛んだので、そこに至るまでの経緯を説明しておこう。

あの後、言い争いは長い間続いたが、めんどくさくなつたレイの転移魔法でルイズの部屋へ飛んだことでとりあえず小休止を迎えた。ちなみに、キュルケはちゃっかりサイト用の隠しナイフを数本買っていたりする。

「お前たちは、いつまで言い争いをすれば気が済むんだ。少しは静かに出来ないのか？」

レイの説教もどきが始まつた。
しかし…。

「だって！キュルケが邪魔するんだもん！！」

「私だってルイズといつまでも言い争いなんてしたくないわよ！疲れただけだわ！」

二人同時に叫ぶ。

「やかましい！静かにしろと言っている。もう少し大人になれないのか？」

「うるさいわね！ツエルプストー家には物を取られたくないの！」

「私がどうしようとする私の勝手じゃない！」

「…あの、すみません。俺って物扱い？」

…サイト、哀れ。

そして、なんだかんだで言い争いは激しさを増し、二人は杖を構えた。

しかし…。

どこからともなく風が吹きつけ、構えられた杖を吹き飛ばす。

「…室内」

どうやらタバサのようだ。

自身の身の丈ほどもある杖をこちらに構えている。

「お前たちはもう少し考えられないのか？」

「同意。魔法で戦っても怪我するだけ。…その代わりに、私にいい考えがある」

と言ってタバサは、ルイズとキュルケに近づき、自身の考えを小声で告げた。

タバサの提案の概要。それは、ルイズとキュルケは魔法の精度で勝負する、というものだ。

そのためにサイトはロープ一本で木から吊り下げられた。

なんでも、先にそのロープを魔法でちぎり、サイトを落とした方が勝ちらしい。

そうしてサイトは木に吊るされているのだ。

哀れ、サイト。

「サイト。なんとか自分で切り抜けて見せる」

「ひどいいい！」

「安心しろ。骨は拾ってやる」

「俺、死ぬの?! 確実なの?!?!」

「冗談だ。なにがあっても大丈夫だろう。…もう墓は用意してあるしな」

「え?!」「さ、始めましょう。…ルイズが先でいいわ。それくらいが、ちょうどいいハンデね」ちよっ! 待っ!「後悔しないでよね! いくわ!」「嫌だああ!」

「やはり、サイトはおもしろいな。…しかし、ヤツはいつ動くか」

ヤツとは何のことだろうか。…いやそれよりも…。

哀れ、サイト。

…このフリーズを何回使ったことか。やはりこの先も使い続けることになるのだろうか。

そしてルイズはファイアー・ボールのルーンを唱えて、杖を振る。

【ドガーーン!!!】

やはり、爆発。もし、サイトに直撃していたら…と考えるとゾツとする。

しかし、ルイズの爆発魔法は外れ、学院の壁を削った。

「ふふっ、やっぱり勝つのは私みたいね。…いくわよ、《ファイアー・ボール!》」

キュルケの放った火球は真っ直ぐロープに向かっていき、きれいに焼き切った。

そして、ロープから解放されたサイトは……当然ながら重力にしたがって落下を始める。

「ぎいいやああああ!!!」

だが、サイトが落ちる前に落下は緩まり、ゆっくり着地する。

どうやら、タバサがレビテーションをかけたらしい。

「あ、ありがとう。ええーっと、タバサだっけ？」

「別にいい」

そんな、そっけない会話がなされている時、サイトがふと学院の方に目を向けると、大きな土のゴーレムがいた。

向こうでは、まだキュルケが喜んだり、ルイズが悔しがったりしている。

「レイだけはゴーレムを真っ直ぐ見据えて『やっとお出ましか』と呟きながら唇の端を吊り上げていたが。」

「お、おい！あれ、やばいんじゃないか?!」

サイトはとりあえずゴーレムの存在に気付かせるために大声を出していた。

「え？なによ、サイト！うるさいわね…って、ええー!!?なにあれ???!」

「どうしたのよ、ルイズ？あれって?…あれね…」

ルイズはおもいつきり驚き、キュルケは呆れている。

タバサは冷静じゃない者たちをスルーして、レイの方に駆け寄る。

「あれ、どうするの?」

「今やつてもいいが、その場合は学院にも被害が及ぶだろうな。だから今はまだ手を出さない。…今は、な」

「それは、後で必ずチャンスが来るとのこと?」

「まあ、そういうことだ。…こういう時にはやはり情報が必要になってくる。そして、その手に入れた情報から推測し、断言するが、チャンスは確実にやってくるだろう」

レイは、いつの間にか情報を手に入れる経路を作っていたようだ。

「そう。私はあなたがそう言うなら信じる」

タバサたちが会話をしている間にゴーレムは壁を砕き、宝物庫に侵入し終え、そして何かを持って、去って行った。
賊が逃げた後には、ゴーレムの残骸であろう土くれだけが残っていたという。

空気の店主、哀れなサイト。そして土くれ登場！（後書き）

………サイトが『いじられツッコミキャラ』になってしまった。
予定通りです（笑）

まあ、サイトにもカッコつける場面は作りますけどね。

………レイの活躍が目立ちすぎて、あまり目立たない可能性
もありますが（というか高いですが）

それでも良いという方、これからもよろしくお願い致します。

“貴族”ごときが調子に乗るな(前書き)

今回はおまけ付きです！

それでは、本編をどうぞ！！

“貴族”ごときが調子に乗るな

次の日の朝。

レイたち…いや、ルイズとキュルケとタバサは学院内のとある一室に呼びだされていた。

レイとサイトはルイズの使い魔として、おまけという名目で着いてこさせられた。

…全く、自分勝手な貴族たちである。

そして今…。

またも貴族はみつともないところを見せ続けている。

賊であるメイジ『土くれのフーケ』に押し入れられ、『破壊の杖』を盗まれた責任を、なすりつけ合っているのだ。

見苦しいことこのうえない。

特にギトーと呼ばれる風魔法の教師の行動はひどい。

一方的に当直をしていなかったシュヴルーズを責めたてているのだ。自分が当番の日には真面目にやった事など無いというのに。

ちなみにこのギトー、一応は風のスクエアではあるのだが、『風属性最強説』を信じて疑わない無能教師である。

不毛の争いをレイたちが聞き流していると、オスマン老が声をあげた。

「自分の尻を拭えないでなにが貴族か！…フーケの捕縛、破壊の杖の奪還に立候補する者は杖を掲げよ！」

……
誰も応えない。

やはり口先だけか…という状況の中、一人だけ杖を掲げるものがい

た。

……ルイズだ。

さらに、キュルケやタバサも杖を掲げる。

「ヴァリエールには負けてられないわ。…でもタバサ、あなたは無理しなくてもいいのよ？」

「…心配」

「タバサ…」

タバサは意外とお人好しな性格のようだ。

この言葉に、ルイズ、キュルケの二人は感動している。

しかし、ここで教師側から声があがる。

「ですが、あなたたちは生徒なのですよ?!」

ふくよかな体型の女性教師、土のトライアングルであるシュヴルーズだ。

それでも…。

「では、ミセス・シュヴルーズ、あなたが行くかね？」

「い、いえ！私は体調がすぐれませんので…」

オスマンに行くように言われると、なけなしの善意も吹き飛ばされてしまった。

かばったのはただの偽善なのか、それとも勇気がないだけか。

…そこまで失敗した時に責任を被ることが嫌なのだろうか。

ここで、今まで黙っていたレイが喋りだす。

「こいつらに任せるのは別にいい。留学生も含まれるというのに生徒だけに任せ、失敗すれば外交問題に……いや、その留学生が有力貴族であることも考えると、戦争にならないとも言えんが、俺には関係ないからな」

暗に文句を言っているようなものだが、それはとりあえず置いておこう。

ルイズなどは「ちょ、ちょっとあんた！いきなり何言い出してんのよ」とか言っているがこれも無視。

教師陣のざわめきも完全無視。

そして、ギトーから声があがる。

「なんなのだね、お前は。たかが平民の分際で調子に乗るな」

しかし、レイはギトーの言葉を全く無視して先を続ける。

「だが、居場所が分からないのでは任務をこなすことは難しいのではないか？」

「おいつ！平民が無視をするなど……！」

さすがに、続けるのは難しいと判断したのか、レイはギトーに言葉を投げかける。

「先ほどから思っていたが………無能貴族は引っ込んでいろ。俺はそれ相応の理由がない限りは、相手によって態度を変えるつもりはない。だから、平民が貴族かなんて俺の知ったことではない。そして、お前には敬うどころか、対等に扱っ価値すらないな」

「貴様！ふざけるなよ……。我が『疾風』の餌食にしてくれる……！」

まさに一触即発。

ギトーは杖を取り出し……いや、取り出して魔法攻撃をしようとしたところで異変に気付く。

「つ、杖がない?!……貴様、いつの間に……!」

レイは、ふてぶてしい笑みを浮かべながら、ギトーの物と思われる杖を弄んでいた。

「まあ、落ち着け。任務に向かう勇氣すらないお前の代わりに、かわいい教え子と平民二人が頑張つてやるんだ。少しは喜べよ」

この言葉にギトーは血相を変えてレイに殴りかかる。

だが、ギトーはいつの間にか気絶して倒れこんでいた。

どうやら、すでにレイが鳩尾に拳を叩き込んでいたようだ。

「身の程を弁^{わか}えろ。“貴族”ごときが」

レイのあまりにも凍てついた眩きに、その場の全員……長年親友をやっているサイトでさえ背筋が凍った。

いや、タバサだけは全く動じずにレイをただただ見つめ続けていたが、まあ、それは置いておこう。

「それで?居場所は分かっているのか?」

何事も無かったかのように、レイはもう一度質問を繰り返した。

それにうるたえながらも、しっかり答えるのはオスマンだ。

「うゝむ。それなんじゃがのう。……まだ分かっておらんのじゃ」

「話にならないな。そういうことは、しっかり調べ終えてから……」

レイの話は途中で途切れた。

「おい、どうしたんだ、レイ？」

サイトの疑問に、レイは全く答えず、扉の向こうに目を向けながら口角を吊り上げ、不敵に笑う。

「どうやら居場所まで案内してくれるらしいな」

「はぁ？あんた何言って…」

【コンコン】

ルイズの言葉の途中で、扉がノックされた。

入ってきたのはオスマンの秘書、ロングビルだった。

「ミス・ロングビル！どこに行っていたのじゃね？」

「失礼します。『土くれのフーケ』の居場所を突き止めることに成功しました」

ロングビルの説明によると、事件の後、異変に気付いた彼女は、すぐにフーケの仕業と知ったらしい。そしてすぐに調べ始め、フーケは学院から馬で4時間ほどかかる小屋に逃げ込んだという証言を近くの村の人間から聞く事が出来たらしい。

これで行くことが可能になり、レイたちがすぐに現場に向かおうとすると、またもや教師が騒ぎ始めた。

「しかし、やはり生徒だけに任せるわけには…」

「なら、お前が行くのか？…まあ、お前では、行っても無駄死にするだけだな」

またもやレイヴ・ス・教師が始まるか、という状況になった時、オスマンから声があがった。

「だが、この者たちに任せるのは案外、名案かもしれんぞ。…ミス・タバサは『シユヴァリエ』だと聞いておるからの」

この言葉に一同は驚きの声をあげる。（冷静なレイとシユヴァリエが何か分らないサイト、そして本人のタバサを除く）

ちなみにシユヴァリエとは、純粹に実力のみを重視して与えられる騎士の勲章のようなものだ。

そのため、いくら貴族としての位が高くとも無能では手に入れることが出来ず、実際にこの勲章を持つ者はあまりいない。

そんな勲章をタバサのような少女が持っているのだ。驚くのも無理はないだろう。

「そして、ミス・ツエルプストーはゲルマニアの軍人家系出身で、自身の火の魔法もとても優秀だと聞いておるが？」

タバサだけでも驚いた一同は、オスマンの言葉をただ聞いていることだけしか出来ない。

キュルケは満更ではなさそうな顔をしている。

そして、次は自分の番だとばかりに無い胸を張るルイズ。

しかし、オスマンは少し焦りながら話し始める。

…褒めるところが思い浮かばなかったのだろうか。

「さ、さらにミス・ヴァリエールは…ええ、あの…とても有力な貴族、ヴァリエール家の三女で…その、そう！使い魔たちは平民でありながら貴族を倒すほどの猛者じゃ！…どうじゃ？この三人

に勝てる者などいるのかの？」

結局、ルイズの使い魔に逃げたが、反対意見を完全に潰すことには成功したようだ。

「では、ミス・ロングビル。生徒たちを案内してくれんかね？」

「もとより、そのつもりですわ」

こうして、レイたちにロングビルを加えた6人は、フーケの捕縛並びに、破壊の杖奪還の任務に就くことになったのだった。

お・ま・け　　～レイの強さってどうよ？～

「なあ、そういえばレイさあ、あの時ギトー？の杖取ったのも魔法なのか？」

任務前の準備中、サイトが唐突にレイに話しかけた。

「いや、あれは魔法じゃない。ただ見えない速さで杖を奪っただけだ。そもそも人間というのは「いや、説明長い？」……ああ、長いな」

サイトはレイの言葉を途中で遮った。

……レイはたまに、詳細な説明をしだすからしょうがないのだ。サイトでは理解が難しい。

「なら、いいわ。……………どうせ俺には出来ねえし」

「いや、サイト。お前にも出来るはずだ。……………俺はこれを、コツを聞いた瞬間に出来るようになったぞ」

「は？マジかよー！じゃあコツってどんなだ？！」

「それはな……………」

サイトは、ゴクリと唾を飲み込む。

「それは、『相手の隙を伺え、そして気付かれずに素早く奪取せよ』だ」

「……………え？」

「だから、相手の「だああああ！やっぱ無理じゃねえかああああ！
！ってかお前はどんだけスゲーんだよ！なんでそんなの聞いただけで出来るようになるんだよ！規格外かあああああ！！！！」……………」

……………これが普通ではないのか？」

サイトは言葉を失ってしまった。

内心、レイ……………どんだけ規格外だよ……………。とか思ったりして。

……………レイの強さってどうよ？

“貴族”ごときが調子に乗るな（後書き）

おまけ、どうだったでしょうか？

自分の中では、ギャグに走ったつもりです。

あ、出来てませんか？そうですね。

……出来るように、これからも精進いたします。

『例えば……』 (前書き)

今回はいつもより少し長めです。

それでは、本文をどうぞ！

『例えば……』

現在、レイたちは馬車に揺られて、フーケが立てこもっている小屋に向かっている。

御者はロングビルだ。

しかし、任務前だというのに馬車内の雰囲気は最悪だった。

もう、『旅行にでもきたのかっ！』どこの初めて東京に来た田舎の学生ですか?!』というような状況である。

「ねえねえ、ミス・ロングビル。御者は雇わないの？」

「私はただの平民メイジですから…。昔、家が没落しましたので」

ロングビルはオスマンの秘書ではあるが、平民だったらしい。

「へえ、詳しく聞かせてくださらない？」

ここで答えたのはロングビルではなく、ルイズだった。

「ちょっとキュルケ！いくらなんでもミス・ロングビルに失礼ですよ！」

「あら、ちょっとお喋りしようとしただけじゃない」

「それでも、人の過去を詮索するのはよくないわ！」

これを皮切りに、またもや二人の言い争いが始まった。逆に仲がよいのではないか?と思えてくるような騒ぎっぷりである。

二人の、言い争いの喧騒の中、いつもと全く変わらない者が三人。本を読むタバサ（ちらちらとレイの様子を伺っていることから、本の内容が頭に入っているかどうかは不明だが）、目を閉じながらも

周りを警戒しているレイ、そして全く気にせず御者をやっているロングビルだ。

サイト？…今はルイズ&キュルケに挟まれ、オロオロし、可哀そうな状況だと言っておこう。

…いつもと変わらないといえば変わらない光景だ。

ドンマイ、サイト。

しばらくして、サイトがさらに可哀そうな状況に陥っている中、何かを思いついたのか、レイは動きだした。

そしてロングビルの方へ向かっていく。

タバサが少し残念そうな顔をしているが、レイは気付かなかったようだ。

「ロングビルといったな」

「ええ、そうですが…なにか？」

「例えば……」

レイはいきなり例え話を始めた。

ロングビルはもちろん、こっそり盗み聞きしていたタバサも首を傾げる。

「もし、こいつらがフーケに襲われ、どうしようもない状況に陥ったでしょう。…その時、あなたはどのような対応をする？」

「それはもちろん、全力で助けますよ」

普通の答えだ。しかし、なにが気に入らなかったのか、レイはもう一度他の質問をする。

「…質問が悪かったな。自身と関係の深い人物が助けを求めている時、あんたならどうする？」

「先ほどと同じです。全力で助けます」

ほぼ同じ答え。だがレイの中では違いがあったようで、満足したように一言『…そうか』とだけ言い残し（無愛想な言い方であることには変わりはない）、最初に座っていた場所に戻っていった。

また目を閉じて警戒を始めようとしたレイに、タバサが近づいてきた。

「さっきの質問、どういう意味があったの？」

どうやら、よほど先程行動の真意が知りたかったようだ。

「大したことじゃない。少しヤツの反応を試していただけだ。…今後の扱いを決めておきたくてな」

レイはタバサにしか聞こえないように小声で答えるが、タバサは意味が分からないようだ。

当然だろう。結局は、ほとんど答えたことにはなっていないのだ。その状況を見かねたレイは、念を押しつつ話し始める。

「…この先、俺がどんな行動をしても、とりあえずは黙って見ていてくれるか？」

「分かった。あなたのやることなら信じられる」

「感謝する。では、単刀直入に言おう。…ロングビルはフーケだ」

この言葉に、タバサは驚愕の表情を示す。

「信じがたいかもしれないが、俺は『気』を読むことによって人物を判別出来るんだ。…そして、あの『気』は間違いなくフーケだっ

た」

なかなかの人外宣言と言えるだろう。

しかし、タバサは完全に信じたようだ。

「分かった。ミス・ロングビルには気をつける」

「信じてくれるのはありがたいのだが、やはりもう少し他人を疑うようにした方がいいと思うぞ？」

「私は疑り深い方。でも、あなたは信じられる」

かなりの信頼だ。タバサは自身でも信じられないくらいに信じているのだ。

「そうか。…信じてもらえるというのはなかなか嬉しいものだな」

この感情にレイは戸惑っているいるようだが。

それでも、もちろんそれは表面にださない。

「そして、タバサ。もう一度信じてもらうことになるが、俺はやるうと思えば『気』を読んで嘘かどうか見抜くことが出来る。…そして、先ほどの話の中で、ヤツは二つ目の質問には嘘をつかなかった。この質問をした真意だが、ヤツの噂の中に、助けた孤児に仕送りをするためにフーケとして盗みを働いている、というものがあってな。うまくすればこちらに引き込める可能性があったんだ。それで、ヤツの噂が正しいのか確かめるために質問したんだ。助けた孤児を文字通り、全力で助けていることを確認出来た、というわけだな。盗賊になってまで助けているのだから、金さえだせば簡単に寝返るだろう」

「それは助けるといふこと？」

「そうなるな。ヤツの助けると言っ た言葉は確実に嘘ではない。そ

れならヤツを、俺の諜報組織に引き込むのも悪くはない、と思っ
な」

いつぞやの情報網だ。

「諜報組織？いつの間に…」

「こちらに来た次の日には傭兵業で金を稼ぎ始め、二日後には諜報
員を10人雇った。…現在は250名程になり、俺がリーダーの傭
兵団のようなものになっている」

なかなかの行動力だ。

「…組織の名前は？」

「大変遺憾ながら、『漆黒の風』だ。…団の初期メンバーが俺を見
てそう進言して、次の日には団の者全員がそれに賛成していた」

レイは組織名が気に入らないようだ。

「かつこいい。あなたの速さを表すのに、『風』は適している。そ
れに、『漆黒の風』の伝説は私も聞いたことがある」

「そこまで有名になってきたのか。…どんな噂なんだ？」

「なかなか顔を出さない最強のリーダーがいると。そして、団員の
全員が普通の傭兵では足元にも及ばない程の実力を持っているとも
聞いた」

このようにレイとタバサは、現場に着くまで、ずっと平和に会話を
交わっていたのだった。

ちなみに、サイト君。本当にドンマイな状況だったとだけ伝えてお
こう。

馬車は四時間かけ、ようやく目的地に辿り着いた。

小屋の付近の森で話しあっているのはレイ、タバサ、ルイズ、サイト、キュルケの五人だ。

ちなみに、ロングビルは森に見回りに行くと言ってどこかへ消えていった。

レイがロングビルの行動を止めないので、タバサも止めない。…かなりの信頼だ。

「まず、俺の作戦から話しておこう」

当然のようにレイは話し始めた。

誰も止めず、もうレイは完全に皆をまとめる役になっているようだ。

「とりあえず、俺が魔法で探ったところ、生体反応は見られない。

…つまり中には誰もいないということになるな。他からフーケが襲ってくることを考え、俺は小屋の前で警戒を続ける。素早いサイトを筆頭に、小屋の中を調べて、破壊の杖を探してきてくれないか？」

『サイトたちが調子にのらないようにちゃんと見張っておいてくれるとありがたい』と、小声でタバサに告げるのも忘れない。

「レイ！あの中を調べればいいんだな？」

「ああ、中には誰もいない。外は俺が見張る。安心して見てきてくれ」

「おうっ、分かった」

ルイズとキュルケ、タバサも同意し（タバサはレイが付け加えたことにも同意し）、小屋の方へと駆けていった。

中に入ると部屋の中は埃が被っていた。しかしタバサは、よく分からない違和感をおぼえていた。

そう、小屋自体は古いし、埃も被っているのに、椅子や机があまりにも新品に近いのだ。

違和感の理由はこれか、でもなぜ？とタバサが考え込んでいると、隣からキュルケの声が聞こえる。

「タバサ？どうしたの？」

タバサは少しぼーっとしていたようだった。キュルケには「なんでもない」と返しておき、タバサも探し始めた。

それは意外と早く見つかった。

見つけたのはタバサだ。

「これ」

「え？タバサ、もう見つけたの?!」

…ルイズは自分で見つけたかったのか、少し不満そうな声をだしている。

タバサが破壊の杖の箱を開けると…。

「うわっ！これって…!!」

サイトはなぜかとてもびっくりしているようだ。

「どうしたの、ダーリン？私、宝物庫で破壊の杖見たことあるけど、前もこんなだったわよ？」

「いや、これってロケランなんじゃ…」

「ロケラン？ロケランってなによ？」

【ドゴーン！！！】

ルイズが質問し、サイトが答えようとしたところで、外から轟音が鳴り響いた。

サイトたち一行が外に出ると、レイとフーケのものらしきゴーレムがすでに交戦していた。

レイはあいかわらず、すごいスピードで剣を振り回し、腕や足を切り離しているが、すぐに再生されているようだ。

途中、素振りにしか見えないのに青い光が煌き、ゴーレムの腕を葬っているところから察するに、遠隔攻撃が可能なのだろう。

レイ曰く、双魔剣・黒羽、白羽の特殊効果で、『不可視の斬撃』と呼んでいるらしい。

特殊能力が付くということは、その剣が魔剣であることを悠然と物語る。

そして…。

『神威真刀流』二刀剣舞・四の型、轟塵斬。こうじんざん

いきなりレイの双魔剣・黒羽、白羽が巨大化を遂げ（これも剣の特殊能力の一つだ）、レイはそれを、ゴーレムに叩きつける。

二つの青の奔流によって、轟音と共にゴーレムは三枚おろしにされ、次の瞬間には全身が砕けた。

だが、それだけでは終わらせない。

レイは右手を前に突き出し、ルーンの詠唱を始める。

「《踊れ、踊れ。我が魔力よ、大いなる意志のもとに炎を顕現し、踊り狂いて焼き払え！ファイアーダンシング！》くらえ！！」

【ゴオッ！！】

そんな音と共に崩れ去ったゴーレムの足元から巨大な炎が上がり、標的を焼き払った。

ゴーレムは真っ黒に炭化しボロボロになって地面に崩れ落ちた。

「ふう、これでゴーレムの方はなんとかだったな」

レイは少し疲れた表情でそう呟いた。

仕事を終えたレイに皆が近寄ってくる。

「レイ、やっぱり強い」

「今回ばかりは強さを認めてやってもいいわ」

「純粹にすごいって言いなさいよ。∴それにしても、あの火の魔法！すごかったわあ」

「レイ！あの大きくなる剣！すげえなあ！！」

皆、口々にレイを褒める。

「大したことではない。…それより、破壊の杖はどうなった？」
「それなんだけどさあ、なんかロケランっぽいんだよ」

その言葉に合わせて、タバサは破壊の杖の入っている箱を差し出す。

「ロケラン？ロケットランチャーか？…：…確かにそのようだな。学院長には後でしっかり問い詰める必要があるか」
「問い詰めるって…あんだ、なに言って「待て」「え?!」」

レイはいきなり声をあげ、いきなり皆を庇うように立つ。
そして、破壊されたはずのゴーレムの腕がレイを捉え、森の方へ吹っ飛ばした。

「……レイ!!!!!!???」「」「」

皆が悲痛な声をあげる。

しかし、ゴーレムは動きを止めてくれない。

「なんで?!なんでゴーレムが復活するのよ?!」

「そんなの分からないわ!とりあえず、攻撃しないと!!」《ファイアー・ボール》!」

「…《ウインディー・アイシクル!》」

「お、俺も攻撃しないと…!キュルケにもらったナイフじゃ戦えないし、ここは…デルフ!」

『おい、相棒!ずっとほったらかしは酷いんじゃないか?』

「相棒?そっか、使い手なんだっけ?…って、そんなことは関係ねえ!いくぞ、デルフ!」

『おつよ!…!』

「私もやらないと!えとえと、《エアハンマー!》」(爆発魔法で

あることには変わりなし)

【ボウツ！！！ヒュヒュヒュン！！！シャキシヤキン！！！ドガー
ーン！！！！】

三者三様ならぬ、四者四様の攻撃がゴーレムを襲う。

だが、ゴーレムにはほとんど効いていないし、効いている部位もす
ぐに再生する。

「キリがないわ！…タバサ！確かあなた、シルフィードを森に待機
させてたわよね？！」

「…！？でも、それではレイが…！！！」

キュルケ言葉に、撤退しようという意味を汲み取ったのだろう。タ
バサは反論した。

「レイなら絶対大丈夫よ！あのレイがあんな一発で負けるはずない
もの！一旦、上空に逃げて様子を見ましょ！…そつでもしないと全
滅するわ！」

こんなことを言いつつもキュルケの顔は青ざめている。

タバサもそれに同意はするが、やはりいつもの冷静さが全く見えな
い。

二人は後ろ髪を引かれつつも、幼生ではあるもののドラゴンである
シルフィードに乗り、ルイズに声をかける。

「ルイズ！上空に一旦逃げるわよ！…このままじゃ全滅しちゃう！
！」

しかし、ルイズは全く聞かず、爆発魔法を放ち続ける。

「お、おいつ！ルイズ！！レイなら絶対大丈夫だから！！今は一旦、上に逃げよう！」

サイトの声もルイズは気にしない。

「レイのこともあるけど…それだけじゃないわ！敵に背を向けていては、真の貴族とはいえないの！！」

パチーン！と張り手の音が響く。サイトだ。

「お前！死にたいのか？！死んだらどうしようもねえじゃねえか！！」

「だって、だって！これを倒せばもう誰も『ゼロ』だなんて言わなくなるじゃない！！」

ルイズはそう言って泣き出してしまった。

サイトは何も言わずに、慰めるようにルイズを抱きしめる。

【ドゴーーーーン！！】

しかし、当然『空気読む？ハッ、そんなのカンケーねえよ！』状態であるゴーレムは攻撃をやめない。

サイトが気付いて避けていなかったら、今頃二人はスプラッタなこたになっていただろう。

「…全く、空気読めよ」

そう言ってサイトは、ルイズをシルフィードの方へ全速力で運び、途中であることに気付く。

ロケラン使えばあるいは！！とでも思ったのだろう。ルイズをシルフィードに乗せ、もう一度ゴーレムの方へ向かう。近くには破壊の杖：ロケットランチャーも落ちている。

「俺は時間を稼ぐ！今の内に空に逃げてくれ！」

「ちょ、あんたさつき自分で言ったこと忘れたの?!」

「大丈夫！俺はロケラン…破壊の杖の使い方がルーンの力で分かるはずだ！もしかしたら倒せるかもしれない！」

そうしてサイトは破壊の杖のところに辿り着く。

「おお！使い方が頭に入ってくる！これなら！よし、いっけえ！！！！」

【ヒュウッ、ドゴオオオオン！！！！！！！！！！】

そんな音と共に弾がゴーレムに飛んでいき、とうとうゴーレムの上半身を完全に吹き飛ばすことに成功するのだった。

『例えば……』(後書き)

今回、レイの初ピンチですね。

さて、レイはどうなってしまつのか。

予測可能かもしれませんが、次回をお楽しみに！

『本気で壊しちゃいたくなるよ』 (前書き)

ハルケギニアでの異分子……………それは邪なる力を秘めて
。

いつもと、前書きの雰囲気を変えてみました！

次はどうするか分かりませんが。

それでは、本文をどうぞ！

『本気で壊しちゃいたくなるよ』

サイトたちがゴーレムと奮闘している間、レイの方はというと……
びんぴんしていた。

まず、ダメージなど受けていない。ゴーレムの腕が当たる瞬間に、
“わざと”当たる“ふり”をして森に潜入したのだ。

そして『気』を頼りにして、すぐにロングビル……いや、フーケの
もとに辿り着く。

「こんなところで何をしているんだ、ミス・ロングビル？……いや、
フーケと言った方が良かったか？」

顔には不敵な笑みを貼り付け、レイは皮肉るようにロングビルに訊
ねた。

「なっ？！あんだ、ぶっ飛んでったんじゃないのかい？？！」

「ほう、素の話し方は今までとは随分違うんだな」

「そんなことはどうでもいいよ。……目的はなんだい？なんなら、ゴ
ーレムをこっちに持ってきてもいいんだよ？」

会話中にもゴーレムを見続け、ゴーレムを完全に操りきる。それが
フーケクオリティ。

「したければそうすればいい。……先ほどは、俺はわざとゴーレム再
生の核になる部分を破壊しないでおいたんだ。今来ても確実に瞬殺
だろう。さらに言えば、疲れた“ふり”をしていたのはお前に油断
させるため、そしてゴーレムに殴られて吹っ飛ばされても、違和感
がないようにするためだ」

フーケは全く反論が出来ない。
今の状況を見れば、レイの言っていることが正しいと容易に判断出来るからだ。

レイは、不敵な笑みを消していつもの冷たい表情に戻し、先を続ける。

「目的はなにか、と訊いたな？…俺の目的はあんたを諜報員として雇い入れることだ」

「むう、なんか真意がよく分からないね」

「別にそのままの意味だ」

その言葉に納得いかないようだったが、フーケは話をつなげる。

「まあいい、他にも疑問に思ってることはあるしねえ。…勝手に質問するよ。まず、あんたはいつから気付いてたんだい？」

「夜になると学院を見張っている怪しい者がいる、と気付いたのは召喚された日。それがあんただと気付いたのは初めて会った時だ」

その言葉に対し、一瞬驚愕の表情を示したフーケだったが、次の瞬間にはそれを否定する。

「???! ……いや、あんた、嘘ついても意味ないよ。そんな簡単に分かるはずがないね」

「俺は『気』で人物の判別が出来る。…ああ、別にこれは信じなくてもいい。そして、納得出来る理由が欲しいなら、説明しておこう」

レイはそう言って一旦言葉を切り、もう一度話し始める。

「まず、あんたがここを突き止めたと話し始めた時だ。あれはどう

考えてもおかしい。フーケはそれなりに有名で、国の方からも優秀な人材が、複数人派遣されたはずだ。それでもフーケの居場所を突き止めることは出来なかった。しかし、あなたはそれをたったの一人で、さらに言えばかなりの短時間で突き止めてしまった。…かなり怪しいと思わないか？」

「思わないね。もしかしたらただ幸運だっただけかもしれないじゃないか」

レイはフーケの反論を軽く受け流し、先を続ける。

「そうかもな。…次に、あなたが学院長に案内をしてくれと頼まれた時のあの顔。あの笑みでは、いかにも『計画通りだ』と言わんばかり。あの不穏な雰囲気を感じ取れる者からすれば、自分が犯人であると言い放っているようなものだ」

この言葉にもフーケは文句を言う。

「さつきからあなたの言っていることは不確定なものばかりじゃないか！」

「そう急かすな。まだまだあなたをイラつかせようと思っていたが、そろそろ最大の理由を言おう。…とりあえず、ここまで来るには馬でも片道4時間掛かる。それなのにあなたは、今朝には調査を終え、帰ってきた。例えフーケが破壊の杖を盗んだ直後に追いかけて始めていたとしても、調査を終えてあの時間に帰ってくるのは物理的に不可能なんだ。……自分の行動がいかに愚かだったか、理解したか？」

またもや不敵な笑みを貼り付け、レイは言い放った。

「くっ、あなたには敵わないね。でも、あの子たちの命はあたしが握っているようなもんさ。契約するんだったら、せめて働きに見合っ

た報酬が欲しいねえ」

「あんたは勘違いしているようだな。サイトたちは確実にお前のゴレムを潰すぞ。…まあ、働きに見合った報酬というのは当然だがな」

「へえ、で、いくらくれるんだい？」

「まあ、待て。俺からも一つ質問がある。俺が聞いた噂の中に、孤児を拾っては養っている、そのせいで盗みに身を投じなければいけなくなった、というものがあつたんだが、それは事実か？」

ロングビルは驚いたような表情をして、しばらく沈黙していたが、やがて観念したように話し始める。

「……一体どこからそんな情報を仕入れてくるんだか。証拠を残した覚えはないんだけどねえ。…でも、あんたなら、嘘なんてすぐ見抜きそうだからねえ。正直に言うよ、確かに私は孤児を匿って、養っている。…それで、あの子たちをどうするつもりなんだい？手を出すつもりなら、こちら最後まで粘らせてもらうよ」

「手を出す？別にそんなことをするつもりはないが？援助するつもりではあるがな。とりあえずこれだけ渡してやれ」

レイはそう言つて、ふところから袋を取り出す。

フーケが中を覗いてみると、そこには目も眩むほどの煌きを放つたくさんの宝石類がつまっていた。

「あ、あんた！これ、本物なのかい？！というか普通、人の言つたことをそう簡単に信じるもんかい？？」

驚きを隠せないようだ。

「俺は『気』を読んで嘘をついてるかどうかを見抜ける。…言つて

なかったか？」

その言葉に対し、フーケはいきなり笑い始める。

「あつはつはつは！あんだ、気に入ったよ！！すごいねえ。惚れちまいそうさ！」

「勝手に惚れられても困る。…で、どうするんだ？」

「愛想ないねえ。ま、いいさ。あんだの組織するところなら信頼出来る。雇われることにするよ。…ちなみに、私の本名はマチルダだよ。よろしく」

「レイ・クロカミ。よろしく頼む。…しかし、マチルダか。もしかしくてもサウスゴータの？」

「あんだ、どこまで知ってるんだい…」

フーケ…いや、マチルダは最早諦めたのが、呆れた様子で返す。

「ハーフェルフの存在までなら突き止めたな。あの子もお前が匿っているのか？サウスゴータはモード大公と縁が近かったはずだしな」

しかし、マチルダはこれには答えない。

どうやら焦っているようだ。

「ああ、ここではエルフは恐れられ、蔑まれているのだったな。…俺にはそういう概念はない。安心してくれ。なんなら俺が匿おうか？」

レイがそう言うと、マチルダはいくらか冷静さを取り戻し、答える。

「そ、そうだね。あんたは信用するって、今言っただけだからね。

…でも、あの子を外の世界に出すのはもう少し後にするよ」

「そうか。では、これからのことについて説明しよう」
こうして計画は進んでいった。

「た、倒したあ。ホントに何とかなるもんだなあ」

サイトが緊張から解放されて、気の抜けた声で呟く。

「じゃあ、早くレイを探しに行かないと！」

キュルケが皆を急かした時、それを制止する声がかかる。

「その必要はない。…俺がああ程度で死ぬとも思ってたのか？」

「……レイ……！」

レイがマチルダを連れて戻ってきたのだ。そしてもう一人、見知らぬ人間も連れてくる。

…正直言つて、かなり人相が悪い。

この人物は魔法で一時的に作り出した精度の高いゴーレムのようなものだ。

空間にある様々な元素を使って創られたゴーレム(?)だ。

どうやら、マチルダを引き込むために魔法で切り抜けるらしい。

そのうち魔法を取り消せば、ゴーレムもどき(普通のゴーレムより断然レベルが高いが)が元素まで分解されて消え去り、フーケは脱獄した、という状況になるだけなので、問題は無いだろう。

そして、タバサは何気に、本当にマチルダを仲間に出れたことに感心していた。

ちなみにタバサは、レイがわざと吹っ飛ばされる計画も本人から聞いており、途中の言動は全て演技だ。

「そ、その人がフーケなの？」

「ああ。森の中で魔法を行使していた。間違いないだろう。…さて、ロングビル。帰りは俺の転移魔法を使おうと思うんだが、それでいいか？」

「ええ、構いませんわ。馬車も一緒に運べるんですの？」

また、改まった話し方でマチルダは答え質問した。

「問題ない」

レイはいつも通り、無愛想に答えた。

話し合いの末、マチルダはとりあえず『ロングビル』として学院の秘書を続けることになったのだ。

…マチルダは、学院長を嫌がり（というより学院長のセクハラを嫌がり）、すぐにでも辞めてしまいそうな状態だが。

ちなみに、諜報員としての仕事はレイが直々に依頼し、報酬はその度に交渉することになった。

「さて、そろそろ帰……」

レイは不自然なところで言葉を切った。

それに対し、ルイズは疑問を呈する。

「ちょっとあんた、どうしたのよ？」

しかし、レイはそれに全く答えず、森のある一方に目を向け、そして咳く。

「ここまで接近されても気付かなかったとは…。俺もまだまだ、か」
次に疑問を呈するのはタバサだ。

「どういうこと？…私は何も感じない」

それに対し、レイはまたも答えず、森の方に声をかける。

「おい、いい加減出て来い。……覗き見は趣味が悪いぞ」

「本当に見つけちゃうなんて君はすごいな。ちよつと興味持つちゃつたよ！」

レイが見ている辺りの景色がいきなり歪み、全身に複雑な意匠を施してある真っ白な服に身を包んだ、茶髪の青年が現れた。

その声はとても軽い調子であり、友達に語りかけるようなものに聞こえるにも関わらず、どこか無機質で、背筋に寒さを感じさせる声だった。

「お、お前誰だ?!」

「い、いきなりどこから?!」

「…あの声、生理的に無理だわ」

「不覚。気付けなかった」

上から驚きを隠せないサイトとルイズ、声に嫌悪感を示すキュルケ、気付けなかったことを悔やむタバサの声だ。

レイは相手を冷静に分析し終え、話しかける。

「お前は、何者だ？…少なくとも人間じゃないようだが」

この言葉に、他のメンバーは、は？という状況になっている。しかし、青年はそれを肯定する。

「そつだよ。よく分かったねえ。人間たちで言う『気』でも使ったのかな？」

青年は相変わらず無機質な声で語りかけた。

「そつだ。それよりも俺の質問に答える」

「そつ焦らないでよ、レイ君」

「何故俺の名を知っている？」

「ミラーナで『漆黒の悪魔』を知らない人はいないよ？…まあ、僕は人ではないけどね」

青年はここで一旦話すのを止め、ニツコリと（しかし無機質に）笑って一同を見渡しながら続ける。

「さて、僕は君たちの名前と簡単なプロフィールは把握しているから、自己紹介からしてあげようかな。…僕の名前はルナルト。ルナつて呼んでね。一応、上位魔族に分類される、立派な第三魔法師団の長だよ。ちなみに、僕は魔族としては若い方で、確か300歳くらいだったっけな。…まあ、僕のプロフィールはこれくらいでいいよね？」

しばらく、沈黙が広がった。

魔族？魔法師団長？300歳？聞いたこともないし、有り得ない。

レイ以外のメンバーは等しく、そう思った。
そして、レイはまた何か考え込んでいる。

レイはおもむろに口を開き、話し始める。

「そうか、お前がああ『崩壊』のルナルトか。人間と比べて、かなりハイスペックな魔族の中でも、一際異彩を放つ壊し屋。その人格は完全に崩壊しているが、強さは、十ある魔法師団の長の中でもかなり強いと言われている。…それがお前だな？」

「へえ、僕のこと知ってたんだあ。じゃあ、僕がこれからやろうとしてることもわかるよね。」

ルナルトの周りの空気が、一気に数度下がった。

レイ以外のメンバーは、例外なくルナルトの殺気によって動くことすら許されない。

それはシュヴァリエであるタバサも例外ではなかった。

レイは呆れたように呟く。

「これで俺を挑発しているつもりか？…挑発するならこれぐらいやっつけて見せる！」

レイの総身からブワツと濃密な殺気が吹き出る。

しかもそれはルナルトだけに向けられ、周囲への影響はゼロだ。

「ハハハツ！ここまでの力はさすがに予想外だ！…でも、ここまで挑発されると本気で壊しちゃいたくなるよ。知ってる？僕が興味を持った“物”や“者”はねえ、ちよつとだけ遊んだらすぐに壊れちゃうんだよ？…君は、少しは長く耐えてね！」

ルナルトの声音はどんどん冷たく、狂気に満ちたものになっていき、

殺気も鋭さを増す。
タバサたちが総じて倒れかける。

「ちっ、どうやらこいつらには耐えられないらしい」

そう言ってレイは右手をブンツと振る。するとタバサたちを青く輝く膜が覆う。レイの使えるシールド魔法で一番の防御力を誇る代物だ。さらに、森にもこれから行われるであろう戦闘の被害が及ばないようにするためか、タバサたちに張ったシールドと同じものを発動する。

それと同時に、シールドの内に入ったタバサたちの、目に見えて青ざめていた顔色が格段によくなっていく。
しかし、今回の魔法には詠唱が無かった。

今まではもつと簡単な魔法でもキツチリと詠唱していたのにも関わらずだ。

「無詠唱?!…人間の身ではそれは無理なはずなんだけどなあ」。

君はますます面白いね」

「お前のようなヤツ相手に手加減は必要ないからな。魔法も無詠唱で使わせてもらうぞ。まあ、普通に詠唱した場合より性能は劣るがな。……さて、始めようか」

レイは両手を左右に突き出し、双魔剣・黒羽、白羽を亜空間より取り出した。

青い光が辺りを満たす。

ルナルトは右手を前方に突き出し、持ち手が2m程ある長大な鎌を呼び寄せた。

レイの魔剣とは違い、刃部を赤い光芒が隈なく覆っており、その光は禍々しく蠢いている。

その光は、ルナルトの武器も魔の物であると悟らせるに充分だ。

そして、二人の間で殺気がぶつかり合い、やがて壮絶な戦いの幕が上がるのである。

『本気で壊しちゃいたくなるよ』(後書き)

もうお気づきかもしれませんが、サブタイトルを『でくくった時は、登場人物のセリフです。』

今回の場合は、オリキャラのルナルトですね。

次回、第三魔法師団長ルナルトとの戦闘模様です！

本格的な戦闘描写は初ですが、よろしくお願いします。

『俺はお前には負けない!』 (前書き)

あんな思いは二度と御免だ

だからこそ少年は強くなった。

それでは、本文をどうぞ!

『俺はお前には負けない!』

レイは瞬迅を使ってルナルトに肉薄する。

「へえっ！なかなか速いんだね！」

しかし、ルナルトは全く問題無く避けてしまった。
最速の型であるにも関わらずだ。
だが、これだけで終わるレイではない。

『かむいしんとつりゅう神威真刀流』二刀剣舞・に弐の型、こうが光牙。

レイの双魔剣から、二筋の『不可視の斬撃』が繰り出され、その反動によって自身の体を後方に持ってゆく。
そして、間を置かずに瞬迅、光牙、瞬迅、光牙……。
まさに一撃離脱。相手に攻撃させる暇を全く与えず、一方的な攻撃を繰り返す。

ルナルトは攻撃の全てを魔鎌で防ぐのに精一杯。

……そのはずだった。

それでも、ルナルトは反撃を開始した。

「いつけえ 《虐殺の宴!》」

ルナルトの魔鎌が、いきなり禍々しくも激しく光り、素振りでもしているかのように振り抜かれる。

すると鎌から、赤い衝撃波が無数に飛び出し、レイへと襲い掛かる。
世界を血で赤に染めあげる残酷な行軍は、まさしく今にも虐殺を始めそうな勢いだ。

そしてそれを楽しんでいるかのような様は、まさに『虐殺の宴』…。
シールド内で復活した仲間たちの悲鳴があがる。
しかし、それでもレイの余裕は消えない。

「これぐらいで俺を倒せるとでも思うのか！」

そう言っつてレイは、二刀剣舞を繰り出す。

『神威真刀流』二刀剣舞・参さんの型、旋廻せんかい。

レイは二つの青い軌跡を残しつつ回転を始め、自身も高速で回転する。

それはやがて周りに青い真空波を生み出し、レイの周囲を丸く覆つて、そこにぶち当たった無数の赤い奔流を全て打ち消す。

「それだけではない！《サンダー・シヨック！》」

レイは右手に持つ黒羽の切っ先をルナルトの方に向け、魔法を放つ。魔剣から放たれた極太の雷が、激しい衝撃を伴ってルナルトに突き刺さろうと爆進する。

しかし、ルナルトは左手を、右から左へ振りぬくだけでそれを完全に防ぎきる。

その左手は赤い光の膜で覆われていた。

「左手に魔力を集めて防御力を高めたか」

「僕相手に、無詠唱のせいで威力の弱まった上級魔法程度を放つなんて、ナメてるんじゃないよ！せめて詠唱ありで最上級魔法でも放つてみなよ」

これには返事をせず、レイは次なる一手を打つ。

『神威真刀流』二刀剣舞・伍ごの型改変、地崩壊じほうかい・焦土。

通常では、伍の型、地崩壊は魔剣を地に突き刺し、強力な衝撃波を伝えることで、超広範囲の地面を隆起させ、その隆起した地面で敵に攻撃するというものである。

広範囲であるがために、多数の敵に有効な技だ。

しかし、今回はそれだけではない。

突き刺した魔剣に炎を纏わせ、隆起した地を灼熱の溶岩として、敵を襲わせるのだ。

そして周囲は焦土と化した。

「まだまだ！これだけでは終わらせない！《焼き尽くせ、焼き尽くせ。我が魔力よ、大いなる意志のもとに炎を顕現し、地獄より出でし豪火は死を告げ、破壊の限りを尽くせ！ファイアー・ブレイズ！》」

今度は余裕を持って詠唱された、火属性最上級魔法を放った。

ちょうど、崩壊した地面から隆起する溶岩を防ごうとしていたルナルトを中心にして、地獄の豪火の柱が無数に上がる。

最上級の名にふさわしい破壊力、そして攻撃範囲を誇り、ルナルトを焼き尽くさんとして襲い掛かった。

それでもレイは攻撃をやめない。

双魔剣に大量の精神力や魔力がすぎ込まれ、目も開けられないほどに眩しく、青く光り輝く。

『神威真刀流』二刀剣舞・七の型、鬼刃閃光きしんせんこう。

レイはそれを、右手に持つ黒羽を左から右に、左手に持つ白羽を右から左へ振り抜いた。

すると二つの強大な『不可視の斬撃』はいつにもまして攻撃力を増して、未だ炎に包まれているルナルトに向かって突き進み……。ぶち当たって大爆発を起こした。

激しい閃光は眩く光り輝き、太陽が地上に降りてきたかのような。そして、それに伴う轟音は、放った後すぐに自身にシールドを張ったレイや、シールド内の仲間たちの鼓膜すらも突き破らんとするほどの勢いだ。

シールド内のタバサは思う。

次元が違い過ぎると。そして、どれほどつらい訓練を行ってきたのかと。

あれだけの威力の魔法や剣技を放つのなら、才能の一言だけでは済まされない。確実に想像を絶する凄まじい修練を積んできているはずだ。

だからこそ思ってしまった。

これでルナルトは完全に倒したのだと。

キュルケやルイズ、そしてサイトも勝ちを確信して騒いでいる。

それに流されたのかもしれないが、未だ殺気を放っているルナルトに気付けなかったのだ。

「フフフツ ナメたマネをしてくれるね、君は。…本気で怒っちゃいそうだよ」

… 楽しげでありながら冷たく、無機質なこの言葉を聞くまでは。

ようやく収まってきた爆心地から出てきたルナルトは、確かに無傷ではなかった。

全身からは血が滲み、魔鎌は消え去っている。だが、それだけ。あくまでぴんぴんしている。

「倒せるとは思っていなかったが……。ここまで無傷に近いとはな」「レイ君さあ、僕をナメ過ぎだよ？こんな程度で僕が負けるわけないじゃん。…君もそろそろ本気出しちゃいなよ。僕も本格的に攻撃を始めてあげるからさ」

この言葉にシールド内の者たちは驚きを隠せない。

「あれで本気じゃない？」

「う、嘘だろ?! どんだけ強いんだよ、レイ」

「というか、明らかに敵の方も本気出してないわよね…」

「あああ、あ、あれはヤバいわ。しし、し、シールドとかいうの、たた、耐え切れるのかしら」

ルイズは少し慌てすぎだ。

「そうか。俺も少しは本気を出そう」

レイはポツリとそう言い、目を閉じる。

次に目を開けると、感覚が研ぎ澄まされたレイの瞳に映る景色の動きは、とても鈍重なものになる。

目の前では、ルナルトが新しく魔鎌を呼び出していた。素早いはずのそれも、レイの目には遅すぎる。

『神威真刀流』二刀剣舞・八の型、狂刀乱舞。

『氣』を全身に行き渡らせることによって、感覚が研ぎ澄まされ、身体能力が格段に上昇する…それは八の型の特色。

そしてレイは、凄まじいスピードでルナルトに突進し、二刀ある手数を利用して攻撃を開始する。

感覚が研ぎ澄まされた状態で、攻撃に攻撃を重ねる苛烈なまでの攻撃の嵐。変則的に…それこそ、意思を持っているかのように、自由自在に敵を切り裂かんとする二つの魔剣。さらにそれだけではなく、激しい蹴りがトリッキーな剣舞の後から襲い掛かる。

レイの戦闘は五体全てが武器と成り得るのだ。

そして、それこそが、八の型が『狂刀乱舞』である所以。

青と赤の流星が、互いを打ち消さんばかりに爆進する。

そして、二人は激しく切り結び始めた。

その頃シールド内では。

「な、なんだよ、あれ。ガンダールヴのルーン発動させても全く目で追えねえ…」

サイトは驚愕していた。

「私にも追うことは出来ない。…無力」

タバサも悔しそうに俯く。

いつの間にかタバサは、レイの隣に立てる程の実力を欲していた。

「時々舞ってる赤い線って、血なのかしら…」

キュルケの言う通り、二人の戦いは激化しており、双方の血が飛び

散っている。

…しかも、狂刀乱舞を使っているはずのレイの方が、ダメージが大きい。

その状況を感じ取ったのか、ルイズが呟く。

「……レイ、私の使い魔なんだから、ちゃんと生き残ってよね……」

話は戦闘模様に戻る。

「なかなか粘るねえ、レイ君 ……でも、そろそろ飽きちゃったなあ。ねえ、終わりにしようよ」

激しく切り結んでいるはずなのに、余裕を持った声でルナルトは問いかけた。

「うる…さい。…そんなに終わり…たい…か？」

打って変わって、レイは苦しそうだ。

「うん ……もう終わりねっ！ 《終焉^{エペローグ}への輪廻^{ロン下}曲！》」

ルナルトは嬉しそうに技名を告げた。すると、周囲に真っ黒な闇が渦巻き、形作られてゆく。

レイの周りには無数の獣や人型の……闇が蠢いていた。

「それが僕の意味で君に襲い掛かるよ。さあ、どうする？」

「……俺は…負けてはならないんだ。魔族が相手でもそれは変わらない。誰よりも強くなり、何者にも屈しない。そんな強さを手に入れることだけが俺の目的だ。……だから、俺はお前には負けない！」

レイは叫んだ後、技を発動させる。

『神威真刀流』二刀剣舞・陸ろくの型、夢幻分身むげんぶんしん。

途端にレイが十人ほどになった。

高速で移動して、その残像に『気』で形を与えているだけなのだが、それゆえに実体があり、そして幻なのだ。

十人のうちの一人…おそらく本体であろう人物が呟く。

「俺はお前なんかには負けない。よく覚えておけ、魔族はけっして最強ではないということを」

十人はバラバラに別れ、それぞれ闇の者たちに向かっていく。

素早い剣戟が無数の闇を襲い、『不可視の斬撃』が切り裂き、炎が焼き払い、水が溺れさせ、風が吹き乱れ、土が押しつぶす。

鋭い剣筋、飛び交う『不可視の斬撃』や、無詠唱の上級魔法の数々……そんな十人が繰り出す様々な技が、闇を消し去る。

数えることすら敵わなかったはずのたくさんの闇は、見る間に数を減らしていった。

ルナルト自体にもたくさんの攻撃が襲いかかり、けっして少なくな
い傷を負う。

しかし…。

「お前エ！そこまでの力まで隠してやがったのかア！ふざけるなふざけるなふざけるなア！！一気に消してやるウウウ！！！！《虐殺の宴！虐殺の宴エ！！虐殺の宴エエエ！！！！》ギャハハハアアアア！！！！」

ルナルトがぶつ壊れ、赤く、紅く、怪しく輝く鎌を振り回す。前とは比べ物にならないような赤の奔流たちが自身の生み出した闇と共にレイたち（全部レイだが）を消し飛ばさんとして襲い掛かる。奔流が止まり、視界から赤が消えると、ルナルトの前方には巨大なクレーターがあり、そこに生命は……無かった。

「ハハツ、クハハハハアアアアア！消えた！全部消えたよ！僕に逆らったからこうなるんだよ！……フフツ、僕としたことが、ついぶつ壊れちゃったなあ。これから命令通りにこの世界の侵略を始めなきゃいけないってのにい。でもこれで心置きなく世界を壊せるね！さあ、レイ君の次に死ぬのは君たちだよ？クククツ」

ルナルトの笑いが響き渡った。

「そんな……まさかレイが……？」

「なんで……なんでこんなことになっちゃたの？」

「レイ……。使い魔なのに……なんで死んじゃうのよ……」

サイト、キュルケ、ルイズは皆悲痛な呟きを残す。

マチルダも声を出せずに呆然としている。

しかし、タバサは、一途に一方を見つめ、レイのことだけを信じて祈っていた。

「まずはシールドを壊さないとねえ」

ルナルトはタバサたちの方にゆっくりと向かってゆく。

「や、やめろおー！」

サイトがデルフを抜いて構えるが、ルナルトは完全に無視してひたすら歩を進める。

キユルケは火魔法のルーン詠唱をしてルナルトに放ち、ルイズは何度も杖を振って爆発魔法を連発するが、ルナルトには効かない。

「無駄だよお そんなの効かないって。さっきまでの戦い見てたでしょ？せめて上級の魔法でも使つてきなよ？…いや、もうその必要はないね、着いちゃったからさあ。フフツ」

ルナルトはシールドの目の前に辿り着いた。

それでもタバサは目を閉じてレイのことを想って祈り続ける。あのレイが死ぬはずはないと。次の瞬間にはルナルトの心臓を魔剣で貫き、自身の怪我など全く省みずに皆の無事を確認するだろうと。タバサはそう確信して祈り続けた。

そして…。

「さあ、虐殺の時間だ 一緒に楽しもうよ！まあ、すぐに死ぬんだけどね！フフフツ」

ルナルトがそう呟いた声に、冷静に言葉をつなげる者がいた。

「そうだな。だが、死ぬのはお前だ、『崩壊』のルナルト！」

レイだ。そして、そのレイの魔剣・黒羽は、確実にルナルトの心臓を貫いていた。

「な、なぜ…お前が生きてるんだア…。お前は…僕…が消し去った…はず…なの…に…」

ボタンツ。ルナルトは地に崩れ落ちた。

「あの十人は全て幻。あの中に本体である俺はいなかったということだ。……幻は消し去っても意味がないだろう？」

レイはそう言つて右手を突き出し、ルーンを唱える。

「さあ、お別れの時間だ。「ハツ…やる…が…いい…さ！僕…は必ず…あの世…で君…を…呪つてやる…から…ね」……好きにしろ。《輝け、輝け。我が魔力よ、大いなる意志のもとに聖なる炎を顕現し、浄化の火となりて罪人を裁き、全ての罪と共に打ち滅ぼせ！セラファイ・フレア！》」

レイは死に掛けのルナルトの言葉を気にせずルーンを唱え終え、魔法を発動させた。

そして、天よりありえないほど眩い光が…それこそ『鬼刃閃光』の閃光を遥かに凌ぐほどの眩い光が降り注ぎ、音も無く視界を光で埋め尽くす。

やがて光が収まると、全てが燃やし尽くされて灰になったルナルトの残骸がそこにはあった。

「この光の炎は罪人にしか害を及ぼさない。残念だったな。……せいぜい地獄で罪を償え」

その言葉と共に灰は風に吹き飛ばされ、消えていった。

「フウ…さて、お前たち。無事…だった…か？」

そう言い放った後にレイの身体はゆっくり傾いていき、疲労で倒れこんだのだった。

タバサは、完全に予想通りだったレイの行動に嬉しくなりながらも、仲間内で一番速くレイに駆け寄り、すぐに水の治癒魔法を行使し始めるのだった。

ルナルトとの戦闘によって、タバサとサイトは自身の無力を痛感し、後ほど、レイのもとに修行を頼みに行くというのはまた別の話。

『俺はお前には負けない!』(後書き)

次回、とうとうタバサが、レイに対して表面的にも積極的になっていきます!

舞踏会の夜は平和に更けてゆく(前書き)

壮絶な戦いを終えたレイにご褒美?です。

舞踏会の夜は平和に更けてゆく

ルナルトとの死闘後、結局目を覚まさなかったレイを馬車に乗せ、偽フーケを馬車の隅に縛っておき、学院へと向かった。

ちなみにタバサは自身の膝に、寝ているレイの頭を持ってきて、親しい人なら分かるくらいに顔を赤くして本を読んでいた。（もちろん、本の内容などこれっぽっちも頭に入っていない）

そのせいでキュルケに大いにかかわれたのは別の話。

そして、いわゆる膝枕をうらやましそうに見つめるサイトにルイズが怒って叫びまくるのも、また別の話なのだ。

学院に着いた後は偽フーケをロングビルに任せ（結局、牢屋に入れられたようだ）、皆は学院長室へと向かっている。今回の任務の報告をするためだ。

レイはまだ寝ており、なぜかタバサの部屋へ、しかもタバサが付き添って運ばれた。

ここで報告の様子を記してもいいのだが、たいして重要なことはないので、箇条書きで簡単に説明だけしておこう。

- ・ ルイズ、キュルケにはシュヴァリエの申請、タバサには精霊勲章の申請をしてもらえることになった。（タバサはすでにシュヴァリエなため）

- ・ 平民であるレイやサイトの申請は不可能で、それに難色を示したルイズの働きにより、オスマンのポケットマネーからいくらかもらえることになった。

- ・ 本日の夜には舞踏会が開かれる。

- ・ 舞踏会の準備のためにルイズ、キュルケは部屋に戻るがサイトは残り、破壊の杖についてオスマンに質問する。（ちなみに、タバ

サは未だレイに付き添っているが、舞踏会の準備はちゃっかり済ませている)

・ 破壊の杖はオスマンの恩人が持っていた物らしく、その人物は地球人だと推測される。

・ しかし、その人物はすでに死んでいるので、帰る方法は依然として不明。(実はレイの魔法を使えばいつでも帰れるし、戻ってくれる)

まあ、こんなところだろう。

ちなみに、やはり帰る手段がないと知ったサイトは若干、不貞腐れている。(クドイようだが、実際は簡単に帰れる)

そして、舞踏会開始三十分前、タバサの部屋にて。

タバサのベッドの上で、レイはやっとのことで目を覚ました。

すでにドレスに着替えていたタバサがベッドの近くに椅子を寄せて、レイの右手を握っていた。

「グッ……。……タバサ？」

「大丈夫？」

「ずっと看病してくれていたのか？…すまないな、感謝する」

「別にいい」

そう答えながらタバサは内心、膝枕したことは黙っておこうと思っていた。

『勝手にそんなことをするな』と言われたらどうしよう、と今さらながらに思ったのである。

レイは自身に治癒魔法を唱えて全快し、ベッドの上で上体を起こす。

「心配をかけたな。タバサたちは怪我なかったか？」

「大丈夫。あなたのシールド、とても高性能だった。…ありがとう
／／／／」

「どういたしまして。無事でなによりだ。…いや、本当に無事なの
か？顔が赤くなっているぞ？」

レイはある一方の事柄に関しては呆れる程に鈍感だった。

…他の面では異常なまでに鋭いというのに、全く難儀なヤツである。
タバサは、いつもより少し内心の優しさを表情に出しているレイの
顔を見て、さらに赤くなるが、なんとか返事をする。

「な、何でもない／／／。本当に大丈夫／／／／」

「そうか、それならいいんだが…」

そう言いながら、何気なくベッドから立ち上がった。

レイは立ってタバサを見て、いつもと服装が変わっていることに気
付いた。

「ドレス…？…ああ、そういえば今日は学院で舞踏会が開かれる
という情報が入っていたな」

そこで一旦言葉を切り、ボソツと小さく言葉をつなげる。

「…なかなか似合っている。…さて、舞踏会など俺には関係ない
からな。外で訓練でもしてこよう」

レイは『似合っている』発言の後にすぐ扉の方へ向きを変え、訓練
のために外へ出ようとする。

しかし、タバサはそれを止めようと、レイの右手を手取る。

「ダメ。…あなたと私は、一緒に舞踏会に出る／＼／＼／＼」

もう、誰にでも分かるほどに顔を真っ赤にして、タバサはそんなことを言った。

「しかし、今から準備したのでは開始の時間には間に合わないぞ？」

「それでもいい。…会場で待ってる。絶対来て／＼／＼」

タバサは、涙目＋上目遣いでレイを見つめる。

しかも意図せずにこれをやってのけている。

いつもは強いレイの意志も、これには完璧に折れた。

…もともと、女子供に特に優しいヤツなのだ。

「……分かった。出来る限り早く行こう。では、とりあえず体を清める。…部屋の隅に小部屋を作るがいいか？」

「別にいい」

タバサの了承を得たところでレイは部屋の隅の方に右手をかざし、魔法を発動させる。

すると、部屋の隅に2m四方の小部屋が出来上がった。

偽フーケと同じく、周囲の元素を使い（足りない分は亜空間から呼び寄せる）、創られたものだ。

「あなたの魔法はいつ見てもすごい」

「大した物ではない。さあ、俺はここで準備を始める。先に行つてくれ」

「分かった。…本当に絶対来て」

そう言い残してタバサは去っていった。

その後、レイは作った小部屋に入る。

そこは何故か高級ホテルの一室のような物だった。(しかも、スウィートルームっぽい)明らかに大きさが合っていないが、そこは魔法だ。とりあえず万能なのである。

まず、レイはシャワー室に行き、身体を清める。

シャワーから出たあとは、火魔法で身体を乾かし、シャンプーの香りを漂わせながら元々着ていた服を亜空間にある洗濯機に突っ込み、魔法で起動しておく。さらにパーティー用の上等な生地(普通、誰もその違いに気付けないが)を、またまた亜空間から取り出し、身につけた。

これで、完璧。

その後、部屋に取り付けてある冷蔵庫に何故か入っている飲み物(実際はレイが魔法で作り出したのだが)を取り出し、一気に飲み干す。

ちなみに、レイは寝る前に毎日これを行っている。(サイトには教えていない)

なかなか贅沢なヤツである。

「さて、行くか」

小部屋から出たレイは、そう呟いて小部屋を消し去り、転移魔法で会場へと跳ぶのであった。

一応、正装のレイが会場に入ると、貴族の子供たちで溢れかえって

いた。

正装とはいえ全身真っ黒な（ついでに言えば、髪も瞳も真っ黒な）レイは、かなり目立つ。

「だから、俺は来たくなかったんだ…。だいたい、ダンスなど俺の性に合わない」

文句たらたら、独り呟くが、とりあえずタバサを探すことにした。

ターゲットは、『気』で探るまでもなく簡単に見つかった。

バイキングの大皿近くを陣取り、猛スピードで料理を食べ進めているのだ、すぐに見つけられない方がおかしい。

ちなみに、サラダの減りが異様に早い。

「タバサ、来たぞ。…そのサラダ、美味しいのか？」

「（コクリ）ハシバミ草のサラダ。…食べる？」

そうやってタバサは自身の皿をレイの方に差し出す。

「もらおう」

そう一言ことわり、レイはタバサの皿からサラダをつまむ。

「どう？」

「少し苦いが、おもしろい味だな。肉をこれで挟めば、かなり味の深みが増すだろうな。俺は好きだぞ」

レイはサラダをそう評した。

ちなみに、ハシバミ草のサラダは苦すぎて、タバサ以外誰も手を出

さなような代物だ。

「そう。気が合う」

二人はその後も周りがひくほどに大皿を空にしていったとか。この食事で、レイとタバサの大食漢ぶりが学院でかなり有名になったのは、また別の話。

「フウ、満足」

「ああ、だいたい欲しい物は食べ終えたな」

舞踏会も中盤を過ぎた頃、二人の食事はやっと終わりを告げた。

二人が食べている間にキュルケなどは、もうすでに10人程の男子生徒と踊り終えて、休憩を挟んでいる。(その間も他の男子生徒にダンスを申し込まれ、少しうつつとうしそうだ)

レイよりさらに遅れてきたルイズも、不貞腐れて月見酒(この世界の月は赤と青の双子月だ)をしていたサイト(オイツ、未成年)を誘って踊っていた。(デルフ談『おでれーた！使い魔と主人が踊るなんて！相棒は本当におもしれえな！』)

「そろそろ、私たちも踊る」

タバサはそれがさも当然のようにレイに話しかける。だが、レイはこれに難色を示す。

「…ここには邪魔な人がたくさんいる。わざわざここで踊る必要はないんじゃないか？」

「この方が、雰囲気がいい」

「…ハア、タバサ。今から言うことは絶対に秘密だぞ？」

「?!分かったノノノ」

秘密の共有！とタバサのテンションは上がった。∴実際は大した秘密ではなく、ロングビル・フーケの秘密の方がすごいことなのだが、タバサはそれには全く気付かずに喜んでいる。（キュルケレベルの親友かレイにしか、その表情の違いを見極めることは困難だが。ちなみに、判別出来るレイも、『何に対して喜んでいるんだ？』とか思っていたりする）

「俺は…」

タバサの喉がゴクリと鳴る。

「全く踊れない」

「え?? 剣舞が出来るのに???’」

本当にどうでもいい秘密だった。

「大丈夫。あなたの運動神経ならすぐ出来るようになる。∴それも、私とはイヤ?’」

タバサの十八番、無意識下での涙目+上目遣いが炸裂した。

「……そういうわけではない」

「では、あなたは私と踊るノノノ」

「ハア、分かった。……では、私と一緒に踊ってくださいませんか、レディ?’」

結局、レイは完全に折れた。∴普通の女子供よりも、タバサには、さらに折れやすくなっていた。

「喜んで／＼／＼」

タバサは差し出されたレイの手に、そっと自分の手を重ねた。

二人の踊りはけっして上手くないはものの（主にレイがタバサの足を踏みそうになる辺り）、二人の空間があり、その様子を遠目に見ていたキュルケからすれば微笑ましい踊りが続いたという。

ちなみに鋭いはずのレイも、会場で踊ること自身で自身が踊れないことを、皆に教えているようなものだということには気付かなかったか。

舞踏会の日の夜、レイはなぜかタバサの部屋に連行されていた。とりあえず、サイトとルイズに念話を送ってみることにした。

………俗に、現実逃避という。

《サイト、ルイズ。聞こえるか？》

《うおう？！レイ？どこいんの？？！》

《ちょっとレイ！使い魔のくせに勝手にいなくならないでくれる？！》

サイトは驚いているようだが、ルイズは全く気にせずレイに文句を言う。

《やかましい！とりあえず連絡事項だけ伝えて置こう。タバサに、

今日は俺の容態のことを考えて、自分の部屋に來いと誘われた。断つたんだが、連行された。まあ、害があるわけでもないから一泊させてもらうことにした。以上。ではな》

レイは一方的に伝え、念話をブチツた。

念話を終えたレイが前方を見ると、少し拗ねたような表情のタバサがいた。

「どうした、タバサ？」

「…なにしてたの？」

口調もどこか拗ねたような感じだ。

レイが説明も無しに、一人でなにやら始めた（念話）せいだろう。

「ああ、説明から始めた方が良かったな。先ほどの念話と違って離れた場所にいる者に一方的にパスをつなげて、会話するというものだ。一応、タバサの部屋に泊まることをルイズたちに報告しておこうと思っただけな」

内心では、連行されたという現実から逃げたかったというだけなのだが、とりあえずそれは置いておこう。

「そう。でもこれからは、それを始める前に言って。…いきなり黙って集中されると怖い」

内心、目を瞑っているレイがとてもカッコイイとか思っていたりしたのだが、それも置いておこう。

「それでタバサ。俺はどこに寝ればいいんだ？部屋にベッドを創っ

てもいいならそうするし、小部屋を創ってもいいんだが。：ああ、床でもいいぞ。どこで寝ても大して変わらないからな」

しかし、タバサは後半の言葉を全て流して、静かに自室のベッドを指差し、一言。

「ここで寝る」

「それはタバサだろう？」「あなたも」：「は？」

レイらしくもなく、一瞬たじろぐ。

「ここで、二人で寝る／＼／」

タバサはもう一度告げる。

「だが、小部屋は次元をいじくって、見た目の数倍は大きく創れるぞ？創っても邪魔にはならないと思うんだが？」

小部屋内部を高級ホテルにしたあの魔法だ。

そこならレイは快適に過ごせるだろう。

「レイの容態が変わったら、大変」

「もう俺は全快した。本来ならわざわざ連れてきてくれなくてもよかったくらいだ」

そう言った途端に、タバサは悲しそうな表情になる。

そして俯いて、呟くように質問をする。

「……イヤだった？」

「そういうわけではないんだが……」

「なら、ここで寝る」

「何故そうなる？」

「……おねがい」

タバサの必殺技、涙目＋上目遣いが火を噴く！もう連発しまくりだ。

結局レイは折れた。

タバサとレイは、とりあえず着替えて（レイは一旦小部屋を創って、そこで着替えた）ベッドに入った。

レイは思う。……俺ってこんなに意志弱かったか？

どんどんタバサに甘くなってしまうレイであった。

タバサが寝静まるのを確認し、レイも目を閉じた。

二人の夜は、揉めたわりには案外平和に更けていった。

舞踏会の夜は平和に更けてゆく（後書き）

タバサがだいぶ積極的になっちゃいましたね。

……というか、レイの意志も結構折れてる（笑）

やっぱり平和な日々が好き（前書き）

皆さんが描いているであろうタバサ像より、甘えが多い感じになってしまった気がします。

それでも良いという方、読んでいただけると嬉しいです。

それでは、本文をどうぞ！

やっぱり平和な日々が好き

翌朝の早朝、レイが目を覚ますとタバサが腕にくっついていていた。夜、何故かうなされていたタバサを、レイが落ち着かせるために手を握ったところ、この形にもっていかれたのだ。

「寝ている間中、姿勢を変えていないのか……。逆にするぞ」

誰にとも無くレイは呟いた。

起こさないようにタバサにくっつかれている腕を離し（結構苦勞した）、レイはいつもの通りに修練に出向いた。ルナルトとの戦いを思い出したレイは、強く思う。……あれほど大技を連発しないと倒せないようじゃまだまだだな。……俺はもっと強くならなくては。

心なしかいつもより激しい修練を終え、レイが一応タバサの部屋へ戻ってくると、タバサは泣いていた。

「タバサ？どうした?!」

レイらしくもなく慌てた様子でタバサに近づく。

「……朝起きたらあなたがいなかった。……見捨てられたかと思っただ」

実はタバサは、昨日うなされていた悪夢のせいで精神が不安定だったのだ。

夢の内容は……いや、これはまだ記すべきではないだろう。
とりあえず話を戻そう。

「修行をしていたんだ。…すまないな。だが、俺は絶対にタバサを見捨てたりしない。安心してくれ」

タバサは何も言わずにレイに抱きついた。

もう一度言うが、タバサはこの時は精神が不安定だったのだ。

タバサはこの悪夢をよく見るのだが、そうなのだ。…そういうことにしといてあげて欲しい。

「落ち着いたか？」

やがて離れたタバサにレイは問いかける。

「いきなりごめんなさい」

「気にするな」

タバサは自分のしたことに気付いて、顔が真っ赤になって俯いている。

このままではタバサが授業に遅れるため、レイそれとなく急かす。

「さて、タバサ。そろそろ準備を始めよう」

結構露骨な急かし方だが、仕方ない。

準備を終えたレイたちは、転移魔法で一気に教室前へと跳んだ。

教室まで来たレイたちの耳には、生徒たちの話し声が聞こえてくる。途中で、犬！とかわん！とか聞こえてくるが、気のせいだと思いたい。

レイたちが意を決して教室に入ると、ルイズがサイトを犬として扱っていた。

「…タバサ。ここは無視で授業が始まるまで待とうかと思うんだが、それでもいいか？」

「私もその方がいい」

結局、気にしないことにした。

よって、この扱いの説明は完全に省かせていただく。なに、気になる？

…では簡単な説明だけしよう。

？ サイト、ルイズにルパンダイブ

？ この犬ううううううー！……！！……！！……以上。

正直、どうでもいい。

レイたちが席につくと、今回の授業担当であるギトーが颯爽と（…と本人は思っている）入ってきた。生徒たちは一斉に席に着く。

ちなみに、サイトの犬扱いはとりあえず終わったようだ。

「では授業を始める。知っての通り、私の二つ名は疾風。疾風のギトーだ」

レイに簡単に杖を奪われるようなヤツが疾風でいいのだろうか。
そんなことはお構いなしにギトーは続ける。

「さて、最強の系統は何か知っているかね？ミス・ツェルプストー」

その言葉を聞き、レイは鼻で笑う。

レイは思う。…最強の系統など存在するはずがないだろう？

その笑いを聞きながらもギトーはあえて無視した。（今度こそヤバイと思つたため）

「虚無じゃないんですか？」

「伝説の話ではない。現実的な答えを訊いているんだ」

「ならば、火ですね。火はすべてを燃やし尽くします」

キュルケは、少しギトーをバカにしたように言った。

しかし、ギトーはそれを歯牙にもかけず、続ける。

「残念ながらそうではない。風こそが最強なのだ。…試しに私に火魔法をぶつけてみたまえ」

そう言つてギトーは杖を引き抜く。

「火傷じゃ済みませんわよ？…《ファイアー・ボール》」

キュルケの杖先から火球が生み出され、ギトーに向かって放たれた。
…誰も気付かない。ここでレイの瞳が怪しく光っていたことを。

仮にもスクエアである彼の風魔法は通常、トライアングルである彼女の魔法を完全に吹き飛ばすはずだった。

実際、火の玉はギトーの起こした風に押し返されようとしていた。しかし、ここで状況は一変する。

風に煽られた火の玉が爆発的に燃え上がったのだ。あっけなく、ギトーの風の壁は突破されギトーのローブは燃え上がった。

「さっきの。あなたの仕業？」

「ああ、あのままではキュルケの魔法は跳ね返って、彼女にダメージを与えていただろうからな。…キュルケはタバサの親友だろうか？」

「ありがとう／＼／」

この二人は混乱をものともせず、和む性質があるらしい。良くも悪くも、二人には二人の空間があった。

二人で話していると、復活したギトーが使い魔品評会の話をし始めていた。

「タバサ。ギトーが、使い魔品評会がどうか言っているが、それはなんだ？」

「使い魔のお披露目。審査員によって、使い魔と主人の連携を評価の基準にして順位をつけられる。…でも、実際は使い魔の格で判断される場合が多い」

「必要性ゼロだな。まあ、とりあえずルイズたちとも相談してみよう」

「なぜ？」

「一応、俺はあいつの使い魔もどきだからな」

「…忘れてた。でも、寝る時は部屋に来て」

「俺の容態はもう大丈夫…「おねがい」…分かった」

レイはやはり折れた。

そしてその後は、問題なく授業が終わったのであった。

ルイズの部屋にて。

「どうするのよ！使い魔品評会！！」

「ルイズ、もしかしなくても忘れていたな？」

「そそそ、そんなわけ、なな、ないじゃない！」

レイの指摘に、ルイズはあからさまに否定した。
完全に凶星だったらしい。

「なあ、使い魔品評会って結局なんなの？」

サイトはレイとルイズに訊くがあっさりシカトされる。

「ルイズ、とりあえず落ち着け」

「そ、そうね。あなたの魔法もあるし！」

「いや、俺は魔法を使う気はないぞ？」

「何だよ！だいたい……辺りが火の海になるぞ？」……そうね

「なあ、俺の質問は……」「うるさい」「はい、すみません……って、おいっ！」

サイトのノリツッコミはともかく。

「無難に、俺とサイトの剣舞でいいんじゃないか？」

「それだと私との連携が出来ないのよね」
「では、全く別の物にしよう。…俺に考えがある」

レイの説明は続いていった。

そして、サイトは無視され続けるのである。

哀れ、サイト。

「いいじゃない！それに決まりね！！」

「品評会が何かは知らないけど、それ面白そうだ！！」

未だ、品評会の説明はされていないようだった。

哀れ、サイト。（クドイ）

「そうか、ではそれぞれ準備を始めてくれ。…ああ、言い忘れていたが、今日もタバサの部屋に泊まることになってしまった。…何故か、これから先も呼ばれ続けるような気がするんだが、了承してくれ」

「使い魔の仕事はちゃんとしてくれるんでしょうね？」

「サイトの手に負えないことは全て引き受けよう」

「それならいいわ。もともとあんたは使い魔もどきだしね」

ちなみにルイズは、サイトがそんなことを言い出したら、絶対にキレていただろう。

「レイいいなあ。俺も他のところ見てみたいなあ」

「サイトおお！あんたはここじゃ不満だって言うのね？フッフッフ、分かったわ。お仕置きが必要なのね？」

サイトに爆発魔法が炸裂した。

哀れ、サイト。（クドイですか、そうですね、さすがにそろそろ自重します）
ちなみに、レイはちゃっかりタバサの部屋前まで転移していたのだ
った。

タバサの部屋前。

【コンコン】

「レイだ。いいか？」

「どうぞ」

中から声が聞こえたので、レイは室内に入った。

室内では、タバサがベッドに腰をかけて本を読んでいた。

「遅い」

そして、タバサから文句一言。

「ああ、悪いな。やることの説明に時間が掛かってしまった」

「何をやるの？」

「それは見てのお楽しみだな」

「分かった。今から楽しみ」

レイはタバサの方に近づいて隣に座る。

「それにしても、何故今日もここなんだ？」

「来て欲しいから」

え?...とレイは固まる。

「それだけか？」

「そう。…ダメ？」

タバサの必殺（以下、略）

「ということは今日からずっと？」

「いいの？」

「……それをタバサが望むのなら、な」

レイは、もうだいぶタバサに甘くなっていた。

タバサは、レイの『お前が望むなら』発言にひとしきり赤面した後、改まって話し始める。

「レイ、あなたにお願いがある」

「どうした？」

「明日から、私も修練に混ぜて欲しい」

ルナルトとの戦いで、最も無力を痛感していたのはタバサなのだ。この申し出は当たり前と言えよう。

「…タバサ。お前が強さを求める理由はなんだ？」

だが、レイの言葉にタバサは口ごもる。

「それは……過去に……」

二人の間に沈黙が広がる。

タバサにはしつかり明確な理由があるようだが、言い出しているものか迷っているようだ。

見かねたレイが、タバサに声をかける。

「タバサ。話しにくいのなら、その気になった時でも構わない。…その時には昔話もしてやろう」

「昔話？」

「ああ、過去から逃げている愚か者の話だ。それでいて、いつまで経っても過去に囚われ続けるヤツのな。………変な空気にしてしまったな。まあ、話すのはいつでもいいということだ。その代わり、早く起きてもらうことになるぞ？」

少し、しんみりしてしまった空気を振り払うかのように、レイはニヤリと笑って問いかけた。

「大丈夫。…でも、絶対起こして」

「ああ、分かった」

レイは苦笑しながら答えるのだった。

こうして、またも寝る場所について揉めながらも（やはり、結局レイが折れた）、二人は平和に過ごしていくのであった。

やっぱり平和な日々が好き（後書き）

次回、使い魔品評会です。

独自性のある発表に出来るようにしようとは思っていますが、もしかしたら同じようなものを投稿してらっしゃる作者さんもいるかもしれません。

ですが、そこは広い心で許していただけると幸いです。

使い魔品評会のあれこれ。(前書き)

一応投稿ですが、この回は完成度が低いかもしれません。
自身がありません…。

どうかご了承をお願いします。

それでは、本文をどうぞ！

使い魔品評会のあれこれ。

数日後、タバサの部屋にて、レイは目覚めた。
今日はとうとう、使い魔品評会当日だ。

今日もレイは修練のために、早く、目を覚ます。
左腕にくっついているタバサを起こし、修練を行っている場所へと二人で向かう。
これが二人の日常。

修練の広場に着いたレイたちはとりあえずランニングを始める。(ちなみに、レイだけの時は人外スピードで走り続ける)
タバサが適度に疲れ始め、レイが治癒魔法をかけてやっている頃に、サイトはやってくる。

「やっぱり二人共早いな。これでも起きたらすぐ来てるんだけどなあ」

「遅いぞ、サイト。さっさと準備運動を始める」

「へいへい、分かりましたよっと」

サイトはそう言いながらデルフで素振りを開始する。

さすがガンダールヴ。なかなか侮れない速さで剣は振られている。

サイトがウォーミングアップをしている間に、レイとタバサは擬似戦闘を始める。(もちろん、レイは全く本気を出していない)

「さて、始めよう準備はいいか？」

「『雪風』のタバサ…参る」

レイが斬りかかり、タバサはそれを避け、ウインディー・アイシクルがレイを襲う。

それをレイは、参の型・旋廻で粉々に粉碎する。その間にもタバサは動き、レイの背後からブレイドの魔法によって刃の付いた杖で肉薄する。その際に使うのは、風魔法との併用によって可能にした、擬似瞬迅。…もちろん、レイのスピードと比べると、全くなっていないが。

レイの白羽とタバサのブレイド付きの杖が激突する。

「なかなか良くなったぞ、タバサ」

「でも、まだまだ。…これからもお願い」

そしてしばらくの鏝迫り合いの後、タバサは風魔法で自身の身体を後方に身を投げる。

その後は瞬迅、光牙の連携のような、きれいなヒット&アウェイ。これがタバサの基本戦闘スタイルだ。さらにフライなども混ぜることにより、三次元の動きでレイと剣を交えたり、十八番のウインディー・アイシクルをあらゆる死角から放って翻弄するなど、実にトリッキーな戦い方を見せていた。

タバサは新たに魔法を唱える。

雪風魔法・氷鏡。

レイの周りを巨大な氷の板が囲う。

その氷の中には、無数のタバサが映りこんでいる。

氷のスクリーンに映し出された自分に、『気』を使って一時的に実体を持たせる……レイ発案の、タバサの新技だ。

ちなみに、モデルは陸の型・夢幻分身だ。

それぞれのタバサからウィンディー・アイシクルが放たれた。全方向から繰り出される氷の嵐がレイを襲う。

「これをマスターしたのか。よくやったな」

レイは余裕で話しかけながら氷の矢の全てを剣で捌ききった。

直後に氷の壁が消え去り、タバサは一気に精神力を使いすぎたことによる疲労で、膝をつく。

ガキンツ！金属と金属のぶち当たる音が響いた。

「サイト。不意をつくのはいいが、もう少し気配を殺せるように努力しろ」

「ちえ、これでもレイには効かないのかよ。…ってか、『気』とか『気配』とか、そういうのがよく分かんねえ」

「お前は剣の才は相当なものだが、魔法や『気』に関しては絶望的だな。肝心なところがヌケている。…昔と変わらないな」

こうして、サイトも混ぜた三人での修練が続いていった。

1時間後。

いつもならまだ修練を続けるはずなのだが、今回はサイトの一言で終わりを告げる。

「なあ、そういえば今日って品評会の日じゃなかったっけ？」

……………。

「完全に忘れていた」

「おいしい！二人ともしっかりしろよ！！」

「ハア、しょうがない。とりあえず終わりだ。それぞれ準備を始める」

こうして三人は、少し慌てて準備を始めるのだった。

「使い魔品評会を始める！今年の品評会には、特別ゲストで王女様におこしいただいておる！みな、日ごろの成果をお見せできるよう、頑張るのじゃぞ！」

オスマンの声に、生徒たちの間で歓声があがり、ついに使い魔品評会が始まった。

レイが参加するのはルイズとで、一番最後になる。

ちなみに、本人はタバサと出たかったとか。

使い魔品評会は順調に進んでいき、次はタバサの番だ。

発表内容は、風竜であるシルフィードの曲芸飛行。

シルフィードの背にはタバサが乗っており、空中で宙返りしたり、いきなり上昇したかと思えば次の瞬間には猛スピードで降下してみせたり、なかなか手が込んでいる。

練習風景を近くで見っていたレイ曰く、かなりの練習をしていたようだ。

その後、決闘騒ぎの時のギーシュやモンモランシーの発表、キュルケとサラマンダーの発表などを経て、とうとうルイズの…レイたちの番がやってきた。

舞台裏手にて。

「準備はいいな？」

「ああ。でもなんか緊張してきたっ」

「そそ、そうね。い、いざ本番となると、ききき、緊張しし、してくるものよね」

「緊張しすぎ(だ)」

舞台からオスマンの声が聞こえてくる。

「最後は、ルイズ・フランソワズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール！…舞台に出るのじゃ」

ルイズ、レイ、サイトは順番に舞台へと歩いていく。

使い物にならないルイズを置いておき、とりあえず拡声魔法で声を大きくしたレイが司会を始める。

『これから、ルイズ・ド・ラ・ヴァリエールと、その使い魔二人による発表を始めよう。…申し遅れた、司会である俺はレイ・クロカミ。一応使い魔だ。今回は、もう一人の使い魔、サイト・ヒラガと、我が主人(大変遺憾ながら)であるルイズと共に、俺の故郷の曲を発表させてもらおう。よろしく頼む』

生徒たちは、平民とはいえメイジを倒した二人と、『ゼロ』とはいえ公爵家の三女であるルイズの発表を前に歓声をあげる。

その声を聞いてレイは魔法で楽器を呼び出した。アコースティックギターだ。(スタンドマイクも呼び出している)

サイトの前にも同じものが、ルイズの前にはグランドピアノが出現した。(ちなみに二人の技量は、レイによる鬼の特訓で相当なレベル

ルまで上達した)

『それでは始める。一曲目は前座として、俺とサイトが歌おう。曲名は……』

レイのリクエスト曲で、きれいなバラード曲。

メインボーカル・サイト、ハモリ・レイだ。

ルイズのピアノから入り、二人のギターが響き、ハモる。

生徒の中には感動で泣いている者もあり、かなりの好印象だったといえよう。

ちなみにタバサだが、感動して、かなり早い段階から泣いていたりするのとはまた別の話。

一曲目がクライマックスを向かえ、やがて終わる。

生徒たちはしばらく余韻に浸った後に大きな拍手が起こった。

演奏後、レイが右手を振ると、グランドピアノが消え去り、ルイズの前にスタンドマイクが出現する。そして、レイのアコギはエレキに、サイトのアコギはベースに変わる。

『たくさん拍手、感謝する。…さて、次曲で最後になる。お待ちかねであるう、(不本意ながら)我が主人のルイズがボーカルを務める。先ほどとは雰囲気が変わり、かなりテンションの高い曲だ。盛り上がること間違いなし。(何気にルイズプレッシャーをかけてるだけ)是非ともテンションを上げて聴いてくれ。曲名は……』

レイが曲名を発表し、演奏を始める。

サイトがリクエストした曲で、レイは知らないが(ミラーナにいた時に発表されたため)、人気アイドルグループのヒットナンバーだ。もともときれいなソプラノであるルイズの歌声に、生徒たちは一際

大きな歓声をあげる。

何気なく舞台の後ろにスクリーンを作って、ルイズの歌い、踊っている姿をズームで投射してみたりして、これもかなり評価されるだろう。（ここまで、レイの魔法連発だったりするが、ここは置いておこう）

激しい歓声と、割れんばかりの拍手で、使い魔品評会は幕を閉じた。しばらく後、審査員の間で順位が決まったらしく、オスマンが発表を始める。

「今回の発表会は大成功じゃ。王女様も楽しんでいただけたことじやろう。…では、結果発表じゃ！十位以上を発表するからの。十位……」

どどん生徒の名前が発表されていく。
ちなみにベスト3発表直前の時点で、ルイズ、タバサ、キュルケは（ついでにギーシュとモンモランシーは）まだ名前を呼ばれていない。

「三位、ミス・ツエルプストー！サラマンダーと自身の火の連携が素晴らしかったの」

三位と聞いて、キュルケはフフン と胸を張った。

…周りの男子たちは自重しましょう。

「二位、ミス・タバサ！風竜の飛行風景は圧倒的であった。特に、空中での宙返りの迫力は、皆の目に焼きついているじゃろうな」

タバサも心なしか誇らしそうな顔をしている。

いつの間にかタバサの横に移動していたレイ（ルイズとサイトを置

いていつて）は、タバサを賞賛する。

「タバサ。よかったな、練習のかがあつたんじゃないか？」

「ありがとう。…あなたが見ていてくれたから頑張れた／＼／＼」

またも周りを気にせずと和んでいると、とうとう一位が発表されようとしていた。

「ええ、ゴホンツ。では、一位の発表じゃ！……第××回、使い魔品評会、第一位は……ミス・ヴァリエール！皆を楽しませる歌声！きれいな演奏！舞台の後ろに拡大して映しだす魔法など、どれを取っても素晴らしかった！これからの躍進に期待し……」

オスマンの口上が続く中、今度はタバサがレイを祝福する。

ちなみに、ルイズとサイトだが、それはもう有り得ないほど喜んでいただけ記しておこう。

「レイ、おめでとう。一つ目の歌、とても上手かった」

「ありがとう。まさか、一位になるとはな。…実を言えば、適当に発案しただけの物だったんだが」

レイ…それはいいのだろうか？

「それでもすごかった。今度は、あなた一人だけで歌っている曲も聴きたい」

「ああ、今度はタバサのためだけに歌ってやるう」

「あ、ありがとう／＼／＼」

「シルフィードにでも乗せてもらって、上空で歌うというのはどうだ？」

「いいと思う。夜、月を背に、とかいい」

「いいな。では、思い切って酒を持って行って、月見酒でもしてみるか？」

「つきみざけ？」

「ああ。月見酒っていうのはな……」

こうして、レイとタバサの会話は和みながら続いていく。

ちなみに、この間もオスマンの長話は続いていた。

やはり、校長（＝学院長）の話は、どこに行っても…たえ異世界に行っても変わらずに長いらしい。

使い魔品評会のあれこれ。(後書き)

思うのですが、なんで校長的立場の人の話ってあんなに長くてつまらないんでしょうね(笑)

アンリエッタの訪問（前書き）

少しだけ、アンリエッタに対してアンチな回になってしまいました
が、ご了承ください。

それと今回おまけ付きです。

それでは、本文をどうぞ！

アンリエッタの訪問

品評会が行われた日の夜。

レイは、やはりタバサの部屋にいた。

ちなみに、二人はベッドに腰をかけているのだが、その距離はゼロだ。つまりくつついている。…おもに、タバサがくつついている。

二人して読書中なものにも関わらずだ。(ハルケギニアの本なのだが、翻訳魔法を使うため、レイでも読める。逆に言えば、翻訳魔法を使うほど、レイは本好きなのだ)

…読みにくくないのだろうか？

しばらく、二人は心地よい沈黙に身を委ねていたのだが、突然レイが本から目を離してある一方を見つめ、呟く。

「この『気』は…？」

「どうしたの？」

タバサはすぐに質問する。

「いや、ルイズの部屋に一つの『気』が近づいているんだが…何故か、今日、王女として紹介されていた者と同じ『気』なんだ」

「王女があの子の部屋を訪れているということ？」

「らしいな。…ルイズは一応公爵家だ。王女の遊び相手を務めたこともあっただろう。その時友人になってもおかしくないし、王女がお忍びで会いに来ていてもおかしくない。…だが、この『気』の乱れはおかしい。まるで何かを画策しているかのような…。幸い、俺はあいつの使い魔だ。ルイズの部屋に入って、話を聞いてみるか？」

「分かった。行く」

こうして、二人は本を閉じ、ルイズの部屋前へと転移することになった。

ルイズの部屋前に着くと、ちょうど何者かが入っていくところだった。

「おそらく、あのフードの人物が王女だろう。とりあえず、俺が行けば入れてもらえるはずだ。…行こう」

「分かった。…でも、私も入って大丈夫？」

「問題ないだろう。…というか、入れないのであればシカトして帰る」

サラッとタバサを尊重しつつ、レイはノックをする。

【コンコンツ】

「レイだ。タバサも連れてきたんだが、入るぞ」

「分かったわ。入って」

とりあえずお許しが出たので、レイたちは入室する。中にはルイズ、サイトの他に王女らしき少女の姿が。

「この方たちは誰ですの？」

「私のもう一人の使い魔と、学友です、姫様」

王女の質問にルイズが答えた。

「名はレイ・クロカミ」

「タバサ」

二人は、相手が王女だというのにいつも通りの態度で名乗った。それに対してルイズが、とりあえずレイにキレル。

「ちよつと、あんた！王女様に向かつてそんな口の利き方は…！」
「前に言っただろう？俺はそれ相応の理由がない限りは、相手によつて態度は変えないと。…加えて俺は、この国の住人ではないからな。臣下の礼をとる必要性は皆無だ」

「右に同じく、私もこの国の住人ではない」（タバサはガリアという国からの留学生です。念のため）

レイの言葉にタバサも追従し……二人して全く遠慮なしに、仲良く椅子に腰掛ける。それも、二人掛けの物をわざわざ創つて、だ。

この態度に呆れ、ルイズは…いや、王女も何も言わずに先を続けることにした。

「分かりました。確かに他国の者がわたくしに従う必要はありませんものね。それに、お友達であるルイズの使い魔さんと御学友ですもの。…とりあえず自己紹介をしておきましょうか。わたくしの名前はアンリエッタ・ド・トリステイン。この国の王女です。よろしくお願ひしますわ」

姫様にお友達と言ってもらえ、ルイズは喜んでいるが、レイたちは全く気にせずに答える。

「よろしく頼む。…とりあえず、俺たちのことは構わず、話していきなさい」

「…よろしく。…続けて」

本当に物怖じしない二人だ。

この二人の近くにサイトも近寄って腰掛け、ルイズとアンリエッタは昔話に花を咲かせる。

「なあ、レイとタバサはなんでわざわざここに来たんだ？野次馬？」

「野次馬なら今、部屋の前に……いや、これは放っておこう。俺たちが来た理由だが、『気』だ」

「そう、『気』」

「『気』がどうしたんだ？」

「……説明がめんどくさい」

こんな意味もない会話を続けていると、ルイズたちの会話が本題に入ったようだ。

「わたくし、ゲルマニアに嫁ぐことになりましたの」

「……おめでとございます」

望まぬ結婚、政略結婚であることを察したルイズは、悲痛そうに祝福した。

「ですが、礼儀知らずのアルビオンは、二国の同盟を妨げるためにその材料を血眼になって探しているのです……。そしてもしそのようなものがあるのなら……」

「まさか、姫様……そのような物が？」

「あるのです」

「そ、そんな!？」

「ああ、始祖ブリミルよ！どうかこの不幸な姫をお救いください」

大げさに身振り手振りで悲壮感を醸し出すアンリエッタ。

レイが感じ取った『気』の乱れはこれのせいだろう。

つまり、アンリエッタはその材料とやらの奪還を“お友達”である

ルイズに頼もうということらしい。

呆れたレイはとりあえず話をさっさと終わらせることにした。

「どうでもいいが、その材料とやらを探しに行かせるつもりなのだろう？ どうせ着いて行かされる俺としては、さっさと説明をしてもらいたいんだがな。…ああ、下手な演技はもうやめていいぞ。俺とタバサにはそんなもの逆効果だ。着いて行く気がうせる」

「わたくしは演技など…！」

「オーバリアクションも度が過ぎる。…いいからさっさと情報を公開しろ」

…これは不敬罪にはならないのだろうか？

タバサすらもそんな危惧をするが、意外にも杞憂だったようだ。
アンリエッタが口を開く。

「分かりましたわ。…あなたはそんなことを言いながらも、とても優しい気がするのです。わたくしはあなたを信じてみることにしますわ」

ルイズなどはかなり驚いているが、レイは全く気にせず答える。

「優しいかどうかは俺には分からないが、ルイズとサイトが行くのなら俺は着いて行くだろうな。…いくらアホ面とはいえ、親友を見捨てる程、俺は落ちぶれちゃいない」

「アホ面は余計だ！…でも、ありがとうな、レイ。レイがいれば大抵の危険なところは平気だな！！」

サイトは能天気なヤツだ。

今回もそれが遺憾なく発揮されたといえよう。

「で？奪還する物、そしてその場所はどこなんだ？」

「以前したためた手紙ですわ。そして場所はアルビオンの王党派の手元です」

「手紙というのはアルビオン皇太子・ウェールズに向けての物か？

……婚姻が妨げられるほどの物なら、ラブレター辺りか。恋仲だという噂は本当だったんだな」

「なぜそれを?!」

「レイの情報網を甘く見ちゃダメ」

「よし、じゃあさっさとそこに取りに行こう！」

サイトが皆を促す。

だが、レイがバツサリ斬り捨てる。

「お前は、アルビオンが戦場だとちゃんと理解して言っているのか？…俺がいるとはいえ、命の危険だってあるんだぞ？」

「え、なんで？」

サイトの質問にレイは呆れて答える。

…普通、レイのような情報網など持っているはずもなく、この疑問は異世界人にとってはある意味当たり前ではあるが。

「現在、浮遊大陸・アルビオンでは、貴族派と王党派の間で内乱が起こっている。レコン・キスタという組織の存在により、王党派は風前の灯火。アルビオンが潰れ、国が代わるのも……そして王女の手紙が明るみにでるのも、時間の問題だ。……さて、そんな内乱状態の国が安全だと言えると思うか？」

「イイエ、イエマセン」

「…ついでに言えばルイズ。お前もこの依頼を安易に受けようとしていたみたいだが、確実にこの事実を忘れていただろう？…もう少

「し考えてから答えを出すんだな」

「あ！忘れてた……。というリアクションをとるルイズ。それでもすぐに考えをまとめ、答えを出す。」

「姫様、決めました！ここはやはり、ド・ラ・ヴァリエール家三女にして、あなたのお友達であるルイズにお任せください！」

「ああ、ルイズ！やってくれるというのね！」

「覚悟はいいんだな？…王女も“お友達”を戦地に向かわせる覚悟は出来ているんだろうな？」

レイはもう一度最終確認をとった。

「当たり前じゃない！」

「…頼もしい使い魔さん、ルイズをよろしくお願いしてもよろしいでしょうか？」

「俺だって万能ではない。…だが、まあ善処しよう」

「なら、お願いしますわ。…では、王女としてルイズに命令を下します。アルビオンまで赴き、ウエールズ皇太子に事情を説明して、手紙を奪還してきなさい」

「分かりましたわ！お任せください」

レイはこのやり取りにとりあえずは満足し、もう一度口を開く。

「…王女、この場はこれでいいが、これからは王宮内にも信頼出来る人物を作っておくことだな。…それと、扉にくっついてるギースュ。この話を聞いたからにはもちろん着いてくるよな？」

タバサ以外は、え？という顔をする。（タバサはレイに教えてもらうことによって、少しだけ『気』を習得しているため、レイが野次

馬なら部屋の前に、と発言をした時から気付いていた）
レイに呼び出されたギーシュが、部屋に入ってきた。

「不肖ながら、このギーシュ・ド・グラモン、どんな困難な任務にも立ち向かう所存にございます！よって、この任務は私にお任せください！！」

「え、ええ、よろしくお願いしますわ」

皆がちよつとひいていたのはとりあえず置いておこう。

この後、アンリエッタがウェールズへ向けて、手紙を返して欲しいという内容の手紙をしたため、王家の秘宝である『水のルビー』という指輪と共にルイズに手渡した。

こうして、浮遊大陸・アルビオンへ手紙の奪還任務に向かうことになったのである。

お・ま・け　　く『気』って便利過ぎないか？

「レイ！ちよつと訊きたいことがあるんだが、いいかい？」

任務へ向かうことが決定し、アンリエッタが退室した後、ギーシュはレイに話しかけていた。

「どうした？」

「いや、なんで僕が扉の前にいることが分かったのか気になってね」

「そうよね、なんで分かったの？姫様が来たことも分かってたみたいだし」

「あれだろ？どうせまた『気』なんだろう？」

「ああ、『気』は意外と便利だからな」

その言葉に、いや便利過ぎだろ、とか思っている中、なぜかタバサが否定をする。

「違う。レイがすごいから『気』も便利になる」

いや、単にレイがすごい、と言いたかっただけのようだ。

「いや、訓練すれば誰にでも出来るようになるさ」

「それでも、レイはすごい」

「そうか。ありがとうな、タバサ」

「いい。私は思っていることを素直に言っただけ」

周りを放って、二人で和み始めていたが、皆の視線が突き刺さり始めたので一旦ストップした。

ストップしたのを見計らって、サイトはレイに質問する。

「なあ、『気』が便利って言うけどさあ。結局『気』ってどんなことに使えるんだ？」

「『気』には、色々な使い道がある。例えば、人の気配を察知してどこに誰がいるかを把握する事が出来たり、『気』で探れば嘘をついているかどうかも見抜ける。さらに、大まかな感情を読み取ったり、戦闘に応用することも出来る。俺の使う『陸りくの型・夢幻分身』は、残像に『気』で実体を与えたものだ。怪我に『気』を流し込んで血を止めることも出来るし、戦闘に於いて『先読み』をする際にも大いに役立つ。他にも、戦闘局面ではかなりの応用が利く。まあ、

『気』は応用すればとても便利なものだということだな」

あまりの便利さに皆は呆れ、驚き、沈黙してしまった。(タバサはレイを尊敬して見つめているが)

『気』の便利さは異常なようだ。

.....『気』って便利過ぎないか？

アンリエッタの訪問（後書き）

魔法も、二刀剣舞も、魔剣の特殊能力も十分にチート能力ですが、汎用性においては、『気』の便利さは異常です（笑）

これからも『気』を便利に活用させていききたいと思っています。

任務開始！……なのに和む。(前書き)

今回、おまけ二つです。

一つは微妙なところがありますが、気にしないでください。

それでは、本文をどうぞ！

任務開始！……なのに和む。

翌日明朝。レイとタバサ、ルイズとサイトそして、おまけのギーシュに、何故かいるキュルケが校門の前に集合していた。

「なんでキュルケがここにいるのよ！」

「あら、私がどこにしようと思手じゃない？」

結局この二人は会えば喧嘩をするらしい。

喧嘩するほど仲が……「よくない！！」「……地の文にまで突っ込まないでください。」

なにはともあれ、この二人の言い合いはしばらく後にとりあえず終息した。

そのタイミングを見計らって、ギーシュが話し始める。

「お願いがあるんだが……」

キュルケとの言い合いで、少し不機嫌なルイズ答える。

「何よ？」

「僕の使い魔を連れていきたいんだ」

これにはレイが答える。

「連れて行く手段があるのなら別にいいぞ」

「いいのかい！？……ヴェルダンデ！お許しが出たよ！！」

ギーシュの声に、使い魔のジャイアントモール（デカイモグラ）が反応して地面から出てくる。

「ああ、僕の可愛いヴェルダンデ！」

可愛いかどうかはともかく、タバサがレイに質問する。

「あんなの、どうやって連れてくの？」

「さあな。…まあ、どうにかして連れて行くのだろう。それより、今回も手伝わせて悪いな」

「別にいい。…あなたの役に立ちたいから／＼／＼」

「そうか、ありがとうな」

結局、二人は和む。

で、その間に何故かルイズがヴェルダンデと戯れていた。それに気付いたレイが問う。

「…お前たちはなにをやってるんだ？」

「私が知りたいわよ！」

「どうやら、君の指輪に反応しているようだね。…ヴェルダンデは、いつも僕に必要な鉱石を集めてくれる！最高の使い魔だね！！！」

モグラを賞賛するギーシュに皆がひいていけると、遠くの方から風魔法がぶち当たり、ヴェルダンデを吹っ飛ばした。

「き、貴様何をするのだね?!」

ギーシュは、風魔法が放たれた方向に向かって叫んだ。

「すまないね、婚約者がモグラに襲われていたものだからつい…」
「ほう、ではお前はこちらに味方する者というわけだな？」

レイは意味ありげにニヤリとしながら、現れた人物に問うた。

「そう、僕は君たちの敵ではない。姫殿下より君たちに同行することを命じられてね。たとえ使い魔が凄そうだと言っても所詮は二人さらに守備力を高めたいけど部隊を連れてゆくわけにはいかない…。そこで僕が指名されたというわけさ」

「ルイズの婚約者というと、グリフォン隊・隊長、『閃光』のワルドだな？」

ここでも、レイの情報網は効果を発揮した。

「よく知っているね。君が、姫殿下が言っていた頭のキレル使い魔かい？」

「頭がキレルかは知らんが、形式上は使い魔ということになっている」

「名前を伺っても？」

「レイ・クロカミ。この先、よろしく頼む。……いろいろな意味でな」

「いろいろな意味？……よく分からないけど、改めて名乗ろう。ジヤン・ジャック・フランシス・ド・ワルド。グリフォン隊の隊長だ。よろしく頼むよ」

ギーシュは刃向かった相手が、グリフォン隊の隊長だと聞いて固まっているが、レイはいつも通りの態度で会話を交わしている。

この会話後、ワルドはルイズの方に向き直り、口を開く。

「久しぶりだな、ルイズ！僕のルイズ！」（注：ワルドとルイズの年の差は十歳近くあります。…ロリコンめ！……ゴホンツ、失礼）
「お久しぶりでございます」

ルイズはワールドに抱きかかえられながら答えた。
レイはその光景に呆れながらも、タバサに小声で話しかける。
もちろん、ルイズと話しているワールドには聞こえないようにだ。

「タバサ。今、あいつはあのように変態だが、実力は相当なものだ。
…そして、確実に裏切る。あんな野望に満ちた『気』だからな。そ
して、あいつはルイズを目的達成のための道具のようなものにし
か思っていないように見える。いつ行動を起こすか分かんが、注
意は払っておけ。…まあ、どちらにしろ大した問題ではない。せい
ぜい、どんな裏切りをするのか楽しみに待つておく程度でいいだ
ろ」

レイは、サラッと裏切りをわざわざ楽しもう発言をしているが気に
しない。

レイはワールドの裏切りを、ただの一つのイベントであるとしか思っ
ていないのだ。
タバサも気にせず続ける。

「そこまで分かるの？…やっぱりあなたはすごい」

「大したことないさ。それに、タバサは筋がいい。これくらい、そ
のうち出来るようになるだろう」

「ありがとう。頑張る。…それと、ちゃんと注意もする」

「悪いな。やはり、タバサが一番信頼できるからな。よろしく頼む」

「期待に応えられるよう、頑張る／＼」

二人がやっぱり和んでいると、ルイズたちの会話も終わったようだ。
ワールドがレイに問う。

「君たちの移動方法はどうするんだい？…私とルイズは私のグリフ
オンに乗るんだが」

「風竜がいるから心配するな。俺もタバサもキュルケもサイトも、ついでにギーシュも全員乗れる」

「ついでにとは、何気に僕の扱い酷くないかい?!」

復活を果たしたギーシュが抗議したが、皆にシカトされた。

その後は、そういえば!という感じで全員の紹介を終え、(キュルケ、ワルドを誘惑 『婚約者がいるから』 撃沈。という流れもあったが、気にしないでおう)それぞれの幻獣に跨る。

こうして、レイたち一行にワルドを加えた6人は、アルビオン行きの船が出ている、ラ・ロシエールに向けて出発したのだった。

お・ま・け　　↓道中にて↓

「ぐぬぬぬぬ」

「なんだサイト、嫉妬か？」

「別に嫉妬なんか…! だいたい、何に嫉妬するんだよ…!」

「ルイズとワルド隊長がラブラブなところに、じゃないのかい？」

「あら、サイトは私よりもルイズの方がいいのね?…うらやましいわあ(笑)」

「………使い魔の、敵わぬ恋」

「う、うるさい!」

サイト君は大いに嫉妬していましたとさ。

ラ・ロシエールでは、一番高級な宿の『女神の杵』というところに泊まることになった。

途中、盗賊による襲撃があったものの、レイによる『不可視の斬撃（弱）』によつて追い払った。（ちなみに、レイはこの時、この盗賊はワルドが雇ったものだど気付いていた。…が、あえて無視した）一階で皆がくつろいでいると、ワルドが船着場から戻ってきた。ちなみに、浮遊大陸にどうして船で行けるかという点、その船が風石という魔石によつて浮かぶからだ。この情報をサイトが聞いたときは、そりゃもうとても驚いていたとか。（現代人からすれば、船が空を飛ぶという現象は奇特だ。当たり前前の反応といえよう）

「アルビオンに向かう船は明後日にならないと出ないそうだ」
「そんな…。急ぎの任務なのに……」

ルイズは落胆しながら呟いた。

「あたしはアルビオンには行った事がないのだけど、どうして明日はどうして船が出ないの？」

「明日は月が重なるだろう？その翌日の朝、アルビオンが最もラ・ロシエールに近づくんだよ」

ということとで、一同は船が出る日まで『女神の杵』に滞在することになった。

「さて、じゃあ今日はもう寝るとしようか。部屋は取った。ミス・キユルケとミス・タバサの相部屋、レイ君とサイト君、ミスタ・ギーシュの相部屋、そして僕とルイズの相部屋だ」

「…異議あり」

タバサがいきなりワールドを止める。

やはり、ワールドとルイズを二人だけにするのは危険だと……。

「どうしたんだい？」

「レイと私は相部屋」

…思わなかったようだ。

ルイズとワールドの相部屋が防げる！タバサありがとう！とか思っていたサイトは、プロの芸人もびっくりなほどきれいにズッコケる。

……完全にシカトされていたが。

「でも部屋は三つしか…「お金はある」……じゃあ、レイ君とミス・タバサは相部屋、ミス・キュルケは一人部屋でもいいかい？」

「それがいい」

「俺が抗議しても無駄。…するつもりもあまりないがな」

「私もそれがかまわないわ。というか、タバサもよっぽどなのね」

「もうレイがいないと眠れない」

「…本当に相当なのね」

「相当とは何がだ？」

「……他のところは無駄に鋭いのになえ」

朴念仁のレイはさておき、サイトの不満が残るものの、部屋割りはこれで決定した。

夜。サイトは必死にルイズとワールドの部屋を覗こうとしていた。

ちょうど通りかかったレイとタバサはひきながらも近づいていく。

「…サイト。さすがにそれはないぞ」

「みつともない」

さらにちょうど通りかかったギーシュ。

「…君は本当にルイズのことが好きなんだね」

「ち、ちげえ！」

「なら、何故覗いていた？」

「みつともない」

「…気になるんだよ」

何気にタバサ、『みつともない』連発だ。

さらに、空気状態だったデルフも会話に参加する。

『ケケケ、情けねえな。つか、少しはオレっちにも構いやがれ！』

「みつともない」

タバサさん。やめてあげてください。

そして、さらに通りかかったキュルケ。

「あら、何やってるの？…覗き？…ダーリンには私がいるじゃない」

そしてサイトに後ろから抱きつく。

…タイミングが悪いことに、ルイズが中から出てくる。

「サイト、まあ何とか生きて戻って来い。…《テレポーター》ション！」

レイ、タバサの姿が薄れていき、消えた。

「僕もこれで失礼するよ」
「じゃあね、ダーリン」

ギーシュ、キュルケも走って去っていった。
そして…。

「さっきは一体なにをやっていたのかしら？…ツエルプストーと」

この先はお見せ出来ません。音声だけでお楽しみください。

ドゴオ、バキイ、グシャ、ゴスツ、ドガーン！！

哀れ、サイト。

お・ま・け　　～レイとタバサの部屋にて～

「ハア。サイトのギャグ補正に着いていけないな。あれほどタイミングよく…いや悪くか？…とにかく、あんなタイミングでルイズと鉢合わせるとはな」

「それがあの人。…あと、みつともなかった」

タバサさん、やめてあげ（以下略）。

「そうだな。…まあ、いい。今日はもう寝てしまおう」

「分かった。…今日もノノノ」

「抗議の意味などないのだろうか？」

「…イヤなの？」

「…そういうわけではない」

「よかった」

結局、二人はここでも一緒に寝た。
実に平和な二人組である。

任務開始！……なのに和む。(後書き)

緊張感ゼロですね(笑)

まあ、そう出来るだけの実力も持ち合わせているんですが。

次回、またもや例の存在が…！？

それは無情であり……。 (前書き)

ついに、例の存在がレイたちを襲います！

では、本文をどうぞ！！

それは無情であり……。

翌朝。レイ、タバサ、サイトが修練を終え、宿に戻ってくるとワルドがいた。

「どこに行ってたんだい？」

「少し修練にな」

「ほう。ガンダールヴの修練か。興味があるな」

「ガンダールヴに用があるのか？ならばガンダールヴはサイトだ。

俺たちに用はないな。部屋に戻らせてもらおう」

「私も」

レイはワルドの相手をするのがめんどくさくなったようだ。

タバサと共に帰ろうとする。

が、ワルドに呼び止められた。

「いや、君にも用がある。なんせ、姫殿下に凄いとわしめる程の実力らしいからね」

「俺は王女の前で力を見せたつもりはないんだがな。…それで？」

「ああ、少し手合わせをして欲しくてね」

「弱いヤツに興味はない。…サイト、お前がやれ」

「お、おう」

グリフォン隊の隊長に向かって弱いと言うレイは相当図太い。

…まあ、実力的にはその通りなのだ。

そんなことはともかく。こうして、二人は試合をすることになった。

そして、レイは部屋へ戻ろうとする。

が、またもワルドに止められる。

「待つてくれ。せめて審判をしてくれないか？」

「……いいだろう。だが、サイトが危なくなれば、容赦なく止めるからな。その場合はただの怪我で済むと思うなよ？」

「…あ、ああ。分かっているよ。あくまで試合だからね」

レイから向けられた殺気に（レイにとっては微弱な）ワルドは冷や汗を流しながら答えた。

ちなみにレイだが、言われなくとも結局はこの試合を見守るつもりだった。

何気にサイトが心配だったりするのだ。…もちろん、そんな内心の危惧を覗かせることは滅多にないが。

試合が出来るような広場に移動し、サイトとワルドが間合いを取る。

「では、始めっ」

レイの声と同時にサイトがデルフを引っ掴んでワルドに肉薄する。それと同時にルイズが宿から出てきた。

「これは何やってるの？」

「試合だ」

「言い換えると、あなたの取り合い」

「えっ???!」

ルイズは何か言いたげな表情をするものの、じっと試合を見つめる。

しばらく、サイトの剣とワルドの杖剣が交差するが、やがてサイトが押され始める。

やはり、修行を始めたといっても…そしていくらガンダールヴだと

いっても、所詮は戦闘初心者だ。まだ、隊長として経験を積んできたワルドには敵わないようだ。しかも、まだワルドは全力を出していない。未だに、魔法を使っていないのだ。

そして、とうとうサイトは弾き飛ばされ、負けてしまった。

「君ではルイズを護れない」

サイトにとって、これほどつらい言葉はないだろう。

『うわあ、負けちまったなあ、相棒』
『うるせえ』

『まっ、相手は隊長クラスだ。ガンダールヴとはいえ、昨日、今日剣を握ったようなヤツじゃ勝てる相手じゃなかったってこった』

「そうだ、サイト。さらに修練を積みばいいだろう？…お前にはちゃんと剣の才能があるんだ。こんなところで諦めるな」

「そう。あなたはやれば出来る。…たぶん」

それぞれサイトを慰める。…タバサは微妙だが。

「ああ、そうだよな。頑張ってみるよ！…でも、今日だけは一人にしておいてくれ」

サイトはそう言い残して去っていった。

ルイズは呼び止めようとするが、言うべきことが見つからず、黙ってしまった。

ちなみにキュルケだが、現在は爆睡中である。

その日の夜。サイトは月を見ながら黄昏ていた。

ちなみに、レイとタバサは自分たちの部屋にいて、キュルケとギーシュは酒を飲んで騒いでいた。

サイトのもとにルイズが近寄っていく。

「サイト、負けたくらいで泣かないでよ」

「違う。帰りがかったんだ。地球に。日本に」

「悪かったとは思ってるわよ」

「どうだか。犬扱いのくせに」

「仕方ないじゃない。私は貴族なんだから。外聞とかも気にしないとダメなのよ」

外聞を気にするなら、犬扱いはないんじゃないだろうか？
そんなことを考えながら、サイトは呟く。

「ハア、帰らせてえよ。もうこんな所にはいたくねえ」

「何よ、私だって迷惑よ」

「なら探せよ、俺の帰れる方法」

実際はレイの魔法で簡単に帰れるし、戻ってこられますけどね（笑）
そんなことは知らずに会話は続く。

「この任務が終わったら探してあげるわよ」

「どうだか」

「貴族は嘘をつかないわ」

「もし、俺が帰れなかったらどうするんだよ」

クドイようですが、いつでも帰れます。

「私が面倒みてあげるわよ」

「結婚しても？」

「結婚は関係ないじゃない」

「いいよな、お前みたいなのでも、もらってくれる人がいて」

「なによ！あんただってキュルケに好かれてるじゃない！………
とにかく、ハルケギニアにいる間は私の使い魔なんだから。ちゃんと働いてよね」

サイトはしばらく沈黙した後には答える。

「嫌だね。ワールドに護ってもらえよ」

「呆れた。まだ気にしてるの？レイたちだって、修行すればいいって言ってたじゃない」

「それはカンケーない」

「全く。あんたは私の……誇り高きラ・ヴァリエール家の使い魔なんだから、その程度のこと乗り越えなさい。そして、ワールド子爵を倒してみせなさいよ」

また、サイトは黙ってしまふ。

「……分かったわよ。ワールドに護ってもらおうわ」

「好きにしるよ」

「あの人、頼りがいがあるから安心ね。使い魔なんかじゃなくて、あの人に護ってもらおうわ。……私、正式にワールドと結婚することにするわ」

サイトは答えない。

二人して意地を張り合い、話はどんどんもつれていく。

パチンツ！と音がする。

ルイズがサイトをはたいたのだ。

「意気地なし！あんななんか、そこで一生月を眺めてればいいわ！」

二人の間に沈黙が広がる。

そして、ルイズはその場を去ろうとする。

…が。

ドゴーン！！

大きな爆砕音が響き渡る。

そこにいたのは、いつかのマチルダのゴーレムよりもさらに巨大で、全身が金属製のゴーレムと、その巨大な肩に乗る、金髪碧眼の青年だった。

「お初にお目にかかります。私の名はアシエル。第二魔法師団長という職業に就かせてもらっています。『魔法師団』という名を聞けば分かると思いますが、魔族です。…以後、お見知りおきを」

ゴーレムの上から話しかけるアシエルは、完全なる無表情だった。

「おい、どうすんだよ！魔族なんてレイ以外渡り合えるわけないじゃない！」

「しし、知らないわよ！あんな伝説なんでしょ！？なんとかしなさいよ……！」

「うるせえな！伝説とは言っても、所詮はただの高校生なんだよ！」

『相棒！言い合いは後にしてくれねえか？！ヤツにやられるぞ！』

デルフの声に二人はハツとなってアシエルの方を窺う。

「続けてくださって結構ですよ？私のここでの仕事はガンダールヴの足止めなので。……ですが、逃げようとしたら容赦はしません。なので逃げないでくださいね？私はルナルトのように殺人を楽しんでいるわけではないのですから」

…無表情で言われても、嘘を言っているようにしか聞こえないところが怖い。

そして、その恐怖に負けてしまったルイズは走り出す。

これを放っておけば、攻撃はされなかったのだろうが、サイトはルイズを追いかけてしまった。

「そうですか。そんなに殺されたいのですね？……我がゴーレム『ルシファー』。やりなさい」

アシエルがそう告げると、『ルシファー』が有り得ないほどの速さで腕を振り下ろそうとする。

ブンツ！！そんな音がサイトたちの鼓膜を破る程までに一瞬で近づき、二人は死を覚悟した。

だが……。

……激しい衝撃音は聞こえるのに、いつまで経っても二人に死は訪れなかった。

「さすがにこいつはお前たちの手に負えないだろう？一応、助けに

来てやったぞ」

「レイ!!!」

レイだ。巨大化させた双魔剣を交差させ、『ルシファー』の腕を防いでいたのだった。

「ほう。あなたがレイさんですか。あのルナルトを倒したという。…申し遅れました。私の名はアシエル。一応、第二魔法師団の長などをやらせてもらっています」

やはり無表情でレイに話しかけたアシエル。

「『無情』のアシエルだな？どうやら、マチルダが仕入れた情報は本当だったらしいな。金髪碧眼のとてつもなく強いヤツが、レコンキスタに入ったという、な。…まあいい。とりあえずサイト。前はルイズを連れて宿一階に戻れ。そこが傭兵の一団に襲われているから助けてやれ。タバサを残してきたから大丈夫だろうが、念のためな」

レイは双魔剣をブンツと一振りして元の大きさに戻しながら、サイトに早口で告げた。

「まあ、私もレイさんほどの強者を止められたのなら、それで充分でしょう。…ガンダールヴは見逃します。どうせ取るに足らない相手ですしね」

サイトたちはこの言葉を背に、この場を去って行った。

「さて、何故魔族が人間の組織に肩入れしているのか、気になるところではあるが、さっさと始めよう。…俺も宿に戻りたいのでな」

「いいでしょう。ルナルトを倒したあなたに私が勝てるとは思いませんが、せいぜい頑張らせていただきましょう」

こうして、早くも魔族 v . s . 人間（天然チート）の戦いが再現されることになったのだった。

一方、宿一階に戻ったサイトたち。

酒場になっている一階は、傭兵とタバサたちの戦いで騒擾そわごわの渦に巻き込まれていた。

タバサたちが応戦しているが、多勢に無勢だ。少し押されかけていた。

「よしっ！一気に行くぞ！デルフー！！」

『おうよっ、相棒っ！！』

サイトが傭兵たちにつっ込んでいく。

タバサとキュルケも、これに合わせて魔法の規模を大きくしていく。防衛戦から、殲滅戦へと移行したのだ。

雪風魔法・氷鏡

一階の至るところに氷の板ができて、映りこんだタバサに実像がもたされる。

そして、一斉にウィンディー・アイシクルが放たれ、傭兵たちを次々と負傷させてゆく。

隣ではキュルケが炎の嵐を巻き起こしているし、ギーシュのワルキユーレも特攻に転じている。

最初につっ込んだサイトも、鬼のような戦いぶりを見せ、ルイズの爆発魔法も唸る。

そして、極め付けにスクエアであるワルドの風がどんどん敵の数を減らし、とうとう傭兵の中で立ち上がる者はいなくなった。全て殺さずに気絶させただけであり、意外にもかなりの余裕があった。

「ふう、なんとかなったな。魔族の方はレイがなんとかするだろうし、船着場へ向かおう」

サイトが皆にそう話しかけた時、いきなり雷の落ちるような音が耳をつんざき、サイトがぶつ倒れた。風系統からの派生魔法、ライトニング・クラウドがサイトにぶち当たったのだ。魔法が飛んできた方向には、白い仮面をつけた男。そして、それもすぐに去って行ってしまった。

その後すぐ、サイトの意識は闇に落ちた。

状況は戻って、レイたちの戦い。

レイは二刀剣舞も魔法も使わずに『ルシファー』を圧倒していた。そして…。

『ルシファー』が、高速で振り回されたレイの双魔剣によって、コアごと粉々に切り刻まれた。

「本当に驚きですね。人間がここまでの力を手にするとは。実は、レイさんがルナルトを殺したというのはなにかの間違いだと思っていたのですが……実際は本当に倒していただのですね。なかなか侮れません。……というわけで、私はここで退かせていただきます。単純な戦闘では、ルナルトにも勝てない私があなたに勝てる道理などありませんからね」

アシエルは未だ無表情でそう告げた。

「好きにしる。お前の本気は、また今度の楽しみとしておく」
「そうですか。……では、またの機会に」

アシエルの姿は薄れていき、消えた。

それを見届けたレイは、後ろを振り返ってこの場を去ろうと動き出した。

そして、いきなり出現した………アシエルに心臓を刺され、
辺りは血の海と化した。

それは無情であり……。 (後書き)

レイのピンチ part 2 ですね。

さて、次はどうなるのでしょうか。

意外とあっけないかもしれませんが、次回をお楽しみに！

黒の世界は幻想の闇 (前書き)

とうとう、20000ユニークアクセスを突破いたしました!!

これも、今まで根気強く読んでくださった皆様のおかげです!!

これに満足せず、精進していこうと思いますので、これからもよろしくお願ひ致します。

今回は、今まで出てきた魔族の説明も入れさせていただきます。

それでは、本文をどうぞ!

黒の世界は幻想の闇

「油断しましたね。魔王様から授かった私の本当の任務は、私たちの計画の妨げになるほどの人間の抹殺　　つまり、人間の身でありながらあのルナルトを倒したあなたを殺すことこそが、私の目的だったのです」

誰もいないその場に、アシエルの声が小さいながらも響き渡った。なんの感情も宿っていないアシエルの碧眼には、横たわるレイの体から血がドクドクと流れ出している様子が映しだされている。

「ですが、意外にもあっけなかつたですね。まさか、こんな簡単な罠にひっかかるとは思ってもみませんでしたよ」

アシエルはたんたんと言葉を紡ぎ続ける。

「魔王様も、人間など捨て置けばよいというのに……物好きでいらっしやる」

アシエルはなぜか感じる不安を振り払うかのように話し続けていた。普通、死人しかいないこの場面で独り言などしない。

だが、なぜか止められないのだ。

この不安は……焦燥感は一切なんなのだ、と思っていると、目の前にあるレイの死体が急速に色を失っていき、グニヤリと歪み、消え去った。

そして、視界も全く別の物に変わってゆく。

周りには黒。黒の一色。

動いているようで静止している。叫び声が聞こえるようで耳が痛い

ほどに静かだ。

かと思えば、やはり動いているし、叫び声が耳をつんざく。それでも、ここは安定しない。変わらないのは黒一色しか目に映らないというこの状況のみ。

「ようこそ、第二魔法師団長・アシエル。ここは俺の創りだした小世界。名前など無いが、強いて言うのなら『ナイト・ワールド』。永遠の闇に閉ざされる幻想の世界だ」

アシエルの耳に静かなレイの声が響いてきた。

しかし、レイの姿を確認することは叶わず、気配ですら一ミリたりとも感じる事が出来ない。

「こんな世界に閉じ込める力を持っているなんて……人間もなかなか侮れませんね」

「お前たち魔族の最大の弱点は、自分たちこそ最強であるという驕りだな。その驕りが自然と自らの弱みを見せてくれる。ルナルトはそれが顕著だったが、お前にもそれは当てはまる。…あんなレベルの低い罠にひっかるわけがないとは考えなかつたのか？」

「もしかしたら、こういう状況になるのも私の計算通りだったのかもしれないよ？ここから一気にあなたを打ち負かす方法を用意しているかもしれません」

アシエルは、レイの声にも動揺せず言い返した。
だが…。

「気付いていないのか？…ここは死者の世界でもある。単に閉じ込められたわけではなく、いわば死んだお前の魂をここに連れてきたようなもの。お前はすでに、俺によって殺されているということだ。そして、ここでお前の魂を消し去れば、お前の存在は完全に消える。

「お前に俺を倒す術はない」

レイの言葉に一瞬ギョツとしつつも、アシエルは話を続ける。

「嘘……ではなさそうですね。しかし、勘違いしないことですね。

私のように、何にも無関心な者ではありませんが、ルナルトのように強い執念を残した魔族には“新しい道”も残されているということ。魔族は、死んでも輪廻転生の環に戻るわけではない、ということですよ。…この可能性を潰すには、灰すら残さずに完全に消し去るしかないのです。まあ、この方法でなら完全に消し去ったことになるでしょうが」

「……何？新しい道…だと？」

レイの動揺したような声を聞き、アシエルは少し微笑む。…思えば、アシエルは初めて真の意味で微笑んだのかもしれない。それも永い人生を通して。

自身の心を殺しているうちに全ての感情をいつの間にか失くしていた。そんな今までのことを思いながら続ける。

「フフツ、あなたの焦る声が聞けるとは…情報を公開したかいがあったようですね」

そう言った後、しばらく口をつぐんで、また話を続ける。

「…さて、私はもう死んでいるのでしょうか？そろそろ私の存在を消してください。…願わくは、私の魂が輪廻転生の環に戻らんことを」

レイは何も答えずに、トドメをさした。

全ての黒がアシエルを包み込み……やがて消えた。

全てが終わったこの場には、レイただ一人が残されている。

「……お前の魂はちゃんと輪廻転生の環に戻るさ。死んだら皆、平等だ」

レイの独り言は、誰に聞かれることもなく、いつの間にか白み始めていた空へと吸い込まれていった。

サイトが目を覚ましたのは、ベッドの上だった。

目の前には見知らぬ天井。ベッドの隣にはルイズがいる。

「サイト！よかった！！目を覚ましたのね！！」

「あ、ああ。なんとかな。……でさあ、ここはどこなんだ？」

「ここは船の上よ。レイを待つつて言ったタバサとキュルケ以外は皆ここにいるわ」

「そっか。で、俺はなんで倒れてたんだっけ？」

「覚えてないの？白い仮面の男に『ライトニング・クラウド』でやられたのよ。…ホント、無事でよかったわ」

ルイズが答え、サイトは、なんか俺って結構危なかったんだなあ、とか思っている、遠くの方から声が聞こえてきた。

そしてギーシュが、サイトたちがいる部屋に入ってきて一言。

「たた、大変だ！く、空賊だよ！！」

結局サイトは、たくさんのめんどくさいイベントに巻き込まれることになるようだった。

場所は変わって、魔族v.s.人間が繰り広げられた場所であればらく立ち止まっていたレイだが、そろそろ行かなくてはと思い、宿へと転移した。

未だ早朝の宿はとても静かだった。

昨日の戦鬪の形跡はほとんど消えている。

一階には誰もおらず、タバサとキュルケは同じ部屋で眠っている。

「タバサたちには迷惑をかけてしまったな」

魔族と戦ったレイの方が明らかにキツかったはずだが、そんなことなど微塵も思わせない口調で一人、呟いた。

その後、レイは疲れた体を癒すために寝室へと向かい、体を清めた後に、仮眠をとった。

そして時間は経ち、キュルケが朝起きると、タバサがうなされていった。

「この子…毎日こんなにうなされているのかしら？……本当に昔、なにがあっただんでしょね…」

キュルケは、タバサの過去については何も知らない。

だが、なんとなくおかしいとは思っていたのだ。

そして、うなされているタバサの髪を指で梳きながら呟く。

「水臭いじゃない。私に相談してくれればいいのに。まあ、言いづらいでしょうけどね。……でも、せめてレイにだけは相談した方がいいわ。あなたの好きな人はとっても強いんだから」

レイという言葉聞いた途端、タバサの寝息が穏やかなものに変わっていった。

「フフツ 本当にレイのことが好きなのね。確かに、あなたがレイのことを好きじゃなかったら、私も確実に手を出していそうなくらいすごいものね。ある意味当然だわ。……さて、そろそろレイも帰ってきてるだろうし、呼びにいこうかしらね。……タバサ、あなたの王子様を呼びにいつてくるわね」

キュルケは、最後はふざけたように言い残し、部屋を出て行った。

レイが仮眠をとっていると、部屋の向こうからキュルケの気配が近づいてきているのに気付き、目を覚ました。

魔法で素早く普段着に着替え、レイはキュルケに先んじて扉を開ける。

「うわっ、レイ！いきなり扉あけたらびっくりするじゃない！……って、そんなこと関係なくて、タバサがレイをご指名だったわよ」

「まだ寝ているのではないか？」

「うなされていたのよ。……やっぱり過去に何かあったのかしらね。レイは聞いていないの？」

「ああ、まだ聞いていない。……だが、人の過去は詮索していいものじゃない。俺はタバサが話す気になるまで待つさ」

レイはそう言いながら歩き出し、タバサたちが眠っていた部屋へと

向かった。

部屋に着いたレイは、とりあえずノックしたのち、中に入った。後ろからはキュルケも着いてくる。

タバサは、またもやうなされ始めていた。

それを見たレイは、躊躇なくタバサの方へ近づき優しく声をかける。

「タバサ、大丈夫だ。俺がついている。…何も不安なんてないからな」

タバサはその声を聞いた途端にガバツと顔を上げ、レイを見て、いきなり抱きついた。

「…起きたか。おはよう、タバサ」

「……おはよう／＼／＼」

レイは挨拶しながらタバサの髪を梳く。

タバサは顔を赤らめて挨拶を返す。

そして、かなりの疎外感を感じたキュルケが、この事ではらく二人をからかい続けるのはまた別の話。

・第二魔法師団長『無情』のアシエル

本名、アシエル・ノード・セティス。

金髪碧眼のおだやかな青年に見える。だが、その実体は『無情』。

その表情からは、一切の感情も感じ取ることは出来ない。

自身が生きてきた永い時の流れの間に、任務遂行のために感情を封じ込め過ぎたことにより、感情そのものが希薄になっている。

無駄を嫌い、なんでも効率的に事を進めようとする。

魔王から受けた任務を遂行するためには、どんな卑怯な手を使うことにも躊躇わない。

魔族として虚ろに生きていくことに疑問を感じ始めており、新しい生を受けることを望んでいた。

・第三魔法師団長『崩壊』のルナルト

本名、ルナルト・フォン・マーフィン。

ライトブラウンの髪に、同色の瞳。

精神は崩壊しており、会話が成り立たないこともある。

“物”や“者”を壊すことに快楽を得ている。

得物は、深紅の魔力を纏う魔鎌。特殊能力は、ひたすらに持ち主の身体能力を上昇させること。

上位魔族として、自身の力を信じて疑わず、魔王以外に自分を倒せる者はいないと思っていたが、先日レイに殺られた。……………

しかし、アシエルが言うには、ルナルトには『新しい道』が残されているらしい。『新しい道』というものが何を指すのかは、未だに分かっていない。

魔法師団長について。

魔法師団は全部で十団あり、それぞれ上位魔族と呼ばれる、魔族としての力の限界を突破した存在が長を務めている。

魔族は絶対数が少ない代わりに、一人一人の生命力が異様に高いのだが、上位魔族である『魔法師団長』たちの力はその遙か上をいく本来、人間では手も足も出ないような存在である。

『魔法師団長』たちの平均年齢は、500歳程。この寿命の長さは、別に『魔法師団長』だからというわけでも、上位魔族だからというわけでもなく、単純に魔族たちは寿命が長いためである。

また、魔族たちの中では、未だに寿命で亡くなった者はおらず、正確な寿命は分かっていない。

補足だが、魔族たちは繁殖能力がとても低く、気性が荒いせいで殺しあつて数を減らしてしまうこともあり、この先、魔族たちの数が増える可能性は低い。

黒の世界は幻想の間 (後書き)

これからも魔族は登場してきます。

魔族たちの狙いとは、ルナルトの言っていたように、本当にハルケギニアの破壊なのでしょうか。

そして、ルナルトに残された『新しい道』とは……………。

……………と、盛り上げてみましたが、どうでしょうか？

この先の展開に期待していただければ幸いです。

『死の先に待っているのは何か分かるか?』 (前書き)

今回、レイの過去がほんの少しだけ明かされることになります。

完璧に見えるようで、レイにだって人間らしい脆い部分があります。

それを乗り越えて強くなってゆくのです。

それでは、本文をどうぞ！

『死の先に待っているのは何か分かるか？』

結果 サイト君たちは空賊に捕らえられました。

ワルドは風石の足りなかったこの船を浮かすために魔法を行使し続け、精神力が切れて戦えない。そして完全に船を乗っ取られている。皆、腕を拘束され、メイジは杖を取り上げられて、船内の一室に閉じ込められているのだ。

しばらくして、空賊が一人入ってきて一言。

「お頭がお呼びだ。着いて来な」

抵抗することなく、ルイズ、サイト、ギーシュ、そしてワルドの四人は、その空賊の後を着いていった。

船長室には、空賊の頭と思わしき人物と、護衛が何人かいた。頭は、意外と静かに口を開く。

「お前たち。アルビオンへ何しに行くつもりだ？あそこは今、戦争中のはずだが」

「誰もあんたなんかには教えないわよ」

サイトは思う。……ルイズ。お前空賊相手にそんなこと言って……死にたいの?!と。

ワルドは精神力が枯渴したことによる疲労のせいか、何もせず目を閉じているし、ギーシュは青ざめてガクブル状態だった。

そんな思いや状況とは関係なく、会話は続く。

「お前たち、後悔するぞ？なんだったら、俺たち貴族派に入れてやつてもいいんだぜ？」

「ふざけないで！あんたに従うくらいなら死んだ方がマシよ！それに私たちはれつきとした王党派なの！私は大使として…トリステイン代表としてアルビオンに向かうのだから、大使としての扱いを要求するわ！」

…やはりルイズは死にたいらしい。

ここでこんな真つ正直に言えば、普通の空賊ならすぐ殺すだろう。なんと言つても相手は抵抗不可の貴族なのだ。人質として生け捕りにすれば、身代金を要求するなど、かなりの利益が得られるはず。殺さない方がおかしい。

お頭がゆっくりと近づいていく。

そして…。

ルイズとお頭の間の空間がグニヤリと歪んで、三人の影が浮かび上がった。

「待たせたな。アシエルの方は片付けて…おいた…ぞ？」

レイの言葉は最後に遅くなっていき、思わず疑問系になってしまった。

そして、眉をひそめながら続ける。

「なにをやっているんだ？何故、縛られている？…もしかしながらも新手的…」

「それ以上言わなくていい！！うん、ホント、惨めになるからやめて！…ってか、そんな場合じゃなくて、今にもやられそうだって分

かるだろ？見るよ、ギーシュとかマジでガクブル状態だから！そして俺も結構それに近いから！！」

そしてキュルケも口をはさむ。

「確かに見れば分かるかもね。…その空賊っぽい人たちに殺されそうになってる？」

うんうん、と激しく首を振るサイトとギーシュ。

未だになにやら喚き散らしているルイズと、目を閉じているワルド。そして、心底意味が分からないという顔をするレイとタバサだった。

「空賊なんて、どこにもいない」

「それらしく振舞っている貴族共はいるがな。俺が思うに、こいつらはおそらく王党派。……なのに何故、怖がる必要がある？」

レイはそう言いながら頭(?)に近づき、髪の毛をつかんで引きちぎった。

一同(タバサ以外)、え?!とした顔になる。

なぜなら、引きちぎられたかと思われたその髪はカツラ。そして、中からは流れるような金髪が姿を見せたからだ。

「どうやら、噂の皇太子、ウェールズらしいな。…まあ、予測通りではあるが」

「…なんで分かったんだい？」

ウェールズ(元・頭)は、通常の言葉に戻して、レイとタバサに訊ねた。

「あんな分かり易い演技が、俺とタバサに通用するとも？」

「纏っている雰囲気、完全に貴族。……演技下手」

船長室に、気まずい空気が流れた。

しばらく後、気を取り直して、ウェールズは語りだす。

「先ほどは失礼した。私はアルビオン王立空軍大将、本国艦隊司令長官……そして、アルビオン王国皇太子、ウェールズ・テューダーだ」

どうやら、改まって自己紹介したつもりらしい。

「おい、ルイズ。こいつが任務のキーだ。さつさと事情を説明しろ。

「なんで私なのよ!」…はあ、大使はお前だろう? 交渉を一介の使い魔に丸投げするな」

「…でもレイの方がそういうの上手そうよね」

キュルケさん。その一言は要らないと思います。…おもにルイズの機嫌的に。

しかし、幸いルイズは事情の説明に気を取られてそれどころではなかった。

「私はトリステイン王国大使のルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールです」

「ほほう、あの有名なヴァリエール家の方か」

「ご存知でしたか。光栄です。そして、用件はこの手紙に記してあります。お読みください」

しばらく沈黙して手紙を読み、ウェールズは話し出す。

「用件は分かった。：確認のために『水のルビー』を見せてくれるかな？」

ルイズは『水のルビー』を差し出す。

そしてウェールズは自身の持っていた指輪と『水のルビー』を合わせる。

すると、その間にきれいな虹が出来ていた。

「アルビオンの秘宝、『風のルビー』とトリスティンの『水のルビー』を合わせると、こういう現象が起こるんだ。これで君たちの言っていることが正しいことが証明された。……大したおもてなしは出来ないが、アルビオンへようこそ。最後のパーティーには是非参加して欲しい」

こうして一同は、手紙を返してもらい、パーティーに参加することになった。

「諸君！忠勇なる臣下の諸君に告ぐ！いよいよ明日、反乱軍レコンキスタの総攻撃が始まる。今まで、よくぞこの無能な王に従い、戦ってくれたな！感謝するぞ！……さて、今日は最後のパーティーだ。大いに楽しんでくれ！」

パーティーは、アルビオン王の口上から始まった。

皆が騒ぎ始める中、レイはウェールズのもとに近づいていった。（タバサ付属：てか、タバサは離れようとしな）

「ああ、君か。ラ・ヴァリエール嬢の使い魔の一人だね？…しかし、人が使い魔とは珍しい。トリスティンは変わった国だな。…それとそこにくっついてるのは？」

最初にウエルズがレイに話しかけてきた。

そして、レイはムツとしながら訂正する。

「…まず、最初に言っておくが、俺は使い魔ではなく、使い魔“もどき”だ。そして、俺からすれば変わっているのはトリスティンだけではない。……………くっついてるのはタバサだ。ちなみに、俺の名はレイ・クロカミ。よろしく頼む」
「タバサ。よろしく」
「そ、そうか。こちらこそよろしく」

タバサの状況にちょっとひき気味だが、ウエルズは続ける。

「それより、さっきのはどういうことだね？」
「もどきというのは、契約は交わしていないということだ。そして、変わっているのはこの世界だ。もう600年以上も文明の発達が見られないのだろう？…俺からすれば、これは奇異でしかない」
「ほう、なかなかおもしろい持論だね」
「そうでもないさ。…………時にウエルズ」

レイはここで一旦、話を区切った。

……………どうでもいいが、皇太子をいきなり呼び捨てとは、相変わらず傲岸不遜なヤツだ。
しかし、タバサが腕にくっついているため、いつもと比べれば、あまり威厳がない。

「なんだい？」

「この国にもう勝ち目は無いのだろう？俺の仕入れた情報では、王党派500に対し、貴族派50000だ。…単刀直入に言うが、亡命する気はないか？」

「僕の身を案じてくれるのか？君は優しいな」

「はぐらかそうとしても無駄だ。…そこまで死にたいのか？」

レイはいつもより、冷たく凍てついている表情でウェールズに問う。

「僕は荣誉ある敗北のために…」荣誉ある敗北だと？ふざけるな。

お前はなにも分かかっていない」…なに？」

レイは構わず続ける。

「死の先に待っているのは何か分かるか？　それは『無』だ。何も存在しない。負けて死んでも、それは何も生み出さない。今回の戦で皇太子のお前が死ぬことは、無意味で、無謀で、無価値だ。そして、残された王女に残るのは、果てしない絶望だけ…。……お前と王女は恋仲なのだろう？なら、そんなあいつの心を裏切るな。恋人を失うのは……存外つらいものだぞ？」

しばらく、沈黙が広がる。

「君は…恋人を亡くしたことがあるのかね？」

「さあな」

しかし、レイの言葉はそっけない。

ウェールズは、なにか考え込むようにして動かない。

「…俺らしくもなく、感情的になってしまったようだな。最後の部

分は忘れる。…そして、王とはどう在るべきか、考えるんだな」

レイはそう言い残し、去って行ってしまった。

ウエールズが、王とはどう在るべきか？どうすべきか？…それはどういうことなのか。皆と一緒に散ることではないのか？…そう考えていると、目の前には未だにタバサが立っていた。

「どうしたんだい？」

「……レイの言葉はいつもの的を射ている。それは今回も同じ。…よく考えて行動して」

タバサは早口でそう言い残し、またレイの腕にくっつきに行った。

残されたウエールズは一人、呟く。

「よく考えて、か。…僕はこの先、どう在るべきなのかな」

その後、ルイズやサイトたちにも亡命を勧められたのだが、全て『もう少し考えさせてくれ』と返した。

レイの言葉を思い出すと、自分はどうするべきなのか、分からなくなってしまうのだ。

自分の中では“ウエールズ”として在るのならアンリエッタのために亡命すべきだと思うが、“皇太子”として在るなら、皇太子の責任を持って、この国と一緒に散るべきだと思っていたのだ。

しかし、レイの言葉では、王としてはその答えは正しくない、というものだった。

「はあ、本当に僕はどうすればいいんだろうね…」

ウェールズの言葉は、敗北の宴という歪な騒ぎの渦にかき消された。一方レイたちは、一足先に割り当てられた部屋に戻ってきていた。…もちろん、一人に一部屋を用意されていたのだが、タバサのたつての希望によって同室になった。

しばらく、二人は居心地のいい沈黙の中で本を読んでいたのだが、タバサが突然話しかける。

「レイ。…昔、恋人を亡くしたというのは本当？」

どうやら、レイのあの発言をかなり気にしていたようだ。

「…ああ、本当だ」

レイの言葉はいつもより弱々しいものだった。

そして、レイは続けようとする。しかし…。

「待って。それは前、あなたが言っていた、昔話につながる？」

タバサが止めた。

「ああ」

「なら、今はまだ話さなくていい。…学院に帰ったら、私も話したいことがある。その時に話して」

「分かった。…気を遣わせて悪いな」

「いい。それは私も同じだった」

レイは何気ないタバサの優しさを感じながら、言葉を続ける。

「そうか。ありがとうな。……さて、そろそろ寝ることにしよう」
「分かった。……でも、今日はあなたが抱きしめて／＼／＼」
「……拒否権は「ない」……だろうな。……俺としても異存はない」

こうして、今日はレイがタバサを両腕で包み込んで寝たのだった。

『死の先に待っているのは何か分かるか?』 (後書き)

レイの過去はかなりキツイものになるでしょう。

その全容は、もう少し先で明かされる予定です。

楽しみにしていただければ光栄です。

〈我、レイ・クロカミの名の下に命じる

〉 (前書き)

ワールド戦、決着です。

それでは、本文をどうぞ！

〈我、レイ・クロカミの名の下に命じる〉

翌朝の早朝、レイとタバサはちょっと調子に乗ってシルフィードで遠乗りしていた。(もちろん、移動先では修練を積む)

「シルフィード。毎回乗せてもらって悪いな。……ああ、俺はお前が韻竜であることは知ってるから、話してもいいぞ。あと、タバサから聞いていると思うが、今日のこと、頼むな」

「レイ、なんでこの子が韻竜だと分かったの？」

「ただの風竜にしては魔力量が多すぎるからな」

「本当なのね？嬉しいのね！今までずつとお姉さまと以外喋れなかったから、あなたも喋って欲しいのね！……あと、今日の作戦については任せるのね！」

「了解した。……おっと、着いたようだ。タバサ、始めるぞ」

「分かった。……今日こそは、一撃当てる」

「ああ、お前には期待している」

レイは苦笑しながら答え、シルフィードから飛び降りた。タバサも後を追ひ、サイト抜きでの修練が始まった。

一時間程、模擬戦を終えた後……。

「……やっぱり……あなた……には……敵わ……ない」

タバサは息も途切れた状態で呟いた。

レイは、全く疲れた様子も見せずに答える。

「そうでもないさ。だんだん動きがよくなっているぞ」

「それ……でも、まだ……一撃も……当て……ることが……が、出来……てな

…い」

「それも、そのうち出来る…っとその前に、とりあえず息を整えろ」
しばらく、レイが治癒魔法を行使して、数分後、タバサはやっと全快した。

「ふう。ありがとう」

「どういたしまして。…それより、気付いたか？戦闘中に、ワルドがルイズを連れて動き出していたぞ」

「…気付かなかった。でも、急いだ方がいいと思う。…たぶんあの子が危ない」

「大丈夫だ。ルイズは操られて連れて行かれているのだろうが、しばらくは何も起こらないだろう。それに、タイミングは誤らない。…そしてこれは主人公の…サイトの見せ場だ。俺は英雄にもなれないし、なりたくもないが、裏方として、助っ人として、せいぜい誰も死なないようにサポートでもしておくさ」

レイは最後の言葉を、自嘲するように呟いた。
タバサは、それを否定するように返す。

「…あなたは強い。少なくとも、私にとっては英雄で、主人公」

レイはしばらく黙り、そして答える。

「……そうか。ならば、俺はせめて、お前だけの英雄になれるよう努めよう」

「ありがとう／＼／＼／＼…あなたは絶対に護ってくれと、信じてる／＼／」

レイは苦笑しながら言葉をつなげる。

「ああ、期待に沿えるよう、全力を尽くす。……さて、そろそろ異変に気付いているであろうサイトを連れて、ルイズの元へ跳ぶぞ。『氣』を辿れば、行ったことがない所でも跳べるからな」
「分かった」

そして、二人はとりあえずサイトの元へと転移することにした。

一方、サイトは慌てていた。

「やべえ、なんだこれ？左目の視界が！？……これは、ルイズが助けを求めているのか？？！」

サイトがそんなことを言いながら右往左往していると、レイとタバサが目の前に転移してきた。

「あ！レイ！なんかルイズがやばいんだ！力を貸してくれ！！」

「分かっている。……だが、その前に一言。……これはお前の試練だ。向こうに行ったら裏切り者のワールドを潰して、ガンダールヴとして、そして“サイト”として、ルイズを助けてやれ」

「分かった！！……それにしても、ワールドが裏切ったのか！くっそ、あいつ！！……全力で潰す！！」

「ああ、お前なら出来るぞ、主人公！行くぞ、《テレポーター》ション！》」

三人の影は、一瞬にしてこの場からかき消えた。

一方、ワールドたちは、結婚式場に来ていた。

朝、ワールドはルイズに結婚式を執り行うことを伝え、半ば強引に連れてきたのだ。

進行役はウェールズにやつてもらえるように仕向けた。

「新婦？」

『誓うか？』という結婚式らしい問いに答えられないルイズに不信感を抱いたウェールズが、ルイズの様子を伺う。

少し目が虚ろだったルイズは、意識を取り戻したようにハッ！となった後…。

「お断りします！ワルド子爵のことはただの憧れでした」

「…そうか、君が断るとは予想外だったよ。でもね…」

ワルド言いながら、ルイズから、ウェールズに返却してもらった手紙を奪った。

「僕の目的はこれだけじゃないんだよ。一つは、『虚無』である君を手に入れること。二つ目に、同盟を妨げるこの手紙を強奪することだ」

「そんな！あんた、レコン・キスタだったのね！…それに私は虚無じゃないわ！伝説の系統だもの、あるわけないじゃない！」

ルイズは声を張り上げつつも、心の中では怯えていた。 サイト、助けて！…と。

それでも、ワルドは全く動揺せず続ける。

「間違いないよ、君は虚無だ。…あと、僕の目的はもう一つあるんだ」

言い終えた後、ワルドの姿が一瞬にしてルイズの視界のアウトレンジへ抜けてしまった。

ワルドが走り去った先には、ウエールズ。どうやら、皇太子ウエールズを殺し、アルビオンを使い物にならないくする、というのが三つ目の目的らしい。

だが…。

「ウエールズ、だから言っただろう？行動に気をつけろ、と」

レイがワルドの杖剣を、魔剣によって止めていた。

脇にはタバサが控えており、サイトは一直線にルイズの方へ向かった。

「なっ！君は…！…まさか、ここがバレるとは思わなかったよ。

これじゃ、手紙の強奪しか成功できないってことかな」

「なにを言っている？手紙ならもう俺が取り返したぞ」

レイは口の端を不敵に吊り上げつつ、そして奪い返した手紙をワルドの目の前で振りながら言い放った。

「クッ、だがまだ僕には奥の手がある。 ユビキタス。風は偏在する」

いきなりワルドの身体が分身し、五人になった。

内、四人は白い仮面をつけており、どうやら、サイトにライトニング・クラウドをくらわせたのは、ワルドだったらしい。

ルイズをかばいながら、サイトは叫ぶ。

「なんでルイズを裏切ったんだ！」

「目的のためには手段を選んではいられないのでね」

「ルイズはてめえを信じてたんだぞ！」

「信じるのそちらの勝手だ」

「…デメエー!!」

レイはウェールズにシールドをかけた後にサイトに声をかける。

「サイト！お前はガンダールヴで、伝説で、英雄で、主人公だ！お前ならこの試練を乗り切れる！」

「ああ！絶対にこいつを潰す！レイは俺を見守ってくれ！」

いつもは黙っているデルフもサイトに声をかける。

『そうだ、心を奮わせろ、ガンダールヴ！心の奮えがお前を強くする!!』

「おうっ!!…いくぞ、ワルド!!覚悟しろ!!!!」

『…って、ああ！思い出した!!こっしちやいらねえ！すぐに元の姿に戻らねえと!!』

「おい、どうしたんだよ、デルフ？歯切れわりいなあ」

サイトの文句も聞かずにデルフの刀身が光り、サビの浮いていたそれは、新品同様の輝きを見せる。

『これでヤツの魔法も吸収出来るぞ!!』

「おお！マジか!!…じゃあ改めていくぞ！デルフ!!!!」

『おうよ！相棒!!!!』

こっしち、サイトのリベンジ戦が始まった。

サイトと五人のワールドが交戦している間、レイは戦いの余波が周りに被害を与えないようにしながら（タバサはルイズの護衛）、ウェールズに話しかける。

「ウェールズ。お前の答えは決まったか？ちなみに、50000の兵を引きつける作戦はあるぞ」

「本当かい？！それなら…うん、決めたよ。僕は、トリステインに亡命する。王として生き残れば、アルビオンは建て直せる。僕はそんな簡単なことにも気付かずにいたみたいだ。…まあ、実際は愛する人のために生き残りたいっていう方が大きいんだけどね。我が俥だし、傲慢だけど、僕はこの道を選びたい」

ウェールズは本音で返す。

レイは満足したように頷き、口を開く。

「…いい答えだ。自分のやりたいことを責任持ってやれ。王なんてものはそんなものだ。そのために全力を尽くせばいい。俺が手助けしてやる。…そして、待つてる人がいるなら、死んではいけない。そういうことだ」

「…ああ。だから、僕たちに力を貸してくれ。5000の兵たちをなんとか助けてやってくれないか？」

「いいだろう。俺はお前を気に入った。レコン・キスタの兵たちは俺が引きつけておく。その間に全員でトリステインへ逃げる」

レイはそう言った後に、ウェールズを仲間の兵たちの元へ転移させた。これで、うまく逃げるだろう。

一方、サイトたちの戦闘は佳境に向かっていた。ワルドはすでに三人に減っていた。しかし、ワルドはルイズに向かって風魔法を放つ。

「きゃあ！」

護衛中のタバサが氷の壁を創って、それを防ぐが、余波で二人は後方に倒れた。

サイトは激怒する。

「テメエ！！タバサや…ルイズまでも！！！」

「ハッ！主人へ敵わぬ恋でもしたか？」

ワルドが冷たく返す。

「ちげえ！……でも……でもなあ！あいつを見ると、なんかどきどきすんだよ！」

サイトはそう言いきり、偏在二つを同時に切り裂く。

『そうだ！相棒！お前はガンダールヴだ！もつと心を奮わせろ！！』

「ああ！ルイズは俺が護る！他の誰でもねえ！俺だけがルイズを護れるんだ！！！」

神速一閃。

ワルドの左腕が一瞬にして切り裂かれた。

「くそ…この『閃光』のワルドが速さで遅れをとるとは…」

「閃光ごときが伝説に勝てると思うな！」

「…クツ。確かに、今の僕では駄目だったらしい。……だが、レコ

ン・キスタがすぐにここに来るぞ。せいぜい50000の兵を相手に頑張るのだな。…私はここで退散させてもらおう」

ワールドはそう言って、『フライ』で飛び立ってしまった。

「どうすんだよ！レコン・キスタが来るぞ！…いくらレイがいても50000はきついんじゃないか？」

サイトは叫んでいる。

しかし、レイは冷静に返す。

「俺が何の対策も用意してないと思ったのか？」

レイの言葉と同時に、地面が盛り上がり、巨大なモグラが姿を現した。

「ヴェルダンデ！やっぱり君は速いね！……ああ、レイ！言われたとおりに逃げ道を作ったよ！この先に、キュルケがシルフィードに乗って待ってる！」

ついでにギーシュも出てきた。

レイの計画を聞いていなかったルイズとサイトは、ひたすら驚いているが、気にせずにレイは続ける。

「ああ、よくやったな。俺は軍を引きつける。残りの全員をシルフィードのところまで案内してやれ」

この言葉に拒否反応を示したのはタバサ。

「ダメ。あなたが残るのなら、私も残る」

「…タバサ。俺を信じる。確実に、すぐお前の元に戻る」

タバサはしばらく沈黙したのち、口を開く。

「……………分かった。私だけの英雄である、あなたを信じる」

「ああ、ありがとう。……………ではシルフィードの元へ向かってくれ」

「話はずいたかい？…ならこっちだ。急いでくれ」

サイト、ルイズ、そしてタバサの三人は、ギーシュに連れられて、シルフィードとキュルケの元へ去っていった。

行軍の音は、すぐそこまで近づいていた。

そんな中、漆黒の衣服を身に纏う漆黒の髪と瞳をした少年一人。

レイは小さい溜め息をつき、軍を見渡す。

「暇な奴等だな。もっとマシなことに力を尽くせないのか……。……………まあいい。早く戻らなければならぬからな。さっさとこいつらを撤退させよう」

レイはそう言いながら目を閉じる。

すると、レイの全身から青い魔力の光が立ち昇り、足元には巨大な魔方陣が出来上がった。

レイは静かに詠唱を始める。

小さいかと思われたその声は、間違いなくレコン・キスタの者たちに、そしてシルフィードの上に乗ったタバサたちの耳にさえも響き渡る。

「《汝、閉ざされし記憶の底に眠る虚構の存在にして、全ての心の管理者よ》」

レイの足元と同じ形の魔方陣が軍の前方に出現する。

「『 我、レイ・クロカミの名の下に命^{もと}じる。我が命に従い、
畏怖をバラ撒け！メモリーズ！』」

レイがルーンを唱え追えると、前方の魔方陣から巨大な影が現れる。それは形の無い幻影であり、それでいて全てに被害を及ぼす。輪郭のないその身体は全てが影で出来ているかのようで、幻想的な美しさを見せる。

まるで巨大なドラゴンの影。美しく、気高く、誇り高き最強の魔獣・メモリーズ。万物の心の番人。

そんな存在が軍の前に姿を現したのだ。

時に強き存在は美しく、時に強き存在は…孤独だ。

孤高の絶対者としての威厳は、間違いなくレコン・キスタの者全員の、畏怖の念を強くかきたてる。

「 さあ、逃げ惑え」

聞こえるはずもない、レイによるこの言葉。だが、それを皮切りに、呆然としていたレコン・キスタ軍は、一斉に撤退を始めた。

しかし、そこは大軍。いきなりの撤退が通用するわけがない。

後ろに行こうとする者、ただただ混乱する者、強い畏怖を抱き、動けなくなる者……さまざまな反応を見せる大軍は、後ろに行こうとする者によって、留まる者は落馬し、完全に混乱の渦に引き込まれてゆく。変わらないのは、皆が『メモリーズ』に対して畏怖の念を抱いているということだけだ。

「さて、これでこいつらの相手は大丈夫だろう。……メモリーズ、こいつらの相手を頼む。ある程度時間が経てば、幻界に戻ってくれて構わない」

この言葉に答えるように轟くメモリーズの咆哮を背に、レイはタバサのもとへ転移した。

「タバサ、来たぞ」

「……待ってた／＼／」

レイにタバサが飛び込み、黒と蒼のシルエットは、しばしの間、重なった。

隣では、ルイズとサイトのキスシーンが繰り広げられている。

……完全に取り残されたキュルケとギーシュ、ドンマイ！

あれ、なんか終わり方、歯切れ悪くない??！

………という状況になりつつも、束の間の平和を取り返すことに成功したのだった。

〈我、レイ・クロカミの名の下に命じる〉 〈後書き〉

とりあえず一区切り終わりましたね。

どうだったでしょうか？

この先も読んでいただけると嬉しいです。

出来れば、楽しみにしていただけると、とても光栄です！

口から出任せの話でも、信じてしまふヤツはいる。(前書き)

レイは口から出任せでも、それなりに単純なヤツなら簡単に騙せま
す(笑)

さて、犠牲者(笑)は誰なのか…。

では、本文をどうぞ！

口から出任せの話でも、信じてしまっヤツはいる。

翼が風を切る音を立てながら、シルフィードが宮廷近くに降下してゆく。

今回の任務報告のため、宮廷に直接赴いたのだ。

降り立つと、衛兵の者たちが近寄ってきた。

「貴様たち！何者だ！杖を捨てる！！」

随分な態度である。

皆、正直に従おうとは思わなかった。

が…。

「なにを躊躇う必要がある？杖がなくとも困ることなどないぞ？」

「それに、ここは宮廷」

レイとタバサの冷静な言葉によって、意外とすっぱりと杖を地面に置いた。

当然だろう。…レイの武器はいつでも出すことが可能であり、魔法もいつでも使えるのだ。これで怯える方がおかしい。（というか、素手でも充分過ぎるほど強い）

しかし、一人動かない人物がいた。…サイトだ。

俺のやつ、杖じゃないしね？という持論によって、捨てるという発想すら浮かばなかったのだ。

当然、衛兵はサイトを咎める。

「おい！貴様！杖を捨てるというのが聞こえなかったのか？」

「えっ？だって、俺、杖なんか持ってねえし……」
「確かにそうだな。こいつが持っているのは剣だ。正しく言うのなら『武器を捨てる』だな。剣を捨てて欲しいのなら、もう一度言い直せ」

レイがおもしろがってサイトに追隨した。
その態度に、衛兵の一人はキレた。

「なっ！貴様！！」

キレた衛兵にも全く動じないレイは、いつも通りの冷静な調子で返す。

「まあ、そうキレるな。一応、俺たちは王女の密命を受けているのでな。……通してくれないか？」

「レイの言う通り。……通して」

タバサも追従する。

しかし、衛兵は納得しない。

「証拠がないではないか！それとも見せてくれるというのか?!」

衛兵はそんなことを言ってきた。

……だが、これで慌てるレイではない。

その場で適当に証拠を考え、すぐに答えを出して口を開く。

「では、証拠だ。ルイズ、前に出ろ」

「使い魔が命令しないでよね」

ルイズはそう言いながらも前が出る。

そしてレイは言葉を続ける。

「この桃色の髪と鳶色の瞳を見れば分かるだろうが、こいつはルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。ラ・ヴァリエール家の三女だ。そして、こいつの指に嵌っている指輪の名は『水のルビー』。『始祖の祈祷書』と並んで王家の秘宝であるこの指輪を、誇り高き公爵家（別にそんなことは思っていないが）が三女、ルイズ・ド・ラ・ヴァリエール……この少女の手元にあるという事こそが証拠だ」

完璧かと思われたレイのこの言葉にも、衛兵は難癖をつける。

「こ、この指輪が本物であるとは限らないではないか！」

諦めが悪い……。

レイはこの言葉に呆れ、宮廷内に向かって声をかけた。

「王女！なんとか言ってやれ」

宮廷からはちょうどアンリエッタが出てきたところだった。

当然、『気』の流れによって、王女であるアンリエッタが出てくるのを察知していたのである。

「あら、今来たばかりなのに、なんで分かったのですか？……つて、ルイズ！」

「ああ、姫様！」

ルイズとアンリエッタが喜びで抱き合う。

オーバーリアクション万歳！という状況だ。

「これで通してくれるな？」

衛兵たちは気まずさから、一斉に目を逸らした。

ルイズとアンリエッタはやっと抱き合うのを止め、会話を始める。

「よかった！ルイズ…無事だったのね」

「はい、サイトもレイも…他の皆も…とても頑張ってくれました！
……件くだんの手紙も、今ここに」

ルイズはそう言って手紙を差し出す。

「やっぱりあなたは一番のお友達ね」

「もったいないお言葉です、姫様」

……この場の雰囲気、全くそぐわないのだが、『話が長い。そろそろ中に入らないか？』とか思うレイであった。

「それでは、今回の任務報告を始めよう」

王宮内に入り、報告を始めたのはレイだった。

一番、報告に向いているのはレイだ、と皆に言われてしまったので、レイは仕方なく引き受けることにしたのだ。

レイは、無事に手紙を奪還したこと、ワールドが裏切ったこと、その

ワールドに痛手を負わせたものの取り逃がしてしまったこと、ウェールズの命も狙われたこと、レイがそれを防いだこと、そしてウェールズたちの軍500名がトリステインに亡命してくることで話した。

「これで俺からの報告は終わりだ。……それとウェールズたちだが、順当にいけば数日後には辿り着くだろう。準備はしておけ」

アンリエッタは裏切り者を助つ人として送ってしまったことを悔やみつつ、ウェールズたちが未だに生きていることを喜んだ。

「準備ですわね。分かりました。…今回の任務、本当にご苦労様でした。ウェールズ様の命まで救ってくださって、感謝の言葉もありませんわ」

「姫様、私たちはやるべきことをやっただけです」
「…少なくともルイズが言うことではないと思うけどね。一番の功労者はレイとサイトだと思っわ」

キュルケのこの言葉は、息をはくような小さな声であり、ルイズには聞き取れなかったのは幸いだった。
こうして、任務の報告は終わった。

帰り道。

全員シルフィードに乗り、学院へと向かっている。

「そういえばレイ。アルビオン行きの船でアシエルがどうとか言っていたけど、それはなんなんだい？ …… サイトたちのところに行く前には魔族がどうのってとかって言っていたのもよく分からない」

レイが船内に転移した時の第一声 『アシエルの方はなんとかし

ておいた』という言葉で、アシエルってなに？……と、思っていたギーシュが質問した。

「アシエル・ノード・セティス。上位魔族であり、第二魔法師団の長。ゴレム『ルシファー』を操ることもあるが、本来は暗殺に使えるような武器……千本や毒針、苦無などの隠密武器を主に使っている。纏う魔力は紫だ。………。そもそも、魔族の強さの秘密というのは「あの！ま、待って！！ちょっといいかい？」………まだ説明中だが？」

レイは内心のイラつきを隠す素振りも見せずに訊いた。

………。あまり、説明を遮られることが好きではないのだ。

「魔族とか言われても分からないんだけど………」

そう、ギーシュは魔族であるルナルトとレイの戦闘を見ていない。よって、レイから魔族についての説明を受けていないのだ。

ちなみに、他のメンバーは詳細な説明を受けており、魔族と上位魔族の違いまで簡潔に説明してもらっている。（魔族と上位魔族の違いについては、『黒の世界は幻想の闇。』に記した、『魔法師団長乃目録』の『魔法師団長について。』という項目を読んで欲しい）

「一般常識だろうか？それぐらい、予習して理解しておけ（ただの無茶振りだが）」

「レイの言う通り（レイの言うことは絶対）」

レイはちょっとした冗談で返し、タバサは『レイ至上主義』として、躊躇なく追従した。

「い、一般常識なのかい？………学院でも習わなかったけど」

ギーシュは少し慌てた様子で返すが、ここで思わぬところから増援がきた。

「おいギーシュう。授業はちゃんと聞いとけよ」

「そうよ、あなたが居眠りしてる時に先生がおっしゃっていたわ」

「フフツ、ちゃんと聞いてなきゃダメじゃない」

……… サイト、ルイズ、キュルケ。結局、全員がレイ側に回った。

理由？おもしろそうだから！それ以上でもそれ以下でもない！……

…というのが、総員の意向だ。

「なっ！……… 確かに居眠りしていた時はあつたけど……。あっ！でも、テストにはそんなもの出なかつたよ？！」

「残念過ぎて笑えるな。テストに出す必要も無いほどの一般常識だということだ。……… つまり『魔族とはどのような存在か？』という問いをテストに出すのは、『ハルケギニアにおいて、魔法を使うことが出来るのはどのような血筋の者か？』という問いがテストに出るのと同じこと、というわけだ」

レイは口から出任せで、ギーシュに信じ込ませようとしてみた。…

……… 適当もいいことだが、ギーシュは結構単純な性格である。

「そ、そこまでの一般常識だったとは……。それなら、今からでも僕に教えてくれないかい？」

あんな口から出任せの説明でも信じてしまっほどの単純さなのだ。

「いやいやいや、世の中、そう甘く無いって（笑）」

サイトは明らかに笑いを堪えきれない様子だ。

「そうよ、ナメちゃダメよ（笑）」

ルイズ、何を『ナメてはいけない』のか教えてくれ。

「そうね……学院まで歩いて帰ってこられたら教えてあげるわ（笑）」

キュルケさん、それはさすがに可哀そうじゃないで………シルフィード！何も落ちちゃってんの？！そしてなに？その『気が利くでしょ？』的な表情は！！『可哀そうじゃないですか？』って書こうとしたのに、途中でやめちゃったからね？！！

………失礼、地の分でここまでツツコミを入れるのはナンセンスですね。これからは自重しよう。

シルフィードに落されたギーシュは、『フライ』でゆっくりと着地し、『うおおお！！絶対に帰りついてみせるぞおおお！！』と熱くなっていたが、気にしないでおこう。

ちなみに、その後のサイトとルイズは、かなりイチャついて、「ない！！あることないこと言うな（言わないで）！！！！」「………地の文にツツコミを入れるのはやめましょう。

補足だが、レイとタバサもかなりべったりな状態でご帰宅なされた。

………今度は地の文にツツコミが入らない。

二人とも異存なく、くっついてついているようです。

やはり、レイとタバサは平和です。

口から出任せの話でも、信じてしまふヤシはいる。(後書き)

次回、とうとうあの出来事について……。

ヤシの過去は一体どういうものだったのでしょつか？

次回をご期待いただけると嬉しいです。

『もうあんな思いは二度と御免だから!』(前書き)

レイの過去です。

レイの強さの理由であり、力を求める意味です。

それでは、本文をどうぞ。

『もうあんな思いは二度と御免だから!』

任務が終わった夜。

レイとタバサはまたシルフィードに乗って、学院の上空を飛んでいた。

……二人には、互いに、相手に話すべきことがある。

今回は、それを相手に打ち明けようということになったのだった。

まずは、『使い魔品評会』の際に交わした約束を果たすため、レイの歌から始めることにした。

二人で並んでシルフィードの背に座り、青と赤……地球ではありえない二つ在る月を見上げながら、レイは歌い始める。

今度の曲もバラードだが、儂げな旋律であり、また、ゆっくりとしたその曲調は、聴き手であるタバサの心を満たしていく。

双子月の見守る中、レイの歌声が響き渡った。

「ふう、これで約束の一つは果たせたな」

「いい歌だった。…また違う曲も聴かせて」

タバサは本当に感動したように感想を呟き、またもや『次の曲を聴きたい』というお願いを言葉に出した。

これでは約束がずつとつながり続けるんじゃないか?…と思って苦笑しながらも、レイはしっかりと答える。

「ああ、約束しよう」

この後、しばらく二人で黙って月を眺めた。

二つの月は、まるで二人を見守っているように、優しい光を届けている。

心地よい雰囲気身を任せ、二人は寄り添う。

「さて、まずは俺の話から始めよう」

先に口を開いたのはレイだった。

歌い終わってからすでに一時間が経過していた。

………それほど、二人共が話し難い過去なのだ。

「…分かった。聴かせて」

「ああ、決して楽しい話じゃないが、聞いてくれ」

二年程前の話だ。その日、少年はある国で行方不明になった。

その少年は幼い頃に家族を亡くしており………というか、家に押し入った盗人に殺されていて、感情が希薄だった。要するに、目の前で家族が殺されたことがトラウマになったんだな。

少年の行方不明先は異世界・ミラーナ。今までは見たこともないような秘技、魔法が飛び交っている世界だった。

だが、少年は行方不明になっても、たいして悲しくはならなかった。どうせ恋しくなるような人は皆、死んだのだから。………サイトは親友だったが、まあそれはまた別の話だ。

悲しいという感情は抱かなかった少年だが、大いに困りはした。それも当然だろう。その少年は今までに戦闘などしたことがないというのに、ミラーナには凶悪な魔物が多数存在していたのだから。

とても広大な草原に迷い込んだ少年だったが、魔物が牙を向いた途端に全てを諦めた。…いや、喜んでいたのかもしれない。これで

家族の元へ向かえる、と。

しかし、幸か不幸か、魔物にやられる直前に助けが入った。少年の初めての異世界人との対面は慌ただしくも暖かいものだった。あの時かけられた「命を簡単に捨てるのは感心せんなあ、少年」という言葉は妙に心に残っているな。

その後、少年は助けにくれた異世界人、フィールの家に居候させてもらうことになり、家を訪れた。その時だったな、少年と少女が出会ったのは。

その少女の名はリーネ。フィールの娘だった。長い金髪を真っ直ぐ下ろした、清楚な子だったな。

そして、不覚にも少年は一目惚れした。しかも、初恋は意外とあつけなく、次の日の、相手からの告白で成就した。何でも、あちらも一目惚れだったらしい。

ガキだというのに将来まで誓い合い、二人は幸せな日々を過ごしていた。朝から夜までべったりだったな。

……それでも、幸せな日々は長く続かなかつた。

その頃、俺が異世界に迷い込んだせいで時空の歪みが生じ、魔物が大量発生してきている。魔物たちの最初のターゲットに俺たちの村が選ばれてしまったんだ。

少年の目の前で繰り広げられる虐殺。意味の無い抵抗によって出た無数の傷の数々。少年の傷は比較的浅く……そのせいで全てを見た。フィールの胴体が切り離され、鮮血が噴水のように噴き出す瞬間を。村人たちが魔物に虐殺され、血が溢れ出る瞬間を。そして……血溜まりの中に横たわるリーネの瞳に、光が浮かばなくなつた瞬間を……

少年は絶望した。通りすがりの老戦士、ゴールに助けられた時にも全く気付かないほどに。

その後、少年が正気を取り戻すのに一ヶ月かかった。だが、完全に元の少年に戻ったわけでは無かった。二つのトラウマに縛られた少年は、護る力を手に入れることに執着するようになったんだ。

幸い、じーさん……いや、ゴール師匠は剣も魔法も達人級でな、狂ったように教えてもらったよ。

師匠が老衰で死んだ後は、旅に出て、その後すぐに召喚された。そして、その先はタバサも知っての通りだ

「その少年はまだ過去を捨てられていない。でもな、そいつだって本当は分かっている。どんなに力をつけたところで村人たちは……リーネは戻ってこない。………だけど！どうにも気が済まないんだ！だから俺は決めた。家族も、村人たちも……好きな人も護れなかった俺だが、せめてこれからは何にも屈しないほど強くなることを！もうあんな思いは二度と御免だから！誰にも負けない！大切な人は、何があっても護りきる！！そんな力を俺は手に入れてみせる！！！」

レイはそう言い放った。

あまりにも悲しい話。二人の間に沈黙が広がる。そして、タバサは泣いているようだ。

「……なにもタバサが泣くことないだろう？……ただの昔話だ」

泣いているタバサにほんの少しの動揺を示しながらも、レイは優しくタバサの頭を撫でつつ言葉を紡いだ。

「……でも、あなたも泣いてる」

レイは驚いたように、タバサの頭を撫でていない方の手を、頬に持つていく。

確かに、頬は濡れていた。

「……情けないな。未だに俺は過去に囚われ、逃げ続けているというんことか」

レイのこの言葉に対し、タバサは抱きつくことで答えた。抱きつきながら……そして、泣きながらもはっきりとした声で話し始める。

「違う。あなたは強い。単に戦いで強いというだけじゃない、本当の……真の意味での力を持っていると思う。そして、とても優しい。過去の記憶を捨てずに、背負って生きている。あれほどつらい過去なのに、いつまでも背負っている。……普通の人にはそんなこと出来ないと思う」

タバサとしてはとても長い言葉。タバサの想いが籠っていた。

「そうか……。ありがとうな。気が楽になったように感じる。……だが……しばらくは、このままでいさせてくれないか？」

タバサの答えは当然。

「……もちろん、あなたの気が済むまで……」

双子月の幻想的な光に包まれ、二人のシルエットは、しばらく重なっていた。

二人が離れると、タバサは俯いてしまった。

「どうした、タバサ？」

「あなたの話を聞いたら、話しづらくなった…。あなたのものと比べると、大したことじゃないかもしれない」

タバサの声は、終盤に向かうにつれて小さくなっていった。

だが、レイは優しくタバサの頭を撫でながら、諭すように呟く。

「そんなことはないさ。タバサはずっとその過去に苦しめられてきたんだろう？……それだけでも充分つらい。俺が一番理解してる。嫌ならばいいが、話してくれないか？……俺は必ずタバサの味方だから」

「…分かった／＼」

タバサは自身の過去について話し始めた。

話の概要はこうだ。

タバサの本当の名はシャルロット・エレーヌ・オルレアン。ガリア王ジョゼフの弟、オルレアン公の娘だ。つまりは王族。

しかし、彼女の父親は王権争いの果てに矢を射られて絶命した。…ジョセフの命によって、だ。

しかも、それだけではない。オルレアン公の娘である彼女に王権を取られないようにするため、ジョゼフは彼女の心を壊す、エルフ製の秘薬を使ったのだ。…幸い、彼女はその秘薬を飲まずに済んだのだが、彼女の母親が身代わりでそれを飲んでしまった。

それ以来、母親は激変した。心が壊れたことにより、シャルロットのことを人形の『タバサ』と言い、人形のことを『シャルロット』と言うようになったのだ。彼女はその扱いによって心を閉ざし、感情が希薄になってしまった。

そして、自らをタバサとして生き、過酷な任務を押し付けられても耐え切り、やがてシユヴァリエとなった。

全ては母親の心を治し、ジョゼフに復讐するために。

「……………これが、私の今まで」

タバサは淡々として告げた。

「前に学院から『気』を感じられなくなっていたのは、任務に行っていたから、というわけか…。タバサ…いや、シャルロット。今まで、よく頑張ったな。俺は月並みなことしか言えないが…：…シャルロットの全てを一緒に背負ってやる」

今度はレイがタバサを抱きしめながら言葉を紡いでいる。

「だからもう、一人で頑張るなよ。俺は無責任に他のヤツのことまでは断言出来ないが、少なくとも俺だけはいつまでもシャルロットの味方だ。シャルロットが望む時はいつだってそばにいてやる。…だから、泣くな」

そう、シャルロットは泣いていた。それも大声を上げて。レイはさらに抱きしめる力を強くして、そして小さく呟く。

「シャルロットは俺が護る。……………何があってもな」

そんな小さな声もシャルロットには聞こえたようで、泣きながらもしっかりと答える。

「……………ありがとう」

「シャルロットの母親も、そのうち絶対治してやるからな」
「…本当に……………ありがとう」

シャルロットが落ち着いた後もレイは彼女を抱きしめ続け、良い雰
囲気の二人を、祝福するようなシルフィードの鳴き声が空に響いて
いたという。

『もうあんな思いは二度と御免だから!』(後書き)

レイの初恋の人物『リーネ』。

異世界・ミラーナの住人であつた彼女。

一応、『リーネ』という名前を覚えておくと、この先の文を読みやすいかもしれません。

始祖の祈禱書

〈火よ！水よ！風よ！土よ！〉（前書き）

レイの完璧人外ネタです（笑）

それでは、本文をどうぞ！

始祖の祈禱書

〈火よ！水よ！風よ！土よ！〉

平和な日々をしばらく送り（レイとシャルロットの幸せな日々もしばらく続き、そしてサイトがルイズのベッドに入れてもらえるようになり）ある日、一つのイベントが発生した。

レイの『ゲルマニアとの同盟などなくてもなんとかなる』発言により、アンリエッタとウェールズが結婚することになったのだ。そして、ルイズが結婚式の詔を言うことになった。

… になったのだが。

「始祖の祈禱書とか言っても白紙じゃない！自分で考えなきゃいけないわけ?!」

「まあ、確かに難しいよなあ。お題とかないわけ?」

ルイズはサイトも巻き込んで、すごく悩んでいた。

「なんでも、四大系統全てに対する感謝を詩的に読み上げなくちゃダメだとか…」

「…俺には期待しないでください」

「……あなたには最初から期待してないわよ。……あつ、こついうのはどうかしら? 『火は熱いので気をつけること、風が吹けば桶屋が儲かる……』……ダメね」

「ダメだな」

ハアアア。長い溜め息が二つ。

そこで、サイトが声をあげる。

「名案！困った時は…」

「『レイだろ（よね）!』」

二人の声はきれいに重なった。

というわけで、二人はレイがいるであろう、タバサの部屋まで来ていた。

事情を説明すると…。

「それで？そんなことのために俺のところに来たのか？」

「私たちだって忙しい」

文句たらたらだった。

「本読んでただけじゃない！」

「それが俺たちにとって大事な時間だというのに…。そして、俺には詩の才能などない」

「ええっ！！レイってなんでも出来るんじゃないのか？！」

真剣に驚くサイト。

「…サイト、お前は俺のことをなんだと思ってるんだ？」

「完璧な人外！」

「ルイズまで声をそろえないでくれ…」

呆れるレイ。

そしてなにを思ったか、タバサがレイに声をかける。

「大丈夫。あなたは、人外でもなんでもない、ただの私だけの英雄」

「タバサ…。ありがとうな」

「気にしないで」

二人は見つめ合う。

ルイズとサイトは取り残されてしまった。
ちなみに、皆の前では『タバサ』、二人の時は『シャルロット』で統一することになったとか。

『ケケケツ。相棒、全く相手にされてないな』

「黙れ、デルフ。……なあ、レイ」。でも詩は出来るだろ？ 中学の時、なんか賞取ってたじゃん」

「……………バラすな。それに昔の話だろうが」

レイはやっぱり、完璧過ぎる人外だったらしい。…あれ？出来ないのってダンスだけじゃね？

「やっぱり出来るんじゃない！ さあ、考えてもらおうよ！」

「はあ、しょうがない」

レイは一旦言葉を切り、大きく深呼吸をしたのち、ルーンの詠唱をするかのように、言葉を紡ぎ始める。

「《火よ！ 水よ！ 風よ！ 土よ！ 我は全ての加護に感謝する！ 火は全てを破壊し、そして暖かな光をもたらすことに感謝する！ 水は無条件での癒し、そして慈しみを与えたもうことに感謝する！ 風は私の歩みを助け、時に害意ある者を打ち倒す牙となることに感謝する！ 土はあらゆる恵みを与え、あらゆる攻撃から我を護ることに感謝する！ そして今一度、永遠の加護に対し、永遠の感謝を捧げることここに誓おう 《……………まあ、急ごしらえではこの程度だな。もう少し時間を与えてくれれば、マシなものが作れるんだが」

しばらくの沈黙。

「おい、どうした？そんなに悪かったか？」

「充分すごい（じゃねえか！）（じゃない！）」
「レイはやっぱりすごい／＼／＼／」

こうして、あとにアンリエッタとウェールズの結婚式という大イベントを控えているながらも、平和な日々が続いていた。

……と、思っていた時もありました。

「おれだつてさあゝ、わざとさあゝ、やってたわけじゃねえんだよゝ。それなのになんでおいだされなきゃいけねえんだよゝ。なあゝ、おい、れいゝ、たばさあゝ、きいてんのかよゝ」

サイト君です。

どうやら、ルイズに追い出されたらしい。
今も喚き続けている。途中でシエスタがどうか言っているので、それ関連でなにかルイズと仲違いでも起こして、追い出されたのだろう。

だが、急に押しかけられたレイとシャルロットはうんざりだ。
ちなみに、場所はヴェストリの広場。レイとシャルロットは、たまには外の風に吹かれながら本を読もう、ということ、外に出ているのだ。

「なぜ、俺たちのところに来るんだ……。痴話喧嘩は他でやってくれないか？…というか、どうやってピンポイントで俺たちの場所を探し当てた…？」

「本当に、私たちの邪魔しないで…。それと酒臭い」

サイトはすでに、ワインを大量に飲んで酔いまくっていた。

「い〜じゃんか〜、たすけてくれよ〜。なあ〜、おねがいだからさあ〜」

「……………こいつ、厄介だな」

「……………同感」

しばらく二人でサイトの相手を“仕方なく”してやっていたのだが、やっこのことで助けが入った。

「やっと思つけたわ！こんなところにいたのね！…さあ！出かけるわよ！」

「…キュルケ、来るのが遅いぞ」

「……………遅い」

キュルケの接近に気付いていた二人から苦言。

「え？なにが？…というかこの状況なによ？」

……………なかなかに締めりがなかった。

「へえ〜、そんなことがあったのね。…ダーリン可哀そう」

「全然そうは思っていないだろ……………」

事情を聞いたキュルケの言葉に、レイによってやっこのことで酔いを醒ました（強制的に）サイトは、思わず嘆息した。

「まあまあ、そう言わないの。今のあなたにぴったりの情報を持ってきたんだから」

「ほう、ゲルマニアで貴族を目指そうとかそういう話か？…ゲルマニアなら、金次第で貴族になれるからな」

レイの横槍にキュルケは驚きつつも納得する。

「なんで分かったの?!…って、レイだものね。完璧な人外だからしょうがないわ」

「…あの時、あの場にいなかったお前が、何故そのネタを知っているんだ…」

「大丈夫。気にすることじゃない」

「タバサ…。二回も悪いな」

「あなたの役に立てたのなら、それだけで嬉しい／＼／＼」

またもや置いてけぼりにされる一同だが、キュルケは話を続ける。

「もう！二人の世界から戻ってきて！…あの、人外とかは悪かったから」

「別になんとも思っていないさ。ただ、この状況になった時のお前たちの反応がおもしろくてな」

「…おもしろかった」

……………。
いじられていたのは、レイたちの方ではなかったようだ。

「ところで、ゲルマニアで貴族になるのはいいが、どうやって金を集めるつもりだ？」

「いきなり話を変えるのね…。まあいいわ。実は、宝の地図があるのよー」

「なに！それは本当かね?!」

「ギーシュ、今は普通に通り過ぎるところだろう?」

「同感」

……通りすがりのギーシュがやってきました。

「まあまあ、いいじゃないか!…それで、宝の地図というのは本当なのかい?!」

「本当よ!しかも一枚だけじゃないわ!目指せ一攫千金!」

「「おおおお!!!」」

……サイトとギーシュはすっかり乗り気だった。

「全く、能気な奴らだ…」

「…どうしようもない」

レイとシャルロットは、二人で仲良く嘆息した。

まだ『宝とるぞおお!』とか三人が騒いでいると、シエスタが通りかかった。

「あら?レイさん、ミス・タバサ。…あの、サイトさんたちは何を騒いでいらつしやるんですか?」

「ああ、どうやら、宝を探して金を集め、ゲルマニアでサイトを貴族にしようとしているらしい。…サイトの経営する領地はすぐつぶれそうな気がするがな」

「…同感」

「…まあ、否定は出来ませんがね。ああっ!そつだ!お宝を探しに行くんですね?!私も連れて行ってくださいませんか?」

「俺に訊くな。…行きたいのなら、サイトに頼んでみたらどうだ?

あいつなら断れない」
「…確かに」

というわけでシエスタはサイトに頼み込み、レイの言う通りに結局、断れなかった。

こうして、乗り気ではないが仕方なく着いていくレイ、シャルロット、超ノリノリなサイト、キュルケ、ギーシュ、そして完全にサイト目当てのシエスタというメンバーで、宝探しに行くことになった。

しばらく宝探しの日々が続く…。

そして、結果発表。

宝の地図・一枚目。宝は数枚の銅貨と安物の器。

宝の地図・二枚目。青銅製の食器ワンセット。

宝の地図・三枚目……………もういいよね？結果的に宝なんて見つからなかったんですよ！

一同のテンションはがた落ち。

しかも、レイとタバサは行く先々で亜人・魔獣討伐をして領主から金を巻き上げており、サイトたちには手に入らない金が目の前に。

もちろん『分けてくれ』オーラを出しまくっている。

だが、二人は『シャルロットの母親（お母様）を負担なしで治すには高級な薬草があるので、金を貯めたい』という理由で全く首を縦に振らなかった。もちろん、その理由はサイトたちには公開せず。しかも、貯めた金はレイが全てを、自身の創造した亜空間に放り込んでいたので、強奪不可能。

「ケチだなあ、レイ！分けてくれたっていいじゃん！それが、せめて理由教えるよな！」

「うるさい。必要だから貯めているだけだ」

「あらく、いいじゃない。少しくらい」

「そうだよ！ちよつとくらい、いいんじゃないかい！？」

「……二人とも、目の色が変わってる」

「そんなに焦らなくてもいいじゃないですか！まだ地図はあるんですよね？…なら、次を頑張りましょうよ！」

上から、サイト、レイ、キュルケ、ギーシュ、シャルロット、シエスタの言葉だ。

何気にシエスタへの（平民への）態度が軟化しているの（レイという、超ハイスペックな平民がいるため）……というかこのメンバーではほぼ平等なので、普通に会話している。

「どうせ、やっても意味が無いだろう。休みの期間中に帰るのなら、次で最後にした方がいいんじゃないか？」

「……そうね。もう飽きたし。ええ〜つと、次のは……あつた！竜の羽衣だつて！」

「ああ、タルブで噂の竜の羽衣か」

レイは案の定、竜の羽衣を知っていた。

そして、シエスタが声をあげる。

「レイさん、知ってるんですか？！」

「ああ、マチルダの情報だ。本当にヤツは使える」

「マチルダさん？…誰ですか？」

「ああ、俺の諜報員の一人だ。気にするな」

「それより、シエスタ。あなたもなんで知ってるの？」

疑問を呈したキュルケ。

「ラ・ロシエールの向こうに広い平原があつて……タルブは私の故郷なんです。竜の羽衣というのは、本当にありますよ」

こうして、シエスタの案内でタルブまで行くことになった。

始祖の祈禱書

〈火よ！水よ！風よ！土よ！〉（後書き）

一応、詔は作者のオリジナルです。

サイトたちに褒めさせてみたものの、あまり自信はありません…。

では、次回はシャルロットの母親がついに…?!

お楽しみに！

世界、蝕ム、魔族ノ影。(前書き)

ゼロ戦ゲットです！

そして、オルレアン夫人を回復させます。

では、本文をどうぞ！

世界、蝕ム、魔族ノ影。

一同の目の前には、竜の羽衣。

「ゼロ戦だと？（だ！）」

レイとサイトは声をそろえた。

「あら、ダーリンとレイは知ってるの？」

「ああ、これは俺たちの世界の戦闘機。……こいつは本当に飛ぶよ」

サイトは呆けたようにゼロ戦…竜の羽衣を見つめながら答えた。

だが、『飛ぶ』ということ、キュルケたちは信じる事が出来なかったようだ。

「飛ぶ？さすがにそれはないでしょ。…これじゃ翼つけたカヌーじゃない」

「確かにね。どう見たって羽ばたくように出来ていないし…」

そんなキュルケとギーシユの意見をレイが全て取り消させる。

「いや、飛ぶ。見たところ、ガソリン…燃料が入ってないから今は飛べないが、これだけの固定化の魔法のおかげで、構造は全く壊れていない。……絶対に飛ばせるぞ」

「レイが言うなら、絶対飛ぶ（レイ至上主義に基づき、レイの言うことは絶対であると共に………長くなるため、以下略）」

シャルロットが信じたことで、一同はとりあえず信じることにした。

サイトはゼロ戦近くの墓碑に近づき、何故か日本語で書かれている墓碑銘を読む。

『海軍少尉、佐々木武雄、異界二眠ル』

「サイトさん、読めるんですか？」

「なあ、シエスタ。その髪と目、おじいちゃん似って言われたらど
う？」

「どうしてそれを？」

「多分、佐々木武雄さんも俺たちと同郷だ」

一同は何気に異世界から人が流れてきていることに驚きつつも、次のレイの言葉によって一旦落ち着きを取り戻す。

「さて、こいつはガンダールヴであるサイトには大いに使える武器となるだろう。この先必要になってくるはずだ。……シエスタ、こいつはもらっても構わないのか？使われてはいないようだが」

「は、はい、確かに最近はお参りに来る人もほとんどいないし、邪魔になってきているから大丈夫だと思えますけど……。私の家族が管理しているので、ちょっと訊いてきますね！」

シエスタは急ぎ足で去っていった。

数分後。

「許可がもらえました！…墓碑銘を読めた者に渡すようになっていう遺言があったみたいです！」

「そうか、ありがとう。…では、こいつは亜空間に入れて運ぼう」

レイはこいつも亜空間に放りこんでしまった。

「あなたの亜空間、本当に便利」

「ああ、大抵の物はなんでも入れられるからな」

その後、レイたちはとりあえずシエスタの家にお邪魔し、泊まることになった。

ちなみに食事だが、レイとシャルロットの食べる量は異常に多かった、とだけ記しておこう。さすがにあれだけ食べれば、二人とも満足しているだろう。

「…足りない」

失礼。非常に多かったにも関わらず、足りなかったようだ。

シエスタの家族はかなりびびくりしている。(サイトたちはすでにこの食事量の多さを直すことは諦めている)

「まあ、確かにもう少し食べられるな。…タバサ、どこかに食べに行くか？」

「行く」

話が纏まり、二人はサイトたちに声をかける。

「…そういうことで、俺たちは外食に行ってくる。金は自分たちで出すから心配するな」

「就寝までには、戻ってくる。……部屋は絶対にレイと同じにして
／／／／」

というわけで、二人は出かけていった。

シエスタの家族はもう開いた口が塞がらないようだ。

サイトたちもさすがに外食までしに行くとは思っていなかったのか、

びっくりしている。

「……まあ、あの二人は仲が良くて、似た者同士ってことで」

サイトのこの言葉に、この場にいる全員が納得したとか。

そして、二人が転移を活用してまで5軒もはしごした事実を誰も知ることが無かった…。

……なんかシリアスっぽく終わらせたけど、全然シリアスじゃないね！

ここで学院教師、ジャン・コルベールについて説明しておこう。コルベールとはすなわち、頭のさびしい人物。眼鏡な42歳（独）。そして、火のトライアングルメイジであり、二つ名は『炎蛇』。その戦闘力は学院内で最強クラスだ。だが、人は彼のことをこう呼ぶ。

『変人』と。

それも仕方のないことかもしれない。魔法主力のハルケギニアにおいて、科学技術に精通しているのだから。

それでも、変人と聞いて侮ってはいけない、彼の科学チートは、一人で産業革命を起こしてしまうような勢いなのだ。

学院に戻ったレイが一番始めに行ったこと……それは、コルベールにゼロ戦の管理及び、ガソリンの作成を依頼することだった。もちろん、科学チート・コルベールの知的好奇心はとても高く、『これはすごい！すごいぞ！レイ君、サイト君！君たちのいたところではこんな物が飛んでいたのかね！！？』とキャラを壊して騒いでいた。

ついでに報告しておくが、サイトとルイズはめでたく仲直りしました！…全く、痴話喧嘩で話の腰を折るなよ。「うるさい！！」「ハイ、スイマセンデシタアア！…って、またもや地の文に突っ込んでんじゃねえええ！！！」

………失礼。

そして、コルベールによってガソリンの精製がなされている時、レイとシャルロットはガリアに来ていた。

ガリア・旧オルレアン領。ここにシャルロットの母親はいる。二人は、とうとう高級な薬草を買い、オルレアン夫人の心を治しにやってきたのだった。

ちなみに、事情はキュルケにも話し、ゲルマニアのツェルプストー領に匿ってもらうことになった。（事情をキュルケに話したということは、キュルケの前でもレイに『シャルロット』と呼んでもらえるようになったということであり、案外それもよろこんでいた）

「ここがシャルロットの家か？」

「そう」

目の前にはなかなかの豪邸。さすがに王族だけはある。

門にはガリア王家の紋章。しかし、その権利を剥奪された印がついていた。

執事らしき人物が、家から出てきた。

「シャルロットお嬢様、お帰りなさいませ。……あの、そちらの方は？」

オルレアン家の執事が、シャルロットに話しかける。

「この人はレイ。お母様を治してくれる」

「レイ・クロカミという。一応、シャルロットの知り合いだ。よろしく頼む」

「『一応』じゃない」

タバサは否定した後にレイの耳元で小さく呟く。

「あなたは、私の英雄」

レイは苦笑しながら、普通のトーンで返す。

「そうだったな。まあ、シャルロットとは仲良くさせてもらっているということだ」

「は、はあ……そうですございますか」

「では、シャルロット。オルレアン夫人の所まで案内してあげないか？」

「……分かった」

二人は家の中に入り、オルレアン夫人の部屋に向かっていった。シャルロットはかなり緊張しているようだ。

「シャルロット、大丈夫だ。……確実に俺が治す」

思わず、レイは声をかけた。
タバサは小さく返す。

「……信じてる」
「ああ、任せろ」

レイは笑顔で答えた。……思えば、シャルロットと会ってから、よく笑うようになった気がする。そんなことを思いながら。

コンコンツとノックの音が響く。

「誰です?!」

中から、警戒心バリバリの声が聞こえてくる。

「シャルロットです。入ります」

シャルロットは気にせずに入室した。レイもそれに続く。

オルレアン夫人は痩せこけており、酷くおびえた様子だった。

「下がりなさいっ、無礼者！王家の回し者ね？私の可愛いシャルロットを奪おうというのね？」

実の娘が室内に入ってきたというのにこの反応。…憎しみの籠った目で二人を見つめている。

夫人が『シャルロット』と言って庇っているのは、人形だった。

悲しそうなシャルロットの顔が、レイの目に映る。

「シャルロット…」

「…分かつてる。あなたが絶対に治してくれる」

「ああ」

レイとシャルロットは夫人に向き直る。

「なんです!!?シャルロットに近づいてはなりません!」

「お母様…今、治します」

「シャルロット。治療しやすくするために、一旦眠らせるぞ」

「分かった。お願い」

レイが右手を夫人の目の前で振ると、夫人は静かに眠りの世界へと引き込まれていった。

レイは高級な薬草を煎じて作った回復薬をシャルロットに渡しながら言う。

「俺が、心に干渉して魔法を行使している間、夫人の身体には相当な負担がかかる。それを防ぐために、この回復薬を十秒おきに投与してくれ」

「分かった」

シャルロットの返事を聞き、レイは目を閉じる。

レイの総身から青い光が立ち昇り、手を夫人にかざす。

そして詠唱がなされる。

「《心の管理者『メモリーズ』よ。その大いなる力を我に顕現せよ》」

すると、レイの左の肩甲骨辺りから、美しき影の翼が姿を現す。一層、レイが纏う青い魔力は輝きを増し、出現した片翼にまで行き渡る。

かざされた手からは激しい光が発せられ、夫人の心に干渉している。

「《癒せ、癒せ！大いなる心を司る力よ！大いなる我が魔力よ！我の顕現し得る最上の癒しを今ここへ》」

夫人の身体も光り始め、その顔には苦悶の表情が。

すかさず、シャルロットが回復薬を飲ませる。

「《心よ、凧げ！心よ、謳え！相反する二つの心よ、重なり合いて完全なる姿を取り戻せ！ディステニー・オブ・ハーツ！》」

レイの詠唱が終わり、疲れた様子で深呼吸をする間も、夫人の身体を激しく照らす光は止まらない。

「レイ、大丈夫！「俺のことはいい！しっかりその回復薬を飲ませ続ける！じゃないと、負担で最悪死ぬ！」……！？……分かった」

しばらく、シャルロットが回復薬を投与し続ける時間が続く。

そして…。

「シャルロット、もういいぞ。治癒は成功した」

レイがシャルロットに優しく告げる。

「本当?!」

「ああ、本当だ。……シャルロットも、よく頑張ったな」

シャルロットはレイの腕の中に飛び込む。

「ありがとう…ありがとう！」

シャルロットは、泣き笑いの表情で礼を言い続けるのだった。

そしてシャルロットは泣き止むと、レイに疑問に思っていたことを問いかける。

「もう大丈夫か？」

「大丈夫。…でも、気になる事がある。あなたの力はエルフよりも、とても高いはず。なのになぜ、ここまで苦戦したの？」

当然の疑問だった。

この世界では、悪魔と言われるエルフでさえも、確実にありえないような規模と質の戦いを、魔族と繰り広げていたのだ。

そんなレイが、エルフ程度が作った秘薬に対抗するのに、これほど苦戦するなどありえない。

「今まではただの懸念だった。…だが、実際に来てみて分かった。

…魔族は確実にこの世界で勢力を拡大している」

「ということは何？」

「……………魔族による横槍が入ったのだろう。おそらく今回の秘薬は、上位魔族であり、第四魔法師団長『腫瘍』のリユナの作品だ」
「魔族……………」

二人の沈黙は広がり、魔族の魔の手は着実にハルケギニアを蝕んでいた。

世界、蝕ム、魔族ノ影。（後書き）

またもや魔族の影が見え隠れしていますね。

これからの展開をお楽しみに！

魔族の数が増えてくれば、オリキャラ限定人気投票を行うつもりです。

よろしければ、感想の『一言』にキャラの名前を書いてみてください。

また、人気投票を行う期間は未定ですので、少々お待ちください。

？魔？の襲来

それは不穏なる三つの……。

（前書き）

魔族を三人投入。

と言っても、今話ではチラッとするだけです。

それでは、本文をどうぞ！

？魔？の襲来　　それは不穏なる三つの……………。

オルレアン夫人の回復がジョセフにバレぬように、レイの創造で夫人っぽいゴーレムオートパイロット（自動操縦）を身代わりとして置いていった。そして、未だ眠っているオルレアン夫人を、キュルケのツエルプストー領に預けて、学院へ帰ってくると、そこは、混乱の渦に巻き込まれていた。

「…これは？」

「おそらく、レコン・キスタが体勢を整え終えたんだろう」

「つまり…」

「ああ、戦争が始まる」

それは戦争の始まりだった。

レイたちはオスマンのところへ押しかけ、正式に宣戦布告がなされたことを知った。戦場はタルプ。…シエスタの故郷だ。

そして二人は、ゼロ戦の状態を確認するため、コルベールの研究所へ向かった。

「ゼロ戦の準備はいいか？……………それと、サイトも来ているな？」

「準備は万端だよ」

「おうっ、俺もいる」

コルベールとサイトはしっかりとした口調で答えた。

「それと、ルイズ。お前もいるのだろう？」

「……いるわよ」

ルイズも出てきた。

「私に黙ってどこ行くのよ、サイト」

「俺は…タルブに行かなくちゃいけない」

「何しに行くのよ？」

「決まってるだろ？……シエスタを…助けに行かないと！」

サイトは完全に決意したような口ぶりで告げた。

しかし、ルイズがサイトに抱きつきながら止める。

「ダメよ！戦争してるのよ？！……あんた一人じゃ…！」

「俺にはこのゼロ戦がある。…それに一人じゃねえよ。俺を応援してくれる仲間がいる！」

ルイズは何も答えない。

レイ、シャルロット、コルベールの三人も、この二人を見守っている。

サイトは続ける。

「俺はガンダールヴなんて力をもらっちゃった。…そりゃ、レイには劣るけど、少しでも助けられる可能性があるんなら、頑張ってみたいんだ」

「どうしてよ！あんたはこの世界には関係ないのよ！？本当だったら無関係でいられるのよ！？」

「それでも、さ。優しくしてくれた人たちは護りたいんだよ。シエスタだって、他の皆だって……もちろん、お前のことだって、この手で護りたい」

「サイト…」

この言葉に、ルイズは頬を染めた。

「さて、この物語の主人公二人組。お前たちにも一つだけ勝機がある」

いきなり、レイが話し始めた。

「何よ、レイ？っていうか、あんたがやれば勝てるんじゃないの？」

「俺は所詮、裏方で、一介の助っ人だ。……そんな助っ人から、お前たちに一つ助言だ」

そう言ったのち、レイはすぐに話を続ける。

「まず、前置きしておくが、今からする話は誰にもするなよ？」

「レイが言うなら」

「了解した」

「分かったよ」

「…分かったわ」

「ルイズは、ワルドの言う通り、『虚無』だ。その膨大な魔力保有量、そしてその使い魔はサイト、つまり伝説の使い魔ガンダールヴ……間違いなく、ルイズは虚無だろう」

うすうす感づいていたシャルロットとコルベール以外の表情が、驚きに染めあげられる。

「今まで魔法が使えなかったのは、虚無魔法が四系統と合わなかったからであり、覚醒も果たしていなかったからだ。俺も情報を集めてやっと分かったのだが、虚無は王家の秘宝を使って覚醒する。…

…ルイズ、水のルビーを嵌めて始祖の祈祷書を読んでみる」

ルイズは素直に従い、始祖の祈祷書を開く。
すると…。

「伝説……虚無……」

ルイズはすごいスピードで読み続けている。

「なあ、ルイズ読めるのか！？俺には白紙にしか見えねえけど」

「…見える、見えるわ！」

「そうだ、虚無は覚醒した。……実に主人公らしいだろう？」

レイは冗談めかして言った。

ふいに、コルベールがレイとシャルロットに近づいてきた。

そして、サイトたちには聞こえないように話しかける。

「君たちはどうするのかね？何か、もつとすごい決意をしているように見えたんだが」

「…魔族？」

「ああ。それも、一気に三人の『気』がある」

シャルロットは驚きの表情だ。

コルベールは分からないながらも、レイたちの雰囲気を感じ取ったのか、激励を送る。

「…よく分からないが、君は相当すごい敵と戦うのだね。想像もつかないが、私は心から応援しているよ。……それと、一つ言いたいことがある。サイト君たちもいいかね？」

最後は皆にも聞こえるような声で告げ、話を続ける。

「……私は生徒たちに……いや、レイ君とサイト君は生徒というわけではないが生徒みたいなものだと思わせてもらっていてね……そして、君たちには、戦争などに赴いて欲しくはない。戦争というのとは聞くのと実際に見るのでは全く違う。確実に人が死ぬ、殺さなければ生きていけないからね。……でも、行くしかないのだろうか？なら、私はこれだけしか言えない」

どんなに願い望もうが戦闘を回避できないのなら、あとは全力を尽くしなさい。

「戦場で諦めたらすぐに死んでしまう。……私では甘いかもしれないが、君たちが死んだら悲しむ者がここにいるということだけは、忘れてはいけない」

コルベールは静かに話し終えた。

「コルベール先生……ありがとうございます！俺たちも、あなたのことは先生だと思わせてもらいます！……それと、絶対生き残りませす！」

「ああ、俺もタバサを悲しませるわけにはいかないからな。……全力を尽くそう」

サイトとレイが代表して思いを伝え、とうとう出発の時間がやってきた。

「さて、主人公二人組。伝説を現実のものにしてこい！……それと、皆に俺の魔力を込めたブレスレットを贈る。攻撃から身を護ってく

れるはずだ」

レイはブレスレットを三人に渡す。……ちなみに、シャルロットの物だけは超特別製、加護は強大だ。

「おう！俺、やるよ！！……これ、ありがとうな！」

「ありがとう！私も頑張るわ！だって貴族とは敵に背中を見せない者のことを言うんですもの！！」

「レイ……本当にありがとう／＼／＼」

こうして、ルイズとサイトは空から、レイとシャルロットは転移で戦場へと出向くのであった。

戦場に着くと、そこは強大な『気』に包まれていた。

魔族たちはまだ動きだしていないのか、戦況はトリスティンが押さえているものの、一方的ではない。

ふいに、レイたちの目の前に三人の若者が現れた。

「フッフ 待ってたわよ、レ・イ・く・ん」

「リユナ、もうちょっと普通の態度をとれよな？……これじゃ俺たちが変人みたいじゃねえか」

「我もティードに同意する。今回の任務は生半可なものではないのだからな。……もっと真剣にやれ」

“見た目は”若者の姿をしている三人は喋り始める。
それは、あきらかに魔族の『気』……。
だが、レイは全く動じずに話しかける。

「お前たちが今回の敵か？『腫瘍』のリユナもいるようだな」

「そうよ。私の作った秘薬はどうだったかしら」

「悪趣味極まりない」

「あら冷たい で・も！それがレイ君らしいわねえ。初対面なのに、
なんか分かるわ。アハッ」

軽い調子でリユナは言葉を紡いだ。

…本当に悪趣味極まりない喋り方だ。

レイのとなりにいるシャルロットは、すでに唇が青く変色している。
強すぎる『気』に圧倒されているのだ。

それを気にしたレイは、魔族に場所を変えようと話しかける。

「おい、魔族ども。ここで、全力で戦えば辺りは火の海……。いや、
世界が潰れる。それはお前たちの望むところではないだろう？戦っ
世界を変えないか」

「それで全力で戦うことが出来るのなら、我は同意しよう」

「ああ、俺もその案は悪くねえと思うぞ」

「私にも異存はないわあ」

魔族たちに確認を終え、レイはシャルロットに話しかける。

「シャルロット。陸の敵の殲滅は頼むぞ。……こいつらは俺がやる。
そして必ず、お前の元へ帰るからな」

「……絶対に帰ってくるよ、信じている」

このやり取りに、リユナが口を挟む。

「アハツ 美しい愛情ねえ。おねえさん、あこがれちゃうわ」
「…とりあえずそのうっとうしい話し方はやめろ。……さて、世界を変えよう」

「では、我が扉を開こう。……すでに廃れた荒野しかない世界でいいな？」

「いいんじゃないか？レイとやらもそれでいいな？」

「ああ、行こう」

こうして、四人は違う世界へと旅立って行った。

「絶対……絶対帰ってきて」

タバサは一つ眩き、レイからもらったブレスレットを愛しそうに撫で、そして決心したように戦場へと向かっていった。

？魔？の襲来 それは不穏なる三つの……………。(後書き)

魔族を三人も投入してしまった…。

しかし、これくらいしないと本気の戦闘をさせられないので(笑)

次回、戦闘描写中心ですが、よろしくお願い致します。

忘れ去られた世界？ギルティアス？（前書き）

今回、後書きにオリキャラ人気投票のエントリー者のプロフィールを載せておきます。

まだもう少し先に、またオリキャラが出る予定なので、人気投票が始まるのはもう少し後です。

なお、一番人気のキャラには、後書きで次回予告をする役を担わせます。

よろしければ、投票をお願いします。

それでは、本文をどうぞ！

忘れ去られた世界？ギルティアス？

世界の扉を抜けた先に待っていたのは、荒廃しきった……命も、水も、植物すらない荒れ野だった。

「この世界の名は『ギルティアス』。全ての生命が絶滅し……神にすらも見捨てられた世界だ。しかし、数少ない世界を渡れる人物でも、この世界の存在を知っている者は四人、とさらに少ない。ここにいる我ら三人と、魔王様だ。そして、時間軸も呆れるほどズレている。この一日はハルケギニアの一時間程だろう。……ここほど戦闘に適している場所もあるまい」

魔族の一人……屈強そうな体つきの偉丈夫が世界について語った。

「そうか。だが、そんなことに興味はないな」

「まあ、そう言うなって！俺らだってなんか形から入ってみてえじやん？」

ティードと呼ばれた魔族がレイに問いかけた。
それにリユナが追隨する。

「アハツ 確かにい。そういうのって大事よねえ。…で・も！そろそろ殺り合いますよ」

この言葉を皮切りに魔族たち三人が、一瞬でレイから数メートル離れる。

そして順に名乗りをあげ、武器を出現させる。

「我が名はリオール！第五魔法師団が長『剛力』のリオールだ！…

いざ参る！」

リオールの手には純白の輝きを放つ魔大剣。

「俺はティードだあ！第七魔法師団長『幻想』のティード！…へへッ、せいぜい楽しませろよなあ！」

リードの両手には黄色の輝きを纏うチャクラムのようなものが。

「知つての通り、私は第四魔法師団長『腫瘍』のリユナ…おねえさんを楽しませるのよお」

そして、リユナの周辺には、禍々しい紫の光芒に覆われたナイフが無数に浮かんでいる。

「俺の名はレイ・クロカミ！…最初から全力でいかせてもらおう！」

レイはそれに応えて、青き光芒を纏う双魔剣・黒羽、白羽を呼び出し、いきなり戦闘を開始した。

『神威真刀流』二刀剣舞・陸の型、夢幻分身。

レイの身体は二十人ほどに分身した。

「ハハッ！すっげえわ！こんなのを魔法なしでやってやがるとはな！！」

ティードは驚きの声をあげる。

しかも、それだけではない。

『神威真刀流』二刀剣舞・八の型、狂刀乱舞。

全員が全員、八の型を発動したのだ。

レイの目に映る、全ての動きが遅くなつてゆく

「アハツ　せつかちねえ。怖いわあ〜」

リユナはそう言いつつも肉薄してくるレイたちに対応している。

レイの本体は、銀髪の偉丈夫、リオールに向かって瞬迅で突進する。

「ほう！貴様が本体だな！力の波動の大きさが桁違いだ！…なるほど、他の二人を分身に任せ、一人一人潰そうという作戦か」

リオールはレイの剣筋を捌きながら、冷静に分析する。

周りで繰り広げられているリユナ対多数、ティード対多数の戦いより激しく、洗練された剣捌きの応酬が続く。

しかし、そこは『剛力』のリオール。レイも強いとはいえ、単純な筋力では押し負けてしまう。

「グッ！」

「どうした！貴様の力はそんなものかああ！」

レイは後方に吹っ飛ばされ、一瞬の間も置かずにリオールはレイに突進する。

「ナメるなああ！！！」

レイは右の黒羽を突き出し、その剣先から純粹な魔力をぶつ放す。

「グハアア！……クツ、なかなかやるではないか！そこなくてはな！！」

大きく後方に飛ばされたりオールだったが、またすぐに立ち上がった。

そして、両者は再び激突する。

激突するたびに世界は震え、激しい衝撃が襲う。

両者には魔法を使う暇すら与えられず、純粋な力と純粋な技術だけがぶつかり合う。

「我とここまで張り合える者が魔王様以外にいたとは！……おもしろい！！」

「その余裕はいつまで続くのだろうか？……傷が増えてきているぞ？」

鏝迫り合いの短い間に交わされた言葉。まだ両者には余裕があった。

瞬間、二人は弾かれたように十メートルほどの間合いをとる。

「貴様も無視出来ないほどの傷を負っているではないか！……まだ、ほぼ互角ではないか？」

「そうとも限らん。俺はまだ力を隠しているかもしれんぞ！」

「その可能性があるのは我とて同じ！」

再度、激突を果たす両者。

一筋、二筋……決して少くない量の血が舞う。

両者の身体はブレて、もはや魔族でも隊長クラスでなければ目で追えないほどだ。

「貴様の戦い方はおもしろいな！攻撃しかしていないようで、急所はキチンと護っている」

「フツ、お前の剣筋は全くおもしろくないがな！…力任せしかできないのか？」

剣と剣が交わるたびに交わされる言葉。

その瞬間だけに二人の姿を、肉眼で確認出来るようになるのだ。

「…言ってくれるな！いいだろう！我が最大の力をもって貴様を潰してくれる！」

そう言い放ち、リオールは魔大剣をレイの目にも霞むほどの速さで振り切った。

白羽で受け止めたレイの身体が、後方に飛ばされる。

それは、ほんの一瞬の間だったかもしれない。だが、リオールが技を発動するには充分だった。

いくぞ！剛刃地烈衝！
しつじんじれつしょう

神速で地面に叩きつけられる魔大剣。

すると、信じられない熱量と光量を持った純白の光が、地面を粉々に吹き飛ばしながらレイに突進していった。

その激しさはまるで鬼神の怒りのように。

光はレイに収束していき…。

弾けた。

轟音と閃光が辺りに迸る。

だが…。

「貴様の力はそんなものではないのだろうか？姿を見せよ！！」

「言われなくとも!!」

レイはそんなことをものともせずは無傷で光の中から出てきて、瞬
迅で肉薄する。

再び、両者の激しい激突は始まった。

その後、時間にして12時間………半日程の、長く永い戦闘が続い
た。激しく、長過ぎる戦いのせいで、さすがの二人にも明らかな疲
労が浮かんでいる。

ふと、レイが周りを見、分身の状況を確認すると、数百メートル離
れた場所でもありえないレベルの戦いが繰り広げられていた。
と、次の瞬間。

「どうした!余所見をしている場合かああ!!」

瞬間、リオールの魔大剣がブンツと唸りをあげ、レイのクロスさせ
た双魔剣ごと吹き飛ばした。
激しく振りぬかれた魔大剣はそれだけで凄まじい衝撃波を生み出し
ていた。

「戦闘中、他事に目を向けるとは笑止!見損なつたぞ!」

吹き飛ばされたレイは、立ち上がりはしたものの、答えない。
ただひたすらに、双魔剣を下段にダラリと構え、目を閉じている。

「……もう諦めたというのか?まだこれからだと言うのに。……
まあよい、人間の身で、あれだけ我を楽しませてくれたのだ。その
強さに免じて、一瞬で屠つてやるっ」

「……………殺せ。武人…グツ…に…情けは…不要…だ」

息も絶え絶えに、リオールはそう告げた。

「そうか…。惜しいが、助ければそれはお前への冒瀆だな。ならば望みどおりに、お前を殺……………」

レイは不自然なところで話を区切った。

……………区切らざるを得なかった。

「お前さあ。俺らをナメすぎなんじゃねえの？」

「そうそう 確かに楽しかったけど……………もう飽きたわ」

レイが下を見ると、紫の光芒に覆われたナイフと、黄色の輝きを纏うチャクラムが……………心臓に突き刺さっていた。

「な……………に……………」

ナイフとチャクラムがレイの身体から引き抜かれる。

辺りを真っ赤に染め……………レイは地面に倒れこんだ。

忘れ去られた世界？ギルティアス？（後書き）

またもや、レイがピンチです！（今回は幻覚オチではないですよ？）
しかも、今回は少しひっぱります。

次回以降をお楽しみに！

それでは、人気投票エントリー者の説明をどうぞ！

エントリーNo.1 黒神 怜（レイ・クロカミ）

主人公。作者のNo.1推しキャラ。特徴は、『主人公紹介』参照。
（強さの面に関しては、『主人公紹介』を書いた時より、さらに向上しているので参考にならない）

常に黒衣で身を包むのは、リーネの死に対し、喪に服しているから。
……という裏設定があったりする。

レイからの一言。

『人気投票？興味ないな。そんなことより俺は、もつとやらなければならぬことがあるのでな。……まだ足りないんだ。力が。強さが。だから俺は、リーネのためにも、シャルロットのためにも、強く在らなければならぬんだ』

エントリーNo.2 リーネ

レイの初恋の人。故人。本名、リーネ・リアリス・フィオーネ。
名前だけの出演だが、何気に作者のお気に入りキャラでもある。し

かし、この先の本文で出演する予定は無い。
リーネからの一言。

『私に投票するのなら、レイに投票してあげてください。……………折角発言の場が与えられたので、レイに一言いいですか？……………レイ、私のことは気にしないで。私の分まで、シャルロットさんと幸せになつてね』

エントリーNo.3 アシエル

第二魔法師団長、『無情』のアシエル。本名アシエル・ノード・セテイス。

作者が、ただ敬語キャラを出したいがために作った魔族。（詳しくは、『魔法

師団長乃目録』参照）

アシエルからの一言。

『せっかく輪廻転生の環にて、魂と記憶を洗ってもらっていたというのに……。連れ戻さないでいただきたかった……。……。ですので、お情けでも良いので、私に一票よろしくお願いしてもよろしいでしょうか？』

エントリーNo.4 ルナルト

第三魔法師団長『崩壊』のルナルト。本名、ルナルト・フォン・マールフィン。

一応、伏線を張ってあるキャラ。作者は性格的には嫌いだが、キャラ的にはもつと出したいくなるという不思議なキャラでもある。（詳細については、アシエルと同じく）

ルナルトからの一言。

『僕に投票してよ！そしたら、投票してくれた君は、僕のお気に入

りのモノにしてあげるからさ（壊されても知りません。壊されるわけないだろ！と一応ツッコミを入れておきます）
『

今回、活躍？しているリユナ、リオール、ティードたちは、次回に載せます。（『魔法師団長乃目録、其の弐』として載せる予定）

読んでいただき、ありがとうございました。

シャルロットの危機（前書き）

意外と早く一通りのオリキャラを出すことに成功したので、今日から人気投票を始めさせていただきます。

今話の最後に説明文を載せておくので、参考にしてください。

それでは、本文をどうぞ！

一方、陸のシャルロット。
自身のウィンディー・アイシクルや、エアハンマーなどを使い、次々と敵を仕留めてゆく。

敵からの魔法は全てが意味なく、ブレスレットに吸い込まれていく。

「……………レイ。ありがとう」

周囲の敵を倒し、一旦、息をつきながら、シャルロットはブレスレットを撫でる。

しばらく休憩していると、一つの声が発せられた。

「ケツ、むかつくぜエ。隊長のヤツ、俺によえゝ人間の討伐を任せ
るなんてよオ」

その声が聞こえた瞬間、シャルロットは後方に身を投げ出した。……
自身が今までいたところには、紫の光を纏った長剣が突き刺さっていた。

「……………誰？」

シャルロットの声を聞き、物陰から一人の少年が出てきた。
見たところ15歳ほどで、黒髪紫眼といった容姿をしている。

「俺かア？ケケツ、教えてやるよオ。俺の名は『狂乱』のレンドル
！リユナ隊長のいる団の副隊長だア。……………だが、安心しろオ。俺
ア、隊長たちほど化け物じみた強さじゃねエからなア！よえゝ人間
たちでも、訓練したヤツならちよっとは戦えると思っぜエ。……………五
分耐えられるほどならなア！！ケケケケツ」

レンドルと名乗った少年は、なにがおもしろいのか、嫌な笑みを浮

かべ、余裕に笑っている。

「なぜ、私を狙うの？」

シャルロットの問いに、レンドルはさも当たり前のように話す。

「そんなもんは、レイとかいう化け物ヤローのおもしろい反応を見るために決まってるんだろオがア！ケケッ」

「……あなた、最悪。絶対に倒す」

シャルロットがそう言うと、レンドルの纏う空気が激変した。

「ああア？……誰が誰を倒すってエ？俺が負けるわけねエだろオがア！調子に乗ってんじゃねエぞオ！！！」

強い殺気。隊長たちには大きく劣るものの、凄まじい圧力がシャルロットを襲う。

だが、シャルロットは恐怖を全て押し退けて、答える。

「調子になんて、乗っていない。私には、レイの加護がある」

「ケケケッ、確かにその腕輪は全ての魔法を吸収するようだなア。

…だがなア、所詮それだけ！」

言いながら、レンドルはシャルロットに肉薄し、紫の光芒を放つ魔長剣を振り切る。

咄嗟に避けるが、避けきれずにパツと血の線が舞う。

「物理攻撃には全く効果が………ねエんだよオ！ケケケケケッ」

レンドルの馬鹿笑いが響き渡った。

シャルロットは負傷した右手を押さえながらも、毅然とした態度で言い放つ。

「それでも、私は負けない。……レイは私の元へ帰ってくると言った。だから負けてはいけない！」

レンドルは馬鹿笑いを止め、スウツと目を細めてシャルロットを睨みつける。

「てめエ。そういうのってなんかむかつくぜエ。……だいたいよオ、隊長三人相手に生き残れるわけねエじゃん。ふぎけんのもいい加減にしるよオ!!」

「ふざけてない。絶対に勝つ」

「……その態度がむかつくって言ってんだアアア!!」

レンドルは叫びをあげ、シャルロットに突っ込んでいった。

あまりにも速いそのスピード。シャルロットはギリギリで避ける「としか出来ない。」

「オラオラアア!どうしたア、ああアん?よえぞオ!!」

レンドルの怒涛の攻撃は続き……とうとうシャルロットの首に、魔長剣が叩きつけられようとしていた。シャルロットは思わず目を瞑る。

レイ!助けて!!!

その瞬間、ブレスレットが光り輝いた。

「てめエ！何しやがったア！！」

光が収まると、そこにはレンドルの方に牙を向く……純白に輝く虎がいた。

そして、その虎は顔だけをシャルロットの方に向け……。

『お呼びでございますか、シャルロット様？』

……喋った。

「……………あなたは？」

シャルロットは思わず問いかけてしまった。

『私はマスター……………レイ様から、シャルロット様にお仕えるように仰せつかった聖獣です。名はシファード。以後、お見知りおきを』

平然と答える虎……………じゃなくて聖獣・シファード。

「てめエらア！ふざけたマネしくさりやがってエ！……………一気に潰してやるウウ！！……！」

レンドルは魔力を解放してシャルロットたちの方へ全力で突進する。

しかし……。

『マスターが残された防衛策……………あなた如きに潰されるとお思いですか？』

シファードによって防がれた。

……いや、それだけではない。レンドルの魔長剣を持つ右腕が食いちぎられていた。

「がアアアアアア！……ざっけんアアアア！……！」

「ふざけてなどいない。……トドメ」

雪風魔法・氷鏡。

レンドルの周囲を氷の板が囲う。

そして……。

「《ウィンディー・アイシクル！》」

分身した彼女たちから放たれる無数の氷の矢が、レンドルに収束し……全てが突き刺さった。

『魔族はそれだけでは駄目です。私が消し去りましょう。《永遠^{エターナ}なる眠り！》』

氷の矢によって、蜂の巣にされたレンドルがいる空間が激しく歪み、静かに……本当に静かに永遠の眠りへと導かれ、命と共に完全に消え去った。

『魔法師団長乃目録、其の式』

・第四魔法師団長『腫瘍』のリユナ

本名、リユナ・ミレーネ・フィニトレス。
紫がかつた銀色の髪、真つ黒な瞳。

使用武器は無数のナイフであり、禍々しい紫の魔力を纏っている。
趣味、毒殺。特技、毒薬の製作。性格は最悪。話し方は、常に聞く者を挑発するような、悪趣味極まりないもの。
シャルロットの母親の心を壊した魔薬の製作者。本来、投与されるはずだったエルフ製の毒薬は、彼女によって破壊された。

・第四魔法師団、副団長『狂乱』のレンドル

本名、レンドル・フォルタル・リツシュ。
黒髪紫眼で、15歳ほどの容姿をしている。

隊長であるリユナと同じ、紫の魔力を纏う魔の長剣を使って戦う。
惨殺や虐殺など、普通なら吐き気を催すような事柄に快楽を覚える、狂った殺人鬼。

上位魔族にはなっていないため、魔法師団長たちには大きく劣る戦闘力ではあるのだが、それでも人間とは比べ物にならない戦闘力を誇っている。

・第五魔法師団長『剛力』のリオール

本名、リオール・フィラン・アルフォード。

煌く銀髪を短く刈り込んだ偉丈夫。瞳の色は鮮やかな金。

得物は、純白の魔力を纏った魔大剣。その刀身は2mという、長大さを誇る。

純粹に力のみを求め、強大な敵と戦う時にはフェアな状況で戦うことを信条としている。

また、強大な敵と戦うことを心待ちにしており、相当な戦闘狂。バトルジャンキー

一人称は『我』であり、その尊大な態度に見合う実力を持っているが、レイには及ばず、両腕を切り離された。

その本質に『悪』はない。

・第七魔法師団長『幻想』のティード

本名、ティード・フォーラル・シュナイダー。

鮮やかな金髪を、男性にしては長いと言えるほどに伸ばしている。

瞳の色はブルーグレイ。

戦闘時には、チャクラムという武器にイエローの魔力を纏わせて戦う。

チャクラムというのは、円形の武器であり、円の外に刃がついているものである。投擲を主な攻撃手段とする。手首のスナップを利かせれば手元に帰ってくることもあり、大変トリッキーな戦闘方法となる。

荒い口調で話し、その態度は常に軽く、適当である。

また、彼にかかれば、人間の幸福は全て幻想と化す。

〈魔族に有効な聖獣〉

強大な魔族たちだが、それに対抗できるような幻獣も存在する。

そんな魔族に対して切り札というべき幻獣のことを『聖獣』と分類される場合がある。

現在確認されている『聖獣』は、純白の光を纏う虎、シファードのほか、三体である。

一般に『聖獣』は、何者にも従うことはないのだが、一度『主』^{マスター}と認められた者や、その仲間に対し、厚い忠誠心を示すと云^いわれている。

また、『聖獣』と分類されることはないが、最強の魔獣・メモリーズも魔族と対抗……いや、上回る力を持っている。(上位魔族は別とする)

シャルロットの危機（後書き）

レイの安否については、明日の投稿文で明らかにされます。

それでは、エントリー者の発表です。

エントリーNo.1～4

レイ、リーネ、アシエル、ルナルト。

この四人については、前話参照。

エントリーNo.5 リユナ

第四魔法師団長『腫瘍』のリユナ。

詳細については上記の『魔法師団長乃目録、其の式』参照。

口癖が『アハッ』のウザキャラであると同時に、作者にとっては意外と好きなキャラクター。

リユナからの一言。

「人気投票？もちろん私が一番よねえ？期待してるわ、アハッ……
……もし一番じゃなければ……分かってるわよね」

エントリーNo.6 レンドル

魔法師団副団長『狂乱』のレンドル。

詳細はリユナと同じく。

シャルロットの戦闘模様を書きたかったから作っただけのモブキャラ。

作者にとっては、そんなに好きなキャラでは無かったりする。
レンドルから一言。

『俺の時代だア。とうとう俺の時代がやってきたぞオ。ケケケツ。
人気投票なら俺が一番に決まってるからなア!!』

エントリーNo.7 リオール

第五魔法師団長『剛力』のリオール。

詳細はリユナ、レンドル同様。

オリキャラの中では、レイの次に推しキャラ。

本当は、レイたち側に寝返らせたかった。

リオールからの一言。

『我が興味あるのは戦いのみ！他には何も要らぬ。……………まあ、
我に投票するのなら、止めはせんがな』

エントリーNo.8 ティード

第七魔法師団長『幻想』のティード。

詳細は他の魔族と同じく。

設定を作った時には『リード』という名前だったのだが、“リ”で
始まる名前が異様に多かったために名前変更されたヤツ。

ティードからの一言。

『よう、ティードだ。どうせ投票なんてやらなら、目指すは一番だ
ぜ？まっ、俺の性格が少しでも気に入ったんなら、俺の願望実現に
協力しやがれ！』

エントリーNo.9 シファード

聖獣・シファード。

詳しくは『魔法師団長乃目録、其の式』の『く魔族に有効な聖獣』の項目参照。

敬語キャラが、若干アシエルとかぶる。

シファードからの一言。

『私はマスターであるレイ様に忠誠を誓った身。私になど投票はせず、マスターに投票してくださいと助かります』

エントリーNo.10 メモリーズ

最強の魔獣・メモリーズ。

全てが影で構成される、美しき龍。（詳細については、数話前の話である）『我、レイ・クロカミの名の下に命じる』を参照（次話で、意外？な役割を担うことになる。メモリーズからの（心の）一言。

『我二八、人間タチガ人気投票ナドトイウモノヲ行ウ理由ヲ量リカネル。ヨツテ、我ニ投票ノ必要ナドナイ』

これでエントリー者は出揃いました。

今日（2010/11/13）から投票は解禁です。終了日は未定。

前話に記したとおり、人気No.1のキャラクターには、後書きで語ってもらいます。

『本文を読んでいると、こいつのキャラが気に入った！』という理

由でも、『本文ではあまり役目がなかったこいつに、後書きで頑張
って欲しい!』という理由などでもいいので、投票してくださいと
嬉しいです!

また、投票方法は感想の『一言』か、直接のメッセージで願
います。

覚醒召喚！（前書き）

人気投票はまだ続いております。（2010/11/14 現在）
少しでも気に入ったキャラがいれば、投票してみてください。
お待ちしております。

それでは、本文をどうぞ！

覚醒召喚！

レイの倒れこんだ地面には、激しく噴き出した血の水溜りが出来ている。

「ありやく、こりゃ意外とあつけないもんだな」

「人間ってのはそういうもんよ。心臓やられたら即死。アハッ」
「それにしてもリールう！随分やられたな！こいつの本体、そんなに強かつたか？」

「……あ。あ。……この…俺…が……ここ…まで…追い詰め…られ…る…ほどに…な」

「もう息も絶え絶えじゃない いいわあ、私が治してア・ゲ・ル」
「いやいや！『腫瘍』のあんたがやったら間違いなく毒で死ぬだろーが！俺がやるって！」

「あら、残念 新しい薬、試そうと思ったのに。アハッ」

ふと、ティードがレイの方に目を向ける。

「なっ！いねえ！」

「はあ？！そんなわけ…きゃあ…！」

ブンツと振りぬかれた黒い影によってリユナが吹き飛んでいった。

ティードが顔をめぐらせると、そこには血だらけで立つ…しかし、心臓付近についた傷が完全に塞がったレイの姿が。

そう、魔族二人の斬撃は、レイの心臓を貫いてなどいなかった…
…つまり、レイは、直前に急所への命中を避けたのだ。

レイの背中からは一對の、影のような翼が生えており、凄まじい圧

力を与えている。

「メモリーズの力を完全に俺の中に召喚した…。これでお前たちを倒す！」

メモリーズ……………それは万物の心の管理者であり、最強の魔獣である。

それを自身に召喚し、その膨大な魔力を利用して、傷を塞いだのだ。

「ああ！？メモリーズ？そんな力をてめえの身体に完全召喚したつてのか??！」

「そうだ。自身に魔獣を召喚する。つまり覚醒召喚。…それは俺とメモリーズの力の掛け算だ。俺を…そしてメモリーズを…軽く越える力を一時的に解放する。残念だったな、魔族ども。…人間を…
…俺をナメるなああ!!！」

レイは叫びと同時に空中に浮かび上がり、両手に超巨大化された黒羽と白羽を握る。

青き光芒が激しい閃光を生み出し、それと共に、魔剣特有のブウウンという無数の羽虫のたてるような音が辺りに鳴り響く。

「な…なによ、あれえ！勝ち目ないじゃない!!！」

「うっせ、リオールが自己治癒を終えるまでは、俺らで戦い抜かなきゃいけねえんだ！集中しろ!!！」

二人が話している間にもレイから発せられる力の波動は凄まじくなくなつてゆく。

周囲に転がっていた大岩は力に当てられて無残にも崩れさり、レイ自身からは青い光が立ち昇る。

そして、一瞬にして目の前から姿を消したかと思うと…。

「がっはあああ…！」

「きゃあああ…！」

二人は強力なシールドを何重にも展開していたというのに、魔剣に斬られた箇所から鮮血が迸る。

「どうした！まだ終わらないぞ…！」

レイは最早、この中の誰の目にも終えないほどの動きで移動し続け、一秒に何十回もリユナとティードを斬りつける。

「な、なに…！よ！こんなのどうしろってゆーの…？！」

空中に浮かんだ、紫の光を発する無数のナイフを自由自在に操り、なんとか防ぎながら問いかけるリユナ。

「し、知らねーよ！俺だつて精一杯だ…！」

全身に鮮やかなイエローの魔力をたぎらせて、本当にギリギリの所で避け続けているティード。……いや、避けきれずに、浅いとはいえたくさん傷を負っている。

ふいに、レイの動きが止まった。

「ん？もしかしなくてもこれってチャンスじゃね…？！」

「そつよ…！急ぎなさい…！早くやるわよお

《ポイズン毒独

シンドローム症候群！

》

「よっしゃ！よく分かんねえが、俺も潰してやる！《ハビネス・ファンタズム幻想の幸福！

》
万物を毒死…そして独死させる毒々しい紫の閃光が……全ての幸福を奪い取り、悲しみを植えつける凶悪な幻想が……激しい衝撃と轟音を伴ってレイにぶち当たった。

「こ・れ・で 毒死ねっ」

「それも、この世の幸福を全て取り上げられて、空っぽの魂と共にあの世逝きだあ！！」

今度は自信に満ち溢れた二人の声があがった。

だが、ある程度回復したりオールから否定の声があがる。

「違う！ヤツの狙いは他にある！もうすぐ我らを潰すような大技がくるぞ！！」

そして、レイの声が響き渡る。

「その通りだ…。三人仲良く消え去ってもらおうか」

容赦はしない…！

レイがそう言い放つと、巨大化された双魔剣の輝きが、さらに凄まじい光を放ち始める。

『神威真刀流』二刀劍舞・拾じゅうの型、次元じげん断空斬。

レイの双魔劍が超スピードで振りぬかれる。

瞬間、劍の通った後から次元の壁が切り裂かれてゆき、広がり、そして三人を飲み込む。

……………そして、全てが引き裂かれた。

次元さえも切り裂く『不可視の斬撃』に、隊長クラスの魔族でさえも耐え切れなかったのだ。上位魔族たちは粉々に引き裂かれていく……………それこそ、素粒子レベルまで。

こうして三人の魔族は、跡形もなくこの世から消え去った。

残されたレイはメモリーズを幻界に戻し、一つ呟く。

「俺は……………いつまで殺し続けなければならないんだ……………」

深い悲しみ……………そして、レイは激しい出血と疲労、そしてメモリーズの覚醒召喚による強すぎる反動によって倒れた。

戦局がほんの少し楽になった頃、シファードがふと顔をめぐらせた。

『シャルロット様、どうやらマスターが魔族を倒したようです。…しかし、かなりの疲労で気絶なさっています。助けに行かれま…行く……………分かりました。では、世界の扉を開きましょう』

シファードが一声吼えたと、シャルロットたちの目の前に扉が出現した。
迷わずに入っていくシャルロット。

「レイー!!」

シャルロットはレイに抱きつきながら名前を呼んだ。
荒廃した世界『ギルティアス』では、すでにレイは起き上がって
いたのだ。…付着していた血も完全に消し去つてある。

レイはシャルロットを優しく抱きとめながら話しかける。

「シャルロット。シファードを呼び出したんだな」

「（コクリ）……………でも、気絶していると聞いた」

抱きついたまま頷きつつも、さり気なく不満をもらすシャルロット。
それにレイは苦笑しながら答え、次いでシファードに労いの言葉を
かける。

「ああ、この世界の時間軸は大幅にズレているからな。この一日
がハルケギニアの一時間だ。……………少し前までは気絶していたからな。
シファードは嘘ついてないぞ。……………そしてシファード、ご苦労だ
つたな。もう戻っていいぞ」

『御意に』

シファードの身体は光に包まれ、消えていった。

「本当に…本当に無事でよかった」

本当に安心したようにシャルロットは呟いた。
レイは抱きしめる手に一層力を込め、答える。

「俺は絶対に帰ると言っただろう？……俺はシャルロットを裏切ることはしないさ」

「……分かつてる／＼／／」

二人は時間軸が違うのを良いことに、しばらくの間抱き合っていた。

一方、サイトたちの戦いはもうすぐ終わりを告げようとしていた。
ルイズの虚無魔法の詠唱も佳境に入っている。

「ルイズ！いつでもいけるぞ！ここでぶっ放してやれ！！！」

サイトは、未だに向かってくる竜たちを打ち落としながらルイズに告げた。

そして、長い長いルーン詠唱が終わり、魔法名が言い放たれる。

「いくわ！これでもう私はゼロじゃない！《エクスプロージョン！
！！》」

周囲を激しく照らしながらも、優しく輝く光が、巨大戦艦を中心に弾けた。

「おお！あの光は！？」

「奇跡だ！奇跡が起きたぞ！」

「フェニックス？フェニックスの光なのか？？」

「フェニックスの光が、我らに勝利を与えてくださった！」

「きっと、始祖ブリミル様の思し召しに違いない！」

「我らは勝つたのだ！始祖ブリミル様のお導きによって！！」

「……………トリスティン王国万歳！！！！」「……………」

「……………アリエッタ姫殿下万歳！！！！」「……………」

「……………」

「……………」

国を讃える万歳斉唱が響き渡った。

正直、調子の良い連中だ。

ルイズの…虚無の仕業だということに全く気付いていない。

だが、これで伝説は現実のものとなり、新しき伝説として再誕した。

そして、爆発によって、敵の数が大幅に減ることはないものの、敵艦隊は全てが撤退していった。

突き抜けるような青い空を、一機の戦闘機が降りてくる。平原に着地した戦闘機を見守る影が一つ。

そちらに向かつて伝説となった少年が駆け抜けていった。

「シエスタ！」

「サイトさん！」

虚無の少女は、なにか悔しそうな表情でそれを見つめていた。

「お前はそれでいいのか？」

「きゃあ！って、レイ！タバサ！いきなり現れないですよ」

レイたちがルイズの元へ転移してきたのだ。

「ほら、さつさとあのアホ面のところに行って来い」

「じゃないと、取られる」

「……………分かったわよ！行けばいいんでしょ、行けば！！」

ルイズはサイトたちの方に向かって走っていった。

サイトは二人の少女にもみくちやにされながらも、スッキリした声で呟いた。

「……………やっぱり平和が一番だな！」

一方、レイとシャルロットは。

「全く、世話の焼ける奴等だ」

「本当に」

「…しかし、伝説のくせに色恋沙汰にしか興味がないのか」

「呆れる」

そんなことを言いながらも、その実、二人は手を固く握り合っていた。

覚醒召喚！（後書き）

とりあえず一段落です。
ここまで長かった……。
ちよつと感動です（笑）

今まで読んでくださってありがとうございます。
これからもよろしくお願い致します。

ここで、人気投票のエントリー者をもう一度記させていただきます。

エントリーNo. 1 レイ・クロカミ 黒神 怜（最強な主人公。No. 1 推しキャラ）

エントリーNo. 2 リーネ（レイの初恋の人。故人）

エントリーNo. 3 アシエル（第二魔法師団長。敬語キャラその

一）

エントリーNo. 4 ルナルト（第三魔法師団長。伏線キャラ）

エントリーNo. 5 リユナ（第四魔法師団長。悪趣味な喋り方。

『アハッ』）

エントリーNo. 6 レンドル（第四魔法師団、副団長。モブキャラ）

エントリーNo. 7 リオール（第五魔法師団長。一人称が『我』）

エントリーNo. 8 ティード（第七魔法師団長。作者により名前を変えられた過去を持つ）

エントリーNo. 9 シファード（聖獣。敬語キャラその二）

エントリーNo. 10 メモリーズ（最強の魔獣。『覚醒召喚』という形で活躍）

この十人です。

投票終了日は未定ですが、出来る限り早く投票してくださると嬉しいです。

“いじられツッコミ役”の真髓をご覧に入れよう(笑)(前書き)

2010/11/15 現在、キャラ人気投票は続いております。
未だ票が集まらないので、少しでも『こいつのキャラが良い』と思
ったキャラがいれば、感想の『一言』で投票していただけると、作
者は狂喜乱舞します(笑)

さて、今回の“いじられツッコミ役”さんは、かなり可哀そうにな
りなっています(笑)
期待?してください。

それでは、本文をどうぞ!

“いじられツッコミ役”の真髓をご覧に入れよう(笑)

レコン・キスタとの戦争騒ぎも一旦落ち着き、レイたちは平和な日々を送っていた。

シエスタがサイトに絡み、ルイズと三つ巴(その実態はサイトを巡つての争い、しかも被害は全てサイトへ)のごたごたがあったり、レイとシャルロットはいつも通りに静かに、寄り添って日々を送ったり、そして二人でキュルケに頼んでオルレアン夫人を訪ねてみたり、コルベールがゼロ戦に夢中になったり、キュルケがサイトから乗り換えてまた逆ハー作っていたり、マチルダがオスマンのセクハラに耐え切れなくなって秘書を辞め、正式にレイの傭兵団『漆黒の風』に入団したり、デルフの出番が少なかったり……まあ、とにかく平和な日々を送っていた。

ただ一つ残念なのは、戦争の事後処理に追われ、アンリエッタとウエールズの結婚式が延期になってしまったことだ。……その代わりに、アンリエッタは女王に即位したが。

ルイズなどは、「せっかく詔を考えたのに!!」と嘆いていた。

……考えたのはレイであり、ルイズはなにもしていないのだが、それには触れないであげて欲しい。

唐突だが、レイたちは今日、王宮に呼び出されていた。

レイなどは、「呼び出すならもつと前から連絡をよこせ。だいたい、

タバサ（心の中ではシャルロットと読んでいたりする）を連れて行けないとか、ふざけるな」と文句たらたら（シャルロットも激しく同意していた）だったが、構わずに転移で王宮の近くに跳ぶことを強要された。（最終的に、シャルロットも連れて行くことで、妥協案……というか、レイがそう押し切った）

というわけで、レイ、シャルロット、ルイズ、サイトの四人は王宮にやってきた。

今度は衛兵たちの間をすんなり通り抜け、アンリエッタの私室まで辿り着く。

「ルイズ！ ああ、ルイズ！」

「姫様！ ……いえ、もう陛下と呼ばなければならぬですね…」

「そのような他人行儀など許しませんよ？ あなたはわたくしの最高のお友達を取り上げるのですか？」

「では、いつものように姫様と呼ばせてもらいますわ！」

ルイズとアンリエッタは、相変わらずオーバーリアクションが好きなよう。

「そうしてください。………はあ、でも、女王などになるんじゃないわ。退屈は二倍、窮屈は三倍、そして気苦労は十倍よ。…ウエールズ様がいなかったら、わたくしは今頃、倒れていてもおかしくないですわ」

「君の負担が少しでも減らせるのなら、僕はどんなことでもするよ！」

「ああ、ウエールズ様！」

「アン！」

完全に二人の世界だ。

「それでタバサ（心の中ではシャルロット）、その時の話だがな……」
「……それ、おもしろい」

あー、レイとシャルロットも二人の世界が形成していた。……というか和み過ぎです。

「って、レイ！お前までタバサと二人の世界に旅立つな！なんかもうカオスになるから！」

「……ん？サイト、もう話は終わったのか？早いな。では、帰ろう。

それでタバサ（心の中では……以下略）……」

「……それ、聞きたい」

「おいしいい！ふざけてんの、それ？ふざけてるよね？ふざけ過ぎちゃったりしちゃったりしてますよね？！……あれ？なんか自分でもなに言ってるかわかんなくなってきた」

サイト、一人で混乱中。

「ふざけてなどいない。なあ、タバサ（心の中では……以下略）？」

「そう。私たちは普通に会話しているだけ」

「いやいやいや、とりあえずここに呼ばれた理由とか訊くんじゃねえの？！」

「勝手にやっていたらどうだ？」

「私たちは会話に忙しい。……それで、レイ。話しの続き」

シャルロットは催促するようにレイの真っ黒なジャケットの裾を掴み、寄り沿いながら呟いた。

そしてレイは苦笑しながら（しかし満更でもないような感じで）シャルロットの髪を梳き、話し始めた。

「ああ、そうだな。それで、その時にはな……」「つて、おいしい！これじゃ今日の話がこのまま終わっちゃうからね?!レイとタバサが喋ってるだけで一日終わっちゃうからね?!」

「俺以外で話を進めればいいだろう?」

「サイト、邪魔しないで。……レイ、もう話じゃなくてノノノ……」

そう言いながらレイに抱きついた。

レイは優しく微笑み（優しい笑みは稀です。激レアです）、やはり優しく抱きとめ、自身の胸辺りにくる頭を撫でる。

そしてシャルロットは、本当に気持ち良さそうに目を細めた。

……… どんだけ二人の世界を展開すれば気が済むのだろうか?

「やめてええ！最近ルイズに叩かれることが多い俺へのあてつけですか?! だいたい俺だってね、ちゃんとやってんだよ?なのにアシがああでこれが……… もう！またもや自分でなに言ってるか分かんねえよ!!」

サイトの混乱はピークに達したようだ（笑）

「……… 悪い。少し冗談が過ぎたな。まさかそこまで混乱するとは……。まあ笑えたが」

「おもしろかった」

どうやら、一応冗談だったらしい。

……… もちろん、二人とも冗談だけで二人の世界に旅立っていたとは思えないが。

「もういじるのやめてえええええ!!!!」

「サイト、うるさいわよ（笑）姫様とウェールズ様が困惑なさって

るじゃない」

いきなりのルイズからのツッコミ（ナイスです、グッジョブ）が入った。

「……………もういい。俺はもう気にしない。気にしないんだ。だってそうだろ？あの時だって……………（ブツブツ）」

そしてツッコミがクリーンヒットしたサイトは、涙目になっていじけてしまった。

哀れ、サイト。

「さて、話を本題に戻そう」

「レイ！！切り替え早過ぎるからね?!」

「サイトも復活が早いじゃないか」

「なかなか驚愕に値する。……………ギャグ補正？」

「……………もうそれでいいです。だって……………ハッ！危ない、また旅立つところだった」

サイトはギリギリのところまで持ち直したようだ（笑）

「皆さん、本当におもしろいですわね。会うだけで気分が楽しくなりますわ」

「確かにおもしろいね。特にサイト君、良い働きをしているよ」

「マジですか?!ありがとうございます!!褒めてもらえるなんて……………」

サイト、感涙。

まあ、それはどうでも良く……………。

「随分遠まわしになってしまったが、今回俺たちを呼び出した理由はなんだ？」

レイがやっこのことで軌道修正を始めた。

「そうでしたわね。すっかり雑談のために呼び出した気分でしたわ。……あの、実は今回のことでお礼をしようと思ったの」

「アルビオンにいた頃から、君たちには世話になっているからね」「本当に多大な恩ですわ。本来ならルイズ、あなたには領地……いえ、小国を与えて、大公の位をあげてもいいくらい。そして、戦闘機の使い魔さんにも爵位ぐらいは授けてもいいはずですよ」

「レイ君も僕たちを救ってくれたからね。しっかりと恩賞を与えないな」

口々に言うが、レイは反論する。

「俺はただの裏方で助っ人だ。そんなものは要らん。全部サイトにやれ。……だいたい、アルビオン戦は地上で少し戦っただけだ」

「あら、そういえばあんたなら地上で派手に戦ってるところが見えてもおかしくないのに、全くそんなの見えなかったわね。……もしかして、サボリ？」

これにはシャルロットが反論する。

「そんなことない。レイは三人もの魔族と勇敢に戦って、勝った」「あー、タバサ（心の……以下略）。それを言ったら説明がめんどくさいんだが……」

レイの苦言も聞かず、アンリエッタとウェールズが興味を示す。

ちなみに、ルイズとサイトは開いた口が塞がっていない。

……まあ、魔族三人と戦ったと聞けば、当たり前前の反応ではあるが。

「魔族とは一体どういう存在なのですか？ルイズたちがとても驚いているようですけど」

「そこまで強い存在なのかい？50000の兵を退けた君が苦戦するほどに？」

レイはハアアアアア、と長めの溜め息をつき説明を始める。……

……絶対に世間に公表するな、と前置きをしたのちに。

それはもちろん、民の混乱を防ぐためなのだが、本人の『目立ちたくない』という思いも強く現れていた。

レイが説明を終えると、皆は驚きながらも感謝し、称え、尊敬した。

「そんなすごい敵が……。でもレイさん、あなたはとてもすごいですわ。……表立った恩賞を与えられないのがすごく残念」

「レイ君は本当にすごいんだね。君の力には、いつも助けられてしまっな！」

「レイ！お前、超かっけー！俺らに黙って魔族討伐とか、どんだけかっこいいんだよ！尊敬するぜ！」

「……まあ、今回はかりはとつてもすごかったことを認めてあげてわ」

「レイは私の英雄。……皆にはあげない」

……シャルロットは願望でした。

「俺はタバサ（心の……以下略）のものではないが、ずっとタバサ（略）のそばにいたと言っただろう？そんな心配は無用だ」

「レイ……」

二人の世界に旅立っていかれました。

その後、なんだかんだで（いや、適當過ぎね?!……いえ、対して重要じゃないと思うんで大丈夫です）ルイズの虚無がバレて、細かい説明をすることになった。

本当ならば、そのまま虚無の危険性とこれからのこと、並びに魔族のことまで話し合うべきだったのだが、ふざけ過ぎで時間が無くなってしまった。

「まあ、どうとでもなるだろう」

「レイがいれば、大丈夫」

レイとシャルロットは結構、樂觀的だった。……まあ、実際になんとか出来るだけの實力を持ち合わせているのだが。

結局サイトは、恩賞として賞金（+レイの分）をもらい、ルイズは女王直屬の女官になり、その日は学院に帰ったという。

ちなみに、会話途中でレイに抱きついたシャルロットだが、その日はほとんど抱きついたままだった、というのは余談だ。

“いじられツッコミ役”の真髓をご覧に入れよう(笑)(後書き)

はい、とりあえず今回はギャグパートを入れてみました。
どうだったでしょうか？
楽しんでいただけましたか？

さて、前書きにも記したとおり、オリキャラ人気投票は続いております。(2010/11/15 現在)

一応、期間が終わるまでは後書きにエントリー者の名前を載せておきます。

参考にしてください。(詳細は前々話、前々話を参照)

- 1・レイ(主人公。喪服的黒衣)
- 2・リーネ(レイの初恋の人。故人)
- 3・アシエル(『無情』。敬語くん1)
- 4・ルナルト(『崩壊』。精神崩壊してるキャラw)
- 5・リユナ(『腫瘍』。口癖『アハッ』)
- 6・レンドル(『狂乱』。かませ犬w)
- 7・リオール(『剛力』。一人称『我』)
- 8・ティード(『幻想』。名前変更された、哀れw)
- 9・シフアード(聖獣。敬語くん2)
- 10・メモリーズ(最強の魔獣)

一応頑張つて考えたキャラたちです。
No.1のキャラには、後書きで語る役を担わせますので、投票を
していただけると助かります。

惚れ薬の災難。そしてラグドリアン湖へ。 (前書き)

人気投票、未だ続いております。

エントリー者はレイ、リーネ、アシエル、ルナルト、リユナ、レンドル、リオール、ティード、シファード、メモリーズの十キャラです。

よろしくお願い致します。(結構切実です……泣)

まあ冗談はともかく、出来れば投票してくださると感無量です。

それでは、本文をどうぞ！

惚れ薬の災難。そしてラゲドリアン湖へ。

「ガリアから任務が来た。しばらく、ここにはいない」

これは王宮から帰ってしばらく後のシャルロットの言葉だ。

夏休みに入ったのだが、どうやら新しい任務の情報が送られてきたらしい。

「……俺も着いて行こう」

「ダメ。巻き込みたくない」

「俺はいつだってそばにいてやると言っているだろう？」

「……ありがとう／＼／＼」

「これからは何か困ったことがあれば言えよ？任務であれば、一瞬で終わらせてやる。他の事も……俺が絶対に助ける」

「分かった／＼／＼……それと、キュルケも連れて行く」

「了解した」

こうして、レイたちは任務に就くことになった。

一方、サイトたち。

ルイズがモンモランシー（ギーシュとの決闘騒ぎ後、サイトやレイもそれなりに面識を持った人物だ）の作った『惚れ薬』を誤って飲

んでしまいました。

モンモランシーは何気にまだギーシュの事が好きだったらしく、一応復縁していたのだが、ギーシュの浮気もどきが目立ってしようがない。というわけで惚れ薬作っちゃえ!…ということらしい。

……………人の心を操る類の秘薬は、法律で禁止されているのだが。

「おい！モンモン！（モンモランシーのあだ名？）早くルイズを治してくれよ！！」

「うっさいわね！治すにはとっても高い原料を買わなければならぬの！……私のお小遣いじゃ、到底無理だわ。だいたい貴族なのにここまで貧乏なんて。…………（ブツブツ）」

「だああああ！うっさい！！何とかして稼げよ！お前の責任だろ？」

サイトは声を荒げた。

「サイト！モンモランシーとばかり話してちゃイヤ！……………それも私と話すのはイヤなの？」

ルイズだ。惚れ薬でルイズが惚れたのはサイトらしい。

……………惚れ薬、恐るべし。

「い、いやっ、そんなわけじゃねえよ。あの、ええ……………モンモン！ホントに早く治してくれ！頼む！もう俺の理性が！！」

「ああああっ、もう！うるさいわね！分かったわよ！足りない材料は『精霊の涙』。……………頑張れば手に入れないこともないわ。うち水精霊との交渉役だったから」

「マジか！じゃあ、さっさと取りに行くぞ！！」

「しょうがないわね。ギーシュも手伝いなさい。……………気が乗らない

けど、しょうがないわ。ラグドリアン湖まで取りに行くわよ
「分かったよ」

こうして、サイトたちはルイズを元に戻すため、ラグドリアン湖まで『精霊の涙』を取りに行くことになったのだった。

「サイトお！無視しないでえ！」

「お、おうっ！ご、ごめん！」

『ケケケツ！相棒なんかおもしれえことになってんな！』

………締まりが無い二人だ。（あとデルフうるさい by サイト）

というわけで（どういうわけで？）サイト、ルイズ、ギーシュ、そしてモンモランシーは、ラグドリアン湖まで来ていた。

………来たのはいいんだが。

「なによこれ！？水位がこんなところまで……！」

「どうしたんだよ、モンモン」

「水精霊が怒ってるようなの。水位が異常に上がってるの！」

よく見れば、町が湖の中に完全に水没していた。

「なんだよ、これは……」

「とにかく、日暮れまで待ちましょう。それまでは出てきてくれな
いから」

頷くサイト。

「サイトお！私のことも構ってえ……！」

「あ、ああ。悪かったって！泣くなよ！！」

二人のやり取りに呆れるギーシュだった。……………二人も、やりたくてやっているわけではない……………はずなのだが。

そんなこんなで、夕暮れ時。

モンモランシーは湖の前で袋を出す。そこから、彼女の使い魔、カエルのロビンが出てきた。

「おねがい、ロビン。古い友達と連絡が取りたいの」

そう言いながら、モンモランシーは針を取り出して自分の指に刺し、カエルの頭にたらす。

「これで精霊は私のことが分かるはずよ。旧き契約者があなたとお話したい……………そう伝えて」

モンモランシーの言葉を聞き、カエルは湖へ飛び込んでいった。

しばらくしたのち、突然、湖から一部の水がゴボゴボと音をたてて上がってきた。

そして、それはだんだんと女性の姿を形作る。

ラグドリアン湖の水精霊が姿を現したのだ。

「水の精霊よ！あなたにお願いがあるの。『精霊の涙』……………あなたの体の一部を分けて欲しいの」

モンモランシーは早速交渉を試みた。

『断る。単なる者よ』

精霊、即答。

「ちよつと待て！…いや、待つてください！今、俺の大切な人が大
変なんだ！ホントに少しいいんだ！体の一部を分けてください！」

なんとかルイズを治したいサイトは、中途半端な敬語で訴えた。

『…よからう。汝はそのためならなんでもするな？』
「当たり前だ！」

『自身が異存なく実行出来るものならば』という条件すら付けない
ところがサイトらしい。……そんな『らしさ』など、欲しくもな
いが。

『現在、強大な力を持つ汝らの同胞が我の方に近づいて来ているの
だが、我は水を増やすことに精一杯で対処出来そうもないのだ』

「水精霊を襲撃する者がいるって言うのかい?!」

ギーシュは驚きの声をあげた。……どうでもいいけどタメ口。

『そつだ、単なる者よ。……その者たちは三人。その内一人の力は、
我では推し量ることすら難しいレベルだ。…そやつを排除すれば我
の一部を与えよう』

「本当か?!分かった!!」

「ええええええ!!そんな強いヤツ相手に出来るわけじゃない
(か)!!」

ギーシュとモンモランシーの強烈な反抗。
だが…。

「俺はルイズのためにもやるしかねえんだ。嫌だったら見てろ」

「サイト！私のためになにをやるのか分からないけどありがとう」

「お、おう。任せろ」

「サイト、だ〜いすき!!!」

「俺の理性があああああああああ!!!」

ルイズはサイトに抱きながら喋っていた。

ギーシュは呆れ、モンモランシーは自身の作った惚れ薬の効果の高さに愕然としている。

夜になった。

フードを被った襲撃者たち三人が近づいてくる。

ちなみに、うるさかったルイズはすでに熟睡している。

「ギーシュ、準備はいいな？」

「なんで結局僕もやることになってるんだろうか……」

「まあ、そう堅いこと言うなって!………さあ、突撃するぞ。

後方支援は任せた」

「…任せたまえ」

サイトはギーシュとの打ち合わせを終え、ガンダールヴのルーン全開で襲撃者の一人に突っ込んだ。

だが、その襲撃者は少し身を反らすだけで避けてしまった。

「なに?!」

「横に跳んでくれ!」

唐突なギーシュの言葉に対し、それでも反応したサイトが横に身を投げ出すと、今までサイトがいた空間にワルキューレが突進した。

「これなら！」

サイトの言葉も虚しく、相手は素手でワルキューレをぶち壊してしまった。

その人物は一旦攻撃をストップさせてしまった二人を一瞥し、左手の人差し指をクイクイツと動かして挑発した。

まるで『お前の力はそんな程度か？もつと本気でかかってこい』と不敵に笑っているかのようだ。

「くっそ！ナメやがって！！」

サイトは悪態をつきながらその人物に向かって突進する。だが、何度も振るわれるデルフは掠りもしない。

『相棒！こいつはやべえ！他の二人を狙うぞ！』

「デルフ！だが、こいつが邪魔して他の二人のそこにはいけねえ！」

デルフと会話をしている間にも何度も剣を振るっているのだが、相手は余裕で避け続けている。……それも、ギーシュの扱うワルキューレたちの攻撃もだ。サイトとのコンビネーションはうまくやれているのだが、その攻撃が届くことはない。

そして、とうとうサイトによって袈裟斬りに振り抜かれたデルフが、相手に白刃取りされてしまった。……それも片手で。器用にも、五本の指だけで剣腹を掴み、微動だにさせないのだ。

そして、その人物は大きく、深い溜め息をつき、一言。

「最近、修行をサボっているんじゃないのか？」
「ええっ??！」

黒いフードを外した人物は、漆黒の髪を靡かせ、真つ黒な鋭い瞳で、射抜くように二人に目を向けてる。

……………その姿は、どこからどう見てもレイだった。

惚れ薬の災難。そしてラゲドリアン湖へ。 (後書き)

しばらく、原作に近い感じの話が続きます。(あくまで“近い”ですが)

それでも良いという方は、これからもお読みください。

よろしくお願い致します。

私事ですが、楽しみなことを一つ。

12/1に、ゆずの新曲、『from』が発売されます！
作者は超ファンなので、かなり楽しみです(笑)

今はこれだけで…。(前書き)

人気投票、続いております。

なんと、票が入りました！

入れてくださった方、ありがとうございます！！

少しでもキャラに興味を持ってくださったあなた！

あなたの投票をお待ちしております！！

今回、短いですがおまけつきです。

それでは、本文をどうぞ！

今はこれだけで…。

「せっかくお前たちの方に『気』を放出していたというのに気付いていない。気付いたのは精霊だけじゃないか？…そして、武器すら出さずに手加減したというのにあのさま。……………サイト、次の修行はランクアップするからな」

「そんな殺生な！自分には無理であります、將軍！！」

「はあ、まあもう少しは出来るようになっておけ」

「……………分かった」

レイとの対面はこんな説教から始まった。

後ろに控えていたシャルロットは無言でレイの隣に寄り添っている。ちなみにキュルケは、怒られているサイトを見て笑いを堪えるのに必死だ。

「ちょ、……………ぷっ……………おもしろすぎ……………（笑）」

……………いや、充分笑っていた。

それはともかく。

「で、お前たちはラグドリアン湖になんの用があったんだ？……………まあ大方、惚れ薬の効果を消すために『精霊の涙』でも手に入れようとしたんだろう？魔力を辿れば、魔法関連のことは大抵分かる」

レイは仕切り直して確認する。

「そんなことまで分かるのかい？君の言う通りだよ。相変わらず、君はすごいね……………」

「当たり前。レイはすごい」

シャルロットは、『レイ至上主義』に基づき、しっかりとレイを称えるのを忘れない。

レイは、一瞬シャルロットに向かって優しい笑みを浮かべて礼を言い、そして表情をもどして話しを続ける。

「ありがとう、タバサ（シャルロット）。……さて、ではこちらの用事も説明しておこうか。俺たちの目的は、ラグドリアン湖の水位を元に戻すこと。そのための交渉道具はもう揃えてある」

「レイの仕事ぶりは素早かったわよ」

「そうでもないさ。……で？なぜ未だに『精霊の涙』を手に入れていないんだ？」

レイは話題を切り替え、質問した。

「いや、『襲撃者』を排除しないと渡してくれないんだ」

「……俺たちのことだろうな。俺たちは別に襲撃するわけじゃない。だから……水精霊と交渉しよう」

何気に、自身の魔法でルイズを治すことは容易なのだが、とりあえず今までの苦労を水の泡にしないであげることにしたレイであった。なんか、サイトたちが哀れなのは気のせいだろう（笑）

モンモランシーが呼びかけ、また水精霊が姿を現す。

「水の精霊よ、あなたを襲う者はいなくなつたわ。約束通り、あなたの体の一部をちょうだい」

『進呈しよう』

水精霊の体が細かく震え、一滴がこちらに漂ってくる。ギーシュがすかさず、それを小瓶に入れた。

それを確認したレイは、精霊にいつも通りの態度で話しかける。

「では、水精霊。今度は俺たちの用件を聞いてもらおうか」

『なんだ、単なる者……いや、強大なる力を持つ者よ』

レイは、『単なる者』にカテゴライズされないらしい。……まあ、当然だが。

「アンドバリの指輪を奪還した。アンドバリの指輪はもともと、お前が守護していた物のはずだ。これを探すために水位を上げていたのだろう？ならばこれを返せば、水位を上げる必要はないな？戻してくれないか？」

そう言つてレイは、ふところから指輪を出して水精霊に見せた。

『強大なる者よ、どこでそれを手に入れた？』

「レコン・キスタの元リーダー、クロムウエルから奪い返した。ヤツは、アンドバリの指輪を使い、死人を生き返らせて操ることで『虚無の再来』を騙っていたのでな。案外、簡単に情報を手に入れることに成功した。……後は奪い返し、監獄に詰め込んだ。それだけだ」

レイはすっかり暗躍していた。

どうやら、もうクロムウエルの出番はないらしい。

もうすでに監獄。アウトだ。

『そうか、強大なる者よ。では、明日までには水位を元に戻しておこう』

「ああ、助かる。……では、水精霊。俺たちの用件はこれで終わりだ」

と言って、レイは水精霊に背を向けた。

『強大なる者よ。我も助かった。ではな』

水精霊は湖面に泡をのこして消えていった。

「これで、全ての問題は片付いたな？」

レイは一応、サイトに確認をとった。

「ああ、完璧だ！これでルイズが戻る！……俺の理性！よく頑張った！！」

そしてサイトは肯定し、安堵の声をあげた。

………安堵の音量は大きく、その声でルイズが起床した。

「サイトおゝ。なに騒いでるの？」

「ゲツ、ルイズ?!」

サイトは、何気に失礼な態度でおどろき、半歩ほど後ろに下がった。

「その反応ひどい！私はこんなにサイトのことが大好きなのに!!」

ルイズはそう言いながらもサイトに抱きついた。

「俺の理性を破壊するなああああああ!!!」

起きぬけのルイズは破壊力抜群だったとき。

そんなやり取りが繰り返されている中、なにを思ったのか、シャルロットはレイに話しかける。

「……………私はレイが好き／＼／」

この空気に身を任せて、さり気なく告白（っぽい事）を試してみたよ
うだ。

「そうか、ありがとうな」

しかしレイは、妹が兄を想うような感じだと思っていたりした。……
…というより、自分が異性として好かれることはありえない、とか
思っている。

しかも、自分がシャルロットの事が好きだということに気付いてない
からたちが悪い。

いつもは鋭いというのに、自分の事となると途端に鈍くなるのだ。
……………難儀なヤツだ。

それに気付き、頬をほんの少し膨らませているシャルロット。

「どうした？元気がいぞ？」

レイがそう言いつつ、シャルロットの頭を優しく撫でると、彼女は途端に上機嫌になった。

「なんでもない／＼／＼」

シャルロットは思う。今は、これだけでいい。今はこれだけで…。

「そうか。なんか嫌なことがあればすぐに言っただろ？」

レイは、シャルロットの目線に自分の目線を合わせるようにして、しっかりとシャルロットの顔を覗き込み、言い聞かせるように言った。……………シャルロットの事をとても気にかけている証拠だろう。

「分かった。ありがとう」

「いつだってお前を助けてやるからな」

そう言って、レイは優しくシャルロットの髪を梳いた。

「…ありがとう／＼／＼／＼」

……………結局、二人は和む。
サイトの方は…………。

「キスして！」

「ちよ、それは…。ああ、もう！分かった！」

「ほっぺじゃやだ！」

「ああああああ！！もう理性やべええええ！！！！」

……こんな状況だというのに。

そして一同は、しばらく綺麗な湖を眺めて和んだ後、レイの転移魔法で学院へと帰るのだった。

お・ま・け　　↓ルイズが治ってからの話↓

「ななな、なんであんなことしたのよ、サイト」

「な、なんでって、お前が……」

「そこはちゃんと断るものでしょ?!……キスなんて……キスなんてええええ!!」

ドゴーーーーー！！！！！！！！！！

………爆発。

どうせなら、あの状態の時の記憶は失くしておいてくれたらよかったのに……。

サイトは爆発によって薄れゆく意識の中、確かにそう思った。

今はこれだけで…。(後書き)

次回、番外編のような話を入れます。

題して、『サイト強化週間』！

まあ、サイト君にも少しは強くなってもらいましょう(笑)

サイト強化週間(前書き)

人気投票続行中！(2010/11/18 現在)

今回は、前回も記したとおり、番外編のような話です。

それでは、本文をどうぞ！

サイト強化週間

夏休み中で帰郷する者が多く、すっからかな学院を、サイトは一人で歩いていた。

「あああ、やっぱり俺も二刀流にしようかなあ〜」

サイトは悩んでいた。

レイがいたら、俺、必要なくね?!…と。

というわけで、サイトはとりあえずレイの真似で二刀流を試してみたくなったのだ。

『相棒。二刀流もいいが、剣はどうするんだ?』

「……そうだった。どうしよう!せっかく活路を見出せたと思ったのに!」

ひとしきり落ち込み、暗〜い空気を発していると、レイとシャルロットが通りかかった。

「どうした?サイト」

「…暗い」

サイトの状況にちょっと引きながらレイとシャルロットは話しかけた。

「いや、俺も二刀流を目指そうかと思っただけで、剣がなくてさ…」

「……やめとけ。二刀流は左右の素早い攻守の切り替え、そして手数で攻めるものだ。これにはそれなりの器用さ、そして片手

で剣を操る膂力も必要。そしてお前は、力の面はガンダールヴでどうにかなるが、器用さが足りていない。お前の場合、手数が多さよ、一撃の攻撃力を高めることが大切だろう。そのためには大剣、もしくは大槍のような、大型武器を右手に、そしてデルフリンガーを左手に持って戦うというのが効果的だな。……まあ、対大軍にしかあまり効果を発揮しないだろうが。それでも、対大軍ならば振り回せば当たる。左右の武器を全て攻撃に向けることで、軍を瓦解させることが出来る。それなりの速さを持つガンダールヴとしては、その戦い方はおすすめかもしれない」

レイは長めの説明を終えた。

だが、サイトは頭の上にはてなを浮かべている。

「いや、全く分からんけど」

「では、簡単に。……お前に二刀流は向いていない。第一、お前はガンダールヴ無しでは騎士見習いレベルだ」

「が……ん」

サイトの周りの空気がさらに暗くなった。

「落ち込むな、サイト。俺がお前を短期間で強くしてやるっ」

「……サイト強化週間」

「おお！それいいな！お願いします！！」

というわけで、サイト強化週間が始まった。

とりあえず、訓練のためにとある森にある広場に転移した三人。

「俺はさ、なんかレイの二刀剣舞みたいなの『必殺技』が欲しいんだ
！」

広場での第一声は、サイトによるこの言葉だった。だが、レイは呆れたように返す。

「お前はガンダールヴや魔の武器の特殊能力に頼る前に、基本的な戦闘力の向上が必要だ」

「え？じゃあ技とか覚えられないの？？」

「覚えたいのか？」

「いえす！！！」

呆れるレイ。ついでにシャルロット。

「まあ、それでもまずは基本的な能力の向上から始めよう」

そう言って、レイは双魔剣を呼び出した。

さらに、手をブンツ！と一振りし、二振りの刀は二丁の拳銃に変わった。

銃身には青い光が灯り、小振りながらも存在感のある魔銃だった。

「さて、サイト。今からこれを撃つからな。必死で避ける。……あ、あ、込められる弾丸は全て純粹な魔力だ。今回はそれを弱く固めてやるから安心しろ。……少し痛いだけだ」

「え？ちよ、無理じゃね？！！」「デルフを構えろ！」はいっ！つて、おい！いくらガンダールヴでもそれは「いくぞ」聞けえええ！！！」

ダダダダダダッ！！と二丁の魔銃から飛び出す無数の青い魔力弾。それはもうありえない速さで飛び出していった。

「痛い！痛い！痛い！痛い！痛い！容赦なしじゃねえかあああ！！！！！」

「どうした、サイト！だらしがないぞ！ガンダールヴを活用しろ！弾丸を見極める！デルフで吸収しろ！お前なら出来る！」

「くっそおお！！やってやらあああ！！！！」

サイトは全力でデルフを振り回し、銃撃の嵐を弾き、デルフに吸収させ始めた。

左手のルーンは眩いほどに光り輝いている。

「シャルロット。追撃でウィンディー・アイシクルも放ってやれ」

いきなりの奇襲にも耐えられるようにするため、レイは小声でシャルロットに魔法を頼んだ。

「分かった。……《ウィンディー・アイシクル！》」

ヒュヒュヒュンツ！十数本の氷の矢がサイトに襲い掛かる。

「おいしいい！！！！尖ってる！鋭すぎ！当たったら死ぬから！！」

「……間違えた」

「間違えは誰にでもあるさ」

「ありがとう／＼」

レイは怒涛の弾幕を途切れさせることなく、シャルロットに優しい表情を向けていた。

「ひでええ！これなんのいじめええ？？！！」

「動体視力を向上させる！これは全ての戦闘において有益な能力になる！見切れ！」

「無茶すぎるううう！！！！」

この訓練はしばらく続いた。

サイト強化週間、四日目。

訓練を行う広場にて。

「では、そろそろ動体視力についてはいいだろう。合格だ。なかなかセンスあるぞ」

「おおおおお！！マジか！！じゃあ、次の訓練はなんだ??！」

「俺との一対一。いつものような擬似戦闘ではなく、実戦的な動きをするからな。これにも対応しろ」

「……………なんか一気に死にそうな気がしてきた」

「……………大丈夫。レイは、あなたが大怪我してもすぐに治す」

「大怪我するのは必然なの??！なあ!!？大怪我とか「やかまし
い！構えろ！」はいいいい!!！」

レイは右手に黒羽だけを出現させ、サイトに斬りかかる。
キンツ！と鋭い金属音が響き渡る。

「ぐうお！なんかいつもより攻撃が重いんだけど!!！」

「戦いの途中に隙を見せるな！」

言葉と同時にレイは、右脚をしならせるように振り、右側から霞む
ような勢いでサイトの腹に叩き込んだ。横に吹っ飛ぶサイト。

……………ちなみにレイの蹴りは、本気でやれば魔族の内臓でさ
え破裂させる。

「グハア!!！」

「戦闘中は五体全てが武器になる！どんな攻撃にも対応出来るように、常に相手の先を読み、『気』の流れを読むんだ！」

レイは言い放ったのちに魔力を使って空気を固め、サイトに触れることなく上に持ち上げて立たせた。そして、間髪入れずにサイトへ突進。

強制的に立たされたサイトは困惑しながらも、剣を合わせる。

「それでいい！痛み慣れる！戦闘では少しでも動きが鈍れば、それは致命的な差となる。特に相手の力量が自分と同程度、もしくはそれ以上の場合には絶対的な差を生み出す！」

「痛み慣れるなんて無茶な！つて、あぶねえ！掠った！！！」

「油断するな！自分の間合いを把握しろ！完璧に間合いを把握すれば、もつとも効果的な瞬間にもつとも効果的な攻撃を繰り返す事が出来る！そして無駄を省け！こと戦闘において、無駄を省くことは速さにつながる！」

レイの叱責と、素早い剣と剣のぶつかり合いはしばらく続いた。

サイト強化週間、七日目、最終日。

「思いのほか、サイトはセンスがいい。間合いの把握もだいぶ良くなった。ここで、技を教えよう」

レイは最終日にして、やっと技を教える気になったようだ。

「マジか！…これでやっと強くなれる！！！」

だが、レイはサイトの言葉を否定する。

「なにか勘違いしているようだが、強さとは技じゃない。確かに俺は大技を連発するが、本当に真価を発揮するのは、鋭い動体視力、完璧な間合いの把握、先読み…それら全てから成される純粹な剣技だ。その点、お前はこの一週間でかなりの成長を遂げたと言えるだろうな。加えて、お前の場合は魔法もデルフで防げる。そのため、本来は技など不要なんだ。……だが、純粹な剣技だけでは攻撃力に欠けるのも事実。だから……」

言葉を切りレイは右手を突き出す。

「デルフを、俺の魔力を纏う剣に改造する」

すると、いつの間にかレイの手にデルフリンガーが握られていた。

「特殊効果は遠隔攻撃、吸収した魔力を身体能力に変換する力。この二つを付けよう。ガンダールヴの能力や、今までの訓練の効果をより引き出す」

「俺が生まれ変わるってか？おもしれえ！」

「ああ。痛みはないから安心しろ」

「おうつ！！！」

レイは右手に持ったデルフに左手をかざし、青い魔力の光を纏わせる。

「《纏え、纏え！我が魔力よ、大いなる意志のもとに魔の力を付与し、魔剣・デルフリンガーとして新たな目覚めを！そして我の魔力を永久に纏い続けよ！我の与える力は、遠き存在への牙なり！我の

与える力は、魔の害を全て彼の者の力に！行使する力の源は常に心に宿る！心よ、強くあれ！彼の者の心よ、常に強くあれ！さすれば魔剣・デルフリンガーは更なる力を発揮する！心の力を糧に、これらの異能をその身に発現させよ！！」

ゆつくりとした口調で紡がれる、長い長い詠唱。力を剣に定着させ、特殊能力を確定させるために必要なルーンなのだ。

レイの詠唱が終わると、デルフリンガーから眩いほどの光が発せられた。

『おおおおお！！力がみなぎってきやがる！！！！』

光が収まると、ブウウンツという魔剣特有の音を響かせ、青い光芒をその刀身に纏った一振りの魔剣・デルフリンガーが誕生していた。

「完成だ。これで遠隔攻撃が可能になり、吸収した魔力をサイトに返還して身体能力を向上させる。対メイジでこれほど役に立つ武器はあまりないぞ。……もちろん魔剣として、半永久的に切れ味は変わらないし、頑丈になっている。そして技だが、『気』をデルフに流し込んで、強力な遠隔攻撃を放つというのはどうだ？……まあ、俺の『七の型・鬼刃閃光』のようなものだな」

レイはそう言ってサイトに新生デルフリンガーを手渡した。

「ありがとな、レイ！！！すげえ！なんかいつもと違う感じだ！！なんか、レイがよく使ってる力の欠片を感じる！！！！」

『あつたりめえよ！今のオレっちは、いつもとは一味も二味も違うぜ！！！！』

「おおおお！すげえぞ、デルフ！！！」

サイトが二人？で盛り上がっている間に、シャルロットはレイに話しかける。

「やっぱりあなたはすごい。本当にどんなことでも出来る」

「そうでもないさ。俺に出来ないことはたくさんある」

「それでも、すごい」

「そうか。なら今度、お前にも魔の武器を渡そう。お前のブレスレットに宿した聖獣・シファードとの連携にも繋がる」

「ありがとう／＼／」

二人は和んでいたのだが、シャルロットが唐突に首を横に傾げた。レイがどうした？と訊くと…。

「……一つ疑問。魔力の色に違いがあるのはなぜ？」

シャルロットはずっと前から感じていた疑問を、レイに投げかけた。

「魔力の色はその魔力を発する者の特性を表す。赤なら『残忍』、白なら『純粹』、黄色なら『幸福』、紫なら『不幸』、緑なら『癒し』、黒なら『狡猾』を司っている」

「……青は？」

「青か……。青は……」

それはレイ自身の魔力の色。説明するのを嫌がるように話さなかった魔力の特性。

「……青の魔力が司るのは『悲しみ』。深い悲しみと冷静さ。冷たい心の魔力だ」

レイは呟くように、しかし、はつきりと言った。

「……レイは冷たくなんかない。深い悲しみと、冷静は合っていると思う。けど、悲しみを司っているとはいえ、最後のはあなたがそう思っているだけ。…違う?」

シャルロットの言葉に、レイは少し沈黙する。

そして、口を開き…。

「ありがとくな、シャルロット。(サイトはデルフとはしゃいでいて呼び方が違うことに気付かない)確かに最後のは俺が思っている青の特性だ」

…と言ってシャルロットの髪を梳いた。

シャルロットは、気持ち良さそうに目を細めながら言葉を続ける。

「あなたは優しいし、心は温かい。もっと自信を持って」

そして抱きつく。

またもや二人の世界へと旅立っていかれた。

一方、サイト。

「これでレイの、なんとか閃光!みたいなすげえ攻撃を放てるんだよな?」

『おっっ!やってみな、相棒!』

「よっしっ!いくぞ!はああああ!!--!」

サイトは体を森の方向に向け、デルフに『気』っぽいものを送り込んでみた。

一応、『気』を送ることに成功したのか、デルフを覆う光芒がいつ

そう強くなる。

「いつけえ！『平賀流』デルフ奥義！スーパー・ハイパー・アルテム・デリート・シヨックウエーブ！！」

長いし、ダサイ。

だが一応、眩い閃光と共に『不可視の斬撃』は一本の木に爆進し、真つ二つにした。後ろの木々も5本程がメキメキと音をたてて倒れた。

「おおお！すげえ！……でも、レイのと比べると全然だな……」

『心の力を糧に！とか言ってたからな。相棒はレイに比べて心がよえ〜んじゃねえか？』

「ええ〜、そりやねえよ〜。それじゃやっぱ勝てねえ……じゃ……あれ？……なんか……力が……」

バタリ、とサイトは倒れこんでしまった。

それを見たレイは苦笑しながら言う。

「いきなり『気』をそんなに放つたら倒れるのも当たり前だろうが」

「……そもそも、レイの真似をしようとするのが愚か」

シャルロットの以外ときつ〜い言葉を最期に聞き、サイトの視界は完全に暗転してゆく。

こうして、最後には気絶しながらもサイト強化週間の実行は成功を修めたのだった。

サイト強化週間（後書き）

どうだったでしょうか？

吸収した魔力を全て自身の身体能力に返還することが出来たらすごいと思いませんか？

加えて、遠隔攻撃も可能なのです。

遠距離への攻撃方法のなかったサイトにとって、弱点の克服といえるのではないのでしょうか。

さて、次回はまた原作に近い話に戻ります。

お楽しみに！

勝たんとして賭けるべからず！負けじと賭けるべし！！（前書き）

人気投票は続いております。（2010/11/19 現在）
どの方の投票もお待ちしています

今回は珍しく、レイなしで話を進めております。

ちなみに、原作沿いですがギャグパートですww

それでは、本文をどうぞ！

勝たんとして賭けるべからず！負けじと賭けるべし！！

唐突だが、学院は夏休みも中盤に差し掛かった。

レイとシャルロットは、オルレアン夫人に会うため、キュルケの帰郷と共にツエルプストー家にお邪魔させてもらっており、すでに学院にはいない。

そしてルイズたちも帰郷しようとしていた。

…していたのだが。

「なんで俺たち、また任務なわけ？」

「しょうがないでしょ？ 姫様が私に助けを求めてくださっただから」

夏休みにも関わらず、任務に来ていた。

今回の任務の概要……それは情報収集だ。

「レイがいればこんなとこに来なくても、欲しい情報が全てであるはずなのに」

「ホントよね。……全く、肝心な時にいないんだから」

「で、俺たちってなんの情報を集めに来たわけ？」

「……知らないで着いて来たの？ 今回の任務は、アルビオン兵の残党が、街中まちなかで平民を煽って反乱が起きないようにするための情報収集なのよ」

「ああ！それで治安を強化するわけか！」

「そういうこと。だから、平民の間ではどんな噂が流れてるのか調べらるってわけ」

「だから今、トリスタニアにいるのか」
「そつ。でも…」

ルイズが少し不満そうな顔をする。
サイトが不審に思い、訊ねると…。

「どうした？」

「なんかこの任務、地味なのよねえ」

任務に対するただの文句だった。

サイトはニヤリとしながら答える。

「しょうがねえだろ？『女王様』で『お友達』の姫様に頼まれたんだから」

「そうよね、姫様はお友達だもの！助けてあげないと！」

ルイズは、意外と単純にのせられてしまったようだ。

そしてその後、財務省に入りアンリエッタから支給された諜報活動のための資金を、400エキュー（エキューは、トリステインのお金の単位）程、手に入れた。

その資金で、とりあえず貴族の服だと目立ってしまうルイズに、平民向けの服を買った。（ルイズは超嫌々だったが）

買ったのはいいんだが、ルイズがまたもや不満をもらす。

「足りないわ」

「何が？」

「活動資金よ！これだけじゃ、馬を買うだけで無くなっちゃっじゃない」

「そんなこと言ったって、ないもんはしょうがねえだろ？……だい

たい、そんなもんに乗ってたら貴族ってバレルし。お忍びの任務なんじゃねえのか？」

「馬が無くちや満足なご奉公が出来ないわ。それにこれだけじゃ、宿に二カ月半泊まるだけでなくなっちゃうー！」

文句たらたら。

というか、どれだけ長く泊まるつもりなのか。

「レイがないのがここまでつらいとは……。あいつがいればルイズをおとなしくさせれるのに……」

「……なんか言った？」

「イイエ、イッテマセン！……ああっ！そっだ！」

サイトは難を逃れるために、いきなり何か思いついたふりをした。

「……どうしたのよ？」

「え？あの〜、うう〜ん、あははは……。あれだよ、うん。……ああ〜、ええ〜つと、あつ、そっだ！金増やせばいいんじゃない？」

「そんな方法があるの？！今すぐ教えなさい！」

「よし！じゃあ、俺に着いて来てくれ！」

着いたのは賭博場だった。

口クでもないことを思いついたものだ。

「博打じゃないの。呆れたわ」

「ま、まあまあ。なな、なんとかなるって」

明らかな動揺。

サイトは数字賭けに挑戦してみることにした。

すると…。

「おお！成功だ！！これで意外と増えるんじゃないか？！」

成功した。なんとという悪運の強さ。
だが、それは不幸の始まりだった…。

「あんた、そんなにちまちま賭けてたら全然増えないわ。…代わりにさい」

「えっ？ちよっ」

ルイズはサイトを押しつけ、数字賭けに挑戦する。
結果、失敗。

「ま、まあ、まだ一回目なもの。これだけ残ってるんだからなんとかなるわ」

賭けのドツボにハマってしまった。

「嬢ちゃん。なにか道具でも賭けるかね？」

「……いい」

「ルイズうう！全部失くなってんじゃないかねえかああ！！」

「う、うるさいわね！……だいたい、あんたがこんなところまで連れてくるのがいけないんじゃない！」

完全な八つ当たり。

「嬢ちゃん？もう賭けねえなら帰ってくれねえか？」

………とりあえず、賭博場から出ることにした。

二人で途方に暮れてトリスタニアの道を歩いていると……。

「あら？そこのお二人さん。そんなに暗い顔してどうしたのかしら？」

二人の耳に、誰かの声が聞こえてきた。

そして、二人は声のした方を見る。

……………絶句。

口調は確実に女性なのだ。……………なのだが、姿形は明らかにおっさん。

オイルでピカピカにできている髪の毛、胸元の大きく開いたサテン生地シャツから覗く、もじやもじやの胸毛……………。
そして二人は……………吐いた。

吐いたあああああああ？？？！！

いや、実際に吐いたわけじゃないけどね？！なんてゆるーか言葉のあや的な？

……………しかし、とりあえず二人は、激しい吐き気をもよおしたのだった。

「全く、失礼な子達ね！」

そんなことを言いつつも、全く気にした様子のないオカマ。

「す、すいません……………」

サイトは謝りつつも、「あああやべえ、この吐き気ハンパねえ」とか失礼なことを考えていたりした。

「聞こえてるわよ？」

いや、口に出していた。

「まあ、いいわ。許してあげちゃう！私の名はスカロン。あなた達は？」

「サイトです。……こっちはルイズ」

「……ルイズです」

ルイズに元気がありません。……吐き気で（笑）

「で、あんな暗い顔してどうしたのかしら？よかつたら力になるわよ？」

マジで？結構いい人や〜と思ったサイトは、金が全くないことを、任務のことは秘密にして話した。

事情を聞いたスカロンは、何故か嬉しそうに両手をパンツと合わせ、答える。

「それならうちにいらっしやい。私のところではお店と宿を両方営んでいるの。働いてくれるのなら、あなた達にお部屋を提供するわ」

「すげえ！めっちゃいい人！そう思ったサイトは、ルイズに小声で話しかける。」

「なあ、ルイズ。この人、めっちゃいい人だぜ？そりゃ、吐き気はやばいけど、この際ヤケだ。働かせてもらおうぜ！」

「そ、そうね。我慢してこの人に着いていった方が良さそうだね。

……我慢して」

「だ・か・ら！聞こえてるわよ?!」

……わりと声は大きめな二人だった。

「す、すみません!……でも、あの働かせてもらってもいいんですか?」

「全くもつ。……しょうがないわね。ただし、働くからにはしっかりとしごくからね。覚悟しなさい」

意外と優しいオカマ……じゃなくて、スカロン。

「も、もちろんです!お願いします!」

サイトはとりあえず返事しておいた。
ルイズも諦めているようだ。

「トレビアン」

スカロンは、何故か結構上機嫌だった。

こうして、二人はスカロンが経営する店で働きながら、そこに来る客から情報収集することになったのだった。

勝たんとして賭けるべからず！負けじと賭けるべし！！（後書き）

ちなみに、サブタイの意識ですが、『勝とうとして賭けるな！負け
ないように賭ける！！』というような意味です。

ルイズはこの教訓を完全にシカトしていましたねww

さて、次回。

『魅惑の妖精亭』へと進んでいきます。

魅惑の妖精亭にて。(前書き)

人気投票はまだまだ続きますが(2010/11/20 現在)、
投票していただけるのなら、なるべく早めが嬉しいです。

さて、今回は短いおまけ付きです。

それでは、本文をどうぞ！

魅惑の妖精亭にて。

スカロンの店『魅惑の妖精亭』にて。

「いいこと！妖精さんたち！」

「はい！スカロン店長！」

「ちつがああああう！」

スカロンの甲高い（おっさんの）叫び。

「店内ではミ・マドモワゼルとお呼び！」

「はい！ミ・マドモワゼル！」

女性店員たちは声をそろえて答えた。

……………これはスカロンが自身の店に着いた時の、最初の行動だ。
吐き気MAX！！！！！！

スカロンが身をくねらせながら一声。

「魅惑の妖精たちのお約束！アアア~~~~~ン！」

「ニコニコ笑顔のご接待！」

「魅惑の妖精たちのお約束！ドウウ~~~~~！」

「ピカピカ店内清潔に！」

「魅惑の妖精たちのお約束！トロワ~~~~~！」

「どさどさチップをもらおうべし！」

合言葉なのだろうか？……………だとしたら趣味が悪い。

店員の女性たちはきれいなのだが、いかんせん店長が……………吐き気

MAXなのだ。

今も、気持ち悪く身をくねらせて「テレビアン」とかぬかしている。

「じゃ、ルイズちゃんいらっしやい！」

ルイズが拍手されながら、顔を真っ赤にして出てくる。

その服は店員たちと同じくかわいらしいもので、ルイズは妖精のように見えると言えるだろう。

「サイトくんは食器洗いとか雑用をやってくれるわ!……さあ、二人とも!お仲間になる妖精さんたちにご挨拶して!」

サイトの紹介も終え、自己紹介を促したスカロン。

「ルル、ルイズ……です。……よろしく……お願いします」

嫌そうな敬語。平民相手に頭を下げなければならないのが我慢ならないらしい。

まあ、なんとか誤魔化し、拍手をもらう。

「俺はサイトです。よろしくな」

「はい、拍手!」

こうして、なんとか自己紹介も済ませ、開店の時間となった。

そして一日が終わり、結果的にルイズは何人の客を怒らせたのだろうか。

チップどころか、スカロンから請求書をもらってしまうほどだ。

スカロンの娘、ジェシカ（あのオカマからなぜこんな美人が？という容姿）はサイトに訊ねる。

「ねえ、あの子、どこの貴族令嬢？確実に平民じゃないわよね？」

なかなか鋭い。………いや、あの高飛車な態度では、気付くのが普通か？

「い、いや？平民だよ？うん、絶対平民だ。貴族だなんてありえない。あはははは………」

冷や汗だらだらでサイトは答えた。

「ふうん。まつ、いいわ。ここにいる子は皆フケありで、他人の過去なんて詮索しないから安心して」

「あ、ああ。良かった」

サイトは胸をなでおろした。

「それじゃ、貴族だって認めてるようなものだけどね」

「そそそそ、そんなわけ、なな、ないじゃないか！」

「動揺しすぎよ、フフツ 大丈夫、誰にも言わないからさっ」

そんな会話をしていると、ルイズが近寄ってきた。

「あら？サイト。そんな子と楽しそうに会話して、なに調子にのってるのかしら？あなたは私の使「だああああ！部屋で話そう！部屋で！うん、そうしよう！」誤魔化すつもり？…って、きゃあ！な

にすんのよ！自分で歩けるわよ！」

私の使い魔、と言いつうになつたルイズを慌てて止め、とりあえず部屋へと連行するサイトだった。

もちろん、のちにポロポロにされるのはサイトである。

そして、部屋に着いた。

.....埃まみれの屋根裏部屋だが。

「なによここー！」

「部屋」

「分かつてるわよ！そんなこと！.....この有様はなんだと言つてるの！」

確かに部屋の状況はひどい。

埃にまみれ、ガラクタだらけ、そしてベッドはポツリと二つ置いてある。

「どうしようもねえだろ？明日は早いんだし、さっさと寝よつて」

「.....あんた、適応能力高過ぎよ」

「そうか？こんなもんだって」

「でも、掃除は先にしなさい！」

「えっ！？でも.....」

「『でも』じゃない！あんたは私の使い魔なの！黙つて言つこと聞きなさい！」

「.....」

結局、サイトは一人で掃除をさせられましたとき。

魅惑の妖精亭で、チップレースが始まった。
どの妖精（店員）が一番チップを集める事が出来たか、という一点だけを競う、実にシンプルなルールだ。
景品は『魅惑のビスチェ』。着ている者の容姿に左右されずに、その者を魅力的に見せると言われているマジックアイテムだ。

……そして、そのチップレースが始まって早くも六日が経った夜。ルイズのチップは未だ0だ。

次の日はチップレース最終日。ルイズは完ツ壁にいじけていた。

「もう知らない。私、帰る」

「任務はどうするんだよ？まだ情報だつて集まってるぞ？」

「サイトやつといてよ。もう私には無理なの。あんなこと、私には出来ない」

「まだ明日があるじゃねえか。諦めんなんて」

「チップレースなんてどうでもいいもん」

何気に『魅惑のビスチェ』を着て、サイトに見せたいか思っていたりしたのだが、そんなことはおくびにも出さない。

「でも、任務は姫様がお前を信用して任せてくれたもんだろ？…最後までやるっぜ？」

「……もう耐えられないもん。お世辞なんて言えないし、客と喧嘩しちゃうし……サイトはいつもジェシカと話してるし」

ルイズはいじけたようにそっばを向いてしまった。

「ルイズ……。お前はやれば出来るよ。頑張れって。最後まで諦めんなよ。……俺だって全力でお前をサポートするから。……お前のために」

サイトは言い聞かせるように言った。

その言葉を聞いたルイズは、バツとサイトのほうに振り向き、顔を赤らめ、早口で話す。

「そっ、そんなの当たり前じゃない！私の使い魔なんだから！……明日はちゃんと助けなさいよね！」

……全力でツンデレだ。

「おう、任せろ！……じゃあ、今日はもう寝るか！」「そっね。……ありがとう」

最後の一言は、とても小さく。

「ん？なんか言ったか？」「い、言っていないわよ！」「そっか。なら、おやすみ」「……おやすみなさい」

そして翌日。

ルイズは、昨日のやり取りのおかげか、少しだけ態度がよくなり、ほんの少しのチップも貰えるようになった。なっていたのだが…。

「なんであんなたちがここにいるのよ！」

キュルケの家にいるはずの、レイたち三人が来ていた。

「暇だったからな。転移を使ってここまで暇つぶしに来た」

「そう、暇つぶし」

「っていつか、ルイズはなんでここにいるわけ？しかもその格好！」

「うう、うるさいわね！私だっているいる事情があるのよ！」

騒ぎを聞きつけたのか、サイトが突っ走ってきた。

どうやら、『全力でサポートする』というのは本気だったようだ。

「ルイズ、どうしたんだ？！…って、レイ！？タバサ！キュルケも！」

「さあ、俺たちが頼むのはメニューの端から端までだ」

「持ってきて」

「相変わらず二人ともよく食べるわねえ」

「ってかレイ！そんなに金持ってたのか？」

「俺の傭兵団をナメるな。情報収集を基本に、傭兵の仕事、さらには俺の育てた土メイジに作らせる高品質の紙と窓ガラスを販売して、かなり稼いでいる」

「レイはやっぱりすごい」

「やっているのは俺じゃないけどな。…だが、ありがとう」

「いい／＼／」

レイはシャルロットの頭を撫でる。

それに対し、シャルロットは気持ち良さそうに目を細めた。

「……………あんた達、よそでやってくれない？」

「うちにいる時もずっとこんな感じだったのよ。ホント、仲良いわよねえ」

キュルケは、二人をからかうようにニヤリとして言った。

「マジですか…。……………おっ、そういえばレイ！なんか、王都で変な噂とかないか？」

サイトは思いついたように任務の情報収集を始めた。

「変な噂？今のところは特になんの情報も入っていないが…。しかし、貴族の腐敗は激しいな」

レイが答えたところで、店内に新しい客が入ってきた。

「これはこれは、ようこそチュレンヌ様！」

スカロンが対応している。

一方、それを眺めるレイたちは…。

「ああ、例えばあれなんかが代表だな。ここらの徴税官をつとめているチュレンヌ。タダ食いばかりしている、どうしようもないクズだ。しかも、逆らえば税率が跳ね上がるからな、店側は言うことを聞くしかないようだ」

「クズ」

「ホント、どうしようもないわねえ」

そんな会話をしていると、チュレンヌの取り巻きが杖を見せて、他の客を追い払ってしまった。

そしてチュレンヌはレイたち（レイとシャルロットは、もうすでに食事を始めている）のグループを見て、ルイズに来るように命令した。

嫌々ながらも、チップ欲しさに従うルイズ。……レイの話聞いていなかったのだろうか？

一応、当たり障りのない対応をとるルイズだが、さすがに限界が近づいてきた。チュレンヌによるルイズの扱いが酷すぎるのだ。

「ああもう！我慢出来ないわ！あんた、私を誰だと思ってるわけ？！」

ルイズの言葉に、キレるチュレンヌ&取り巻き。だが、一瞬でレイに殴られて、店の端に追いやられてしまった。……それも誰にも視認出来ないスピードで、全員を気絶の一手手前ぐらゐまで痛めつけて。

「先ほどからうるさいぞ。他の客（俺とシャルロット）が食事をしているだろう？邪魔をするな。もっと静かに出来ないのか？……」

ルイズ。どうせ、任務でも受けていたんだろう？治安強化のための情報収集と言ったところか。そして、任務ならば女王から許可証をもらっているはずだ。それを見せてやれ」

突然の対応に驚きながらも、ルイズは言われた通りに許可証を取り出した。

「へ、へへ、陛下の許可証??！」

この反応を見てレイの思惑に気付いたルイズは、満面の笑顔で言い放つ。

「私は女王陛下の女官で、由緒正しき家柄を誇る家系の三女よ。…今日見たこと、聞いたことは全て忘れるのよ？いいわね？そうじやないと、命がどうなっても知らないから」

「すすす、すみませんでしたああ！どうかこれで勘弁してくださいああいー！」

チュレンヌ＋取り巻きは、金貨がたつぷり入った袋をルイズに差し出し、飛ぶように去っていった。

「すごいわ、ルイズちゃん！」

「すごいです！」

「凜々しかったわよ！」

「というか、チュレンヌたちはなんでいきなりぶっ飛んでったわけ？」

チュレンヌが去った後、魅惑の妖精亭の皆がルイズを称えていた。

……ジエシカだけは疑問をぶつけていたが。

「はい！チュレンヌが帰ったので、今回のチップレースの結果を発表します！ルイズちゃんの知り合いさんたちも、どうか見てってください！」

レイたちが食事をしているのも構わず、スカロンがチップレースの結果発表を始めた。

そして、運命の第一位…。(レイとシャルロットは見向きもせずにご飯中。キュルケは一応見ているが)

魅惑の妖精亭にて。(後書き)

最近、ストックの減りが早い気がします……。

出来る限りは一日一投稿を続けますが、出来なくなったらすみませ
ん。

………期末テスト………学生の最大の敵が近いということもあり、正直キツイです。
ご了承ください。

任務協力の際、敬語にご注意ください。(前書き)

人気投票は続いております。(2010/11/21 現在)
しかし、思うように票が集まりません。

……このままでは、後書きで語らせる役のキャラを自分で決める
ことになってしまいます。
後書きは読者様のご意見を反映させたいので、おこがましいかもしれ
ませんが、投票してくださると助かります。

さて、今回はレイが初めてまともに敬語を使います。

レイはやるうと思えば、敬語だって優雅に使えるということを書い
ておきたかったので(笑)

……まあ、ちょっとした演技ですね。
楽しみ?にしてください!

それでは、本文をどうぞ!

任務協力の際、敬語にご注意ください。

現在、『魅惑の妖精亭』に泊まっているのはレイ、シャルロット、そして従業員もどきのサイトとルイズだ。キュルケもいるべきなのかもしれないが、『彼氏とのデートが』と言って去ってしまった。

……………一体、どの彼氏のことだったのだろうか。

さて、本来ならば情報収集の任務は続行されるのだが、レイの出現によってその必要はなくなった。

よって、ルイズたちは今回の任務の趣旨を説明し、レイに助けを求めることになったのだった。

「そうか。ならば、今もつとも注意すべき人物の情報を。その者の名はリツシュモン。高等法院長の職に就いているが、その実態にはひどいものがある。今回のクズのようなタダ食いは当たり前。裏金や収賄の数々。さらに酷い噂は、タングルテルの虐殺。『疫病の感染拡大を防ぐため』という名目で、村が焼き払われた事件のことだ。これにGOサインを出したのがヤツだと噂されている。そして、その噂では『異教徒狩りのため』という理由での虐殺だったとか。

……………まあ、ここまでの噂はさすがに怪しいが、火のないところに煙はたたないと言っしな。あながち間違っていない可能性も高い。リツシュモンの粛清は遅かれ早かれやっておくべきことだろう。……………だが、こいつの地位は高等法院長だ。何らかの形で政治的に反旗を翻すのは確かだろう。そこで捕まえるのなら、と今女王がなにやら計画しているらしいな」

レイはここで一旦話を切り、ここまで理解したか？と一同を見渡してから、話を続ける。

「……俺が提案したいのは、女王の計画の補佐。及び、女王とウェールズの護衛だ。この計画では、二人が囿になる物らしいからな。では、そのための役割決めから始めよう。まず………」

こうして、レイの長い長い説明は続いていった。

夜。

空というパレットに黒の絵の具を塗りたくったように真っ暗な世界の中、煌き続ける赤と青の双子月……。そんな夜。一人の女性がある館を訪ねようとしていた。

名をアニエス・シュヴァリエ・ド・ミラン。平民上がりの貴族。最近になってアンリエッタが結成した『銃士隊』の隊長で、『メイジ殺し』の異名を持つ凄腕の剣士であり、妙齡の女性だ。

アニエスはその館の前で息を潜め、ある人物を待っていた。

「悪い。遅れたな。俺が任務の補佐を務める、レイ・クロカミという者だ」

「……同じく、タバサ」

いきなり現れた二人組。

アニエスは全く気配を感じられなかったことを訝しみながら答える。まあ、転移で来ているため、気配が感じられないのは当たり前だが。

「私の名はアニエス。銃士隊の隊長だ。此度の任務協力、感謝する」

レイはすでに王宮とも連絡を取っていたのだ。

「大したことではない。ただの成り行きだ。それと、護衛にはこちらの手勢のうち、二人を向かわせた。安心してくれ。……さて、それでは行くとしよう」

「了解した」

代表してアニエスが館の門を叩き、大声で来訪を告げた。すると召使いらしき人物が出てきて、アニエスに訊ねる。

「どなたでしょう」

「銃士隊隊長、アニエスとその補佐が参ったとリツシュモン殿に伝えて欲しいのだが。遅い時間ではあるが、急報なのだ。至急、お取次ぎを願いたい」

「分かりました。少々お待ちください」

暖炉のある居間へ通され、待つこと数分。とうとうリツシュモンが現れた。

「急報とは何事だ？高等法院長の眠りを妨げるほどだ。よほどのことなのだろう？」

「アンリエッタ様、並びにその婚約者、ウェールズ様が行方をくまましてしまわれました」

アニエスが対応を始めた。

レイとシャルロットは何かを見極めるようにリツシュモンを見ていた。

「なに?!」

リツシュモンは驚きの声をあげた。……レイからすれば、大して心配していないだろう?と言いたくなるような反応だったが。

「現在、調査中なのですが、依然として足取りは掴めず……」
「大事件ではないか！」

その実、表情は全く大事件とは思っていない……と、シャルロットは感じた。

「そのため、戒厳令の許可、並びに街道と港の封鎖許可をいただきたいのです」

「許可しよう。のちに書類を渡す。全力をあげて陛下を探し出すのだ。見つからん場合は、お前ら銃士隊を法院の名において縛り首にするからな」

その言葉の後、許可証を受け取り、この場を去ろうとした一同だったが、一つの影が立ち止まった。

「リッシュモン殿……あなたは20年前の「アニエス隊長、どうされました？ 搜索を急ぐ必要があるのでは？」……！？……分かった。すまないな」

レイが敬語を使った！ 皆、絶句。

「さあ、行きましょう、隊長。……リッシュモン殿、此度はお騒がせしてしまい、非常に申し訳なく思っております。必ずや見つけ出すので、平にご容赦を。それでは、失礼させていただきます」

レイは優雅に一礼し、絶句している二人を連れて外に向かうのだった。

外に出てしばらく…。

「はあ。全く、敬語は疲れるな。そして、俺の敬語ぐらいで驚くな。ヤツに不信感を抱かせたくなかったのな。仕方ないだろう？………それと、タングルテールの話は蒸し返すべきではない。肅清の際に制裁を加えればいいだけのこと。そうだろう？生き残り」

レイはアニエスに話しかけた。

「………なぜ、私がタングルテールの生き残りだと？」

「俺は情報収集のための組織を作っていてな。それでタングルテールの虐殺についての噂も入ってきた。………しかし、リッシュモンについての情報など、なかなか手に入れることが出来るようなものではない。俺のような酔狂な者か、村の生き残りでない限り、リッシュモン首謀者説など知るものか。そして、先ほどの行動……。これで生き残り以外の答えに辿りつくことなどないだろう？」

「………完璧だな。そうだ、私はタングルテールの生き残りだよ。しかし、相当な情報網だな」

アニエスは素直に賞賛し、シャルロットもそれに同調する。

「レイはすごい。なんでも出来る。強いし、優しい」

「ありがとう、タバサ（シャルロット）」

「………いい／＼／＼」

レイはシャルロットの頭を優しく撫でながら言っていた。その顔には優しい笑みが。

そして、そんな状態のレイを初めて見て、絶句するアニエス。

……どう考えても、不敵に口の端を吊り上げる笑い方しか想像つかなかったんだが。…と思うアニエスであった。

翌日の朝。レイたちは護衛組との再会を果たしていた。

アニエスは、アンリエッタとウエールズに向けて膝をつく。

「陛下、ウエールズ様。用意万端、整いましてございます」

「ありがとうございます。あなたたちは本当によくやってくれました」

「僕からも礼を言おう」

その間に、レイはサイトに問いかける。

「護衛の任に問題はなかったか？」

「ああ、大丈夫だ！ちゃんと誰にも気付かれずにやり過ごしたぜ」

「そうか。では、こちらの報告を。昨日のうちに情報を集めた結果、この劇場でアルビオンの間諜と接触している事実を突き止めた」

レイは一枚の紙を取り出し、ルイズたちに見せながら話を続ける。

「昨日のうちに下見は済ませている。少々早いですが、隊員たちの配置から始めるのでな。すぐに向かおう」

「えっ？ちょ、待ちなさいよ！」

そして、ルイズの言葉などおかまいなしに、転移を果たしてしまっ
た。

劇場にて。

幕が上がリ、劇が始まった。

女向けの劇なのか、場内は女性で埋め尽くされている。

「あゝ、居心地わりい」

「しょうがないだろう？耐えろ」

「……忍耐も、大事」

そんなことを言うのは、右腕にシャルロットがくっついてるレイ。

「……いいよな、レイは。タバサと一緒に。カップルで来たみたい
になつてて変じゃない」

「そうか？……そう思つのなら、お前はルイズと一緒にいたらどう
だ？」

サイトは隣のルイズを見る。

「……たぶん爆発で劇が終わる」

それを聞いたウェールズは、なんかいろんな意味で哀れみの視線を
向けたとか。

……もちろんサイトに。

一方、アンリエッタ。

彼女はレイの魔法で顔を変えて、リッシュモンとの接触を試みている。もちろん、目立たないところに護衛をたつぷりと配置している。

「失礼、そちらは連れが参りますので、よそにお座りを」

しかし、アンリエッタは話を聞かずにリッシュモンの隣へ腰掛けた。

「聞こえませんでしたか、マドモワゼル？」

様子を確認していたレイが魔法を解き、リッシュモンにアンリエッタだと認識させる。

「観劇のお供をさせていただきます。リッシュモン殿」

リッシュモンは驚きで口をパクパクさせている。

「これは女が見る芝居ですわ。ご覧になって楽しいかしら？」

リッシュモンは驚きつつも冷静を装い、答える。

「ごういった劇の検閲も私の仕事ですからね。…それにしても陛下。無事でなによりです。お隠れになったとの噂でしたが…」

しかし、アンリエッタはスルーして話し出す。

「劇場での接触とは考えましたね。あなたは高等法院長ですから、芝居の検閲も仕事のうち。これなら、あなたがここにいることを不

思議がる者などいないでしょう」

「さようで。しかし、接触とは穏やかではありませんな。この私が、愛人とここで密会しているとも思ってたっしやるので?」

平常を取り戻したリツシユモンは、きれいに受け流した。

アンリエッタは、訝^{いぶか}しげに目を細める。

「お連れの方なら、お待ちになっても無駄ですわ。アルビオンの密使は昨晚、私の部下が捕らえましたから。彼は全てを話してくれましたよ。今頃は監獄にいるでしょう」

核心をつくアンリエッタ。だが、リツシユモンは余裕の表情を崩さない。

「ほう！お姿をお隠しになられたのは、この私を燻り出すための作戦だったというわけですね！」

「その通りです、高等法院長」

「私はあなたの掌で踊らされていた、というわけですか」

「そうです。しかし、あなたが国を売るなんて、正直考えたくはありませんでした。あなたは幼い頃より私を可愛がってくれた。なのに、売国の陰謀に加担するとは……」

アンリエッタは悲しそうに話した。

信じていた人には裏切られてばかり。自分は一体、誰を信じればよいというのか。………そんなことを思いながら。

「陛下は私にとっては未だ子供なのです。無知な少女に王座を任せるとは、アルビオンに支配させた方がマシとは思いませんか?」

リツシユモンのそんな言葉を聞き、アンリエッタは静かに口を開く。

「……………あなたを、女王の名において罷免します。高等法院長、おとなしく逮捕されなさい」

「まだ劇は続いていますよ？ここで中座するなど、役者に失礼ではありませんせんか？」

「外は魔法衛士隊が囲んでいますし、中には通常部隊だけでなく、私の精鋭部隊までもが控えているのですよ？さあ、おとなしく杖を渡してください」

ここでの精鋭部隊というのは、レイとシャルロット、そして虚無のルイズとガンダールヴであるサイトのことだ。確かに少数精鋭。だが、リッシュモンは全く慌てず、掌をポン！と合わせた。すると、劇を演じていた役者たちが杖を引き抜いてアンリエッタめがけて突きつけていた。

「私をハメるのは百年早い。そういうわけですよ」

「役者たちはあなたのご友人だったわけですか」

「そうです。みな、精鋭揃いですよ」

「でしょうね。酷い演技でしたもの」

「私の脚本はこうです。陛下、あなたを人質にとる。そして「もう飽きた。いつまでグダグダやるつもりだ？」…誰だ?!」

いきなり、観客席から一人の男の声が響いた。

「先ほどから、つまらない話ばかり。いい加減捕まれ。もう手遅れなのが分かっているのか？」

言葉が終わると同時に舞台上にいるリッシュモンの精鋭（笑）たちが崩れ落ちた。

「残念ながら、脚本はお前ではない。…そういつことだ」
「そうですね。今回の脚本は私ですの」

アンリエッタもレイに同調した。

そして、それと同時に観客たちが一斉に立ち上がり、銃口をリッシユモンに向ける。

劇場の観客、全員が護衛部隊ならば、逆に目立つことはないのだ。

シャルロットとルイズ、そしてウェールズが杖を向け、サイトは青い光芒を放つ、新生デルフリンガーを抜いている。

さらに、最強の助っ人の双魔剣から発せられる青い光芒、ブウウウンという無数の羽虫がたてるような音が、場内に威圧感を満たしていく。

「観客たちは、全員が銃士隊の隊員と、私に手を貸してくれる者たちなのです。さて、お立ちください。カーテンコールですわ、リッシユモン殿」

任務協力の際、敬語にご注意ください。（後書き）

最近、サブタイでギャグに走ってしまっている気がします。
それとも、ただの気のせいでしょうか？

……………まあ、そんなことはさておき。

次回、リッシュモン粛清編が終わります。
お楽しみに！

最後になりますが、とうとうユニークアクセスが40000を超え
ました！！

このような小説を読んでくださっている皆さん！！
本当にありがとうございます！！

憎しみと、過去のトラウマ(前書き)

人気投票、よろしくお願い致します。(2010/11/22 現在)

さて、今回の話は、恒例の?レイによる説教(もどき)タイムです(笑)

それでは、本文をどうぞ!

憎しみと、過去のトラウマ

「ハハハハ！恐れ入りましたよ、陛下！ですが……」

ここで一旦言葉を切った。

そして、足でドンツ！と床を蹴る。すると床が抜け、穴が出現した。

「あなたは昔から詰めが甘い」

リッシュモンは穴を真つ直ぐ落ちていき、床は閉まってしまった。

銃士隊の者たちが必死に開けようとするが、魔法のせいで開けられない。

アンリエッタは叫び声をあげる。

「出口と思わしき場所を搜索し「落ち着け。その必要はない」……え？」

途中で遮ったのはレイだ。

「そこには事前にアニエスを配置した。ヤツならなんとかしてくれるだろう」

そこまで予測済み？！と皆が啞然としているが、レイは構わず続ける。

「ついでに、ダメ押しとして俺とタバサ（シャルロット）が援軍として出向いよう。…これで落ち着いたか？」

「え、ええ……」

なんかもうクオリティの高さに呆れるしかなかった。

「では、俺たちはこれで」

そう言い残して、レイとシャルロットのシルエットは一気にかき消えた。

一方、逃げ道をレビテーションで安全に降りきったリツシュモンは。

「おや、リツシュモン殿。変わった帰り道をお使いですね」

アニエスと対峙していた。

薄笑いを浮かべ、悠然と立つアニエス。

だが、それでもリツシュモンは余裕の表情を浮かべる。

平民に何が出来る？……ヤツが考えているのは、つまりそういうことだ。

とことん剣士を……いや、平民を甘く見すぎているのだ。

「どきなさい。もう、ルーンは唱えた。あとは魔法を発動するだけだ。貴様に勝ち目はない」

「相討ちの可能性は残されている」

アニエスは眉一つ動かすことなく告げた。

「そこまで陛下の命令が大事かね？」

「私がお前を狙う理由。それは私怨だ。……そのためになんか配置をここにしてもらった」

リッシュモンは怪訝そうな顔をして訊ねる。

「私怨だと?」

「忘れたとは言わせない。……貴様が計画した『タンゲルテールの虐殺』をな」

アニエスのこの言葉に、リッシュモンは笑う。

「ハハハ！なにを言い出すかと思えば！お前はあそこの生き残りか！」

「貴様のせいで私の村は滅び去ったのだ！……覚悟してもらおう！」

アニエスは声を荒げた。

その言葉に、リッシュモンは呆れたように首を振り、杖をアニエスに向ける。

「お前ごときに貴族の技を使わなければならないとは。……これも運命か」

リッシュモンの杖から、火の玉が飛び出した。

アニエスはかささず銃の引き金を引こうとしたのだが、いきなり目の前の炎弾がかき消えた。

「有能なお前をこんなところで相討ちにさせるわけにはいかないの
でな。……邪魔かとは思うが、助けにきてやったぞ」

「……同じく」

レイとシャルロットのご登場だ。

リッシュモンだけではなく、アニエスでさえもこの登場に驚いてい

る。

「貴様！どうやって魔法を消したのだ！そんな魔法があるはず……」
「やかましい！お前の言い分なんてどうだっていい。貧弱なカス野郎は黙っている」

「同感」

レイとシャルロットの酷い言いように、リッシュモンはキレた。

「平民ごときが！調子に乗るなよ！！」

今度は先ほどの比ではないほどに巨大な火の玉がレイめがけて突進してきた。

だが、これくらいがレイに効くはずもなく…。

「それで？」

レイの身体に当たる前に炎は鎮火した。

炎は、レイによって魔素^{マナ}まで分解されたのだ。

マナというのは、世界を構成する魔力の粒であり、魔力そのものとも言える。

そして、それ自体は人間の自己治癒などに役立つものであり、多量過ぎない限りは人間に悪影響を与えることは無い。

また、マナは魔力の源ではあるのだが、世界に満ちるマナを使って戦える魔戦士は数少ない。つまり、魔法を使う者のほとんどは自身の中に眠る魔力……『オド』と呼ばれるモノをそれぞれの属性に顕現し、発動させているのだ。

以上、閑話休題。

レイの、なにものも恐れないといったような態度に、今度はリッシュモンが声を荒げる。

「き、貴様ああ!!」

だが、レイはそんな叫びなど歯牙にもかけず、アニエスに先を促す。

「アニエス。変なのが騒いでいるが、さっさとトドメをさせ」

「…礼を言う」

その言葉をはいた次の瞬間には、アニエスの剣がリッシュモンの腹を突き刺していた。

「グッ……メ、メイジが…平民…」とき…この貴族の私…が…
…貴様…のような…剣士…風情…に…」

「剣とは玩具ではない。これは武器だ。我らが貴族に、せめてひと噛みと磨いた牙だ。…その牙で死ぬ、リッシュモン」

アニエスが剣を引き抜くと同時に傷口から血が溢れ出し、リッシュモンは事切れた。

「満足したか？」

リッシュモンを殺し、しばらくしたのちにレイは、アニエスに問いかけた。

「いや、復讐したところで気持ちが悪くなるわけでもない。それに加えて実行犯たちには復讐を終えていない」

答えるアニエスは淡々としており、その真意を読み取ることは難しい。

だが、それでもレイは、何かを察したように口を開く。

「そうか。……俺は他人の事情にとやかく言うつもりはない。だが……」

レイはここで言おうか言うまいか迷っていたが、しばらくして口を開く。

「自分を見失うことだけはするな。狂気に埋もれるな。復讐をするなどとは言わない。だが、せめて考える。自分が本当にしたいことはなんなのか。自分のすべきことはなんなのか。お前だって本当は分かっているはずだ。復讐に意味などないと。誰も………死んだ家族たちだって、そんなことは望んでいないのではないか？そこを考えるべきではないのか？」

レイはここで一旦言葉を切り、一呼吸ついてからまた言葉を紡ぐ。

「まあ、説教めいたことを言ってしまったが、俺が本当に伝えたいのは次の言葉だ。……そんなにめんどくさい事をやる必要はない。無意味な復讐をしても誰も報われないのなら、せめて自分は幸せになれ。それが死んでしまった家族や村の者たちの望みであるはずだ。………少なくとも、俺はそう思う。以上」

アニエスは黙ってしまった。

レイの隣ではシャルロットも黙っている。彼女もまた、ジヨゼフへ

の復讐を心に刻み、生きてきたのだ。

今ではレイといつしよにいれればいいと思いはじめたが、チャンスがあれば躊躇うつもりなどなかった。

レイが止めない限りは、確実にジヨゼフを殺すつもりなのだ。

しばらくの静寂に包まれ、耳が痛くなるほどに静かな空間。

そんな中、口を開いたのはやはりレイだ。

「まあ、所詮は他人の説教だ。気にするな。……未だ、過去を捨てられずにいる俺が言えたセリフでもないしな」

最後の言葉はとても小さな呟きで、誰の耳に入ることもしなかった。

そう、レイだって復讐をしようとしているわけではないが、ひたすらに強さを求めることをやめることが出来ていないのだ。それは、もちろんシャルロットを護るためのものでもあるのだが、やはり過去トロットの出来事は大きい。

この先、レイはシャルロットといることでリーネの死トラウマを乗り越えることが出来るのだろうか？

ふいに静寂が破れ、笑う者が一人。

「フフツ。お前はおもしろいな。今までの私の生きる目的が『めんどくさい事』とは。……確かに、復讐をやめることは出来ないだろうが……ただ、少し……ほんの少しだけ、考えを改める気になれた気がする。……礼を言う」

しばらくの沈黙を乗り越え、アニエスはなにかを吹っ切れたような

声で告げた。

「ただの偽善だ」

レイの言葉はそっけなく。

「素直じゃないな」

「ああ、俺はひねくれている。気付かなかったか？」

レイはさらにそう返し、その言葉に笑いあう二人。

……片や苦笑^{アニメス}、片や不敵な笑みだが、その表情はどこか垢抜けていた。

そんな中、レイに抱きつく者一人。

「どうした、タバサ（シャルロット）？」

「私を構って／＼」

この現象は……惚れ薬？

いいえ、地です（笑）

復讐の話など、忘却の彼方だ。本当にレイがいればそれでいいと思いは始めているらしい。

レイはシャルロットの髪を梳きながら「あー、悪かった」と一言だけ呟いた。

「もつと／＼／＼」

「分かっている」

そして二人は見つめ合う。

「……よそでやってくれないか」
「……悪かった」「……ごめんなさい」

締めりが無い終末でしたとさ。

憎しみと、過去のトラウマ（後書き）

ずっと言い忘れていましたが、レイが皆の前でシャルロットを呼ぶ時、『タバサ（シャルロット）』と呼びますよね？

これは、レイの副音声だと思っておいってください。

それと、『魔素^{マナ}』や『オド』についてですが、独自設定も混ぜているので、一般的な『マナ』や『オド』とは解釈の形が違うかも知れませんがご了承ください。

………^{ハルケギニア}原作の、この世界の魔法は、精神力を糧に魔法を使っているという設定でしたが、それも無視しているような形になってしまっています……それも気にしないでいただけるとありがたいです。

次回から、番外編的挿話が二話連続で続きます。

オリジナルの話で、拙いものかもしれませんが、よろしくお願い致します。

ちなみに、レイとシャルロットがメインのお話です。

それでは、また次回（^^）ノシ

『快適な空の旅をお届けしよう』（前書き）

人気投票は続きます。（2010/11/23）

むしろ、この感じだとこの小説が終わる直前まで続きそうです（笑）

……………誰か！誰か票を！！……………失礼。

冗談はさておき、今回は前回に告げたように、番外編的なお話です。
レイとシャルロットのデートもどきをお送りします。

それでは本文をどうぞ！

『快適な空の旅をお届けしよう』

夏休みも後半に入り、親元から学院に戻ってくる者も出てきている。そんな中、レイとシャルロットは、今日は二人でトリスタニア行くことになっていた。
珍しく、レイからシャルロットを誘って。
なにやら、レイには思惑があるらしい。

早朝。

レイとシャルロットはいつも通りに修行を終え（もちろん、新生デルフを携えたサイトも参戦している。……ちなみに、レイはサイトには容赦がないので、サイトはいつもボロボロだ）、ある程度の準備も終えて、学院の広場まで来ていた。

「どうやって行くの？」

「シルフィードはいた方がいいか？」

シャルロットの質問に、質問で返すレイ。

「……今日は二人で／＼／＼」

シャルロットはレイに詰め寄り、両手でレイに右手を掴み、握る。レイは優しく握り返し、普通に会話を続ける。

「なら、シルフィードに乗っていくのはなしだな………とは言っても、転移で行くのもつまらない」

「確かに」

シャルロットは同意を示した。

ちなみに、『今日は二人で』発言からレイの手を握ったままだ。

レイはしばしの間考えた後、何かを思いついたようで、口を開いた。

「……そうだ。飛んで行こう」

そう言って、レイは指をパチンツと鳴らした。

すると、レイの背から、まるで鴉天狗が持つような漆黒の翼が現れる。

それは『メモリーズ』の覚醒召喚時のように威圧感を与えることはないが、圧倒的な美しさを誇っていた。

いきなり出現した翼に、驚くシャルロット。

「これは…?」

「ああ、見せるのは初めてだったか? ……まあ、これを顕現すると、飛びやすくなるんだ」

この翼に力を増幅させる効果はない。だが、この状態で飛ぶ場合、空中での安定感が格段に増すのだ。

唐突に、レイはシャルロットの背中と膝裏に手を当て、持ち上げた。

………俗に言う『お姫様抱っこ』だ。

「えっ……? どうしたの? / / / / /」

シャルロットは幾分慌てたように、しかし嬉しそうにレイに訊ねた。

「どうしたもこうしたも……これで飛んで王都まで行くんだよ。快適な空の旅をお届けしよう」

レイは、少し冗談めかして返した。

「わ、分かった／＼／＼……期待してる／＼／＼／＼」

「ああ、任せろ」

そう言ってレイは、美しき漆黒の翼を大きく広げる。

そして、バサツ！と羽ばたきの音を辺りに響かせ、王都へ向けて発つのだった。

二人で軽く談笑しながらゆっくりと空を飛び、時には突き抜けるような青空のなんの変哲もない景色を楽しみながら、二人は小一時間かけて王都・トリスタニアの近郊へ到着した。

降り立ったレイは、その瞬間に翼を消し（服の背中部分が裂けていてもおかしくないのに、全く損傷は見られない）、ゆっくりとシャルロットを降ろしてあげた。

お姫様抱っこが終わったことにより『あっ……』と不満の声をもらしたシャルロットを見て、代わりに髪を梳いてやりながら、レイは言う。

「到着だ。……空の旅はどうだった？」

髪を梳いてもらったことによって機嫌を取り戻したシャルロットは、気持ち良さそうに目を細めながら答える。

「とても、よかった。シルフィードに乗るのは、また違った安定感がよかったと思う。……………また、一緒に／＼／＼」

最後は少し照れたように付け足す。

どうやらシャルロットはレイによる『お姫様抱っこ』をかなり気に入ったようだ。

「ああ、いつでも飛ばそう」

そう答え、レイは『さて…』と話を続ける。

「トリスタニアはもう、歩いて五分程度だろう。ここからはゆっくり歩いていこうか」

「分かった」

シャルロットはそう答え、何かモジモジするようにレイの方に手を出したり戻したりし始めた。

そんなシャルロットを見て、レイは苦笑しながら手を差し出す。

「さあ、いこう」

そして、優しくシャルロットの手を握る。

「（コクリ）／＼／＼／＼」

どうやらシャルロットは、手を繋ごうか繋ぐまいか迷っていたらしい。

『……よく自分から抱きついていくせに、何を今さら』
と思うかもしれないが、街中まちなかに手を繋いで入ることが、シャルロットにとつては恥ずかしく感じたのだからしょうがない。
こうして見ると、どこからどう見ても初心うぶなな少女と、それを優しくリードするお兄さんの恋人にしか見えない。

二人は、手を繋いだままトリスタリアの中に入っていく。

「相変わらず狭いな」

「あなたの世界は、ここより広い道があるの？」

「ああ。見たいか？……世界の扉ぐらい、いつでも開いてやるぞ？」

それなら、一回くらいはサイトを日本に連れ帰ってあげてもよかったのではないだろうか？

まあ、そこは気にしないでいく方針で。

レイは、ルイズとサイトを引き離してしまう因子を作りたくなかったのだろう。（帰れば、サイトの望郷の念が強まってしまったため）
そういうことにしておく。

以上、閑話休題。

レイの言葉に、シャルロットは興味津々、といった様子で口を開く。

「いいの？私もあなたの故郷に行ってみたい」

「じゃあ、約束だ。そのうち連れて行ってやる。……もう、紹介する親がないのは残念だな」

レイは天涯孤独の身だ。

育った孤児院でお世話になった院長も、老衰のために亡くなってしまい、中学に上がった頃からは一人暮らしをしていた。

さらには、異世界・ミラーナでお世話になった人も、全員が死亡してしまっている。

つまり、シャルロットを大切なヒト紹介する人物がいないのだ。

だが、そんなつらい過去を感じさせない明るい口調……本当に、シャルロットを紹介出来ないことが残念、というだけのような口調だった。

「しよ、紹介……？（つまり、恋人……？私を紹介したいということ？）／／／／」

そして何故か、シャルロットは顔を赤らめていた。

………なんか、解釈の仕方が違った。

「そう、紹介だ。でもまあ、いないものはしょうがない。もし日本に行った時には、色々と遊べる所に連れて行こう。………おっと、本屋だ。寄るよな？」

レイは日本へ連れて行く話をそこで切り、本屋に寄ることは確定事項のように訊いた。

「……紹介／／………えっ？」

シャルロットは、未だに勘違いで喜んでいた。

………まあ、レイの心は、確かにシャルロットを恋人にしたがってはいいるが。（本人は自覚なし）

聞き取れていなかったと思ったのか、レイは苦笑しながら繰り返す。

「本屋だよ。寄りたくないか？」

「寄る」

即答。

その本屋は、小規模な店だったにも関わらず、二人が出てくるまでに相当な時間を有した。

なぜなら、二人はさまざまな本を手に取り、立ち読みし、そして次の本へ…という工程を繰り返しまくっているからだ。

結局、出てきたのは三時間ほど経った後であった。

……………とても、本好きな二人だったとき。

『快適な空の旅をお届けしよう』（後書き）

さて、ここで話は終わりに見えますが、続きます。

しかも次回は、作者の中では結構お気に入りの回です。

楽しんでいただけたらな、と思います!!

ちなみに、本文の四行目、『レイには思惑が…』の部分ですが、レイの思惑についても、次回に記します。

それでは、また次回（^^）ノシ

『……誰かに支えられるのは悪いこと?』(前書き)

人気投票は続きます。(2010/11/24)

さて、前話の続き、番外編的レイとシャルロットのデートもどきをお送りします。

今までと比べると、だいぶ長い話になってしまいましたが、作者のお気に入りの回です!

それでは、本文をどうぞ!

『…………誰かに支えられるのは悪いこと?』

一人十冊ほどずつ本を買い、亜空間に放り込み終えた二人は、昼食をとり（今回は八軒はしごした）、またもや王都を歩いていた。ちなみに、食事の際以外はずっと手を繋いだままだ。

しばらく適当な店を覗き、太陽が沈み始めた頃、レイがシャルロットに話しかける。

「最後に俺の寄りたい所があるんだが、いいか？」

「あなたの行きたい所なら、私も行きたい」

「そうか、ならよかった。……………ついてきてくれ」

そう言って、レイはシャルロットの方に微笑んだ。

しばらく歩き、二人は一つの工房のようなところに来ていた。そこは、どこか妖しげな雰囲気を持った、街外れの小さな工房だった。

「……だ」

レイがそう呟くと……………。

「『漆黒の旦那』ですか……………?お呼びで……………?」

どこからともなく、これまた妖しげな人物が、レイたちの前に姿を

現した。

レイのことを『漆黒の旦那』と呼ぶその人物は、落ち着いた色合いの紫のフード付きマントを身に纏い、目深にフードを被っているの
で、その表情を窺い知ることは出来ない。

「ああ、『渡り人』^{ワタリビト}。……………アンタに預けていた『例の物』、ちや
んと保管してあるな？」

レイは、その人物を『渡り人』と呼び、何かの確認を取った。

「ええ、もちろんです。中にしまってくださいですよ」

『渡り人』の言葉は、小さく呟くような声であるにも関わらず、不
思議とよく通った。

そんな存在を不審に思ったシャルロットは、レイに問いかける。

「この人は…？」

「ん？ああ、こいつは『渡り人』。戦闘力は皆無、魔力も極少量だ
が、『世界の扉』を開く異能……………『世界渡り』を持っている珍しい
人物だ。この工房は、様々な異世界に存在する『渡り人』の『拠り
所』の一つだ。……………謎なのは、いつ来ても必ずいるという点。そし
てどの世界の『拠り所』にも、必ずこの『渡り人』がいるという点
だ」

どんなことでも見透かすようなレイをして、『謎』と言わしめる『
渡り人』。

さらに疑問を深めたシャルロットは、質問を続ける。

「それは、『渡り人』と呼べるような能力を持った人物が、複数人
いるということ？」

「いや、どの世界の『渡り人』も全く同じ『気』を持っている。だから違う人物ということは有り得ないはずだ。………あるいは、『渡り人』にとつては全てがパラレルワールドであり、全てが同じ『渡り人』であつて、全く違う『渡り人』なのかもしれないな」
「それはつまり………どうということ？」

シャルロットはレイの手を握つたまま、可愛く首を傾げた。

「さあな。だから、『謎』の人物なんだ」

「謎……。では、彼？の名前は？」

シャルロットはまたもや疑問を呈した。
それに答えるのは『渡り人』だった。

「失礼。『蒼のお嬢様』、ここでは他人の詮索をしてはいけないことになっております。これ以上訊くのはお止めください。………それと、性別は男性ですので、『彼』であつていますよ」

それに対し、レイも同調する。

「そう、『渡り人』のいる『拠り所』では、他人の情報を聞き出しではならないんだ。俺だつて『渡り人』の名前は知らないし、『渡り人』は俺の名を知らない。………ここはそういう慣わしに従つて、名乗ることは止めた方がいい」

その言葉に対し、シャルロットは『怪しい。………この人、大丈夫？』と目で語つてきていた。
それを見たレイは、苦笑して答える。

「だがまあ、安心しろ。『渡り人』は信頼に足る人物だ。それは俺

が保障しよう。これでも、人を見る目はあるつもりだな」
「分かった。あなたがそう言うのなら、間違いはない。あなたは嘘をつかないから」

レイの言葉を完全に信じているシャルロットは、すぐに意見を翻した。

そして二人は互いの信頼をもう一度確認出来たことにより、見つめ合う。

……長く、見つめ合う。

このままでは話が進まないと思ったのか、唐突に『渡り人』は口を開く。

「随分強い信頼関係を築いていらっしゃるようですね。うらやましい限りです」

その言葉を聞き、やっとのことでレイは視線を外して答える。

「そうでもないさ。……さて、そろそろ『例の物』を受け取らせてもらうでしょうか」

そう言って、レイは『渡り人』を促した。

「分かりました。それでは、取りに行かせていただきますよう」

そう言った『渡り人』は瞬時に姿を消した。

『魔力がほぼないはずなのに、なぜ転移を…?』と、驚きを隠せない様子のシャルロットを見たレイは、説明を始める。

「転移したように見えるか?……だが、それは違う。『渡り人』は、

本人が望んで姿を現さない限りは、存在感がとてつもなく薄い。まるで、見る者がそこにいる『渡り人』の存在を拒むかのように、な
「あなたにも見えないの？」

シャルロットは『レイに見えない？それは有り得ない！』とばかりに訊いた。

そして答えは案の定……。

「いや、俺には見える。……第一、『渡り人』を視認出来ない人物が、何の案内も無しにここを探し出すことは不可能だろうな」

やはり見えていた。

「いえいえ、私を視認出来ない人物でも、ここや他の『捌り所』に迷いこんで来ることもございますよ」

いつの間にかやら出現した『渡り人』は会話に口を挟んだ。

「?!……神出鬼没」

そして、またもやいきなり現れた『渡り人』に、シャルロットはそんな言葉を無意識のうちに口に出していた。

「ハハハ、確かにその通りですね。言い得て妙です。………さて『漆黒の旦那』、取って参りましたよ」

『渡り人』はレイに、ちょうど拳大の大きさの、四角い小箱を差し出す。

「ありがとう、確かに受け取った」

レイは中身も見ずに、しかし、しっかりとその小箱を受け取った。

「さあ、俺たちはそろそろお暇いぐまさせてもらおう。……『渡り人』、また機会があれば会おう」

「ええ……また……」

そんな言葉は、『渡り人』の存在を視認することが出来なくなった後に届いた。

「シャルロット、では俺たちも行こうか」

「分かった。……不思議な人物だった」

「ああ、そうだな。……《レポートーション!》」

レイは相槌をうち、転移を果たした。

転移した先は海辺の崖だった。

ちょうど広場になっており、真っ赤な夕陽が水平線に沈んでいく美しい姿が確認出来た。

「……?」

転移でそのまま帰ると思っていたシャルロットは、疑問の声をあげた。

「まあ、ここにも少し用があつてな」

「そう。……夕陽が、綺麗」

シャルロットは、感嘆の声をもらした。

「だろう？……俺もここは好きな場所だな」

しばらく、二人は美しい赤き光を放つ夕陽を、手を繋いだまま黙って眺めていた。

唐突に、レイが口を開く。

「なあ、シャルロットは……俺がハルケギニアに来てよかったと思ってるか？俺はハルケギニアにとって、必要な人間か？」

その言葉は夕陽を見ながら紡がれた。

そして、シャルロットの答えは最初から決まっている。

「当然。私はあなたに救われているから。……でも、何故？」

何故そんな質問を？と問いかけたシャルロット。

「いや、最近思うんだ。……俺が来たせいで、ハルケギニアが魔族に襲われているのではないか、とな。思い込みかもしれないが……もし本当にそうならば、俺はここに来るべきではなかったかもしれない」

そう。今までの魔族はどんな時だってレイに勝負を挑んできている。『世界侵略の邪魔者を潰す』ことが目的なのならば、レイによる邪魔が入らない世界を狙うはずである。しかし、実際は確実にレイとの戦いを望んできているのだ。

これで、レイとの因果関係を疑わないのはおかしい。

何も言わずに聴いてくれるシャルロットに安心し、レイは話を続ける。

「それは俺の自意識過剰なのかもしれない。……だが、どうしてもそうは思えないんだ。魔族の目的は他にあり、それに俺が関連しているのではないか、そう思うんだ。……それなら、俺はこの世界に迷惑をかけているのではないか……俺は、シャルロットに迷惑をかけているのではないか……俺は必要じゃないのかもしれない、と。そんなことを考えている自分がいる。情けないが、俺は本当にここにいていいのか、自信が無くなったみたいだ。……だから俺はもう一度問う」

俺は、この世界にとって……シャルロットにとって必要な存在か？

レイの言葉に、シャルロットは視線を夕陽から外し、レイの方に向ける。

「あなたは……私にとって、なくてはならない存在。かけがえのない大切なヒト。いつまでも傍にいて欲しいし、いつまでも傍にいたい。……だから『必要じゃない』とか、そんな悲しいことは言わないで欲しい。あなたは私が一番、必要大好きなとしているヒトだから」

心の中では、『必要としている』を『大好きな』に変えて言葉を紡いだ。

そして、シャルロットはレイに抱きついた。

そんなシャルロットを抱きしめ返し、レイは呟く。

「シャルロット……。弱いな、俺は。護るべき人に支えられなければ、

自信を持って生きていくことすら出来ないとは」

「……誰かに支えられるのは悪いこと？私は、いつもあなたに支えられている。それが、私にとっては幸せ。……だから、私もあなたを支えたい。……ダメ？」

その言葉は、抱きついたままに。

「……いや、これからも支えてくれ。俺は弱い人間だから。幼い頃の家族の死や、ミラーナの村人たちの死、そしてなによりリーネの死だつてまだ乗り越えられていない。そんな弱い人間だから。……シャルロットさえいいのなら、支えあつて生きていこう」

シャルロットは返事こそしないものの、抱きつく手に込める力を強め、肯定の意を示した。

しばらく抱き合い、やっとのことで互いの体が離れて、繋がっているのは二人の手だけ、という状況になった頃、またもや唐突にレイが口を開く。

「なあ、実はここで贈りたいものがあつたんだ。……受け取つてもらえるか？」

「……贈り物？」

シャルロットは、コテン、と可愛く小首を傾げた。

『ああ、贈り物だ』と、レイは答え、先ほど『渡り人』から受け取つた四角い小箱を取り出し、シャルロットの方へ差し出した。

「開けてみてくれ」

言われた通りに、その小箱を開けるシャルロット。

中に入っていたのは、一对のイヤリングだった。そのイヤリングには台座のようなものがあり、綺麗に研磨された小さな蒼い石が嵌っている。

特筆すべきは、蒼い石。その蒼い石は『青い魔力』を纏っているのだ。

つまり、レイの魔力。前に贈られたブレスレットのように、『聖獣・シファード』が宿っているだけというわけではない。純粋にレイの魔力だけが込められた、珠玉の魔石なのだ。

「綺麗……。それに、あなたの優しい魔力を感じる。……これを見ていると、あなたと一緒にいることの次に幸せな気分になれる」

シャルロットは、思わず最初に夕陽を見た時以上の感嘆の声をあげた。

「俺を感じるのは当然だ。それは、俺が魔法なしで磨いたサファイアという宝石に、俺の中で最上といえる質の魔力を込めたものだから。魔力は込めた人物の特性や性質を現すんだ。……それと、俺と一緒にいることで幸せになってくれるとは、嬉しい限りだ」

「それは当たり前」

そう言って、シャルロットは微笑んだ。

この微笑みに、いつもは平然としているレイですらドキリとした。それ程までに魅力的な笑みだったのだ。

しかし、レイは照れ隠しでもするように視線を沈みかけている夕陽に向けて、説明を続ける。

「しかも、これは念じれば様々な武器に変わるように作られた魔石だ。………サイトのデルフを改造した時、シャルロットにも武器を渡すと言っただろう？今回、その約束を果たそうと思ってな」

そう言っただけで、イヤリングは二丁の魔銃に変えた。

「これはかなり特殊で、空気中の魔素^{マナ}を取り込んで銃弾に出来る。加えて、念じただけで元に戻すことも可能だ」

レイは魔銃を魔剣の形態にしたり、魔力を纏った盾の形態にしたりした後、イヤリングの形態に戻した。

「この形態変化は、俺がシャルロットにしか出来ないように設定した。……………気に入ってもらえたか？」

そう言っただけで、夕陽からシャルロットに視線を戻す。

「とても……………とても！……………嬉しい！」

シャルロットは、またもや抱きつく。

「これを貰ってくれるか？」

「喜んで……………」

抱きついたらそのまま顔をあげ、レイを上目遣いで見つめるシャルロット。

そんなシャルロットを見て、優しくイヤリングを耳に付けてあげるレイ。

「このイヤリングは、魔力で耳にくっついている。外したい時はそのように念じれば大丈夫だ。……………もちろん、付けるのも外すのも、俺がシャルロットにしか出来ないようになっている」

補足で説明を入れ、イヤリングを付け終えた手をシャルロットの背中に回すレイ。

「ありがとう……一生大切にします。もう、外さないノノノノ」

「…そうか、喜んでくれてなによりだ」

二人はいつまでも抱き合う。

いつの間にか夕陽は沈みきり、辺りは暗くなってしまっていたが、二人の心はいつまでも明るく、暖かかったという。

『……誰かに支えられるのは悪いこと?』(後書き)

どうだったでしょうか?

今回の話の趣旨はズバリ、支えあうことの意味と大切さです。

レイは自分の弱さを滅多に見せたりはしません。

全ての弱みを自身の心の奥底に封じ込め、どこまでも強く在ろうとします。

ですが、レイだって人間。いくら『最強』でも限界はあります。弱みだってあります。

そこで、今回は人に頼ることの大切さを学んでもらうことにしました。

強いばかりの『主人公最強』じゃ、つまらないと思ひまして。

さて、次回からはまた原作沿いで話を進めていきます。

よろしくお願い致します!

帰郷。…それでも相変わらずの……。 (前書き)

人気投票についてですが、一人五票までにさせていただくことになりました。

それと、延長の可能性はありますが、投票は11月いっぱいまで終了とします。

出来れば、投票していただくと嬉しいです。

さて、今回の話は、ヴァリエール家への帰郷です。

それでは、本文をどうぞ！

帰郷。…それでも相変わらずの……。

夏休みが終わり、平穏な日常は続いている。

……はずだった。

「旅ってわくわくしますね！」

「あ、ああ。…いや、俺は怖いけど」

シエスタはサイトの腕にしがみつきなから言った。

……あ、今後ろから感じる殺気が強くなった。………レイ、無視しないで助けてえええ！……以上、サイトの心の声でした。

ここで、分かりづらい現在の状況を説明しておこう。

? 夏休みが終わり、しばらく後、結局ゲルマニアと同盟を結ぶことにし、そして成功したアンリエッタが、アルビオンに攻撃を仕掛ける計画を練る。

? それを聞いたルイズが『姫様の力になりたい！』 参加したが

? それを聞きつけたルイズの姉、ヴァリエール家長姉のエレオノールが学院を訪問。

? 戦争に行かせないために、エレオノールによってルイズの帰郷が決定。

? サイト、シエスタが道連れに。

? レイが気付いて、仕方なく同行。(一応、説得に力を貸すつもり)

? ちなみに、必要な時以外は学院に転移。(シャルロットに会うため)

? 現在、ラ・ヴァリエール領に行くため、従者の馬車とヴァリエール姉妹の馬車二台で移動中。(従者側にサイトとシエスタ、そし

てレイだ)

……………というわけだ。

お分かりいただけただろうか？

「そういえばサイトさん。夏休みの間はミス・ヴァリエールと何を
してらしたんですか？」

シエスタの話は続く。……………それにつれて後ろの馬車にいるルイズの
殺気は濃さを増す。

「え？特に何もしてねえよ？あははは……………」

「……………なにか知られちゃまずいことでも？」

サイトは沈黙してしまう。一応、極秘の任務だったため、教えるこ
とが出来ないのだ。

見かねたレイが口を開く。

「何もないだろう？ルイズは城に通い詰め、使い魔として同行した
お前も俺の与えた課題に取り組んでいたはずだろう？……………もしや、
サボったのか？俺に聞かれるのが怖くて言えなかったと？」《助け
るのはこれで最後だ。次は自分で切り抜けるんだな》

最後は念話で付け加えた。念のため、パスはつなげたままにしてお
くレイ。

「す、すいません！サボってました！！許してええ！！」《ん？念
話…だよな？……………助かったああ！！ありがとう！！……………ついでに後
ろのルイズもなんとかしてくれ！頼む！》
「なんだ、そういうことだったんですね」

《自分でなんとかしろ。俺には関係ない。では、つながりを絶つぞ》
「それだけは勘弁してえええ!!!」
「仕方ない。あの訓練メニューにするのはやめておいてやる。これで文句ないだろう?」

有無を言わさぬ口調のレイ。(でもとりあえず、シエスタに変に思
わせない配慮も忘れない)

サイトは、助けてもらうことは叶わなくなってしまった。

またまたサイトとシエスタの(シエスタからの一方的な)いちゃい
ちやが始まった頃、ルイズたちは。

(あ!あんなことまで!もう許せないわ!)

杖を振る。爆発……は、レイのマジックシールドによって弾かれる。

(あああ!もう!!--レイは連れてくるんじゃない!)

ルイズは諦めずに、もう一度杖を振ろうとする……が。

「きゃあ!いだい!きゃ!やめ!ぎい!いふあい!」

エレオノールに頬を抓られた。

あのルイズを軽く越えるプライド、我が儘、傲慢、頑固さ……。
そのブロンドの髪を煌かせ、つりあがった眼鏡の奥から気の強そう
な視線を向けて叫ぶ。

「ちびルイズ!私の話はまだ終わってなくてよ?」

「ずみません~~~~。おひゆるひを~~~~」

ルイズはもう半泣きだ。恐るべし、ルイズの進化系（笑）！！

「せっかく私が話しているというのに、きよろきよろと余所見をするのはどういうわけ？馬車に爆発魔法放つし……それでも弾かれたのはおかしいわね。……まっ、そんな関係ないわ。なぜ、従者の馬車を吹き飛ばそうとしたわけ？」

「そ、それはその……使い魔がメイドと……その……くつついたり……」
「従者のことなんて放っておきなさい！相変わらず落ち着きのない子ね！あなたはヴァリエール家の娘なのよ？もっと自覚を持ちなさい！」

「は、はい……」

……あのルイズが素直になっている。気の強い姉を持つと大変のようだ。

そんなこんなで夜になった。

ヴァリエール領まではまだ半日ほどはかかりそうだ。

レイはルイズたちの馬車に向かい、扉をノックする。

「レイだ。開けるぞ」

扉を開け……。

「俺は一旦学院に戻る。しばらくいないが気にしないでくれ」

馬車内には入らず、いきなりルイズに告げた。

「え？なんでよ？」
「タバサ（シャルロット）に毎夜帰ると約束した（させられた）からな。……心配は要らない。一応、合流はするつもりだ。まあ、ヴ
アリエール領に着く頃までは向こうにいそつだが」
「着く頃までには戻ってくるのよ？」
「了解した」

二人のやり取りを見たエレオノールは訝しむようにルイズに話しかける。

「随分態度の大きい従者なのね？」
「いえ、レイは従者って言うよりは……」
「ただの助っ人だ。それと、俺はそれ相応の理由がない限りは相手によつて態度を変えるつもりはない」

この言葉に、エレオノールはピキッ！と青筋を立てる。

「なんですつて？ヴアリエール家の長姉である私にもそんな態度で話しかけてくるわけ？平民のくせに生意気よ」
「関係ないな。俺は身分なんてどうでもいい。よつて、お前が誰であるつと俺が敬語を使う理由にはならない。……理解したか？」
「出来るわけないじゃない！そもそも「話が長くなりそうだが、俺には聞く義理はない。……待たせているヤツがいるのでな。失礼する」……ちょ、何言つてるのよ！」

しかし、エレオノールの抗議も虚しく、レイの姿はかき消えた。始めて見る転移魔法に、開いた口が塞がらないエレオノールに対し、ルイズは珍しく達観したように話しかけた。

「エレオノールお姉さま。レイのクオリティの高さは、全方面で…それこそ、剣術、魔法、頭脳、芸術…もう、本当に何においても高過ぎます。はつきり言って異常です。おかしいです。人外です…それでも、私たちが困った時はいつも助けてくれるし、それなりに良いヤツなんです。とりあえず、多めに見てあげてください」「さっきの魔法を見れば分かるわ…。確かに凄すぎるわね。…：：：気にしないでおくわ」

エレオノールの価値観すらも覆したレイであった。

一方、その偉業？を成し遂げたレイはというと…。

「…遅い」

と言われながら、シャルロットに抱きつかれていました。

「悪かったな、シャルロット。明日一日はずっとそばにいる」

レイはそう言って優しくシャルロットの頭を撫でる。

本当に呆れるほどに二人の世界全開だ。

…：：：ちなみに現在、シャルロットの部屋にいる。何気にキュルケも遊びに来ていた。

「それにしても、二人ともいつ見ても甘ったるいほどにラブラブよねえ」

「そつでもないぞ？」

「これが普通」

「それが普通になってることが、甘くてラブラブって言うのよ」「さすがのキュルケも、この雰囲気にはニヤつきたくなる衝動を抑えられなかったとか。

もちろん、キュルケが帰った後は、シャルロットに抱きつかれながらレイは眠りについた。

だが、完全に眠る前に一つ、独り言。

「これが普通になっていることはおかしいのか……?」

キュルケの言葉がちよっぴり気になったりするレイであった。

帰郷。…それでも相変わらずの……。 (後書き)

やはり、レイとシャルロットを引き離すことは難しい…。

…… 思えば、戦闘シーン以外はほとんどレイとシャルロットは一緒にいた気がします。

さて、一人につき投票を五名としたことに伴い、もう一度エントリー者を記して起きます。

- 1・レイ (主人公。喪服的黒衣)
- 2・リーネ (レイの初恋の人。故人)
- 3・アシエル (『無情』。敬語くん1)
- 4・ルナルト (『崩壊』。精神崩壊してるキャラw)
- 5・リユナ (『腫瘍』。口癖『アハツ』)
- 6・レンドル (『狂乱』。かませ犬w)
- 7・リオール (『剛力』。一人称『我』)
- 8・ティード (『幻想』。名前変更された、哀れw)
- 9・シファード (聖獣。敬語くん2)
- 10・メモリーズ (最強の魔獣)

忘れていましたが、リーネの父である『フィール』や、レイの師匠であるじーさんこと、師匠こと、『ゴール』もエントリーさせた方がよかったですかね？

しかも、近いうちに投稿することになるレイの過去を語る挿話があるんですが、その時にリーネやフィール、さらにはリーネの母親の

名前も登場します。リーネに至っては、会話もします。

フィールやゴール、この先名前だけ出る予定のリーネの母親に関しては、どうしてもという場合は投票してくださって構いません。そして、リーネに少しでも興味がある方は、少し待っていただければレイとリーネが会話している過去を投稿しますので、それまで投票は待った方がいいかもしれません。(一人五票までなので、とりあえず四票入れる!とかは全然アリです!というか待ってます!!)

結局二人を引き離すことは困難だ。いや、不可能だ？（前書き）

はい、レイとシャルロットは引き離すことなど出来ないのです（笑）

さて、人気投票は11月で終了とさせていただきます。

一人五票まで、重複もアリですので、出来れば投票してもらえると嬉しいです！

今のところ、『レイ・クロカミ』一票、『リーネ』一票、『ルナルト』二票、『メモリーズ』二票と、並んでおります。

一票入っているのは『シファード』のみとなっております。

それでは、本文をどうぞ！

結局二人を引き離すことは困難だ。いや、不可能だ？

翌日の昼。いつそシャルロットも連れて行けばいいか、という判断を下し（学院長に、シャルロットの休暇許可をもらい）、レイとシャルロットは昼少し前ほどにルイズの『気』のもとに転移した。

「面倒だからタバサ（シャルロット）も連れてきた。寝室は俺と同じでいいし、邪魔はしないからいいな？」

いきなり現れ、有無を言わさぬ口調でルイズに告げたレイ。

「いきなりびっくりするじゃない！……でも、いいわ。タバサなら邪魔なんてしないでしようし（というか、ずっとレイにくっついてるだけだし）」

ルイズの心の声に、聞こえないはずのサイトやシエスタがうんうんと頷いている。

何に対して頷いている？と疑問に思いながらも、レイとシャルロットは言葉を返す。

「？……恩にきる」

「…ありがとう」

エレオノールにも一通り自己紹介、説明を終え、レイはところで…と話を切り出した。

「ヴァリエール領には、あとののくらいで着くんだ？」

「もつすぐよ。……あっ、ほら！見えてきた！」

というわけで領地に入ったのだが、全く屋敷は見えない。

「今までとの違いがほとんど分かんねえし」

とサイトが呟いてしまっくらいだ。

「屋敷まではどれ程の時間を要する？」

「そうね……だいたい半日くらいかしら」

馬車でそんなにかかるのは、さすがに広すぎではないだろうか。

半日が経ち、今は夜だ。

ヴァリエール家の門が見える。……王宮に匹敵、もしくはそれ以上の大きさなのは気にしないでおう。

サイトやシエスタがその大きさにはしゃいでいると、これまた大きなふくろうが一同の目の前に現れた。

『お帰りなさいませ。エレオノール様、ルイズ様』

そして喋り、お辞儀までしてみせた。

驚きで開いた口が塞がらないサイトやシエスタを尻目に、エレオノールは当たり前のようにふくろうに話しかける。

「トウルーカス、母様は？」

『奥様は、晚餐の席にてお待ちしております』

「父様は？」

『旦那様は、未だにお戻りになっておりません』

今度はルイズが話しかける。

「ちい姉様はどこにいるの？」

『カトレア様は門の向こうでお待ちなっておりますよ』

『ちい姉様』もしくは『カトレア』とはヴァリエール家の次女のこと、ルイズがもつとも慕っている人物だ。

カトレアに早く会いたいのか、心持ち急いだ様子のルイズが常時稼働の自家用ゴーレムに命じ、跳ね橋を降ろさせる。

門の向こうにはたくさんの従者と、カトレアらしき桃髪の女性が待っていた。

カトレアはルイズに似ているのだが、全てを包み込むような慈愛を感じられる雰囲気を発している女性だった。……だが、この女性は大きな病気を抱えている。

まあ、そこから感じられる儂さも、その美しさを際立てているのだが。

「……………お帰りなさいませ、お嬢様方」……………

「」

従者が一斉にお辞儀。

サイトとシエスタは自分に向けられたわけでもないのに、緊張でがちがちだ。

……………一応、現代の庶民派（というか孤児院の少し貧乏な）日本人の価値観を持っているはずのレイは全く動じていないが。

レイは何を見ても大抵は動じずに、凍てつくような瞳、そして不敵な表情を崩さないのだ。（例外として、シャルロットと話す時は優しい表情になることが多い）

そんな中、ルイズは一直線にカトレアの方に走っていき、抱きついた。

「ちい姉様！」

「ルイズ！ いやだわ！ 私の小さいルイズじゃないの！ やつと帰ってきたのね！」

「お久しぶりですわ、ちい姉様！」

そんな光景に対し、何気に嫉妬しちゃったりしているエレオノールを見て、レイは一応励ましてみることにした。

「気にするな。あいつだってお前の愛情には気付いているさ。それが表面に表れないだけだ。……お前と同じでな」

全とお見通し、とでも言うように唇の端を吊り上げ、不敵に笑うレイ。

「なっ！ わっ、分かってるわよ！ そんなこと！」

この言葉に、レイは苦笑しながら答える。

「そうか。それならいいんだ。どうやら俺の思い違いだったらしいな」

そしてエレオノールはかなり慌てた様子で言葉を返す。

「そそ、そうよ！ 勘違いしないでちょうだい！」

どうやら、ルイズのツンデレ属性はエレオノールから受け継いだよ

うだ。

と、こんな会話をしていると、シャルロットがレイの服の裾を引っ張る。

「ん？どうした？」

そして、何も言わずに抱きついた。

「ああ、そういうことか。構ってやれなくて悪かったな」

すぐにシャルロットの意図に気付いたレイは、優しく抱きとめて、自身の胸辺りにくる頭を撫でる。

「ええっ！？なにその反応???!」

……やはり、そんな状況に驚いたエレオノールはとりあえず置いておこう。

そして、こちらの一行に気付いたカトレアが唐突に話しかけてきた。

「まあまあ、あなたはルイズの恋人ね？」

「え？なに言ってる……」

まずはサイトに対して。

「あらあら、あなたはその人がそんなに好きなのね！」

「（コクリ）／＼／＼」

次はシャルロットに対して。『その人』とは当然レイのことだろう。

「まあ！あなたはルイズの恋人さんが好きなのね？複雑な三角関係だわ、フフッ」

「あ、あの、はい…サイトさんのことは好きですけど…」

次にシエスタ。いきなり貴族に話しかけられて困惑中。（というか、ふくろう喋ったショックと、従者多過ぎショックからも未だ立ち直ってない）

ここまでは大体当たっていたりする。（サイトとルイズは、照れて全力で否定しているが。しかも、カトレアは抗議を全くもって聞かずに、他の人へ話しかけている）

カトレアの直感や洞察力には、並外れたものがあるようだ。

そして、次はレイの番。

漆黒の少年の方に目を向けるカトレア。

「あら？真っ黒な服のあなたのことは何も分からないわ」

「それはそうだろう。見るだけでその人のことを理解するなど、普通は無理だ」

「あら、そうね。確かに分からなくて当然だわ」

何がおもしろいのか、カトレアはコロコロと楽しそうに笑った。

最後のレイのことが全く分からなかったのが、それほどおもしろいのだろうか。

敬語を使っておらず、倨岸不遜な態度であるにも関わらず、全く気にしていない。

まあ、実態はレイが知られないように自身から発せられる情報を全て遮断していただけなのだ。

……過去の深い悲しみを読み取られなくなかったのだろう。

ひとしきり笑い終わった後、カトレアが名前を知ろうと、質問してきた。

「ルイズの恋人さんと、恋人さんのことが好きな子、それと一途な子と、その恋人さんの名前を聞かせて欲しいわ」

「だからこいつは恋人じゃないです！ただの使い魔！」

「あらあら、ごめんなさい。私、よく勘違いするのよ。フッフ」

確実にルイズの言うことを信じていそうもないカトレア。

このままでは不毛な会話が続くと思ったサイトは、とりあえず自己紹介することにした。

「まっ、いいや。俺はサイトっす。サイト・ヒラガ。一応、ルイズの使い魔やってます」

「シ、シエスタですっ！！」

「使い魔もどきで助っ人、レイ・クロカミ」

「…その恋人……だと嬉しい、タバサ」

とりあえずレイとシャルロット、ついでにシエスタも追隨しておいた。

というわけで自己紹介を終え、一行は屋敷内に入ってゆくのだった。

結局二人を引き離すことは困難だ。いや、不可能だ？（後書き）

いや、人気投票もそろそろ終わりですねえ…。

誰が後書きで語る役を担うことになるんでしょうか。

あ、今思っただんですけど、人気投票一位のキャラにメイン司会者をやらせて、原作キャラとオリキャラ問わずにゲストを呼ぶというのはどうでしょうか？

これについての意見もお待ちしております

それと、どうでもいいかもしれませんが、今話の中ではエレオノーラの嫉妬シーンが好きです（笑）

『せめて行き先ぐらい教えてええええ!!!』 (前書き)

人気投票の途中経過です。

一位 レイ・クロカミ (五票)

二位 メモリーズ (三票)

三位 リーネ、ルナルト、シファード (二票)

……さり気なく、メモリーズに結構人気がある……意外だ……!

とはいえ、一位のレイでさえも、一人が一気に五票誰かに入れば追いつかれます。

未だに意見は反映されるので、投票をお願いします!!

それでは、本文をどうぞ!!!

『せめて行き先ぐらい教えてええええ!!!』

召使いの控え室に通されたシエスタ以外は、晩餐会に同席することになった。しかし、貴族であるシャルロットはルイズの学友として招かれ、食事を出来るのだが、サイトとレイは使い魔として後ろに控えることが許されただけだ。

ちなみに、サイトはルイズの後ろに、レイはシャルロットの後ろに控えた。

ただ、食事中にシャルロットがレイに食事を分けるといふイベントはあった。

完全に二人の世界に旅立ち、周りの驚きなど見向きもしない。

さらには、ルイズの母親であるカリーヌの鋭すぎる視線にも全く動じない。(そのうちカリーヌは、なんかいろいろと諦めた。レイが、カリーヌの放つ威圧感を完全に消し去ったことに気付いたのだ。本来は、この世界において最強とも言うべき母親なのだが…)

最終的には「後で、またどこかへ食べに行こう」というレイの言葉で締めくくられた。……まあ、足りないのは当たり前だろう。

その後、ルイズは意を決して自身の母親に声をかける。

「あ、あの…母様」

だが、エレオノールによって完全に遮られる。

「母様！ルイズに言ってあげて！この子、戦争にいくなんてバカげたこと言ってるのよ！」

「バカげたことじゃないわ！陛下の軍隊に志願することがどうしてバカなことなの？！」

言い合いが始まってしまった。……喧嘩するほど仲がいい。これが本当ならば、二人は相当に仲がいいのではないだろうか。

だが、こんな会話に嫌気がさしたのか、レイは話を遮る。

「うるさい。タバサ（シャルロット）の声が聞こえないだろうか」

「「え？そつち？？」」「」

ルイズとエレオノールに加え、思わずサイトもツツコミを入れてしまった。

「……………冗談だ」

全く冗談に見えない。

そんなことはお構いなしに、レイは先ほどの言葉を「冗談として話を進める。」

「だが、ルイズ。説得するなら、怒鳴っているのは駄目だ。もっと論理的に、そして冷静に行きたい理由を語れ」

「論理的、冷静って言われても……。あの、だから、陛下が私を信頼してくださっているから……」

「どうして陛下があなたを信頼するの？ゼロのルイズなのに」

ルイズはまだ自身が虚無であることを家族にさえ明かしていないの

だ。

よって、家族の間では未だに『ゼロ』なのだ。

「まあ待て。女王は実際にルイズを信頼し、今までに様々な任務を与え、そしてこいつは成功させてきた。当然、仲間の力や、使い魔や助っ人の立場にある俺たちの力を借りることは多々あったが、全ての任務を失敗することなく完遂している」

ここで一旦話を切り、レイは『本当に？』というような目で見てくるエレオノールを見やり、『補足だが…』と話を繋げる。

「人の価値は魔法の力で決まるものではない。これは戦闘に限定した場合でもそうだ。長つたらしい詠唱の間に斬れば、もしくは撃てば、それでメイジは事切れる。つまり、たとえルイズが『ゼロ』であつても、信頼されない理由にはならないというわけだ」

レイによる一応の助け舟。

エレオノールは、門で励ましてもらつて何気に気が楽になり、感謝していたりする（認めないが）ので、何も言い返せなかった。

しばらくの沈黙があり、最終的にはカリーヌが口を開いた。ルイズは反対されるのではないか、と身構える。

「黒衣の使い魔が言うことは、確かに理にかなっています。不遜な態度も、それに見合う実力によるものでしょう。とりあえず、この件は明日、父様が帰ってくるまで保留とします」

こうしてルイズの交渉は、一時的に小休止を迎えた。

食事の時間が終わり（一応サイトも使用人の食事を食べ終え）しばらく後、サイトは自分に割り当てられた部屋にいた。ちなみに、レイとシャルロットは、転移で外食に出かけた。そろそろ帰ってきてもおかしくない時間ではあるが。

そしてサイトが、レイだけ出かけてズリイなあとか思っていると、唐突に扉がノックされた。とりあえず返事をしてみると、入ってきたのは……。

「シエスタ？」

シエスタだった。顔を真っ赤にし、足元が不安定だ。

「あ、あの…来ちゃいました」

「なんでここが分かったんだ？」

「召使いの方に訊いたんです」

だが、ここでサイトはシエスタの様子がおかしいことに気付く。

「なあ、酒飲んだら？」

「え？あ、ああ、はい。ほんの少しですけど」

サイトは気付いた。……明らかに酔ってる！！

「サイトさん…私と既成事実を……」

「え？」

「サイト！お前も飲め」

「口調が?!……ここは逃げる!」

このままでは理性が崩壊し、シエスタを襲ってしまう可能性……そしてその結果としてルイズに半殺しにされる危険性を考えたサイトは、目にも留まらぬ速さで逃げ出した。

「待て!!」

シエスタもそれを追う。……性格変わりすぎだろ……。

一方、やっと食事を終え、外食（今回は4軒はしご）からルイズに分け与えられた部屋に帰ってきたレイとシャルロット。

二人はレイの創った小部屋（内部ホテル式）に備え付けられているシャワーを順番に浴びて、寝巻き（といっても、レイの寝巻きは普段着と区別がつかない。違いを分かっているのは本人だけ）に着替え、そして小部屋を消し去った後、ゼロ距離読書（レイとシャルロットの距離がゼロ。つまり密着状態での読書）を実行中だった。

しばらく、心地の良い沈黙が続いていたのだが、唐突に慌てた様子で扉がノックされた。

「サイト、邪魔だ、帰れ」

「……邪魔しないで」

とつくに正体に気付いていたレイとシャルロットは、扉が開く前に声をかけた。

「いや、マジヤバイから！一旦でいいから匿って！！」

「彷徨っているシエスタからか？」

「そう！酔ってんだよ！なんか既成事実がどうか…！」

「……勝手に作って。私たちには関係ない」

「いやいやいや！マジ、ちよつとでいいから！！」「サイト……」

どこですか……。逃げちゃダメじゃないですか……。サイ
ト……」……ひいひい！！一瞬！一瞬でいいから！！」

シエスタの接近に怯え、パニクるサイト。

すると中からはあ、と溜め息が二つ聞こえ、「……入れ」という不
機嫌なレイの声が聞こえた。

サイトはすぐに部屋の中へ。ちよつど入った瞬間にシエスタが一番
接近していたが、とりあえず気付かれなかったようだ。

「助かったああ！マジで危なかった」

「お前も災難だな」

「……でも、邪魔していい理由にはならない」

シャルロットはレイとの時間を邪魔されたことで、少し不機嫌に咳
いた。

そんなシャルロットを諷めるように、レイは優しく語り掛ける。

「まあ、これくらいは許してやれ」

「……レイが言うなら」

「良い子だな」

「（コクリ）／／／／／」

レイは、シャルロットの頭を優しく撫でた。

赤面しながらも頷くシャルロット。

「……居心地悪っ！……！」

そんな状況に直面し、このようなツツコミを入れてしまったサイトに罪はないだろう。

しかし、レイたちにとっては迷惑以外の何物でもないがために……。

「そんなに言うなら、ここに来るな。………そうだ、おもしろいことをしてやるう。まあ、お前にとって悪いことにはならない………はずだから頑張れ」

と、ニヤリと笑って告げられた。

「え？悪いことにならないのに『頑張れ』ってどづいづこと？」で
はな。《テレポーターション！》「ちよ、待つ………」

そしてサイトは、全ての言葉を言い終える前に転移させられてしまった。
った。

「どこへ送ったの？」

「ルイズのところだ。………どうやら、次女もいるらしいが」

「………おもしろいことになりそう」

一方、ルイズはカトレアの部屋で髪を梳いてもらっていた。
そして今日は、姉妹二人で眠るつもりなのだ。

しばらく二人で楽しく過ごし、二人でベッドに入る。

すると…。

「てえええ!!!せめて行き先ぐらい教えてええええ!!!」

という叫び声と共にサイトが部屋に姿を現した。

ちなみに、転移させられた時の言葉と合わせると『ちよ、待ってえええ!!!せめて行き先（以下略）』となる。

「あらあら、ルイズの恋人さんね。どうしていきなり出てこられたのかしら?」

カトレアはどこか楽しそうに呟いた。

だが、ルイズの反応は違う。

「サイト…。ここはちい姉様の部屋よ。……レイに頼んで、ちい姉様に夜這いをかけようというわけなのね?」

「ちちち、違う!!!俺だってシエスタから逃げてレイの部屋行って、転移させられて…なにがなんだかサツパリなんだって!!!」

「うるさいうるさいうるさああい!!!あんたにはお仕置きが必要だわ!」

と言って杖を振る。……部屋に被害が出ないように、ピンポイントでサイトの頭を狙って爆発させた。そして気絶。

哀れ、サイト。

五分後、目を覚ましたサイトは必死で事情を説明し、一応の理解を得たという。

そしてルイズは、さすがにばつが悪かったのか、一緒に寝る事を提案した。

結局は、サイトは安眠を手に入れることが出来たのだ。（爆発によ

る気絶は、この際忘れる)

だが、サイトは思う。……悪いことにはならないが、頑張らないといけない。(主に爆発に耐えるという意味で)

それって完全にレイの言った通りじゃん！先読みしないでええ！！
！…と。

『せめて行き先ぐらい教えてええええ!!!』 (後書き)

やはり、サイトはいじりがある(笑)

報告です。

明後日の月曜日に、レイの過去話を投稿させていただきます。

少し残酷な話ですが、終わり方は暗い感じで終わらせないようにした、作者の自信作です。

お楽しみに！

レイによる『虚無』属性についての考察。…長いけどね(笑)(前書き)

人気投票は明々後日の30日、火曜日までです。

一人五票までですが、よろしくお願い致します。

さて、それでは本文をどうぞ！

レイによる『虚無』属性についての考察。…長いけどね(笑)

帰郷した翌日の朝。

屋敷の前に停まった馬車から、一人の貴族が降りてきた。ヴァリエール公爵だ。

白髪が混じり始めたブロンドの髪と髭、モノクルの奥から覗く威厳に満ちた眼光、年の頃50過ぎ。そんな初老の貴族だった。

帰ってきたヴァリエール公爵は、たくさんいる従者たちのうちの一人に話しかける。

「ルイズは戻ったか？」

「つい昨晚、帰ってこられました」

「では、朝食の席に呼べ」

「かしこまりました」

そして、朝食の時間。ヴァリエール家の朝食は、日当たりのいいバルコニーで取ることが多い。今日も、その常にもれず、バルコニーでの食事を堪能していた。

ちなみに、レイとシャルロットは転移で外食しに行き、サイトとシエスタは使用人たちと食事を取っている。

「全く、あの鳥の骨め！」

朝食時のヴァリエール公爵の第一声は、この不満たらたらという言葉から始まった。

カーリーヌがまたですか…というような感じで質問する。

「どうかしたのですか？」

「このわしをわざわざトリスタニアまで呼びつけて何を言うかと思えば、一個軍隊を編成しろだと！ふざけおつて！」

「承諾なさったのですか？」

「そんなわけなかるう！すでにわしはもう軍務を退いたのだ！そもそも、わしはこの戦には反対だ！」

「そうでしたね。でもいいんですか？祖国は今、一丸となって仇敵を滅すべし、との枢機卿のお触れが出たばかりじゃないですか。ラ・ヴァリエールに逆心ありなどと噂されては、社交しにくくなりますわ」

枢機卿という言葉聞いた途端、公爵は顔をしかめる。

「あのような鳥の骨を枢機卿などと呼んではいかん！骨は骨だ！」

しばらく、こういった会話が続いたのだが、ついに意志を固めたルイズが口を開く。

「と、父様に伺いたいことがあります」

「いいとも。だが、その前に久しぶりに会った父親に接吻してはくれんのかね？」

なんと！ヴァリエール公爵は全く子離れが出来ていないような人物だった！

……………失礼。ただ、娘思いなだけ……………だと思いたい。

とりあえずキスをしたルイズは、話を続ける。

「どうして父様は戦に反対なさるのですか？」

「この戦は間違っている。こちらから攻めるべきではないのだ」

「でも……」

「まあ、とりあえず聞きなさい。敵は50000。対して、我が軍はゲルマニアと合わせて60000だ。此方の方が10000多い、と思うかもしれないが、攻める時には相手の三倍の数をそろえるのが定石なのだ。10000程度の差では、かなり苦しい戦いを強いられることになる」

公爵はルイズに言い聞かせるように言葉を紡いだ。

ルイズに少し考える時間を与えた後、公爵は再び口を開く。

「タルブでは偶然勝てたとはいえ、慢心が過ぎる。驕りは油断を生む。おまけに魔法学院の生徒を連れて行く？バカを言っちゃいかん。子供になにが出来る。戦は人数が足らぬ時でも、ただ数を増やせばいいというわけではないのだ。……攻めるといのは、勝ちが確定するような場合でない限り、行^{おこな}ってはいかんのだよ。分かったか？勝てるかも分からない戦争に、娘を行かせるわけにはいかん」

ルイズは黙ってしまった。

だが、しばらくしてまた口を開く。

「…陛下は私を必要としているの」

そして公爵がなにか言う前に、女王直属の女官の証を見せる。

「今は言えないけど……私、もう昔の私じゃないの！」

「ルイズ！父様になんてことを！」

エレオノールは声を荒げた。

そして、カリー又は鋭い眼光で全てを見据え……カトレアはなぜか微笑んでいた。

「陛下は確かに私のことを必要だとおっしゃってくださいました！」
「……それは名誉なことだ。大変名誉なことだ。……だが、やはり認めるわけにはいかん」
「父様！！」

ルイズは悲痛な声を出した。

それを見た公爵は、少し考え込んだのち、ルイズに言い放つ。

「お前は媚を取れ。そうすれば心が落ち着くからだ。……これは命令だからな。違えることは許さぬ」

「そんな……！」

落ち込むルイズを尻目に、公爵は執事たち命令する。

「しばらくの間、ルイズを屋敷から出してはならぬぞ、いいな？」
「かしこまりました」

執事の代表が受け答えそれを見届けた公爵はこの場から退場していった。

公爵が退場し、私室に向かっていると、目の前に上から下まで真っ黒な平民と、蒼い髪の貴族らしき小柄な少女が目の前に現れた。

「なんだ、貴様らは……！」

公爵は驚きながらも、唐突に出現した不審人物二人を誰何した。

「ルイズの使い魔もどきにして助っ人、レイ・クロカミ」
「……付き添い、タバサ」

とりあえず名乗る不審人物たち……じゃなくてレイとシャルロット。

「そんなことを聞いてるんじゃない！」

「いいのか？」

レイはいきなり不敵に問いかけた。

「なにがだ?!」

「俺が今から言うことは、ルイズの将来についてかなりの影響を及ぼす」

「なっ!!」

「聞きたいのなら、公爵の私室でだ。……どうする?」

公爵はしばらく迷っていたようだが、やがて嫌々ながら口を開く。

「……よかるう。わしの後に着いてきなさい」

「いい判断だ」

レイはまたもや不敵に口の端を吊り上げた。

公爵の私室にて。

レイは部屋に入るなり、盗聴されないようにする魔法を部屋にかけた。

「杖を使わずに魔法を……」

「まあ、そう気にするな。……さて、ルイズの話だ」

ここで公爵の表情は一気に堅くなる。

「ルイズの系統を知っているか？」

「系統？……未だ、発現していないはずだが？」

「……それは表面的にだけ」

シャルロットはレイの右手に抱きつきながら呟いた。

それが、レイの威厳を半減させているのだが、この際に気にしない。

「どうということなのだ？」

「つまり、人にはとても言えない系統というわけだ。……騒がれるからな」

「……それはつまり……」

「そうだ。ルイズの系統は虚無だ」

驚きを隠せない公爵を尻目に、レイは話を続ける。

「その根拠を説明しよう。……まず、ルイズの魔法が全て爆発するという点。普通、魔法が失敗すれば何も起こらないはずだ。だが、ルイズの魔法の結果は爆発。あきらかに系統魔法とは違う上に、その実態は攻撃力や汎用性に富んだ魔法だ」

「確かに……」

公爵は何か納得したように呟いた。
そしてレイは、第二に……と続ける。

「ルイズの使い魔についてだ。ルイズの使い魔……つまり、俺やサ

イトは人間だ。これはあきらかに特異。そして契約したサイトに刻まれたルーンは伝説の使い魔の証『ガンダールヴ』。これは始祖ブリミルの使い魔、神の盾・ガンダールヴと同じということだ」

公爵は黙ってレイの話を咀嚼している。

……そしてシャルロットは黙ってレイの右腕に抱きついていてる。

「最後に……これはさらに内密な話だが、他国にも虚無として覚醒している人物がいるという点。これで、虚無系統が実際に存在するということを実察する事が出来る。俺の仕入れた情報では、ガリアの『無能王』ジヨゼフ。そして、ブリミル教の教皇、ヴィットーリオ。さらにアルビオンにもいるのだが、まあそれは置いておこう。……これはルイズも含むが、全員が王家の……始祖の血を継いでいる。おそらく虚無は、同じ時代に伝説の使い魔と同じ数である四人が同時に存在しようとし、さらには始祖の血を継いだ者に発現するということだろう。補足だが、タルブでの『奇跡の光』。あれはルイズの虚無魔法『エクスプロージョン』だ。……そして、ルイズは女王の幼馴染で信用出来るという点と、虚無であるという点のおかげで重宝されている。理解したか？」

公爵はレイの言ったことを頭の中で反芻し、しばらく考え込んだあとに呟く。

「……確かに、君の言ったことは筋が通っているな」

「信じるか信じないかは、公爵次第だ。それと、一つ忠告だが、この話は知らないふりをしろ。ルイズが言い出すまでな。……これは待つてやった方がいいはずだ」

「……承知した。……はあ、気が滅入るな。気分転換に散歩をすることにする。君たちも退室してくれ。それと、有益な情報だった。礼を言うぞ」

「大したことではない。……………タバサ（シャルロット）、行くか」
「分かった」

シャルロットが答えた瞬間に、二人の姿はかき消えた。

「ふう、あの二人はよく分からぬな……………」

公爵は疲れたように呟き、従者を引き連れて領内の散歩に出かけた。

そして、池の畔にて。

小船が浮かんでいる、その中に公爵は人らしき影を確認した。…それも二つ。

そして中からは声が聞こえてくる。

「好き。ルイズ大好き」

完全にサイトだ。

公爵呆然。

だが、こちらを見ている公爵に気付いたルイズが、パツとサイトを突き飛ばす。

「なにすんだよ」

で、サイトは立ち上がり、やっとのことで観客たちに気付く。

「ゲツ！！……………ヤベエ」

「使い魔を捕まえるおお！！縛り首だああああ！！！！」

「……………はっ！かしこまりました！！」「……………」

たくさんの従者が命令に従い、サイトに襲い掛かる。

サイトはデルフを抜き、ルイズを抱きかかえて、ガンダールヴ全開で従者たちの間を走り抜ける。

『ケケケツ！相棒！またまた大変なことになってんなあ』

「ごめん、話あと！…ってか、遠隔攻撃の威力って、相手が気絶する程度に出来るか？！」

『出来るぜえ』

「マジか！……じゃあ、いつけえ！」

サイトは青く光るデルフを振り抜き、従者たちの群れを吹き飛ばした。

「これで逃げ道確保だ！」

「クツ！逃がすな！！跳ね橋を上げる！！！」

公爵の命令通りに門番が跳ね橋を上げようとするが…

「もう遅いって！」

サイトはルイズを抱えたまま跳ね橋を一気に登りきり、向こう側に飛び込んでしまった。

「なにしとるんじゃああああ！！！！！」

公爵の叫びを背に、サイトは駆け抜ける。

その先には、レイとシャルロット、シエスタまで、全ての荷物（サ

イトたちの分まで」を持って立っていた。

「もう先はお見通しってか？」

「ああ。では、『レポートーション！』」

そして、5人のシルエットは、瞬く間にこの場から消えていくのだ
った。

レイによる『虚無』属性についての考察。…長いけどね(笑)(後書き)

ついに明日、レイの過去話を投稿します。

レイの一人称で進め、過去の夢を見ている、というような感じの話です。

一応、作者の自信作ですので、よろしくお願いします

あ、リーネファンは必見ですよ(笑)

それはある虚無の日の…。(前書き)

人気投票は明日までです。

どの方の投票も、お待ちしております！

さて、今回は初めて、一人称で話を進めていきます。

虚無の日(お休みの日)に見たレイの夢から始まるお話です。

それでは、本文をどうぞ！！

それはある虚無の日の…。

それは、ある虚無の日のお話。
絶望を乗り越えようとする、漆黒の少年の過去。

Side Ray（レイ・サイド）

夢を見ていた。あの時の悪夢を。あの時の絶望を……。

目の前に広がるのは、限りない大草原。

あの時と変わらず、そこに在る。……いや、これはあの時と全く同じ？……俺が初めてミラーナに迷い込んだ時と同じ？

唐突に、魔獣が襲い掛かってきた。……これも、あの時と同じタイミングだ。

今の俺からすれば、取るに足らない弱い魔獣たち。
だが、それでも俺の体は動かなかった。おそらく、俺はあの時と同じ行動しか出来ないのだろう。……これは“夢”であり、一時は幸せを掴みかけていた俺の……忌まわしき“過去の罪”なのだから。

やはり、あの時と同じように、リーネの父親であるフィールからの助けが入る。

「命を簡単に捨てるのは感心せんなあ、少年」

分かってるさ。命を失うことへの恐怖。大切な人を失うことへの恐怖。……それは俺が一番よく分かっている。そんなことを考えながら、俺の意識はあの時と同じように闇に落ちた。……これで夢から覚めればいいんだが。

目を覚ましたのは、やはりあの時と同じフィールの家。まだ、夢から覚めることは許されないようだ。

そして目に入るのは………リーネ。あの時と同じように高鳴る心臓の音。……だが、それ以上に広がる大きな悲しみ。

………お前を……死なせたくない。

「あつ！起きたんですか？………お父さん！男の子が起きたよー！」

鈴の音のような、綺麗なソプラノもあの時のまま。長い金髪を真っ直ぐ下ろした、清楚な印象もあの時のまま……。

そこでまた俺の意識が飛ぶ。どうやら、記憶を飛ばして見ているらしい。……初めて見る魔法に驚き、異世界にいることを確信した時の記憶や、フィールにしばらくの滞在を勧められた時の記憶や、フィールとリーネ、そしてリーネの母親であるシオンの三人との夕食の記憶は、まるで走馬灯のように一気に駆け抜けた。

記憶の通りであれば、次の日の夜。やっとのことで記憶の早送りは

止まった。

おそらく、リーネから告白を受ける時の記憶だろう。
目の前には、顔を真っ赤に染めたリーネ。

「ねえ、レイ。……………実は私ね……………」

『敬語はやめろ。……………敬語で話されるのは嫌いなんだ』と俺が言ったことよって変わった、砕けた口調で俺に話しかけてくるリーネ。その瞳は必要以上に潤んでいて、さらに俺の心臓を高鳴らせる。同時に悲しみも勢力を拡大する。

……………やめてくれ。そんな目で俺を見るな。未練を断ち切れなくなる。俺はお前を護れなかったんだ。俺なんかを好きになるな。

「私……………あなたのが好きみたい。……………一目ぼれって、ホントにあつたんだね。あなたを見て、初めて知ったよ」

「……………俺もリーネのが好きだよ。……………一目ぼれなんて信じていなかったんだがな」

返す言葉もあの時と同じ。……………ああ、もどかしい。早くこの村から逃げる、と言いたい。俺のことなんかは忘れて他の幸せを見つけれ、と言いたい。

だが、続ける言葉はやはり変えられないようだ……………。

「だから……………俺と一緒に……………」

「うん……………。いつまでも、どこまでも……………。私は、あなたが好きだから……………」

抱きついてくるリーネ。……………また、俺は抱きしめなければならぬのか。俺にそんな資格は無いと言つのに。

……………失う悲しみは募る一方だ。

そこで、俺の記憶はまた早送りを開始した。
リーネと将来を誓い合ったあの時の記憶も、そんな光景を見ていた
フィールやシオン、近所のおばさんにかかわれる記憶も、全てが
一気に駆け抜ける。

早送りが止まったのは、魔獣たちが侵攻してくる、あの日の記憶だ
った。

その日は雨。まるで魔獣の侵攻を示唆しているかのような、悲しみ
の雨が降り注ぐ日だった。

雨のせいで村の農作業が手伝えないために、俺とリーネは朝から話
し込んでいた。

その内容は、俺たちの将来の話。……もう死はすぐそこまで迫って
いるというのに、皮肉な話だ……。

「なあ、リーネ。これからどうしたい？」

「ん？私？……私はねえ、まずはもちろんこの村で結婚式を挙げる
でしょ？それからあ、旅に出てみたいなあ。この村以外の景色を見
てみたいんだ。……もちろん、あなたと一緒に、ね／＼／＼」

「ああ、それはもちろんだ。……俺も道中にお前を護れるように、
強くないとな」

「私を護ってくれるの？／＼／＼」

「当然だろう？……約束だ」

それは、すぐに破られる約束。……直後に、無数の魔獣が村人
たちを、フィールを、シオンを……リーネを……殺し尽くして
しまうのだから。

「うん！……約束、ね……／＼／＼／」

絡められる小指。それは約束の指きり。
無い悲しみの指きり。

永遠に叶うことの

そこで、俺の記憶はまた飛んだ。

魔獣の侵攻に気付いた時の村人たちの叫び声、なす術もなく殺されていく村人たち。

俺はすぐに胸を切り裂かれ、血溜まりの中に横たわることになり……
フィールは爪で胴体を切り離され、傷口から血をドクドクと流して
絶命し……シオンは首を喰い千切られて、鮮血をまるで噴水のように
勢いよく噴き出して事切れ……リーネは腹を大きく抉られ、血溜まり
の中に横たわり、完全に生気のなくなった瞳で、同じように横たわ
っている俺を見つめる……そんな記憶は一気に早送りされ、死ぬ
ことも出来ずに重傷状態で雨空を仰ぎ見る俺がいた。

周りには、夥しい量の血。
おびただ

つい先ほどまで聞こえていた叫び声は、すでに死と絶望によって塗
りつぶされている。

生き残りは俺だけだ。他には誰もいない。
全て………死んだ。今、さっき。だがそれはすでに過去……。

もう恐怖は感じない。ただひたすらに絶望と無力感だけが俺のココ
ロを苛む。あの時と同じだ。なにも出来なかった。立ち向かっても
腹を切り裂かれた。だが、運良く俺は死ななかった。……いや、目の
前で殺されてゆく大切な人たちを………リーネを見ながらも助ける
ことは叶わず、動くことすら叶わず、それどころか気絶も、まして
や死による安息を得ることも出来ない。
それは運が良かったと言えるのだろうか？

俺はあの時と同じように、いつの間にか死を切望していた。しかし

願いを声として発することは叶わない。死ねない。

あんな意味のない虐殺をするくらいなら、俺も一緒に殺してくれればよかったのに……。

なぜ、俺だけ生き残った？ どうせなら、皆と死なせてくれ。

大切な人たちは……リーネは死んだのに、どうして生きていかなければならない？ 孤独は嫌いなんだ。自分の存在が全て闇に吞まれていくような気がするから。……いや、俺にはそれがお似合いかもしれない。大切な人たちを誰一人として護れず、自分独りだけ生き残るような奴には。

空からは滝のような雨が、地面へ向かって真っ直ぐに降り注いでいる。まるで、死んでいった者たちの悲しみを体現しているかのよう

に。雨雲に隠れた太陽は、姿を見せる気配すらない。……このような絶望に太陽の光は似合わないのだから当然だ。

どれくらい時間が過ぎただろうか？

飲み食いはせず、血にまみれて空を仰いでいるだけなのだから、さすがに一週間経ったなどということはないだろう。

もしかすると、まだ一時間も経っていないのかもしれない

だが、俺にとっては永遠にも感じられる絶望。それは、俺の罪。護れなかった人たちへの償い。約束を守れなかった、リーネへの償い

……。

……太陽は未だ見えない。悲しみの雨が地面に吸い込まれてゆくだけ。

自身の感覚はほぼ消えた。もう痛みを感じないのだ。

ただ、未だにある絶望と無力感だけは消えてくれない。……それはそ

うだろう。これは俺の罪であり、俺への罰であり、そして償いなのだから。

今は、魔法を扱うことが出来るために分かる。

俺がこの世界に迷い込んだせいで出来た、時空の歪みが分かる。

魔獣たちが侵攻してくる原因となった、時空の歪みが……分かる。

それは俺の……罪の証のようで……つらい。

考えるのは、以前にこの虐殺を体験した時と全く同じこと。

護れなかった。一緒に死ぬことも出来なかった。約束を破ってしまった。……考えるのは全部そんなこと。負の螺旋の中に、俺の思

考は埋没していく。

雨が上がり、老衰で今はもういないじーさん……いや、師匠が俺の視界に入ったところ、今度は完全に意識が闇へと落ちていった。

目を覚ますと、今度目に入ったのは学院の個室、シャルロットの部屋の天井。どうやら、夢から覚めたようだ。

そしてもう一つ、俺の瞳に映る蒼い影……

……シャルロット。

「大丈夫？うなされてた」

「ああ、大丈夫だ。なんともない。……見守ってくれてたのか？ありがとうがとうな」

無理矢理にでも笑顔を作る。イヤリングをプレゼントした時に支えあうとは言ったが、この感情はシャルロットに言うべきではない。

……この無垢な少女に、あそこまで残酷な話の詳細を語るべきではない。

「いい。……でも、大丈夫そうには見えない。私はあなたが心配……」

「心配するようなことじゃないさ」

不思議だ。言うべきではないと思っているのに、言いたくなる。全てを打ち明けたくなる。

あの時のことを、詳細に。前に語った時のような簡潔な説明ではなく、今体験した夢のような詳細な説明をしたくなる。

「心配……する。……だって、あなたは泣いてるから……。そんな光景を見せられて、心配しないなんて……出来ない……」

驚いた。またもや涙を流しているとは。

俺はどれだけ弱いんだ。過去を押しえつつけることすら出来ないのか？

「……少し……少し目にゴミが「私には言いたくないことなの？」……シャルロット？」

「あの時、あなたは言った。『支えあって生きていこう』と。……その言葉は、ウソ？」

嘘にはしたくない。

確かに言いたい。それでも、言いたくないんだ。この気持ち矛盾していることは分かっている。理解し難いだろうことも容易に想像できる。……それでも、俺は……。

「私だって、あなたを支えたい。……私は、あなたが好きだから」

重なる。俺が告白を受けた時のリーネの姿と、今のシャルロットの姿が。

高鳴る。俺の心臓の音が。俺の燻くすぶった気持ちきもちが、高揚していくかのように。

気が付けば、俺は夢の内容を全て語っていた。

虐殺を目の前にして俺が何を思ったのか、という所まで正確に。

この話はシャルロットにとっては残酷過ぎたかもしれない。それでも最後まで聴いてくれた。

聴き終えた後は、特になにを言うでもなく、俺のために涙を流してくれながらも傍に寄り添ってくれた。

シャルロットがそこにいてくれるだけで、俺は安心できた。……もしかしたら、俺は本当にシャルロットの事を好きになっただけかもしれない。

妹のような存在ではなく、一人の女性として。

一段落した後は、シャルロットがそっと抱きついてきた。

なんだかすごく愛しくて、いつもより少し……ほんの少しだけ、強く抱きしめる。

俺は夢を見ていたんだ。乗り越えなければならぬが、忘れることは許ゆるされない夢を。

俺とシャルロットは、二人して涙を零しながら、落ち着くまでずっと抱き合っていた。

S i d e O u t .

それは、ある虚無の日のお話。

過去の絶望を少しだけ乗り越え、未来へ向かっていこうとする漆黒の少年と、それを支える蒼い少女の、これからも続いていく物語。

それはある虚無の日の…。(後書き)

どうだったでしょうか？

これで初めてレイがシャルロットのことが好きなことを自覚しましたね。

……『今さらかよ』って思うかもしれませんが。

リーネファンの方の期待？にも沿える事が出来ていたら嬉しいです
(笑)

戦争を開始する！出撃せよ！！（前書き）

人気投票最後の日です。（2010/11/30）

途中経過を発表しておきます。参考にしてください。

- 一位 レイ・クロカミ、リーネ（六票）
- 二位 メモリーズ（三票）
- 三位 ルナルト、シファード（二票）

票が偏っております。

他のキャラにもどうかお慈悲をっ！（笑）

二位、三位のキャラもまだまだ一位を狙えますし、他のキャラも射程範囲にないわけではないです。

よろしくお願い致します！

それでは、本文をどうぞ！

……少し短めで、恒例？のレイによる説教もどきの回ですが（笑）

戦争を開始する！出撃せよ！！

また、しばらくの日々が過ぎた……。

とうとう、トリスティン・ゲルマニア連合軍、60000人の兵を乗せた連合大艦隊が、アンリエッタと枢機卿が見守る中、アルビオン侵攻のためにラ・ロシエールを出向した。

「おお、レイ君、サイト君。出発かね？」

コルベールの問いに、レイが代表して簡潔に答える。

「ああ。もう準備は整った」

この場にはレイ、サイト、コルベールの三人。サイトのゼロ戦は完璧に整備され、レイの魔法によって、いる物は全て亜空間に詰め込んだ。まさに準備万端。

ちなみに、レイには何らかの懸念があるらしく、シャルロットは留守番だ。

しかし条件として、寝るときは転移で戻ってくるというものが付いたが。

「こいつを直接、船に降ろすことが出来るのかね？」

「問題ない。俺がなんとかする」

レイはいつも通りの表情で答えた。

戦地に向かう緊張感など欠片も感じられず、泰然としている。

そんな中、サイトが疑問に思ったことをレイに投げかける。

「なあ、レイ。お前はどうやって着いてくるんだ？」

「飛ぶ」

レイは一言で答えた。

「は？」

サイトが、意味分かりません！という表情をしているのをみたレイは、苦笑しながら実演する。

「こうやってな」

そう言つて背中に、鴉天狗の翼のような、漆黒の翼を出現させたのだ。

シャルロットとのデートもどきの時に見せた、あの翼である。

以前にも記したことだが、強さが『術者の力×召喚獣の力』になる覚醒召喚ではなく、レイ自身の魔力を背に集めることで出来る魔力の結晶のようなものだ。

よつて、別に強くなるわけではないが、飛ぶには最適なのである。

レイが翼を消した後、コルベールが話しかけてくる。

「相変わらずレイ君の魔法はすごいな……」

コルベールはひとしきり驚いた後、さて…と話を続ける。

「いろいろと慌ただしくて、新兵器を見せる暇もなかったな」

そう、コルベールは整備だけでなく、新兵器の開発にまで取り組ん

でいたのだ。

「だが安心したまえ。使い方は全てこの紙に書いておいたよ」

そう言ってコルベールは文字のびっしり書いてある紙を取り出す。新兵器の説明書であり、最後にサイトたちへのメッセージも付け足してあるものだ。

「ありがとうございます」

「サイトなら全て使いこなせるだろう。……恩にきる」

二人の礼に対し『いや、いいんだよ』と返しながらも『しかし……』と続ける。

「本当は、火の力を人殺しの道具には使いたくなかったのだよ」
「あの時のことが……」

レイの呟くようなこの言葉に、コルベールは反応を示す。

「……知っていたのかね？」

いつもと違い、少し暗い雰囲気のコルベールが訊ねた。

「ああ。俺は一時期、あの事件について調べたことがあるからな」
レイの調べた事件。『タングルテールの虐殺』。命令され、実行した隊の隊長……それがコルベールだ。

「……私があ的事件で幾人もの命を絶ったこともかね？」

「ああ。お前には『病気の感染拡大の防止』と知らされたのだろう

「？」

「それでも罪は罪だよ……」

一度は『タングルテールの虐殺』について聞いていたとはいえ、すでに忘れており、わけが分からなくなっているサイトも（珍しく）空気を読み、なにも言わない。

「ああ、そつだな。確かに罪だ。………だから生きる」

レイは、罪であることを肯定し、それでも『生きる』と続けた。

「??？」

レイの言葉に疑問符を浮かべるコルベールなどお構いなしに、レイは続ける。

「あなたは生きるべきだ。殺してしまった者たちのためにも生きるべきだ。死んで許されるとも？ありえない。だから生きる。生きて償え」

ここで一旦言葉を切り、最後に呟きのような声……しかし、不思議と心に響くような声で付け足す。

「あなたは今までそれを実行出来ていたはずだし、それを続けるべきだ。あなたには一生償い続ける義務があるんだ。………だから、間違っても命は捨てるなよ」

レイの言葉に、コルベールは少しの間目を丸くしていたが、やがて控えめに笑い出した。

「ハハハッ、これじゃどっちが教師か分からなくなるな。……………」
でも、ありがとう」

礼を言われた途端、レイは後ろを向き、なんでもないように振舞う。

「俺は思ったことを言ったままだ。……………感謝される筋合いはない」

「レイ！素直じゃねえな！」

この言葉にレイは苦笑し、コルベールは屈託なく笑い、サイトもつられて笑い出した。

しばらく三人で笑い合い、笑いが収まったところにルイズが姿を見せた。

「遅かったじゃねえか」

「うるさいわね、サイト！女の子にはいろいろ準備が必要なのよ」

喧嘩でも始められたらたまらない、とレイが止めに入る。

「静かにしろ。これから向かうのは戦場の一手手前だ。……………浮ついた心構えでは、死ぬぞ」

その言葉で気が引き締まった二人は、案外おとなしくゼロ戦に乗り込んだ。

二人がゼロ戦に乗り込んだことを確認し、レイはコルベールに声をかける。

「ではな。出発する」

この言葉に応えるようにサイトはゼロ戦のエンジンをかけた。
それを見たレイも、漆黒の翼を出現させる。

唸りを上げるエンジン音にも負けないほどの声量で、コルベールは
全員に話しかける。

「みんな！私が言えた義理じゃないかもしれないが、絶対に死ぬな
！みつともなくても、卑怯者だと言われようと、絶対に生きて帰っ
てきなさい！」

それを聞き取ったルイズは頷き、サイトはサムズアップし、レイは
背を向けたままに軽く左手を上げた。

三者三様の行動を示した後、ゼロ戦とレイはどこまでも広がる蒼い
空へと飛び立ってゆくのだった。

戦争を開始する！出撃せよ！！（後書き）

め、珍しい…！

今話にはレイとシャルロットの絡みがなかった…！

それなら、もうちょっと先にだいぶ甘いをつくってしおつか…？

（笑）

………そんなことを考え始めた作者の袖雨でした。

この作戦に異論のあるヤツはいるか？いないよな？（前書き）

結果発表！！

六位 シファード （二票）
五位 リオール （三票）
四位 ルナルト （五票）
三位 リーネ （六票）
二位 メモリーズ （七票）

そして一位は……レイ・クロカミ！
なんと十一票！！ぶっちぎりのトップです！！！！

これから、後書きではレイをメインに、毎回ゲストを呼んで、書いていきます。
投票してくださった皆様、本当にありがとうございました。

それでは、本文をどうぞ！（おまけつきです！）

「この作戦に異論のあるヤツはいるか？いないよな？」

しばらく飛び続け、ゼロ戦はエンジン音を響かせ、レイはその漆黒の翼をはためかせ、戦艦・ヴュセンタール号に降り立った。遅れてゼロ戦も着艦する。

待ち構えていた仕官の一人が近寄ってくる。

「甲板仕官のクリューズレイです」

「大将のところまで頼む」

「こちらです」

クリューズレイの案内によってとある一室の前まで来た。

彼はノックし、返事が聞こえると扉を開いた。

「ルイズ。お前が先に入るべきだ」

レイの促しによって、ルイズ、サイト、レイの順に室内へ入る。

三人を待ち構えていたのは、数多くの將軍たち。あまりの多さにルイズと

サイトは啞然としている。

それを見かねたレイは、二人にしか聞こえないような小声で話しかける。

「こいつらなんて全員大したことない。緊張する必要なんてないぞ」

「わ、分かってる（わよ）！」

何気にレイの言葉でリラックスした二人とレイは、従兵に席をすすめられて席に着いた。

三人が席に着くと、一番上座に座っている将軍が口を開く。

「アルビオン侵攻軍総司令部へようこそ、ミス・虚無^{セロ}。私は総司令官のド・ポワチエだ」

自己紹介を終え、厳格な雰囲気醸し出して総司令官は話を続ける。

「さて、各々方。我々が陛下より預かった切り札、虚無の担い手を紹介しよう。タルブで戦艦を吹き飛ばしたのは彼女たちです」

将軍たちの間で、おお……！とどよめき上がる。

「そして使い魔たちはワルドを倒し、ウェールズ様のお命を救ったと聞いている」

まさか平民があこのワルドを？というような声が挙がる。それを見かねたルイズが反論する。

「お言葉ですが、二人は本当に強いです。一人は神の盾・ガンダールヴ。もう一人は強力な魔法の使い手であり、メイジ殺しの剣士であり、策士でもあり……とにかく規格外な人物です」

将軍たちの間で関心が高まる。

おお！ガンダールヴか！やら、平民メイジか！やら、一応のびみよーな賞賛が見て取れた。

「ほう、それは頼もしい。……さて、雑談はこのぐらいにして、軍議を始めよう」

というわけで軍議は始まったのだが、その議題は二つの障害によっ

て遅々として進まない。

二つの障害……それは、敵艦隊は未だに有力であること、そして60000の兵を上陸可能な地が、二つしかないという点だ。

「強襲では兵を消耗してしまいます」

「それでは城を落とすことが難しくなる」

「タルブの時のように、今回のアルビオン艦隊も吹き飛ばしてもらおうというのはどうかね？」

結局、他力本願。

しかも、16歳の少女に頼るのは大人としてどうなのだろうか。

「無理です。あれほど大規模で強力なエクスプロージョンを放つには、まだ精神力が足りません。回復するのにあと何ヶ月……何年かかるか……」

ルイズの虚無は、必ずしも万能というわけではない。

その強力さゆえに膨大な精神力を消費するのだ。

……まあ、実際はレイに頼ればいいわけだが。

それでもレイはこういう戦に自身の魔法を持ち込もうとはしない。何故なら、自身の魔法はハルケギニアにとって裏技中の裏技。そんなものを使えば、相手側に潜んでいるであろう魔族たちも同じ手を使ってくる。

残り5人の師団長がそれぞれの場所で強大な魔法を放てば、困るのはこちらなのだ。

その代わり、それは相手も同じこと。魔族とはいえ、レイに対抗出来る者は少なく、そもそも魔族は絶対数が異様に少ない。レイの全力の魔法を魔族の住む地に落とせば、強力な力を持つ残りの隊長たち五名、極少数の副隊長、そして魔王しか残らなくなる。

このように、レイが大規模な魔法を使わないことは、相手への牽制にもなっているのだ。

……まあ、単にレイがそういう力を好まない、というのもあるが。

以上、閑話休題。

話を元に戻そう。

ルイズの言葉を受けて、將軍の一人が口を開く。

「そんな不確かな兵器は切り札とは言えんな」

「「テメエ（お前）、ふざけん（ふざける）のもいい加減にしやがれ（いい加減にしろ）」」

サイトとレイが声を揃えて言った。

二人は顔を見合わせ、レイが苦笑して、お前に任せた、と言う。その言葉を受けて、サイトが立ち上がる。

「ルイズはあんたらの兵器じゃねえんだよ！ちゃんと血が通った、生きてる人間なんだ！物扱いしてんじゃねえよ！！」

「なんだと？使い魔ごときが調子に乗りおって」

カチンときたサイトがデルフリンガーに手を伸ばそうとした時、レイが止める。

「まあ待て。サイト、今からこいつの相手をしても状況はなんら変わらない。それよりも、このくだらない議題を終わらせるべきだろう。……総司令官ド・ポワチエ。俺に一つ案がある。発言の許可を」「……いいだろう」

明らかに嫌そうな顔をするが、ポワチエからの許可がおりた。

「総司令官の許可がおりたので、俺には正式に発言権が認められたよって、俺の発言中に口を挟むなよ？」

レイはそう前置きをして、作戦の説明を始める。

「俺の作戦の概要はこうだ。少数精鋭での陽動、及び余裕があれば有力な指揮官の抹殺、または糧食への放火。これは陽動中にもう一箇所の地に艦隊を着陸させ、あわよくば相手の戦力や士気を奪うという目的がある」

「そうは言うが、その少数精鋭でというのは無理な話ではないのかね」

將軍の一人が言った言葉に、レイは顔をしかめて返す。

「口を挟むな、と言っただろう？ちゃんと考えてある。………少数精鋭で敵軍をかく乱するには、少数であるにも関わらず、自軍を大規模に見せることが出来なくてはならない。有力なのは、敵軍への放火。これを使えば、敵軍からは攻め込まれたと勘違いするヤツも出てくる。その後、俺の仕込んだ『草』で、敵の不安を煽る」

「……『草』というのは、何かの隠語かね？」

レイは溜め息をつき、『草』の説明を始める。

「『草』というのは、敵軍の地に住む者を懐柔し、密かに味方にした者たちのことだ。敵軍の町に住んでいる平民などは、自国の方針に不満を持つ者は多い。そいつらを説得し、現地在住の仲間として引き込むわけだ。もちろん、その中からアルビオン軍に使役し、諜報員として情報を流してくれる者も出てきている。そいつらに敵がここを襲っている、と明確な恐怖心を煽らせるわけだ。そうすれば

奴らは本隊を呼ぶ。そして混乱しているうちに指揮官の抹殺、そして自軍の着陸を進める」

ここで、またもや將軍たちの声があがる。

「しかし、本当にそれだけで本隊を呼び寄せることができるのか？」
「そのための俺、もしくはルイズだ。俺の魔法に、幻影を創りだすものがある。そして、虚無魔法にも『イリユージョン』という同じような魔法がある。これらによって主力艦隊や竜騎士などを大量に相手に見せる。……とりあえずお前たちにも見せてやるっ」

レイはそう言っつて、手を振った。

すると、空中に戦艦の模型やらミニチュアの竜騎士などが、陣を組んで浮かんでいた。

將軍たちは目を見開いて驚いている。

そんなことは構わず、レイは幻影を消し、話を続ける。

「これを大きく作ることで、敵軍に本当に俺たちが攻めてきたと思わせる。あとは小型戦艦を二つ、竜騎士の小隊を借りて、実際に攻撃させる。そうすれば混乱はさらに加速するはずだ。その隙に有力指揮官を討つ」

これでいいな？とレイは最後につけたし、席を立ち上がった。

「どうしたのかね？」

「どうせ、俺にもう用事はないだろう？俺もとりあえず言うべきことは言っただしな。……俺の作戦については、あんたらで十分に議論して勝手に決めてくれ。使うもよし、使わないもよしだ」

「そ、そうか。なら総司令官である私から一つ。おそらく、先ほどの作戦を使うことになると思う。小型戦艦二つ、竜騎士の第五小隊

を貸そう。我が軍はロサイスに降り立つ。君たちはダータルネスの陽動を頼む」

総司令官は、焦ったようにレイを呼びとめ、言葉をつないだ。

レイは言葉を聞いて立ち止まり、了解した、とそっけなく返して部屋を出て行った。

レイの退室を見届けた將軍たちは、何故か感じた威圧感が消えるのを感じて、ホッと溜め息をつきながら、ルイズたちにも退室を促す。

「……さて、我々はもう少し軍議を続ける。君たちも退室してもらえるか？」

この言葉を聞き、ルイズたちは急いでレイを追いかけるのだった。

お・ま・け　　くレイとシャルロットく

「…遅い」

「ああ、悪かったな。軍議が長引いた」

レイはやはり、夜にはシャルロットの元へ転移していた。

「……来てくれたから、もういい／＼／」
「そうか。悪いな」
「それより、早くこっち来て／＼／」
「分かった」

近づいた途端にレイに抱きつくシャルロット。
レイもシャルロットの頭を優しく撫でる。

「それで、シャルロット。今日、なんかあったらどう？」

「あった。学院が賊に襲われた」

「やはりな」

「あなたの言っていた懸念はこれ？」

「ああ。お前はキュルケたちがやられるのは嫌がると思ってな。修行の一環としてお前を残した。……ハメたみたいで悪かったな」

「……いい。おかげで助けることが出来た。ただ、ミスタ・コルベールは瀕死で、キュルケの領で療養している。……表向きは、亡くなったことになってる」

「……アニエスだな？」

「そう。アニエスはミスタ・コルベールに復讐しようとしていた」
「だろうな」

「でも、私が止めた」

「そうか。偉いな、シャルロットは」

レイはそう言ってシャルロットの髪を丁寧に梳いた。
シャルロットも非常に気持ち良さそうに目を細める。

……今夜も、二人は平和です。

この作戦に異論のあるヤツはいるか？いないよな？（後書き）

レイ「さて、俺にたくさん投票があつたわけだが……なぜこうなつた。俺に司会など向いてないと思うんだが。……まあい。とりあえず、最初のゲストを紹介しよう。人気投票二位、メモリーズだ」

メモリーズ「へ久シイナ、レイ。覚醒召喚以外デ呼び出サレルトハ思ワナカッタゾ」

レイ「ああ、俺もここで喋るのは不本意だ。しかし、しょうがないだろう？そういう設定で投票を行つたんだ」

メモリーズ「へ妙ナ所デ律儀ナノダナ。……マアイイ、丁度良イ機会ダ、覚醒召喚ニツイテ、詳細ナ説明ヲ入レテオイタ方ガヨイノデハナイカ？」

レイ「それもそうだな。では、『覚醒召喚』について説明しよう。……まず、覚醒召喚を行使できるのは、人間であることが大前提だ」

メモリーズ「へソウ、我ヤ他ノ魔獣タチノ力ハ、人間以外ノ力ニハ反発シテシマウノダ」

レイ「さらに言えば、術の行使者にもかなりの魔力が必要とされるため、ほとんどの者が『覚醒召喚』を使えない」

メモリーズ「へ以前ニ『覚醒召喚』ヲ行使シテイタノハ、数世紀前ノ人間ダツタナ。……ソノ上、ソノ者が『覚醒召喚』ニ成功シタノ

八、随分低位ナ魔獣ダツタ」

レイ「まあ、これを使えば『術者の力×魔獣の力』という、破格の力を得られる代わりに、かなりの反動が来るからな。使おうと考えた者も少ないんだろう。……………簡単に言えば、人間の切り札だからな」

メモリーズ「『イヤ、使アウト思ッテモ、使エナイ者たちバカリダト思ウノダガ……………』」

レイ「そういうものなのか？……………まあとにかく、覚醒召喚を行使するのは難しいらしい。確かに、俺でも長時間の行使は出来ないからな。特にメモリーズの場合は消費が激しい」

メモリーズ「『『覚醒召喚』デ害ナス者ヲ打倒出来ナカツタ場合ヲ考エルト、諸刃ノ剣デモアルトイウコトダナ』」

レイ「まあ、そういうことだ。……………おっと、乗り気ではなかったが、意外にも長く喋ってしまったな」

メモリーズ「『ソウダナ。ソロソロ、我モ幻界ニ戻ルトシヨウカ。失礼スル』」

レイ「ああ。わざわざ呼び出して悪かったな。……………さて、長話が続いたが、今日の分はこれで終了にさせてもらおう。ではな」

というわけで、こんな感じで進めていきます。

長さは毎回まちまちだと思いますが、よろしくお願い致します。

それでは、また次回（＾　＾）ノシ

『名譽？そんなもの捨ててしまえ』（前書き）

はい、レイの作戦を実行します！

……いや、なんかあっさり……って感じになってしまいました
が。

しかも、なんか短編をいくつか繋げただけの回になってしまったよ
うな気がします……。

あまり自信ありませんが、本文をどうぞ！（おまけ付きです）

『名譽？そんなもの捨ててしまえ』

とうとう出撃の日がやってきた。

サイトとルイズはゼロ戦に乗り込み、レイは漆黒の翼を広げる。

ついでに着いてきたシャルロットはレイにお姫様抱っこされている。

残りの雑兵たちも準備万端だ。

そこに、ちようどよく伝令が飛んできた。

「虚無、出撃されよ！目標はダータルネス！陽動の件、速やかに実行をお願いする！」

「了解した！全員出撃しろ！」

レイの一言で、ゼロ戦が飛び立ち、小型戦艦と竜騎士もそれに続く。その後、レイも空中に身を投げ出し、ものすごいスピードで戦艦や竜を追い越し、ゼロ戦に並んだ。

さらに、レイの魔法で戦艦や竜やらの幻影を大量に作り出す。

その光景は、味方でさえも実際に大軍が動いているかと錯覚するようなものだった。

虚構の大軍はしばらく飛び続け、やがてダータルネス付近に辿り着いた。

未だ、敵軍はこちらの存在に気付いていない。

「全軍停止！今から俺が敵の本陣に放火する！火の手が激しくなったのちに攻撃を開始せよ！……サイト！お前もゼロ戦での銃撃、もしくは遠隔攻撃だ！そしてルイズ、お前は虚無魔法・イリユージョンで巨大艦隊を作り出せ！始祖の祈禱書を読めば出来るはずだ！」

「了解！」「分かったわ！」

サイトとルイズの返事を受け、レイはシャルロットを抱えたまま、敵軍に突進する。……超スピードで誰にも気付かれることなく。程なくして、敵軍に紅蓮の炎があがり、軍は姿を見せて突撃する。火事だああ！やら、退避せよ！やら、強襲！交戦せよ！やら、大軍だああ！大軍が攻めてきたぞおお！やらの混乱の声があがる。もちろん、『草』たちの功績だ。

少数の軍隊が攻撃を始め、上空でサイトによってコルベールの発明が大成功を収めている頃、レイは魔法で自分とシャルロットの姿と存在を消し、敵の司令室に来ていた。

「この有様は、何なのだ！！もつとしつかりせんか！！」
「すみません！ただちに本軍を呼びます！」
「早くしろ！」

怒鳴られていた兵は指令室から慌てて走り去って行った。

「全く、何故こんな時に強襲をかけてくるのだ。これでは着陸しても城を落とすことは不可能だろうに」

司令官らしき人物は一人、溜め息をついた。
その声に応える者一人。

「心配無用。こちらにも作戦があるんでな」

レイがそう言い放つ前に、すでに司令官は事切れていた。

「……………せめて安らかに眠れ」
「……………安らかに」

レイは目を閉じてそう言い残し、シャルロットもレイの真似をし、近づいてくる敵軍の艦隊の方へと駆けて行った。

しばらくの時間が経ち、レイが他に七人の司令官を暗殺した頃、ルイズの虚無魔法がようやく完成し、巨大な戦艦……いや、空飛ぶ要塞のようなものが姿を現した。

そうして作戦は成功し、やがて『ロサイス、着陸成功』という報告があつたので、幻影以外の全軍は全て撤退した。レイ、シャルロットやゼロ戦、小型戦艦二つに竜騎士小隊は、人知れず姿を消した。

「任務遂行完了だああ！奇跡！奇跡だぞ！ほら、乾杯……！」
「……………おおお！！乾杯だあああ！！……………」
「……………」

連合軍は港町・ロサイスへの着陸及び陣の整えに成功し、奇跡の任務成功を祝っていた。

そんな中、レイとシャルロット、サイトとルイズは、隅の方でコルベールからの手紙を読み、沈黙していた。

「ミスタ・コルベールって変わった人ね。あんた達の国に行きたいなんて」

「そうでもないさ。確かに、日本に魔法はないが、その代わりに発達してきたものがたくさんある。魔法を使わずに高度な技術が存在するということは、見る者によっては相当魅力だろう」

「私も行きたい」

ルイズとレイ、シャルロットの会話の間もずっと黙っていたサイトが口を開く。

「……なあ、レイ。コルベール先生の罪のこと、お前は知ってるんだよね？」

「それ、手紙にも書いてあったわね」

「ああ、知っている。詳細まで正確にな」

その言葉を聞いてサイトはしばらく黙り込み、しばらくあとに再び口を開く。

「……でも、それはやりたくなかったことで、終わったことで……そして今も罪を償ってる……で、いいんだよね？」

「ああ」

レイは短く返す。だが、サイトはその言葉を聞いて、そっか、と言返し、なら良かった、と付け加える。

いつもはうるさいルイズも、この時ばかりは空気を読んだのか、何も言わない。

四人の間に、しばらくの沈黙。

そんな喧騒と沈黙の中、一人の金髪でオッドアイの少年が祝いの場

に入ってきた。その人物は迷わずにレイたち四人の方に向かってきた。

「何か用か？ロマリア神官、ジュリオ・チエザーレ」

レイは金髪少年の顔を見ずに問いかけた。

「へえ、僕の名を知っているのかい？」

「主要メンバーの情報はすでに集め終えた。味方でも警戒を怠らないのは基本だろう？」

「レイを甘く見ちゃダメ」

「随分と油断ならないね。君があのだの伝説の神の盾なのかい？」

「お前も十分に情報収集しているんじゃないか？それと、俺はガンダールヴなんかじゃない」

その答えに、ジュリオは少し驚いたような表情になる。

「じゃあこちらの、桃色の方の可愛いお嬢さんが虚無で、その隣が神の盾なのかい？」

「そうよ。私の名はルイズ・ド・ラ・ヴァリエール」

これにはルイズが答えた。そして、サイトが疑問の声をぶつける。

「……………なあ、虚無！とかガンダールヴ！とか簡単に口に出しているのか？」

「問題ない。俺が他のヤツには聞き取れないように魔法を発動しておいた。……………そして、こいつも虚無の使い魔だしな」

レイのこの言葉に、ジュリオは固まったように驚愕する。

「……なぜそのことを？」

「どうも、虚無の使い魔のルーンには独特の気配があるらしい。……お前の右手からは、サイトのルーンと同じ気配を感じた。そして、右手ということは『神の笛・ヴィンダールヴ』だろう？さらに、口マリアということは、ヴィットーリオの使い魔のはずだ」

「……本当に、君は何者なんだ？全部正解だよ。……僕は神の盾の噂しか聞いたことないんだけどな。君ほど有能な者なら、もっと噂になっていてもおかしくないのに。本当に……本当に君は何者だ？」

この言葉に、レイは不敵に口の端を吊り上げ、言い放つ。

「俺はただの使い魔もどきで、助っ人だ」

「「強力過ぎるほどの最強助っ人だけど（な）」」

ルイズとサイトの声が重なった。

「そして私の英雄」

シャルロットの言葉を受け、レイはシャルロットのことを見つめる。そして見つめ合い、あと少しで二人の世界に旅立ちそうだったが、レイは思いとどまって咳払いをし、先を続ける。

「そういうわけで、表立った行動はしていない。あくまで主人公の……サイトとルイズの助っ人だからな。だから、俺の噂はない」

「へえ、おもしろいね、君。……もう、今日のところは満足だよ。また会おう、虚無の可愛いお嬢さんと神の盾……そして最強の助っ人君とその可愛い恋人さん」

そう言って、ジュリオは去っていった。

唐突だが、ハルケギニア最大の祭りである降臨祭が始まった。軍事作業も当面は中止。十日間はこれが続くらしい。現在は夜で、綺麗な花火がいくつも上がっている。そんな中、レイとシャルロットは二人で花火を見上げていた。向こうでは、ルイズと何故かいるシエスタという珍しいコンビで飲んでいたり、戦争に参加していたギーシュと再会したサイトが、他のメンバー込みで騒いでいたりする。

「平和だな。戦争中のくせに」

「（コクリ）でも、花火はきれい」

「そうだな。……………綺麗だ」

レイとシャルロットが、言葉は少ないながらも花火を見上げて和んでいると、近くで怒鳴り声が響く。

「お前らバカか！」

レイとシャルロットは呆れてそちらの方を見る。……………明らかにサイト。どうも怒鳴られているのはギーシュのようだ。二人は、呆れながらも騒ぎの方へ向かっていった。

「な、何がバカなんだね！」

「いい加減にしろよ！手柄を立ててモンモンに認めてもらうだって？おかしいだろ！死んだらなにもかも終わりじゃねえか！モンモン

からしたら、その方が悲しいだろうが！」

「僕の行いを侮辱する気が！」

「だいたい、名誉のために死ぬなんてバカげてる！なんかもっとこう…大事なもんがあるんじゃないかねえのかよ！」

騒ぎに気付いたルイズがサイトに近づいてくる時、ちょうどこの言葉聞いた。

そして、ルイズは怒鳴りつける。

「サイト！謝りなさい！」

……なぜかサイトを。

「なんでだよ！」

「名誉を侮辱することは許さないわ！」

サイトとルイズのいがみ合いが始まってしまった。

「もつと大事なもんがあるだろうが！」

「そんなものないわ！名誉は命よりも大切なの！それは違うな…は？」

レイは唐突にルイズの言葉を遮った。

横にいるシャルロットも、レイに賛同するように大きく頷いている。

「違わないわよ！名誉はなによりも大切！それを失ったら私たちは貴族じゃなくなる。貴族じゃなくなるということは、私が私じゃなくなるってことなの！」

「そうだよ！レイ！君は平民だから分からないかもしれな「馬鹿の戯言はもうウンザリだ」…え？」

レイはギーシュの話をさらに遮り、特にギーシュに向けて話を続ける。

「名誉？そんなもの捨ててしまえ。持っていて何の得がある？そんなことよりも生きる。戦争でも何がなんでも行き抜け。逃げる？大いにありだ。それで生きられるなら何も悪いことはない。……もし死んだら、もうお前は生きる苦しみから解放されて自由だ。なにも考えずにすむだろうな。だが、お前にも大切な人がいるだろう？そいつらが全員悲しむんだ。言い知れない不安に襲われる。あの絶望は言葉では言い表せない。自分の今までが全て崩れるんだ。……お前は大切な人をそんな目に合わせたいのか？」

お前の好きな人が望んでいるのは名誉なんかじゃなく、一緒にいることなんだよ。

それを忘れるな、とレイは言い残し、シャルロットと共に去っていくのだった。

お・ま・け　　く騙されたと気付いたアルビオン軍く

レイたちが作戦を成功させ、撤退を始めた頃…。

「報告します！トリステイン・ゲルマニア連合の大軍ですが、いくら攻撃しても全く効きません！」

「何を言っておる！そんなはずが「伝令！」…ん？なんだ」

「速報をお伝えします！敵軍が、ある一定の時を境に攻撃しなくな

りました!」

「……なに?あれが幻影だとも言うのか?」

「……………その可能性が高く……………」

「クツ!あるわけないだろう!」

何の因果か、指令官がその言葉を言った瞬間に戦艦や竜たちが跡形もなく姿を消した。

「なっ!……………これは…何事なのだ!」

「……………本当に幻影かと」

「ふざけるな、連合め!!!」伝令です!!!……………今度は何事だ!?

「指令官八人が、遺体で発見されました」

「なに!!!?それは本当か?!?!」

「はい。ディテクトマジックを使用させていただきましたが、実際に指令官の遺体でした……………」

「クツ!…他に被害は?」

「糧食の倉庫に放火されたらしく、かなりの量の食料が灰に……………」

「……………そのことは皆に伝えてはならん。分かったな?土気に関わる」

「それなのですが、すでに広まってしまっているらしく……………」

「……………おのれ連合めええええええええええええええええ!!!!」

「……………!!」

「……………おやめください!!」……………!!

……………この指令官のご乱心が収まるまで、一時間かかったか。

『名譽？そんなもの捨ててしまえ』（後書き）

レイ「これ、毎回続けるのか？いい加減めんどくさ」そんなこと言うなって」「…サイトか。紹介する前に出てくるな」

サイト「いいじゃんか！どうせ、今日のゲストは俺なんだし？」

レイ「だから、まずは紹介を……いや、お前には何を言っても無駄か」

サイト「え？なんで俺、聞き分けがないヤツ！みたいな扱いなわけ？」

レイ「紹介しよう」「え？ちょ……」…今日のゲストは『ガンダールヴ』である、サイトだ「俺の扱……」…まあ、俺からすればただのアホ面だな」

サイト「無視しないでええええ！！それと、『アホ面』って呼ぶの、意外と傷つくからね？？」

レイ「あー、悪い悪い」

サイト「全然悪いと思ってねえだろおおがあああ！！！！」

レイ「まあ、騒いでるサイトは置いておく。……今回は俺がデルフに施した魔力付与について説明しておこう」

サイト「おお、だから俺なわけか！」

レイ「……やはり、お前は復活が早いな」

サイト「日本にいた時から慣れてるからなあ。……さっ、デルフについて説明すんだろ？とりあえず、デルフ鞘から出すぞ？」

デルフ「おおお！！やっとオレっちにも発言の場が！！いやあ、最近出番がなか「さて、魔力付与についてだが……聞けえええ……！！……」
…… イエ、ナンデモアリマセン！！（レイに睨まれ、引っ込みました）」

レイ「通常、剣に魔力付与をする場合、剣の芯に流し込む魔力を定着させ、半永久的に使えるようにするんだ」

サイト「なるほど、それでずっと切れ味が落ちなかつたり、分厚い鉄の塊ですら簡単にぶった切れるような耐久度を持つてんだな。……あれ？でも、なんで遠隔攻撃を放つても魔力切れを起こさないんだ？」

レイ「はあ、もう忘れたのか？『遠隔攻撃』は、使用者の『気』や、魔力を喰って発動させている。お前の場合は、魔力がないから『気』のみだな。しかし、何故忘れる？最初に渡した時、『気』を一気に放出したせいで倒れたのはお前だろう？」

サイト「ああ！そういえばそうだった！忘れてたよ、ハハハ」

レイ「若年性アルツハイマーじゃないだろうな？………まあいい、説明を続けよう。次に、俺の付与した特殊効果についてだ」

サイト「さっきの『遠隔攻撃』みたいな能力のことだよな？」

レイ「ああ。『遠隔攻撃』については今言った通りだ。よって、今から説明するのは『魔力吸収』及び『その魔力の返還』についてだ」

サイト「吸収した魔力を全て身体能力に変える！ってヤツだよな？」

レイ「そうだ。もともとデルフにあった魔力吸収の能力を発展させたものでな、俺の技量を超えるほどの魔法でない限りは完全に吸収する上に、身体能力への変換率は100%だ」

サイト「いやあ、何気なく使ってたけど、魔力付与って結構スゲーんだな」

レイ「当たり前だ。魔力付与された武器は、然るべき所で売れば街の一つや二つはくだらない、と言えるほどの金が手に入る。付与された特殊能力や、付与の質にもよるが、大抵はそれ以上の値がつくだろうな」

サイト「なあ、もしかしてデルフって、超高級武器だったりする？」

デルフ「あつたりめえよ！そもそも「うるさい」……ハイ、スミマセンデシタ……って、おい！！」

レイ「デルフが喚いているが、先を続けよう」

サイト「なんか、デルフが可哀そうになってきた」

レイ「気にするな。……それで、デルフが高級武器か、だったか？……答えはイエスだ。インテリジェンスソード自体珍しい上に、俺の魔力が付与されたんだ。かなりの値がつくだろうな」

サイト「お、おおお！スゲエー！……じゃあさ！あれは？黒羽と白羽！あれってデルフよりもたくさん特殊能力ついてたよな？」

レイ「ああ。『遠隔攻撃』、『形態変化』、『形状変化』の他に、『次元斬』という効果もある」

サイト「へえ……ってか、『遠隔攻撃』以外の能力がよく分からないんだけど」

レイ「『形態変化』というのは、武器を根本から変える能力だ。この前、魔銃に変えただろう？他にも、槍形態に変えることができ、剣・銃・槍の三形態で使用可能だ。……次の『形状変化』について、簡潔に。この能力は、基本形態である『剣』を、そのままの形で大きさを変えるものだ」

サイト「おお！フーケのゴーレムとやり合った時みたいな、剣の巨大化の能力だな？」

レイ「そうだ。さらに『縮小化』して、相手の不意をつくことも可能だ」

サイト「へええ〜。……じゃあさ、『次元斬』ってのは？」

レイ「そのままだ。次元を斬る能力」

サイト「えっと、それは……つまり……？」

レイ「簡単に言えば、次元の壁を切り裂き、断裂させる能力だ。……お前は見ていないから知らないだろうが、『拾しゅうの型・次元断空斬』はこの能力を発展させて発動する技だ。（注：『次元断空斬』につ

いては、V・S・リユナ、リオール、ティードの時に、トドメの一発として放った技です」

サイト「ええ〜つとさ……なんか、レイの魔剣、強すぎね？」

レイ「まあ、それだけ反動も大きいかな。使用するだけで膨大な魔力を消費するからな」

サイト「いや、そんなヤバイ武器を『ギーシュ戦』の時に使わせたのかよー!」

レイ「あの時は、お前が使用するために必要な魔力を、俺が肩代わりしていたからな。………おっと、なんだかんだ言っつて、昨日より長く喋ってしまったんじゃないか？」

サイト「え？この流れだと、もう終わりか？まだ話し足りねえんだけど」

レイ「いや、長すぎても鬱陶しいだけだろう。……俺もそろそろタバサ（シャルロット）に呼ばれそうな気がするしな、これで失礼しよう」

サイト「そつちが本音か！早くタバサと喋りたいだけだろうが！………つて、もういねえよ……」

デルフ『ケケケ、相棒も大変だなあ』

サイト「あれ？デルフ、いたのか？………まあいいや、それでは皆さん、明日もレイが司会を頑張りますので、よろしくお願いしま〜す!〜!」

デルフ『いや、オレっちの扱い…』

サイト「それでは、また明日あゝ」

デルフ『レイに便乗して、相棒まで悪乗りするなあああ！！』

デルフが可哀そうですね（笑）

次回もお楽しみに！

いざ、戦地へゆかん!!! (前書き)

とうとう、決戦が近づいてきました!

原作の中で一番お気に入りの所なので、ここまでこれてかなり嬉しいです!!

それでは、決戦の直前までの話を、お楽しみください

いざ、戦地へゆかん!!!

サイトから始まった名誉騒ぎから一週間。

サイトとルイズは、未だに一言も会話していない。

そして、レイはなにやら忙しく動き回っていた。なにか思惑でもあるのだろうか？

そんなことはともかく、サイトは再び口を開くことになった。……

……悲しいことに、一部のトリステイン軍が裏切ったことよって。

「名誉つてすばらしいな。まさか、裏切って元仲間を攻撃するなんて……まさに貴族の鑑だよ」

サイトの嫌味も冴え渡る。

だが、サイトが嫌味を言いたくなるのも無理はないだろう。

裏切ったトリステイン軍と、追撃に加わるアルビオン軍。その数は70000にも上る。

「……屈辱だわ」

「ハッ！何言つてんだよ！貴族なんてどうせこんなもんだ！大した名誉だよ！」

ルイズは何も言い返せなかった。

一方、司令部では、撤退の案が出ていた。

敵軍は、降臨祭を無視して、明日の昼にはロサイスに侵攻してくる

というのだ。

「全軍が退却するには、どのくらい時間がかかる？」

指令官の一人、ウエンプフェンは部下の参謀に問うた。

「平民を含め、明日の朝まではかかるかと。……よって、敵軍を丸
一日止める必要があります」

「反乱軍含めて70000の大軍を足止め出来る部隊がどこにある
…？」

ウエンプフェンは沈黙して、思考の海に身を委ねる。
そして閃いたように呟く。

「そうだ。あれを使おう」

「あれとは…？」

「我が軍には切り札があるじゃないか。今使わずしていつ使う？…
…伝令！」

貴族の名誉は地に落ち続ける…。

ルイズのもとに伝令がやってきたのは、撤退用の船内にいる時だっ
た。

「ミス・ヴァリエール！ウエンプフェン指令官がお呼びです！」

指令官に呼び出され、しばらく経ったのち、ルイズが司令室から出

てくると、彼女は見ているサイトまで不安になるほど顔面蒼白だった。

ルイズはサイトを見た途端、いきなり駆け出した。

「どこ行くんだよ！そっちは街の外じゃねえか！」

サイトは追いかけてルイズの右腕を掴む。

「離して」

「離さねえ」

サイトはルイズの言葉に間髪入れずに答えた。

「なあ、もしかしてお前……虚無だからってなんか押し付けられたんじゃないだろうな？」

ルイズはなにも答えない。

「敵軍を止めろ……とかじゃねえよな？」

これにもルイズは沈黙したままだ。

「……………受けるのかよ。お前は捨て駒じゃねえ！使い捨ての物じゃねえんだ！ちゃんと生きてるだろうが！血が通ってる人間だろうが！！そんな無理な命令断れよ！！！」
「仕方ないじゃない！！！」

今度こそルイズは答えた。

さらに先を続ける。

「私がやらないと味方は全滅なの。……名誉のためってわけじゃなくて、みんなに死んで欲しくないの。……私だって無駄死にはしたくないわ。でも……」

みんなを護るために死ぬのは、立派な『名誉』だと思うわ。

「ルイズ……。それでも俺は……。お前に死んで欲しくないよ。無駄死にじゃないことも分かってる。……でもさ、俺に相談くらいしてくれよな」

「……あんたを巻き込みたくないの。それに、相談したって……」

「俺は神の盾・ガンダールヴだ」

「…え？」

サイトはルイズの言葉を遮り、話を続ける。

「ガンダールヴの役割って知ってるか？……俺の能力は、主人の長い詠唱の間、主人を護りきるためものらしいぜ。だから、今回もルイズを護るのは俺だ。……絶対に護ってやるよ」

「サイト……」

二人は見つめ合う。

すると、その二人に向けて、声が発せられた。

「二人ともいい覚悟だな」

「レイ???!」

二人が声のした方に目を向けると、そこにはレイとシャルロットが立っていた。

「だが、俺に頼るといふ方法もあるぞ？俺なら、死なずに7000

0の兵を止めることなど簡単だ」

レイがサラッと凄すぎることを言った。

だが、サイトにはレイがそれを実行不可能な状況にあることを分かっていた。

「……なあ、レイ。もう分かってるぜ。俺にもさすがにこの『気』は分かる。……魔族がいるだろ？しかも複数。そして、その相手をするつもりなんだろ？」

サイトの言葉に、レイは珍しく弱気な笑みを見せ、静かに答える。

「……ああ。だが今回、裏切りに気付けなかったのは俺の落ち度だ。……魔族との多対一を望まないがために、魔族の情報を追っていたんだが、それもままならなかった。だからせめて「まあ、待って……サイト？」

せめてどちらの対処も俺に任せてくれ、と続けようとしたレイを、サイトは遮って話し始める。

「残念だけど、魔族の相手は俺たちじゃ出来ねえ。でも、一人で背負い込むなよな。……魔族の相手は出来ないけど……大軍の方ぐらいは俺に任せてくれよ」

「俺に、じゃなくて俺たちに、でしょ？」

ルイズが訂正を入れ、開き直ったかのように微笑む。それを見たレイは、その覚悟に感謝し、話を続ける。

「サイト……すまない、そしてありがとう。充分過ぎる覚悟だ。大軍についてはお前たちに任せる。……死ぬなよ」

「分かってるって!」
「絶対に生き残るわ!」

レイはその言葉に満足したかのように微笑み（しかも普通に。サイトたちの前では珍しい）、さらに言葉をつなげる。

「一つ提案があるんだが、着いてきてくれないか?」

「……着いてきて。悔いのないように」

「分かった（わ）」

二人は頷いて、レイの転移が実行された。

転移が終わり、視界が安定すると、そこにあっただのは小規模な教会だった。

「ここは、さっきの場所の近くにある教会だ。……ここまでくれば何がしたいか分かるだろう?」

「レイとタバサの結婚の見学者が欲しかったんだろ（でしょ）?」

サイトとルイズはきれいに声を重ねた。

「はあ?なにを言っている?そういう流れじゃなかっただろうが」

「あ、レイ。タバサが悲しそうな顔してるぞ。あゝあ、可哀そうに」
「ホントね。レディを泣かすなんて、最低」

そして二人は、かなりニヤつきながら言い放った。

さらに、シャルロットからの追撃。

「……………レイのバカ」

そして涙目で抱きつく。

……………意外と、追撃というよりはアタックだ。

レイは何気なく優しく抱きとめ、呟く。

「……………どうしてこうなった」

はい、気を取り直してTake2行きましょう！

「で、ふざけるのはここまでにして……………結局はなにが目的だったんだ？」

サイトが疑問を呈した。

レイは未だにシャルロットに抱きつかれながら答える。

「気付かなかったのか？ サイトとルイズの結婚式だよ。……………最後になるかもしれないだろう？」

「え？ あのその、お、俺は別に嫌じゃねえけど……………ルイズはどうなんだよ」

「そ、それは、あんたがいろいろ言うなら、かか、考えなくもないわよ」

一転して動揺しだす二人。

「それは肯定だな。さっさと中に入るぞ」

「え、ちょ、待って」

「なに？え？ちょっと」

レイはシャルロットに抱きつかれたままサイトとルイズの手を掴み、教会の内部に連行していく。

教会内で、レイは亜空間からワインを取り出し、まあ飲め、と全員に勧める。

みんなでささやかに乾杯し、いよいよサイトとルイズの結婚式が始まった。

「さあ、新郎新婦。誓いの言葉を」

レイの声が教会中に響き渡る。

隣にはシャルロットが寄り添っており、二人の目の前にはサイトとルイズが向き合っている。

「ルイズ。俺はお前が好きだ」

誓いの言葉ではないが、レイもシャルロットも止めない。

「本気でそう思う。お前と会えたんなら、異世界に召喚されたこの運命も悪くないと思ってるよ」

「サイト……」

「だから……俺はいつまでもお前の事が好きだ！それだけはずっと変わらねえ。……そのことを忘れないで欲しい」

「私も……サイト、あんたのことが……」

ルイズは言い切る前に意識を失ってしまった。

サイトは、彼女が倒れこまないようにしっかりと抱きとめる。

「サイト。さっきのワインで、ルイズは眠らせた。どうせお前はルイズだけ逃がそうと思っていただけだろう？」

「……ああ、ありがとな。俺の気持ちは伝えられたし、ルイズは死なずに済みそうだ」

「……………お前も……………死ぬなよ？」

「ハハツ！レイこそ！」

「俺はタバサ（シャルロット）を残して死ぬことはない。安心しろ」

「そうだったな。……………じゃあ俺も絶対に帰るよ」

二人は屈託なく笑い合い、互いの拳を合わせた。

「さて、ヴィンダールヴ。隠れてないで出て来い」

レイは唐突に教会の外に声をかけた。

するとヴィンダールヴであるジュリオは、やっぱり見つかるのか、と笑いながら姿を現した。

「ヴィンダールヴ。今から俺とサイト以外を退却船まで転移させる。

……………こいつらを頼むぞ」

「へえ、僕に頼むのかい？」

「仲間のとこまでって意味だよ！」

サイトが訂正を入れる。

「それで、君たちはどこに向かうつもりだい？」

「お前には関係ない」

「戦場に行くのに、かい？」

「四の五の言うな。転移させ」待って「…どうした、タバサ（シャルロット）？」

シャルロットがレイに待ったをかけた。

「一つ言いたい事がある」

「なんでも言ってくれ」

「絶対に……絶対に帰ってきて。やくそく」

シャルロットはそういって小指を差し出す。

「ああ、約束だ」

レイは一瞬の躊躇いを見せたが、決心して自身の小指をシャルロットの小指に絡めた。

“あの時”と同じような、破ってしまう約束の指きりには絶対にしない……と、決意を固めて。

そしてすぐに引き寄せて、抱きしめる。

「俺は死なない。何があっても屈しないと決めたからな」

「……分かってる／＼／＼だから、あなたは私の英雄／＼／＼」

二人はしばらく抱き合い、やがて離れた。

「さあ、そろそろ時間だ。………いつてくる。“後で”な」

「いつてらっしゃい……また“後で”」

サイトとジュリオが見守る中、二人は別れの言葉を言い合う。

そしてレイが敵軍の方に向き直った瞬間に、シャルロット、ジユリオと彼に抱えられたルイズの姿はこの場から消えていた。

「……………さあ、行くぞ」

「ああ！絶対に帰るぞ！！」

二人は、決意を胸に戦地の方へと駆けてゆくのだった。

いざ、戦地へゆかん!!! (後書き)

レイ「とうとう、ヤツとの戦いだな」

ルナルト「ん？ヤツって誰？」

レイ「なぜ、お前が出てくる……」

ルナルト「まあまあ、気にしないでよ……で、ヤツって？」

レイ「ネタバレになるから、これ以上は言えないな」

ルナルト「えええ！レイ君はケチだなあ……壊したくなっちゃうよ、地獄に墮とされた怨みもあるしねっ」

レイ「ほう、また俺と殺りあうのか……？」

ルナルト「フフフツ、僕はそれでもいいよおゝ 異存なしっ！」

レイ「そうか。……なら……始めようか」

サイト「ちょおおつと待ったあああ!!!」

レイ「二日連続で来るとは、いい度胸だな。……だが、止めてくれたことについては感謝しよう」

ルナルト「まっ、君が誰であろうと興が冷めちゃったし、今はとりあえずやめとこうかな。……今は、ね」

サイト「な、なんか意味深な発言だな（汗）……って、デルフここに落ちてなかったか？昨日忘れてっちゃってさ、ハハハ」

デルフ『酷いぜえ、相棒。ずっとここにいるのは「少し黙れ」…何気にオレっちの扱い酷くね？?!』

サイト「まあまあ、デルフ、落ち着けて。………さっ、忘れ物は取ったし、これで失礼しまゝす!!（そして、サイトはこの場から去っていった）」

レイ「ふう、危なかったな。こんな所で戦えば、だいぶグダグダな展開になるところだった」

ルナルト「別にいいじゃ〜ん。僕はそういう展開も好きだよ〜？」

レイ「お前の趣味など聞いていない。………だいたい、なぜお前がゲストと呼ばれるんだ」

ルナルト「………知りたい？」

レイ「………いや、やめておこつ」

ルナルト「なあ〜んだ、つまないなあ〜 どんどん話しちゃいたいのにい」

レイ「やはり、お前は呼ぶべきではなかったかもしれないな」

ルナルト「なんだよ〜、僕になんか文句あんの?」

レイ「お前の存在自体がネタバレだ。来るな」

ルナルト「うわっ、ひっど〜い やっぱり、今こゝで殺っちゃてもいい?」

レイ「俺がお前に負けるとでも?」

ルナルト「ハハハッ!そこなくちゃ!じゃあ、始めよう」

キイイイン!ドゴオ!ズバツ!バチバチイイ!!

……………結局はグダグダな展開(汗)

なんかすいませんでしたっ!今回の後書きはこれにて終了です。

補足説明もなく、ただグダグダとギャグもどきに走っただけになっ
てしまいましたね…………。

さて!次回はとうとう決戦ですので、よろしくお願いします!!

それは地獄からの…。(前書き)

今回、レイが頑張ります。

というか、次回以降もすごくがんばります。

お楽しみに！

それでは、本文をどうぞ！

それは地獄からの……。

目の前には人の群れ。人、人、人……。

それも、たくさんの武器で武装した軍隊だ。その数、およそ70000。

それに対峙する二人の戦士の目に映るのは、70000と、途方もない殺気を放つ6人の魔族。

魔族のうちの一人……複雑な意匠の施された白い服装の、見覚えのある青年が、その無機質な声をあげる。

「やあ、久しぶりだね、レ・イ・く・ん ……地獄のそこから舞い戻ってきたやつだよ。君を殺すためにね！」

「……ルナルト……！」

かつて、『無情』のアシエルが死に際に明かした、魔族にだけ許された死後の『新しい道』。その結果として、この世に再び現れたのだ。

ルナルトは相変わらずの様子……いや、『気』が昔とは段違いに高い。

「どうかな？強くなったでしょ？上位魔族すら超越したんだよ！……

…今では、残りの魔法師団長を従えちゃってるんだよ？称号は『全魔法師団総括指揮官』。簡単に言えば、全魔法師団のたいちよーさんだね」

「『新しい道』か。……おもしろいことを言うもんだな。だが、俺はここで戦うつもりはないぞ」

「いいよ」。僕は君の本気と戦いたいんだ。……いいとこ知ってる

から着いてきてよ」

ルナルトは、異界への扉を開きながらレイを誘った。

「ああ、行こう」

「ちょ、レイ！隊長全員じゃねえか！……いけるのか？」

「当たり前だ。……お前も絶対に生き残れ！」

レイはそう言い残し、魔族たちの後にルナルトの創造した扉をくぐっていった。

「さあ、デルフー！！俺たちもいくぞ！！！」

レイが扉をくぐるのを見届けたサイトは、青い光芒を放つデルフリンガーを抜き放つ。

『おう！見せ場だな！！いくぜ、相棒！！！！』

サイトは気合を入れ、70000もの大軍に単身で突っ込んでいった。

扉をくぐった先でレイを待っていたのは、漆黒の空に満天の星と、通常の三倍ほどの大きさを誇る美しい月を湛える砂漠だった。

「フフフツ！ここはねえ、君が前に魔族と戦った『ギルティアス』

よりもさらにヤバイところなんだ」

「そうか。俺には関係ないがな」

「どの辺りがヤバイか聞かなくてもいいの？」

「興味ない。……大方、時間軸の差異が途方も無く大きいのだろう？」

バツサリ切り捨てた。

「なんだあ、当てちゃうなんてつまんないなあ……。……なら早く戦闘始めちゃう？」

「ああ、さっさとお前たちを倒して、サイトを助けに行かなければいけないのでな」

今まで通りそっけなく返したレイ。

だが、ルナルトは予想以上の怒りを見せる。

「ハッ！なにそんなこと言っちゃってんの？僕が君に負けるわけないじゃん！君に殺されてから僕がどれだけ苦労したか！地獄で目を覚ましてから、生き返るためにどれだけだけの苦行を強いられてきたと思ってるのさ！魔族だからって簡単に生き返れるわけじゃないんだよ！地獄での修行は生半可なものじゃないんだよ！」

ルナルトは声を荒げた。

ここで、今まで黙っていた魔法師団長の一人が、ルナルトに声をかける。

「隊長、そろそろ始めませうん？オレ、もう我慢出来ないっす」
「フツッ！『奔放』のフリードらしいね でもそう慌てずに！まずは自己紹介から始めようよ！とりあえず時間だけは、たっくさんあるんだからさっ！」

なぜか、ルナルトは余裕を取り戻し、愉しげに告げた。

……………気分の変動が激しく、不安定。精神が崩壊しているのだ。

「じゃあオレからいきます。オレは『奔放』のフリードです。あ、八の隊長ね」

先ほどの魔族が一番に名乗りをあげた。

ダークブラウンの髪に、同色の瞳の少年。そして赤い光を放つ大太刀を手に持っている。

「あたしは『凝縮』のシリアよ。第九の隊長。あなたが死ぬまで、よろしく」

銀色の髪をポニーテイルにし、金色の瞳を煌かせる女が口を開いた。黒い魔力を纏うロッドを装備している。

「わたくしは『共鳴』のユリアナですわ。第六の隊長をやっておりますの。よろしくお願いしますね？」

深紅の髪を長く伸ばした、おっとりとした雰囲気少女が言葉を紡いだ。その手には緑の魔力が銃口で揺らめく魔銃が。

「わしの名はガラド。『劣化』のガラドなり。第一魔法師団が長じや。そなたはわしより強いか？」

白髪を短く刈り込んだ老人。老人の姿をしていても、その瞳は力に満ちており、実力の高さを伺える。拳と足先に黒い魔力を纏っている。

「ぼ、僕の名前はアスラナ。『鉄壁』のアスラナと言います。ユリ姉……ユリアナ姉さんの弟です。第十の隊長……だったかな？え、ええ〜っと、よろしく？」

何かに怯えたような表情の、見たところ12〜14歳程の少年。姉と同じく深紅の髪を靡かせ、純白の光を纏う巨大な盾を抱えている。

「まずはさあ、僕以外のメンバーと殺り合ってもらおうか まっ、高みの見物ってヤツ？……じゃあ、みんな！いっけえ」

ルナルトの気の抜けるような無機質な声に反応し、残りの隊長たちが一斉にレイに襲い掛かる。それに対応し、レイも行動に出る。

「《冥界の魔狼『ヘルハウンド』よ。その大いなる力を我に顕現せよ 覚醒召喚！》」

ブワツとレイの体から力の波動が溢れ出し、思わず魔族たちは動きを止める。

レイの髪は逆立ち、輝くグレーに。瞳は紅く輝いている。犬歯、手の爪が伸び、靴を突き破ってきれいな毛並みの獣の脚が姿を現す。輝くグレーの毛に覆われた足の先の爪は鋭く、長く、より丈夫だ。そしてやはり目に付くのは、全身を隈なく覆う、青い魔力の激しい輝きだ。手に持つ黒羽と白羽もまた然り。その強烈な存在を、光と音によって示している。

「メモリーズではなくていいんですの？」

「そうっすよ、ナメ過ぎなんじゃない？」

「お前たちにはこれで充分だ。……さあ、始めよう」

瞬間、レイの姿が魔族たちの前から消える。

『神威真刀流』二刀剣舞・陸の型、夢幻分身。

いくつもの黒い影がおよそ30の影に分裂する。

「ほう、そなたのその技は前に我が眷属と戦った時より、性能が向上しているのじゃな」

「まあ、それでもあたしらに勝てるとは思わないけどね」

余裕で呟きながら、レイの分身二人が放つ攻撃を避ける。

だが、レイの狙いはそこにはない。単体ずつの攻撃ではなく、あくまで複数の連携によって力を発揮するのだ。

魔族一人につき、六人のレイが超スピードで囲み、連携する。

「ぼ、僕、ちょっと無理だ！ 《絶対防御！》」

アブソリュート・プロテクト

アスラナの周りが全て真っ白になった。

そしてそれは球体になり、どんどん空間を侵食してゆく。

「アスラナ、それいいよ。あたしも乗ろうかな。 《天国と地獄！》」

クライマックス・コントロール

全ての重力が、シリアの支配下におかれた。

重力は下へだけでなく、横からもレイたちに襲いかかり、地面に縫いつけながら凝縮してゆく。

しかし…。

「話にならないな。これくらいも見抜けないとは」

レイの冷たい声が当辺りに響いた途端、分身たちが急速に色を失い、

その全てが強大なエネルギーを放出し、重力の支配を消し去ると同時に爆発した。今までの分身は、全てレイが魔族たちに見せた幻覚だったのだ。

それに合わせて、本体らしきレイの影が、上空へと退避する。

魔族すら、生身では、一瞬にして消し去ってしまうほどの爆風がアスラナの展開している純白の球体「アブソリュート・プロテクト絶対防御」にぶち当たる。激しい爆音、豪炎をはらんだ破壊の烈風……それが白の空間に吸い込まれている間にも、魔族たちの攻撃は止まない。

「アスラナのアブソリュート・プロテクトは、絶対に破れませんわ。ですので、わたくしも攻撃させていただけようかしら」

ユリアナは妖しく笑いながら魔銃を上空に向ける。

「いきますわよ。《スターダスト・シンフォニー星の欠片の共鳴！》」

上空へ無数に放たれた緑の魔力弾は、鳴り止むことを知らぬ共鳴を経て、互いの力を無制限に高め続け、とうとう落下を始めたレイに着弾した。

その激しい閃光の間に、アブソリュート・プロテクトはレイが創りだした爆発を飲み込み終え、さらに効果範囲を広めてゆく。

白の空間がどンドン広がり、レイに着弾したスターダスト・シンフォニーの閃光も未だ止まない中、今度はフリードが行動に出る。

「やっばアスラナの防御は防御ってよりは侵食だよな。まっ、どうでもいっか。次っ、オレのくらってみる？」

フリードは紅い大太刀を鞘に収めたまま、構えの姿勢をとる。

「さく、覚悟はいくつすか？ 《残酷な紅い血！》」
ヴァンパイア・フェイト

フリードの体が激しく、朱く、赤く、紅く……ひたすらに鮮血のよ
うな深紅の魔力の輝きに包まれた。

そして、止みかけたスターダスト・シンフォニーを、全身を包む紅
い魔力によって完全に無効化しながらレイに突っ込んでゆく。レイ
が自身の目前に迫り、抜刀する。

フリードを包む紅が、全て大太刀に移り、下段からからの血の一閃
がレイを斬り殺さんと襲い掛かる。

それはさながら、レイからの吸血を望む残酷なヴァンパイアのよう
に…。

スターダスト・シンフォニーによって、少なからずダメージを負っ
ているレイは、上体を反らし、紙一重でその攻撃を避けつつ、霞む
ような蹴りを放つ。

その蹴りによって、フリードを地面まで一気に突き落とすことには
成功するものの、ヴァンパイア・フェイトの余波までは防ぎ切れな
かったらしい。レイの上半身から鮮血が迸る。

「いって〜。だけど、オレの攻撃って一応成功じゃねえ〜？」

「何を言っておる。ちゃんと当てんか。…今度はわしからいこうか
の」

ガラドが、拳と足先に灯した黒い魔力を一層強く放出し始める。

そして、黒の奔流を足から放出して、消えるような速さでレイに肉
薄する。

「くらえ！ 《抗えぬ真理！》」
デストラクト・フューチャー

破滅の未来を示すかのような、どこまでも闇のように黒い魔力を滾らせる右拳を、地面に降り立ったレイに殴りつける。レイはそれを、黒羽を巨大化させた盾によって逸らし、攻撃力を殺す。だが、左の拳が残っていた。

白羽が間に合うことはなく、レイの鳩尾に闇の拳が叩きつけられ、腹部を腐食させながら吹き飛ばす。

それにより、レイの体はアスラナの展開している『アブソリュート・プロテクト』の真っ白な空間に吸収されてしまった。

膨張を続ける白い空間はレイを吸収した途端に、爆発的な勢いで広がり、他の魔族までも飲み込んでしまった。

その、どこまでも真っ白な世界で魔族たちが見たのは…。

「さあ、覚悟はいいか？ 魔族ども」

『アブソリュート・プロテクト』を展開しているアスラナではなく、影のようなドラゴンの翼を広げ、青い魔力の光芒を身に纏い、強大な存在感と威圧感を放つ………全身を黒衣で統一した、黒髪黒眼の少年の姿だった。

それは地獄からの……。(後書き)

レイ「さて、今日は新キャラである、ユリアナ・アスラナ姉弟がゲストに来ている」

ユリアナ「よろしくお願ひしますわ」

アスラナ「あつ、あのっ！……よ、よろしくお願ひします」

レイ「どうでもいいが、アスラナの挙動不審は治らないのか？」

ユリアナ「この子は、小さい頃から怖がりですの」

アスラナ「だ、だって……周りの人たち、みんな年上だから……」

レイ「意外だな。魔族は年齢のことなど気にしないと思っていたのだが。……一応訊いておくが、お前たちは今いくつだ？」

ユリアナ「レディにそんなことを訊くのは、あまりよろしくなくてよ？」

アスラナ「ま、まあまあ、ユリ姉はまだ若すぎるほどなんだから、別にいいんじゃないの？ち、ちなみに、僕は17歳だよ」

ユリアナ「仕方ありませんわね……22歳ですわ」

レイ「……随分若いんだな。確か、魔法師団長の平均年齢は500歳前後ではなかったか？」

ユリアナ「わたくしたちは、生まれた時から上位魔族でしたから……」
アスラナ「ぼ、僕たちみたいないなケースは、本当に、め、珍しいらしいんだ」

レイ「……………おそろくだが、魔法師団長の平均年齢が500歳近いのは、ガラドとかいうヤツのせいかな？」

ユリアナ「第一魔法師団長『劣化』のガラドさんですわね？」

アスラナ「あ、あの方は、もうだいぶ昔から魔王様にお仕えしているみたいで……………も、もう、ご自身でも自分の年齢が分からないらしいんだ」

レイ「ならば、どうやって平均年齢など、出したんだ……………まあいい。今日お前たちが呼ばれた理由は他にあるらしいからな」

ユリアナ「ああ、ルナルトさんが復活できた理由ですわね？」

アスラナ「『新しい道』って、あ、アシエルさんが説明したものでよね？」

レイ「そうだ。魔族だけに残された、生き返るための『新しい道』。その詳細を説明してくれ」

ユリアナ「分かりましたわ……………通常、魔族はよほど善いことをしない限りは地獄へ墮とされます。大抵、魔族たちはたくさんの罪を犯していますから」

アスラナ「だ、だけど、その代わりに用意されたのが『新しい道』」

なんだ」

レイ「地獄で、なんらかの試練を受けさせられるのか？」

ユリアナ「その通りですわ。魔族が堕ちた際、地獄の番人の立会いの下に試練を受けることが許されます」

アスラナ「ゆ、許される、と言うよりは、魔族にしか出来ない、ということだと思っけど……」

レイ「だろうな。あのルナルトでさえも、復活するのにかなりの労苦を要したようだしな」

ユリアナ「そうですね。通常の魔族が地獄の試練を受けることも可能ですが、おそらくは成功しないでしょう。……かつて、上位魔族でさえも失敗し、地獄を越える永遠の苦痛を与えられたらしいですから」

アスラナ「そ、それだけ、生き返るのは難しい……いや、ふ、不可能に近いってことだね」

レイ「そうでもなきや、こちらだってやってられない。一々完全に存在を消して、魂を輪廻転生の環に戻すのだって、楽ではないんだ」
ユリアナ「でも、今回は、わたくしたちをもう消し去ったも同然じやありませんこと？」

アスラナ「うう、まだ、し、死にたくない……」

レイ「……俺だって何も考えずに殺しているわけではない。展

開次第では、生かすことだっである」

ユリアナ「それは、わたくしたちを生かしてくださいと、ということですか？」

アスラナ「そ、そうだといいな」

レイ「さあな。それは話が進まなければ分からないことだ。……さて、説明を終えたことだし、今日はこれで終わりにしよう」

ユリアナ「次回も楽しんでくだされば嬉しいですわ」

アスラナ「あつ、あの……じ、次回の後書きも、読んでくれると嬉しいな」

レイ「そういうことだ。よろしく頼む。……ではな」

というわけで、次回もよろしくお願いしま〜す！
それではまた（^^）ノシ

護りたい人がいるから。(前書き)

今回はサイト君に頑張ってもらいます。
レイの活躍は、また次回からですネ!

それでは、本文をどうぞ!!

護りたい人がいるから。

70000の軍勢に突進を始めたサイトは、牽制とばかりに遠隔攻撃を連発する。

デルフを改造してから、精神までも鍛えるようになったサイトにとって、遠隔攻撃の連発など痛くも痒くもない。

だが、軍勢にとっては多大なる効果を発揮した。最前線を務める兵たちが崩れ、押し寄せる味方に急ブレーキをかけさせる。

「よっしゃ、いくぞ！デルフ！！」

『おう、相棒！なにがなんでも生き残ろうぜえ！！』

「うおおおおおお！！」

サイトはデルフを構え、軍勢にぶち当たる。

敵の攻撃を高速で避け、魔法を全てデルフで吸収して自身の力に返還する。

吸収するたびにサイトの動きは速く、疾くなってゆき、攻撃も重みを増す。

ここで、サイトはたくさんの兵たちに囲まれてしまった。だが…。

「ハアアツ！！」

ブウンツ！と青い軌跡が煌き、サイトの周囲の兵たちが吹き飛ばされた。

「まだまだ！」

サイトはひたすらに前を目指す。

兵たちを追い越し、追い抜き、それらが後ろから迫ってきて、さらに無限に思える前方の軍勢にも怯まず、ただ前を目指す。

当然、突撃の過程にサイトは決して少くない傷を負う。それでも怯まない。

護りたい仲間がいるから。護らなきゃいけない女ひとがいるから。

サイトの作戦は至ってシンプルだ。

『おそらく最後列にいるであろう、この軍の最高指揮官（将軍）を潰す』……どんな集まりも、トップがいなくなれば少なからず混乱が起こるものである。サイトの狙いはそこにあり、そこに尽きるのだ。

サイトが暴れ回っている頃、軍の最後列では…。

「将軍！敵襲です！」

「そんなことは分かっている！敵勢の状況はどうなのだ！！」

「それが、単騎らしく…」

報告していた兵が言葉を濁し、将軍は顔をしかめる。

「単騎だと…？確かに、軍勢には見えませんが……。もし、単騎だとすれば、その者の実力は計り知れんな……………」

將軍の眉間に走る縦皺は、一層深く刻みこまれた。

飛んで来る無数の矢をデルフで捌き、襲い掛かる魔法を吸収して力に…。

一体どれだけそれを繰り返してきたのだろうか。

すでにサイトの体はボロボロ。体力もつきかけ、ほぼ気力だけで動いているようなものである。

しかし、それでもサイトは辿り着いた。傷だらけであるにも関わらず、將軍の元に辿り着いたのだ。

「ゼー、ゼー……着いた……ぞ。……覚悟……しやがれ……！」

サイトは息を切らせて將軍に肉薄し、デルフを首に叩きつける……

…ことは叶わなかった。

デルフは、將軍の一步前で停止し、サイトの動きも完全に止まっている。……その背にはいくつもの矢が刺さり、無数の魔法による悲惨な傷が出来ていた。

「俺は……役目……を……果たせ……た……か……な……？」

サイトは誰にも聞き取れないような、吐息のような、小さい声で咳き、その場に崩れ落ちた。

アルビオン軍の將軍は、ギリギリまで迫っていた魔剣の青き光芒を思い出し、目の前に倒れ伏す少年を見て、考えにふけていた。

英雄。

敵ながら、この少年には、その言葉が一番似合つと思つた。むしろ、英雄という言葉は、この少年のために存在する言葉なのかもしれない。

単身で70000もの軍勢に勝負を挑みながらも、兵を一人も殺さず、気絶させるだけにとどめている。

甘いも甘い。大甘だ。だが、そこには少年の信念が見え、誇りが見え、大切な人たちを護るといふ覚悟が見えた。

だからこそ、將軍は思つたのだ。……………この少年は、間違いなく『英雄』だと。

「ご無事でしたか、將軍！」

將軍は、部下のこの言葉で思考の海から引き戻された。

「ん？あ、ああ。無事だ。……………現在の軍の状況は？」

「はっ、現在、重傷者およそ百二十名、軽傷者を含めば、その数は一万五千名にもぼります。……………幸い、死亡者はゼロのようです。

しかし、この分では態勢を整えることは難しく、最低でも丸一日ほどの時間を要するかと」

「そうか……………英雄とはこのような者のことを言うのかもしれない……………敵であるのが残念でならん」

將軍は、思わず今まで考えていたことを口にしていた。

「……………そうですね。確かに、『英雄』というものが本当に存在するならば、この少年のような者のことを言うのでしょっ……………」

部下も肯定を示し、二人はその英雄の姿を確認する。

……………いや、確認しようとした。

しかし、そこにいたのは、今にも消えようとする少年の影だけだった。

サイトが目を覚ましたのは深い森の中。

デルフは、何事もなかったかのように、仰向けに転がるサイトに語りかける。

『よう、相棒。起きたか？』

「デルフ…。ここは…？」

『ここは記憶のどっかにあった森だ。……なぜかは知らねえが、レイの魔力を付与されたおかげで、転移が使えた。もうその魔力は尽きて、今は元のデルフリンガーだけだな』

レイに付与された魔力。その全てを総動員して、サイトの体を安全な場所に運び出したと語るデルフ。

その結果、デルフリンガーの青き光芒は失われている。

「そう…か。でも…俺、限界……かも…」

『相棒…。おめえは帰らなきゃいけねえんじゃねえのか？』

「そう…だな…。けど…」

『どうすることも出来ねえ………ってことか』

「ああ。……なあ、デルフ」

『どうした？』

サイトはデルフの方に顔を向け、もう一度話し出す。

「俺…死ぬ……のかな？」

『さあな。オレっちには分からねえ。……………でも相棒、おめえの悪運の強さだけは、誰にも負けねえと思うぜ』

「ハハツ……………褒め……………てんのか……………けなしてんのか……………分から……………ねえ……………よ」

『もちろん褒めてるぜ』

「……………ありがたい……………ね。……………だが……………悪い、俺は……………もう……………」

サイトはそう言葉を残し、気を失った。

だが、サイトは目の前が真っ暗になる前に、自分を優しく照らす癒しの光を、確かに見た。

ルイズは撤退船の、甲板にて目を覚ました。

未だに重たい瞼を気だるそうに開けると、三つの影が彼女を覗き込んでいることに気付く。

「おお！ルイズが目を覚ましたぞ！」

「よかった！」

「……………」

影のうちの二人が喜びの声をあげた。…よく見ると、その二人はギ―シュと、いつもルイズをからかっていたマリコル又だった。

だが、三人目の無口な少女は何も言わない。

「……………」

ルイズは寝ぼけた様子で周りを見渡し、残りの影だったシャルロットに気付き、重大なことを思い出す。

「船？……大変！て、敵軍を止めなきゃ！！！」

ルイズは一人、慌てた声を出す。

ギーシュとマリコルヌが首を傾げる中、シャルロットが口を開いた。

「……落ち着いて。すでに、撤退は完了している」

「え？え？？アルビオン軍は？？！」

ルイズの問いに、ギーシュは呆れたように答える。

「ギリギリ逃げおおせたんだよ」

「これで僕たちはトリステインに帰れるんだよ！」

マリコルヌは安堵したように言葉を発した。

だが、そんな中で一人、浮かない表情のシャルロットを見て、ルイズは嫌な予感に苛まれる。

……先ほどから、サイトの姿が見えない。いつもシャルロットと一緒にいるはずのレイの姿も見えないのだ。

「タバサ……。サイトたちは？」

ルイズは、恐る恐る言葉を口にした。

ギーシュやマリコルヌが、そういえば二人を見ないね、などと言つ間にも、シャルロットの表情は歪む。

……それが、さらにルイズの不安を煽った。
そして、シャルロットはとうとう口を開く。

「二人は……私たちを逃がして、それぞれの戦場に向かった」

ルイズはその言葉を聞いた途端に、サイトが単身で70000の軍勢を相手に戦っていることに気付いた。

「なんで！なんでサイトが犠牲になるのよー！」

ルイズはそう叫んで甲板から降りようとし、ギーシュとマリコルヌに慌てて止められる。

「お、おい！死ぬ気か?!」

「ここから飛び降りたら確実に死ぬぞ！」

「離してー!!」

激しく抵抗するルイズに、シャルロットは静かに語りかける。

「サイトは、絶対に帰ると言っていた。……レイは別れ際、『後で』と言った。だから、あの二人は絶対に戻ってくる。あの二人は人を裏切るようなことはしない。……だから、私がレイを信じるように、あなたも彼のことを信じて」

ルイズは、頬に涙を伝わせながら呟く。

「サイトってホントにバカなんだから……。帰ってきたらお仕置きね。……帰ったら、きつく抱きしめてやるんだから!!」

「じゃあ、私はレイと……」

シャルロットは顔を真っ赤にして俯いた。

「……………キス／＼／＼」

恥ずかしそうに告げるシャルロットを見て、一時的にはあるが、ルイズは元気を取り戻すのだった。

護りたい人がいるから。(後書き)

レイ「さて、今日のゲストは脱力系腹黒である『奔放』のフリードだ」

フリード「うわゝ、オレの紹介、なんか酷くねゝ?」

レイ「いや、これで充分あっているだろう?」

フリード「……………なんか手抜きゝ。ちょっと根拠を述べてみてよ」

レイ「では言おう。…………その喋り方は人の調子を狂わせる。道化のお前が何を考えているのか想像しづらい。そして、それはお前の計算のうちだろう?魔力の色からも分かるが、お前の本質は『赤』の『残忍』であり、さらには「いや、なんか話が長くなりそうだからもういいっすゝ」…………その言動も気に入らん」

フリード「いやいやゝ。君も自分の話が長ゝいってこと、理解した方がいいかもよゝ?」

レイ「理解している。単なる嫌がらせだ」

フリード「うわゝ。オレ、君のこと嫌いだわゝ」

レイ「だろうな。俺もお前は嫌いだ。……………妙に頑固そうだしな」

フリード「そうゝ?オレなんてなんにも考えてないってゝ」

レイ「そう見えるように振舞っているだけだろうが」

フリード「……………なぜそう言い切る？」

レイ「口調。変わってるぞ。道化を演じるなら、最後まで道化に徹するんだな」

フリード「いや、やっぱり君は気に入くないね。ホント、絶対君とは馴れ合えないな」

レイ「安心しろ。俺もお前とは馴れ合える気がしない」

フリード「うん、面と向かって言われると、それはそれでムカつくね」

レイ「そうか。それは良かった」

フリード「ケンカ売ってるの？ねえ、ケンカ売ってるよね？」

レイ「俺の言葉の意味をどう取るうとも、それはお前次第だ」

フリード「うわっ、やっぱりムカつく！君、性格悪いってよく言われるでしょ？」

レイ「それは不思議と言われたことないな。あからさまな嫌悪を感じさせる人物は何人も見てきたが、面と向かって伝えてこられるだけの人物はいなかった」

フリード「……………ねえ。その人、絶対顔青くして逃げたってでしょ？」

レイ「ああ。なぜ分かった？」

フリード「うん、絶対に君の目つきの悪さにやられてるね。君の、その凍てついた表情はどうかと思うわ〜」

レイ「皆はそう言うが、これは地顔だから直しようがない」

フリード「デフォルトってわけ〜。性質クチ悪いね〜」

レイ「余計なお世話だ。……………というより、なんだ今回の『後書き』は。完全な無駄話じゃないか」

フリード「あれ〜？君ってこの司会役やらされるのって嫌だったんじゃないかったっけ？嫌なら『後書き』の出来がどんなもんだろうと関係ないじゃ〜ん。……………もしかして、『司会役』気に入っちゃった？」

レイ「そんなわけないだろう？やるからには完璧にやりたいだけだ」

フリード「ハハハ！もう絶対気に入ってんじゃ〜ん」

レイ「……………言ってる。俺はもう終わる」

フリード「あれ？スネちゃった？」

レイ「うるさい。お前は少し黙っている」

ドゴオ！バキイ！ズガア！……………フリードは宇宙そらで輝くお星様と化したようだ（笑）

レイ「さて、邪魔者がいなくなったところで、今日は終わりにしよう。ではな」

シャルロット、後日談。「スネたレイも、よかった／＼／＼／」

レイ「いや、俺は拗ねてないからな？」

しっかりとツッコんでおくのも忘れないレイでした。

それでは、また次回（＾＾）ノシ

降伏する気はあるか？（前書き）

サブタイがレイの言葉っぽいですが、レイの言葉ではないので、あ
しからず。

それでは、本文をどうぞ！

降伏する気はあるか？

「この現状が理解出来ていないようだな」

今までの戦いなど嘘であったかのように、傷一つないレイの声が白い空間に響き渡った。

そして、その言葉が発せられた瞬間に、白の空間に入った時は展開されていたメモリーズの翼が、音もなく消えた。

……まるで、もう必要ない、とでも言うように。

魔族たちは言葉を失い、何も喋らない。

……そしてレイの傍らには、アスラナが蒼白な顔で拘束されていた。

「アブソリュート・プロテクトを乗っ取った。こいつの能力通り、お前たちの攻撃は全てはね返り、俺の攻撃だけが有効になる。……

…覚悟しろ」

そう、アブソリュート・プロテクトの防御は絶対であり、何も受け付けずに全てが攻撃した者へ返される。

白い空間の中では、乗っ取ることによって術者になったレイ以外は、相手に接近することすら叶わず、攻撃することなど夢のまた夢なのだ。

また、レイから乗っ取ることも出来ない。どの魔族も『アスラナが操るアブソリュート・プロテクト』すら、乗っ取ることが出来ないからだ。

つまり、それをいとも簡単に乗っ取るレイから乗っ取り返すことなど、不可能に近いのだ。

「十数える間に降伏すれば助ける。今後、危害を加えないなら、俺

も不干渉だ。だが、降伏しないなら……復活の余地は与えない」
十……九……。レイはゆっくりと数を数えていく。

「わしは誇り高き上位魔族じゃ。そなたの誘いには乗らん」

「オレも、君の言いなりになるのは気に食わないんだよね」

「言っておくけど、あたしらはそんな侮辱を許せるほど出来た人格を持ってないの」

ガラドが一番に否定し、それに続いてフリードとシリアが降伏を拒否した。

三……二……。レイはさらに数を数える。ユリアナとアスラナの姉弟は何も言わない。

一……。零、と言う前に、一人の声があがる。

「わたくしは……！」

レイは数えるのを止める。

「わたくしはアスラナを死なせたくないのです。あの子はまだ17歳です。人間の年齢でも若く、魔族の価値で考えれば、若い以前に生まれて間もないようなものなのです。……そんな子を、こんなに早く死なせたくありませんわ……」

「ユリ姉……。僕もまだ死にたくないし、ユリ姉に死んで欲しくないよ。……あの、降伏したら本当に助けてくれるの？」

姉弟は懇願するようにレイを見る。

二人は天才的な上位魔族であり、史上最年少の魔法師団長なのだ。

その年齢は、弱冠22歳と17歳。人間に換算してもかなり若い。ましてや、平均年齢が500歳の魔法師団長の中では、かなりの異例なのだ。

そして、若いだけあって魔王への忠誠心は低く、思考は柔軟だ。今回は良くも悪くも、その『若さ』が降伏する道を選ばせたのだ。

その状況に難色を示す他の隊長たちも、完全にレイが支配している『アブソリュート・プロテクト』の白い空間のせいではなんの行動も起こせない。

それどころか、レイが支配力を高めたことによって、喋ることさえ不可能だ。

そして、とうとうレイは口を開く。

「ああ。降伏と言っても名ばかりだ。魔族の地で平和に過ごしてもいい。他の世界で安穩とした生活を送るのもいい。俺に着いてきてくれても構わない。とにかく俺たちに危害を加えない限りは自由だ」

実際問題、裏切れば魔族の地では蔑まれるので、レイの元か、他の世界で過ごすことになるのだが、そんなことも承知でユリアナは口を開く。

「……分かりましたわ。私はあなたになんの危害も加えないこと、そしてあなたにとって不都合になるような行動は、絶対にしないことを誓いますわ」

「…ぼ、僕もユリ姉と同じことを誓います」

アスラナもユリアナに追従した。

レイはその誓いを『気』で判断し、嘘がないことを見抜く。

「分かった。では、俺もお前たち姉弟には危害を加えないことを約束しよう。そして、お前たちには、この空間から脱出してもらおう……だが、その前に一ついいか？」

レイは二人が頷くのを見て、言葉を続ける。

「解放した後、お前たちはどうしたい？」

二人は顔を見合わせ、しばしの相談の後、ユリアナが代表して答える。

「わたくしたちは、あなたなら信用出来る、とても暖かく、信頼に足る人物だと判断しました。……です、わたくしたちはあなたに着いていきたい。よろしいですか？」

「ああ、構わない。むしろ、こちらから頼みたい。鍛えてやりたいヤツもいるから……それに今後のこともある」

レイは、サイトのことを思い浮かべながら言った。魔族に鍛えてもらえば、さらに技量アップを望めると思ったのだ。

……もちろん、シャルロットはレイが自分で教えるつもりだが。

それはさておき、レイの言葉に、姉弟は嬉しそうな表情になった。

「鍛えるくらいなら任せてください。わたくしたちでよければ、いつでも力をお貸ししますわ」

「ぼ、僕も手伝わせてもらおうよ」

レイはその言葉を聞いて表情を崩し、答える。

「そうか。ならば、俺はお前たちを歓迎する。とりあえずは、他の世界にて待機してもらおう。後ほど、俺の魔力を辿って転移するか、ハルケギニアのトリステイン魔法学院という場所を訪ねてくれ」

レイはここで、言葉を切り、数秒迷った後に、それと…と言葉をつなげながら、ふところから何かを取り出す。

「俺の今後についてだ。完全に私事だが、ルナルトの強化は想像を絶する。負けるつもりはないが、相打ちでしか勝てないのなら、その道を選ぶこともあるかもしれない。……………その時は、これをトリステイン魔法学院の生徒、シャルロット…表向きにはタバサと名乗っている人物に渡してくれないか？」

レイはふところからとりだした何か……………青い結晶のようなものを、すぐそばにいる弟のアスラナに手渡す。

「あ、あの……………何て言えば…？」

「……………俺からの物だと言って渡してくれ。事情は全部話せるように、魔力を込めておいた」

「分かりましたわ。……………しかし、そういうことは自分で言うものですよ。まあ、もしもの場合は責任を持って渡しますが」

今度はユリアナが答えた。

「よろしく頼む。では、お前たちを自由にする。ここから一旦、ルナルトが知らないような世界に跳んでくれ」

「分かりましたわ。……………極力、結晶を渡さなくても済むようにしてくださいね。わたくしたちは、あなたに着いていくと決めたのですから、これが最後の別れなんてあんまりですわ」

「え、えっと、なんかいろいろありがとうございました」

姉弟はそれぞれの言葉を言い、一礼した。
それに対し、レイが応える。

「ああ。また会おう。……必ず」

レイの言葉を背に、姉弟は異世界に転移した。

そして、二人の姿が消えた瞬間に、真っ白な空間は弾けた。
。

降伏する気はあるか？（後書き）

レイ「今日のゲストは、原作キャラのキュルケだ」

キュルケ「はあ〜い 最近出番がないから、わざわざ自分から来ちゃったわ」

レイ「確かに、お前の出番は少なめだな」

キュルケ「面と向かって……。一応言っておくけど、あなたがタバサを取ってくから私の出番が減ってるのよ？」

レイ「そうだったのか？すまないな。……………まあ、タバサ（シャルロット）と離れる気はないが」

キュルケ「でしょうね。……………まあいいわ。こっちは二人を見るだけでお腹いっぱいだしね」

レイ「俺たちを見て楽しいのか？」

キュルケ「楽しいわよ〜 すごいラブラブなのに、未だにどちらも告白してないことか、ね」

レイ「……………俺たちは周りから見たらそう見えるのか？」

キュルケ「……………自覚が薄いから性質タチ悪いのよねえ〜」

レイ「タバサ（シャルロット）は俺にとって大切な人、という自覚はちゃんとあるぞ」

キュルケ「『好きな人』じゃないの？」

レイ「……………好きかどうかは、まだ分からない。俺にとって、あの過去は捨てられるものでもないし、タバサ（シャルロット）を好きになる資格があるのかも分からないからな」

キュルケ「……………『あの過去』というのが何か分からないし、あなたの気持ちは他人に推し量ることはできないけれど……………タバサはあなたに好きになって欲しいと思っているだろうし、あなたにはタバサを好きになる資格が充分にあると思うわよ」

レイ「……………なんだ、この回は。『後書き』として、これでいいのか？……………だが、ありがとう」

キュルケ「ふふっ、どういたしまして。ちゃんとタバサを幸せにしてあげるのよ」

レイ「俺がか？」

キュルケ「当たり前じゃないの。好きなんですよ？」

レイ「まだ明言はしてないぞ」

??????「……………レイのバカ」

レイ「シャルロット？」

シャルロット「（わお〜）抱きついてます。

レイ「……………悪かったな」頭撫でてます。

キュルケ「やっぱりラブラブじゃないの……………さあ、邪魔者は退散しましょうかしら じゃあね！」この場から去っていった。

レイ「む…ゲストが逃げたな」

シャルロット「私と一緒に……………イヤ？」

レイ「そんなことは言っていないさ。シャルロットはそのうちに絶対ゲストで呼ばれるだろうし、その時にもっとたくさん喋ろう」

シャルロット「分かった／＼／＼／」

レイ「さあ、今日はもう部屋に戻って、ゆっくりシャルロットと喋りたいので、これで失礼しよう。ではな」

シャルロット「……………また、読んで」

というわけで、キュルケメインだったはずが、シャルロットを呼んでしまいました。

本当はキュルケの話でもっと続けるつもりだったんですがね（笑）

さて、今日はこれで終わりです。

次回はいいに因縁の相手、ルナルトとの戦闘です！
よろしく願います！！

それでは、また次回（^^）ノシ

『だから俺はもう一度言うー!!』 (前書き)

レイVSルナルト!!

因縁の戦いが、再び始まります!!

それでは、本文をどうぞ!!

『だから俺はもう一度言うー!』

……レイの目の前に残るのは、満天の星と通常より大きい月、そして月をバツクに無機質な微笑みを向けるルナルトだけになった。

「おめでとう！君はほぼ無傷で魔族三人を消し去ったね！……二人は逃がしちゃったみたいだけど、僕はあの二人なんてどうでもいいから見逃しといてあげるよ」

「気遣い、感謝する……と言っておこうか」

「なに？皮肉のつもり？ハハッ！僕に皮肉なんて効かないよ」

ルナルトの無機質な笑い声が辺りに響いた。

「効く、効かないの問題ではない。……第一、俺はお前を力で潰すつもりだ。心理戦なんて、どうでもいい」

「野蛮だねえ、レイ君……でも、そういう君は嫌いじゃないよ！」

「俺はお前が嫌いだがな。………《心の管理者『メモリーズ』

よ。その大いなる力を我に顕現せよ 覚醒召喚!》」

レイの叫ぶような詠唱が終わる同時に背から巨大な影の翼が出現し、青い光芒に全身が包まれる。

「さあ、俺は始めから全力でいく。………始めよう。覚悟しろ」

「いつでもいいよ。僕は準備万端だからね」

いつの間にかルナルトの手には、深紅の光芒を纏う魔鎌が握られていた。

さらに、今回のルナルトは全身に紅き魔力を滾らせていた。

そして青と赤は、互いを打ち消そうと神速でぶつかり合う。

上位魔族ですら目で終えないような剣速で振るわれる魔剣を、危なげなく魔鎌が捌き、反撃を繰り返す。

レイは、その紅き流星を、上体を反らすだけで避け、強烈な蹴りをお見舞いする。

ガキインツと魔鎌に霞むような蹴りがぶち当たり、ルナルトの体は大きく後方に吹き飛ばされた。

『神威真刀流』二刀剣舞・壱の型改変、瞬迅・翼。

レイは、メモリーズの翼を最速で羽ばたかせ、ルナルト肉薄する。それは通常の瞬迅の速さを大きく上回る。もはや、誰の目にも映らないようなスピードでの突進だ。

二刀の切り裂きだけでなく、メモリーズの翼の煌きが、ルナルトに襲い掛かる。

「地獄での修行をナメちゃダメだよ」

気付くと、レイの目の前にはルナルトの姿はなかった。

激しい殺気が爆発し、魔鎌がレイの首に叩きつけられる。

ブシャーッと鮮血が噴き出す。首と体が完全に断裂された。

……かと思えば、ルナルトの後ろには無傷のレイが
白羽をルナルトに突き刺そうとしていた。

「幻覚相手に何をやっている？」

「幻覚かぁ。やるね」

ルナルトは、それをかろうじて魔鎌で逸らし、バックステップでレイとの距離を取ろうとする。

だが、レイはその動きを読んでいたかのように、正確にルナルトに追隨してみせた。

二人のその動きは真剣な戦闘でありながらも、どこか美しさを感じさせる、対の舞のようなものだった。

「前より先読みの精度が上がってるね」

激しい剣戟の最中に、呟かれたルナルトの言葉に返されるのは言葉ではなく、攻撃だ。

キィインツ！鋭い金属音が響く。ドゴオ！激しい蹴りが鳩尾を襲う。

ルナルトは蹴りによって吹き飛ばされた。

吹き飛ばされた先には、すでに翼を広げたレイが先回りを果たしている。

だが、それで終わるルナルトではない。

「ナメないでよね　クルエル・スローター　《冷酷なる大虐殺！》」

ルナルトの周りを中心に、凍てつく氷の刃を大量に含んだ、絶対零度の豪風が吹き荒れる。

それだけで地面は芯まで凍りきり、その一瞬後には氷や真空の刃で、地面が巨大なクレーターに変わる。

レイも決して少なくない傷を負うも、すぐに次なる反撃の手を打つ。

「《焼き尽くせ、焼き尽くせ！大いなる心を司る力よ！大いなる我が魔力よ！我が顕現し得る最上の豪炎を今ここへ！心よ、叫べ！心よ、荒れ狂え！積み重なる二つの心よ！重なり合いて、全てを焼き尽くす地獄の極炎と化せ！》

メモリーズの力を最大限に引き出すための通常より長いルーンを、凍てつく豪風を避けながら唱え終え、ついに技名が告げられる。

「《 ブレイズ・オブ・ハーツ！！》」

炎の最上級魔法『ファイアー・ブレイズ』が兇戯に見えてくるようなほどの熱量を誇る獄炎が、激しく燃え盛ってルナルトに突進する。

「なっ！メモリーズの覚醒召喚中はここまで強い魔法が放てるわけ？！さすがの僕も驚くよ！」

そう言っただけで、ルナルトに獄炎がぶち当たる。その過程では、周囲の氷を溶かし、地面までも溶かし尽くそうとする炎によって、地面が炎の海となっている。

そして、ルナルトにぶつかった瞬間に大爆発を起こした。

だが、なんの前触れもなくルナルトは爆心地から飛び出してきた。その全身には血が滲み、無傷からは程遠い。それでもルナルトの動きに鈍りは見られず、そこまで大きなダメージを負っているわけではないようだ。

ギイン！キンツ！ガキンツ！キイイイン！！激しい青と赤の剣撃の嵐の中、飛び交う無詠唱での最上級魔法と、それを打ち消す魔族の奥義。
戦いはさらに激化する。

「なかなかやるね 一体どんな修行してるんだか。……………くらえ！」

言葉を紡ぎ、魔鎌を神速で振り切るルナルト。

「ハアアアツ！……………少なくとも、通常の上位魔族よりは激しい修行だ」

レイはその攻撃を白羽で逸らし、黒羽で反撃しながら答えた。

首を断ち切ろうと迫る黒羽をかがむことで避け、レイのふところに入り込むルナルト。魔鎌は一旦放棄している。

紅き魔力を滾らせる拳を、鋭くレイの顎を捉えさせるようなアツパ―として繰り出す。

レイはそれをバツク転によって避けつつ、青き魔力を纏わせた右足を、バツク転の勢いのままにルナルトの顎へと叩き込む。ルナルトはそれをバツクステップによってかろうじて避けた。

ルナルトが避けたのを確認したレイは、高速でそのままバツク転を続け、繰り返すことにより間合いを取った。

「楽しいよ！人間のくせに、短期間でここまで強くなるなんて！本当に君はおもしろいね！……………壊したくなっちゃうよ」

戦闘が小休止を迎え、ルナルトは本当に楽しそうでありながら無機質な笑いをレイに向けながら話しかけた。

「俺は楽しくない。お前を倒しても何も生まれないからな」

レイは冷静に言葉をつなげた。

「へえ！じゃあ、和解してみる？」

心にもないことをルナルトは問いかけた。

「冗談キツイな。……俺はお前が嫌いだと言っているだろう？」

当然だ。ルナルトはシャルロットたちを殺そうとした。

……大切な人を傷つけるヤツには、容赦はしない。

「ふうん。僕も君は嫌いだよ。戦闘はおもしろいけど、その美点を消して余りあるほどの皮肉な性格してるよ」

「人格が崩壊しているお前には言われたくないな」

「フフフツ 人格が崩壊していても自我はあるんだよ？」

「当たり前だ。自我があるからこそ人格が崩壊し得る。感情がなければ何もしない」

「そっかあ。でも、僕はそんなことはどうでもいいんだよ。……
……そろそろ本気を出そうと思っっているからね」

意味が分からない所で唐突に話題を変え、衝撃の事実を告げるルナルト。

『そろそろ本気を出す』……つまり、今まではまだ本気を出していなかったのだ。

今までも全力を尽くして戦ってきたレイにとって、ルナルトのこの言葉は、驚愕に値するものになるのだ。

だが……。

「……そうか。だが、俺はお前に負ける気はない」

そう、レイは負けるわけにはいけない。あの日の誓いを、あの日の苦しみを……そして、シャルロットとの約束を破るわけにはいかないのだ。

「ハハツ！強がらなくてもいいよ？僕はここまで強くなったんだから」

瞬間、ルナルトから発せられる力の波動は、今までの数十倍にまで跳ね上がる。

と同時に、ルナルトの茶髪は鮮やかな血の赤に染め上げられ、瞳もそこだけ充血したように紅くなる。

「ほら、君ぐらい強ければ、この僕がどれだけレベルアップしたか理解^{わか}るよね」

無機質な声は相変わらず……だが、威圧感だけは今までのどんな時よりも強い。強過ぎる。

「……御託はいい。始めよう」

「愚かだねえ！戦つても無駄なことくらい分かってるんでしょ？覚醒召喚だつてそろそろ切れるはずだし 切れたら、反動で動きが鈍るよねえ？……強がるのはやめたら？」

「負けるわけにはいかないと言っているだろう？」

レイはそう言いつつ、自身の魔力を高めてゆく。

「ハハツ！まあ、そんなに死に急ぎたいなら、さっさと楽にしてあ

げようかな」

「死ぬのはお前だ、ルナルト！」

瞬間、レイは瞬迅・翼を使ってルナルトに肉薄する。

最速のスピードで、ルナルトを切り裂く………ことは叶わなかった。レイがルナルトの動きを目で捕捉し、その首に黒羽を叩きつけようとした時、一瞬でルナルトの体は消失した。

特徴的になった血の赤を誇る髪を見失い、困惑するレイは、ルナルトが突き出した手によって腹部を貫かれていた。

「魔鎌で斬ったらすぐに殺しちゃうからねえ。………少しずつ苦しめて、ゆっくりと殺してあげるよ」

セリフを吐き、ゆっくりと腹部から手を引き抜くルナルト。大量の血がドクドクと流れ出す。

「グツ……。ナメ……。なあああ！！！」

レイは『気』を傷口に大量に注ぎ込み、一時的に出血を止める。そして、自身の魔力を爆発的に高め、七の型・鬼刃閃光を十発連続でルナルトに向かって放つてみせた。

通常ではそんな行為は無理なのだが、メモリーズの覚醒召喚の効果によって、その行為を無理矢理可能にしている。

当然、そんなことをすれば、レイの体には大きな負担がかかる。だいたい、『気』を大量に使うことも本来は危険なのだ。

だが、レイはまだ死ぬわけにはいかない。………せめて、ルナルトを殺すまでは。

目の前に出来た巨大過ぎるクレーター。

………その中心地に、ルナルトは毅然として立っていた。

「ハハッ！地獄に行く前の僕では、跡形もなく消え去ってただろうね！……でもね」

今の僕には、毛ほども痛くないんだよ

ルナルトは無機質に笑い、魔鎌を構える。

「俺は……俺は！誰よりも強く在るべきなんだ！何よりも強く在るべきなんだ！！相手が人間だろうが魔獣だろうが魔族だろうが……お前みたいな上位魔族にだって勝たなければならぬんだ！！相手がなんであろうと、戦うのなら勝たなければならぬんだ！！だから俺はもう一度言う！！」

俺は……！！……お前には負けない！！！！

それは以前、ルナルトと対峙した際にもはいた言葉だった。

だが、その言葉に込められた思いは以前の比ではない。

そして、レイはまたも全速力で、瞬迅・翼によってルナルトに肉薄する。

「君はワンパターンなんだよ！さっきからその技ばかりじゃないか」

「

「そう思うか！」

レイは、ルナルトに到達する直前に技を解き、足から純粋な魔力を一気に放出してルナルトを飛び越え、後ろを取る。

そしてレイの魔剣は、ルナルトの心臓を貫こうと全速力で突き出される。

「確かに変則的だけど……僕の目には全部見えてるんだよね」
ルナルトの冷たい声が響き、今度はルナルトの魔鎌がレイの頭上から振り下ろされた。

……振り下ろされた魔鎌は、レイの振り上げた右掌に突き刺さっていた。

魔剣を放棄したレイは、血をダクダク流しながらも右手を握り、魔力を最高まで高め、『気』でも強化した筋力でルナルトの魔鎌を強制的に捕らえた。

「……………グッ!……………捕まえた…ぞ?」

「なっ?!ふざけるなあ!こんなバカみたいなことしてんじゃねえよ!」

レイはそんなことを無視して、自身の生命維持に必要な魔力も全て自身の空いた左拳に注ぎ込んでゆく。

「お、お前!何するつもりなんだよ?!そんなことしたらお前は死ぬんだよ?!?!」

「知る…か。……………俺は…お前には…負け…ないし……………死なな…い」

そう言いながら、レイの魔力は、強化されたルナルトでさえも実現不可能なほどに高められていく。

魔力を高めすぎた副作用で、レイの全身が青い結晶に覆われてゆく。……動けなくなる前に、レイはルナルトへの最後の一撃を放とうとする。

「覚…悟……………しろ!……………ルナ…ルト……………!!」

技名も何もない、ただ魔力を一点に集めて叩き込むだけのシンプルな攻撃。

だが、それは何よりも強く在り……。

青き魔力の果てしない無限の光を伴い、レイの左拳はルナルトの鳩尾に叩き込まれた。

。

そして、音もせず、強烈な閃光だけが周囲一体を激しく照らし出し、辺りは光の海と化した。

『だから俺はもう一度言うー!!』(後書き)

レイ「さて、今日は全く目立たなかった魔族たちの一部……三人をゲストと呼んでいる」

ティード「誰が全く目立たないって？」

リユナ「アハツ ……私をそんな扱いにするなんて、良い度胸ね…」

レンドル「だいたい、オレを目立たねエなんて言うてんじゃねエぞオ！」

レイ「最後のは、本当に誰だ…」

レンドル「なっ！オレを忘れたってかア?!ふざけんじゃねエぞオ!!」

リユナ「アンタ、いちいち喋り方が鬱陶しいのよ。どうせ、私の団の副団長で、上位魔族ですらないんだから、どうか行ってくれない？」

ティード「だってよお！俺としてもお前はいらねえ！第一、話し方がかぶるんだよ!!」

レンドル「オレの場合は、『あ行の小文字』はカタカナだろうがア!!」

レイ「どっちもどっちだ。結局は、三人とも目立たなかった」

リユナ「なんで私まで目立たない組なのよ！私は蒼髪の娘の母親を苦しめる薬作ったりしたじゃない！！」

レイ「薬を作った時の描写はされていない。ちなみに、戦闘描写もほとんどないぞ。本文は、俺とリオールの戦いをメインに構成されていた」

リユナ・ティード「り、リオールだけズルイ（ズリいぞ）！！！」

レンドル「ケケケツ！その点オレは、戦闘描写までされてるぜエ？」

レイ「それでも目立たない組だがな」

リユナ「むしろ、一番目立たないんじゃないの〜？アハツ」

ティード「おっ、確かにそれは言ってるな！」

レンドル「ざっけんなアアアアアア！！！！！！」

レイ・リユナ・ティード「うるさい」「うるさい」

レンドル「あれかア？！オレはいじられ要員なのかア！！？」

レイ「正確に言えば、必要ではないから『要員』ではないな」

ティード「ただのいじられ役だな！」

リユナ「アハツ 可愛いそうに」

レンドル「……………何を言われようと、オレは言っぞオ……………」

ざっっけっんなあああああああああ！！！！！！！！！！

レイ「やはり、こいつらは呼ぶべきではなかったな」

ティード「ちょ、なんで俺らまでうるさいヤツって認識になってわけ???!」

リユナ「そうよ！私は終始、お淑やかだったわあ」

レイ「ティード、お前の声は大きすぎる。充分うるさいぞ。そしてリユナ、お前の性格は、『お淑やか』とは正反対だ」

リユナ・ティード「「ひ、酷い!!?」「」

レイ「……………はあ、このままでは無駄話がダラダラと続きそうだから、これで終わりにしよう。……………ではな」

魔族たちがなにやら騒ぎ始めましたが、とりあえずシカトする方向でいきましょうか（笑）

それでは、また次回（^^）ノシ

『俺はお前を忘れないよ』(前書き)

あの戦いのあと、レイは一体どうなったのでしょうか？

それを、今回は書きました。

それでは、本文をどうぞー！

『俺はお前を忘れないよ』

シャルロットの言葉で、一時は元気を取り戻したルイズだったが、学院に戻ってから一日、二日……一週間、と時間が過ぎてゆくに連れ、悲しみは深く、つらいものになっていった。

サイトが帰ってくることを信じようとながらも、帰ってこない使い魔の死を考えてしまい、部屋に籠りつきりでうわの空だ。すでに涙は枯れた。

思えば、サイトやレイを召喚してから、たくさんの楽しい思い出があった。サイトは、一々むかついたけど、一番自分のことを思っていて行動してくれていた。二人が来てくれたおかげで、大事な友達がたくさん出来た。レイとシャルロットのラブラブっぷりには笑った。

……あの時のサイトはカッコよかった。あの時のサイトはずるかった。あの時のサイトはおもしろかった。あの時のサイトは頼もしかった。あの時のサイトは……。

ルイズはそこまで思い出し、枯れたはずの涙がまた溢れ出した。

「なんでよ……。なんで私の身代わりなんかになったのよ……。……
…なんであんたが死ななきゃいけなかったのよ、ばか…」

ルイズの呟きは、誰もいない自室へと吸い込まれた。

その日の夜。今日もまたルイズが泣き明かし、泣き疲れて眠ってしまった頃。

シャルロットの部屋の扉が、ノックされた。

彼女も、なかなか帰ってこないレイに不安を抱いており、レイが帰ってきたのか！と…かなりテンションを上げて扉を開けた。

「レイ！！！」

だが、そこにいたのは悲しそうな表情の二人の赤い髪の人物たちだった。顔の造りが似ており、姉弟であるように見える。

「……………残念ながら、レイさんではありませんわ」

「ぼ、僕たちは、彼から預かった物を、き、君に届けに来たんだよ」
平静を取り戻したシャルロットは、二人が魔族の『気』を発していることに気付く。

「……………魔族?!」

警戒し、二人から距離をとって、自身の耳についたレイからもらったイヤリングを魔銃に変化させ、これまたレイからもらったブレスレットに手をかざして『聖獣・シファード』を呼び出そうとする。

「お待ちくださいませ。……………これをご覧ください」

姉の方……………ユリアナがレイに託された青い結晶を取り出す。
シャルロットの動きが一旦止まる。……………レイの魔力を感じたからだ。

「こ、これは、レイさんに託された物だよ。たぶん、彼の魔力を感じてくれると思うんだけど……………」

今度は弟の方……………アスラナが説明した。

「……………確かに、レイの優しい魔力を感じる。……………入
って」

シャルロットは、青い結晶が実際にレイから託された物だと認め、
魔銃をイヤリングの形態に戻した後に、入室を促した。

部屋に入り、自分たちがレイに降伏して、レイに着いてゆくと決
めたことを告げ、自分たちの名を教えた。

そして、とうとうレイに託された青い結晶をシャルロットに手渡す。

青い結晶がシャルロットの手に渡った瞬間、そこから激しくも優し
い光が満ち溢れた。

「これは…?!」

青き光が収まると、光に驚きの声をあげていたシャルロットの目に、
レイの姿が映し出される。

……………そのレイの輪郭がぼやけていることに、シャルロットは
まだ気付かない。

「レイ……」

今度こそ、シャルロットは喜び勇んでレイに抱きついた。

……だが、それを見た姉弟や、レイでさえも悲しい表情になる。

「……シャルロット。一つ、俺の話を聞いてくれないか？……俺には、あまり時間が残されていないんだ……」

シャルロットはよく分からない、という表情になるが一応、分かった、と答える。

「よく聞いてくれ。……今の俺はただの残留思念のようなもので、実際にはここに存在していない」

レイは、青い光に分解されかけている自身の手を悲しそうに見つめながら言った。

……今さらながらに、シャルロットもレイの輪郭がはっきりしていないことに気づき、言い知れない不安に襲われた。

「敵意のある魔法師団長は、全て消し去った。……だが、その時に使った技の副作用によって、俺の本体は魔族と戦った地で結晶の中に封印されている。……これから想像もつかない程永い間、歳も取らずに、あの中に閉じ込められ続けるだろう」

シャルロットの表情はこの世の悲しみを全て映しこんだかのように歪み、やがて涙がこぼれた。

「俺は……お前との約束を果たせなくなった……」

もう、お前の元には帰れない。……そう言ったのと同じことだ。

大粒の涙がシャルロットの瞳から溢れ出す。シャルロットはレイが消えないように必死で彼にしがみ付き、大声で泣き出した。

レイは悲しそうな表情のまま、強くシャルロットを抱きしめ返す。

「俺はお前との約束を果たせない……。だから、俺のことは忘れろ」「いや！忘れたくない！私はあなたのことが好きだから！！好きな人のことを忘れたくない！！！」

いつものシャルロットからは想像出来ないほどに感情的な声。それは彼女の心の声だった。

「シャルロット……。お前はいつも俺なんかの話で笑ってくれた。俺なんかのために怒ってくれた。俺なんかのために悲しんでくれた。俺なんかの傍で……。いつも支えてくれた。ただ、お前がそこにいるだけで、俺は安心出来たんだ。シャルロットの前でなら、自分の弱みを晒けさせる。……。だから俺はそんなシャルロットが……。好きだ。リーネの代わりに、お前を好きになっただんじやない。俺は、お前を選んだ。お前のことが……。お前の全てが好きなんだ」

レイは、初めて『好き』だと言った。そして、もう消えかけている手でシャルロットの顔を上向かせ、顔を近づける。

その唇が触れ合う直前に……。レイの体は完全に青い光と化し、雲散した。

明日には俺のことを忘れていくはずだ。……。だが、俺はお前のことを忘れないよ。

「いやああああ！！！！！」

シャルロットの悲痛な声が、部屋中に響き渡った。

『俺はお前を忘れないよ』（後書き）

.....。

ユリアナ「え、ええ〜.....レイさんがいない場合は、どうすればいいのでしょうか？」

アスラナ「こ、ここにいる人だけで、つ、つなぐしかないんじゃないかな...？」

ユリアナ「そして、今この場には？」

アスラナ「ぼ、僕たちしか、い、いないみたい...」

ユリアナ「.....ここは、奥の手を使うしかありませんわね」

アスラナ「お、奥の手って...？」

ユリアナ「今回の司会役は、わたくしたちがやるとして、次回の司会役は、今回ゲストにした方に押し付け.....いえ、お任せするのです」

アスラナ「そ、それはいい案だね.....で、でも、そのゲストはそうやって呼ぶの...？」

ユリアナ「もちろん、召喚魔法で呼ぶのです」

アスラナ「そ、そっか。じゃ、じゃあ早速、は、始めよう？」

ユリアナ・アスラナ「『出でよ！我らの救世主足り得る者よ！！』
（笑）『』」

サイト「いったただつきまゝっす！！……って、アレ？メシは??」

ユリアナ「お食事中でしたか。こんな時に呼び出してしまい、申し訳ございません」

アスラナ「あ、あの……ごめんね……?」

サイト「え？呼び出し??ってか、あんたら誰???」

ユリアナ「………そういえば、わたくしたちは面識がありませんでしたわね……」

アスラナ「…な、なら『後書き』では、知っている設定で通せば、いい、いいんじゃない?」

ユリアナ「そうですわね。………それでは、サイトさん。わたくしたちのことは知っているという設定でお願いしますわ」

サイト「は？でも俺はあんたらのことなんて知らな「知って……いますわよね……?」……ハイ！知ってマスー!!」

ユリアナ「ふふっ、分かればいいですよ」

アスラナ「ゆ、ユリ姉………な、なんか少し、こ、怖いよ」

サイト「全然少しどころじゃねえだろ。マジ、鬼なんじゃ」「………なにか仰おっしゃいましたか……?」………いい、イエエエ！！わたくしめは、な

にも申ししておりませんとも！！はい！！！！」

ユリアナ「ご理解いただけて、なによりですわ。……さて、そろそろ尺は足りているのではなくて？」

アスラナ「う、うん。そろそろ、お、終わってもいいと、思う……」

ユリアナ「では、これで終わりにしましょうか。……サイトさん、次の司会役、頼みましたわよ」

サイト「は？なんで？それは嫌」やっってくださいますわよね……？」「……やらせていただきます。……いえ！むしろやらせてください！！！！」

ユリアナ「そんなにもやる気を示してくださるなんて、わたくしは嬉しいですわ」

サイト「ハハハ、当たり前じゃないデスカー」

アスラナ「な、なんか、言い方が、ぼ、棒読み……」

ユリアナ「まあ、それくらいは見逃してさしあげましょう。……それでは皆さん。次回もよろしくお願い致しますわ」

アスラナ「ぼ、僕からもよろしくお願いします」

サイト「次回の『後書き』は、俺が司会役を押し付けら………やらせていただくので、次の『後書き』もよろしくな！」

というわけで、レイが復活するであろう時まで、ゲストに呼んだキヤラを次の司会役に、というリレー方式で後書きを進めさせていただきます。

次回以降も、よろしく願いしますね。

それでは、また次回（^^）ノシ

あれから…（前書き）

レイはこれから、どうなっていくんでしょうかね。
まあ、もしかしたら予想できるかもしれないが…。

さて、それでは本文をどうぞ！

あれから……

レイの残留思念が消え去り、悲しみの夜はとうとう明けた。
現在は朝。

シャルロットは気だるそうに起き出す。

今日は虚無の曜日。どんな本を読もうか。

……………そこまで考えて、ふと思う。

何かが足りない、と。

そう考えた瞬間に、シャルロットはよく分からない悲しみに襲われ、
泣いた。

よく分からない悲しみにも関わらず、シャルロットの悲しみはとて
も深かった。

コンコンッ。

ノックの音が響いた。

その軽く響く音の後に、キュルケよ、と声が聞こえたので、シャル
ロットは慌てて涙を拭いた。

そして、涙声にならないように気をつけながら、返事をする。

「……………どうぞ……………」

返事をしたらすぐにキュルケが入ってきた。

「なんかタバサのことを気にかけてあげなきゃいけない気がする……

……………って、泣いてるの?!」

キュルケは、部屋に入った瞬間にシャルロットを見て、驚いたような声を出した。

それに、否定をするように、シャルロットは言葉を返す。

「……………泣いてない」

……………だが、明らかにシャルロットの頬は涙で濡れている。拭いても溢れる涙は止まらない。

そんなシャルロットを見て、キュルケは戸惑いながらも、彼女を優しく抱きしめる。

「大丈夫よ、タバサ。私がついてるわ。……………なにが悲しかったのか話して。つらいことは全部打ち明けちゃった方が返って楽になるのよ?」

キュルケの優しい言葉に何かを感じ、シャルロットは口を開く。

「……………分からない。ただ、何か足りない。かなしい」

だが、その答えは酷くあいまいなモノで、全般的を射ていなかった。

「足りない?……………どういものが足りないの?」

そしてキュルケは、シャルロットの答えに困惑気味だ。

「いつも隣に在った何かが私の記憶から消えた。……………いて欲しかった誰かが、私の中から姿を消した」

分からないながらも、シャルロットは懸命に自分の気持ちを確認し、

答えようとした。

「……………それでも、あいまいな説明であることには変わりないのだが。」

そして、キュルケはそんなシャルロットを見て、分からないながらも心の奥では理解を示し、優しく接する。

「いて欲しかった誰か……？……………よく分からないのに、すごく理解できるわ。あなたはそう思うはずだって、心のどこかで認識している感じ。不思議ね」

ここでキュルケは一旦言葉を切り、シャルロットの涙を拭ってあげてから、もう一度強く抱きしめ、言葉が続ける。

「……………とにかく、悲しい時は泣くのが一番よ。落ち着くまで泣きなさい」

シャルロットは、キュルケに抱きしめられながらひとしきり泣いた。

……………ハルケギニアでレイに関わった者全ての記憶から、レイが存在した事実さえも消し去られたのだ。

レイのことを一番想っているシャルロットでさえ、いつも隣に誰かがいたという事実しか思い出せないでいる。ともすれば、他の人物がレイのことを完全に忘れていくというのは自明の理だろう。

『明日には俺のことを忘れていくはずだ』

この言葉は、レイの言葉。……………レイは自身に関わった人から、自身に関する記憶を消した、ということなのだろうか。

ルイズはサイト一人だけを召喚した事になってるし、ウェールズの命を助けたのはサイトということになってる。

レイの組織した傭兵団『漆黒の風』は、創立者は違う者になってるし、マチルダは自ら志願して入団した事になっている。

ユリアナとアスラナの二人は、魔族であることを隠してシャルロットの護衛役として就く従者のようなものになった。それに関して、シャルロットは二人が魔族だと知っているが、なんの疑問も抱いていない。

聖獣・シファードの宿るブレスレットは、アスラナから渡されたものということになっている。

シャルロットの母親は、特性が『癒し』の緑の魔力を持つユリアナが、自身の魔力を行使して治した事になっている。

…このように、レイのいた痕跡は残っているものの、それは全て違う記憶へと結び付けられ、改変されているのだ。

つまり、レイを覚えている者はこのハルケギニアに、地球に……………全ての世界の中に一人もいないということだ。

あまりにも悲しすぎる結末……………いや、本当に“結末”なのだろうか？レイの復活はありえないのか？

それは、封印されている本人にすら分からない。

あれから……（後書き）

サイト「ん？もう出番かよ？！今回の話、ちょっと短くないか？？
まだ準備終わってねえよ（汗）」

シエスタ「あれ、サイトさん。どうかされたんですか？」

サイト「おっ！シエスタ！！もしかして、今日のゲストってシエスタか？」

シエスタ「ゲスト……？そんな話、私は知りませんけど……」

サイト「そっか。……じゃあ……誰だ？」

シエスタ「台本とかはないんですか？」

サイト「俺も昨日に押し付けられ………やらせていただくことになったので、よく分からねえんだよ」

シエスタ「なんで、『押し付けられた』から『やらせていただく』ことになった『』に変えたんですか？」

サイト「………シエスタ。人にはな、知らない方がいいこともあるんだよ……」（注：サイトは、未だにユリアナのことを恐れているようですww）

シエスタ「そっ、そうなんですか。………そうだ、サイトさん。ゲストの方、いらっしやいませんか、私がゲストになってもいいですか？」

サイト「え？いいの？……でも、ゲストになったら次回の司会役もやらされるらしいぞ？」

シエスタ「それもおもしろそうじゃないですか！……最近、私の出番も少ないですし、『後書き』だけでも活躍したいです！！」

サイト「あー、そういえばシエスタって本文ではあまり出てこないよな。……よく一緒にいるところをルイズに見つかって爆発させられてのに、書いてもらえないとは……」

シエスタ「サイトさんはまだいいですよ。戦ったりして、本文には出てきてるんですから。……私なんて、ほとんど出てないんですよ？はじめにでたのは、結構早かったのに……」

サイト「……なんか……ゴメンな？」

シエスタ「い、いえ！サイトさんが謝ることじゃないですよ……！」

サイト「いや、それでも……」

シエスタ「大丈夫ですよ（そう言いながら、サイトの手を握ってみたり）」

サイト「シエスタ……ん？なんか、嫌な予感がするぞ？」

????「ふふふ、そういうことだったのね……。急いで部屋を飛び出していくから、怪しいとは思ったのよ……」

サイト「るる、ルイズ……！」

ルイズ「で、シエスタと手をつないで何をしてたわけ？」

シエスタ「あ、あのっ、ミス・ヴァリエール！私たちは変なことをしていたわけでは……！」

サイト「そっ、そうだよ！俺たちはなんにもしてない！」

ルイズ「なにかをしていた人ほど『なんにもしてない』って言うのよ。
……覚悟しなさい、駄犬」

サイト「駄犬?!俺、駄犬?!?!」

ルイズ「うるさああい！ホントは私がゲストのはずだったのにいいいい……！」

ドゴオオオオオン!!!!!!!!!!!!!!

シエスタ「サイトさん……あなたのことは忘れません」

サイト「いやいやいや、なんでシエスタまで俺をいじる役に回ってるの???!」

ルイズ「あら、もう復活したのね?（ニッコリ）……じゃあ、もう一回（キラーン）」

ドツカアアアアン!!!!!!!!!!!!!!

……今度こそ、サイト君は目覚めることはありませんでしたと
な。

？キオクとココロ？（前書き）

今回は壁紙の色を変えてみました。

こちらの方がイメージと合っていると思ひまして。

……………まあ、この回限定の色変えですね。

それと、あまりイメージを潰したくない回なので、今回の後書きは
お休みです。

ご了承ください。

さて、それでは本文をどうぞ！

?キオクとココロ?

Side Charlotte (シャルロット・サイド)

あれから、しばらくの時間が経った。何故か虚ろな気分では過ぎてゆく。

この気持ちの原因は分からない。ただ、必要な何かが無い。……
……いるべき誰かがいない。

日常生活にはなんの支障もない。普通の態度で普通に生活している。表面的にはいつも通りの日々。心の変化は誰にも気付かれていないはず。

……だけど、私の心の奥底には悲しみが渦巻いている。
まるで、私の心の中にある記憶のパズルが、大切な一欠けらを失ってしまったかのように……。

悲しみというものは、いつもよく分からない。

悲しいのに、泣いてスッキリすることもあれば、泣けばさらに悲しみを増すこともある。

だけど、今の状態は？何に悲しんでいるのか？明確な理由は？私の記憶は？……大切な人への想いは？それさえも、消えてしまいそうで怖い。

……今の私の悲しみは、今までのものより厄介だ。悲しみだけでなく、記憶を失う怖さにも襲われる。

私は、心の奥底に眠る『あなた』を忘れたくないのに。

耳に付いたイヤリングが、妙に私を切なくさせる。
イヤリングに嵌っている蒼い石。その石が纏う青い魔力。そこからは『大切なナニカ』を感じ取れるようで…… “もう求めることすら叶わない悲しみ”を感じる。
けれど求めてしまう。その石のどこか懐かしい魔力は、私が求めてやまないナニカを示しているようで……。
やはり、私はこのイヤリングを外せない。

私が毎日を過ごしていると、ルイズの使い魔が無事に生還したという情報が入ってきた。

そのことは素直に良いことだと思う。

ルイズは目に見えて明るくなった（少し不機嫌だったのは何故だろう？あの胸は反則！とかいう言葉が聞こえてきた）し、一部の生徒もそれを祝福していた。

……… だけど、それに嫉妬してしまう自分がある。

彼女の大切な人は帰ってきたのに、私の大切な人は記憶からも消え去った。誰だったかとも思い出せない。どんなことをしてきたかとも思い出せない。……… ただ、心の奥底に彼は眠っていた。

でも、それだけ。私の悲しみは消えない。

今度はルイズの使い魔がシュヴァリエになり、アンリエッタ女王の近衛騎士隊、水精霊騎士団オンディーヌの副隊長となった。（隊長はギーシュがやるようだ。シュヴァリエとして貴族になったとはいえ、元平民の彼が隊長だとナメられるから、という理由でそうなったとか）70000の軍勢を止めたことを正式に認められたらしい。何でも、ア

ルビオン側の将軍に査問を行ったところ、彼のことの証言をとることが出来たとか。

……………正直、どうでもいい。

シュヴァリエの称号は、もっと他の誰かが貰うべきものではないかと思う。

例えば、記憶から消えたあの人。私の中にあの人の記憶はなくても感情はある。私の好きだったはずの人は、とてもすごいことをいつもやっていたはず。

それを証明することも出来なければ、本人もいない。そのうえ、私の記憶にすらないのだから、抗議は無意味だけど。

……………やはり、私の心の奥底で感じる悲しみは消えない。

せめて、私の心まで壊してくれれば、苦しまずに済んだのに。

S i d e O u t .

Side Rey（レイ・サイド）

俺はまたもや約束を破ってしまった。弱い人間だ、俺は…。

どれくらいの時間が過ぎたか……。

想像もつかないほどの年月が経った気さえする。

いや、まだ一時間も経っていないのかもしれない。

……もう、時間の感覚は消えた。

この結晶内ではすることがない。

意識を闇に落とすか、ただ思考の海に身を預けるか…それだけしか出来ない。

だが、それもいいのかもわからない。俺の今までに対する罰としては最適だ。

家族を護れなかった事に対する罰だ。ミラーナで、リーネを……あの村の皆を護れなかった事に対する罰だ。

……シャルロットとの約束を守れなかった事に対する罰だ。

心残りなのは、やはりシャルロットのことだ。

あいつから俺の記憶は消した。俺のことをそこまで想ってくれているとも思わない。

思わないのだが、もしあいつが、心の奥底で俺が消えたことを悲しんでくれていたとしたら、俺は俺を赦せない。

今でも俺は、記憶を消すべきではなかったのではないか、と思う。記憶とは、その人物の心を形成する要素と成り得る。いや、心そのものに近い、と俺は考えている。

……だからこそ、記憶を消すことは心の一部を消すことに繋がっていると考えられることも出来る。

それなら、それがどんな記憶であろうと、消すべきではなかったのかも知れない。

……やはり、俺の罪は大きい。

他にも、心残りはたくさんある。

貴族に虐げられてきた平民たちを助けることが出来なかった。

シャルロットをもっと笑わせてやりたかった。

サイトはもっと強くしてやるべきだったかもしれない。

魔王は一体誰が止める？俺がやらなければならぬはずなのに。

シャルロットやアニエスの過去の憎しみや苦しみは、俺が取り去ってやるべきではなかったのか？

トリスティンの改革には、口出ししてやった方がうまくいったのか？シャルロットの母親だって、治したとはいえ未だに安定はしていない。

ルイズの姉の病気は、俺が治した方がよかったですのではないか？

残りの虚無の使い魔の情報が入っていたな。あれは何とかしておいた方がよかったのか？

虚無のハーフェルフでありマチルダの義理の妹であるティファニアとは、接触を試みておいた方がよかったのかも知れない。

……シャルロットの悲しみは全て取り除いてやりたかった。

シャルロットの笑顔がもつと見たかった。
まだ、シャルロットの傍にいてやりたかった。
いつまでも、シャルロットの傍で存在し続けたかった……………。

……………だめだ。これは俺の罰。

家族を護れなかった罪、リーネを護れなかった罪、シャルロットとの約束を破った罪に対する罰なのだから。あんなことを望む資格など、俺にはない。

……………だが、せめて……………せめて、永い時が経ち、封印が解けた時にも、シャルロットのことを覚えていたい。

意識を保ち続ければ、それは叶わないだろう。さすがに、永い間、意識を保つたままで記憶を残し続けることは難しい。

だから……………しばらくは意識を闇に落とさせてくれ……………。

スレイプニールの舞踏会（前書き）

今回の後書きは、諸事情により時間がないので、ナシにさせていただきます。

ご了承ください。

………というか、あの後書きに需要はあるんでしょうか？

さて、それでは本文をどうぞ！

スレイプニールの舞踏会

さらに時は過ぎ、そろそろ新学期が始まる。

それに合わせて新入生歓迎のための舞踏会、『スレイプニールの舞踏会』が開かれるようだ。

「なあ、スレイプニールの舞踏会ってなんだ？」

オンディーヌのメンバーで集まっている時、サイトはオンディーヌメンバーの一人であるマリコルヌに質問した。

「ああ、そっか。君は知らなくて当然だな。スレイプニールの舞踏会ってというのは、普通の舞踏会じゃなくて仮装して行われるものなんだ」

「仮装？普通にありそうじゃねえか？」

サイトの疑問にオンディーヌの隊長、ギーシュが答える。

「ただの仮装じゃないんだよ。魔法を使って仮装をするんだ。『真実の鏡』というマジックアイテムがあつてね、それを使えばその人の一番懂れているものに化けることが出来るんだ」

「へえ、なかなかおもしろそうだな！」

サイトたちはそのあとも大いに盛り上がった。

一方、タバサは自室でユリアナたちと一緒にいた。

「明日から護衛を休んでもよろしくて？………母親の命日ですの」
「そ、そうなんだ。母様は僕を産んだ時に死んじゃったから………は、墓参りに行って、しばらく滞在したいんだよ」

以前記したように、この二人は天才的な力を持っている。………だが、そのせいで二人の母親は死んだ。二人の暴力的なまでに莫大な力に、出産時の母親は耐え切れなかったのだ。

「…分かった」

この時、魔族の二人が出て行くという情報を得て、ほくそえんでいる者がいることに、この場の誰も気付かなかった。

いよいよ、スレイプニルの舞踏会が始まる。
そんな中………。

「ああ！どっしりしよう！」

マリコル又は何故か悶えていた。

周りにはオンディーヌのメンバーがいる。

そして、マリコル又が悶えている光景にかなりひきながら、サイトはマリコル又に話しかける。

「…どうしたんだ？」

「このままじゃ僕、美少女に化けてしまいそうなんだよ！」

マリコルヌの言ったことを一同は想像し……………吐いた。

「吐いたあああああ？?!」

いや、まあ、実際は吐いてないけど。

……………吐く寸前までの吐き気に襲われたのだ。

そんなこんなで（どんな略し方だよ！）スレイプニールの舞踏会は幕を開けた。

アンリエッタやウェールズも『真実の鏡』を使用したうえで参加するらしい。

ここで、誰が何に化けたのか説明しておこう。（サイトは『真実の鏡』を使わないようだ）

・ ギーシュ ギーシュ。（僕が一番美しいのさ！よって、僕が化けるのは僕なのだよ！）…ナルシストめ！

・ ルイズ カトレア。ルイズの憧れは、次姉であるカトレアなのだ。ちなみに、ルイズはサイトに、化けていても絶対に見つけ出しなさい！というお願い（いや命令）をした。

・ キュルケ 自身の母親。（やっぱり、私の一番の師匠だもの。

魔法においても、恋愛においても、ね）

・ マリコルヌ、オスマン 表面的には美少女。……………元の姿を想像すれば、軽く吐ける。

・ その他大勢（女子） アンリエッタ率が異様に高い。

・ その他大勢（男子） ウェールズ率が異様に高い。

このようになってる。……………お気付きかもしれないが、シャルロットについて書かれていない。いや、いないのだ。しばらく前

からシャルロットは姿を消している。

こうして、にぎやかな舞踏会は楽しく進行される。

「さてつ、と……俺もルイズを探しに行くかな」

『相棒、絶対に探し出せって言われてたもんな！』

サイトは早速ルイズを探すために会場を回り始めた。

数分後……………。

「い、いねえ……………。マジでどこにいんだよ」

『ケケケツ、ヤバーんじゃねえか？桃色ルイズに怒られるぞ？』

デルフリンガーからの脅し（もどき）が入り、サイトは顔面蒼白だ。

「や、ヤベエ。マジでこれはヤベエぞ。どれくらいヤバイかって言うと、マジヤバイ」

サイトは慌てすぎた。

さらにしばらく、探し続けるサイトだったが、いきなり明らかに乱れまくりの『気』を感じた。

「???…………俺でも分かる『気』の乱れ?…………誰だよ、これは!?!」

サイトは、乱れる『気』の方向へと駆ける。

会場から出て、広場まで来たサイトに後ろから向かってくるのは、数十本の氷の矢。

サイドステップでかろうじて横に避けたサイトが後ろを振り向くと、

そこには蒼い髪の少女が立っていた。

「た、タバサ???!」

サイトの目の前にいるのは、瞳に光の浮かばない、虚ろな表情のシャルロットだった。

激しい『気』の乱れを見せていたのは彼女だったのだ。

「……………標的、発見。ただちに殺す……」

無機質に紡がれたその言葉。

……………明らかにいつもとは様子が違った。

「お、おい、タバサ！どうしたんだよ?!なんで俺を攻撃するんだ

!?!」

「……………命令。……………早く死んで」

話し方は、いつもとあまり変わらないように聞こえる。……………だが、異質な何かがある。その意思に介入しているような感覚だ。その異質な何かは『気』の乱れの原因なのか? と、サイトが思っていると、またもや氷の矢が飛んできていた。

「うお!!危ねえっ!!動体視力鍛えてなかったらヤバかったな……

……………あれ?俺っていつ動体視力なんか鍛えたっけ?」

レイによって消された記憶に困惑するサイトだが、その思考はすぐに中断された。……………シャルロットから新しい魔法が放たれたのだ。

だが、サイトは余裕で避けた。

「ん？アイツとの訓練の時より攻撃が単調じゃねえか？……って、アイツって誰だよ？！」

サイトは自分で言っつて、自分で困惑していた。

レイの記憶消去は完璧に近いが、感情までは消しきれない。………そのせいで、シャルロットの次に関係の深かった（親友として）サイトは残った感情によって浮上した記憶の断片を無意識に使っていたのだ。

そんな状態に困惑しながらも、サイトはシャルロットを止めるためにガンダールヴを全開にして近づこうとする。

………だが、一つの声があがることによってその行動は停まる。

「何を手こずっている？」

声が発せられた方に目を向けると、ガーゴイルが桃色の髪を煌かせた少女を抱えて空に浮かんでいた。

「ルイズ……！」

「さ、サイトお！」

そう、捕らえられている少女はルイズだ。

「くっそ、タバサ！そこをどいてくれ！！頼むっ！！！」

「……………」

シャルロットは何も答えず、動きもしない。

「む？洗脳が解けかかっているのか？………まったく、魔族の洗脳なのに、使えない」

ガーゴイルから聞こえる声は女性の声。

シャルロットは知らないが、以前にサイトたちが対峙した経験のある、『神の頭脳・ミヨズニトニルン』の声だった。おそらく、ミヨズニトニルンによって操られているゴレムなのだろう。

……いや、それよりもガーゴイルから発せられた『魔族』という単語。

ミヨズニトニルンは……いや、その主人であるジョゼフは、魔族と手を組んでいるということなのだろうか？

「魔族……？まさか、まだ魔族が？アイツが倒したはずじゃなかったのか？……だからアイツってだれなんだよ！なんか、スゲーもやもやする！！」

サイトはそう言いながらも気を取り直し、ルイズ救出のためにガーゴイルへと突進する。

だが、空を覆いつくすかのような、無数の影が上空に浮かんだ。…

……その全てがガーゴイル。さすがのサイトもここまでか……。

そう思われた。だが、今のサイトは一味違う。

記憶を消されたとはいえ、『レイがいた』という事実は消えていないのだ。

つまりサイトには、レイとの特訓の成果が確実に残っているのだ。

突如出現したガーゴイルにも慌てず、サイトは固まっているシャルロットを尻目に、ルイズを抱えるガーゴイルだけを目指して突進した。

ガンダールヴを全開で発動させ、学院の壁や、増援側のガーゴイルを足場にして跳躍し、ルイズを抱えるガーゴイルに肉薄する。

「俺だつていつまでも弱いわけじゃないんだ！！アイツみたいにはなれなくても、違う形で近づくことは出来るんだよ！！」

サイトはそう叫び、ガーゴイルを一刀のもとに斬り捨てた。なんとか、ルイズを奪還し……………そして、慣性の法則に従い、自由落下を始めた。

「わあああ！！ここまで考えてなかったあああ！！！！」

やはり、成長したとはいえ、サイトはサイトのようだ。

「ちよ、しつかりしなさいよ！！……………それに、アイツって誰よ！！」「知らねえよ！！なんか言葉が口について出たんだ！！……………つて、地面が近い！！ヤバイいいいい！！！！」

「えとえと、こうなったら私が……………！！《レビテーション！》」

ルイズが咄嗟に唱えた魔法。それは爆発する……………かと思われた。だが、その魔法は爆発することなく成功し、ルイズを抱えるサイトは、無傷で着地することに成功した。

「成功した！！成功したわ！！！！」

「おおお！！ルイズ！！やったな！！！！」

そう、虚無の担い手は、虚無に覚醒した後は、系統魔法以外の魔法……………『コモンマジック』なら使えるようになるのだ。二人は全力で喜んでいた。

……………が、現実はそこまで甘くない。ガーゴイルはまだまだ無数に残っているのだ。

「あああ、さすがにこれはキツイ」

「そ、そうね。これはキツイわ」

半ば諦めがかったサイトたち。

しかも、その諦めを増長させるような大きく、真っ黒な影が一つ。

「サイト君、ミス・ヴァリエール！大丈夫かね？」

その影……巨大なと飛空船から響いてくるのは、学院が襲われた日以来亡くなったことになっていた、コルベールのものだった。

「コルベール先生?!」

そう、サイトたちはコルベールが生きていたという事実を知らないのだ。

それも当然。シャルロットは、コルベールを助ける際に、キュルケにだけ生きている事実を告げたのだ。（知つての通り、レイにもあとで話したが）

「久しぶりだね、サイト君。実は、殺されないようにミス・ツエルプスターの領に匿ってもらい、その間にこの船……オストラント東方号を造っていたのだよ」

「そんな呼び方じゃなくて、キュルケって呼んで、ジャン」

コルベールの本名……ジャン・コルベール。

というかキュルケ、何故船に乗り込んでいる？先ほどまで舞踏会の会場にいたはずなのに……。「愛の力よ」……そうっすか。もう何も言いません。

ここで少し説明を入れておこう。

学院が賊に襲われた際、コルベールはキュルケを護った。キュルケ、

惚れる。

つまり、今はキュルケがコルベールに詰め寄っているのだ。

以上、閑話休題。

話を元に戻そう。

東方号は、その船体に積んだ武器で、次々とガーゴイルを打ち落と
してゆく。

「ルイズ！今の内に虚無魔法で良いやつ探してくれ！『始祖の祈祷
書』読めば、またなんか呪文が浮かんでくるかもしれない！」

「分かったわ！」

ルイズは答え、常にふところに入れている『始祖の祈祷書』を取り
出す。

もちろん、『水のルビー』も常に装着している。

ルイズの詠唱が辺りに響き渡る。

当然、『神の盾・ガンダールヴ』として、サイトは全力でガーゴイ
ルからルイズを護っている。

「……………《デイスペル！！》」

掲げられたルイズの杖先が眩く光り、全てのガーゴイルたちは崩れ
去った。

サイトたちの防衛戦は、ここで終結したのだった。

姿はなかった。

だがこの場には、すでにシャルロットの

私はあなたに逢いたい。(前書き)

レイがいないと、ここまで話を進めるのが難しいとは…。

思い返せば、主人公ばかり喋ってた気がする……。

でもまあ、しばらくは頑張ってレイなしで進めていきますよ(笑)

それでは、本文をどうぞ！

私はあなたに逢いたい。

翌朝。

アンリエッタとウエールズが王宮へ帰ることになった。

その際、アンリエッタとウエールズから食事に誘われたルイズは、ミヨズニトニルンの襲撃について話した。

そして夜。

この場には、サイト、ルイズ、キュルケ、ギーシュ、モンモランシー、マリコルヌの六人が集まっている。

そしてサイトは、ずっと疑問に思っていたことをキュルケに訊ねる。

「なあ、タバサは……どうしちゃったんだ？」

親友であるキュルケになら答えられるのではないか……そう思っ
ての質問だった。

「分からないわ。……いや、もしかしたら任務を押し付けられた
のかもしれないわね」

『任務』……なんの任務？と思ひ、困惑する一同。

「そろそろ皆には話すべきかもしれないわね。……本人がいないの
は気がひけるけど」

キュルケは、シャルロットの過去について、知っていることの一部
始終を説明した。

……シャルロットの悲しき過去を。

「まさかタバサが、ガリアの王族だったなんて……」
「そんなことよりも、タバサが危ないんじゃないかい？」
「ああ、タバサは操られてたっぽい。『氣』の乱れはそのせい……
だと思っ」

サイトは、自身無さ気にギーシュの言葉をつないだ。

「誰に操られていたの?!」

「ミヨズニトニルンが『魔族』がどうとか言ってた。……だから、
ガリアと内通してる魔族……かな？」

「じゃあ、今はガリアに拘束されているって言うの？」

「そ、それはかなりマズインじゃないか」

ルイズやモンモランシー、マリコルヌも慌てていた。

「タバサを……タバサを助けないと!」

「そうね。友達が困っているんだもの!」

「じゃあ、女王様に許可をもらって、すぐにガリアまで向かおう!」

こうして、サイトたちは一旦、王都・トリスタニアにある王宮へ向
かうことになった。

嫌だ。何故、私はサイトを襲ったの？

あんなことやりたくなかったのに。抵抗したら体が動かなくなった。そもそも、この部屋はどこ？分からない。それに何故、私は操られていた？

「気付かんかったか？ウチの魔法にやられたこと」

今まで誰もいなかったのに、目の前には濃い紫色の髪を長く伸ばしている少女が立っていた。

こんな人は知らない。……この『気』は…魔族？

「……誰？」

「ウチは第三魔法師団の副隊長、『隠密』のシエラや。ルナルト隊長が昇進したから、ウチは隊長代行みたいなもんやね。……まあ、ルナルト隊長はもう死んだけど」

独特な訛り方で喋る魔族だ。……いや、そんなことよりも、魔族と相対するのはマズイ。

「あー、逃げようとしても無駄やで？……アンタはもう、ウチの支配下やから」

「……どういうこと？」

「アンタの心は私が握つとるようなもんや。それに、聖獣が宿つ取るブレスレットも取り上げた。だから、アンタはウチに逆らえん。そういうことや」

逆らえない…？

有り得ない……いや、魔族は全てが規格外。有り得るかもしれない。

嫌だ。

「そない驚かんでもええやん。どうせアンタは、ヤツをおびき出すためのエサなんやから、ヤツが来るまで死にはせんよ?」

ヤツ?.....それは誰?

心を消さないで。

「なんか言ったらどうや?ウチだけで喋ってバカみたいやん?.....
反応薄い。あのエルフみたいや」

「.....ヤツというのは、誰?」

私は、エルフのことなんてどうでもよかった。

「ああ、そうやったな。アンタ等は記憶を消されとったね。.....ま
あ、ウチも魔王様に助けられんかったら、ヤツの記憶は保てんかっ
たやろっけど」

ヤツ.....『あなた』のことなの?

私は『あなた』に逢いたい。

「ヤツというのは?」

「なんでウチがそんなこと教えなアカンの?自分で思い出したらど
うや?」

思い出せたら苦労しない。

だけど『あなた』に逢うことは叶わない。

「思い出せない」

「甘えんなや。教えるわけないやん。ウチはそこまで親切やないよ？……だいたい、ウチはアンタをさらった敵や」

それは確かにそうだ。

敵に捕らえられているということは、もう私は助からないのかもしれない。

まだ、『あなた』と逢っていないのに。

「急に黙り込んでどうしたんや？なんか反応示しいや」

いつの間にか、私は動かなくなっていたみたいだ。

助けて。

「おかしい。ウチの洗脳は解けてるはずなのに」

そんなこと言われても、私は動きたくない。

助けて、『イ』……『レ』……『イ』……！

「助けて！……！」

思わず、私は声を出していた。

「そんなこと言っても無駄やつて。……でも、そんなに苦しむんやったら、また洗脳したるわ。感謝せえよ。……まあ、心が壊れて治らんくなっても知らんけど」

濃紫の長い髪を揺らして、魔族が近づいてくる。
ああ、私の心はもう……………。

諦めかけた時、私の目の前には
。

S i d e
O u t
.

私はあなたに逢いたい。(後書き)

ルイズ「さて、後書きをサボり続けてきたわけだけど、そろそろ復活するわよ」

シエスタ「ミス・ヴァリエール、サボっていたわけではなく、諸事情で……」

ルイズ「その『諸事情』つてのが怪しいのよ!……ていうか、なんであなたがここにいるのよ!？」

シエスタ「先回の後書きでゲストとして働いたのは私です!ですので、私が司会役をやってもいいと思いませんか?!」

ルイズ「でも、正規のゲストは私だったわ。つまり、今回の司会役は私よ」

ルイズ・シエスタ「~~~~~つ!!!」「(にらみ合い)

????「なにやつとんの?ウチがゲストに呼ばれたんやから、ちゃんと出迎えんとアカンのやないの?」

シエスタ「あつ、あなたは!……今回登場した似非関西弁の魔族さんですね?!」

ルイズ「確か名前は……セラ?」

セラ?「似非関西弁やないからね?この喋り方は、母方から代々受

け継がれてきた、伝統的な喋り方や!!それと、ウチは『セラ』やなくて『シエラ』やからね??!!」

ルイズ「そうそう、そんな感じの名前だったわ」

シエスタ「ミス・ヴァリエール、名前を間違えるなんて、似非関西弁さんに失礼ですよ?」

シエラ「いやいやいや、アンタもかなり失礼やからね??!!」

ルイズ「そんなことはどうでもいいわ」

シエスタ「そうですね。今は、どちらが司会役をするか、についてです」

シエラ「なあ、ウチってゲストで合つとるよね??!!」

ルイズ「じゃあ、どちらが司会役やるかは、じゃんけんで決めましょ」

シエラ「無視すんなや!!」

シエスタ「望むところです!!」

シエラ「だから、無視すんな言うとるやろ!!!!」

ルイズ・シエスタ「さ〜いしよ〜はグー!じゃ〜んけ〜んポンツ!!」

シエラ「無視すんなああ!!!!!!」

シエラの妨害により、じゃんけんによって勝敗を決めることは出来なかった

ルイズ「さつきからなんなのよ！」

シエスタ「邪魔しないでください！」

シエラ「いや、ウチ、ゲストやからね？とりあえずもう一回言っけど、ウチ、ゲストやからね？！この扱いの酷さはなんやねん！！！」

ルイズ「ゲストがいても、司会役がいなかったらこの後書きは進まないの！」

シエスタ「そうです！だから、こんな壮絶な戦いを繰り広げているんです！」

シエラ「アンタらはバカか？！そんなの、二人でやったらええやん！それに、すでに二人とも後書きに二連続ででてるんやから、どっちが司会役でも関係ないやん！！！」

ルイズ「確かに、私たちは二連続で出て、それなりに目立ったわ」

シエスタ「それでも、絶対に負けられない戦いが、ここにはあるんです！！！」

シエラ「いや、アンタらは今からどんな戦いを繰り広げるつもりなん？！たかが司会役をどちらがやるか、ぐらいの争いでなんでそんな壮絶な戦いになっとなねん！！！」

ルイズ「……………そういえば、そうね」

シエスタ「つい、熱くなってましたね」

シエラ「おお！分かってくれたか！！いやあ、ウチの言葉が通じとつたみたいで、嬉しいわ〜」

ルイズ「だけど、こんなにポケ路線に入ってしまったのにも、理由があるはずよ！」

シエスタ「そうですね……………いつもとは違うなにかがあるはずですよ」

そして、二人はシエラの方をちらつと一瞥する

シエラ「なに？ウチのせいやって言いたいわけ？？どんなヤツ当たりや！！！！」

ルイズ「それよ、それ！！」

シエラ「なにが『それ』なんや？！！」

シエスタ「その素早いツツコミです！！それがあるから、私たちはポケちゃうんですよ、きつとー！」

シエラ「責任をウチになすりつけんでもええやん！！そして、ウチはツツコミ役なんて絶対イヤやからね？？！！」

ルイズ「でも、すでにツツコミ役として定着してきているよつな…」

シエスタ「本文でも、この先ツッコミ役をやるんでしょうっ。」

シエラ「やらんわ！！勝手に決めんなや！！！！」

ルイズ「いや、これはもう決定事項ね」

シエスタ「そうです！絶対にやります！！」

シエラ「やらん言うつとるやろおお！！！！！！」

ルイズ「でも、ツッコミ役としてはつるお過ぎるわね」

シエスタ「要訓練、ですね」

シエラ「なんでツッコミ役になるとも言っていないのに、ダメ出しまでされなアカンの？？！！」

ルイズ「そりゃまあ、貴重なツッコミ役なわけだし？」

シエラ「認めてないからね？！！」

シエスタ「ツッコミ役の方には、頑張ってもらわないと、話が進まないんですよ」

シエラ「だから、認めてない言うつとるやろおお！！！！」

ルイズ「やっぱり、ちょっとつるさいわね」

シエスタ「そうですね。だんだん、終わりにしたくなってきました」

シエラ「うるさくさせてんのは誰や思つとるん??！」

ルイズ「私も、終わらせたくなってきたわね」

シエラ「また無視するん?!」

シエスタ「じゃあ、終わらせましょう」

シエラ「なあ、ここでまた無視って、これなんのイジメ??！」

ルイズ「じゃあ、読者の皆さん、また読んでね」

シエスタ「私からも、よろしく願います」

シエラ「勝手に終わんなああ!!！」

シエラの叫びは、いつの間にか誰もいなくなったこの場にこ
だました

シエラ「って、なんでいなくなつとるんや!!………はあ、なん
か明日の司会役も憂鬱になってきたわ……。でも、やるからには頑張
らんな。………というわけやから、明日の後書きも読んでな！」

はい、シエラのキャラはとても使いやすいです(笑)

さて、それではまた次回にお会いしましょう(^^)ノシ

救出に向けて（前書き）

……………すみません。

今回も後書きはナシにさせていただくことにしました。
とにかく疲れまして……………。

……………まあ、友達と遊び過ぎただけなんですけどね（笑）

それよりも、本文の問題です。

いつにもまして駄作な上に、このままでは本当に一日一投稿が出来なくなる（汗）

……………ここで愚痴ってもしかたありませんね。

それでは、本文をどうぞ！

救出に向けて

一方、サイト、ルイズ、キュルケ、ギーシュ、モンモランシー、マリコルヌ、さらに残りのオンディーヌメンバーは、大いに困惑していた。

「大変なのね！助けてなのね！！お姉様が大変！！！」

蒼髪の……シャルロットより大きめな少女にこんなことを言われていたのだ。

「サイト、誰よ、この子」

ルイズは心なしか不機嫌な声で訊ねた。……この少女が、サイトと知り合いのように接していたからである。事実、先ほどの言葉はサイトに向けられたものようだった。

「知らねえよ！……お前、誰だよ！？」

サイトはルイズによる爆発が怖くなり、慌てて蒼い髪の少女に問いかけた。

「私？私はイルククウなのね……って、そんなこと言ってる場合じゃないのね！お姉様が大変なの！」

この場の誰もが聞き覚えのない名だ。

……マリコルヌが、「ストラアアイク！！イルククウちゃんか！！君は僕の運命の人に違いない！！君、僕と（これ以降はあえて記しません）」と言っているが、気にしないでおこう。

ふと、ギーシュは、疑問に思ったことを質問した。

「では、イルククウ。……………君の言う『お姉様』とは一体、誰のことなのかね？」

「お姉様は、あのちびすけのことなのね」

即答したイルククウ。

だが、『ちびすけ』では、誰も分からない。
代表してサイトが疑問を呈する。

「いや、ちびすけって言われても分かんねえんだけど」

「ちびすけは、ちびすけなのね。名前はタバサって名乗ってるのね」

一同驚愕。

後に困惑。……………タバサの妹（タバサのことをお姉様と呼ぶから）
がこの子？という疑問だ。

背の高さが圧倒的にイルククウの方が上なのだ。（正確には背だけ
ではなく、むん……………ここは自重しておこう）

一同にとっては信じがたいものだった。

「……………タバサの……………妹？……………ホントに？」

「どう見てもタバサよりも年上に見えるんだけど……………」

そんなことを言われ、イルククウは慌てた様子で答える。

「そ、それは……………ええ〜つと……………そう！！義理の妹なのね！！」
「な〜んか怪しいわねえ」

キュルケが、値踏みするような目でイルククウを見ながら言った。

「あ、怪しくないのね。……って、そんなことよりもお姉様がマズイことになってるのね！！居場所を教えるから着いて来てのね！！！」

「居場所知ってんのか??！」

サイトは声を張り上げた。

「知ってるのね！……なんたって私はお姉様の使いm……なんでもないのね」

「使い……なんなのよ？」

ルイズは疑問を呈するが…。

「な、なんでもないのね！」

慌てて否定されてしまった。

「いや、使い魔って言ったんだろ？」

否定も虚しく、サイトに言い当てられてしまったが。

そう、『イルククウ』という名前は、シルフィードの本名であり、今の姿は韻竜だからこそ使える『先住魔法』によって、人間の形態に変えられているに過ぎないのだ。

「グウ………そうなのね。私はお姉様からはシルフィードって呼ばれてる風韻竜なのね」

とうとうバラしてしまった。

もともと、韻竜であることを隠していたのは、韻竜が珍しいために

アカデミーに捕まって研究対象にされる可能性があったからだ。……だが、このメンバーならばアカデミーにバラす人間はいないはず。バレても大丈夫だろう。

以上、閑話休題。

話をもとに戻そう。

人間の姿でいるのを止め、イルククウ……いや、シルフィードは、竜の姿に戻る。

「シルフィード！！韻竜だったのね?!」

ルイズは驚きにより、大声で叫んだ。

「シルフィード、タバサの居場所は知っているのかい？」

比較的早く驚愕状態から立ち直ったギーシュがシルフィードに問いかけた。

するとシルフィードは、きゅい！と鳴き声をあげ首を縦に振って肯定の意を示した。

「なら、俺たちをそこまで乗せていってくれ！」

「ダメよ！まずは、姫様に許可をもらいにいかない！」

「ガリアは他国で、さすがに無断で行くのはマズイもんな……」

上からサイト、ルイズ、オンディーヌメンバーの一人、レイナールの言葉だ。

サイトがすぐにも助けに行こうとし、ルイズが待ったをかけ、レイナールが冷静に補足説明を入れた。

「なら、早く王宮に許可をもらいに行こう!」

サイトの言葉により、今度こそタバサ救出作戦が開始されるのだった。

王宮にて。

サイトたち一同は、女王であるアンリエッタとその婚約者であるウエルズに、ガリアへ向かう許可を取ろうと躍起になっていた。だが……。

「なりません。アルビオンとの争いが片付いていない今、他国をこれ以上刺激することは危険なのです」

「……君はシュヴァリエとして、貴族の位を持っているんだ。そういう身分の者が相手国の了解もなしに入国すると、マズイんだよ。『この者は、国から何らかの命を受けて、任務で入国しているのではないか、そして勝手に入国するということは戦争をしかける準備をしているのだ』と取られても仕方ないことなんだよ」

アンリエッタは否定し、ウエルズは補足で説明を入れ、暗に否定した。

「だけど!タバサは苦しんでる!!助けないと!!!」

「……それでも、ガリアに入国の申請を行わずに出立することは許可出来ません」

「君は“貴族”としての責任を持って行動してもらわないといけな

いんだよ……」

サイトの叫びも虚しく、否定されてしまった。

「そうよね……。戦争の種を作るわけにはいかないわ……」

「確かに。……僕としても反論は出来ない」

「正論だからね……」

“貴族”として在り続けようとするルイズや、他数名の者たちにもその意見には納得せざるを得なかった。

「……それなら俺は貴族を辞める。このマントはお返しします。

……よく分からないけど、俺はタバサを護ることを“アイツ”に任された気がするから」

「どづいこと？」

疑問を呈したのはキュルケ。

シャルロットの状態から何かの違和感を感じていたキュルケは、サイトの『任された』と言う言葉に引っかけりを感じたのだ。

だからだろう。“アイツ”とは誰か？という質問をしなかったのは。

「分からねえ。それに“アイツ”から直接頼まれたわけでもない……と思う。けど、俺は心の奥底に眠ってる“アイツ”の意志が、消えてしまった“アイツ”の代わりにタバサを護ることを、俺なんかに託してくれた気がするんだよ」

不器用で纏まりのない言葉ではあるものの、レイと過ごした者たちには“アイツ”の存在を何となく感じられ、少し黙ってしまった。

次に口を開いくのはルイズだ。

「……………それでも、貴族を辞める必要はないわ。託されたといっても、あんたがそこまでする必要はないんじゃない……。許可をもらってから助けに行きましょう?」

「……………それだけじゃねえよ。タバサだって大事な友達なんだ。あいつは苦しんでるはずなんだ。だから、すぐに俺は助けたい。………
……………姫様、マントは返しますね」

そしてサイトは反対意見が出る前に部屋から飛び出て行ってしまった。

「サイト……。僕は君の心意気に感動したよ!決めた、僕もやりたいことが出来ないのなら貴族を辞め「ダメよ!」…え?」

否定をしたのはモンモランシー。

「そうやって無茶をして!あなた一人の問題じゃないのよ?!」

「モンモランシー……。それでも僕はやらなきゃいけないことだと思うんだよ。だから僕もサイトを追いかける!」

「でも!……………それじゃあなたが……!」

モンモランシーは内心の危惧を覗かせた。

その言葉を聞いたギーシュは、それでも行くために口を開く。

「モンモランシー、男にはね、やらなければならない時があるんだよ。それに僕は、大切な友人をさらわれて黙っていられるほど、お人好しじゃないんだよ。……………だからせめて、僕を信じてくれないかな?絶対に失敗せずに戻ってくるから」

レイが来たことによる違いはここにも現れた。

ギーシュはこんなことを真剣に言えるほどに成長していたのだ。その言葉に、モンモランシーだけでなく、ルイズや他のメンバーにも迷いが生じた。

その迷いに共通するのは、サイトを追うことが正しいという方に傾いているという点だ。

「陛下、そういうわけで貴族を辞めさせていただきます」

ギーシュは何か言いたそうなモンモランシーを尻目に、優雅な仕草でアンリエッタにマントを差し出した。

「これで私はもう貴族ではありません。ガリアへ向かって問題はありませんね？……………僕はサイトに着いていくよ。皆はどうする？」

捨て台詞を吐き、ギーシュはアンリエッタの命令で制止してくる衛兵を振り切って、サイトの後を追いかけて行った。

もともと国が関係ないキュルケはもちろん、最後まで迷っていたルイズ、マリコルヌ、モンモランシー、ほとんどのオンディーヌメンバーも後を駆ける。

サイトたちが言う感情論も少なからず理解出来たアンリエッタ、ウエルズは、それ以上の制止は出来ず、全員に逃げられてしまった。……………当然、逃げた者はマントを放棄している。

「あんなことを言われたら、強く否定は出来ませんわ……………」

「確かにね……………。でも、あの子たちのためにも止めるべきだよ。ガリアへ行つて、無事に救出が成功する可能性は低いから。だから国境を見張らせよう」

「……………そうですね」

サイトたちが逃げ去った後にも、やはり危惧の念は消えなかった。

“彼女”へと続く扉（前書き）

ついに…ついにアイツが……！

アイツがふつかて（ry

…あまり言いすぎてもネタバレ（これでも充分ネタバレかもですが）
になるので、略しました。

さて、今回もよろしくお願い致します！

“彼女”へと続く扉

王宮から逃げ出したサイトは、追ってきた一同と合流し、王宮の外に控えていた竜型のシルフィードに乗って移動し、キュルケの提案で、とある潰れた空き宿の一室に潜伏していた。

「なんか勢いで貴族やめちゃったけど大丈夫なのかな？」

マリコルヌが今さらなことを言い出した。

「気付かれずにタバサを救出すれば、お前らはまた貴族に戻してもらえるって。それより、救出の作戦も考えないと」

「そうだね。とりあえず気付かれなくて行くには、少数精鋭で行くのがいいんじゃないかい？」

ギーシュが提案するも……………。

「そしたら、なにも出来ないメンバーが出てくるわよ？」

というルイズの意見に『確かに…』と言うしかなくなってしまった。そんな中、モンモランシーが新しい意見を出す。

「じゃあ、囃役を作るっていうのはどうかしら？」

「でも、どうやって？」

「……………それはまだ考えてないわ」

なかなか話の先が見えてこない。

しばらく、有効性の低い意見が出続ける中、ふとサイトは気付く。

「なあ、そういえばキュルケは？」

そう、いつの間にやらキュルケがいなくなっていたのだ。
一同がどこにいったのか……、と辺りを見回していると、勢いよく扉が開いた。

「協力者を連れてきたわよ！」

「やあ、サイト君たち。今回はかなり無茶をしたね」

やってきたのはコルベールだった。

「コルベール先生！手伝ってくれるんですか？！」

「オストラント号の力が必要じゃないかね？」

ここで、ギーシュが『あつ！』という声をあげた。

その声に対し、オンディーヌメンバーの中で、比較的冷静なレイナールが問う。

「どうした？」

「いや、良い作戦を思いついてね。……さっき言ってた少数精鋭も、困も、両方一気に実行すればいいじゃないか」

「そう言つと思つたわ。だから最初からジャンにお願いしてたんだもの」

………せつかく、ギーシュが思いついた感じになっていたのに、
全てはキュルケの計画のうちだったらしい。

「じゃあ、今回の作戦の説明ね。私、サイト、ルイズ、ギーシュ、モンモランシー、マリコル又は、人型のシルフィードを連れて陸路で侵入するの。そのための囷として、オストラント号を使用するわ。

船体に取り付けた火薬とかで相手の気を引きつけて、囷としての役割を果たしてもらおうわ。……いいわね？」

キルケの問いかけに全員が賛同し、とうとうガリアへと向かうことになったのだった。

Side Rey ーレイ・サイドー

長い時間が流れた。

完全に意識を保っていたのは、ほんの数年だろうが、長かった。

それにしても衰えた。

封印され続けた反動なのか？ 魔力は一度異世界に渡れば、残りをほとんど消費してしまいそうなほどに減っている。『気』は、正気を保つために使い果たした。身体能力が著しく低下していることも分かる。

……どれも封印による反動で、一時的なものではあるはずだが、例え封印から解放されたとしても、世界に満ちる魔素……『マナ』が圧倒的に少ないこの場所で、回復の見込みはないだろう。人間の自己自然治癒は、マナに頼る部分が大きいからな。

嫌だ。

?!

これはなんだ？……頭の中に声の流れ込んできている？

心を消さないで。

……この声は……！

声と同時に、俺を包む青い結晶に輝ひびが入る。

私は『あなた』に逢いたい。

……シャルロット……なのか……？

輝はだんだんと大きくなってゆく。……確かに長い時間は経ったが、封印から解放される程に永かったわけではないのに。

だけど『あなた』に逢うことは叶わない。

叶えたい。

シャルロットが望むのなら、なんだって叶えてやりたい。

時間的には、まだ解放されるはずがない。ハルケギニアの世界で数えても、あと100年は閉じ込められていてもおかしくはないんだ

が……………。
しかし、俺の予想に反して、結晶に入った輝は大きなものになってゆく。

まだ、『あなた』に逢っていないのに。

俺も、逢いたい…………シャルロットに。

さらに大きくなる輝。ゆつくりと崩れてゆく青い結晶。

シャルロットの思いが、この結晶を破壊しているとも言っのか？
…………俺にはまだ…………チャンスが残っているということなのか？
…………もう一度…………お前の傍に存在することが許されるのか？

助けて、『イ……………』レ…………イ…………！

こんな俺に助けを求めてくれるのか？
本当に…………いいのか？

【助けて…………！】

シャルロットのものらしき声が叫びとなり、はつきりと頭の中にこだまする。

その声に反応したかのように、俺を閉じ込めていた結晶が全て崩れ去ってゆく。

今まで俺を閉じ込め続けていたのが嘘だと思えるほどに、脆く、儂く、青い結晶は姿を消した。

結晶の外に出た俺を迎えるのは、『青』以外の景色。

この世界では、地球にはありえないような巨大な月が、満天の星と共に俺を照らしていた。

……シャルロット……！

俺を必要としてくれなくてもいい。許してくれなくてもいい。拒絶したって構わない。

……代わりに、お前の元に助けに行っても文句は無いよな？

俺は自身の中にわずかに残った極少量の魔力をかき集め、ハルケギニアへ……いや、シャルロットへと続く扉を開いた。

S i d e O u t .

“彼女”へと続く扉（後書き）

レイ「……………復活した途端に、またこれか…」

シエラ「しょうがないやろ？……………まあ、折角やし楽しもうや」

レイ「……………こんなもの、楽しめるか。だいたい、お前はなぜこんなにスムーズにゲスト役を果たそうとしている？」

シエラ「いや、だってホントはウチが司会役を任されてたんよ？……………それをアンタがすぐ復活してまうから……………とにかく、ウチは悪くない」

レイ「だからと言って、お前をゲストに迎える気はないんだが……………いや、逆に司会役を代わってくれ。お前のツツコミの才能があれば、俺よりも上手く司会役を務められるだろう」

シエラ「いやいやいや、人気投票で一位になったんはアンタやろ？それくらい、責任持ってやりい」

レイ「はあ……………俺としては人気投票の存在自体、本意ではないんだが」

シエラ「アンタ……………それはいくらなんでも投票してくださった皆様に失礼なんやないか？」

レイ「そんなもの、知るか」

シエラ「救いようないな……………でも、アンタはそんなこと言

いながらも、ちゃんと最後までしつかり司会役を務めそうやな」

レイ「やるからには、やりきらなければ、俺の気が治まらない。そういう意味では俺は司会役を降りられないな」

シエラ「そうやる？やっぱアンタは思いのほか律儀なヤツや」

レイ「それでも、やりたくないことに変わりはないがな」

シエラ「結局ただのめんどくさがりか！！………というか、アンタとやっていると、あまりウチがツッコめんな」

レイ「ふっ、お前もとうとう自分がツッコミ役であることを自覚したらしいな」

シエラ「ハッ！………い、いや、違うで？ウチは自分がツッコミ役なんて認めん！！絶対や！！！」

レイ「いや、俺がない間の『後書き』も全てしつかりと確認したが、お前のツッコミスキルはサイトなんかとは比べ物にならない。

………よって、お前がツッコミ役を務めるべきだろう」

シエラ「ウチがいたら、サイトとかいうヤツの出番なくなるで？！それでもええんか？？」

レイ「その言葉は、自分が『ツッコミに長けている』と認めた、と受け取っていいな？………いや、そう思うことにしよう」

シエラ「それ、確認やなくて通告やん！ウチに選択権はないんか！………それに、ウチは別にツッコミスキルが高いわけやない！！！」

レイ「どうだかな。…少なくともお前は、誰かがボケればすぐに拾い、ツッコミを入れていたぞ？」

シエラ「む……そうやったっけ？覚えとらん（汗）」

レイ「無意識でツッコミを入れているのか………もはや、天性のツッコミスキルだな。俺は無神論者だが、お前のツッコミスキルだけは神から与えられたモノに違いない」

シエラ「そんなにか？ウチのツッコミスキルはそこまで高くないやろ！..！」

レイ「いや、少なくともこの小説内では随一のツッコミスキルだ。俺が保障しよう」

シエラ「………保障されても全く嬉しないわ!!..！」

レイ「それにしても、お前がいると後々便利かもしれんな」

シエラ「ここでの独り言?!そして、またウチは無視される流れなんか??..！」

レイ「よし、これから頻繁にこいつを『後書き』に呼んでやる。………そうすれば、ツッコミ役に困らないはずだ」

シエラ「やっぱり無視の流れきたよ?!..！」

レイ「そういうわけで、今日はこれで終わりにしよう」

シエラ「どういうわけや!! なんていきなり終わり?! 別に無理にポケんでもええわ!! ポケが雑やわ!!!」

レイ「お前のためにポケてやったと言うのに、いろいろと注文の多いヤツだな」

シエラ「これには反応するんかい!!!」

レイ「なんだ、反応して欲しくなかったのか? めんどくさいヤツだな。……まあ、便利ではあるんだが」

シエラ「……なんや、ホントにポケに困ったらウチを呼ぶつもりなんか…?」

レイ「当たり前だろう? 俺は、もともとポケでもツツコミでもないんだ。……よって、ツツコミはお前に任せる」

シエラ「レギュラー化せなアカンわけ?!」

レイ「いや、たまにツツコンでくれたらそれでいい。……というか、ツツコンだら即帰れ」

シエラ「ウチの扱い酷っ?!」

レイ「さて、今度こそ本当に終わりにしよう」

シエラ「え? ここでの無視パート入るん?!」

レイ「次回からは、ツツコミを呼ぶ機会が増えるだろうが、気にしないでくれ。……ではな」

シエラ「帰るな！！そして、ウチを『ツッコミ』って呼ぶな！！……
……って、もう帰ったん？？！行動早すぎるやる……！！………は
あ、またこのパターンか。なんか、嫌になってくるわ。でもまあ、
呼ばれたらやるしかないんやろうな。……ちゅうわけで、またウチが
『後書き』に呼ばれても、気にせんといてな……！」

というわけで、シエラは後書きのツッコミ要員に就任しました（笑）
これから、ボケが多くて収集がつかなくなったときに呼ぶかもです。
よろしくお願いしますw

さて、それでは今日はこの辺で。

また次回（^^）ノシ

パズルのピース、一欠けら。(前書き)

今回は、後書きを休ませていただきます。

本文だけで充分長めですし、あまり区切りをつけたくない回なので、ご了承ください。

さて、それでは本文をどうぞ！

パズルのピース、一欠けら。

Side Charlotte (シャルロット・サイド)

濃い紫の髪を揺らして、ゆっくりと近づいてくる魔族……シエラは、右手を私の目の前にかざし、洗脳の魔法を発動しようとしている。その光景に全てを諦めかけた私と、近づいてくるシエラの間で、唐突に激しい光が輝いた。

光の中からは、漆黒の影が…。

「俺のことなど知らないかもしれないが………助けに来たぞ、シャルロット」

そして光が収まると、私の目の前には、見知らぬ………だけど、どこか懐かしく、そこにいるだけで安心できるような存在が、漆黒の衣服に身を包んで立っていた。

何故だか知らないけど、私はいつの間にか、現れた漆黒の少年に後ろから抱きついてきた。

ああ、やっぱり懐かしい。こうしているだけで、心から嬉しさがこみ上げてくる。

あなたは、『あなた』なの？

「俺を覚えているのか…？」

私が抱きついたことで、あなたは困惑している。でも、確信した。あなたは、『あなた』。
レ……イ………レイ。

名前を心の内で呼んでみた瞬間、私の中で足りなかったパズルのピース、一欠けらが、綺麗に埋まった。
今までの色々な思い出が一気に浮かび上がってくる。

教室で初めて出会った時のこと。舞踏会で一緒に踊ってもらったこと。初めて一緒に眠った時のこと。初めて抱きしめてもらった時のこと。私の過去を聞いて慰めてくれたこと。あなたの過去を話してくれた時のこと。どんな事があっても護ってくれたこと。……
全ての『あなた』……レイとの思い出が蘇ってくる。
それと一緒に、レイからの言葉も鮮明に思い出される。

『ならば、俺はせめて、お前だけの英雄になれるよう努めよう』
あの時の言葉も 『シャルロットは俺が護る』 私を護ると言ってくれた誓いも 『シ

ヤルロットさえいいのなら、支えあって生きていこう』
あなたが私を頼ってくれた時の言葉も 『いつてくる。』

後で”な』
そして、魔族の元へ赴く前の別れ際の言葉。
…… やっぱり、レイは戻ってきてくれた。レイは、嘘をつかない。
あなたは帰ってくると言った。そして実際に帰ってきた。……
…… 帰ってきてくれて本当にありがとう。

「レイ……。私は覚えている。記憶には無かったけど、心でちゃんと覚えていた。……あいたかった」

私には、喜びで溢れる涙を止めることは出来ない。
本当に、ずっと逢いたかった。……私は抱きつく手に、さらに力を込める。

「……ありがとう。こんな俺を待っていてくれて。……俺も逢いたかったよ」

レイはそう言って、後ろから抱きつく私の手に、自分の手を優しく重ねてくれた。

「おかえり…… / / / /」

「………ただいま」

あっ……。レイは、私の手を離させ、抱きつけないようにしてしまつた。………残念だったけど、すぐに嬉しくなつた。

だって、唐突に振り向いたあなたは、また、優しく私を抱きしめてくれたのだから。

何故また戻ってこられたのか、疑問は残るけど、今はそんなことはどうでもいい。後で説明してくれるはずだから。

今、重要なのは、帰ってきてくれた、そして優しく抱きしめてくれた………この事実だけ。

………だから、しばらくはこの優しい喜びに浸っていよう。

S i d e O u t .

「案外、礼儀正しい魔族だな。再開の邪魔をしないで放っておくとは」

シャルロットをひとしきり抱きしめ、やっとのことで離れたレイの

第一声はこれだった。

そう、レイとシャルロットの会話に、全く口出さなかったシエラに對しての言葉なのだ。

「いやいや、ウチはああいうシーン好きやからね。ただ興味があつて見とつただけや。まあ、どうせ封印のせいで劣化しとるアンタに、ウチと戦つて勝つ見込みはないからな。それくらいはええやろ」

三人のいる部屋の端で、壁にもたれかかつて話を聞いていたシエラは、そう答えた。

「ああ、確かに魔力は枯渴しているし、『気』は使い果たした。そして身体能力は、せめて丸一日は『mana』を取り込み続けなければ、かなり低いだろうな」

劣化している、という事実には驚いているシャルロットを尻目に、レイは『だが…』と話を続ける。

「俺は負ける気がしない。……………シャルロットの前で哀れな姿など見せられないからな」

そう言つて、レイは不敵に唇の端を吊り上げた。

……それは、自身のビハインドなどものともせず、勝利を確信しているかのような態度だった。

「なんや、えらい余裕やね。抱き合つてる時もウチを警戒すんのを忘れんかつたようやし。ホントに劣化してるん？」

「ああ、今の戦闘力は、以前の0・1%ほどだろうな。だが、それでも負けない自信がある」

「そう、レイが負けるはずない」

レイの言葉に、シャルロットも追従した。

「その自信はどこからくるんだか。……………まあ、ええわ。さっさと始めよか」

途端、シエラは純白の魔力を纏うダガーを出現させた。

「ウチは『隠密』のシエラや。よろしゅう」

シエラの言葉を受け、レイも名乗りをあげる。

「レイ・クロカミ。……………覚悟はいいな？」

「それはこつちのセリフや。というか、武器は出さんでええの？」

「魔剣を使用するだけの魔力も、武器を創造するだけの魔力も残っていないのでな。……………だが安心しろ。もともと俺は、肉弾戦も得意だ」

魔剣・黒羽、白羽は、通常の魔剣と比べてもかなり特殊な存在だ。

……………通常、魔剣とは魔力付与された時に魔力を注ぎ込むだけで、半永久的に魔剣として機能するものだ。

しかし、黒羽と白羽は違う。

その圧倒的と言えるほどの多彩な特殊効果や、最高の切れ味、最硬の耐久性の代わりに、常に魔力を吸収し続けなければ、魔剣として機能しないのだ。

つまり、この時点でレイが魔剣を取り出せば、全ての魔力を吸収し尽くされ、場合によっては死に至る可能性もあるということである。

よってレイは、素手で戦う。

左足を引いて半身になり、拳を構える。そして小さくジャンプし、

着地した瞬間に地面を強く蹴り、シエラへ向かって爆進した。力を失っているとはいえ、その速さは未だに人間では実現不可能だと断言出来るほどのレベルにある。

身を低くしてシエラのふところにもぐりこんだレイは、掌底を顎に繰り出し、その体を後方に飛ばす。

避けきれなかったシエラは、それでも咄嗟に自ら後方に飛ぶことによってダメージを最小限にとどめていた。

「もう一回言うけど、アンタはホントに劣化してるん？ 充分強いやん。……まあ、素手の攻撃だけじゃウチを倒す決定打にはなり得んやろうけど」

シエラは吹っ飛んだ勢いのままに右手を床につき、それを基点にして片手で側転し、間合いを取って、話しかけた。

「俺は嘘などついていないぞ？ そして俺は絶対に負けない。……そんなことよりも」

言い終えた後、レイは目を閉じ、感覚を研ぎ澄ましてゆき、再び目を開けた。

その漆黒の鋭い瞳は、真っ直ぐにシエラを射抜く。……… 全てを見透かすようなその瞳は、全く劣化しているようには見えなかった。

「お前が出そうとしている暗器の類は俺には通用しないぞ？」

本当に全てを見抜いたかのように、暗器を隠し持っていることを言い当てて見せたレイ。

「なっ…!?!」

シエラは驚きの声をあげた。

自身のふところの空間を歪め、収納スペースを大幅に広げたことで、大量の暗器を隠し持っていることに気付かれたのだ。驚くのは当たり前だろう。

「普通は気付かないと思うんやけどなあ」

シエラはそう言ってふところから、片手で苦無を三本取り出し、投げつけてから突進する。

レイが、左手の指と指の間に三本の苦無を挟んで止めるのを確認しつつも、シエラはダガーを右手に持ち、もう片方の手には小太刀をふところから取り出した。

「隠し持つとるのは暗器だけやないで！」

ブンツ！と小太刀がレイの胸を薙ぐと襲い掛かる。

だがレイは、受け止めた苦無の内の一つでシエラの斬撃を受け流してみせた。

そして、レイは小太刀を持つ手を蹴り上げ、武器を自分の物にする。しかし……………。

「その武器は全部ウチの支配下にあるから、ふところに戻すことも可能なんやで？」

シエラの言葉と同時に、レイの持っている小太刀や苦無は消え去った。

「そうか。だが、どのみちお前の攻撃は俺に届かないよ」

消え去った武器を気にも留めず、レイは言葉をはいた。

瞬間、レイは背後をとるようにシエラの右側から回り込もうとする。

「無駄やって！」

シエラはその動きに合わせて、ダガーで首筋を斬りつけようと振りきる。

だが、レイは身を低くしてそれをかわし、そのままシエラへ肉薄した。

そして、目にも留まらぬ速さでダガーを下へ叩き、武器を取り落とさせ、同時に左足でシエラを蹴り上げてみせた。

わずかに宙に浮かんだシエラは、魔力を足から噴射することによって勢いをつけ、その勢いで連続バック転、それによって距離を取る。しかしレイは、それに合わせたようにシエラの動きに追従し、鋭い拳をシエラの鳩尾へと叩き込む。

ガキンツ！……拳と金属のぶつかる音が響いた。

「残念やったな。盾になるようなものも隠し持つとるんよ」

「だからどうした？」

シエラの言葉にも短く応え、レイは怒涛の勢いで拳での突きを繰り返し、シエラを部屋の端まで後退させた。

「これで追い詰めたと思うとるん？安易な考えやね」

シエラはそう言って、レイの拳をギリギリで避けながら、ふとこゝろに両手を突っ込む。

突っ込んだまま身を低くし、素早い立ち回りでレイの背後に回りこむ。

そして、後ろへ回し蹴りを放つレイの攻撃をバックステップで避け、ふところから手を出した。

その手に持つのは、大量の武器の数々。

ナイフが投げられ、手裏剣が襲い、鋭い無数の針が急所を狙って飛来する。

しかもその全てが純白の魔力を纏っており、避けきれなければ、かなり危ういだろうと見て取れる。

「レイ！危ない！！！」

レイの勝ちを疑わないシャルロットでさえ、思わず声をあげる。

それは、この攻撃によって負けることはないものの、怪我をされるのが嫌だから、という理由なのだ。

そんな状況の中、レイは目を閉じ、完全に構えを解いて、自然体で立ち尽くしていた。

そして、武器の一つがレイに突き刺さる瞬間、カツ！と目を見開き、全ての武器をいなすように手を忙しく動かし、本当に全ての武器を叩き落してみせた。

「なんだ、この程度か？」

「うるさいな、『隠密』であるウチは、派手な魔法は使われへんのよ。ウチの武器はこの手数が多さや。……その内に仕留めたる」

そう言って、シエラはニヤリと不敵な笑みを浮かべた。

共有されし魔力（前書き）

……今回の後書きもナシでいいですかね？

あれ、意外に時間かかるんで、本文の方が全く出来ないんですよ…。

ですので、これから『後書き』は気が向いたら、ということにします。

需要があったとはあまり思えませんが、あの後書きを楽しみにしてくださいましていた方々には、本当に申し訳なく思います。

さて、気持ちを切り替えて！

それでは、本文をどうぞ！！

共有されし魔力

叩き落された武器群は全て、シエラのふところへと転移してゆく。そして今度は右手にダガー、左手に小太刀を出現させた。左手を少し前に、右手は腰の辺りに構え、隙を消す。

レイは相変わらず、自然体で構えていた。……もちろん、隙はない。

「これじゃ、「じつめい」膠着状態やね。アンタに隙、あらへんもん」
「そうとは限らないぞ？」

瞬間、レイの体がブレた。

右に、左に、ナナメに、前に……レイの体は全方向へ向けて、まるで分身するように残像を残しつつ移動している。

「なっ!?!どれが本体や??!……いや、それより、魔法も『気』も使わずにホントにこんなことが可能なん??!」

シエラの驚きの声など歯牙にもかけず、レイはまるで『陸の型・夢幻分身』のような動きで分裂し、四方八方からシエラへ襲いかかる。『気』がないために実体はない。……ないが、惑わすことは十二分「じゅうにぶん」に可能なのだ。

そして、シエラの後方から来ていたレイの拳が真っ直ぐに腰へ突き出された。

瞬間、全ての分身がシエラの“前方”で収束し、拳はシエラの鳩尾へ激突した。

「うっ……!!」

鳩尾に鋭い一撃を受けたシエラは、呻きつつもサイドステップによって、レイの追撃を避けた。

またもや、二人は激突する。

「なんでなん！？確かに後方から攻めてきとつたはずなのに！！」
「攻撃の瞬間、お前が反応したのを見て、攻撃する場所を変えただけだ」

その会話は、武器と拳のぶつかり合う音の合間に聞こえてくる。

レイは、突き出されたダガーを、上体を逸らして避け、振り下ろされた魔剣は、剣腹を叩くことによって、いなしている。
激しい攻防は続く。

素早い斬撃と、それをものともしない余裕の体捌き。

そんな戦闘の最中、レイの拳は順調にシエラを捕らえ、彼女に少しずつダメージが蓄積されていく。

このままでは勝ち目がない、と悟ったシエラは、唐突に魔力を解放して自身とレイの間で爆発させ、バックステップで間合いを取る。
レイも、爆発を避けるためにはバックステップで後方へ退避するしかなかった。

「もうええわ。『隠密』がどうとか、言ってもらえへん。アンタがいくら劣化しとつても、『隠密』のシエラ”では勝てん。それは認めるわ」

そこで、シエラは言葉を区切り、ニヤリと笑う。

「ホントのウチは、もうちょい派手やで？」

瞬間、シエラの魔力と『気』が爆発的に高められ、膨大な力の波動が溢れ出す。

「こんだけ解放すると、上位魔族に近づけるんや。まあ、一歩手前つてとこやね。………やけど、良い話ばかりでもない。解放状態を長く続けることは叶わんし、存在感ばかり上がって、奇襲的な攻撃は一切通じんくなるからな」

シエラがそんな解説をする中、シャルロットは膨大な力の波動にあてられてうずくまってしまっていた。

「クツ……シャルロット……。………どうやら、早々に決着をつけるべきらしいな」

レイは、シャルロットのもとに駆け寄り、シエラを警戒しつつも背中をさする。

「そうやね。建物が壊れんように、そっちには結界張つとるけど、そっちの娘には結界なんて張つとらんからね。………身を案じるんなら、頑張った方がええわ」

未だにニヤリと笑ったままのシエラは、シャルロットの背中をさするレイを見ながら、ゆっくりと右手を突き出す。

「さあ、二人仲良くあの世逝きや。せいぜい、天国で幸せになりい。………そんなところがあるかは知らんけどな」

ホーリー・イラスト
《聖なる光の奔流！》

そして、突き出された右手から、白き光の洪水が奔流となって、レイとシャルロットの方へ爆進する。

レイだけなら避けることも可能だが、シャルロットを抱えて退避することは不可能だ。

そんな絶対絶命のなか、行動を起こしたのはシャルロットだった。

「レイ……………私の魔力を使って」

シャルロットは目を閉じてレイの右手を握り、魔力を送り込む。

「シャルロット……………？お前、大丈夫なのか？」

「（コクリ）…大丈夫」

レイに送りこまれる魔力はかなりの量だ。さらに、レイの中にわずかに残った魔力が混ざり合い、共有される。

そして、レイとシャルロットに共有された魔力は全身に行き渡り、立ち昇った。

その魔力は、レイの魔力に変換されたはずであるにも関わらず、今までのような青ではなく、蒼の魔力。

まるでシャルロットの髪色を映したかのような……………そして鮮やかな空を彷彿とさせる、蒼き魔力だった。

「俺の魔力が……………変化した？」

その魔力に刺激され、レイの魔力が復活を始め、溢れ出してくる。

……………その魔力も、全てが蒼い魔力だった。

そうこうしているうちに、ホーリー・ブラストが二人にぶち当たる。

……だが、レイの全身から立ち昇り始めた蒼い魔力によって、全てが消失された。

「なっ???!ありえへん!!!」

シエラが驚きの声をあげる中、現状を完全に理解したレイは、冷静に返す。

「どうやら、俺はさらにレベルアップしたようだ。……シャルロットのおかげだ」

「違う。これもレイの力」

「では、二人の力ということにしておこうか」

未だ驚きで行動出来ないシエラを尻目に、レイはシャルロットの頭を優しく撫でながら言った。

「……………分かった／＼／＼／＼」

シャルロットは久しぶりに顔を赤らめていた。

レイから立ち昇る蒼き魔力によってシエラの力の波動が緩和され、元気が戻ってきているようだ。

いや、それだけではなく、レイの帰還はそれだけシャルロットにとって大きなものであったということだろう。

ここで一つ、ある逸話を記しておこう。

古くから、互いに強く……………本当に強く想いあっている者たちが魔力を共有すると、混ざり合い、性質が変わり、その力を増す、という伝承がある。……………どうやら、本当だったようだ。

その証拠に、シャルロットからも蒼い魔力が立ち昇っていた。その魔力は、もちろんレイと同じレベルまで上がったわけではない。しかし、シャルロットの魔力は、『トライアングル』ではありえない……つまり、『スクエア』のレベルまで引き上げられていたのだ。

以上、閑話休題。

シエラが驚愕状態から復活したころ、一通りシャルロットの頭を撫で終えたレイが、蒼き魔力を身に纏いつつ、両手を左右に突き出した。

シュンツ！と音をたて、魔剣・黒羽と白羽が姿を表す。

…と同時に、シャルロットの周囲にも強力な結界が何重に張り巡らせられる。

「これで、『気』はまだ回復していないが、魔力は万全だ。魔力による身体強化も、もちろん可能だし、黒羽と白羽が存分に使える。

………ここからが本番だぞ？」

レイはニヤリと笑い、ゆっくりとした口調でそう告げた。

エルフの脅威（前書き）

今回は、サイトたちにスポットを当てた話です。

それでは、本文をどうぞ！

エルフの脅威

一方、サイトは罠をうまく使い、ガリア国内へ潜入することに成功していた。

そして、様々な作戦を用い、シルフィードの案内によって、とうとうシャルロットが囚われている屋敷の前に辿り着いた。

門の前には、一人の青年が立っていた。

「私の名はビダーシャルだ。……………お前たちに告ぐ。疾く去れ」

青年は、人間ではありえない鋭く尖った耳を有しており、それはこの世界で悪魔と恐れられるエルフの象徴だった。

「俺たちはここで逃げ出すわけにはいかない！！どいてもらおうか！！！！」

サイトは声を張り上げた。
だが……。

「蛮人たちの事情など知らん。……………エルフを越える存在である、魔族に殺されたくないのなら、疾く去れ」

「魔族がいることくらいは、もともと知ってるのよ！それでも私は親友を助けなきゃいけないの！！」

キュルケが強く反論した。

ミヨズニトニルンの言った魔族というワード。……………それによって、一同は魔族と対峙することも覚悟していたのだ。
エルフとの対戦など、気にも留めていなかった。

「そうか……。ならばせめて、殺されぬようにここで追い出してやるう。……………まあ、私と対峙することになっても、死ぬことはないにせよ、大怪我はするだろうかな」

ビダーシャルはそう告げ、構えをとる。

それを見たサイトは、デルフを鞘から引き抜き、ビダーシャルへ向けて突進した。

ガインツー！

確実にビダーシャルを捕らえるはずだったデルフリンガーは、エルフに当たる瞬間に別のなにかにぶち当たった。

『ちつ！^{カウンター}反射かよ！いやらしい魔法を使ってきやがるもんだ！……

…相棒！ここは、デイスperlしかねえぞ！』

デルフは的確な判断でサイトにアドバイスした。

その声に反応して、応えながらも、サイトはバックステップでビダーシャルとの間合いを大幅に空ける。

「分かった！……ルイズ！デイスperlのルーンを唱えてくれ！こいつの魔法をブチ破る！！それとギーシュ！残りのメンバーに指示を飛ばして、俺の援護に回してくれ！」

「分かったわ！！」「了解したよ！！」

二人は同時にサイトに応え、それぞれ行動に移る。

そしてサイトは、ビダーシャルの仕掛けてくる魔法を鋭い動体視力によって避け、極力ルイズに近寄せないために、相手の動きを制限するような剣捌きで攻撃を続ける。

さらにサイトは、相手の動きの予備動作を見抜くためにビダーシャルの動きを注視し、次第にビダーシャルの動きを見切り始めた。……つまり、ビダーシャルの攻撃を完全に避け、効果的なタイミングで攻撃を放つことが可能になったのだ。

しかし、それで終わるエルフではない。

ビダーシャルは唐突に自身の前方に、鋭く尖った狙い済まされたような神速の風の槍を放つ。

それは、一直線にサイトの胸へと吸い込まれていった。

「危ない！」

マリコルヌが声をあげ、それに反応したサイトは、身をよじるようにして回避する。

避けきれずに腹を切り裂かれるが、それは軽傷に過ぎない。

体勢を整えるため、サイドステップを用いて、ビダーシャルから間合いをとるサイト。

その隙を埋めるかのように、ギーシュは大量の油を練成してビダーシャルを中心に散布し、他の面々にも指示を出す。

「サイト！一旦下がって！キュルケ！炎を！マリコルヌとシルフィード！炎を風で煽ってくれ！そしてモンモランシー！僕たちの周りに水の壁を張って！！！」

指示が来た瞬間に面々は行動する。

サイトは素早くギーシュたちの方へ退避し、キュルケは散布された油に戸惑っているビダーシャルへ向けて火を放ち、マリコルヌの風

魔法とシルフィード（人型）の風系の先住魔法が炎を煽って、爆発的に燃え上がらせる。

そしてモンモランシーの生み出した水の壁によって、迫り来る熱気を緩和する。

その間にも、ルイズの長いルーンは紡がれ続ける。

瞬間、爆心地から飛び出すエルフ。

確かに傷を負っているようだが、大した傷ではないようだ。

「蛮人の系統魔法で私の反射を破るとは……。お前たちもなかなか侮れないな。しかし、もうすでに次の反射を張った。全ての攻撃は無意味だぞ？」

ビダーシャルは、もう勝った気で、サイトたちに余裕で話しかけた。だが、ルイズの事を忘れてもらっては困る。

「サイト！あとは発動するだけよ！」

そう、ルイズのルーン詠唱は、すでに終了していたのだ。

「おお！ナイスだ！」

『俺の刀身にデイスペルをかけてくれ！』

サイトが歓喜の声をあげ、デルフが指示を出した。

「分かったわ！……《デイスペル！》」

ルイズが魔法名を告げると同時に、デルフリンガーは発光し始める。その頃には、サイトはすでにビダーシャルへ向けて斬撃を放つ途中だった。

そして反射の壁にぶち当たる瞬間、強い光が反射を無効化し、次の瞬間には、デルFRINGERはビダーシャルの首筋に突きつけられていた。

「なに…?」

「俺たちを甘く見るなってことだよ!……通してくれるよな?」

サイトはニヤリと笑い、問うた。

「……仕方あるまい。だが、魔族というものは本当に恐ろしい。私と対峙する時のような心持ちでは絶対に死ぬ。覚悟は出来ているのであるうな?」

ビダーシャルは答え、さらに問いで返した。
もちろんその答えは……。

「……当たり前だろ(よ)(なのね)!!」「」「」「」

「そうか。それなら私はもう止め【ゴオオオオオン!!!】……なんだ?!」

後半の言葉は、屋敷から聞こえてくる爆発音によってかき消された。

「なんだ?!もう屋敷に入ったヤツがいるってのか??!」

サイトは疑問と狼狽の声をあげた。
それに答えるのはモンモランシー。

「分からないわ!でも、タバサが危険かもしれないわ!」

「そうなのね！お姉様が危ない！早く向かうのね！！」

シルフィードも同意を示し、屋敷の方へ駆け出す。

「俺たちも早く行くぞ！」

サイトは皆に声をかけ、爆発が起こった割には損傷の全くない屋敷へと駆けてゆくのだった。

エルフの脅威（後書き）

…… 本当に系統魔法で反射を破ることなんて可能なんですか？
…… まあ、可能ということにしておいてください。

ええ、後書きの語りについてですが、しばらくは復活しないと思います。
ご了承ください。

それでは、また次回（^^）ノシ

『もっせ居はしなくてもいいぞ』(前書き)

レイVSシエラ、終結です。

……なんか、だいぶ長くなってしまいましたね(汗)

さて、それでは本文をどうぞ！

『もう芝居はしなくてもいいぞ』

「……………ここからが本番だぞ？」

ニヤリと笑って告げるレイが手に持つのは、『青』ではなく『蒼』の魔力を纏った魔剣・黒羽と白羽。

それは、今までとの違いを感じさせるに十分な『魔』を秘めていた。

「言ってくれるもんやね。……………確かに、魔力の回復したアンタには勝てへんとは思っけど、これも魔王様の命令や。最後までやっただ」

そう言っただけでシエラは、レイの返事も聞かずに突進する。

ふところから出すのは2mを越える巨大な大剣。

操り手の身長を優に越す大きさの魔の大剣は、レイに向かって繰り出された。

その一撃は今までの比にならないほどに速く、今までが見えぬほどの強力な一撃だった。
だが……………。

キィィィン！シャリンツ！キンツ！……………レイは大剣と黒羽を合わせ、大剣の剣腹に沿って黒羽を移動させることによっていなし、そして弾き、大剣を吹き飛ばしてしまった。

シエラの勢いは止まらない。

何故か追撃をかけてこないレイに構わず、彼女がふところから取り出すのは、『雷神の大槌』と呼ばれる、雷神の最強の槌。

解放状態にあることによって跳ね上がった身体能力をフルに生かし、下からレイの顎目掛けて神速で振り上げる。

ゴオオウ！バチバチバチイイ！……空間を切り裂くような勢いで振り上げられた槌は、当たるとは叶わず、しかし、そこから顕現される極太の雷の柱は、ボックスステップによって槌を避けたレイを容赦なく襲う。

極太の雷柱は、全てを消し去るかのような勢いでレイにぶち当たった。さらに、その雷の光が収まる前に、シエラは新しい武器を取り出していた。

その名は『レーヴァテイン害なす魔の杖』。杖と銘打ってあるものの、その実態は炎の大剣であり、その全長は3mを優に越す。

レーヴァテインはシエラの手を離れ、空中を自由自在に動きつつ、その豪火が猛威を振るう。

そして、未だにトルハンマーの雷に包まれていて姿を確認出来ないレイ（であろう影）にレーヴァテインの豪火がぶち当たった。

その後も、グングニルやら、ダインスレイヴやら、強大な伝説の武器の数々を多量に使い、シエラの怒涛の攻撃は、【ゴオオオオオオン！！！】という激しい爆砕音と共に続く。

……だがしかし、おかしな点が一つ。

見た目が派手であり、また、威力も申し分無いはずの武器の連続攻撃によって周りに及ぼされる被害が、明らかに少ないのだ。

結果が張られた建物ですらも破壊してしまっほどの威力のはずだが、建物に損傷は一切見られない。……まるで、何かに吸収されているかのよう。

壮絶な攻撃を終え、解放状態を維持出来なくなったシエラは、一旦攻撃を止めてレイらしき影から距離を取る。

「はあ………はあ………これで………やったか？」

シエラはそう呟きながら、肩を大きく上下させていた。……………解放状態で無茶をし過ぎた反動だろう。

伝説の武器による激しい攻撃の光が止むと……………。

そこには全く傷を負っていないレイが、毅然として立っていた。

「なかなか良い攻撃だったぞ。だが、全て魔素に変換して吸収した。……………もう遊びは終わりでしょうか」

レイはそう言い、次の瞬間には転移したかのようなスピードでシエラの前に立ち、蒼き光芒を纏う白羽を首筋に添えていた。

「これでお前は死んだ。……………というわけで、もう芝居はしなくてもいいぞ」

そう言ってレイは、黒羽と白羽を亜空間に戻し、完全に警戒を解いた。

「なっ！……………そ、そんな芝居なんてしとらんわ！！」

シエラは必要以上に慌て、シャルロットは芝居？と首を傾げる。

それに気付いたレイは、もう戦意のないシエラから離れ、シャルロットに張った結界を解いてやり、答える。

「つまり、最初からこいつに俺たちを殺す気などなかったということだ」

「え？」

レイは、驚きの声をあげたシャルロットに優しい笑みを向けて頭を一撫でしたのち、シエラの方へ顔を向けて今度は不敵にニヤリと笑う。

「そうだろう？ 第三魔法師団、副団長『隠密』のシエラ。……魔王が気付いているかは知らんが、お前は今の魔王の在り方に疑問を持っているだろう？」

レイの問いかけに、シエラは困惑を示して沈黙するが、やがて痺れを切らしたように口を開く。

「……………分かった！ もう分かった！ 正直に話す！ 確かにウチは殺す気いなんて全然なかったし、そもそも魔王様の命令の穴をついて逃がすつもりやった。罪の無い人は傷つけたくない。傷つけないそれがウチの信念だから。……………でも、なんでそんなことが分かったん？ あんだけの会話でウチの心情まで見抜くなんてとてもじゃないけど無理やないか？」

そして、シエラは正直に白状した。
その言葉に対し、シャルロットが『何がなんだか分からない』という表情を呈するのを見て、レイは苦笑しながらシエラの問いに答える。

「俺がお前の芝居に気付いたのは、お前と最初に話したときだ。……話す前から全く敵意を感じさせないお前に、俺は疑問を持っていた。さらに俺がシャルロットとの再会によって隙を見せたのにも関わらず、お前が攻撃を仕掛けてくることはなかった」

先ほどの、レイとシャルロットの再会。

それは二人が心から待ち望んでいたことであり、そこに演技などは

ない。

だが、それは確かにシエラの真意を見抜くために役立つたらしい。

レイは言葉を続ける。

「そして、お前が告げたその理由　　『俺とシャルロットのやり取りに興味があった』。これはウソではないようだが、言外にその真意を隠していた。……………今、俺の『気』は枯渇しているが、注意すれば『気』の流れを読んで、言葉の裏の真意まで汲み取る事が可能だ。つまり、俺は『気』の流れを読んで、お前の真意は他にあるということに気がついたわけだ」
「それで何故、私たちを殺す気がないということまで気がついたの？」

シャルロットはレイに寄り添い、さり気なく手を繋ぎながら問いかけた。

レイもシャルロットの手を優しく握り返し、シャルロットの質問に答えるように話を続ける。

「シエラの言葉の根底には、隙を見せた俺たちを攻撃することによって俺たちを殺してしまうかもしれない、という恐れと躊躇い、そして俺たちを助けたい、という意志を感じ取れた。……………その時に俺は確信した。俺が負けることはない、とな」

お気付きだろうか？

レイは、『確実に負けない』とは言ったが、『確実に勝つ』とは一言も言っていない。

そして現在の状況は、どちらも完全には負けていない状態。（両方が、死んではいけないという点において、未だに決着はついていないということだ。ここで『決着』というのは、リベンジのチャンスも

なくなる状態……つまり、どちらかが死ぬことを指す)

……つまり、レイはこのような展開（もし魔力共有がされず、シエラのホーリーブラストが直撃していても死なない、負けないという展開）になることを、シエラと言葉を交わした瞬間から推察していたのだ。

レイはさらに話を続ける。……いつの間にかレイに抱きつき始めたシャルロットの蒼い髪を丁寧に梳きながら。

「さらに言えば、途中の『ホーリー・ブラスト』でさえ、生身の人間を昏倒させるほどの威力に抑えていたし、どの攻撃も俺を牽制しようとするような攻撃が多かった。……いや、俺の魔力が復活した辺りからは本気だったようだが。それでも、おそらく魔力の復活した俺には、アレくらいしないと攻撃にすらならないと思っただけなんだろうな」

実際、あの攻撃でさえ、レイを気絶させるどころかダメージを与えることすら出来なかった。

少しの間を置き、レイは完全にシャルロットを抱きしめながら、簡単に付け足す。

「……まあ、めんどくさい説明を続けてしまったが、簡単に言えば……」

お前の心に、『邪悪』はないよ。

「それどころか、お前の心は正直で真っ直ぐだ。確かに、『悪』はある。それでも、それはこの世に生きる者なら誰しも持っているよな『悪』だ。それは『邪悪』とは似て非なるモノであり……」

…いや、こんなことを言っても説明が長くなるだけだな」

だから……………とレイは言葉を紡ぐ。

「俺が一番言いたいことを伝える。……………お前は『邪悪』ではなく、むしろ真つ当な人物であるということだ。そして、俺の見解に間違いはないはずだ。俺は人を見る目には自信があるんだ」

最後の言葉は、少し冗談めかして。

レイの瞳に映るシエラは、邪悪で、残酷で、非道な第三魔法師団副団長ではなく、魔王に従いつつも自身の信念…………『罪の無い人は傷つけない』という芯の通った心を持つ、優しい魔族であり、誇り高い人格の持ち主なのだ。

レイは、第三魔法師団の副団長である『隠密』のシエラという肩書きではなく、シエラ個人を見ている、というわけだ。

「そうか…。ちゆうことは、アンタはウチを認めてくれたわけやな。……………なんや、むず痒いな、こういうの。嫌やないけど、ちよつと苦手やわ」

シエラは頬をポリポリと掻き、認められたことに驚きながら恥ずかしそうに話した。

先の言葉に応えるのは、わずかに顔だけを動かしてシエラの方を見るシャルロット。

無論、言葉を発する際に、レイに抱きつくことをやめたりはしない。

「レイは認めるべき人はちゃんと認める。確かにあなたは私を捕らえたけど、レイが言うのなら『悪意』が無かったことを信じる。…

……それに、あなたはさりげない優しさを持っていた」

シャルロットは思う。　今から思えば、最初にかげられた洗脳の魔法は、私に大きな負担を与えることはないものだった。そしてこの部屋では、それとなく私の心から『レイ』の記憶を引きずり出そうとし、さらにはレイとの再会の際では口を挟まないでいてくれた。……彼女が優しかった。…と。

だから、シャルロットは口を開く。

「私も、レイと同じようにあなたを認める。……そして、一つ提案。レイにも頼むことになるけど、いい？」

言葉の後半は、レイの方に顔を向け、上目遣いで訊いた。（身長差から、自然とそうなる）

「ああ、一時はシャルロットとの約束（再開の約束）を破りかけた俺だ。シャルロットの望むことはなんだって叶えてやる」

レイは上目遣いのシャルロットを見つめ、真剣に告げた。
それは心からの言葉であり、嘘偽りはなく、本当に“なんだって”叶えるつもりなのだ。

もちろんそれは、シャルロットが無理な願いをしてくることは絶対にないと信じているからこそそのことなのだが、その心は本物だった。

「レイ……／＼／＼／＼」

その言葉に感動し、シャルロットはさらに強く抱きつき、レイの胸に自分の頬を甘えるようにこすりつけた。

「いやいやいやいや！さつきから気になつとつたけど、何なん？どんなイチャつきようやねん！手えつなぐまでは、まあええわ！再会の時に抱き合うのも別に構わん！やけど、ホントに何なん？話の途中に抱きついたり、意味もなく頭撫でたり！！……………てか、なんでウチがツツコミ役に徹しなきゃならんねん！！！」

……………怒涛のツツコミ。

さすが関西人。いえ、ただ似非関西弁を使う魔族だというだけです（笑）

「悪いな。……………なんせ久しぶりだからな」

「そう。久しぶりだから、しょうがない」

二人は開き直つたようだ。

「アンタらの気が知れんわ！！さつきまで敵…ってか、今でも完全には和解してないウチの前でよくそんなこと出来るな！！？」

「いや、もうお前に戦意はないだろう？」

「まあ、戦う気いなんてこれっぽっちもないけど……………」

「なら、私たちが警戒する必要はない」

レイが質問し、シエラが答え、それに対してシャルロットが返した。

「なんや、答え方も息ぴったりやね……………」

「当たり前だ」

「そう。これが普通」

シャルロットは『普通』と言い切り、またもやレイの胸に甘えるように頬をこすりつけ始めた。

「……………もうええわ。アンタらはそういう二人やって割り切ることにする。もうツッコまんよ?」

シエラはもう諦めたようだ(笑)

ちなみに、レイとシャルロットはぶざけているわけではない。……
とだけ補足しておこう。

『もじ芝居はしなくてもいいぞ』（後書き）

本当に、レイとシャルロットにふざけさせたわけではありません（笑）

しかし、シエラをツッコミ役に回らせたのは、もちろんわざとですよ〜ww

というわけで、次回もよろしくお願いします！

それではっ（^^）ノシ

伝家の宝刀 。 (前書き)

いよいよ、レイとサイトたちが再会を果たします。

さて、どんな感動的な場面に……………おや？中途半端にギャグ路線に入るらしいぞ？

……………大丈夫かな？(笑)

というわけ(どついうわけだ!)で、本文をどうぞ！

伝家の宝刀。

「それで？さっきの『提案』って一体何なん？……………なかなか話してくれんもんやから、だんだん気になってきたわ」

シャルロットがひとしきりレイに甘え終え、普通に抱きつくだけになった頃合いを見計らって、シエラは話しかけた。

「……………忘れてた。……………提案というのは……………」

言葉が不自然な場所で途切れた。

何故なら、この部屋の扉がバアアアンツ！と豪快に開き、そこからサイトたちが飛び込んできたからだ。

「タバサ！助けに来たぞ！！」

「爆発は大丈夫だったの??！」

「お姉様！これでもう安心なのね！！」

そして、その中でサイトとキュルケ、シルフィードが大声で言葉を口に出した。

「……………タイミングが悪いな」

レイはシャルロットに抱きつかれたまま、呟いた。

せっかくシャルロットが『提案』について話すはずだったのに、ちよんごサイトたちが入ってきたことに苦笑している。ついでに、シエラも苦笑にがわらい。

だが、『レイ』の記憶を消されているサイトたち一行は『え？これ、どういう状況?!』なんてタバサが苦笑中の魔族（レイの事をそう勘

違いしている)に抱きついてるわけ??!』とか思っていたりする。確かに、この状況は混乱するだろう。

タバサ(「シャルロット)を助けるために来たのに、そのシャルロットは安心しきって一人の少年に抱きついてるのだ。さらには、濃い紫の髪をした少女も苦笑いで立っているため、意味不明な状況なのだ。

「あー、悪い。状況が飲み込めないようだな」

レイはそう言って、サイトたちの方へ右手を向け、《我が魔の制約を解除せよ》と呟いた。

すると……。

「わっ!なによ、この記憶!」

「これは……レイなのかい?」

ルイズが驚きの声をあげ、ギーシュが確認を取る。

「そう。レイが帰ってきたノノ」

シャルロットは本当に嬉しそうに帰ってきたと告げた。

そして、記憶の戻った皆がレイに話しかける。

「レイ!戻ってきたのかよ!もっと早めに言えよな!……ってか、なんで記憶がなかったんだ?」

「そうよ!帰ってきたらすぐにご主人様に挨拶するのが道理でしょ! “もどき”でも私の使い魔なんだから!……それと、なんで記憶がなかったのよ!」

「それに帰ってくるのが遅いわ。タバサが可哀そうでしょ?……」

記憶消すのも可哀そうだわ」

「確かに帰ってくるの遅すぎなのね！記憶にはなかったとはいえ、お姉様がどれだけ悲しんだか！……記憶を消したことは謝って欲しいのね！」

「とつかいつ帰ってきたんだい？……記憶消すのはどうかと思うな」

「私も記憶消したのはよくないと思うわ」

「確かに！」

最後の方は文句が変わっていき、モンモランシーは記憶消去に関してだけ、最後のマリコルヌに至っては、ただ同調しただけだったが（笑）
しかも、それとなく『記憶を消した』ことについて言及するのを忘れない一同。

「そう……だな……。すまなかった、この通りだ」

レイはそう言って頭を下げた。

「ちよ、そんなに改まらなくてもいいわよ！」

ルイズはレイを止める、だが止まらない。

「いや、今回のことは全面的に俺が悪かった」

そして、ルナルトとの勝負の経緯を語った。

魔族についてあまり知らないマリコルヌとモンモランシーには魔族の説明から始め、初期の戦闘では実力が拮抗していたこと……しかし、ルナルトが本気を出して髪色が血の赤に変わった時から戦闘がキツくなり、負けそうになったこと……最終的には自分の生命維持

に必要な魔力も消費し、ルナルトを倒したこと……だが、そのせいで結晶の中に封印されてしまったこと……そして、ユリアナ・アスラナ姉弟に託した青い結晶に宿した『残留思念』によってシャルロットに会い、悲しまれないように記憶を消したことを話した。

「……しかし、それは間違っていたようだ。記憶は消すべきではなかった。だから……本当にすまなかった。……そしてシャルロット……勝手なことをしてすまなかった。こんな情けない俺だ、拒絶したって構わな「拒絶なんてしない！」……シャルロット……？」

シャルロットは、レイの言葉を遮り、言葉を続ける。

「あなたは帰ってきてくれた。……それだけで充分。また、一緒にいられるだけで、満足。幸せ。……だから、これからはいつまでも一緒にいて……」

「……ありがとう……こんな俺を許してくれて。……シャルロットが望むのなら……いや、俺が望むから、いつまでもお前の傍に……約束だ」

「レイ／／／／／……やくそく／／／／／」

潤んだ瞳でレイを見つめ、感激しているシャルロット。そして、そのシャルロットを愛しそうに見つめるレイ。

「……結局はこうなるのね……。まっ、変わってなくてなによりだわ」

キュルケの呟きも、今の二人には聞こえなかったとか。だが……。

「で？アンタら、いつまでウチを放っておくつもりや？さっさと」

提案』とやらを教えてもらわんと困るんやけど。……あんまここに
いると魔王様に失敗したのがバレる。任務の失敗はウチの『死』を
意味する。死なんたためにもはよ逃げたいんよ」

「忘れてた……」「……あー、悪かった」

二人仲良く答えるレイとシャルロット。

「つか、この人、魔族？『気』が魔族なんだけど！なんで今まで気
付かなかった？！………もしや、さっきまで会話に参加出来ない空
気状態だったから？？！」

やっとシエラが魔族であることに気付き、声を張り上げたサイト。
そして、魔族であることに気付かされた一同は戦闘態勢に入ろうと
するが……。

「いや、逆になんで気付かんかった？！自分で言うのもなんやけど、
ウチ結構目立つと思うで？！髪色、濃紫やし！！………それと、空
気言っつな！！！」

こんな反応に気が抜け、脱力してしまった。

「ツツコミ、ご苦労。………それと、説明するからちよつと黙ってる」

そう言って、有無を言わずにシエラの説明を始めるレイ。

「こいつは魔族だが、悪いヤツじゃない。俺たちに害を及ぼす気は
ないし、使えるツツコミ役だ」

「いや、ウチはまだツツコミ役になった覚えないからね？！それ
に、はよ逃げなアカン言うてるやないか！！『提案』ってなんやっ
たんよ！！！」

シエラはそう言ってシャルロットに詰め寄る。
だが、レイはさらに話を続ける。

「……………今の反応を見て、こいつの役目は分かってくれたと思う」
「分かったのね！」

「ああ、確かに」
「そうね。どこからどう見てもツツコミ役だわ」

同調の声をあげるシルフィードとマリコルヌ、モンモランシー。
他のメンバーもコクコクと首を縦に振って肯定する。

「認めんなああ！…それと、さつきから『確かに』しか言っとらん
ヤツおるやろ???!」

おずおずと前に出るマリコルヌ。

「……………そうや、アンタや！ウチはなあ、さつきまでの戦闘で、ア
ンタよりもずつと目立ってきたわああ！…ウチが空気ならアンタは
なんや！？無か?!最早存在すらしてないなあ???!」

怒涛のツツコミを終え、肩で息をするシエラ。

「いや、どこまでいっても優秀なツツコミ役よね?」
「そうだね。僕もここまで鋭いツツコミをする人は初めて見たよ」
「いやいやいや、ウチはツツコミ役やないって言うてるやろ!!…第
一、ここで逃げたらもうアンタらに会うこともないわ!!…!」

ルイズとギーシュの呟きにもツツコミを入れる辺り、さすがです
笑)

「さて、シエラ。もう満足したか？」「いや、ウチも好きでツッコんでるわけやないからね？！」「……またもやツッコミ、ご苦労。さて、そろそろこの場から動こう。もうこの場にいる必要もないしな。転移する」「いや、待って？！ウチもついてかなアカンの？？！」「………」

《テレポー》「いや、なんか答えるやあああ！」「テーシヨーン！」

魔法行使の際にも伝家の宝刀ミコトを入れてくるとは………さすがにクドくないか？！」「いや、作者アンタがやらせとるんやろつが………」

今の声は無視するとうましよう。

伝家の宝刀 。 (後書き)

はい、伝家の宝刀とは、シエラのツッコミだったわけですねw
つまり、サブタイからかなりふざけてました(笑)

というわけ(どういうわけだ！アゲイン！！)で、今回はこの辺で。
……なんか、テンションがおかしい気がするけど…。

まあ、それは気にしないでいただいて、また次回にお会いしましよ
う(^^)ノシ

？新たな決意？（前書き）

……ヤバイです。
本当にヤバイです。

一日一投稿が、真剣につらくなってきてしまいました……。
すみません……。

なので、ここでアンケートを取らせていただきます。

？ 無理してでも一日一投稿を続けやがれ！
？ もう少し一日一投稿を続けて、出来そうなのか様子見しな！
？ ……まあ、二日に一投稿で許してやろう。
？ いや、二日に一投稿も意外とキツイよ？…ここは三日に一投稿
で！
？ 不定期でもいい。……ただし！もっと質を上げやがれ！

この五つのうち一つを選んで、感想にて教えてくださると嬉しいで
す。

ちなみに、締め切りは22日までとします。

さて、気を取り直して、今日の分の本文をどうぞ！！

？新たな決意？

レイたちが転移してきたのは、フォン・ツエルプストー家の門の前。つまり、シャルロットの母親も匿ってもらっている、キュルケの実家だ。

「キュルケ、とりあえずここに転移してしまっただが、問題ないか？」
「ええ、大丈夫よ。むしろ好都合。…みんなは貴族辞めるって言うて出てきちゃったからね」

「そんなことだろうと思った。………まあ、貴族云々については俺がなんとかしよう。うまくすれば貴族に戻れるはずだ」

そう言つて、はあ…と溜め息をつき、もう一度レイは口を開く。

「さて、シャルロット救出作戦は無事に成功した。………今日は疲れただろう。各自、キュルケに部屋を割り振ってもらい、その部屋で自由に休憩してくれ」

「お前たちはどうするんだ？」

レイの言葉に、サイトが疑問を呈した。

「俺とシャルロットは、シエラに用事がある。………お前たちは先に戻っている」

「ん〜、まあ分かったよ。………あとでどんな話が聞かせるよな」
「差し障り無い内容の話であればな」

レイはそう答え、サイトとルイズ、キュルケ、ギーシュ、モンモランシー、マリコルヌは部屋へ、そしてシルフィードは竜形態に戻つて森へと向かつていった。

皆が行くのを見届け、レイは口を開く。

「それで、シャルロット。シエラに『提案』があるんだよね？」

「そう。聞いて」

そして、シャルロットは、シエラの方に体を向ける。

「あなたは、私たちの仲間になる気、ある？……………あるのなら、あなたが仲間になることを提案。魔王と意見が違うのなら、ここにいた方が安全。だから、私は歓迎する。レイは、どう？」

シャルロットはそんな提案をし、レイに同意を求めた。

「ああ、すでにユリアナやアスラナを仲間として迎えているからな。今さら増える魔族の一人や二人、どうってことない。……………さらに言えば、この先の戦いに備えて戦力アップにもつながるしな」

そう言ったレイは、『で、どうだ？』とシエラに話を振った。

「ウチは…………ウチは確かに、この世界を手に入れるために無駄な犠牲を出そうとした魔王様に不快感を覚えとる。今までは『ある計画』のもとに完全なる支配力を手にいれて、犠牲は出さずに世界を制覇するはずやったんやけど、魔王様は時間がかかることに嫌気が差して強行手段に出たようや。……………それは、ウチの信念に反する。……………けど……………」

そこでシエラは言葉を切った。

そして、『ある計画』という言葉をさり気なくスルーしつつも気になる様子のレイが、話を繋げる。

「魔族であつても一人の理性ある者として、お前にも大切なヤツはいるだろうな。……おそらく魔族の一人であろうそいつの魔界での扱いが、お前の裏切りによって酷いものになることを恐れているだろう?」

ズバリ、と自信を持って訊いたレイ。

それは本当に当たっていたようで……。

「アンタ、鋭すぎと違うか?……まあ、説明しなくていいから楽やけど」

「適当に言ったものが当たるとは」

「いや、適当に言つてたんかい!!なんかしつかり推理して『これ以外に答えはない!』みたいな感じで言つとつたやん!!」

やはり、切れ味のあるツッコミのようで(笑)

「レイの言つ事が当たるのではなく、レイの言つ事が真理であり、絶対」

シャルロットの『レイ至上主義』は、最早^{もはや}レイを唯一の絶対神とする宗教になりつつあるようだ(笑)

だんだんと暴走してきたこの会話の先が思いやられ、ツッコミ担当としてストッパー役も務めるシエラが軌道修正を図る。

「分かった分かった、そういうことにしたるわ。…で、ウチが仲間になるかどうかやけど、もう少し考えさせてくれん?」

シエラはそこで一旦言葉をきり、その理由を説明しだす。

「気性の荒い魔族でも、ウチの兄貴だけは穏健派で通っててな、ウチの尊敬してる人なんよ。でも、兄貴の戦闘能力はそこまで……いや、全くもって高くない。武器の製作は得意やけど、やっぱり武器創造能力だけじゃ魔界では生き残れんくて……ウチが助けたらんと、魔族同士の争いによつて命を落す可能性もあるんよ。ウチは兄貴に死んで欲しくない。……だから、少し考えさせてくれんかな？」

その言葉を受けて、少しの時間考え込んだレイが、やがて口を開く。

「お前にある選択肢は3つだ。…まず、俺たちの仲間になること。この場合、兄貴を連れてきても構わないし、俺たちは魔王に対抗する集団の中で一番の勢力を誇っていると自負出来る。代わりに、他の魔族と戦闘しなければならぬ可能性が高い」

ここでレイは一旦話を区切り、また『第二に…』と話を繋げる。

「この場から去り、お前の兄貴と一緒に異世界のどこかへ逃げる選択肢。この場合は、逃げきれば戦闘することはないだろう。だが、追い詰められれば、確実に命を落す」

もう一度、話を区切り、最後の項目を『この選択は正直言っておすすめしないが…』と、続ける。

「魔王の配下に戻る選択もある。だが、この選択をすれば魔王からなんらかの罰を受けることは確実だろうな。最悪、お前の言ったように『死』が待っている」

全ての選択肢を提示し終え、レイは『どうする?』と、シエラの方を見やる。

シエラはしばらく考え込んだかと思うと、唐突に口を開いた。

「ん……まっ、兄貴と相談して決めてくるわ。それくらいの期間なら逃げ切れるやる。………それと、魔王様……いや、魔王の配下に戻ることはないで。アンタらの敵にはなりたくないな。………あともう一つ。アンタらの仲間になったら、『ある計画』についても分かる範囲で語ったるわ。アンタ、気になつとつたやる？」

シエラは勝ち誇ったように、ニヤリと笑いながらそう言い放ち、転移を果たした。

「……別に気になつてなどいない」

レイは、シエラが転移した後の空間に向かってそう呟き……。

「意外と、拗ねた姿も良い……」

そんな少し強がったようなレイを見て、新たな発見をしたシャルロットであった。

「ん？なんか言つたか？」

「なんでもない……」

そんな新たな発見をレイに言ったら、もうずっとそんな姿を見ることは叶わなくなる気がして（基本、レイは無理して強がったりするような子供っぽい所は見せたがらないため）、なんでもないフリをしておいたシャルロット。

「そうか。なら、部屋を割り振ってもらいにいこうか」

『また、シャルロットと一緒に行動できる』という喜びをかみしめながら、シャルロットの方へ手を差し出すレイ。

「（コクリ）……また、ずっとあなたの傍にいれる…嬉しい／＼／＼」

やはり同じ喜びを感じるようで、シャルロットも頬を赤らめながらも、レイの手をとり、握る。

それを優しく握り返し、ゆっくりとツエルプストー家の門をくぐっていく二人。

ちよつど屋敷の方から夕陽が差ししていて、いつか二人で見た夕陽を彷彿とさせる。

そんな明るいつ焼けは、漆黒の少年と蒼い少女の明るくも暖かい未来を示しているようで……。

「今度の約束は絶対に守る。……俺は、いつまでもシャルロットの傍に……」

吐息をつくような小さなレイの呟き。……それは、レイの？新たな決意？。

隣にいるシャルロットさえも、聞こえるはずもないほど小さな呟きだったはずなのに、シャルロットは顔を赤らめる。……あるいは、夕陽によって赤く映っただけかもしれない。

だが、シャルロットの顔を見つめるレイには、確かに頬を赤らめているように見えた。

そんなさり気ない光景でさえも、レイの目には鮮やかに映る。

手を握ってくれる、そんな暖かい存在がいるだけで、シャルロットの心は満たされる。

それは、やっとのことで再会を果たした二人が、本当に一息つけた瞬間で……二人の間に平和が戻ってきた瞬間だった。

シマワセは、心《ニウ》に(前書き)

とうとうレイとシャルロットが…!

お楽しみ?に!

それでは、本文をどうぞ…!

シアワセは、心《こころ》に

二人は手を繋いだままフォン・ツエルプストーの屋敷……キュルケの実家に入った。

まず最初に向かうのはツエルプストー領の領主である、ツエルプストー辺境伯のもとだ。

とりあえず、挨拶をしておくつもりらしい。

扉の前に立ち、静かにノックする。

コンコンツという音を響かせ、それに応える声を聞いたのちに、二人は入室する。

「失礼する。レイ・クロカミだ。……久しぶりだな、辺境伯」

レイは、やはりいつも通りの口調で。

レイたちが、匿ってもらっているシャルロットの母親に会いに行つた際に面識があつたので、辺境伯も驚かずに二人の方へ体を向けた。

「同じく、タバサ。……母様を匿ってくれていて、ありがとう。助かってる」

シャルロットは、レイと母親以外には『タバサ』と名乗り続けるつもりらしい。

「おう、お前たちか。随分と久しぶりだな。匿っていることついては、礼には及ばんよ」

それなりに気さくな調子で返す辺境伯。

「いや、俺からも礼を言う。……それと、今回もまた滞在することになるだろうが、重ね重ねすまないな」

「いや、いいんだよ。……無事にミス・タバサを救出できたんだ。お祝いみたいなものだよ」

「……悪いな。この埋め合わせは、いつか必ず」
「ありがとう」

レイの言葉に追従するようにシャルロットも礼を言うと、ちょうど他のメンバーを部屋に案内していたキュルケが辺境伯の部屋へ戻ってきた。(メイドに案内させればいいのだが、自分の荷物も置きに行くために部屋まで出向いたのだ)

「おお、キュルケ。全員案内したか？」

「はい、お父様」

そしてキュルケはレイたちの方に向き直り、問いかける。

「あつ、二人の部屋は前と同じで良いかしら？」

「ああ、だがその前にシャルロットの母親にも挨拶しておきたい。

……いいか？」

レイはそう答え、さらに質問で返した。

「いいわ。部屋は変わってないからね」

キュルケの言葉を聞き、レイたちはとりあえずシャルロットの母親のところに向かうのだった。

今度は、シャルロットの母親……オルレアン夫人が滞在している部屋の前に立つ二人。

シャルロットがノックし、答える声を聞いた瞬間に入室する。

「お母様……！」

シャルロットはそう言って、オルレアン夫人に抱きついた。

「ああ、シャルロット。久しぶりね。……レイ君もお久しぶりですね」

「そうだな。……あれから、体調はどうだ？」

レイは抱き合う親子を暖かい目で見つめ、質問した。

「とてもいいわ。全部あなたのおかげです。……シャルロットが無事に戻ってこられたのもあなたのおかげ。本当に感謝してもしきれないわ」

オルレアン夫人は本当に感謝の念が強いらしく、レイに感謝の言葉を告げた。

「俺は当然のことをしたまでだ。……いや、当然のことすらもできないところだった」

「それは、しばらくあなたのことを思い出せなかったことに原因があるのかしら？」

なかなか鋭いオルレアン夫人。だが、レイは全く動じずに返す。

「ああ、それは俺の罪だ。……だが、それも償えるように、シャルロットのことは幸せにしてみせよう」

その言葉に、シャルロットは赤面し、オルレアン夫人は驚きで少し目を見開いた。

「レイ……ありがとう／＼／＼／＼」

そして、シャルロットは幸せそうに呟いた。

そんなシャルロットを見て、オルレアン夫人は微笑しながら、口を開く。

「それは、結婚するつもりだ、と捉えてよろしいのかしら？」

「俺としては、そうなると嬉しいとは思っているな。……まあ、するとしてもまだ先の話だが」

珍しく恥ずかしそうに頬をポリポリと掻き、レイは答えた。

そんなレイを見てシャルロットは顔を真っ赤にし、『れれ、レイと……け、結婚……／＼／＼／＼』と呟いている。

「ふふっ、分かったわ。シャルロットのことを頼みましたよ」

「……俺でいいのか？」

「それはシャルロットが決めること、私は嬉しい……／＼／＼／＼……だそうです。だから、私がとやかく言うことでもないし……それに、あなただったらシャルロットを幸せに出来そうなもの。むしろ、こちらからお願いするわ」

オルレアン夫人は、楽しそうにそう告げた。

「そうか……なら、もう一度言おう。シャルロットは必ず幸せにし

てみせる。安心してくれ」

「ええ、あなたなら任せられるわ」

そう言つて、オルレアン夫人はまたも楽しそうに手を口にやり上品に笑っていた。

補足だが、シャルロットはこの会話中、終始赤面し続けていたとか。

「さて、二人も久しぶりの再会でしょうし、もう挨拶はこれで終わりにしましょうか。部屋にもどつていいわ」

一通り三人での会話を終え、オルレアン夫人はそう切り出した。

「シャルロットはもういいのか？」

「大丈夫」

「そうか。それなら、俺たちはこれで失礼させてもらう。ではな」

最後はオルレアン夫人に向かった言い、レイはシャルロットに手を差し出す。……どうやら、また手を繋いで移動するらしい。

当然のようにその手をとり、しっかりと握り締めるシャルロット。

「じゃあ、お母様。また夕食の時に」

「ええ。後でね」

オルレアン夫人の言葉を聞き、二人は手を繋いだまま部屋を出て行った。

「ふふっ、二人は本当に仲が良いのね」

そんな幸せそうな気きは、誰にも聞こえなかったとか。

部屋に着いた二人は、どちらから言つてもなく、ベッドに腰掛けた。……シャルロットの席はレイの上だが。

つまり、レイの膝の上に腰掛けているような感じだ。完全密着。

それを当たり前のように、レイはシャルロットの前に手を回して後ろから抱きしめる。

そして、レイはシャルロットの耳元で優しく話しかける。

「なあ、俺が戻つてこれた理由、聞きたいか？」

そんなレイの行動に赤面しながらも、シャルロットはとても幸せそうに答える。

「?!// // //……聴きたい// // //」

シャルロットの答えを聞き、レイは口を開く。

「それはな、シャルロットが俺に助けを求めてくれたからだ」

レイはここで一旦言葉を切り、シャルロットを持ち上げて自分の方に向けて座らせる。(もちろん、完全密着状態のまま、だ)

そして、未だに赤面しているシャルロットを見つめながら、話を続ける。

「俺はあの結晶の中で、長い時間封じ込められていた。だが、実際にはこの世界の時間にして、あと百年は封印され続けるはずだったんだ」

そんな言葉を聞き、ハツと息を呑むシャルロット。

そして、またレイが消えるのではないかと怯えるシャルロットを見て、『今度は消えないから安心してくれ』と笑いかけながら髪を梳いてやり、さらに話を続けるレイ。

「あのままでは封印され続けるはずだったんだが、シャルロットは俺に助けを求めてくれた。……………結晶の中に封じ込められていた俺に、お前の声が聞こえてきたんだ。その声が、青い結晶を崩してくれた。……………シャルロットの『逢いたい』って想いも伝わってきた、そんなお前の想いが俺を助けてくれたんだ。……………だから……」

俺を救ってくれてありがとう。

「そんなシャルロットだから……………約束を破りかけ、記憶まで消し去った俺に助けを求めてくれるお前だからこそ、俺はお前のことが好きなんだ。俺のことを支えてくれるお前だからこそ、こんなに愛しいんだ」

ここでレイはもう一度言葉を切り、そしてシャルロットのことを真剣に見つめ、口を開く。

「……………シャルロットは、俺の気持ちに伝えてくれるか……？」

珍しく、自信に満ちていないレイのそんな言葉。

だが、シャルロットの答えはもちろん決まっている。

「私も……あなたのことが好き……大好き／＼／＼／」

静かに目を閉じ、レイの方に唇を近づけるシャルロット。

その意図を察した漆黒の少年は、蒼い少女の唇にそっと自分の唇を重ねた。

それは、二人の初めてのキスだった。

「シャルロット、俺の恋人になって欲しい。……構わないか？」

「喜んで……／＼／＼／＼／」

二人の物語は始まったばかりで、これからも続いていくだろう。ただ二人には、結末を予想することだけは出来た。

『俺（私）たちは、絶対に幸せになる』

シアワセは、心《ニユ》に（後書き）

二人の物語だけは絶対にハッピーエンドになるんでしょっね。

いや、そんなエンディングにしてみせます!!

ハッピーエンド以外認めませんよ!!

さて、次回もよろしくお願いします。

それではっ (^ ^) ノシ

感情論で論破する！（前書き）

一応今日で投稿に関するアンケートを締め切りにします。
ご意見がありましたら、お早めに。

さて、それでは本文をどうぞ！

感情論で論破する！

「あんたたち、トリステインから手紙が届いてるわ」

キュルケからのそんな言葉。

それは、ツエルプストー領で迎えた最初の朝の出来事だった。

当然、貴族を辞めてガリアに突撃した彼らには緊張が走る。

そんな中、レイは“元”貴族たちに向かって諫めるように話しかける。

「まあ、そう緊張するな。シャルロットの救出は成功を収め、ガリア側に咎められることもなかったんだ。確かに、エルフの邪魔は入ったようだが…そしてそのエルフによってガリア国王へ伝達される可能性も高いが、なんとかなるだろう。……いや、なんとかしてみせよう」

確かに、レイならなんとかしてくれるかもしれない……そう思った
一同だった。

「それで、手紙の内容はどんなものなの？」

そう言って、ルイズはキュルケから手紙を受け取る。

そしてビキッと固まった。

「お、おい、ルイズ？どうした？」

「どづしたのだね？？」

サイトやギーシュの声にも、全く反応を示さない。

「もう、一人で見てないで皆にも見せなさいよ」

モンモランシーはそう言い、未だに固まっているルイズから手紙を取り上げた。

「なにになに……………」『ラ・ヴァリエール領で待つ アンリエッタ』

……………これのどこに固まる要素があったわけ??」

モンモランシーが手紙を読み上げ、ルイズは恐怖に震えだす。……そしてモンモランシーや、周りの者たちはそんなルイズを見て困惑気味だ。

しかし、レイだけはルイズの恐怖の理由を察したようで、『そういうことか』と得心がいったというような表情になっている。

レイの表情の変化にいち早く気付いたのはもちろんシャルロットで、レイの腕に自身の腕を絡ませながら問う。

「なにか分かったの?」

レイはシャルロットの髪を一回梳いてやり、答える。

「ああ。大方、ルイズの怯えは『烈風のカリン』…もとい、ルイズの母親であるカーリーヌ・デジレへの恐怖からだろう。あの人物の威圧感人間としてはかなりの力を持っていた。さらに言えば、過去の伝説からして、この世界では『生ける伝説』と称されてもおおしくない」

「ルイズの母親がああ『烈風のカリン』?! マンティコア隊で無敵を誇った最強の隊長?? ああ十隻の艦隊にも匹敵する力を持つって言う???!……………でも、それだから何だって言うんだ? どれだけ強くて、ルイズの母親じゃないか」

マリコル又は、そんな疑問を呈した。

その問いにレイは答えようとするが、その前にルイズが口を開いた。

「……お母様がマンティコア隊の隊長だった頃の隊のモットー、知ってる？」

そんな言葉に、レイ以外は『知らない』と、首を横に振る。

それを見届けたルイズは、重苦しく口を開く。

「それは『鋼鉄の規律』よ。……お母様は、今回私たちがガリアに行くためにやった規律違反を見逃してくれるはずがないわ。だって、規律違反が何より嫌いな人なんだもの!!」

ルイズはそう言って、また震える体を自身の両手抱きしめ、顔を青くしていた。

あれから、恐怖に震えるルイズを引きずってラ・ヴァリエール領へ向かう準備を終え、レイの転移によってその屋敷の門の前に辿り着いた。（“屋敷”というより、“城”のほうが近いかもしれないが）

「な、なあルイズ。いくらなんでも怯えすぎじゃないかい？ルイズの母上がマンティコア隊隊長『烈風のカリン』だとしても、軍務を退いてからもう30年も経ってるんだよ？それだけあれば、人間も変わるって」

「そ、そうそう！どうせ納屋にちよ〜っと閉じ込められる程度だっ

て!」

ギーシュがルイズの異様な怯えに引き気味な様子で諭そうとし、サイトもそれに同調した。

が、ルイズは全く答えない。

「どうやら、こいつの意識は明後日の方へ飛んでいるらしい。……まあ、確かに『烈風のカリン』の噂はかなり過激なものが多いからな。それに、人の本質というものはそう簡単に変わるものでもない」

皆の間に沈黙が帳を下ろす。

やはり、生ける伝説である『烈風のカリン』に怒られる可能性に、内心穏やかではられないのだろう。

……いや、レイを除いても、シャルロットだけは全く怯えていない。なぜなら、シャルロットは、『何があってもレイがいればそれでいい。それに、レイなら何とかしてくれるから大丈夫』と思っているからだ。

そして、レイも何とかするつもりらしく、皆の恐怖を振り払うかのようにあっけらかんとした口調で話し始める。

「だが、それほど怯える必要もないだろう。いくら強いとはいえ、『烈風のカリン』も人の親だ。人間性が完全に欠けた『鬼』というわけでもないはずだ。……それに最悪、俺がなんとかしてみせるから安心しろ」

レイが言うと、本当に何でも『なんとかなる』気がしてくるから不思議だ。……と、一同は思ったのだった。

補足だが、シャルロットはそんなことは思わず、レイなら絶対に何とかしてくれる、と確信していたとか。

門を開けると、そこには鬼がいた。比喻ではなく、まさに『鬼』。ピンクブロンドの髪を風に靡かせ、杖を握り締めて目を吊り上げた鬼が、仁王立ちでこちらに杖を向けていた。

「訂正しよう。『鬼』は確かにいた。……どうやら、俺がなんとかする必要があるみたいだな」

全く怯えてないにせよ、レイにすら『鬼』と言わしめる威圧感を放っていた。

そして、レイが『鬼』と認めるような人物に、他のメンバーが恐怖しないはずはない。その恐怖を直接知っているルイズは特に、だ。補足だがシャルロットは（略）。

刹那、カリーヌ……いや、ここでは『烈風のカリン』と呼んだ方がいいだろう……『烈風のカリン』が、巨大な竜巻を放ってきた。

……『カッタートルネード』。風のスクエアスperl。

風魔法において、かなりの威力を誇る魔法が、ゴオオオオ！と音を立ててレイたち一行に爆進する。……いや、お仕置きとしてもキツ過ぎないか？下手したら死ぬんじゃない……。

だが、レイがいれば『下手したら』なんて状態になるはずもなく……。

「親として、その行動はどうかと思うぞ。……子供を恐怖で支配し、自分の言うことだけを聞く木偶に変えたいのなら、止めはせんがな」

一行……というかルイズにぶち当たる前に、その竜巻は魔素まで分解され、完全に雲散した。

「なっ！！？……何をしたのです！！」

驚いている喚いている『烈風のカリン』になど目もくれず、レイは彼女の背後に回りこみ、トンツと手刀を後ろ首に落した。

気絶してバタリ、と倒れこもつとする『烈風のカリン』……いや、カリーヌを…レイは支えてやり、近くにいた衛兵に突き出した。

「正当防衛だ。気にするな」

そして、そっけなくそう言い放ち、またシャルロットの方へ戻っていった。………先ほどまでの凍てついた雰囲気など嘘のように、シャルロットの頭を優しく撫でるのも忘れない。

周りにいたアンリエッタやウェールズ、アニエスは『この二人は…またか』というような、呆れたような、そして諦めたような…そんな生暖かい視線を送る。

当然、皆の『レイに関する記憶』は戻っているので、『この黒衣の少年は誰だ？！』という状況にはならない。

………まあ、それでも久しぶりに見たレイとシャルロットの惚気っぷりに嘆息することはやめられなかったが。

さて、そのまま場の空気を支配したレイにより、今はヴァリエール家の『謁見の間』的な場所に来ている。

ちなみに、とりあえずこの場にいるのはレイ、サイト、ルイズ、公爵を始めとするヴァリエール家の面々、そしてアンリエッタ&ウェールズ+その護衛少数、そしてレイの傍を離れる気が全くないシャルロットだ。

アンリエッタらの護衛はアニエスを含む少人数の護衛以外は『謁見の間』の扉の外に待機し、警備しており、ギーシュたちは他の部屋で待機している。

「では、今回の件についての説明及び、説得を始めさせてもらおう」

レイは静かに話し始めた。

他のメンバーは口を開く気にもなれず、沈黙を守ってレイの話を聞いている。……もうここまでくると、レイの独壇場だ。

当たり前？のことだが、説明をする間にシャルロットが離れるはずもなく、未だレイの腕にくっついていてる。

「貴族を辞め、国法を破ってまでガリアへ密入国したのには理由がある。……それはここに居るタバサの救出。こいつはガリアに捕らえられ、辛い思いをしていた。そんな状況から彼女を助けるための行動だったんだ」

「理由があつたとしても、ルールを破ったことには変わり在りません。潔く罰を受けべきです」

先ほど復活を果たしたカーリヌが、レイに向かって抗議する。

だが、レイはそんなカーリヌなど歯牙にもかけず、話を続ける。

「その意見も理解出来ないことはない。だが、俺の意見は違う。確かに、ルールを守ることは大切だ。もし誰も守らなければ、世界は荒れに荒れるだろう。……それでも、ルールよりも大切なものも確かにある、と俺は思うぞ」

お前たちはどうだと、レイはカーリヌや横にいる公爵、そしてアニエスら護衛に囲まれたアンリエッタとウェールズを見渡した。

「それでもルールは守るべきもの！破ることなどあってはならないのです！」

随分頑固なお人のようだ。

だが、レイはそんな反論などものともせず、答える。

「では、そのルールが間違っている可能性があるとは考えなかったのか？いくら国法とはいえ、作ったのは人間だ。間違いもあるだろう。……いや、間違いだらけだ。今回のことがその間違いに該当するようなものとは限らないものの、こいつらの行ったことは人道的に正しいはずの話であり、それは手助けをせずに捕まっているであろうコルベール教授から、話を聞いて分かっているはずだ」

オストランド

そう、『東方号』による陽動作戦に加担したコルベールや、オンデイーヌの生徒たちは、すでに捕まって半軟禁状態の客人扱いで王宮にいる。

その人物たちから今回の経緯を聞いていてもおかしくないのだ。

「『助けを求める友達がいれば、例え貴族を辞めても、国法を破つてでも、全力を尽くして助ける』。そんな心は、果たして本当に悪いのだろうか。理性的に考えれば悪いのかもしれない。だが、俺はそういう心は尊敬に値すると思うぞ」

ここで一旦話を区切り、少しだけ微笑しながら先を続ける。

その笑みは、普段の凍てついた表情とギャップも相まって、とても人を惹きつける魅力があり、『こいつの言うことは正しい』と思わせるようなモノだった。

「……もちろん、そんな“勇気ある行動”は、紙一重で“愚行”となる。それでも、今回は成功したんだ。これは実に浅い考えだし、

子供の戯言だと思うかもしれないが、俺はその行動は正しいと思う。……第一、困っている友達も助けられないようで何が“誇り高き貴族”か。そして、貴族である以前に俺たちは人間なんだ。たまには身内を助けるために無茶を試みた方が、人生楽しいと思わないか？」

最後にはニヤリ、いつもの不敵な笑いを。

「自分が選ばなかったことで後悔するのなら、選らんだことで後悔した方がいいと、俺は思うんだ」

レイの拍子抜けするようなそんな言葉……だが、それは確かに“人”として大切なことなのかもしれない。

それが善行なのか、それとも悪行なのかによって、その見解は大いに変わってくるのだろう。

だが、案外それが人間の本質なのかもしれない。

「自分の信じた道なら、迷わずに進めばいい。人の道を踏み外しているなら、注意してやればいい。……そして、もう一度問うが……今回の件は善行だろうか？それとも悪行だろうか？」

レイの言葉に対し、応えたのはアンリエッタだ。

「レイさん。確かに、あなたの言うことは間違っていないようですが、今回の件も悪行とは言えないでしょう。……よって、今回の件は不問とし、皆さんを貴族に復帰させます」

「そうだね。僕としてもそれが正しいと思うよ」

「なっ！陛下、ウェールズ様！！それでよろしいのですか??！」

カリーヌがこんな声をあげるが、これを諫めるものがいた。

「カリーヌ。……確かにルイズは国法を破ったのかもしれない。だけど、この子は友達のために命さえかけられる子に育ったのだ。……これほど嬉しいこともあるまい？」

「あ、あなた……」

なんか言い始めたが、レイはそんなことお構いなしに、シャルロットを引き連れて部屋を去ろうとする。

「お、おい、どうしたんだよ？」

「そうよ、まだ説得できてないじゃないの！」

サイトとルイズがそんなことを言うが、レイは全く気にしない。

「もう俺の出番はないはずだ。公爵がこっち側に回った。確かに、普段は夫人の権力の方が強いんだろうが、今回はかりは公爵が勝つだろう。……夫人としても、ルイズの成長は認められるはずだ。俺の言ったことは感情論ではないが、存外こういう説得の方がうまくいく時もあるぞ？」

レイはそう言うてから言葉を切り、サイトとルイズにとっては『またか……』と嘆息させるような言葉を吐く。

「それに、ここにいとあまりシャルロットと話せない。……そんなの、つまらないだろう？」

そう言うて、レイはシャルロットと会話を続けながらその場を去っていく。

「レイ。……確かに私も話したいけど……一緒にいられるだけでも

充分嬉しい…／＼／＼／

「ああ、シャルロット。俺も嬉しいよ」

「…好き…／＼／／」

あいにく、レイがシャルロットの言葉に答える前に二人の姿は確認できなくなり、声も聞こえなくなったが、サイトとルイズにはその答えが容易に予想できた。

『俺も好きだよ』

「…これしかないだろうな（でしょうね）」

そして二人、もう一度嘆息し、レイたちが去った方向に生暖かい視線を送るのだった。

感情論で論破する！（後書き）

え、俺は原作を持ってないので、どうやって貴族に復帰したかとか知らないんですよ。

それで、レイに説得させようと思ったんですが、論理的な説得が全く思いつかず……結局は感情論で攻めることになってしまいましたね（汗）

ご不満を抱いても、どうかスルーをお願いします！

それでは、また次回（^^）ノシ

あの方は、結構不思議な方だと思う。(前書き)

ええ、投票についてのアンケートをしましたか……？とすることに決めました！

つまり、もう少し一日一投稿で様子見です！

……まあ、冬休みにも入りますし、頑張ってみることにします。

さて、それでは本文をどうぞ！

あの方は、結構不思議な方だと思う。

二人が帰ったあと、なんだかんだでルイズたちは許され、なんだかんだでルイズの虚無がバレ、なんだかんだで解散となり、そしてレイとシャルロット、サイト、ルイズは、一泊することになったのだった。

ちなみに、他のメンバーたちも貴族復帰を許され（王宮にいたメンバーも解放され）、学院に帰っていった。

現在、レイとシャルロットはわざわざ多めに用意してもらった朝食を食べ終え、割り振られた部屋にて和んでいるところだ。

「レイ……抱っこ……／＼／＼／＼」

シャルロットは両手を上げ、レイの方へ。

レイは何も言わず、シャルロットを抱きかかえる。

そしてそのままソファに座り、シャルロットを自分の方に向けたまま膝の上に乗せた。

完全密着状態で、レイはシャルロットの髪を一度だけ梳いてやり……

……外に向かって不機嫌そうに声をかける。

「それで、ルイズ。なんの用だ？用がないなら扉の前はずっと立ち続けるのは止めてくれ」

すると、ルイズが入室してきて、文句一言。

「いや、中からあんな風にあま〜い雰囲気醸し出してる部屋に入れるわけないでしょうが……！」

そう、レイたちは別に小さい声で話していたわけでも、聞かれないように魔法をかけていたわけでもない。

つまり、二人で和んでいる間に繰り広げられていた『好き／＼／＼』やら『俺も好きだよ』やら『シャルロットは可愛いな』やら先ほどの『レイ……抱っこ……／＼／＼』やらの、あまゝい声が外にまる聞こえだったのだ。

……そんな状況の部屋に入るのは、至難の技だろう。

「それで、何の用？」

シャルロットは不機嫌を隠そうともせず我问うた。

……せつかくいい雰囲気になっていたというのに、邪魔されたのが気に食わなかったのだろう。

「あのね、ちい姉様が病気だっことは知ってるでしょう？」

「ああ。それを治して欲しいというわけだな？」

「そう！ そうなのよ！！」

ルイズはビシイ！ と指を突きつけ、嬉しそうに答えた。

「……まあ、もともと治すつもりだったし、了承しよう。……」

ただ、もう少し後にしてくれれば良かったんだが。もっと、こちらの都合も考えて欲しいものだな」

しっかりと苦言を呈するのもしれないレイ。

感動の再会を果たした後からは、レイの方からもべったりなため、一日中あまゝいのだ。

「都合って言ったって……。昨日だっずっとべったりだったんだから、今日はもういいかと思うじゃない！」

「……まあいい。確かに、早く済ませればいいことだし、素早く負担なく治せるのは、俺以外にあまりいないだろうからな。………と
いうわけで、さっさといくぞ」

そう言っつてレイはシャルロットを抱えたまま立ち上がり、ルイズを促した。

「えっ、ちょ、切り替え早っ!!」

そして、喚いているルイズなどお構いなしに、抱きかかえていたシャルロットを下ろし、手を繋いでカトレアの部屋まで歩いていくレイ。

補足だが、レイは、カトレアと以前会話した際に覚えた『気』を辿って部屋を探しているらしい。

そんなこんなでカトレアの部屋に辿り着いたレイとシャルロット、ルイズは、ゆつくりと扉をノックし、返事を聞いたのちに入室してゆく。

「あら、ルイズと一途な子と不思議な人ね？」

『不思議な人』というのはレイのことだろう。

以前に、レイのことを全く読み取れなかったことで『不思議な人』と、興味を持つようになったようだ。

「ちい姉様！レイを呼んできましたわ！！これで病気が治ります！！」

「あらあら、本当？嬉しいわ」

ルイズの言葉を聞き、信じているのかいないのかよく分からないような言葉を返し、コロコロと楽しそうに笑うカトレア。

「信じていないだろうが、俺はやるからには必ず治す」

「レイが言うんだから、それは絶対」

「まあまあ！すごい信頼関係ね！うらやましいわあ」

普通だったら嫌味にしか聞こえない言葉なものにも関わらず、カトレアの言葉は全く嫌味には聞こえないものだった。それはカトレアの純粹で儂い魅力の成せる技だろう。

「あんただって病気が治れば、それなりに信頼できる人も作れるさ。

……さて、それでは診察に入ろう」

そう言って、レイは目に魔力を通す。

すると、レイの漆黒の瞳が薄蒼い輝きを放ち、透き通り始めた。

「……レイ、綺麗／＼／＼」

「そうね、綺麗な瞳だわ」

「まあまあ！」

全員が賞賛する。……カトレアは『まあまあ！』だけしか言っていないが、それなりに驚いているのだろう。

「ただ、魔力の流れをより正確に確認出来るようにしただけだ。…

……だが、ありがとう、シャルロット」

レイはそう言って、シャルロットの頭を優しく一撫で。

「…(コクリ) / / / / /」

そして、頬を染めて頷き、レイの方に寄りかかるシャルロット。

「いや、どんな鼻屑なのよ!???」

ルイズのツッコミは完全に無視し、レイは寄りかかってくるシャルロットに片手を回してさらに引き寄せてから、透き通る瞳でカトレアの魔力の流れを注視する。

しばらくの沈黙が場を支配し、一分ほど経った頃によくやくレイが口を開く。

「治療に当たっていた水メイジはどいつだ。……もし見つかったら殴ってやりたいところだな」

それは、半ば愚痴のような口調での呟きだった。

「どづいうことよ?」

「つまり、水メイジたちは揃いも揃って無駄なことばかりをしてきた、というわけだ。……まあ、今からでも治すことは十二分に可能だがな」

そう言っただけレイは、全くわけが分からない!という表情のルイズとなにが楽しいのか上品に微笑んでいるカトレアを見渡し、シャルロットの髪を梳いてやりながら話を続ける。

「簡単に言えば、今まで水メイジが投与してきたであろう秘薬は、一時的な回復にしかならず、長期的に見れば病気を悪化させ、死に

至らしめる可能性さえあった、ということだ」

その言葉にルイズは目を見開き、カトレアは何故か何の反応も示さず、シャルロットはレイに抱きついた。

………ちなみに、シャルロットの行動とレイの言葉に、全く関連性はありません。

「今、彼女の体には複数の『魔力の塊』が存在していて、それらが腫瘍となって身体の正常な働きを阻害している。おそらくそれは、最初は一つだったんだろうが、無駄にたくさん秘薬を投与し続けたせいで、より多くの『魔力の塊』を作ってしまう結果になり、腫瘍は勢力を拡大している。………もし、この場に俺がいなかったら危なかったかもな」

そう言つて、レイは「まあ、癒しの魔力を持つユリアナでも、容易に治せただろうが」と言いながらカトレアに近づく。………当然のようにシャルロットを伴つて。

「原因は分かった。とりあえず、治療に移るぞ」

そしてレイは、カトレアの腹部に手をかざし、目を閉じて集中してルーンの詠唱を始めた。

「《消し去れ！そして癒せ！我が魔力よ、大いなる意志のもとに慈愛の光を顕現し、彼の者に害をなす腫瘍を跡形もなく消し去れ！キユアライト・デリート！》」

するとレイの手から蒼い魔力が飛び出し、スウツとカトレアの中に吸い込まれたかと思えば、彼女の体の中を魔力がレイの魔力が勢いよく流れ始めた。レイの蒼き魔力が、カトレアの悪性腫瘍だけを取

り除いているのだ。

しかし、そんな蒼い光もすぐに収まり、空気中に雲散した。

「あら、体が軽いわ！ありがとう、レイ君」

そう言っつて魅力的な微笑みを一つ。

だが、それで惚けるレイではない。なぜなら、すでに抱きついているシャルロットと和んでいたからだ。

「ん？なんか言っつたか？ルイズの姉」

「カトレアっつて呼んでください」

どこか拗ねたような口調で、カトレアが答える。……レイを誘惑しているのだろうか？

もちろん、そんなことでレイは鼻の下を伸ばしたりはしない。ちなみに、ルイズはカトレアの行動に絶句していたりする。

だが、それでもレイは平坦な声で冷静に返す。

「では、カトレア。治つてよかったな。自由に信頼できる人を見つけて、自由に好きな人と結婚してくれ。……そして俺はシャルロットと幸せになろう。ではな」

申し訳程度に名前を呼び、レイはシャルロットと共に部屋の外へと歩いていった。

「あら、残念。なかなか素敵な殿方だったのに」

カトレアの方はというと、全く残念そうに見えない微笑みを見せながら、未だ絶句しているルイズに向かって、そんな呟きをもらして

いた。
………
なんとというか、不思議な方である。

あの方は、結構不思議な方だと思う。(後書き)

さて、今回は作者的にはかなり不思議なお姉さん、カトレアの病気を治しました。

……お気づきかもしれませんが、この物語はここからどんどん原作から離れていきます。

オリジナルに近い話は、今までにも増して稚拙な文章になってしまいそうな予感ですが、どうか見放さないで根気強く読み続けてやってください。

そのうち、少しはマシになってくると思いますよ？

それでは、また次回にお会いしましょう！

(^^)ノシ See you!

シッコミ、再び。(前書き)

はい、シッコミが帰ってきますよ！

速すぎる気もしますが、使いやすいんで(笑)

それでは、本文をどうぞ！

シッコミ、再び。

レイたちはヴァリエール領から戻り、未だにガリアで不穏な動きがあるものの、いつもの日常……そして、平和を手に入れた。

……………はずだった。

実は、レイには最近、困ったことが出来ていた。

「なあ……いいじゃん！！レイも『オンディーヌ』に入ってくれよ！！！！」

「そうだよ、今なら参謀の座……いや、僕の隊長の座を譲るから入ってくれ……！！」

「これだけ厚待遇なんだ、別に入ってもいいじゃないか……！！」
「……………そうだそうだ……！！」「……………」

そう、サイトやギーシュ、マリコルヌを始めとするオンディーヌメンバーが、執拗に『オンディーヌに入ってくれ！』と、迫ってくるのだ。

シャルロットとの時間や、自身の修行に身を入れたいレイとしては、たまったものではない。

「断る。何回も言っただろう？俺はシャルロットと過ごす時間を減らしたくないんだ」

「そう。私も減らして欲しくない」

シャルロットも追従したが、今回ばかりは誰も引き下がらなかった。それどころか、オンディーヌメンバーの中でもかなり冷静なレイナールでさえ、強く勧誘する。

「そんなこと言わずに頼むよ！それならタバサだつて入ればいいわけだし、君に入ってもらわないとオンディーヌは潰れかねないんだ！！」

「『学生の騎士ごっこ』と言われてるらしいからな。……まあ、あれだけだからだらしていたらそう評価されるのも当然か」

レイはそう言つて、シャルロットを伴つてその場を立ち去ろうとするが、何か思いついたようで、ニヤリと笑つてサイトたちに声をかける。

「そつだ。お前たちにもチャンスをやろう」

そして、レイはオンディーヌメンバーに『チャンス』について説明するのだった。

次の日の朝。

サイトやギーシュ、マリコルヌ、レイナールを含む全てのオンディーヌメンバーと、他にもレイとシャルロット、ルイズ、キュルケや親の墓参りから戻ってきたユリアナ・アスラナ姉弟は、レイの案内のもと、闘技場のようなどころへ来ていた。周りには草が鬱蒼と生えており、長年使われていないことが分かる。補足だが、全員の使い魔たちもいるようだ。

「ここは俺の師匠の師匠であるじーさんが所有していた『コロッセオ』だ。……ああ、サイト、地球にあるものとは全く違うものだぞ？」

補足するのも忘れない。

地球での『コロッセオ』……それは、イタリアにある、昔は闘技場として使用されていた場所だ。

「……だが、その用途は変わらない。ここはじーさんが闘技場として使っていた場所であり、その多くは彼が創立した傭兵団と他の傭兵団との交流試合が主な使用方法だったらしい。……まあ、王に貸し出して闘技大会が開かれたこともあったらしいが、今はその国が潰れ、使われていない。周りの様子からして、この国は完全に廃れてしまったようだな」

レイは長つたらしい説明を終えた後、『何か質問は？』と皆を見渡した。

すると、その視線に応え、ギーシュが手を上げた。

レイはギーシュを当て、ギーシュは質問する。

「ここに来る時に通った扉はどういうものなんだい？」

『ここに来る時に通った扉』……それは、真っ白な地に、金色の複雑な装飾の施された扉だった。

「ああ、言っただけでなかったか？ あれは『世界の扉』。つまり、異世界へ通じる扉であり、ここが異世界であることの証明だ。……補足だが、この世界の名は『ミラーナ』と言い、俺が地球で行方不明になった時に来た世界だ」

『異世界』という言葉に、困惑するオンディーヌメンバー。

それはそうだろう。レイとサイトが『異世界』から来たという事実を知らない者もいるし、レイが『世界の扉』を開き、『世界渡り』をする能力を持っていると知っている人間はシャルロットしかないな

いのだ。(ユリアナとアスラナは人間ではなく、上位魔族。この二人はレイが『世界渡り』出来るのは当然、と理解している)

「い、異世界ってどういうことだい？」

「つて、レイ！これならサイトが帰れるじゃない！！……なんで言っちゃうのよ！……じゃなくて、なんでもっと早くに言わなかったのよ！！！」

異世界、ということに狼狽するギーシュやその他大勢。

サイトが帰ってしまうかもしれない、と不安になっちゃったりしているルイズ。

「言っでなかったか？俺は異世界人だ、改めてよろしく。……さて、ルイズ。なぜ言わなかったか、だが……」

そう言っで、自身が異世界人であることを軽く流したレイは、ルイズに耳打ちする。……『サイトと離れたくないだろう？』。

それを聞いたルイズは顔を真っ赤にして、叫ぶ。

「う、うるさいわね！！ただ使い魔がいなくなると困るだけよ！！

……ホントにそうなんだから！！！」

「そうか。なら、サイトもしばらく帰れなくてもいいな？」

今度はサイトに耳打ち。……『ルイズをちゃんと護り続ければ、もっと好いてもらえるかもしれないぞ？』

単純なサイトは、それだけでテンションが上がってしまった。

「おおお！！マジか！！俺、頑張る！！！」

サイトが、一回地球に帰っても戻ってこれる、と気付くのはだいぶ

後のお話。

そのように、ルイズとサイトの相手をしていたレイのジャケットの裾が、急に引っ張られる。

レイがそちらを向くと、少し嫉妬したような可愛いシャルロットの姿が。

「レイは、私と一緒にいなきゃダメ……／＼／＼／＼」

「ああ、悪い、シャルロット。俺はいつでもシャルロットが一番だよ」

そう言っつて、レイはシャルロットを抱きしめる。

そして、啞然とするユリアナ・アスラナ姉弟。……当然だろう。

レイとシャルロットが恋人同士だろうことは予想していたものの、二人はレイとシャルロットがここまであまゝいとは知らなかったのだ。二人を含む魔法師団長らと対峙した時では想像もつかないほどに優しい表情で、しかもあまゝいのみだから、驚くのも無理はないと言えよう。

「あ、あの……二人が恋人らしいということは予想してましたけど……いつもここまでですか？」

「ちよ、ちよつと想像出来なかつたよ……」

だが、レイはそんな二人には反応せず（めんどくさいんでシカトした）、シャルロットを抱きしめたままに話を続ける。

「さて、昨日説明したが、改めて今日やることを教えよう」

今まで、『異世界』がどうか、ざわついていた一同は、いっせいにレイの方に注目する。

レイは皆が自分の方に向いたことを確認し、口を開く。

「お前たちには、この闘技場で戦ってもらおう。ここで勝てば、昨日の約束どおり、俺がシャルロットを伴って『オンディーヌ』に入隊してやるわ」

おお！とまたざわめく一同。

「それで、昨日は聞けなかったけど、対戦相手は誰なんだ？」

これまた、比較的冷静なレイナールがレイに問いかけた。

「それは今から発表する。……その者の名は「ウチヤー！」……先に名前ぐらい言わせる、シエラ＋兄」

「いや、それも名前言うところからね??！」

という叫び声と共に、『コロッセオ』上空から二つの影が降りてきた。

「久しぶりやな。ウチらもアンタらについてくことにしたわ。よろしゅう」

「妹が世話になったみたいだねえ。あ、僕の名前はフェリスだよ。よろしく」

一人は濃紫のロングストレートを靡かせた少女……もう一人は落ちて着いた印象を受ける紫色のサラサラヘアで、青い瞳の好青年だった。

……だが、せっかく自己紹介したにも関わらず、反応したのはキュルケだけだった。

「あら、久しぶり、魔族さん。お兄さんは結構イケメンですわね。今度私と……どうかしら？」

という誘惑だったが。

ちなみに、サイトやルイズを含む他のメンバーは突然上から降ってきた二人の人（実際は魔族）に驚き、ユリアナとアスラナは二人で話しており、レイとシャルロットはすでに二人で和んでいた。

「ん？どうしようかなあ？……もう少し考えさせてよ」

「いやいやいやいや！反応したのが『赤髪の娘』だけってどういうことや！驚いて喋れん連中がいるのはしょうがないとして、『漆黒』と『蒼い娘』は反応しろや！何じゃれあつとんねん！！ユリアナ元隊長とアスラナ元隊長も、応えてくれてもええやん！！……そんなで兄貴！！アンタもさつきみたいな質問には答えんでええっていつも言つとるやろうが！！！！」

まさに怒涛のツッコミ。

全てのボケ&天然ボケを拾い、ツッコんでしまった。

「ツッコミ、ご苦労。……お前がいるとツッコミ役に困らなくて楽だな」

「だからウチはツッコミ役になった覚えないからね??！」

シエラは全力で抗議する。

が……。

「いや、完全にツッコミ役だろう。……なあ？」

レイがそう言っただけに呆けているはずの一同に声をかける。

すると、全員が同じ反応を示した。……当然、首を縦に振ったのだ。

「なんで?! さっきまで呆けとつたやないかい!! なんでそこだけ頷くん?! ……そして兄貴!! なんでアンタも頷いとんねん!!」

綺麗にツツコミを入れたシエラ。……だが、レイは完全にスルーして、呆け状態から回復した一同に説明を始める。

「さて、紹介しよう。「なあ! 聞いとるん?!」……今回の試合の相手であるシエラ「勝手に進めんなや!!」……それと、武器職人のフェリスだ」

「よろしく」

「なんで兄貴も普通に挨拶しとんねん!!」

……シエラ、ツツコミすぎではないだろうか?

「こいつらに勝てれば、俺とシャルロットだけでなく、ユリアナ・アスラナ姉弟と、ここにいるシエラ・フェリス兄妹も『オンディーヌ』に入ってやろう」

「『オンディーヌ』ってなんなん? しかも、なんで負けたらウチらも入ることになつとるん?? ってか、ユリアナ元隊長たちは文句ないん??!」

「ないですわ」「な、ないよ」

二人とも異論はないようだ。

レイは、話を続ける。

「さて、こいつらと戦うための作戦を練る時間を一時間与える」な

あ！質問に答えるやー！」……………それでは始めてくれ」

レイはシエラのツッコミなどお構いなしに、ストップウォッチを亜空間から取り出して、一時間を計りだした。

「だから！ー！オンディーヌってなんなんよおおおおお！ー！！」

シエラのこの叫びは、周囲一帯に響き渡ったという。

……………迷惑な話である「だから、アンタがそうさせてるんやろつが
あああ！ー！！」……………おっと、ノイズが（笑）

「……………もう、なんもツッコまんわ……………」

ドンマイ、シエラ（笑）

グッジョブ、シエラ（爆）

シッコミン、再び。(後書き)

やはり、シエラは使いやすい…ッ!!

だいがレギュラー的存在になりそうですねえ。(笑)

それではっ(^^)(ノシ)

オンディーヌvsツツコミとマイペース (1) (前書き)

なんか、この戦い、続きモノらしいっすよ？

グダグダ続けちゃってごめんなさい(汗)

さて、それでは本文をどうぞ！

オンディーヌvsツツコミとマイペース（1）

『さあ、一時間が経った！試合に参加する者たちの定員20名と、シエラ・フェリス兄妹は、闘技場の中心に集合してくれ！参加しない者たちは、客席のどこかに座ってくれて構わない！』

レイは自分に拡声魔法を使って声を闘技場全体に響き渡らせた。その声に応じ、続々とオンディーヌメンバー+ が闘技場の中心に集まってくる。

オンディーヌチームの編成は20人。サイト、ギーシュ、マリコルヌ、レイナールを含むオンディーヌメンバーと、ルイズやキュルケといったおまけメンバーも入っているようだ。

観客席にはレイ、シャルロットや、ユリアナ・アスラナ姉弟、オンディーヌで試合参加メンバーから弾かれた者たちが座る。

全員が集まったのを客席から確認したレイは、闘技場の中心へと飛び降りる。

客席と闘技場中心との段差は5mほどあるのだが、全く危なげなく着地し、サイトたちとシエラ・フェリスの間に立つ。

「最大試合時間は一時間。使い魔の参戦は認めるが、サイトを含めて五体までとする。シエラは中級以上の魔法と伝説級武器の使用禁止。魔族にしては戦闘力の低いフェリスは、魔法の使用と武器の創造は許可するが、伝説級の武器を創造することは禁止とする。気絶もしくは降参させた方の勝ちだ。……当然、どちらかが死ぬような攻撃が放たれた場合、俺が止めに入り、その攻撃を行った者に罰を与えるからな。覚悟しておけ」

罰が少し怖いなあ、と思いつつも、全員が構える。

シエラチームはシエラが前衛、フェリスが後衛という簡潔な布陣を張る。

オンディーヌチームは、切り札と成り得る『虚無』のルイズを中心に、扇形に広がった。

そして一人、サイトだけが突出して本体から離れている。

「ああ、サイト。言い忘れていたが、デルフの魔力は切れたわけじゃないぞ」

「え?!マジで???!」

サイトは超ビックリ!という感じで素っ頓狂な声をあげた。その反応にレイは苦笑し、デルフに向かって手を振る。

ブウウウン!という魔剣特有の無数の羽虫が立てるような音が辺りに響き、以前込められたレイの『青い』魔力が復活した。

「俺が込めた魔力が、たった一回の転移で消えると思うか?一回の転移くらいなら、空气中の魔素を一时间ほど取り込むことで、簡単に回復する。……サイトとデルフは気付かなかったようだ、デルフの魔力は刀身の中心部に停滞していたようだ。だが、それを表層まで引き出した。今からは、これまで通りに使えるぞ」

レイはそう説明し、サイトとデルフが歓喜の声をあげる。

「おおおお!!マジか!!!!」

「やったな、相棒!……ってか、なんでオレっちは気付かなかったんだ???!」

「まあ、お前にもともと込められている魔法に認識を阻害されていたのだから。……さて、無駄話で時間をくってしまったな。そろそろ始めよう」

レイはそう言って、右腕を上空に上げる。

「始めっ！！！」

言葉と同時にレイの右手の先から蒼い魔力球が上に飛び出し、遙か上空で小さな爆発を起こした。

始めの合図と同時に、サイトは魔力の復活したデルフを抜き、シエラに向かって突進を始める。

それと同時に、ギーシユや他の土メイジの創造した複数のゴーレムのうち五体がサイトに追従するようにシエラへ突進する。他のゴーレムたちは数体の防御役を残し、フェリスの方に突進していった。さらには、様々な属性の攻撃魔法の詠唱がなされ、ルイズの虚無魔法の詠唱も響き渡る。

「これで魔法制限はツラくないか？……まあええわ。やつたる」

シエラはそう言って、左右の手をふところに入れ、サイトを待ち構える。

「覚悟しろっ！」

青い光芒を纏ったデルフを、シエラの首に叩きつけるサイト。

だが、そんな程度でやられるシエラではない。

ふところに入れていた手を神速で取り出し、身を低くしてサイトの下に潜り込むシエラ。

当然、首に叩きつけられるはずだったデルフは綺麗に空振りし、シエラが取り出した小太刀とナイフがサイトを襲う。

バックステップで避けたサイトに次に襲いかかるのは、フェリスが放った魔法だ。

火球、雷球が合わせて十……五発ずつ発射され、五つの魔法がそれぞれゴーレムを後方に吹き飛ばし、残りの五つがサイトにぶち当たろうとする。

しかし、それをデルフによって吸収し、身体能力を向上させるサイト。

「へえ、おもしろい武器だねえ。吸った魔力は身体能力に返還されるんだね？」

一目でデルフに付与された特殊効果を見抜いたフェリス。魔族としての戦闘能力は低いが、『武器職人』としての力量は高いのだ。

そのフェリスが両手を天に上げ、なにやらブツブツ呟き始める頃、オンディーヌチームの者たちの詠唱が、ルイズ以外は終わった。

「さあ！一斉射撃！！」

「なっ！そしたらガンダールヴも！……っっていない？！」

そう、サイトがいきなり地面へと吸い込まれていったのだ。

「ふふつ、僕の使い魔のヴェルダンデは、穴を掘るのが得意だね。つまりサイトは、ヴェルダンデが掘った穴の中に隠れたんだよ」

そんな言葉は、オンディーヌメンバーの一斉射撃によって、聞こえ

たのかは危うい状況になっていた。

襲い掛かる魔法は、生徒たちが放てる最高基準の魔法。

絡みつく蛇のように迫る炎や、真空波を生み出して襲い掛かる風の刃、空気中の水分を集めて作った無数の水の槍が全方向から突き刺さるうとし、最終的には巨大な土の塊が天から落ちてきて、押しつぶそうとする。

それらは、全てシエラに襲い掛かるものだった。

しかし……。

「無駄や。ウチを誰やと思うとるん？」

シエラの周りには、薄い純白の膜が張っており、全くの無傷だった。それは、天から降ってきた土の塊すらも容易に吹き飛ばしてしまっただ。

「ギリ、中級魔法や。それでも、これぐらいの魔法なら防げるよ？」

そんなセリフをはくシエラ。

すると、いきなりシエラは殺気を感じ取り、大きくバック転してフェリスの隣まで後退した。

「ちっ！外したか！」

殺気の正体はサイト。穴の中に隠れ、さらにヴェルダンデが掘っていく穴を進んで、シエラの足元の地面を突き破って攻撃したのだ。

「効かんよ、そんなん。……ッ???!」

シエラはフェリスを抱え、さらに後方に跳んだ。

地面から炎の柱と風の刃が襲ってきたのだ。

「ふふっ、私のフレイムの炎はどうかしら？」

そう、キュルケのフレイムなどの使い魔たちが、未だに隠れていたのだ。

さらに、サイトが後方に下がったシエラに追い討ちをかける。

「いけ！『シヨツクウエーブ！』」

サイトがデルフを横薙ぎにし、その剣筋から波状の『不可視の斬撃』が、シエラたちを襲う。

「次から次へと！！鬱陶しいわ！！！！」

シエラはふところから無数の盾になるようなものを射出し、波状攻撃のバリケードにしつつ、そこに純粋な魔力をブチ当て、吹っ飛ばないよう力に力を相殺した。

「ここまでやって無傷???!」

「ふう……。今のはさすがに危なかった。やけど、もうウチらの勝ちや」

怒涛の攻撃を避けきったシエラは、余裕の表情で笑う。

その不穏さを感じ取ったサイトが全速力でシエラに襲い掛かるも、ふところから取り出される無数の武器で軽くないなされてしまう。

「無駄やって。そして、時間稼ぎにもならん。だって切り札は……」

「僕だからねえ」

言葉はフェリスが引き継いだ。

ずっと天に上げていた両手を、オンディーヌメンバーの方に振り下ろす。

オンディーヌメンバーは、固定砲台としてサイトを援護する役であり、すでに次の魔法の詠唱を始めていたので、全く対処が出来ていない。

「じゃあ〜、終わり〜」

そんな気が抜ける合図と共に、天がキラリと光り、巨大な武器が無数に振り注ぐ。

「これはねえ〜。世界に満ちる魔素を武器の形に固める異能……『武器創造』の効果なんだあ〜」

フェリスの異能『武器創造』。

それはその名の通り、武器を創造する異能であり、武器を創造することだけに突出した能力だ。

通常は魔力の少ないフェリスでは出来ないのだが、『武器創造』という異能を持つが故に、魔素を武器に変換することが可能であり、フェリスが持つ唯一の切り札のようなものだ。

まさに絶対絶命。

しかし、そんな中でも全く諦めない者がいた。

「甘く見ないで!!」

《デイスペル!!!》

真っ白い閃光が上空の武器群を瞬時に消滅させた…。

オンディーヌvsツツコミとマイペース (1) (後書き)

はい、続きます。

ところで、今日はクリスマスですねえ。

皆さんの予定はどうでしょうか？

俺は、とりあえず家族と過ごしますかねえ
友達とは、昨日遊んできましたしね

というわけで、メリークリスマス！

さようなら (^ ^) ノシ

オンデイナーvsツッコミとマイペース (2) (前書き)

今回、少し短いです。

グダグダと続きモノになったこの試合ですが、一応今回で終わります。

それでは、本文をどうぞ!!

オンディーヌvsツッコミとマイペース（2）

放たれた魔法『デイスペル』　ルイズによる虚無魔法だ。
彼女の虚無魔法『デイスペル』によって、魔素で出来ている武具たちをすぐに魔素に変換し、無力化したのだ。

「もしもの時のために、『デイスペル』を唱えといてよかったわ
「なっ?！」「おお、ちよつと予想外」

「今だ！相手が驚いてる今のうちに、全ての魔法をデルフリンガー
に向けて発射するんだ!!!」

ギーシュの指揮に従い、マリコルヌやレイナールを始めとするオン
ディーヌの固定砲台役の者たちが、一斉にデルフへ魔法を放つ。

「おおおお!!!力が漲るううう!!!」

それら全てを吸収し、サイトの身体能力が著しく上昇する。
ガンダールヴの身体強化+魔力吸収による身体強化。……それによ
つて、一時的に魔族を上回る（あくまで『魔族』を上回るのであっ
て、『上位魔族』は上回らない）身体能力を手に入れたのだ。

サイトの体がブレ、一瞬でフェリスとの距離を詰める。

「ん、もう僕は無理っばいなあ」

デルフの剣腹は、サイトによってフェリスの腹部に叩きつけられ、
気絶させた。

「あ、兄貴!!!」

珍しく狼狽するシエラ。
そんな隙を、力を蓄えたサイトが見逃すはずもなかった。

「終わりだ！降参しろ！！」

デルフをシエラの首筋に突きつけ、降参を要求したサイト。

「そっやね。ウチの……………」

そう言いいながら、シエラは俯く。
そして…。

勝ちや

瞬間、シエラの体が急速に色を失い、弱く爆ぜた。

「なっ！？」

サイトは爆発の寸前にそれを察知し、大きく後方に跳ぶことでなんとかその爆発を避けた。

「くそ！どこ行った！！」

サイトや他のメンバーが辺りを見回すが、シエラはどこにもいなかった。

《さっきまでのウチは幻影や。アンタらが一斉射撃した時に入れ替わらせてもらったわ。…………それと、探しても無駄やで？『透化魔法』で透明になっとなるからね》

オンディーヌメンバーの脳に響く声。……つまり、シエラは自分の居場所を悟られないように、『念話』で話しかけているのだ。

ブウンツッ！風切り音と共に、何人かのオンディーヌメンバーが倒れ伏した。

《ほら、はよ見つけんとやられるで？……それとも、アンタらの主戦力であるガンダールヴを倒したるか？》

確実にニヤリ、と笑っていきそうな声が頭の中に響き、サイトたちをイラつかせる。

「くっそ！！どうしたらいいんだよ！！！」

「ま、まあ冷静になりたまえ！！まだ策はあるはずだ！！！」

サイトが喚き、それを一応指揮官であるギーシュが宥めようとするが、周りのメンバーにも動揺が伝染し、もうどうにもならない状況になっていった。……だいたい、宥めようとしているギーシュも、あまり落ち着きが見られない。

そんな中、一人だけ冷静な人物が。

その人物はいつもは比較的冷静なレイナルでも、ましてや他のオンディーヌメンバーでもなく……。

「……………あれしかないわね」

おまけでついてきていたキュルケだった。

彼女はゆっくりとサイトの方に近づいていき……。

「ダーリン」

抱きついた。すると……。

ブチィ！……どこかで、何かがブチ切れる音がした。

「サイトおおおお！！なにこんな時にキュルケとイチヤついでんのよおおおお！！！！！」

キュイイイーン！！！！ドゴオオオオオオオン！！！！！！！！

ルイズのセリフと共にルイズの杖が振りきられ、大爆発を起こした。その爆発は、レイが自分の周りと客席にシールドを張るほどの威力だった。

「……シャルロットの所だけ、だいぶ強いシールドになっているのは、ご愛嬌だ。」

闘技場の中心部では、立つ者は二人。

自身にシールドを張ることに成功したレイと、爆発魔法行使者のルイズその人だった。

サイトを中心に爆発し、何も言葉を発することなく、サイトは倒れ伏した。

「……と、とりあえず……作戦……は……成功……ね……」

そしてキュルケは、そんな呟きと共に気絶した。

「……これは……ないわあ……」

さらに、主戦力であるサイトを狙っていたシエラにも爆発は直撃し、

気絶した。

「……………オンディーヌチーム、勝利！」

こうして、痴話喧嘩もどきによる爆発で、オンディーヌメンバー獲得のための試合は幕を閉じたのだった。

オンディーヌvsツツコミとマイペース (2) (後書き)

どうでしたか？

展開がおそい？……そうかもしれませぬ。

物語が動いていくのはもう少しあとになりそうですが、しばらくお待ちください。

それでは、また次回(^^)ノシ

新生オンディーヌ、始動。(前書き)

レイたちがオンディーヌに入って、すぐの頃のお話です。

前話から、まだほとんど時間を進めていない日ですね。

それでは、本文をどうぞ！

新生オンディーヌ、始動。

オンディーヌチームがシエラとの試合に勝ったことにより、レイ、シャルロット、ユリアナ・アスラナ姉弟、シエラ・フェリス兄妹は、オンディーヌに入るようになった。

それに伴い、レイがかねてからの戦功によってシュヴァリエの称号が授与されることになったのだが、『要らん』……この一言で完全にその案が潰れた、というのは余談だ。

それはともかく、オンディーヌメンバーの望みであった、“レイたちの入隊”が実現されたのだ。

当然、それで喜ぶはずの彼らだったのだが…。

「どうした！ 気合が足りないぞ！ そんなことだから『騎士っつこ』と言われるんだ！ 本物の騎士になりたいのだろう？ それなら、これくらいでへばるな！！」

完全に鬼教官と化したレイにより、怒涛の修行が始まったのだ。

内容はなんと、ランニング。その距離、制限時間なしの15km。

……『お前たちには絶対的に体力が足りない！ それだから、この前の試合で固定砲台役なんてものをやらざるを得なくなるんだ！』というレイのありがた〜いお言葉によって、実行されたものだ。

ちなみに、レイとシャルロット、サイト以外は完全にバテて、地面に伏している。………マリコルヌなど、完走することすら出来なかった。

時間制限がないのなら、到底、長すぎると言える程の距離ではないはずなのだが…。

さらに補足だが、体力が基本スペックとして高い魔族たちは、レイ

公認のサボリ。つまり、この場にはいない。

「完走出来ないとは……だらしのないぞ、マリコルヌ。お前は特別メニューに移行するからな」

レイはバテたメンバーたちについてせいに回復魔法を行使し、無理やり復活させつつ、こんな言葉をはいた。

「そんなあああ……！」

「……そこまで叫ぶ元気があれば、大丈夫」

シャルロットまで、マリコルヌの特別メニューへの移行を推奨し始めた。

「ハハハッ！まあ、ドンマイ（笑）」

「サイト〜、酷い……！」

「さあ、お前は今からもう一度ランニングだ！……サボろうとするなよ？魔法でしっかり見張るからな」

そう言つて、レイはマリコルヌの背中を押した。

「ぎゃああああ……！」

わりと強めに。

マリコルヌは、一気に視界のアウトレンジへ駆け抜け抜けさせられたのだった。

「さて、他の者は各自、休憩にはいつてくれ。休憩時間は15分だ。それ以上休んでいたら、『マリコルヌの刑』に処す」

『マリコルヌの刑』とは、先ほどマリコルヌに対して行われた罰のことだろう。

そして、それを察した一同は『はいいい！分かりましたああ！！』と恐怖に満ちた声で返し、思い思いに休憩を始めた。

そんな恐怖？の休憩が始まった頃、周りに控えていた女子たちがサイトの方に寄ってきて、キヤーキヤー喚きだした。

「あ、あの！これ貰ってください！！」

「お、俺？！」

「そうです！！」

「あああ！あんただけずるいわよ！……あの、私のも……」

「私のだって！……」

かなりうるさいことになっていた。

サイトが七万の兵を止めてしばらくの時間が経った今でも、女子の間でかなりの人気が出てきているのだ。

そして、サイトは鼻の下を伸ばしっぱなしだ。

それを遠目で見ていたレイとシャルロットは、さらに遠くで見学していたルイズが鬼の形相でサイトに迫るのを見て……。

……何も見なかったことにした。

ドゴオ！ゴスツ！ドガツ！バキイ！

随分荒い音が聞こえてくるが、無視の方向でいいだろう。

「ぎゃあああああ！……！！！」

そして、マリコルヌがぶっ飛んでいった方向に、これまたぶっ飛ば

されていく様子を尻目に、レイとシャルロットが木陰で和んでいると……。

「あーあの！！少しよろしいでしょうか！！！」

一人の少女が二人の……いや、レイの前に立ち、大声で叫んだ。そのあまりの声の大きさに、レイは顔を顰めて返す。

「声がでかい」

「す、すみません！！！」

「……その声も、大き過ぎ」

シャルロットも指摘する。

その指摘に、話しかけてきた女子生徒は、完全に顔を真っ赤にしていた。

「それで、どうした？なにか頼みごとならば聞くぞ？」

このままでは話が進まない、と思ったのか、レイはその女子生徒を促した。

「あの……あのですね？……ううううう、やっぱり無理ですううう」

結局、話は進みそうもなかったため、レイは次の策に出た。

「では、先ほどからこちらの様子を伺っている女子生徒五人組、事情を説明してくれないか？」

そう、話しかけてきた女子生徒の仲間たちが、この娘の様子を伺っ

ていたのだ。

それに気付いていたレイが、事情説明を求めるために話しかけた、
というわけだ。

そろそろと五人が出てくる。

そのうちの一人が、代表して口を開く。

「あの……実は私たち、密かにあなたのファンだったんです!!」
「……………はあ？」

意味が分からない、という表情のレイ。

そして、すこし嫉妬しているシャルロット。

「ですから!」いや、ファンなのは分かった。そうではなく、何故
俺のファンなんだ?有り得ないだろう?」……有り得ないです
よ!」

ファンだと告げた女子生徒がレイの話を遮り、その言葉を一番最初
に話しかけてきた女子生徒が引き継ぐ。

「そ、そうですね!目つきは鋭くて怖いですけど……ミス・タバサ
という時はとても優しい目をしてるじゃないですか!……えとえと、
それで…あの、いいなあ、カッコイイなあ、なんて思っちゃっ
たりしたわけです、ハイ!!!」
「そ、そうか」

若干引き気味のレイだが、それでもその生徒の話は止まらない。
勢いに乗ると、結構饒舌になる性質らしい。

「あ、でも別にお二方の仲を壊そうとか、そういうのじゃないんで

すよ？ただ、あの、あなたのファンの一人として、お二方を応援したいなあ、なんて……………ダメですか？」

少し遠慮がちな目でレイの方を伺う女子生徒。そしてその取り巻きも心配そうにレイの方を伺う。

「……………邪魔しないなら、別にいいんじゃないか？シャルロットはどうだ？」

「レイがカッコイイということは、大いに理解できる。だから、私もいい。……………ただし、邪魔はダメ」

「……………ホントですか！！嬉しいです！！そして、邪魔なんて絶対しません！！お二人で幸せになってください！！！！」

本当に嬉しそうに叫ぶ女子生徒たち。

……………目つきが鋭く、凍てつく表情のせいで敬遠されがちだったレイに、公認のファンクラブがついた瞬間だった。

「さて、そろそろ時間だ。……………また訓練を始める。ではな」

そう言って、レイはシャルロットを伴って去っていった。

「やっぱり、お二人は仲いいですねえ、憧れちゃいますう！」

「でも、いいの？エリシア。ホントは、レイさんに告白したかったんでしょ？」

そう、女子生徒のうち、隠れていた五人は純粹にファンとしてレイ

とシャルロットの関係を応援したい、と思っていたのだが、最初に話しかけた女子生徒……エリシアだけは完全にレイに惚れ、付き合いたいと思っていたのだ。

「でも……やっぱりあんなに仲が良いお二人の仲を壊すなんて、私には出来ません……。だからこそ！本気で応援して、絶対にお二人には結婚してもらいますよぉ！！」

意外とポジティブなエリシアは、ちょっと無理してる感じではありながらも、そんな声をあげている。

「ハハハ、そうね！全力で応援しましょ！！」

「…………おおおお！」「…………」

こうして、レイのファンクラブの者たちは、結束を高めてゆくのだった。

しかし……。

「あああー！！」

エリシアが突然、悲壮な声をあげた。

それに対し、女子生徒のうちの一人が声をかける。

「どうしたの？」

「名乗るの忘れてました……」

「…………あ、そういえば」「…………」

締めりのないファンクラブだったとさ。

新生オンディーヌ、始動。(後書き)

ええ〜……やってしまった、ファンクラブ…。

しかも、ファンクラブ自体を本文に出すつもりはなかったり…。

名前が出てきたエリシアでさえ、『この先また出るのか』と問われると、即答は出来ませんね。

まあ、多分エリシアだけでも出そうとはするはずですが。

ですので、とりあえず『エリシア』という名前は覚えてもらった方がいいかもしれませんね。

『渡り人』なんかも、覚えてるんだったら忘れない方がいいかもです(笑)

それでは、また次回(^^)ノシ

魔法は、平民でも使える？（前書き）

サブタイに書きましたが、この小説内では、捏造設定によって平民にも使える魔法が存在することにします。

平民であるはずのレイが、魔法を使えるのと同じ感じですね。

まあ、細かくは本文中に記しておいたので、お読みください。

それでは、本文をどうぞ！

魔法は、平民でも使える？

鬼教官・レイの『体力改善プロジェクト』により、オンディーヌメンバーに少しずつ体力が付き始めた頃。

とある『漆黑』と『蒼』は、とある村のとある屋敷、とある傭兵団の拠点に赴いていた。

そこは二階建てで、かなりの規模の屋敷だった。一階は酒場のような所になっており、二階は仮眠室になっている。

「おお！団長が久しぶりに来たぜえ、お前らあ！！！」

「本当だ！俺、見るの二回目かも！！！」

「僕なんて初めてですよ！！！」

「まあ、お前は入ったばかりだからなあ！！！」

「団長はすごいぜえ！団長が来たときは、仕事効率が三倍ぐらいになるんだ！！！」

新米のメンバーたちから、おおお！！という、どよめきがあがる。

そんな中、一人の団員が何かを思いついたように手を上げ、『漆黑』に質問をしてきた。

「団長！そっちの蒼髪の娘は恋人ですかい？」

「そうだ」

なんの躊躇もない『漆黑』の答えに、団員たちが、ヒュ、と口笛を鳴らし、さらに祝福の雰囲気醸し出す。

平民出身のメンバーが多いのか、軽いノリの者たちが多いらしい。

そんな空気に、嬉しそうだが少し戸惑っている『蒼』を見た『漆黑』は、皆を遮るように話を続ける。

「騒ぎ過ぎだ。それに、今回は仕事を手伝いに来たわけじゃないし、恋人の紹介に来たわけでもない。……………マチルダはいるか？いや、いるな？二階だろう？呼んでくれ」
「副団長ですかい？分かりやした」

そう、マチルダは傭兵団の中で頭角を現し、遂には副団長の座まで上り詰めていたのだ。

しばらくの時間待ち、マチルダが二階から降りてきた。

「団長さんじゃないか！久しぶりだね」

「久しいな。俺が教えた魔法の普及はどうだ？」

『漆黑』は、『とある異世界』で学んだ、自身が今でも使っている魔法を、この傭兵団に普及させようとしているようだ。

「上々だよ。平民だって魔法が使えるようになった！って、皆が喜んでるよ。傭兵団の戦力が上がるから、貴族崩れのメイジにとっても大歓迎らしいね」

魔力のほとんどないサイトは、あくまでも例外。大抵の平民は、魔法を行使できるだけの魔力を持っている。

ただ、この世界の魔法体系に平民が持つ魔力の質があっていないために、魔法が行使出来ないだけなのだ。

つまり、この世界の平民の持つ魔力の質に合う魔法体系ならば、魔法の行使が可能、というわけだ。

また、『ディテクト・マジック』で平民の魔力を確認出来ないことも、魔力の質が違うことによって生まれる弊害の一つだ。

そして補足だが、レイの異常に多い魔力もまた、例外である。

以上、閑話休題。

マチルダの返答に満足した『漆黑』は、話を続ける。

「そうか、それならよかった。……では、本題に移る。今回、お前たちに少し頼みがあったな。代表してお前が聞いてくれ。それとお前に個人的な頼みがあるんだが……」

こうして、とある村、とある傭兵団の拠点にて、『漆黑』による『とある計画』の説明が続いていくのだった。

とある傭兵団での密談が行われた次の日。

レイは、オンディーヌをサイトとギーシュに任せ、シャルロットと魔族たちを伴って、王宮へ出向いていた。

事前にアンリエッタに連絡し、許可証を送ってもらい、堂々と警備の衛兵の間を通り抜けてアンリエッタの私室へ向かう一行。

コンコンツ、とノックの音を響かせ、返事を聞いたのちに入室する一行。

「久しぶりだな。早速だが、人払いを」

「いや、行動が早過ぎや！姫さんたち、まだ喋ってもないやん!!」

レイのいつも通りの不遜な態度にすら、ツツコミを入れてしまうシエラ。

さすがに鬱陶しいくらいのツツコミだ。

「大丈夫ですよ。お久しぶりですね、レイさん。……………アニエス、護衛はとりあえずいいですよ」

「レイ君がいれば、心配なんてなにもないからね」

アンリエッタがシエラを宥め、アニエスたちの部隊に下がるよう言い、ウエールズも追従した。

「いや、なんかウチが悪いの?!入ってすぐ人払いを要求するような態度が正しいんか??!」

「……………あの…あなたのキャラ、濃すぎじゃありませんこと?わたしたち姉弟の影がどんどん薄くなってきているのですが…」

「そ、そうだよ。一応、僕たちだっているんだからね?」

どうやら、ユリアナ・アスラナ姉弟は、さり気なく不満を持っているようだ。

「いや、知らんわ!!それが嫌ならもつと喋れ!……………いくら元隊長で、上位魔族でも、年下相手にウチが譲らなアカンことなんて一つもないわ!!!」

それに対し、シエラはツツコミっぽい雰囲気での暴言で返す。

「なにが暴言や!!ウチは暴言なんて吐いてないわ!!!」

だから、地の文にツツコまないでください。

そんな普通だったら意味不明なツツコミをしてきたシエラに対し、レイが問う。

「……………何に対してのツツコミだ。キレが落ちてきたんじゃないか?」

「…………ツッコミ役、失格」

「いやいや、そもそもウチはツッコミ役になった覚えはないからね？」

シエラはそう弁解するが……。

「いや、お前のツッコミ役の座は揺るがないだろう」

「右に同じく。…………その地位は、絶対安定」

「わたくしも同意見ですわ」

「つ、ツッコミ役、頑張つてね」

「ん、僕もシエラはツッコミ役だと思っよう？」

「初めて見ましたけど、私もあなたはツッコミ役の地位がふさわしいと思います」

「というか僕には、ツッコミ役以外の役目を見出すことが出来ないな」

レイから始まり、シャルロット、ユリアナ・アスラナ、フェリス、さらにはアンリエッタやウエールズまでも、肯定の意を示した。

「なんでやああ！！ウチがなにしたん？なんで姫さんや王子さんにまで、ツッコミ役として認められなきゃアカンの？？！……………
…それで、兄貴。後でウチの部屋来い。覚悟しときい」

兄貴には厳しめなシエラだったとき。

と、ここまで無駄話を続け、やっとのことで軌道修正を始めるレイ。

「さて、それでは本題に入ろうか」

「いや、切り替え早いな！！」

「あなたが、遅いだけ」

シャルロットの言葉に、シエラはさり気なくへこみ、一旦大人しくなった（笑）

そんなシエラを尻目に、アンリエッタがレイに問う。

「それで、今回の用件とは？」

「ああ、それだがな……その前に、新顔の紹介を忘れていたからな、先に紹介をしても？」

「いいですよ」

アンリエッタの同意を得て、レイは話を続ける。

「まず、濃紫の髪の少女。こいつの名はツッコム……シエラだ」

「いや、今『ツッコミ』って言おうとしたやる……」

復活を果たしたシエラが全力でツッコむが、それをさらりと流してレイは話を続ける。

「さて、「聞けやああ……うるさいぞ、シエラ。……次の

紹介に移ろう。シエラの隣にいるのがフェリス。シエラの兄だ」

「どうも……。僕とうるさい妹をよろしくね？」

レイは、フェリスがいつも通りにへらへらとした態度で一礼をするのを見届け、さらに話を続ける。

「次にユリアナ。深紅の髪色で、『癒し』の特性である緑の魔力を持つ女性だ」

「よろしく願いますわ」

優雅な一礼をするユリアナ。

「そして最後に、少し挙動不審な言動が目立つアスラナ。ユリアナの弟で、気弱だが実力は俺が保障できる」

「ぼ、僕……そんなに挙動不審かな……？」

アスラナは、不満そうな呟きを一つ。

そしてレイが、ついでに、という感じで付け足す。

「こいつらは魔族だから、そこのところ、よろしく頼む」

驚いているアンリエッタとウェールズを見て、苦笑しながら、話を続けるレイ。

「全員、俺の思想に同意を示す者たちであり、人間に要らぬ危害を加えることはないから安心しろ」

「……それを先に言って欲しかったな……」

ウェールズの言葉を完全に受け流し、レイは本題に入る。

「さて、紹介を終えたところで、話を本題に移そう。………今回、最近まで魔王側についていたシエラからもたらされた情報を受けて、俺がどう行動するか、そしてトリステインはどうすべきか、について報告に来た」

レイは一旦話を区切り、少し身構えたような態度のアンリエッタとウェールズを見渡し、もう一度口を開く。

「魔王の『ある計画』についてなのだが……」

い。
どうやら、魔王は世界の破壊のために俺を利用するらしい。

「俺の持つ“何か”を狙っているらしいんだ。それが詳細には何なのかは分かっていないが。……………それとシャルロット。魔王に狙われても、俺はお前の傍を離れないから安心してくれ」

いつの間にか、レイのジャケットの裾を掴み、心配そうな表情で彼を見つめていたシャルロット。

そして、それを見て優しい言葉をかけ、頭を撫でてやるレイ。

「待て待て！今はそっこの流れに行くことやないやろ！！」

「おっと、悪いな」

そう言いつつも、レイはシャルロットの頭を撫で続ける。

「……………まあ、そのままでもいいわ。先、続けてええよ」

なんかいろいろ諦めて、適当な感じで流すシエラ。

そんなことは気にも留めず、レイは話を続ける。

「さらに、魔王はガリアに潜伏し、影でガリアを操っているらしい。

……………そこで俺は、ロマリアへ行くことにした」

「なぜ？なぜガリアではなく、ロマリアなのですか？」

当然の疑問。ガリアに魔王がいるのならば、ガリアへ攻め込むのが道理である。

「俺の狙いはロマリアにあるからだ。……………そしてここで、トリスティンの対処だが、平民の地位を上げる。あー、反論は後だ。今から理由を説明するからな」

レイはそう言ってアンリエッタたちの反論を遮る。

「まず、ロマリアについて。……ヤツらは『聖戦』と称して、エルフが護る聖地の奪還を目的とした戦争を起こすらしい。魔王よりは御しやすいであろうロマリアのヴィットーリオを早々に懐柔し、戦争を未然に防ぎ、魔王に備えるんだ」

「では、平民の地位については？」

ロマリアのことについては納得し、平民の地位を上げる意味をウェールズが問うた。

「それについてだが……俺はずっと気に食わなかったんだ。魔法が使えるから平民より偉い、と驕り高ぶるバカ貴族どものことがな。魔法が使えるだけの無能貴族に国を任せるより、有能な者は全て起用した方がいいとは思わないか？」

それはそうかもしれないが、そう簡単に変えられるものではない……そんな表情のアンリエッタとウェールズを見渡し、レイはさらに続ける。

「確かに、現在の腐った貴族どものことを考えれば、かなり難しいだろうな。だが、それについては俺に考えがある。だからしばらく待ってくれ。……当面の目標は、平民が通う学校を作ること。平民に知識を与え、力をつけ、国力アップに繋げることだ。いいな？」

そして、レイはこの世界の法則を完全に壊す言葉を続ける。

「それと……俺はこの世界に、平民の使える魔法を普及させるつもりだ。その点についても、新設されるであろう学校の授業の一部に取り入れる。……貴族の反対については俺に任せてくれて構わ

ない」

かなりの数の貴族が肅清されることになるだろうがな、と呟きつつも、レイは議題を次のモノに移行する。

「さて、最後に一番の問題について話しておこう」

レイはここで話を区切り、今までの話について考え込んでいる一同の注目を自身に集めてから、言葉を続ける。

「おそらく、魔族たちは俺たちとの全面戦争に出るハズだ」

「「全面戦争???!」」

動揺を示すアンリエッタとウェールズ。

そして、魔族たちは、冷静に話の推移を見守っている。

だが、シャルロットは、心配そうにレイを見上げる。……………それはもちろん、魔族とメインで戦うレイを心配してのことだろう。

そんなシャルロットを後ろ抱きにして落ち着かせながら、レイは話を続ける。

「魔王は俺を狙っていて、さらに警戒しているだろうから目だった行動は起こしていないが、そのうちに俺から“何か”を奪いに、全力で向かってくる。……………その時に自身のもつ手駒を最大限に利用するのは道理だろうか？俺を狙いやすくなるうえに、最終目的である世界の破壊にも繋がる。……………なんのために世界を破壊したいのかは知らないがな」

レイはそんな呟きを残し、『今までの話で、何か質問は？』と、問うた。

この後もレイとアンリエッタたちの質疑応答が続き、一応は平民の扱いの改善に努め、国力を上げて戦争に備えることが決まった。そして、レイたちは『聖戦』の勃発を阻止するため、ロマリアへ向かうことが決まったのだった。

魔法は、平民でも使える？（後書き）

ええ、平民でも使える魔法……納得していただけたでしょうか？

一応、『漆黒の風』の中から『魔法を使える平民』を登場させるつもりで、そのための伏線？だったりします。

しかも、今回は不穏な単語も飛び出しましたね。

……魔族との全面戦争。

これは、未だにレイによる推測ですので、確実に起こるとは限りませんが、一つの可能性として捉えていただいと、いいかもしれません。

さて、それではまた次回（^^）ノシ

ウエストウッド村へ(前書き)

とりあえず、テファの回収に入りまゝす(笑)

それでは、本文をどうぞ!

ウエストウッド村へ

さて、王宮にて平民の地位を上げることの有効性を訴えたレイの提案により、平民の扱いが改善されることとなった。

しかし、そう唐突に新制度を受け入れられるはずもなく、貴族の反発だって激しい。

そのため、とりあえず密かに学校だけを作り、レイによる巧みな勧誘で平民の子供たちを入学させ、『平民でも使える魔法』を秘密裏に広めてゆくことになった。

そんな計画が着実に進んでいくなか、レイはシャルロットのほかに魔族たち、サイト、ルイズ、キュルケと共に、学院のとある一角に来ていた。

「さて、このメンバーでロマリアまで行く。……行くんだが、一つ忘れていたことがあった。サイトたちはもう知っているらしいが、虚無のハーフェルフ・ティファニア。…こいつを、仲間にする。姉代わりの許可は得たし、女王に孤児の生活を保障させることに成功したからな」

そう言つて、レイは誰の返事も聞かずにティファニアのいる村、ウエストウッド村まで転移した。

閑静な村の外れにある、とある一軒家。

そこがティファニアの家であり、ティファニアが孤児たちと共に生活している場所だ。

「サイトたちはここに来たことがあるんだろう?」

70000の軍勢と戦った後、サイトは大怪我で死にかけていた。それを救ったのがハーフェルフである『虚無』の少女、ティファニアなのだ。

その際、サイトはここでしばらく療養していたらしい。さらに、サイトを追ってきたほかのメンバーも、全員が付いてきており、今ここにいるメンバーでティファニアのことを知らないのはレイとシャルロットと魔族たちだけだ。

「ああ。テファは俺を助けてくれたんだ」

「そうなのか。……まあ、とりあえずは保護だな。虚無は敵方に利用されると多少困る」

レイの力を持つてすれば、虚無属性の魔法など大したことはないのだが、一応の用心は必要である。その保有魔力が想像を絶する高さだからだ。

……当然、レイには大きく劣るのだが。

そして、レイは扉をノックし、それと同時にサイトが中に声をかける。

「俺だよ！サイトだ！！テファ、いるかな？」

声に反応し、ティファニアが中から出てきた。

「サイトさん?……って、あれ?そちらの方々は?」

「レイ・クロカミだ」

「……タバサ」

「ユリアナですわ」

「あ、アスラナだよ…?」

「フェリスだよ」

「なんか、適当やな。ま、ええわ。ウチはシエラ。よろしゅう」

ティファニアの問いにも、いつも通りの態度で返すレイとシャルロット、魔族たち。

しかし、彼女にとってはそれが意外だったようだ。

「あなた方は私を怖がらないんですか？」

それに対し、レイはいつもの表情を崩すことなく、答える。

「どこに怖がる要素が？ハーフェルフだからか？……………それなら、俺やユリアナたちを怖がった方が妥当だろうな」

そう言って、レイは魔族たちの方をちらりと一瞥したのちに、ティファニアに視線を戻す。

そして、レイの言動に疑問を抱いたティファニアが質問を口にする。

「それは……………どういうことですか？人間は、エルフに恐怖し、嫌悪しているんじゃないんですか？」

「それは、人間の力がエルフに及ばないからだろう？だが、俺たちは違う。俺のような人間の例外や、そこにいるユリアナたち……………魔族は、確実にエルフを軽く越える化け物だ。今さら、エルフ程度の力に怯えるはずないだろう？」

レイのごもつともな意見。

しかし、これに反論する者がいた。

「……………レイは化け物なんかじゃない。私の大好きな、大切なヒト

／／／／／

ティファニアかと思いきや、シャルロットでした（笑）

「……シャルロット……。ありがとうな。俺も好きだよ」

そして、レイはシャルロットを抱きしめる。

……完全に目が点になっているティファニアに、一応の補足説明を入れるのは、やはりシエラだ。

「あー、この二人の状態は気にせんでもええよ？いつもあんなんやから。改善しようとしても無駄や。さすがにウチも諦めたわ」

「え？え？？そうなの？？？」

ティファニアは、魔族という存在を知らないの、実は随分前から話の内容を理解しておらず、さらには初めてあま〜い状態の二人を見たので、完全に呆然としていた。

ちなみに、サイト、ルイズ、キュルケは完全に蚊帳の外だったが、そこは無視の方向でいきましょう。

「いや、それは酷いからね？？」

「サイト、お前は何をいきなり叫んでるんだ？」

「……理解不能」

レイとシャルロットのキツイ一言に落ち込むサイト。

……… 現在の場は、レイとシャルロットのあま〜い状態に呆れる魔族たちとキュルケ、ルイズ、そして落ち込んで暗〜いサイト、さらには、何がなんだかよく分からない！という表情のティファニ

ア、という随分カオスな状況に陥っていたとか。

そんなカオスな現状を、元に戻してくれる人物が一人いた。

「あんたらは何してるんだい？早く入ってきてな」

「……マチルダか。すまないな、わざわざここまで説得の手伝いに来てもらって」

レイが声をかけた人物。それはマチルダであり、『漆黒の風』の副団長だった。

「……え???なんでミス・ロングビル???!」「」

サイト、ルイズ、キュルケがツツコむが……。

「秘書をやめてから、俺の傭兵団に入った。今では副団長だ。ちなみに本名はマチルダ。それと、今までの敬語は猫かぶりだから、これ以上ツツコむなよ?」

と、簡単な説明でいなされてしまった。

とりあえず中に入った一同は、魔族について説明し、ガリア側が魔王に操られて危険な現状と、それに備えるためにロマリアの不穏な動きを封じに行くことを話した。

「……というわけで、俺たちは今からロマリアへ向かうんだが、虚無であるティファニアの保護をしておかなければ、ガリア側の魔王

に虚無を利用される恐れがあつてな。それで、お前たちを迎えに来た」

そう言つて、レイは話を締めくくつた。

もちろん、レイはマチルダにはこの話をしており、納得してもらつた上で、ここから連れ出す手伝いをしてもらう心算らしい。

それを察してか、マチルダが説得に加わる。

「テファの『虚無』はホントに危険なんだ。うちの団長さんが言う通りに、トリステインで保護される、もしくは彼についていく……どちらかにしないとヤバイ。魔族の危険性は半端じゃない。だから、レイの言うことを聞いたほうがいいよ」

マチルダは、ハーフェルフである彼女を助けた姉のような存在。テイファニアは孤児と共に、彼女の仕送りで養つてもらっているのだ。つまりテイファニアは、彼女の言うことは素直に聞けるといふわけだ。

しかし……。

「でも、この子たちが……」

そう。孤児たちのことが心配であり、外の世界に出て行くことなど許されないと思っているのだ。

それでも、レイの策は抜け目ない。

「その点については心配ない。今、俺はトリステインに学校を作つていてな。そこに泊り込みの生徒として迎え入れる準備が出来ている。もちろん、女王の許可は得ているモノだし、平民に使える魔法も、俺の傭兵団の者が教えている」

レイが新設した学校に受け入れる心積もりらしい。さらには、魔法を教える教師として、『漆黒の風』のメンバーを雇用しているのだ。

「え？レイって学校なんて作ってたのか？」

「平民でも使える魔法ってなんなのよ！！」

「ふふっ、仕事が速いのねえ」

上からサイト、ルイズ、キュルケの言葉だ。

全く知らなかったようで、質問……キュルケはただの賞賛だが……とにかく、二人が質問してきた。

ちなみに、魔族たちは全部知っているので、何も言わない。

それに対し、レイは『言っていなかったか？』というような表情で答える。

「俺の行使する魔法はこの世界の平民でも大抵使えてな。それらや武術を教えて国力アップを図り、魔王に備えるための平民学校を作った。……まあ、そんなものは名目で、平民の教養や戦闘力を上げて、将来は国から武官や文官として雇用してもらえるようにするためだな」

「なんか……あんたっているいろいろやるのが早すぎよ」

もう、なんか呆れきったようなルイズの呟き一つ。

「いや、そんなん前から分かったことやん。なにを今さら」

そして、シエラの軽いツッコミは、とりあえず流すことにして、レイは話を続ける。

「さて「いや、なんか言えや!」…とりあえず要件は伝えた「おい
い!!聞け言つとるやるおお!!」…そこから先はティファニア、
お前自身で考えろ。まあ、それ相応の理由がない限りは連れて行く
つもりだがな。……………答えが決まったら、俺のところに来い」

シエラは無視され続け、そしてレイとシャルロットはその部屋から
出て行ってしまった。

お・ま・け シエラの扱いについての考察……………という名のシエ
ラいじり〜

「なんかウチの扱い雑になってきとるううう!!…!!」

「シエラ〜。そんなに騒いじゃだめでしょ〜?」

「黙れ、兄貴」

「あら、お兄様にそんな口を利くなんて、いけないですわ」

「そ、そうだよ。あ、謝った方が、いいと思う」

「なに?!ウチだけ敵なの??なあ??!」

というわけで、可哀そうな「ねえ!なんか悲しくなってくるからや
めてくれん??!」……………仲間の魔族からいじられる、可哀そうなツ
ッコミ役「ツッコミ役って認めてない言つとるやるおお!!…!!」…………
……………じゃあ、サイトの地位を奪い取り、勝ち取った、いじられ役の
「そんな地位要らんからね??!」……………可哀そうな!シエラでし
た〜。

「『可哀そつな』を強調するなあああ……！」

ウエストウッド村へ(後書き)

テファ回収編(笑)は、想像以上に長いモノになりそうです。

テファを回収することに成功すればロマリアへ行くので、しばらくお待ちください。

それでは、また次回っ(^^)ノシ

『バカでうるさくて、どうしようもなく……』 (前書き)

サブタイ。これだけだと、ただのギャグパートですね (笑)

ですが、今回は結構なシリアスパートですので、テンションを間違えないようご注意ください。

さて、それでは本文どうぞ！

『バカでうるさくて、どうしようもなく……』

訪問組はそれぞれの時間を過ごし、ユリアナによる料理（実は料理が上手かったりする。ちなみに、レイは家事関係に全く才能はない）で夕食に舌鼓を打つと（食材は亜空間から呼び寄せた）、もう辺りはすっかり暗くなり、世界を照らすのは赤と青の双子月と、綺麗に輝く星だけとなった。

そんな中、レイとシャルロットは星を見に行く、という名目で、二人で散歩に出かけていた。

だが、レイには目的があるようで、一瞬の迷いもなくある一つの場所を目指しているようだ。

「……シャルロット。悪いな、付き合わせて」

「いい。あなたと一緒になら、どこでも行ける」

「そうか。ありがとな」

レイは、くしゃつとシャルロットの頭を一撫でし、歩き続ける。

その道は緩やかな坂になっており、どうやら小さな丘に辿り着くらしい。

木々に囲まれた道に行くこと数分。

やっとのことで視界が開け、丘の上に辿り着いた。

そこにあるのは、いつもより少し誇らしげに輝いているように見える、満天の星空だった。

……そして、先客の影も一つ。

「失礼、俺たちも並んでいいか？」

「……え？確か……レイさん？」

その影は、体育座りで地面に座り、星空を見上げていた。そして、レイとシャルロットは、レイの創造したシートを地面に敷いて、その影の隣に座る。

「まだ悩んでいるらしいな。……………それに、悩みは孤児のことだけではないらしい」

その影はティファニア。ハーフエルフで『虚無』の少女。彼女は未だに迷っていたのだ。孤児のことだけではなく、自分自身のことだ。

それを感じ取ったレイが、説得のために行動しているというわけだ。

「……………そんなことは…」

「レイになら、何を話しても大丈夫」

否定するティファニアを諭すように、シャルロットは彼女に声をかけた。

そして、しばらく逡巡したのち、やがて決心したかのように、ティファニアは口を開く。

「知つての通り、私はハーフエルフです。あなたたちは確かに受け入れてくれたけど、普通は『エルフ』というだけで異端として恐怖されるか、憎まれて蔑まれます。……………外の世界には興味と同時に、恐怖も抱いてるんです。『ハーフエルフ』としての私が、受け入れられるのか、心配で……………」

それはそうだろう。

ただ、そこに存在している『エルフ』だから、というだけで畏怖され、蔑まれるのだ。

……それは、かなり辛いことだ。

だが、レイにはそんなティファニアの思いもお見通しだったようで……。

「だから？それがどうしたって言うんだ？」

簡単な言葉で返されてしまった。

「受け入れてもらえないのは辛い！なんで、ただ必死に生きているだけなのに咎められなければならないの？！私だって普通に生きていただけなのに！！！」

だから、レイのそんなそっけない言葉で感情の糸が切れ、自身の感情をあらわにしたティファニア。
だが、それでもレイの余裕は消えない。

「言いたいヤツには言わせておけばいい。他人にどう言われようと、他人にどう思われようと、お前はお前。誰がなんと言おうと、お前は心優しきハーフェルフの少女、ティファニアなんだ。そのことに誇りを持って」

ティファニアはレイの言葉にハツとして、星空からレイの方に視線を変える。

それを見たレイは、もう一度言葉を紡ぎだす。

「もうお前には、お前を認めてくれるヤツがいるじゃないか。……
…… サイトはあれで、結構頼れるヤツだ。俺なんかよりも立派だよ。そんなアイツに、一回でもいい、頼ってみないか？」

「あ、あなたには頼っちゃいけないの？」

ティファニアは、震える声で訊ねた。

「もちろん、いつでも頼ってくれ。俺のような存在が役に立つとは思えないが、助けてやるよ」

「ホントに？」

「ああ。今の言葉に、嘘偽りはない。……シャルロットに誓ってな」
(注：『シャルロットに誓った』時のレイは、絶対に嘘をつかない、という噂があったりなかったり……)

そう言つて、レイはその場で立ち、『良いモノを見せてやろう』と呟き、目を閉じた。

だんだんとレイの総身から蒼い魔力があふれ出し、立ち昇り始める。そして、レイは星空に向かって手をかざし、魔力波を放った。

その魔力波は途中で爆発を起こし、橙や緑、紫など色とりどりの輝きを見せて咲き、鮮やかに、そして儂く散っていった。

「魔法には……まあ、剣もだが……その二つには自信があるんだ。だから、お前の護衛くらいなら、助力出来るぞ？……当然、一番の護衛対象はシャルロットだな」

レイはそう言つた後、少し嫉妬したような（レイがティファニアとばかり会話しているため）シャルロットの傍に近寄り、耳元で『俺は、いつでもお前が一番だから心配するなよ？』と呟いた。

そして、その言葉に顔を真っ赤にしているシャルロットを見て、微笑みながら話を戻す。

「だから、俺たちを……いや、サイトたちだけでも、少しは信頼してくれよ。バカなヤツばかりだが、俺の仲間は皆、いいヤツばかりだ。バカでうるさくて、どうしようもなく……真っ直ぐで眩しい。

俺のような影に生きるヤツには、少し眩しすぎるくらいに、あいつらは一生懸命生きてる。あいつらなら、きつとつざいほど過保護にお前を守ってくれるさ。……そして、俺は一戦闘力として、サイトたちには手が負えない影の部分で、お前を護ってやるよ」

「レイさん……」

そう言いながら、レイは再びシャルロットの横に腰掛けた。しばらく、沈黙が場を支配する。……いや、レイとシャルロットのいる空間だけは和んだような、心地よい沈黙なのだ。

その沈黙を突き破り、やっとのことでティファニアが口を開く。

「あの…私、いきます！あなたと話して、決心ができました。あなたはとても信頼できる人だと思っだし、サイトさんだって良い人でした。だから、私もついていかせてください」

どうやら、迷いはなくなったようで、吹っ切れたような声音だった。レイは、その言葉に満足し、少し微笑みながら返す。

「そうか。なら、俺たちはお前に手を差し伸べよう。これで、お前は俺たちの仲間だ。……ようこそ、ティファニア」

「歓迎する。……ただ、レイはあげない」

シャルロットの嫉妬したような言葉を聞き、苦笑しながらレイはシャルロットを膝の上に乗せ、後ろから軽く抱きしめながらティファニアの返事を待つ。

「ありがとうございます。よろしく願いますね！………でも、お二人は本当に仲がいいんですね。羨ましい」

ティファニアは、少しだけレイの方をちらつと見て、また俯き、頬を赤らめつつもどこか諦めたような口調で呟いた。そしてシャルロットは、その少しだけ惚れてしまったようなティファニアに対抗するため、レイの手をぎゅぐゅと握る。だが、その変化にはあまり気付かないようで、レイは普通にティファニアの言葉に応える。

「まあ、俺とシャルロットは恋人同士だしな」

意外とサラッと告げたレイ。

そして、ある程度予想はしていたものの『かなり仲がいいだけかも！』的な淡い期待を抱いていたティファニアは、落胆した。代わりに、シャルロットは嬉しそうな表情になったが。

二人の変化の理由が思い当たらず、レイは首を傾げつつもシャルロットを持ち上げて立たせてから、自分も立つ。

「さて、俺たちはもう部屋に戻る。……出発の時間は追って連絡する。決断してくれて、ありがとうな。……じゃあ、シャルロット、行くか」

そう言っつて、レイはシャルロットの手を握る。

シャルロットも握り返し、来た道に戻ろうとすると、ティファニアが二人を止めるように声をあげる。

「あの一……一つだけ、いいですか……？」

「ん？どうした？」

レイは立ち止まり、顔だけをティファニアの方へ向ける。

「……私のことはこれから、テファ……と呼んでください。……そして、他のことは諦めますから」

他のこと……レイと恋人になることを諦める、ということだろう。まあ、レイとシャルロットの仲を引き裂くことなど不可能に近いので、その判断は妥当だ。

「ああ、分かった、テファ。……だが、他のことを諦める、というのはどういうことだ？」

そしてレイは、なにを諦めるのかはサツパリだったらしい。この男、聡い男なのだが、ある一方の方面に関しては疎すぎるのだ。……それは、恋人が出来ても……さらに、それが二人目だとしても、全く変わらない。

テファは、そんなレイを見て、慌てたように言葉を返す。

「い、いえ！なんでもありません！！……あの、お二人で幸せになつてくださいね！」

「ああ。もちろんそのつもりだ。……そうだ、テファ。家まで送ってやるうか？」

レイはいつも通りに返し、さらに今、思いついたように付け足した。

「え？でも、私がいたら邪魔なんじゃ……」

テファが渋るなか、レイは全く気にしない。

「いや、転移で家まで送るだけだから、邪魔なんかにはならないさ」「って、え？転移……？」

転移魔法を知らないテファは少し狼狽しているようだが、レイは早速魔法を行使する。

「〈テレポーターション!〉」

そして三人の影はその場から消え、次にそれぞれの視界に入ったのは、ティファニアが住んでいる家と、その近くにレイが創造した家だった。

その光景を見て、驚くテファ。

「え?…え??さっきまで星の見える丘にいたのに……どうして???」

「だから、転移だつて言っただろう?」

「レイからしてみれば、常識的な魔法」

シャルロットも補足し、その内容にさらに驚くテファ。

「え?!ということとは、まだもつと凄い魔法も使えるんですか??」

……少し興奮気味で訊ねたテファ。

そんな状況にレイは苦笑しつつも、言葉を返す。

「さあな。だが、使える可能性もあるぞ?」

……いや、あまり答える気はなかったようだ。

「すーいーすーいーですー!」

それでも、はしゃぐテファ。

そして、レイはふと横を見て、シャルロットが眠そうな表情をしているのに気付く。

気付いたので、レイはテファとの話を切り上げようとする。

「……………シャルロットは『レイ至上主義』だが、レイも相当な『シャルロット至上主義』なのかもしれない。」

「そうでもないさ。……………さて、そろそろ寝た方がいい時間になってきた。今日はこれでお別れだ」

「そんな……………まだ、お話したいです……………」

少し潤んだ瞳で見つめるテファ。

だが、レイはその瞳に怯みつつも眠そうなシャルロットを気にして、別れを告げる。

「また明日も会えるだろう？今日はもう終わりだ。……………またな」

「……………はい。また明日！」

「……………」

最後のシャルロットは、もうほとんど寝かけている。

レイが支えていなければ、倒れそうだ。

そして、レイはシャルロットをおんぶし、テファに見送られながら、自身の創造した家へと帰っていった。

そして、自分たちの部屋につき、ベッドにシャルロットを寝かせた後に……………。

「やはり、寝顔も……………可愛いな」

とか、小声で呟いてしまったりするレイであった。

なんというか、やはりレイとシャルロットの仲は永遠に壊れること

はなをよしひする。

『バカでうるさくて、どうしようもなく……』 (後書き)

でも、結局最後はギャグですか？

やはり、シエラによるツツコミは入れといた方がよかったですかね？

シエラ「結局最後はギャグか！珍しくちゃんとやっとなる思ったら、結局はそういう雰囲気になるんか！〜というか、途中も所々のろけとったなあ？？うざいねん、そういうの！〜……言っとくけど、アンタらが毎回やっとなるのろけ、全ツ然おもしろくないからね？？」

うん、こんな感じのツツコミを入れてくれそうだ (笑)

というわけで、次回もよろしくお願ひします！

それでは、また (^^) ノシ

料理？無理無理無理無理（前書き）

ロマリアまだかよおおお！………という読者様の声が聞こえてき
そうです（笑）

ええ、なんか進まないですが、愛想つかさずに見てやってくださ
い。

それでは、本文をどうぞ！

料理？無理無理無理無理

テファアを説得し終えた次の日。

皆は、レイが創造した家のエントランス部分に集合していた。

レイはテファアがついてくることを皆に告げ、早速出て行く準備をするように言った。

「だが、まあ最初は朝食だ。……ユリアナ、頼む」

「分かりましたわ」

そう言つて、ユリアナは転移でキッチンの方へ跳んだ。

それを見送つたサイトが、ふと疑問に思つたことを訊ねる。

「なあ、レイ。お前つて大抵なんでも出来るよな？……料理とかの家事つて出来ないのか？」

「確かにそうねえ。レイの料理、ちょっと食べてみたいかも」

「……私も」

サイトの言葉に、キュルケとシャルロットが反応し、それを見たレイは、言葉を返す。

「俺になんでも出来るとでも？料理なんて出来るはずがない」

レイは、意外とあっさりと言いつた。

だが、これにここにいる全ての者たちが驚く。

「……………ありえない（ありえへん）！！」「……………」

シャルロットは声を出さないものの、驚きの表情をしている。

そんな全員の反応を見て、レイは呆れたように嘆息する。

「お前ら……俺をなんだと思っているんだ？なんでも出来る怪物か？……いや、答えなくていい、なんとなく答えを予想できる」

問いかけに対し、喜び勇んで答えようとした全員を制するように、言葉をつなげたレイは、さらに続ける。

「それに、俺が料理をすると、全てが焼け焦げるんだ。何故か、魔法で火力を微調整しても、な。出来上がる料理は、さながら暗黒物質^{ダークマ}だ。……そんなもの、食いたくはないだろう？というか、あれは食い物じゃない……」

……… なんか、皆が微妙な表情になった。

「なんか、レイ君って違う意味でも規格外だったんだね」

フェリスのこの言葉に反応はせずとも、皆が内心で賛同を示したとか。

ちなみに、レイはそんなことはどうでもいいようで、一人で歩いて皆のところから少し離れ、エントランスの隅にある椅子に腰掛けた。

そんなレイを見て、サイトたちは小声で会話します。

「なあ、今のレイ、絶対に拗ねてるよな？」

「そうね、意外とそういうところあるわよね」

「でもルイズ、タバサにとってはそれもいいらしいわよ？」

「そう。ああいうところも、好き／＼」

「……アンタらはのろけ過ぎや。それと、ヤツは絶対に拗ねとるな」

「まあまあ、そういうのもいいんじゃないの？」

「そうですね。レイさんとシャルロットさんみたいな関係、わたしは憧れますわよ?。」

「ぼ、僕としては、少し甘すぎるかも」

そんな会話がなされていたのだが、レイには全部丸聞こえだったよ
うで…。

「お前ら、聞こえているぞ?……それと、拗ねてないからな」

一応、付け足すのも忘れないレイ。

「やっぱり、拗ねてるレイもいい／＼／＼」

そして、そんなレイを見て、未だに拗ねていると確信して話を進め
たシャルロット。

その上、今朝のシャルロットは饒舌で、とととてレイのもとへ歩い
ていき、さらに言葉をつなげる。

「そうだ、レイ。あなたが料理を作れないのなら、今度私を作る」

最終的にはレイに抱きつき、彼女は甘えるように言った。

そんなシャルロットの言葉を聞き、レイはだいぶ機嫌を直して言葉
を返す。

「シャルロットが作ってくれるのか?それは嬉しいな。……だが、
俺は拗ねてないからな?。」

機嫌を直しても、やはりレイは『拗ねている』と言われることがあ
まり好きではないようだ(笑)

そんなこんなで朝食を食べ終えたレイとシャルロットは、ついに昨日、ついていく決心をしたテファの家を訪れていた。……………と言っても、歩いて数秒のところなのだが。

レイはテファの家の扉をノックし、返事が聞こえた途端に扉を開く。

「おはよう、テファ。昨日ぶりだな」

「……………おはよう」

レイとシャルロットは、部屋に入ってすぐに椅子に座り、我が物顔でくつろぎながら挨拶した。

そんな一連の行動に全く驚きを示さず、普通に挨拶を返すテファとマチルダ。

すでに、レイたちのこのような行動は『普通』として捕らえられているようだ。

「おはようございます。レイさん、タバサさん」

「おはよう、団長さんたち」

レイはそんな二人の挨拶に一応、手を上げて応えながら、いつの間にかやら取り出したコーヒーを飲み、シャルロットと二人で和んでいた。

レイは、コーヒーを飲みながらシャルロットを膝の上に乗せ、後ろから片手だけで軽く抱きしめていたのだ。

「マイペースさも相変わらず。……………まあ、ラブラブ度は前より上がったみたいだねえ。正直、朝っぱらから甘ったるいよ」

そんなマチルダの評価には耳も貸さず、レイとシャルロットはひたすら和み、ゆ〜っくりとコーヒーを飲み干した。

「さて、落ち着いたところで本題に入ろう」

ここで落ち着くなら、一旦家で落ち着いてから来い、と思うマチルダだが、ここはあえて黙っておく。

そんなマチルダの思いなどには気付かず、レイは普通に話を続ける。

「テファの昨日の決心についてだ。……昨日は『俺についてくる』と言ったが、子供たちと一緒に学校へ行っても構わないんだぞ？そういうところを考えた上での決心だった、と捉えていいのか？」

「私たちの旅はそれなりに危険。レイが護ってくれるとはいえ、危険であることには変わらない。それでも、行く？」

レイの言葉に、シャルロットも言葉を付け足した。

ちなみにこの時、マチルダは自分が説得するまでもなく、テファが決心していたことに驚いていた。

そんなマチルダの驚きには気付かず、テファは口を開く。

「私は、誰がなんと言おうともレイさんについて行きますよ。……だって、レイさんが護ってくれるんでしょう？」

「ああ。昨日も言ったが、俺はお前も護ってやる。………だが、一番の護衛対象がシャルロットであることは変えないからな」

「まあ、団長さんなら優先順位がどれだけ低かろうと、護ると決めた人はちゃんと護るだろうね。安心できる。テファを任せたまよ、団長さん」

マチルダは『一番の護衛対象がシャルロットである』という事実も受け入れ、テファの事をレイに頼んだ。

「そうか。それなら、俺から言うことはもう何も無い。……明日には出発するから、用意しておけよ。それと、子供たちは今日中に学校へ転移させるからな」

「あたしは子供たちについて行くんだったね？」

マチルダはレイに確認を取った。

「ああ。他の団員と共に、教師として働いてくれ」

「……あまり気が進まないけど、あんたの頼みは聞かないわけにもいかないしね。了解したよ」

「任せた、マチルダ。頼りにしているぞ。……さて、ここにいられるのは今日で最後だ。しっかりと目に焼き付けておけよ、テファ」

レイはテファにそう言い、シャルロットの肩を叩き、合図をして膝の上から立つてもらい、自分も立ち上がる。

そんな二人を見ながら、テファがレイに声をかける。

「レイさん、タバサさん。明日からよろしく願いますね」

「ああ。じゃあ、また明日」

「……また」

「はい、また明日！」

そしてレイは、マチルダにも別れの言葉を告げ、シャルロットと共に自身の創造した家へと帰っていった。

余談だが、マチルダはテファがレイに恋（もどき）をしているらしいことに気付き、こんなことを思っていた。

『テファ、その恋は叶わないよ。……あの二人の仲は裂けないか
らねえ』……と。

料理？無理無理無理無理（後書き）

はい、新設定。

レイの料理は、全て暗黒物質ダイクマターになります。

これは、なにかの伏線というわけではなく、ただのギャグです。
意味はありません。

あつ、シャルロットにご飯作らせるフラグは立ちかけていますがね
（笑）

そういう話を作るかは不明です。

さて、なんかグダグダになってきた感が否めませんが、これから
もよろしくお願い致します。

それでは皆さん、良いお年を（^^）ノシ

？風の王・アイオロス？（前書き）

新年、あけましておめでとうございます！

今年も、よろしく願いしますね？

さて、それでは本文をどうぞ！

？風の王・アイオロス？

次の日。

レイは前日に子供たちとマチルダを自身が創立した平民のための学校へ転移で送り、とうとう出発の日を迎えた。

この場にいるのは、レイとシャルロット、ルイズとサイト、キュルケ、ユリアナ・アスラナ姉弟、フェリス・シエラ兄妹、そしてテファの十人だ。

目指すはロマリア。

目的は聖戦勃発を未然に防ぎ、魔族と対峙するための態勢を整えること。

移動手段はシルフィード………だったはずなのだが。

「人が多いのね！こんなに乗せられない！きゅい！！」

………だそうだ。

それもそうだろう。いくら竜種の全長は大きいとはいえ、人が（正しくは人と魔族とハーフェルフが）合わせて九名………幼生のシルフィードにはかなりキツイものがあるといえる。

この場の誰も明確にロマリアの地を思い浮かべることが出来ないために、転移で向かうこともままならず、さらには、頼みの綱のオストラント号も、整備中で使えない………ロマリアへ向かうのはかなり難しいのでは？…という状況だったのだが、それでも誰も全く慌てていなかった。

何故なら………。

レイならなんとかしてくれる！

というわけらしい。

そんな期待？を裏切らず、レイは唐突に蒼い魔力を総身から立ち昇らせつつ詠唱を始めた。

「《汝、全ての空を支配する者にして、天空を突き抜ける一陣の風よ！我、レイ・クロカミの名の下に命じる。我が命に従い、我らの歩みを助けよ！》」

レイの足元に魔方阵ができ、それと同じ形でありながらも、巨大な魔方阵がシルフィードの隣にもならんだ。

そして、その魔方阵が光りだした。

「《 出でよ、インディゴファルコン！！》」

レイの言葉を受け、魔方阵から巨大なハヤブサが姿を現す。

竜種であるシルフィードと比べても遜色ないほどに巨大でありながら、その美しく濡れたように光る濃い藍色の翼が、気高く雄大な鳥獣であることを示していた。

「相変わらず、呼びにくい名前だ」

「《仕方ないじゃん、これがボクの種族を表す名前なんだから。…

…というより、どうせボクが出てくるんだから、個体の名前で呼んでよね》」

インディゴファルコンは、皆の脳に直接語りかけるように言葉を発した。

事実、その喋りは魔力を介して伝えられる、一種の念話のようなモノだった。

ちなみに、『どうせボクが出てくる』というのは、レイが何度『インディゴファルコン』という種族の鳥獣を呼んでも、確実にこの彼

？が出てくるがためのセリフだ。
もう一つ補足だが、最強の魔獣である『メモリーズ』は、一体しか存在しない唯一無二の存在であるがために、種族の名前は個体の名前と同じである。

以上、閑話休題。

インディゴファルコンの言葉を受け、レイはインディゴファルコンの威圧感に押され、驚いている一同と、そんな一同を見て微笑を浮かべる魔族たちを尻目に、言葉を返す。

「ああ、悪かったな、アイオロス」

目の前にいるインディゴファルコンの名は、アイオロスというらしい。

「へん、許す。まあ、君にはいろいろ世話なってるしねえ。……

で、乗せてって欲しいんだよね？どこまで行きたいの？」

「先導はその韻竜……シルフィードに任せることにした。道は覚えていられるから、あいつについていってくれ。……それと、出来る限り早く行きたい。だから、シルフィードには誰も乗せず、全員をお前に乗せてもらうことになるが、いいか？」

レイは、さらに問いかけた。

その問いに、アイオロスも快く応える。

「へうん、いいよ。でも、このままじゃボクでも全員乗せられないよね？……だから、少し大きくなるよ」

アイオロスはそう言って、全身から緑の魔力を立ち昇らせ、瞬間、

強く光った。

光が収まると、アイオロスの全長が召喚された時の二倍ほどの大きさになっていた。

そんな変化を見せたアイオロスに、驚きの声をあげるサイト。

「なっ?!大きくなった?!?!」

声こそ出さないものの、ルイズやキュルケ、そしてテファもかなり驚いているようだ。

そんな三人を見たシエラが口を開く。

「そこまで驚くことやないやろ?自身で魔法を行使できるほどの魔獣なんて、ざらにいます?」

「そうですね。ただ、そこまで高位の魔獣を召喚することは難しいのです」

ユリアナはシエラの言葉に同意を示し、言葉をつないだ。
さらに、本人(本獣か?)であるアイオロスが補足を入れる。

「《ちなみに、普通のハヤブサくらいの大きさまで小さくなることも出来るよ》」

「まあ、そういうことだ。∴さて、全員アイオロスに乗れ」

レイはそう言い、それに応えてルイズ、サイト、キュルケの順に乗っていった。

それを見た魔族組も、アイオロスの背に乗る。

「ん?テファは乗らないのか?」

レイは、シャルロットがアイオロスの背に乗らないのは、自分と一緒に乗ろうとするはずだからだ、と疑問は抱かなかったが、テファが全く乗ろうとしないことに疑問を抱き、その疑問を口に出した。テファは、レイの言葉にはっとして、慌てた様子で言葉を返す。

「え?! ……い、いえ、あの……少し見惚れちゃいましたノノノノ」
「ああ、アイオロスか。確かに、アイオロスの藍色の翼は美しい。見とれるのも無理はないな。……だが、急ぎの用事でもある。すぐに乗ってくれ」

実は、テファが見惚れていたのはアイオロスではなく、『蒼き魔力に包まれた、レイの魔法行使時の姿』に、だったのだが、当の本人は全く気付かなかったようだ。

そして、気付かないレイの反応に少し落ち込みながら、テファもアイオロスに乗り込んだ。

「《ふふつ、意外と罪作りな男だったんだね、君は》」

……アイオロスはテファの心境に気付いたらしく、レイのみに向かって話しかけた。

「なにを言っている、アイオロス?」

「《ん?べつつに》 なんでもないよ!》」

高位な魔獣のはずだが、アイオロスはかなり軽い性格の持ち主のようだ。

「お前の言動は、時々よく分からんな。………だが、まあいい。さて、シャルロット。俺たちも乗るぞ?」
「分かった」

シャルロットはそう応え、そしてレイはそんな彼女を抱え、軽くジャンプしてアイオロスの背へと降り立った。

「さて、出発だ。シルフィード、頼むな。早く飛べるよう、強化魔法もかけておく」

「きゅい！了解なのね！！」

シルフィードは、レイの言葉にそう応え、青空へと飛び立つ。

その後についていくように、アイオロスもその巨大な藍色の翼をいためかせ、空へと翔けていった。

？風の王・アイオロス？（後書き）

ええ、展開がものすごく遅いうえに、今回は特に駄文です（汗）しかも感想の返信で、『ロマリアには一月二日投稿分で着く』と書いたのですが、どうやら着くのは次々回になりそうです。。。

なんかグダグダで、展開の遅い文ですが、これからこの停滞を抜ければ、ちよつとは大きな展開を迎えると思います。愛想を尽かさずに読んでやってください。

それと、ストックがもうほぼないですが、まだ一日一投稿を続けようと試み続ける所存ですので、よろしくお願いします！

それでは、また次回っ（^^）ノシ

ゆるゆるい空の旅？（前書き）

ええ、ストックがあと数話分しか残っていません。
そろそろ真剣に一日一投稿がきつくなるといっつか、無理に近くな
ってきました（汗）

なにか、打開案ありませんかね？

………愚痴つてもしょうがないっすね（汗）

それでは、本文をどうぞ！

ゆるい空の旅？

突き抜けるような青空の中、蒼い竜の影と、藍色の巨大なハヤブサの影が華麗に空を切っている。

ハヤブサ……アイオロスの背には、レイ、シャルロット、ルイズ、サイト、キュルケ、ユリアナ、アスラナ、シエラ、フェリス、テファの10人が乗りこんでも、未だに拾いスペースが残っていた。一行は今、ロマリアへ乗り込む途中なのだが、かなりの余裕を持ってアイオロスの背の上で過ごしていた。

……なにやら、レイが魔法について語っているらしい。

「……と、このように、俺の使う魔法体系であれば、平民でも魔法を使える、というわけだ」

どうやら、以前に言っていた『平民でも使える魔法』についての講義のようだ。

レイは、話を続ける。

「先ほども言った通り、人間は誰も、魔力を保有している。そこに、貴族かどうかは関係ないんだ。ただ、魔法体系が魔力の質に合うかどうか、これが問題というわけだな。……ここまでは、さっき言ったことを要約した話だが、理解出来ているな？」

レイの確認に、首を傾げる者が一人。

……予測できると思うが、サイトだ。

「いや、全く分からねえんだけど」

「そうか。では、次の説明に入る」

だが、レイは完全にスルーし、さらに話を続けようとする。

「いやいやいや、そこはしつかり教えてくれよ!!!?」

「めんどくさい。というわけで、シエラ。サイトに説明を頼む」

「なっ?!なんでウチが説明せなアカンねん!!!ウチは、子守は苦手なんや!!!」

意外と容赦ない物言いのシエラ。

そんなシエラの態度に、サイトは口をはさむ。

「ガキ扱いか!!!」

「そうや!ウチからしたらアンタはガキや!!!」

「つか、そういうお前は何歳なんだよ!?!」

「レデイに年齢のこと訊くのは、失礼とちゃうか?!」

「うっさい!ガキ扱いされた仕返しだ!!!」

「アンタは実際、ガキやないか!これは年齢面だけやないで!...レイを見てみい!落ち着きが全く違うわ!!!」

「レイを比較に出すな!勝てるわけねえじゃん!!!だいたい、お前だって落ち着きねえよ!!!」

.....どちらもガキだ。

と、誰もがツツコミたくなったところで、レイが二人を無視して、もう一度、話を始めた。

「.....バカ二人は放っておいて、「バカじゃねえ(やないわ)!!!」

「.....放っておいて、話を元に戻そう」

レイは、途中に入ったツツコミを完全に無視して、話を続ける。

「先ほども言ったが、俺の行使する魔法の体系であれば、平民でも

魔法を行使することが可能だ。そしてもちろん、貴族にだって適正があるヤツは多いんだ。……シャルロットにはすでに教えていて、それなりの効果が出ているんだが、今回はルイズやキュルケ、テファにも教えようと思う。いいか？」

この先に起こるであろう魔族との全面戦争において、こちら側の戦力を増強しておこう、ということだろう。……自衛の手段として、という意味合いも含まれているはずだ。

「むしろ、教えて。虚無以外の魔法も使ってみたいもの」

「そうねえ。私も、火属性以外の魔法も使えるなら、使ってみたいわ」

「私も、レイさんが使う魔法には興味があります」

ルイズとキュルケ、テファが賛同を示したので、レイは軽く頷き、指示を出す。

「よし、それならとりあえず一人ずつに教師をつける。……まずはルイズ。お前は、ユリアナとアスラナに師事してくれ。ユリアナ、アスラナもいいな？」

「分かりましたわ。任せてください」

「ぼ、僕も、が、頑張ります」

二人の返事を聞き、レイは指示を続ける。

「そして、キュルケにはフェリスをつける。……テファは俺が教える。シャルロットは、俺の補佐を頼む」

「僕、頑張るよ」

「レイの役に立つのなら、なんでもする」

フェリスとシャルロットの返事も聞き、早速グループに分かれての授業が始まった。（空の上での授業、というなんとも奇妙な授業だ）
まずは、ルイズたちの方を見てみよう。
教師側でしっかりしているのはもちろんユリアナで、説明を始めるのも彼女だ。

「それでは、わたくしから説明をさせてもらいますわね。……まず、わたくしたち魔族が使う魔法と、レイさんたち人間が使う魔法の違いについて説明しますわ」

「あ、あの！ユリ姉！その説明は、要らないと思う。……今回の目的は、魔法を使えるようにすること、だよな？」

アスラナによる制止が入った。
だが、それを否定するのは、意外にもルイズ。

「興味あるわ！ユリアナ、教えてちょうだい」

「分かりましたわ。魔族と人間の魔法には決定的な違いがあります……」

と、全く関係ない説明に入ってしまった。

「……………もう僕、知らない」

アスラナの、可哀そうな呟き一つ。

……………こちらのグループは、ロマリアへ着くまでに魔法を覚えられるのだろうか？

次に、キュルケたちの方を覗いてみよう。

「さて、僕が魔法を教えるよ」

ずいぶんマイペースな感じで授業が始まった。

「えっと…あなたで大丈夫？」

「失礼だな。一応、僕だって魔族だよ？それに、他の人より魔力が少ないから、人間の魔力量でのコントロールを教えやすいと思うんだ。……あつ、虚無の二人は魔力量が多いから例外ね」

つまり、レイは魔力量の多さで教師の割り振りを決めたらしい。

虚無であるルイズとテファには、上位魔族や規格外の魔力を持つ自分を教師にした、というわけだ。

「さあ、授業を始めるよ」

「分かったわ。お願いね、フェリス先生」

やはりマイペースなフェリスだが、おそらく授業は効率よく進むのだろう。

フェリスとは、なんだかんだで物事をうまく進める………そんなヤツなのだ。

最後は、テファたちのグループだ。

無駄を嫌うレイは早速、説明、実演に入る。

「まず、魔法を行使する上で重要なのは、自身の魔力を認識することだ」

そう言いながら、レイは蒼き魔力を左手に集める。

「このように、魔力を認識し動かすだけで、魔力を集め、効果的に

運用することが可能になるんだ。……というわけで、まずは魔力の認識から始める。自身の奥底に眠る純粋な力を探してみてください」

言われたとおり、テファは目を瞑って集中し、魔力を認識しようとするのだが、全く上手くいかないようで、顔を顰める。

「……全然分かりません……」

結局、テファはレイに助けを求めることにした。

そして、レイは苦笑しながらテファに近づき、左手を彼女のおでこにかざす。

その左手は、蒼き魔力を纏っていた。

「今から、軽く魔力を送り込む。お前の魔力とは性質が違うだろうが、これでなんとなく感覚を掴んでみる」

そう言つて、レイは弱い魔力を送り込んだ。

「?!これは???!」

「これが魔力だ。……覚えたか？」

「……はい……たぶん……」

自身なさげだが、首を縦に振って呟いたテファ。

その反応に満足し、レイは満足したように頷き、シャルロットに目配せする。

シャルロットは、レイの行動の意図を汲み取り、コクリとレイの方に頷いた後、テファの方に歩み寄る。

「あとは、自分の魔力を見つけるだけ」

「はい」

テファアは一言で答え、また目を閉じた。

しばらく瞑目する時間が続き、唐突にその目は開かれる。

すると、彼女の総身は純白の魔力で覆われていた。

「わぁ！これが私の？」

「そう。その魔力を練りこむようにルーンを詠唱し、頭の中で起る現象を思い浮かべれば、魔法を行使することが可能。……ただし、自身の実力より上位の魔法を操ることは出来ない」

シャルロットはそう説明し、小さくルーンを唱えて小さな火の玉を上空に打ち出した。

彼女の本来の属性は風と水。しかし、水の逆属性である、炎の魔法をいとも簡単に操ったのだ。

……つまり、その魔法は今までの魔法体系と違うことが見て取れた、というわけだ。

「こんな感じ。言うべきルーンは、《放て、放て！我が魔力よ、大いなる意志のもとに炎を顕現し、敵に撃ち放て！ファイアー・ボール！》……でいい。やってみて」

最後まで説明し終え、シャルロットはレイの方を向く。

そんなシャルロットを見て、レイは軽く頭を撫でてやりながら『合格だ』と告げた。

……どうやら、シャルロットの確認テストの意味合いもあったようだ。

そんな仲の良い二人を見て、少し嫉妬しながらも、テファはルーンを詠唱し、右手を上空に向ける。

「《……ファイアー・ボール!》」

……。
何も起きない。

なぜ? というような表情のテファを見て、レイは説明を入れる。

「イメージが足りてないんだ。もっと明確なイメージを持ってやれ。……俺たちの魔法は、ハルケギニアの魔法より燃費はいいんだが、具体的なイメージを頭の中に思い浮かべ、全てを具現化させなくてはいけない所が厄介だな」

レイの説明を聞き、一生懸命に魔法の練習を始めるテファ。

その隣では、アイオロスの背に座り込み、自身の膝の上にシャルロットを乗せて、後ろから軽く抱きしめ、テファの練習風景を見るレイ。

……なんか、平和な一コマになっている。

そんなこんなで、ロマリアへの空の旅路は平和に進んでいくのだった。

……と、この話を一旦区切ろうとした時、唐突にツツコミが入る。

「って、ウチらをずっと放置しとくとはどういう見や!!」

「そっだそっだ!!」

どうやら序盤にケンカ(笑)を始めたシェラとサイトのようだ。

「ホントは、いろいろおもしろいこととか言ってたんやで?!」

「そうだそうだ！」

「って、サイト！さっきからアンタは『そうだそうだ！』しか言っとらんやん！喋れんのか……！」

「そうだ、そうだ」

「肯定すんな……！」

「……うん、これはこれで平和だけど、さらに締まりがなかった。」

このように、かなりゆる〜く、聖戦の勃発を防ぎにいく一行であったとさ。

ゆるゆるい空の旅？（後書き）

ただの移動のわりには、今回は長い文になりましたね（笑）

さて、そろそろ一旦の休憩を取りたくなってきた袖雨でした。
それではっ（^^）ノシ

？渡り人？（前書き）

今回は、レイとシャルロットのデートを描写した際に登場した『渡り人』が登場します。

……………覚えていますかね？

念のため、後書きに簡単な説明だけいれておきます。

それでは、本文をどうぞ！

？渡り人？

「《おっ！ついたみたいだね》」

「ええ？！早い！もしオストラント号で飛んでも、何日かはかかるはずなのに！」

「キュルケ、何のための魔法だと思っている？俺がシルフィードにかけた魔法で、飛ぶ速さは通常の三倍以上……いや、もっと速くなる。……アイオロスはもともと速いしな」

「《まあね！一応、風の王だし？……それで、そろそろボク、帰りたいんだけど。幻界に帰ってもいいかな？》」

アイオロスは全員を背から降ろし、そう問うた。

一行は、とうとうロマリアに到着したのだ。

ちなみに、魔法訓練の成果は短時間でありながらもすっかり出たらしく、全員が初級の魔法（といっても初歩の初歩の……くらしいの、簡単なもの）を使いこなせるようになったとか。

おっと、話がズレてしまっていたようだ。元の軌道に戻そう。

レイは、アイオロスの問いに答える。

「ああ。長い間乗せてもらって悪かったな。もし、次呼んでもよろしく頼む」

「《ん、りょくかい！……でも、次こそは召喚時から『アイオロス』って呼んでよね！》」

レイの言葉にアイオロスはそう答え、緑色の魔力の閃光と共に、姿を消した。

そして、シルフィードも空高く飛び去っていった。

どうやら、上空に待機するつもりらしい。……人間状態になりたくないからだろう。

「さて、ここからが任務だ。気を張っていくぞ」
「……………了解！！」「……………」

レイの声に残りの十人全員が応え、一同はすぐそこにあるロマリアの首都へ向かうのだった。

ロマリアの首都の衛兵たちをレイの魔法で惑わし、堂々と門をくぐって、一同は首都に潜入することに成功した。

「意外と簡単なものね」

「いや、あそこまで見事に惑わすのはなかなか難しいで？」

「そうですね。さすがはレイさんです」

あまりにも簡単に潜入できたことに拍子抜けしたようなルイズだったが、シエラとユリアナによって軽く反論された。

確かに、レイほどの技術の持ち主でなければ、衛兵たちを完全に騙すことは難しかったかもしれない。

……当然、上位魔族であるユリアナやアスラナ、優秀な魔族であるシエラにも、可能なのだが。（フェリスは、あまり幻惑の魔法が得意ではないので無理）

「まあ、そんなことはともかく。……とりあえず、今日は様子見だ。そろそろ俺の仲間もここにつくハズだから、しばらく待機できる場所を探すぞ」

レイはそう言い、シャルロットを伴って歩き出した。
それに残りのメンバーも続く。

ロマリアの現状には、酷いモノがあった。

レイの魔法によって認識阻害がなされ、誰にも気付かれることなく
一行が街を歩いていると、神官たちは『神の名の下に』とかほざき、
やりたい放題な様子が多々目撃された。

そして、民たちの生活は全くもっていいとは言えず、むしろかなり
悪い。

…………… 目も当てられない惨状と言えるだろう。

「はあ…………… やはり、聞くのと実際に見るのでは違うな」

そんな現状に、それを情報と知っていたレイでさえも嫌悪感を拭い
去ることが出来なideいた。

しかし、この現状を変えようとしているのも、やはりレイなのだ。
それを思ったシャルロットは、いつものように小さく、咳くように、
しかし、しっかりとレイに言葉をかける。

「あなたなら、こんな世界もきつと治せる。だから…………… 落ち込まな
いで」

シャルロットの言葉に、レイは何も答えずに一度だけ、前を向いた
まま彼女の頭をクシャッと撫で、歩き続けた。…………… いや、口だけ
は『ありがとう』と動いていたが。

そんなレイの反応をなんだか愛しく思い、シャルロットは自然に彼

の腕に抱きついた。

そして、その彼女の反応を後ろから見ていた残りのメンバーからは、呆れの視線。(テファからは羨望の眼差しだったり)

二人は、呆れや羨望の眼差しに気付いても、完全に無視して歩き続けたとか。

しばらく歩き、街の中心にある大聖堂の近くに、レイが様子見に最適だと判断する場所は見つかった。

その場所は、どこからどう見ても一般の宿屋。……しかし、その宿屋に目を向ける者は皆無。……誰も見ていなかった。

「俺たちは運がいいぞ。……こんな所で『拋り所』を見つけられるとは」

「ん？『拋り所』ってなんやつけ？……ああ！あの『渡り人』^{タリビト}がいるとされてるところか？」

シエラは一度考え、思い出した！と言わんばかりに声を発した。

だが、周りの者……他の魔族さえも『渡り人』の存在を知らないように、首を傾げている。

そんな中、先日『渡り人』と会ったことのあるシャルロットが、レイに問いかける。

「『渡り人』って、あの？」

「そうだ。……普通、一つの世界には一つの『拋り所』しかないんだが、どうやらここにも『拋り所』を作っていたらしいな」

レイはそう答えた。

しかし、やはり『渡り人』やら『抛り所』やら言われても全く理解出来ないメンバーたちは、さらに首を傾げ、疑問を口にする。

「なあ、ワタリビトってなんだ？」

「なにか特殊な力の持ち主なんでしょうか？」

サイト、テファ、と疑問が出始めると、他のメンバーも口を開く。

「おかしいですわ。なぜわたくしも知らないような存在が？」

「ゆ、ユリ姉が知らないことって、こ、この世にはたくさんあるとお、思うよ……？」

「というか、一番長く生きてるはずの僕が知らないんだから、知らなくて当然だよ。むしろ、知ってる方が異常？」

フェリスはそんな呟きを残すが、キュルケがそれに反論する。

「いや、なんかあなたは、いろいろ知らなくてもおかしくないような気がするわよ？」

「そうね。……少し間が抜けてると言うか……。でも、ワタリビトって存在がなんなのかは気になるわね」

ルイズも同意を示し、さらに『渡り人』についての疑問を提示した。それに答えようと口を開きかけるレイだが、唐突に現れた気配を察し、そちらの方を向いて声をかける。

「しばらくぶりだな、『渡り人』」

レイの視線の先には、まるで転移でもしてきたかのように突然、認識可能となった『渡り人』の姿が。

「そうですね、『漆黒の旦那』。そして、『蒼のお嬢様』も久方ぶりでございます。……あなた方とは、なかなかご縁があるようで」

以前と変わらず、丁寧な口調の『渡り人』は、やはり以前と変わらずに落ち着いた配色の紫をしたフード付きマントを羽織り、目深にフードを被っている。

「ああ。まさか一つの世界に二つの『抛り所』を作っているとは思わなかったぞ」

「ええ、『抛り所』の場所は、存外適当に決められておりましてね。……たまたま、と言っていいでしょう」

案外、『渡り人』は気まぐれな存在のようだ。と、ここで、今まで黙っていた『渡り人のことを知らない組』が、疑問を口に出し始める。

「なあ、さつきからフツーに会話してるけど、その妖しげな人って誰だ？」

「というか、本当に人ですか？魔力も使わずに転移してきたように見えましたわよ？」

「だよね、僕もそれは疑問に思ったよ」

サイトから始まり、ユリアナも疑問を提示、それにフェリスは同調した。

「人じゃない？どういうことなのよ？……また魔族？」

「いやいや、確か『渡り人』は人として存在してる者のハズや」

「え、でも魔力を使わずに転移って……」

そして、ルイズも疑問を呈し、シエラが軽く反論するが、キュルケとしては『魔力ナシの転移』には納得いかなかったようだ。

そんな疑問を全部聞いたレイは、少々めんどくさそうに口を開く。

「まあ、詳細はこの中で話す。……『渡り人』、中でしばらくの間、滞在してもいいか？」

「ええ、もちろんですよ。同じ世界で再び出会ったのも、何かの縁にございます。しばらく共に過ごすのも悪くはないでしょう」

レイはサイトたちの疑問を軽く受け流して『渡り人』に入室の許可を得た。

こうして、レイたち一行は『渡り人』の存在する『抛り所』内部へ足を踏み入れるのだった。

? 渡り人? (後書き)

↳ 『渡り人』 についての考察

『渡り人』とは、通常の人間では行うことの出来ない『世界渡り』
……つまり、異世界へ渡ることの出来る人物である。

『世界渡り』とは、『世界の扉』を開く能力であり、レイや魔族などは魔法によってそれを可能にしている。

しかし、『渡り人』は違う。

異能である『世界渡り』という能力を以って、魔力を消費せずに、異能と同名の行為、『世界渡り』を行うことが出来るのだ。

よって厳密に言えば、『渡り人』とは“魔力を使わずに『世界渡り』を実行できる人物”のことを差すというわけだ。

『渡り人』が主に身をおくのは、『拠り所』と呼ばれる場所だ。様々な世界に点在しており、その存在を確認できる者は極少数だと云われている。

また、『拠り所』同様、『渡り人』の存在を確認できる者も少ないらしく、彼がわざと存在を示さない限り、彼を見つけることが出来る者は少ないだろう。

ちなみに、現在知られている“『渡り人』を目視できる人物”は、レイをおいて他にいない。

↳ 『抛り所』 について

『抛り所』とは、世界に点在し、世界の数だけ存在していると言っても過言ではない“『渡り人』の居場所”だ。

疑問視されているのは、世界の数だけあるとされる『抛り所』に、一人しかいないハズの『渡り人』が常に存在していることだ。

いつ、どの『抛り所』に行っても、『渡り人』は必ずそこにいる。それが一種のパラレルワールドとして捉えられているからなのか、それともやはり『渡り人』が複数人存在するからなのか………それを解明できた者はおらず、レイでさえも“謎が多すぎる人物”だと考察している。

しかし、レイ曰く、悪人でないことは確かなようで、話し方も非常に丁寧で好感が持てる。

……………妖しいことには変わりないのだが。

『渡り人』に関しては、こんな感じの説明で大丈夫でしょうか？

一応、本文でも簡単な説明を入れるつもりですが、詳細としてはこのような感じです。

さて、それではまた次回っ（^^）ノシ

死者の世界と現世の狭間。（前書き）

なんか、めんどくさい設定を考えてしまいました。

『捌り所』を、こんな場所にするつもりじゃなかったのに……！

まあ、なに言ってるか分からないと思うので、とりあえず本文をお読みください。

それでは、どうぞぞー！

死者の世界と現世の狭間。

『抛り所』内に入ったレイたち一行は、宿屋形式になっている『抛り所』での部屋の割り振りを決め、それぞれ二階の部屋へ荷物（といても極少量だが）を置いて、もう一度広間である一階に集まっていた。

どうやら、二階は宿泊施設、一階は酒場のようなところになっているらしい。

集まったレイは、『渡り人』の説明を始めようとする。

「さて、『渡り人』について説明しておこう。……だがその前に『渡り人』に確認したいことがある」

「はて、なんででしょうか？」

『渡り人』はいつもと変わらずに落ち着いた口調で問うた。

……その口調は、まるで何が起ころうとも動じないような不変さを感じるのであった。

「ああ。ここに滞在する上で、名前がないといささか不便だな。仲間の名前を呼んでも構わないか？」

普通に考えれば、レイのこの言葉はかなり奇妙な問いだ。

しかし、思い出して欲しい。

『抛り所』では、個人情報を見索してはいけない。……特に、名前は明かしてはならないモノだったはずだ。

先回のレイと『渡り人』の会話では、ただのしきたりのような語り口だったが、そのようなしきたりが、理由もなく続くはずもないのだ。

つまり、名前を明かしてはいけないことには、理由が存在する、というわけだ。

レイと『渡り人』以外の者たちは、なぜ名前を明かしてはならないのか、と疑問でいっぱいになり、頭の上にはてなを浮かべているが、二人は全く気にせずに会話を進める。

「名前、ですか？……いいのですか？『抛り所』は、この世界であつてこの世界ではありません。いわば、死者の世界と現世うつしよとの狭間のような場所……。そんなところで真名を明かせば、あの世の者に死者の世界へ連れ込まれてもおかしくはありませんよ？」

「確かに人間の真名には力がある。あの世の使者であれば、その真名を使つて死者の世界へ連れ込むことも可能だが……」

『渡り人』とレイの言葉を聞き、だいたいの事情を察したらしく、他のメンバーが驚きの声をあげる。……いや、シャルロットだけはもう気にせず、レイの右腕に抱きついているが。

『だってどんなに危険でも、レイが護つてくれるから大丈夫』……というわけらしい。

「ええっ！じゃ、じゃあ、ぼぼ、僕、ここで、しし、死ぬのお？！」

「あ、慌ててはダメですわ！こ、ここはもつと冷静に……！」

「いやいや、そういうアンタも落ち着け！ただ、な、名前明かさなええだけの話やる？！」

「シエラもさりげなく慌ててな〜い？もつと冷静にいこうよ〜」

かなり呑気に注意するフェリスだが、他のメンバーは全く動揺を消し去れないようである……。

「で、でも、私もかなり怖いわよ？！というか、助けて……！」

「ルイズ、落ち着け！大丈夫だ、俺も超怖エ！！」

「それ、全然大丈夫じゃないわよ？」

「でもキュルケさん、怖いのはしょうがないと思います！名前なんてすぐ呼んでしまいそうですし！」

と、ここで気付いた。

…………… ルイズとキュルケは、サイトとテファによって名前を呼ばれてしまっていることに。

「ああああ！！！名前呼んじゃまったああああ！！！」

「あつ、私もっ！！ど、どうしよう！！！」

「ちょっとサイト！！！どうしてくれんのよ！！！」

「私は、どうなるのかしらね……………」

キュルケは嘆息し、そして皆はさらに気付く。

…………… ルイズは、サイトの名前も呼んでしまった。

「ちよっ、このままでは全員名前呼ばれるで！！…………… ってか、なんでアンタはこんな物騒なここに連れてくんねん！！！スルーされとるけど、ウチもさりげなく兄貴に名前呼ばれとるからね？？」

シエラはかなり慌て、レイに掴みかかる。

だが、レイは全く慌てずに言葉を返す。

「いや、俺は『通常なら、使者があのお世へ連れ込むことも可能だ』と言っただけだぞ？」

「へ…？それはつまり…………… どういうこと？」

サイトは首を傾げた。

レイは、いつものように泰然として言葉をはく。

「では簡単に説明しよう。……あの世の使者に真名を聞かれないように、結界を張っておいた。だから、今は“通常”と言える状態じゃない。異常であり、イレギュラーだ。つまり、名前を呼んでも死ぬなんてことはないから安心しろ」

……つまり、レイの『渡り人』に対して言った言葉……名前を呼んでも構わないか？……という質問は、ほぼ意味がないのと同義なのだ。

「じゃあなんでさっきの質問したんやああ！！なに？ウチらを惑わせたかったわけか？！悪趣味やねん！！名前呼んでも安全なら、あんな質問の意味がないやろうがあああ！！！！」

シエラのツッコミも、ただのツッコミではなく、怒り主体のモノになっていた。

……実はシエラ。かなり落ち着いているように見せて、内心ではかなり怯えていたりしたのだ。

なかなか可愛いところもあるじゃないか（笑）

「何が『（笑）』や！！おちよくんな！！！！」

「あ、あの、今シエラは、なにに対してツッコんだの…？」

「うっさい！！大人の事情や！！今はウチ、イラついとんねん。次なんか言ってきたヤツ、どつくぞ！！」

シエラはちょっとすごんでみるが、涙目だったりするので、全く怖くない。

……むしろ、少し可愛かったりする。

「でも…シエラ」うっさい！！」「…え？ちよ！！」

ブウンツ！と旋風のような蹴りがアスラナへと叩き込まれるのだが……。

そこは上位魔族。簡単に避け、しかも軽く反撃してしまっていた。ドガア！と嫌々な音が鈍く響いた。

「あっ！わ、わざとじゃなくて条件反射で……」

「な、なんでウチばかりこんな目に……」

シエラはうずくまり、結構本気で落ち込み状態に入ってしまった。そんな可哀そうなシエラの状態を見やり、ユリアナは回復魔法をかけてあげてから、自身の弟に注意する。

「アスラナ、今のはいけませんわよ」

「いやいや、シエラの自業自得だよ。一応、あの問いには意味があつたから言つたんだろうしね」

「確かに、意味のないことはしないだろうしなあ。……で、なんの意味があつたんだ？」

フェリスがアスラナを庇い、サイトはレイに問いかけた。

そして、サイトの言葉を受け、レイは口を開く。

「ああ。一応、しきたりではあるからな。『渡り人』の許可を取つておこうかと思つたんだ」

……なんとも微妙な理由。

理由になつていない！と攻めることは難しい答えだし、かと言って納得できるほどに理解可能な理由でもなかった。

だが、そんなことはどうでもいいようで、今まで口を閉ざしていたシャルロットが口を開く。

「勝手に騒ぐ方が悪い。……それに彼なら、みんなに危険なことをさせないと分かっていたはず」

「……まあそれも、もっともな言い分ではあるのだが、あれだけ騒いだ後では、どうにも納得出来ない一同。……いや、テファだけは『それもそうですね!』と間が抜けた咳きを残していたが。」

なんか、かなり無駄に体力を浪費した一同は、レイによる『渡り人』の説明を大人しく聞き、『渡り人』の詳細な説明については、第4部『誰かに支えられるのは悪いこと?』、もしくは前話の後書きを参照)、それぞれの部屋へと戻ってゆく。

それぞれの部屋へ向かう一同を見て、小さく咳きを残す者一人。

「ふふふ、なかなかおもしろい方々ですね。……それに、レイさん。あなたはかなり有能で信頼のおける仲間をお集めになったようだ」

レイの名前を知らないはずの彼から……未だレイの名前は呼ばれていないにも関わらず……間違いなくその名前が咳かかれていた…。

死者の世界と現世の狭間。(後書き)

『抛り所』…… どんだけ物騒な場所なんだ…！

自分で考えといて『その設定はないわ〜』とか思っちゃいます(笑)

そして、『渡り人』が怪しすぎる！そして妖しすぎる！！

今後、彼はどういう設定の人物になっていくんでしょうか。

いくつかの候補はありますが、未だに決まっていなかったりします
(笑)

まあ、そのうち決めますので、根気強く読んでやってください。

それではっ(^^)(ノシ

？神の代行者？（前書き）

なにやらヴィットーリオと共に新キャラが登場するようですよ？

ちなみに、とある読者様に投稿していただいたキャラです。

それでは、本文をどうぞ！

？神の代行者？

次の日の朝。

レイたちは、宿屋式の『投げ所』内の一階、酒場部分に集まってくるいでいた。

今から、朝食の時間らしい。

「さて、皆様。朝食はどうされますか？……よろしければ、私が作りますが」

「いつもならわたくしが作るのですが……作ってくださるのですか？」

「はい。料理の腕にはいささか自信がありましてね…」

ユリアナの問いに、『渡り人』は小さく、不気味な含み笑いと共にその存在を薄くしていった。

もともと『渡り人』を視認できる少数派に属するレイ以外は、その姿を確認出来なくなり、最後の含み笑いに不安を覚える。

「な、なあ。さっきの笑い、大丈夫かよ？」

「妖しげで怪しげな笑いだったわね」

サイトとルイズは小声で会話を交わしていた。

それを見たレイが一応の注意をする。

「見えていないが、『渡り人』はまだそこにいるぞ？」

どうやら、存在が薄れていても移動が速くなるわけではなかったらしい。

そして、そんな注意に驚くサイトとルイズ……さらには、残りのメ

ンバー（シャルロットを除く）たち。

「はあっ?! 転移したんやなかったの?!?!」

「そうですね。今回も魔力を使わずに転移したように見えたが…」

レイは、“『渡り人』の存在感”についての説明をしていなかったようだ。

それを思い出したレイは、とりあえず説明を入れておく。

「『渡り人』は通常、限られた者の目でしか捉えることが出来ない。それがどんな基準で決められているのか……はたまた、完全なランダムなのは知らんが、『渡り人』を視認出来る者はごくわずかなんだ」

「えっと…それはつまり……どういうこと？」

全く『渡り人』の存在を理解できないサイトにとって、この説明は理解し難いようだ。

ルイズやキュルケ、テファヤ、ユリアナ、アスラナ、フェリスも同じような感じた。

『渡り人』について、元から少しの理解があつたシエラは、分かつたような分からないような、微妙な表情をしている。

レイは、そんな表情の一同を見渡し、一つ溜め息をついた後に説明を続ける。

「つまり、大抵の人物には『渡り人』を見る事が叶わない、ということだ。『渡り人』が自ら姿を現さない限りはな」

「まるで、見るものがそこにいる『渡り人』の存在を拒むかのよう…」

レイの言葉を受けて、シャルロットが呟いた。……以前のレイの説
明とほぼ同じなのだが。

「……ちなみに、俺には見える。だから、先ほどは近くにいたこと
が分かったわけだな」

「へえ……って、怪しいとか言っちゃったけど、大丈夫だったのか
？」

「そ、そういえばそうね」

今さらながらに、失礼なことを言ったのでは？と焦り始めるサイト
&ルイズ。

そんな二人をおもしろがり、キュルケが二人を煽る。

「ふふつ、ヤバイかもね。あの方、怒ったら怖そうよ？」

「ああ！怖い！！！」

「ささ、サイトおお！な、なんかあったら私をちゃんと護りさいい
い！」

………なんか、二人してヒステリックを起こし始めた。

「あ、あの、レイさん。大丈夫でしょうか？サイトさんたち、すご
く慌ててるみたいですけど……」

テファが結構心配してしまうほどに、二人のヒステリックは酷かつ
た。

………まあ『渡り人』程得体の知れない者にキレられたら………と想像
すると、それは確かにかなり怖いのもかもしれない。

「大丈夫だ。『渡り人』に聞こえていたようだが、別に怒ってなど

いなかった」

「それは伝えてあげなくてもいいんですか？」

「ああ、大丈夫だ。この慌てよう…失くすのはもったいないだろう

? ……なあ、シャルロット？」

「（コクリ）見てて、楽しい」

テファ、ちよつと引き気味。

意外とSな二人でした（笑）

そんな無駄な会話を続けていると、『渡り人』がいきなり姿を現した。

「出来ましたよ。こちらです…」

そう言つて差し出されたのは……………“白いご飯に沢庵、そして鮎の塩焼きに味噌汁”。

完全なる和食。

日本人ならば、朝食としてこれほど相応しいモノはないっ！と言いつ切る者も多いのではないだろうか。

特にサイトなどは、久しぶりの和食に目を輝かせている。だが…………。

「ええ〜つと、これなにかしら？」

「見たことないです…………」

「食べ物…よね？」

「…………私も、見たことない」

ハルケギニア組には全く分からないようで、最早食べ物として扱ってもらえない？ぐらいだ。

「実は、わたくしも実際に見るのは初めてですわ」
「でも、確かチキウってとこの島国で、よ、よく見られる朝食……って、本で読んだ気がする……」

いや、魔族側にも分からない者はいるらしい。
そんな中、俯いて拳を握り締め、震えている者一人。

「ん？どうした、シエラ？……そこまで珍しいか？」

その人物はシエラだったようだ。

そして、レイの呼びかけにシエラは唐突にガバツ！と上を向き……。

「おおお！！白いメシやああ！！ひっさしぶりに食べる！！感謝や、『渡り人』！！！」

目をキラツキラさせて叫んだ。

「ん、そういうえばシエラはこういうモノが昔から好きだったよね。このためだけに『世界渡り』してたし」

フェリス曰く、そういうことらしい。

だが、この場の皆は一樣に思う……。

ツッコミ役がボケっぱいを行動するな……ッ！！！！

「めっし、めっし 白いメシ……！！……って、あれ？どうしたん、みんな？？」

シエラのあまりの壊れっぷりに、あのレイでさえも呆然としている。考えてもみて欲しい。……“あのレイが！” 呆然としているのだ。

どれほど奇異な行動なのか、察していただけだろう。

「……………シエラ。ツツコミ役がボケでしたら、もう終わりだぞ？」

「……………残念。もうあなたは、需要がなくなる。かわいそう」

「優秀なツツコミだった、お前のことは忘れないぜ！」

「僕たちのもとを離れても、元気でやるんだよ」

そして、我に返ったレイ、シャルロット、サイト、フェリスが口々に別れの言葉を（笑）

そんな言葉を聞いたシエラの真価が、今、発揮される…。

「いや、なんでやああ！なんでツツコミがボケたらアカンの？！それに、ウチはツツコミ役になるの認めてない言うてるやる！！そしてウチの需要はツツコミだけと違うわ！！…たぶん。ボケたわけでもないしな？！……………それと、兄貴。アンタは後でウチの部屋来い。ちよい言いたいことが出来たわ。覚悟しときい」

やはり、シエラはツツコミ役でしかないようだ。

「需要がツツコミだけではない……………という言葉に、『たぶん』ってつける辺り、自分の立場をよく理解してるのね」

……………キュルケさん…意外と鋭い指摘です。

「たっ、たまたまや！！決して、ツツコミしか需要がないと認めたわけやない！！」

と、こんな感じでふざけながら朝食を食べ終え、皆がくつろぎ始めた頃、レイがふと顔を上げ、ある一方を見て目を細める。

「…どうしたの？」

そんなレイの行動を不審に思ったシャルロットは、可愛く首を傾げながら訊ねた。

レイは、そのシャルロットの頭を撫でてやりつつ、『やはり可愛い…』とか思いながら、質問に答える。

「いや、待ち合わせしていた俺の仲間が、ロマリアについたらしい見知った気が確認できた。…：迎えに行こうと思うんだが、ついてきたいヤツはいるか？」

「…：もちろん、私はレイについていく」

「あっ…：じゃあ、私も行きます！」

シャルロット、テファが同行の意を示し、他には誰も志願しないようなので、レイは二人を伴って転移していくのだった。

927

一方その頃、ロマリアの中枢部では…。

「…：どうだ、ヴィットーリオ。レイとやらの状態は」

銀髪、蒼眼の、まるで彫刻のように整った顔立ちの青年が、ブリミル教の教皇であるヴィットーリオに声をかけた。

「それが…：ロマリアに入ろうとした時から全く見えないのですよ。私の『遠視』に気付いているのかもしれないね」

「…：そうか。ヤツほどの『気』ならば、当然かもしれないな。…：むしろ、今まで気付いていないのがおかしいくらいだ…」

銀髪の青年は、目にギリギリでかからない程度のサラサラな髪をかき上げ、壁にもたれかかりながら呟いた。
普通のヤツがやればかなりウザい行動だが、この青年がやると一つの絵のようにぴったりと合う。

「もしかしたら、気付いているのかもしれませんがね。……そういえばジュリオはレイ君と直接会っていますね？……彼の実力を測ることは出来ましたか？」

この場にはアルビオン戦でレイたちと会ったことのある、ジュリオもいるようだ。

「難しい質問ですね。……ただ、彼の实力は力だけではない。その背景にある絶対的な支えが、彼の力にも繋がっている……それが率直な感想ですね」

「……この世界の歪みとして、悪影響を及ぼすのか……それとも、正史には登場するはずのなかった英雄となるのか……。俺たちは、そこを見極める必要があるようだな……」

どこまでもクールに、淡々と、青年は言葉を紡いだ。

「そうですね。魔族と違い、歪みとしては些ちとか純粹過あやぎるようですからね。……ただ、人間の身に上位魔族と対抗できるだけの力を宿すということは、それだけで危険分子といえるのでは？」

「……その面においては、俺が見極めよう。……俺の異能『神の瞳』でヤツを直視し、この先の方針を決めればよからう。……そして、この世界に來た魔族はこの世界の危険な異常分子として、全ての存在を消す。魔王もだ。異論はないな？」

鋭く光る蒼い眼光を一瞬、金色に輝かせつつ、青年は訊ねた。

金色の瞳……それは全世界の監視者である、神と同じ瞳の色

「ええ。異論などありませんよ。……神の代行者たる、あなたの言うことなのでから」

『神の代行者』……彼の目的は歪みを直すこと。

この世界に本当は存在してはならないはずの……害なす異分子の排除だ　ッ!!!!

？神の代行者？（後書き）

新キャラを目立たせるべきなのに、何故かシエラが大いに悪目立ちしている気がする…。

こいつ、勝手に動きやがるからなあ…（汗）

出来れば、自重させます（いや、“します”かな？ww）

まあ、これからも読んでいただければ幸いです。

それではっ（^^）ノシ

傭兵団・漆黒の風（前書き）

またもや新キャラです。

しかも、モブなレイファンの子も再登場したり（笑）

それでは、本文をどうぞ！

傭兵団・漆黒の風

レイ、シャルロット、そしてテファの三人は、『テレポーターション』により、一瞬でレイの仲間のもとに現れた。

「おお！団長じゃないっすか！！タバサさんもご一緒に！……虚無の娘さんの説得は、うまくいったんすか？」

レイの仲間は、合計で五人いた。

一人は、先ほど話しかけてきた精悍な顔立ちの男性。

艶やかな黒髪を持つ、ポニーテイルの少女。

そして、なんとギーシュやモンモランシー。

さらには、いつぞやのレイ・ファンクラブ騒ぎの中心人物……エリシアまでできていた。

「ああ。今もここに来ているぞ。……テファ」

「は、はい。えっと、ティファニアです。よろしくお願いします」

ペコリ、と頭を下げ、五人の方に挨拶したテファ。

それに応え、五人組の方も自己紹介を始める。

「俺あ傭兵団・漆黒の風の副団長補佐、ガンツってんだ！よろしくな、嬢ちゃん！」

精悍な顔立ちの青年は陽気に。

「私は、傭兵団・漆黒の風において経済面を管理している者、です。名をセリーナといいます。以後、お見知りおきを」

黒髪の少女は、どこか感情が抜け落ちたように、冷静かつ機械的に。

「僕はギーシュといます。お嬢さん、よろしくね」

ナルシストな彼は、カッコつけてバラを啜えながら。

「ちょっとギーシュ！何やってんのよ、全然カッコよくないわよ、それ！むしろウザイわ！！……ああ、自己紹介ね。私はモンモランシーっていの。よろしくね」

なんだかんだでギーシュについてきちちゃった彼女は、軽くツッコミながら。

「はい！『レイ様 ファンクラブ』の会員番号一番っ！エリシアといますう！！………おおっ！なんかティファニアさんは、私たちファンクラブの人間と同じにおいがしますです！ハイ！！」

そしてモブな彼女は、かなりのハイテンションで。

どうやら、テファがレイの事を好きなことまで見抜いちゃったりしているらしい。

それぞれは自己紹介を終えた。

……だが、レイにはいろいろと文句があったようで……。

「おい、いい加減そのグループ名は何とかならないのか？……俺に様付けはするな、と言っているだろう？」

「ダメですよ！私たちファンクラブは、レイ様を信仰し、ミス・タバサとの関係を応援する会なんですから！！」

「応援はいいが、様付けを認めた気はないし、する必要もないだろう？………だいたい、今回呼んだのはガンツとセリーナだけだぞ？……

…どうして、ギーシュやモンモランシー……それにエリシアまでいるんだ…」

どうやら、レイとしてはここまでの大人数を呼び込むつもりはなかったらしい。

「私とガンツが団長の話をしていました。すると彼らに聞かれました。ついてきます。……そういうことです、団長」

冷静に、とりあえず一部始終を説明する機械的セリーナのな声。

「……わざわざ適当な説明、どうも。……まあ、計画に支障はない大丈夫だろうし、大目に見よう」

「どんなイレギュラーにも対処できるなんて、やっぱりあなたは凄い」

おっと、ここでシャルロットが入ってきた。……この流れでは、レイとシャルロットが二人の世界に飛び立ってしまう！（笑）

「大したことじゃない。……だが、シャルロットに褒められると嬉しいよ」

そう言っつて、シャルロットの頭を撫でるレイ。

気持ち良さそうに目を細め、レイにもたれかかるシャルロット。

……やはりこの流れに入った。

いかん、ツツシエラコミを連れてくるべきだった…ッ！

「相変わらず、君たちは仲いいよね……」

やはり、呆れ気味なギーシュ、その他数名。（モンモランシー、ガ

ンツ、セリーナだ。…テファヤエリシアは、少しづらやましそうに見える)

この現状を覆せる者は、もういないのか………という状況になりかけた頃、ようやくレイは話を本題に戻した。

「さて。ガンツ、セリーナ。魔法の調子はいいな？」

「はい！団長！！魔力も満タンでさあ！！」

「同じく、です。中級魔法ならば、かなりの数を放てるのではないか…という予測を立てております」

彼らは平民だが、レイ式………というかミラーナ式の魔法は彼らの魔力の質に適しており、結構な魔法の使い手のようだ。

「そうか。ならばなんの問題もない。……一旦、俺たちの滞在場所で計画を確認しよう。戻るぞ」

そう言って、レイは転移魔法を実行に移した。

転移した先は、どこからどう見ても普通の宿屋………だがその実態は、特定の人物の案内がなければ、辿り着くことすら困難な『渡り人の拠り所』だ。

レイは、迷わずにその扉を開いて一同を『拠り所』内部に案内する。

「入ってくれ。俺の他の仲間が待っている」

ガンツから入り、残りのメンバーも続々と入ってゆき、レイとシャルロットも最後に入り、扉を閉める。

「おまけが多々ついてきたが、援軍が来たぞ。このメンバーで明日、あすヴィットーリオを訊ねるからな」

「おお！帰ってきたか！……なんや、えらく多いなあ。こんな多くて、纏まるん？全員合わせたら、15人……『渡り人』も合わせれば16人もいるで？」

レイたちが入ると、一番にシエラが迎えた。

やはり、彼女はおしゃべりな性質タチのようだ。

「まあ、大丈夫だろう。ほとんど喋らない空気のヤツが出てくるだけだ。……とりあえず、自己紹介から始めよう」

「いや、空気のヤツできたらアカンのと違う???!」

「気にするな。……さあ、自己紹介を始める。ギーシュ、モンモランシーの紹介は必要ないから、ガンツからいけ」

シエラのツツコミをもともせず、レイはガンツを促した。

「ういっす。俺あガンツだ！とりあえず、今回の作戦に必要な人材だったらしい。よろしく頼むぜ！」

「…セリーナと申します。以後、お見知りおきを」

やはり、ガンツは陽気に、セリーナはテファの時と、ほぼ変わらない自己紹介だった。

そして、最後にエリシアが口を開く。

「ええっと、私はエリシアと言いますう！『レイ様 ファンクラブ』の会員番号一番です!!」

結局、『レイ様』という様付けを直すつもりはないらしい。
レイはエリシアの自己紹介にこめかみを押さえている。
そんな中、声をあげる者一人。

「いやいや、『レイ様』って（笑）全く似合わんよ？ぷぷつ」

先ほどから、シエラばかり発言して、『投げ所』に残ったメンバーが空気がする。

「レイは崇拜されるべきであって……ちょっと黙ろうな？アンタがこの会話に入ると、カオスになるから！」……むう〜」

シャルロットはシエラのツッコミに、不満そうに唇を少し尖らせ、拗ねる。

そんな可愛い行動に、恋人であるレイにはかなりドキリとくるモノがあるらしく……。

「……………シャルロット」

「？……なに？」

「やはり、お前は可愛い」

「?!/!/!/!/!……ど、どうしたの？いきなり/!/!/!/!/」

今度は顔を真っ赤に上気させ、上目遣いでレイを見つめるシャルロット。

「もうカオスやああ！！最初に『レイ様』で笑ったウチがこのカオスの原因の一つとしても、いき過ぎやろおお！！これ、ウチが悪かったんか?!ウチが悪いわけじゃないよね?!違っつて言っ
ええー!!!」

……そして、このカオスに嘆くシエラ（笑）
うん、このツツコミがカオスの象徴みたいなもんですねえ。

「もうシエラく、しっかりしてよねえ」

「そうだぞ！ツツコミがしっかりしないと話の収集がつかなくなるぞ？」

フェリスとサイトも、このグダグダな空気に乗っかり、完全なるカオスと化した。

「あの、ルイズさん、キュルケさん。……この状況、大丈夫なんでしょうか？」

……心配になったのか、唯一の？常識人であるテファがルイズとキュルケに問いかけたが……。

「ん？大丈夫でしょ。ほっとけば勝手にシリアスモードに突入してるわ」

「それより、この紅茶おいしいわよお？……『渡り人』さん！おかわり、くださらない？」

だいぶ呑気に、二人でのんびりしていた……。

「おかわりですね？いいでしょう。今お持ち致します……」

すう……といきなり姿を現し、ルイズとキュルケの紅茶を注ぎ足す『渡り人』。

くつろぎ過ぎではないだろうか？

……今この場には、完全に二人の世界に旅立ったレイとシャルロット、それを呆れたような生暖かい目で見えるギーシュ、モンモランシィ、ガンツ、セリーナ、エリシアの五人、そんな状況にしてしまったことを嘆くシエラ、それをからかうフェリスとサイト、そしてくつろぎまくるルイズとキュルケに、相変わらずよく分からない『渡り人』……………。

カオス過ぎるこの状況に、テファはレイについてきたことを少くしだけ後悔するのだった。

……………カオス過ぎるが、翌日にはロマリア教皇であるヴィットーリオを訪ねるのだ。

大丈夫だろうか？

少し心配になってくる（いや、余裕があって逆にいいのか？）ような日だったとき。

傭兵団・漆黒の風（後書き）

な〜んか全く話が進まないうえに、ストックだけはガンガン削られてるんですよ…。

現在、八話先を制作中なのですが、実力テストが始業式の日からあるので、全く完成の兆しが見えません（汗）

最近、バイトも始めようと思いはじめてますし…。

とにかく、時間が全くとっていいほどないっす……。

投稿のスピード、緩めちゃダメですかね…？

ご意見、待ってます。

それと最近、この小説のタイトルを変えたくなってきました。なんか良いタイトル、ないですかね？

これについても、ご意見を待っています。

それでは、また次回っ（^^）ノシ

『よって、お前を排除する』（前書き）

ええ、マジでストックが消えかけてます。

書く時間ありません…。

そのうえ、かなりのスランプに陥ってます……。

というわけで、大変申し訳ないんですが、更新速度を緩めるか、一段落ついたら一旦休載させていただくことにしました……（汗）

こんな稚拙な小説でも楽しみにしてくださいだった皆様、本当に申し訳ありません。

『よって、お前を排除する』

昨日はかなり力オスな一同であったが、今朝はかなり決意を秘めた真剣な様子で『投げ所』を発とうとしていた。

「……今日、俺たちはブリミル教にケンカを売りに行く。覚悟のないヤツは申し出る。そして即、帰れ」

レイは、目の前にずらっと並んだ皆を見渡し、そう告げた。だが、申し出る者はゼロ。皆、完全に心を決めたようだ。

「そうか。ならば、俺から言うことは一つだけだ」

俺たちは必ず勝利する！俺についてきてくれ！！

そう言って、レイは右手を上げる。

一同は、同じように右手を上げ、応える。

「おおおーッ！！！！！！」×14

ノリノリで率先して手を上げるのは、サイトを筆頭に、シエラ、ギルシュやキュルケ、ガンツ、エリシアなどだ。

ルイズ、テファ、モンモランシー、ユリアナ、アスラナ、フェリスたちも、右手を上げて応えた。

普段は大人しいシャルロットまで、頬を真っ赤に染めて、精一杯に手を上げていた。

……だが一番驚くべきなのは、やはりセリーナだろう。

どこまでも機械的な彼女であったはずだが、この時ばかりは控えめに手を上げ、恥ずかしそうにしていたりする。そんな仕草は年相応

の少女のそれで、もともと整った容姿を持つおかげで、そういう筋の人からすればかなりのレアショットだったと言えよう。

そんな一同を満足そうに見渡し、見送りの『渡り人』の方を向く。

「では、また会おう『渡り人』」

「ええ、機会がありましたら、是非…ふふふ」

やはり妖しげな雰囲気が漂う『渡り人』だが、誰も気にしない。

「ああ。機会があったらな。…では、乗り込むぞ」

そうレイが告げた瞬間に、『渡り人』の視界からレイたちの姿はかき消えた。

「……………あなたの物語は、これからどう進むのでしょうかねえ…。非常に興味深い…ふふっ」

そう呟き、『渡り人』の姿は視認できなくなり、『拠り所』も通りから姿を消した…。

レイたちが転移でやってきたのは、ヴィットーリオがいるという建物の前。

当然、認識障害の魔法がかかっており、誰にも気付かれることはない。

門を護る衛兵の間を平然と通りすぎ、一同はヴィットーリオのいる

部屋を目指す。

……と、言っても、『虚無』属性の魔力の波長は特殊であり、その波長をレイが辿っているので、道を間違えることはない。誰に見つかることもなく、あっという間にヴィットーリアがいる部屋の前まで辿りついてしまった。

「やっぱあつけないよなあ。レイがいれば、ホントになんでも出来るんじゃないか？」

「まあ、それはあまり否定できへんな。……というか、こんな力を持つとるのがレイでよかつたわ」

「そうですわね。レイさんでなければ、力に溺れてやりたい放題でしょうから」

普通の声量で話しているが、レイの魔法は音声も遮るので、無問題だ。

「レイなら、そんなことは絶対にならないから、大丈夫」

「そうね、タバサ。……あなたの王子様は、あなたしか眼中にないようだし、ね」

こんな時に、今さらキュルケがニヤリと笑い、カオスへと導こうとするが、ここでレイは制止をかける。

「当たり前だ。俺はシャルロットの恋人だからな。……それより、入るぞ」

「そうだねえ〜。さっさと入って、さっさと終わらせましょ〜」

フェリスはどこか間の抜けた声だったが、気にせずに扉を開け、一同は中に入る。

と、同時に、レイは認識阻害魔法を解除した。

「邪魔するぞ、覗き見教皇」

「?!……………とうとう来ましたか。『覗き見教皇』とは、また随分な言われようですね」

レイは入るなり話しかけ、ヴィットーリオも驚いてはいるものの、それなりに冷静に返した。

「事実だろうか？」

「まあそうですね。……………いつから気付いていたのですか？」

「俺が召喚されて、一週間経った頃から」

レイの言葉に目を見開き、ヴィットーリオは真剣に驚いた様子で、掠れたような声で問う。

「なっ?!……………一番最初に『遠視』した時じゃないですか……」

「だろいな。あそこまであからさまに覗き見してこれば、誰だって気付く」

「え、で、でも、ぼ、僕たちがいる時とかも『遠視』はしてたんでしょ?……………ま、全く、き、気付かなかったよ……?」

アスラナも驚いたように訊いた。

「はい。視ていましたよ。あなた方が魔族であることも、もちろん知っています」

当然のように、教皇も答えた。

だが、上位魔族であるユリアナにとっても、それは驚くべきことだったらしく……………。

「……わたくしも気付かなかったのですが……」

……気付くことすら出来なかったらしい。『虚無』もなかなか侮れない。

そんな状況を見て、レイは訂正を入れる。

「……訂正しよう。確かに『遠視』に気付くことは困難だったよ
うだ」

「誰も気付かないことに簡単に気付いてしまうなんて、さすがはレイ様ですう！！」

エリシアが空気読めない発言をしたところで、ギーシュやモンモランシーは呆れたような視線を送る。さらには、エリシアにちよつとした脅威を感じ、ぎゅっ！とレイの手を握るシャルロット。

またまた、そんな状況を見て、さらに呆れるレイ。（だが、さりげなくシャルロットの手をしっかりと握り返しているのはご愛嬌だ）

「……とりあえず、静かにしてくれないか？俺たちはケンカを売りに……いや、交渉しに来たのを忘れるな」

「いや、アンタも、心の声出かけとるからね？！」

「わざとだ。気にするな」

「気にするわ！！」

もう、喋りたい放題だ。………敵地だと言うのに！

「あの、ルイズさん。この状況で大丈夫なんでしょうか？」

「ん？大丈夫でしょ。最終的には、なんか纏まってるはずよ」

やはりテファは心配なようで、そしてルイズはどこまでも楽観的だった。

「……………随分余裕なのですね。交渉に来たのでしょうか?」

さすがに、我慢ならなくなったのか、ヴィットーリオが先を促す。それを聞き、レイはやっと真剣に話を始める。

……………まあ今までも、敵がどんな行動をとっても対処できるように警戒はしていたのだが。

「そうだな。では、俺から一つ、お前に言いたいことがある。……………」

……………聖戦なんてバカな真似は止せ。魔族の脅威は分かつているだろう?」

「ええ。分かっていますよ。しかし、聖地の奪還は私たちの悲願なのでね。そう簡単には譲れません」

意外と頑固なようだ。

「魔族の脅威を分からせるために、『遠視』の妨害をせずにしたというのに……………。言うことを聞く気がないならば、こちらも脅しにかからなければならぬ」

「ほう。脅しとは、一体なんですか?」

教皇は、興味深そうに眉を顰めながら問うた。

「平民も、かなりの戦力を有していることを教えてやるつもりだな。……………ガンツ、セリーナ。前へ出る」

「うっす!」

「了解しました」

平民でありながらも魔法戦士であり、『傭兵団・漆黒の風』に所属している二人が、すっ…と一同の前に出た。

「それと、ジュリオ・チェザーレ。お前も近くで見ておいた方がいいじゃないか？」

「やはり、僕のことにも気付くんだね。……隠れて様子見なんて、する必要はなかったかな？」

レイの言葉に応え、奥から金髪オッドアイの少年が出てきた。

「ああ、バレバレだ。……それにあともう一人も……いや、ここ
で言うのはやめておこうか」

レイは微妙なところで話を止め、話を元に戻す。

「さて、脅しについてだ。……この世界では、平民は魔法使えない。それは分かっているな？」

「ええ、一般常識です」

「だが、魔力がないわけではない……という事実は知っているか？」

レイの言葉に、教皇とジュリオは驚き、目を見開いた。

「……どうということだい？……まさか、その魔力なしの平民二人
が、魔法を使えると？」

ジュリオはすでにディテクトマジックでガンツとセリーナを視てい
たらしく、平民であることを言い当てていた。

「平民でも魔法は使える。……この世界のディテクトマジックでは
魔力の質の違いによって、平民の魔力を検出することは出来ない。
だが、魔力がないというわけでは、決してないんだ。この俺が、そ
の代表であると言えるかもしれない。……だが今回は……」

レイはここで話を切り、ガンツとセリーナの方に目配せをする。そして二人はその意図を察し、頷いた後にルーンの詠唱を始めた。

「『《謡え！そして重なれ！我らが魔力よ、大いなる意志のもとに破壊の旋律を紡ぎ、害なす者全てに肅清の詩を！》』」

二人で一つの呪文を唱え、綺麗にシンクロさせたルーンがこの場に鳴り響いた。

……そして、その技名が告げられる。

「『《殺人歌の二重奏《キル・ヴォイス》セッション》』」

瞬間、詠唱者の二人を中心に、死のメロディが紡がれ始めた。それは、切なく、悲しい……だが、優しく甘い『死』への誘いの詩だった……。

ヴィットーリオとジュリオの額には大粒の汗が浮かび、酷い動揺を示していた。

当然、レイによる結界が張られているので、仲間たちには無害だ。

しばらくの間、二人は耐えていたのだが、とうとう顔が真っ青になっってしまった。

「……ストップだ。ガンツ、セリーナ。謡うのを止める」

プツン…と、『死』へと導く、甘い…熟れ過ぎた果実のような旋律が止んだ。

ヴィットーリオ、ジュリオの二人は途端に座り込み、荒い息で呆然

とする。

そんな二人に、レイは最大級の回復魔法をかけてやり、言葉をかける。

「これで分かっただろう？……この平民が魔法を使えないのは、単に魔法の形式が平民の魔力にあっていなかっただけ……波長の合う魔法ならば、ここまでの魔法を行使することが出来るんだ」

魔族だけじゃなく、平民も充分に脅威だろう？

ニヤリ…と不敵に笑い、レイは二人に問いかけた。

「聖戦を始めれば、魔族だけでなく、俺たちも敵に回ることになる。……いくら強力な助っ人がいるとはいえ、それは無謀ではないか？」

レイの上乗せされた問いかけに、ボケたような問いで返す者一人。

「は？強力な助っ人って？」

……サイトだ。

だが、そんな問いにはお構いなしに、ヴィットーリオとジュリオは慌てる。

「なぜ、彼のことを…？」

「知っているはずはないのに…」

そんな二人の声に、レイは、やれやれ…と首を振り、溜め息を一つ。

「言うておくが……その銀髪のお前、視えてるぞ？」

レイはある一点を指差し、早く出て来い、とでも言うような表情で言葉を発した。

すると、その一点の空間が激しく歪み……。

「……まさか、俺を視認できるとはな。気配を隠した俺に気付いた奴は、お前が初めてだ。喜べ……」

歪みが収まると、そこには銀髪蒼眼の端正な顔立ちの青年が無表情で立っていた。

上位魔族であるユリアナやアスラナですら気付かっただけで、非常に驚いた表情をしている。

「……言っておくが、気付いたのは『遠視』に気付いた時と同じ時……お前が最初にこの世界へ降り立ったであろう時からだ」

ここで、レイから衝撃的な一言。

そんな答えはさすがに予想していなかったらしく、わずかに眉を顰めて銀髪の青年は言葉を返す。

「……ほう、そこで気付く、か……。ロマリアとトリステインは、かなりの距離があるはずだが……。やはり、お前のような奴に興味は尽きない。……だが、たった今決定した。魔族の排除はもちろんだが……お前も人間にしては要らぬ力を持ちすぎた……」

よって、お前を排除する

この場を、耳が痛くなるような沈黙が支配した……。

『よって、お前を排除する』(後書き)

更新速度を緩める、もしくは一段落ついてからしばらく休載と、書きで記しましたが、どちらがマシでしょうか？

ちなみに、休載期間は一ヶ月ほどにする予定です。

ご意見、待ってます。

タイトルの方も、変えたいと思っているので、ご意見をよろしくお願います。

それでは、また次回にお会いしましょう(^^)ノシ

賽は、既に…。(前書き)

感想に書いてくださった意見や、現在の状況を考えて、一旦更新速度を緩め、それでも追いつきそうになれば、とりあえず一ヶ月の休載、という形を取ることにいたしました。

それに伴い、今日の更新を以って一日一投稿は終わりを告げます…。ストックの量や、リアルの忙しさ、スランプ具合を考えると、三日に一度の更新が妥当だと思いましたが、次の更新は火曜日ということになります。

その次は、金曜日ですね。

前回は記しましたが、こんな稚拙な小説をお読みになってくださる読者様方、本当に申し訳ございません。

賽は、既に…。

よって、お前を排除する

銀髪の青年は、どこまでも淡々と、自身の目的だけを告げた。いつの間にか、青年は武器を……漆黒の刀身を持つ、細身の刀をレイに向けていた。場を支配する沈黙に、重苦しい空気が流れる。そんな中、最初に口を開いたのは、意外にもサイトだった。

「ふざけんなよっ！！何が排除する、だ！！勝手に決めてんじゃねえ！！！」

「人間風情が……。この決定は絶対だ。……この世界に歪みをもたらす異分子に、神の裁きを下す……」

『アギト様の言う通りだよお』

「?!…誰やッ!??」

シエラは唐突に聞こえてきた声に驚き、警戒をあらわにした。

「……………インテリジェンスソード…いや、神剣か？」

レイは眉を顰め、黒き刀身を持つ刀を睨みつつ、そう呟いた。

その呟きに応えるのは、神剣にアギトと呼ばれた、銀髪の青年。

「ああ。……名を、永遠神剣・第四位 『月詠』。自我を持つ、神の剣だ……」

『そうだよ！アギト様の剣なの！……それでねえ、わたしたちの目的はそこにいる四人の魔族さんたちと、レイ君を……』

全ての世界から永遠に消し去ることだよっ

「……そういうことだ。大人しく死ね……。神の代行者として、お前たち歪みは排除しなければならぬのでな……」

「排除なんてさせない！それに、レイはあなたなんかには負けるわけがない！！」

ユリアナたち……大切な仲間を……レイ愛しい恋人を……全ての世界から消し去ると言われ、憤りを隠すことなく叫ぶシャルロット。

他のメンバーも同じ気持ちのようで、アギトと呼ばれた青年の方を睨む。

「……睨んでも無駄だ。神の意向は絶対だ。歪みを消し去ること……それが俺に与えられた役割であり、存在意義だ。……死んでもらうぞ、魔族ども……そして過度に強大なる力を持つ人間よ……」

アギトの総身からは、通常では有り得ない銀色の魔力が立ち昇り、こちらに途方もない威圧感を与えてくる。

……その姿はまさに、神の代行者としてふさわしい神々しさを持ちながらも、害なす者には一片の容赦もない死神でもあった。

そんなアギトの威圧感に震え、恐怖した皆が一様にレイや魔族たちに心配の眼差しを向ける。

「ねえレイ……あなた、大丈夫なの……？」

「……これ、レイさん……」

「う、ウチらも非常に危ないけど……レイ、アンタも大丈夫か？アンタを中心的に狙ってるみたいやで……？」

ルイズやテファ、シエラまでも心配の声をあげていた。

だが、その中でも揺るがない信頼を寄せる者がいる。

「レイは……どんなことがあっても負けない。私は、レイを信じてる」

幾分か冷静さを取り戻したシャルロットは、レイに全幅の信頼を寄せ、静かに呟いていた。

「これだよ……。レイ君の強さはたぶん……信頼の強さなんだ……」

その光景を見たジュリオは、思わずそう呟いていた。

「ジュリオ……これが以前言っていた、『背景にある絶対的な支え』……ですか？」

「ええ。支えは彼女だけではないのかもしれませんが、ね。……しかしこうなったら、たとえアギトさんが神の代行者でも、キツイ戦いを強いられるかもしれませんね……」

「……戯言はいい。俺は俺の仕事を遂行し、歪みを直すだけだ……。そのために存在を消し去る。この世界から身を引くという選択肢すら、残すつもりはないぞ……」

ジュリオとヴィットーリオの会話をバツサリ切り捨て、アギトは泰然とレイの方にもう一度『月詠』の長い刀身を向ける。

「……どのみち俺は、この世界から身を引くつもりはない。シャルロットがいるこの世界から、立ち去ることなど出来るものか。……お前には俺を“認めさせてやる”からな」

そう言って、レイは不敵に、ふてぶてしく、笑う。

それはいつもの余裕。いつもの冷静さ。いつものレイだった。

皆をどこまでも安心させる、全く動じないその態度。……皆の憂いは、全て納まった。

「ほう、力を持ってても所詮は人間のはずだが……余裕のようだな。……いいだろう。お前とは全力で戦ってやる。……他の世界へ跳ぶぞ」

「ああ。……だがその前に……教皇が用意した邪魔なヤツらをぶっ飛ばすヤツを決めておかなければな」

この言葉に驚く教皇とその使い魔を尻目に、レイは指示を飛ばす。外からは、たくさん人間がこちらに向かってくる気配が。

どうやら、教皇はおそらく来るであろう脅しに抵抗するために、たくさん手駒をこちらへ差し向けていたようだ。

「サイト、ルイズ、キュルケ、ギーシュ、モンモランシー、ガンツ、セリーナ、そしてユリアナとアスラナはここに残れ。そして、教皇の駒を適当にあしらっておけ。……これは、お前たちに経験を積ませるためだ。ユリアナ、アスラナは死人が出ないようにサポートだけをしてくれ。サボるなよ」

「サボりませんわ！わたくしたちに任せてください」

「し、しっかり、おお、脅しておくよお……」

アスラナの迫力のなさでは、いささか心配は残るものの、実力は確かだ。おそらくやってくれるだろう……と、レイは判断し、残りの指示を飛ばす。

「そして、残りのメンバーは、俺と共に跳ぶ。いいな？」

おそらく、テファやエリシアなどのほぼ非戦闘員を、衛兵から護る意味合いも込めているのだろう。

アギトの狙いはあくまでレイと魔族たち。この世界の人間に危害を
与えるつもりは毛頭ない。

よって、力のない者はレイと共に跳ぶ方が安全なのだ。

シエラやフェリスはその護衛であり、シャルロットはレイの心の支
えとして共に跳ぶ。(実際はレイが、どうせ何人かこちらについて
こさせるのであれば、一緒に来て欲しい……と思ったからだったり
する)

……そしてレイはもちろん、アギトを倒すのだ。

「……配役は決まったか？」

「ああ。行こうか。俺がいい場所を知っている」

そう言って、レイは『世界の扉』を開いた。

「お前が指定する場所で戦うのか……よかろう。お前を潰した後、
魔族共も消す。覚悟しておけ」

アギトはそう言い放った後に、『世界の扉』に飛び込んでいった。

「勝手にしろ。……俺は負けないがな」

そう言って、レイは率先して(シャルロットも伴って)アギトの後
を追う。

残されたメンバーも、テファやエリシアを筆頭に、続々と扉をくぐ
ってゆく。

最後にくぐったフェリスの姿も消えた…。

続々と他の世界へ消えてゆく皆を見終えると、この部屋に向かって
くる聖堂騎士隊の足音が聞こえてきた。

どうやら、ロマリアの誇る精鋭部隊は、すぐそこまで向かってきて

いたようだ。

「レイさんがいなくなった今がチャンスですからね。私の部隊で聖戦に反対する“異教徒”に裁きを与えましょう」

予想していた展開……アギトによって、素早くレイと魔族が殺され、人間だけが残るシナリオ……とはズレが生じたものの、一番の強敵であるレイがいなくなり、余裕を取り戻したヴィットーリオはそう言い放った。

「こいつら……俺たちが相手するんだよな？」

「ええ……でも、ユリアナたちもいるし、きつと大丈夫よ」

「大丈夫だっつもの！俺たちも一応、団長式の魔法はだいぶ使えるからな！」

「ガンツに同意します。私たちの実力、とくと見やがれ、です」

相変わらず、冷静なセリーナ。

最低限の護衛を任されたユリアナとアスラナも、余裕の表情だ。

刹那、世界が歪む……アスラナの魔法で、この部屋は途方もない広さを得たようだ。

「こ、この方が戦いやすいよね？……も、もちろん敵も戦いやすくなるけど……」

「しかし、負けそうになったら、手を貸しますわ。思う存分経験を積んでください」

アスラナは、この部屋の空間を捻じ曲げ、戦闘に適した世界に変えてしまった……ということらしい。

こうして舞台は整った。

戦いは、最強^{レイ}の人間VS神^{アキト}の代行者と、サイトたちとヴィットーリ
オたち+聖堂騎士隊の二つとなり、壮絶なものになるだろう。

賽は、既に投げられている…ッ!!!

賽は、既に…。(後書き)

ええ、更新速度については決定しましたが、タイトル……っ
てい
うか小説名の意見については、未だ募集中です。

柚雨が書く、このゼロ魔二次創作にあつたタイトルを思いついた方、
良ければ教えてください！

シ
それでは、また火曜日(1/11)にお会いしましょう(^^)ノ

認めさせるは存在価値（前書き）

す、すみませんでしたああ!!

予約投稿をするのを忘れておりました（汗）

次回からはこのようなことがないように気をつけます…。

本当にすみません。

認めさせるは存在価値

『世界の扉』をくぐったアギトやレイたちを待ち構えていたのは、以前『オンデイナーVSシエラ・フェリス』の試合を行った『コロッセオ』。

「……闘技大会でもするつもりだったのか……？」

少し遅れてこの世界に来たレイたちに、アギトが発した第一声はこれだった。

「……俺たちがやるのは、殺し合い……いや、神俺の代行者による、異分子の一方的な消去だ。……その会場に、こんな闘技場がふさわしいとでも……？」

『そうだよ！アギト様の言う通り！アギト様は、もっとすごい舞台を望んでるの！えっへん！』

永遠神剣・第四位『月詠』も、アギトに追従するが、レイは冷静に返す。

「舞台なんて、どこでも同じだ。俺たちの戦いに、場所なんて関係ない。周りに及ぼす危害を考えなければな。……そうだろう？アギト」

『あんな、さつきからナマイキ！アギト様に逆らっちゃダメなの！』

レイの問いには、アギトが答える前に『月詠』が答えた。

「あなたも、生意気。レイには、なにかの考えがあって、ここを選

んだはず」

『月詠』の言葉に対し、言葉を返すのはシャルロット。

……どうやら、『レイ至上主義』VS『アギト様至上主義』の口論に発展させるようだ。

『あんたもナマイキなの！どうせ消されるんだから、黙って見ててよおー！』

「レイは消されない。……ずっと、私と一緒にいる／＼／＼／」

『よくそんな恥ずかしいセリフはけるね?!逆に尊敬する!』

「それについては、ウチも同意や!」

いや、シエラ。ここは黙っておこう？

「でも、私としてはちょっと羨ましいですう!」

エリシアまでも、このカオスに参戦を始めてしまった。

なんか三つ巴ならぬ、四つ巴の言い争いになった様子を、フェリスはのほほんとして微笑みながら和み、テファはおろおろと心配そうに窺い、アギトは無関心にクールな表情を崩さずにいる。

………という心配そうにおろおろするテファはともかくとして、フェリスはなにをやっているのだろうか。

この男は、絶対にこの状況を楽しんでいるだろう。

そしてレイは、シャルロットの言葉によって、二人の世界へ飛び立つ準備を始めている………かと思いきや、今回はそこまでのカオスにはならないようだ。

「アギト」

レイは、周りの騒ぎなどは全く気にせず、神の代行者に漆黒の鋭い眼光を向けながら声をかけた。

「……………言いたいことは分かっているぞ。早く戦いたいのだろうか？ ふっ…力を持ちすぎれば、激しい戦いに刺激を求めるようになる。」

「……………やはり、お前は消去するべき危険な存在だな」

「いや、それが言いたいんじゃない。……………お前は…」

本当に俺を消し去ろうと思っているのか？

レイはアギトの言葉を否定し、そんなことを口にした。

「……………それは、どういうことだ？俺は神の命に従い、異分子を排除する。……………その点に関して、迷いなどない」

アギトの常にクールな表情が、若干崩れた。

それを確認したのが、レイはさらに言葉を重ねる。

「そう思うか？今のお前は、俺を排除することに疑問を抱いているのではないか？勝手な妄想までして俺を戦闘狂に仕立て上げなければ、排除する意味を見出せないでいるんじゃないか？」

「……………ほざけ。俺の目的は変わらない。……………いくら、お前の排除は俺の任意だとはいえ、危険異分子である魔族などどつるんでいるお前を、排除しない道理などあるはずなかるう？」

アギトは、そう言ってレイを蒼い瞳で射抜く。

その瞳には、ちらちらと金色の光……………神の光を覗かせていた。

「そうか。俺を排除したいなら、俺はその行動を否定しない。……………」

確かに、俺の力は人間に不相応だからな。……だが、俺は反抗するぞ……」

俺は死ねないから。……今度の“約束”は、絶対に破りたくないんだよ。

“約束”……それは、シャルロットとの約束。

リーネとの約束を守れなかったレイの償いであり、レイの望みであり、シャルロットの望みだ。

つまり『ずっと一緒にいること』。

それが幸せだから。

亡くなってしまったリーネの分まで、幸せを手に入れようと決めたから。

もし、その考えがおかしいのだとしても、これだけは譲れない。

だから……。

「俺は、ここに存在し続ける。お前に勝つ。そして認めさせよう。

俺の存在価値を」

レイは、いつも以上に真剣な表情で……それでいて、どこかアギトの反応を試すような、そんなおもしろがった様子で、言葉を紡いでいた。

いつの間にか四つ巴の言い争いは終わりを告げており、ギャラリーはレイとアギトの会話に聞き入っていた。

そして、レイの言葉が発せられて数秒が過ぎた頃、アギトがとうとう口を開く。

「……ふっ……いいだろう。お前の力、それがどのようなモノなのか……試させてもらっぞ」

「ああ。望むところだ。……だが、俺たち以外は観客席に座らせ、俺とお前の魔力を合わせて創る結界で護る。……それでいいな？」
「……消えゆく者に、せめてもの情けを与えてやる。条件は全てお前が決める」

アギトの答えに満足し、レイは自身を闘技場の真ん中へ、そしてシヤルロットとテファ、シエラやフェリス、そしてエリシアを観客席へと転移させた。

レイの行動を見て、アギトも彼の後を追って、闘技場の真ん中へ跳ぶ。

「では、結界を張るぞ」

「……ああ。ベースは俺が創ろう。お前はそれに後乗せを頼む。

……心配など無用だぞ？俺は、お前と魔族以外に危害を加える気はない」

「……お前がベースを創ることにに関して、異論はない。だが、シエラとフェリスは魔族だ。危害を加える気は、もちろんあるんだろう？」

レイの問いに、アギトは即答する。

「当たり前だ」

アギトの答えに、レイは若干顔を顰めるが、彼の言葉にはまだ続きがあるようだ。

「……だが先ほど、俺は戦いの条件を決める権利を、全てお前に託した。……よって、お前が魔族を護りたいと思う限り、危害を加えることはない。結界も、高度なもの……いや、最高のモノを施してやろう。……神の名に誓ってな」

「神の代行者として、その言葉に嘘はなさそうだな。……よし、さっさと結界を張れ」

アギトは、レイの命令口調に若干額に縦皺を作りつつ（『月詠』はレイに対して盛大な文句をかましながら）、無詠唱でありながらも、異質な銀色の魔力を以って、最上級を突破するほどの強度を誇る結界を張った。

レイはそれを確認しつつ、これまた通常とは異なる色を持つ蒼色の魔力によって、強力な結界の上にさらに強力な結界を上乗せ、改善した。

「……これで、存分に足掻けるか？」

「何を言っている？足掻くんじやない。新しい道を切り拓くんだよ」

そのように軽く言い合い、アギトは右手を前に突き出して、刀身から柄まで完全に真つ黒な刀……永遠神剣・第四位『月詠』を構え、レイは両手を左右に突き出して、魔剣・黒羽と白羽を呼び出した。

「「覚悟はいいか！！」」

奇しくも二人は同じ言葉を同時に吐き、常人にも魔族にも、上位魔族にだって識別が出来るのか危ういスピードと力強さを持って、激しく激突するのであった。

認めさせるは存在価値（後書き）

次回は金曜日です。

忘れないように、早めに予約投稿しておきますね。

『私たちが甘くみてもらっては困りますね』（前書き）

この小説のタイトルを変えました。

……と言っても、旧タイトルである“孤高の漆黒”を英訳しただけなんですけどねww

さて、あらすじを少し。

聖戦の勃発を防ごうと、ヴィットーリオに喧嘩（笑）を仕掛けに来たレイたち一行。

そこでレイたちは、神の代行者であり、半神半人のアギトと遭遇する。

彼の目的は、この世界の異分子であるレイや魔族たちを消去することだった。

当然それに抵抗したいのだが、ヴィットーリオも抜け目無く聖堂騎士隊を招集しており、戦いは二ヶ所で行われることとなった。

レイが率いるメンバーは、アギトと戦うために“コロッセオ”へ、そしてルイズやサイトの学院組＋は、その場に残って聖堂騎士隊と対峙することとなったのだった。

と、こんな感じで、あらすじを毎回入れる……かもしれない。

一応、三日空くと何やってたのかサツパリだ、ってなる可能性を考えて、このようなモノを作ってしまったw

え？ 長い？ 早く本文に進め？

あゝ、すいませんww

では、本文をどうぞ！

『私たちを甘くみてもらっては困りますね』

アスラナの魔力によって次元を歪め、通常ではありえないほどの広さ……東京ドームが二つは入るのではないか？…という程の広さを誇る部屋に、とうとう聖堂騎士隊が流れ込んできた。

窓からはたくさんの魔獣が壁をブチ破るかのような勢いで突っ込んできており、魔獣を操る神の笛・ヴィンダールヴであるジュリオの力は存分に発揮されるだろう。

さらには、敵には熟練者の『虚無』もいる。

………かなり激しい戦いを予想できた。

「これは……結構酷いね。僕、ここに来たことを若干後悔し始めているよ」

「何へたれたこと言ってるのよ、ギーシュ。私たちは、少しでも友達の間になりたいから、ここへ来たんでしょ？」

そう、ギーシュとモンモランシーは、ただの興味本位でロマリアまで赴いたわけではない。

友人であるルイズやサイト、キュルケ、シャルロットや、もちろんレイたちの、力になるうと、ここまでついてきたのだ。

「………ここで活躍しなきゃ、いつ活躍するんだ！って話だね。よし、君のことは絶対に護ってみせるよ、モンモランシー！」

「なっ！なに言ってるのよ！………う、嬉しいじゃない／＼／＼／」

「お前ら！こんなとこで何をしているのだ！教皇の前だぞ！！」

なんか良い雰囲気になっている時に限って、邪魔が入るモノである。少し甘い感じの二人の方に、聖堂騎士隊の布陣の一部を担っていた

敵兵が、単身で殴りこみに来た。………なんとというか、バカ（笑）？
モンモランシーは顔を赤くしながらも、突進してきた敵兵をグーで殴り飛ばした。

悲惨な音と共に、その敵兵はノックアウトする。…………なんと
うか、人間、やれば出来るモノである。

ギーシュなんかは完全に啞然とし、聖堂騎士隊にも少しの動揺が走るが………まあ、そこには触れない方向でいこう。

この場にいるレイ派の人物は、サイト、ルイズ、キュルケ、ガンツ、セリーナ、そして先ほどのギーシュ、モンモランシーと、監視役のユリアナとアスラナだ。

指揮をとるのは、サイトやギーシュ、ましてや魔族でもなく、平民であるガンツだ。

………まあ、モンモランシー辺りで、すでにちよつとした犠牲者（笑）が存在しているのだが、真の戦いはこれから始まるのだ。

「よし、とりあえずセリーナと俺は敵と交戦しながら、ルーンを唱える！その間、少しの隙が出来るだろうから、ギーシュとモンモランシーは俺たちの援護に回れ！そしてルイズは虚無魔法で、魔獣を攻撃してくれ！奴らのような敵には、強力な魔法を当てる必要がある！サイトはルイズを護りきれ！そしてキュルケは全体のサポート！皆に危険が迫ればそれを忠告し、あんたの得意とする火の魔法で悉く撃退してくれ！あんたは、冷静に物事を捉えることが出来るはずだ！」

ガンツが、かなりの気合を込めながらも敵には聞かれないような、絶妙な声量で指示を飛ばし終えたころには敵の動揺は完全に収まり、攻撃態勢に入っていた。

ちなみに、ガンツは貴族であるルイズたちを完全に呼び捨てだが、

レイによる意識改革のおかげで、気にも留めていない、とだけ補足しておこう。

「よし、そんなじゃ俺らも戦闘態勢に入るぞ！……散ッ！！！」

今度は大声で回りを鼓舞するような口ぶりで散開を促し、それぞれは綺麗に戦闘態勢に入った。

猛スピードでセリーナが走り出し、それをガンツが追う。

「ガンツ、あの魔法を推奨、です。ここでは、あの魔法が一番効果的だと、私は予測します」

冷静な上に機械的、さらには早口に告げられた言葉なのに、妙にその言葉は聞き取りやすかった。

死の旋律を奏でる、二人の連携魔法である『一殺人歌の二重奏』キル・ヴォイス「セッション」は、レイによる結界がなければ仲間にもダメージを与えてしまうような魔法だ。……つまり、今回はそれ以外の魔法を使う気らしい。

「あの魔法だな？おうよ！いくぜ！！！」

だが、ガンツには『あの魔法』というモノがどういう魔法なのか瞬時に理解できたらしく、完全に息の合ったコンビネーションでルーンが紡がれる。

「『奪え！そして重なれ！我らが魔力よ』」

詠唱の最中にも、二人は器用に剣による連携プレーで、聖堂騎士の攻撃を避け続け、なぜか危ないはずの敵の中心地を目指す。

後ろからはギーシュの土魔法とモンモランシーの水魔法が、彼らを援護し、目ばしい敵を撃退している。

「『』」 大いなる意志のもとに害なす者の声帯に干渉し

『』」

敵方も“賛美歌詠唱”と呼ばれる合同魔法を詠唱しているらしく、弱い攻撃しか届かないのだが、それでも敵の中心地は危険に溢れている。

ギーシュとモンモランシーの援護があるとはいえ、二人が危険な目に遭いかけることは多々あった。

だが、全体を見極めているキュルケは、そんな危険な攻撃をさせることは許さない。

絶妙なタイミングで炎の魔法が敵にブチ当たり、撃退している。

そんなキュルケの行動に感謝をするかのように、ガンツとセリーナのルーンはさらに大きな声で……それでいて、とても綺麗な旋律を伴って、紡がれ続ける。

「『』」 全ての音源を奪い取り、無に帰せ！ 『』」

完全なる敵の中心地。

そんなところで、彼らの魔法名は告げられる。

それも、敵兵たちが合同魔法を唱え終える前に、だ。

「『』」 サイレント・ディスプレイ
沈黙の絶望！！『』」

詠唱を終えた二人を中心に、白い半球型の魔力球が広がり、聖堂騎士隊の全てを包み込んだ。

それは、全て音声を遮断する、この世界のメイジに対しては必殺と

も言つべき魔法。

難点は消費魔力が多いこと、そしてこの魔法を唱えた自分たちも一時的に声を失うことだ。

……だが、ガンツとセリーナは元々平民の剣士であり、メイジ殺しでもあつた。

息もぴつたりで、アイコンタクトだけでも連携に支障など出ない。つまり敵兵にとっては、完全なる沈黙の絶望を味わうことに他ならない……ということなのだ。

一方、サイトたちも全力の戦いを見せている。

「ルイズ！詠唱はどうだ！？」

サイトは、敵方の幻獣の攻撃を、魔改造されているデルフで弾き、遠隔攻撃を連発しながらルイズの詠唱時間を稼いでいた。

「今終わったわ！！《エクスプロージョン！》」

さすがに、全力での《エクスプロージョン》を放つことは出来ないまでも、かなりの威力を持つ爆発が、敵方の魔獣たちを襲った。

「くっ……そこまでの力、結構反則じゃないか？僕の魔獣たちがほとんど全滅だよ？……まあ、まだたくさん呼んでるんだけどね」

ジュリオの言葉に、続々と進入してくる魔獣たち。

「反則はお前なんじゃねえのか？！……」『ショックウェーブ！』

デルフから、青い波状の衝撃が飛び出し、進入してきた魔獣たちを一気に吹き飛ばす。

「サイト、あなたの人外度もだいぶ上がってきたみたいよ？」

「レイに近づけたんなら、それでいい！……つか、虚無の時点でお前も充分人外じゃねえか？」

「うっさいわね！私は普通の人間よ！」

「君たち、案外余裕なんだね……」

ジュリオは、嘆息しながらもたくさんの魔獣をけしかけ、サイトたちの布陣を突破させようと奮闘している。

それでも、サイトたちは未だに余裕を持ちつつも油断はせず、しっかりと魔獣を打ち倒し続ける。

この現状を見れば、レイ派のメンバーはかなりの優位に立っていると、言っても過言ではないだろう。

……だが、お気づきだろうか？

この戦いの間、ガンツとセリーナは《サイレント・ディスペア》という、ある意味必殺技な魔法を行使しているし、ルイズとサイトはしっかりと虚無魔法・エクスプロージョンや、ガンダールヴとしての能力を遺憾なく発揮し、ヴィンダールヴであるジュリオのけしかける魔獣を完全に相手取ってはいる。

ギーシュやモンモランシーだって、ガンツとセリーナの援護を全うしているし、キュルケの仕事も、目立ちにくい面を補って余りあるほどの成果を見せている。

しかし、ヴィットーリオは？

彼もまた、強力な力を秘めた『虚無の担い手』だ。

こちらにも、監視役という名目で、ユリアナ・アスラナ姉弟という

切り札があるのだが、ヴィットーリオだってかなり優秀な虚無のメイジなのだ。

そんな彼が傍観者に徹し、全くの行動も取らない……ということがありえるだろうか？

……答えは、否である。

「皆さん、私たちを甘く見てもらっては困りますね」

確実にニヤリと、しかし穏やかに、微笑んでいそうな……そんな余裕を感じられる声音で、冷徹なる彼は、虚無魔法を発動するのだ……。

『私たちが甘くみてもらっては困りますね』(後書き)

次回は月曜日の投稿となります。

レイVSアギトが、本格的に始まる…ハズです(笑)

漆黒と白銀の化かし合い。(前書き)

くあらすじく

ブリミル教にケンカを売ったレイたちは、二手に分かれて戦闘を行うこととなった。

ヴィットーリオたちとの戦いは、教皇の動きがないまでも、サイトたちが優位に進められている。

その時、神の代行者アキトを伴ってコロッセオに来ていたレイたちは…。

漆黒と白銀の化かし合い。

漆黒の影と白銀の風は、大きな衝撃を伴って激突した。

……ように見えた。

激突は、全くの衝撃も音も伴わず、むしろ何も変わらない。

その代わり、レイとアギトは完全に違う場所で剣を交えていた。

アギトの刀がレイの腕を切断したかと思えば、レイの体は陽炎のように消え、いつの間にかアギトの背後をとって彼の首を刎ね飛ばす。だが、それすらも幻覚であり、アギトは変わらずに闘技場の真ん中に立ち尽くしていた。

それは、レイも同じ。漆黒も変わらず、そこに在った。

そして二人は、再び仮初めの激突を始めるのである。

その状況を観客席から見ていたシャルロット、テファ、シエラ、フエリス、エリシアは、戦闘の進行に全くついていけないでいた。

「……す、すごいです……」

テファが感嘆の声をもらしたかと思えば、今度はエリシアが興奮気味に話を引き継ぐ。

「ホントにすごいですう！戦ってるところは初めて見ましたけど、ホントにすごすぎですう……！」

「なに言つとんの？ヤツらの戦いは、まだまだ序の口やで？」

「そうだねえ〜。今はただの化かし合い。本当に凄いのは、全力で剣を交えた時からだねえ〜。……まあ、魔族である僕でも、その戦闘を目で追うことは出来ないんだろうけど、ね」

シエラとフェリスにとっては、幻術による化かし合いが続く今の戦闘は、序の口のようなだ。

それは、レイの全力の戦いは『レイVSルナルト』以外で見たことがないシャルロットにとっても同じなように。

「ここからが、本当の戦いになる。……それでもレイは、以前見た時よりも確実に強くなっているし、さらに余裕も見える。だから、レイは勝つ。……彼が勝つと言ったから、彼が負けることはない。私はそう信じてる」

「……そうですね。レイさんは、あなたとの約束は破らないでしょう。……レイさん、どうか無事にシャルロットさんのもとに帰ってきてくださいね……」

シャルロットの想いとテファの願いは、レイの耳に届くはずもないのだが、確かにレイの動きは格段に速くなった。

シャルロットが想い、テファが願った頃、レイとアギトの戦いは、未だに幻覚による化かし合いのようなモノとして続いていた。

陸の型・夢幻分身に実体を与えない劣化版の技を使い、何人にも分裂したように見えるレイに惑わされながらも、アギトの対応は完璧だ。

レイの攻撃は、苛烈さをどんどん増してゆく。それでも、アギトの対応に揺るぎはない。

……どうやら、なんらかの力を以って、レイの苛烈なまでの斬撃に対応しているようだ。

刀の名と同じ技。いや、能力と言ってもいいかもしれない。

『月詠』はマナの動きを読むことが出来る。それに特化していると言えるだろう。

アギトは神剣として意思を持つ『月詠』と思考を繋げることができ、そこから伝えられるマナの動きを全て把握する。

それによって、アギトは全ての攻撃を“予測”しているのだ。

……それは、あくまで“予測”。絶対のモノではない。

それでも、『月詠』という能力は、絶大なる力を発揮するのだ。

「……突き詰めて言うところの『先読み』か？」

レイは、そんなアギトの使っている能力に気付いたようで、攻撃の手を緩めることなく問いかけた。

「……ああ。しかし、お前たちの言う『先読み』より、精度は高いぞ。……まあ、これだけで戦ってもつまらんがな……」

そう。二人にとって、この『化かし合い』は単なる様子見であり、相手の実力を軽く測るためのモノである。

その点において、ただの『先読み』であるレイと、もう一段階上をゆく『月詠』を使用しているアギトでは、行動パターンの把握率が段違いである。

……もちろん、アギトの方が確実に行動パターンを読んでいるのだろう。

だが、それでもレイは泰然としていた。

「ふっ、もう俺の動きを把握出来たとでも思ったか？……だとして、大間違えだ。俺の動きは、こんなモノじゃないぞ？」

言葉をはき、目を閉じたレイがもう一度カツ！と目を開けた瞬間、彼の動きが変わる。

『かむいしんとつりゅう神威真刀流』二刀剣舞・八の型、狂刀乱舞。

全ての動きがその速さを増し、今までとはまるで違う動きのパターンに変わる。

正攻法に近く、的確に急所を狙ってくるような戦法であった今までと違い、今度は様々な部位を狙い、巧みなフェイントや蹴りを使った全身を活用するような、トリッキーでありながらも意味洗練された、鋭い攻撃を繰り出すようになったのだ。

「……………俺がお前の行動パターンを読んでいることに気付いていたのか……………」

「当たり前だ、神アギトの使い。……………お前の力は、そんなモノか？」

言葉の合間にも、レイの激しい斬撃は続く。

彼の『狂刀乱舞』による戦闘能力の向上率は、以前の比ではない。つまり、以前より格段にレベルアップしている斬撃が、アギトを襲っているのだ。

『違うの！アギト様は神の使いなんてチャチなもんじゃないもん！アギト様は、半分でも神の血が流れる“神の代行者”！！』
「武器が喋るな。それに、神の血が流れていようと関係ない。俺は神の代行者が相手であろうと、勝つだけだ」

『月詠』の否定をさらっと流し、レイは鋭い突きを放つ。

それをアギトは予測していたらしく、『月詠』を軽く合わせてレイの黒羽を流し、いなす。

だが、それで終わるレイではない。

彼の得物は二つ。白羽がまだ残っているのだ。

ブウウンツ！という鋭く空を裂く音と共に、白羽がアギトの武器を持っていない方の腕を切り裂く。

本来なら腕を切り裂く程の攻撃だが、アギトは身を反らすことでかろうじて避け、さらには反撃を繰り出し、レイのわき腹も浅く抉られる。

双方の怪我は浅いモノであるが、初めて二人の鮮血が宙を舞った。

「……………よもや俺に傷をつけるとはな。やはり、危険分子。……………」

さっさと決めよう」

「勝手にしな。俺はお前に合わせてやる」

「……………その余裕はどこからくるのだ？……………いや、答えなくていい。その余裕は、今から俺が砕く」

アギトはそう言ってレイに激しい攻撃を見舞い、闘技場の端まで吹っ飛ばした。

「《マナよ、オーラへと変われ。闇を切り裂く光となりて、彼の者に滅びを与えたまえ……………！！》

受身を取ってダメージはほぼゼロだったレイは、アギトの詠唱に気付いた。

そしてその攻撃内容には気付かないまでも、危険な攻撃魔法であることを察して、慌てたように壱の型・瞬迅を使って肉薄するのだが、アギトの詠唱はもうほとんど終わっている。

「《
夜天閃月……………！！》

永遠神剣・第四位『月詠』による唯一無二の絶対たる神剣攻撃魔法。

『月詠』が周囲のマナを取り込み、アギトが自身の銀色の魔力を合わせ、練りこむ。

それが、レイに向かって振り切られるのだ。

銀色の洪水が、奔流となってレイに爆進する。

「クツ…間に合わない……………だが、それがどうした！」

『神威真刀流』二刀剣舞・拾しゅうの型、次元断空斬。

次元の壁をも切り裂く必殺の斬撃が、唯一無二の絶対たる神剣攻撃魔法である『夜天閃月』にブチ当たる。

そして二つの閃光は、相殺されて完全に消え去った。

「……………そうか、その技があつたな。どうやら、お前には完全に本気を出す必要があるらしい……」

「だろうな。通常状態の俺と互角では、『神の代行者』失格だ」

「……………ふっ…言ってくれるな。いいだろう。お前も本気でこい」

二人は鋭い目つきで互いを睨み合い、そして叫ぶ。

「メモリーズ心の管理者よ

覚醒召喚！」

「異能、発動

『神の瞳』」

二つの激しい閃光が、闘技場の中心地に降り立った。

漆黒と白銀の化かし合い。(後書き)

今回は木曜日の投稿となります。

それでは、また次回(^^)ノシ

全ては幻想……だが、それこそが幻想。(前書き)

くあらすじく

レイとアギトの戦闘が、激しさを増した頃。
サイトたちVSヴィットーリオ……その戦闘は、幻想の裏切りによ
って覆されようとしていた。

それでは、本文をどうぞ！

全ては幻想……だが、それこそが幻想。

「皆さん、私たちを甘く見てもらっては困りますね」

ヴィットーリオの、この言葉。

それが聞こえたのは、全ての状況が完全に変わったあとだった。

今まで、ジュリオの操る幻獣と接戦を繰り広げていたルイズとサイトは拘束され、『サイレント・ディスプレイ』を展開していたガンツとセリーナは瀕死状態で倒れ臥していた。

当然、『サイレント・ディスプレイ』は術者の戦闘不能によって壊れ、聖堂騎士隊はもう魔法の詠唱を妨げられることもない。

「や、やばくないかい……？」

「やばいわね。本当に」

「……腹をくくりなさい」

こうなってしまうえば、もう残りのやギーシュやモンモランシー、キユルケには手の打ちようがなく、あっさり打ち倒されてしまった…。

「今まであなたが戦っていたのは、全て幻想ですよ？……『イリユージョン』という虚無魔法をご存知ですか？私は、このような戦いが起こることを予測していましたね？『イリユージョン』のルインだけ、あらかじめ唱えていたのですよ」

「つまり、君たちは戦いが始まった時から教皇様の手の上で踊らされてきたのさ！」

勝ち誇ったようなヴィットーリオとジュリオの声が部屋に響き渡った。

愕然。

それは、絶望だった。

勝ち目はない。そう言い渡されているようだったのだ。
その言葉は当然……。

教皇たちからこそ相応しいモノだった。

「残念でしたわね。わたくしたちの存在を、忘れてしまっているのではなくて？」

「ぼ、僕たちを、けけ、警戒しないなんて、お、愚かだよ…？」

途端に『イリユージョン』の魔法は解けた。

未だ続く『サイレント・デイスペアー』に、それを展開するガンツとセリーナ。

ジュリオの首に剣を添えているサイト。

魔法の使えない聖堂騎士隊を次々と戦闘不能に追い込むギーシュにモンモランシー、キュルケ。

ヴィットーリオには、ルイズの杖が向けられていた。

「な、なぜです…？『イリユージョン』を破るなんて…」

ヴィットーリオは額に汗を滲ませ、全く余裕の無くなった声で訊ねた。

「あなたがたの幻想魔法など、破ることは容易いのです。上位魔族をナメてもらっては困りますわ？」

「だ、だいたい、君の『イリユージョン』は、さ、さっき唱えたばかりのモノでしょ…？」

そう。ヴィットーリオの『イリユージョン』。彼の説明では、事前に仕組まれたモノであり、今までの戦いは全て幻覚だ……というモノだった。

しかし、実際は違う。

ガンツとセリーナが展開する魔法封じの『サイレント・デイスペアー』や、連携のとれた動きで魔法の使えない聖堂騎士を気絶に追い込むギーシュとモンモランシー、戦の全てを監視しつつも絶妙なフオローを入れるキュルケに、ヴィンダールヴのジュリオを完全に圧

倒するサイトとルイズ……………そんな圧倒的不利な状況で教皇である彼が思いついたのは、ハツタリだったのだ。

つまり、先ほどのレイ派の者たちが負けるヴィジョン……………『サイレント・ディスプレイ』が消失し、サイトとルイズが捕縛され、キュルケやギーシュ、モンモランシー、さらにはガンツやセリーナまでもが倒れ臥したあの状態。それこそが幻覚。それこそがマヤカシなのだ。

そのマヤカシを『イリユージョン』で作り出したのがヴィットーリオ。

そして……………。

「当然、先ほどのチャチな魔法を破ったのはわたくしたちですが、気付いた人物は違いますわよ？」

「ぼ、僕たちも気付いていたけどね」

二人の上位魔族の言葉に、一人の人物が名乗りをあげる。

「はい。おそらく、私ではないかと拝察、です」

どこかズレたような名乗りをあげたのはセリーナ。

彼女は、持ち前の完全なる冷静さを持つて『イリユージョン』を見破り、いち早くユリアナとアスラナに応援を求めた。……………念話によつて。

「上位魔族ならば、このくらいの魔法は簡単に破ると思いましたが。頼らせてもらった次第、です」

「仲間に助けを求められれば、助けないわけにはいかないでしょう？」

「だ、だから、僕たちは君の魔法を破った。そ、それだけ…だよ？」

やはり、上位魔族であるユリアナとアスラナをこの場に残すレイの判断は、正しかったようだ。

勝ち目はないと、ヴィットーリオとジュリオが完全に悟った頃、やつとのことでキュルケたちは聖堂騎士隊を全員気絶させることに成功した。

「ふう、やっと終わったわ。……でも、無抵抗な人たちに火の魔法を放ち続けるのは気が引けたわねえ」

一応、聖堂騎士隊との交戦を終えたキュルケは、疲れたように呟いた。

それを説得するように、ギーシュが声をかける。

「まあ、気絶させているだけだし、いいんじゃないかい？……このくらいのことをする覚悟は、ずっと前から決めているだろう？」

「まあねえ。一応、ブリミル教に喧嘩売ってるわけだし、ね」

「そうよ。抵抗はあったけど、友達に助けを求められたら、助けるしかないわ」

モンモランシーも肯定し、三人で笑い合う。

「なあ〜んか、さつきまで戦ってたとは思えねえほど和んでんなあ」「ガンツ、それ、親父くさい、です」

ちよつと哀愁を漂わせながら呟くガンツに、ぶつ切りで投げやりな言葉をかけるセリーナ。

「むっ?!俺あまだ22だぞ?!」

「?!?!……驚きました。私と4つしか変わらない……です」

「そんなに親父くさいか?!そんなに親父くさいか?!」

「二回も言わずとも、理解可能、です。というか、うるさい、です」「つーか、そんな取ってつけたように『です』とか付けなくていいから！もう、普通にタメで話せよ！四つしか違わねえんだからさあ！！」

「いえ、これは私のくせですので、治しようがない、です。……………」

それに、4つは大きい、です」

「お、大きくねえ！！18と22だろ？！大して変わんねえよ！！」

……………なんか、軽く言い合いが始まってしまった。

いや、喧嘩するほど仲が良いとかいう、アレか？

「手に負えせんわね。先ほどまで戦闘していたとは思えせんわ」「う、うん。でも、へ、平和で、い、いいんじゃない…?」

と、呆れ、嘆息しているユリアナとアスラナもいるが。

さらには……………。

「というか、さ……………俺たちはいつまでこうしてればいいわけ?」

「まず、私たちの扱い酷すぎよね?ずっと、剣か杖を向けてるだけよ?」

結構本気で嘆いている者もいたが。

「いやいや、もっとも嘆くべきは僕たちじゃ……………」

「……………同感ですね。肝が冷えますよ……………」

うん、本当に嘆くべきなのは、確かにヴィットーリオとジュリオなのかもしれない。

だって、ずっと剣か杖を首に添えられていたのだから(笑)

全ては幻想……だが、それこそが幻想。（後書き）

……あれ？ スマートに戦闘シーンを終えるはずだったのに、
何故かグダグダで出来の悪いギャグパートに仕上がったぞ？

……なんか、すいません（汗）

今回はちゃんと戦闘描写を書ける……ハズですので、よろしく願
いします。

それでは、また日曜日に（^^）ノシ

真白にして無音。(前書き)

おおぅ……………ストックが……………。

一応、ロマリア編の完結まではストックを溜め込みましたが、それも数話先……………。

数話なんて、すぐです。あっという間です。

つまり、執筆速度が更新速度についていけない……………！

……………です。以前にも記したとおり、ロマリア編が一段落すれば一ヶ月の休載というふざけた行動に出てしまいかもしれませんが、どうかご容赦ください。

それでは、本文をどうぞ。

真白にして無音。

闘技場の中心地に、二つの閃光は降り立った。

一つは、蒼き光芒をその身に纏い、影の翼を広げるレイの姿。

もう一つは、膨大な銀色の魔力を惜しげもなく身体中にめぐらせ、金色の輝きを瞳に宿したアギトの姿だ。

「ここからは全力でいこう。覚悟しろ、神の使い^{アギト}」

「……………粹がるな、人間。お前は死ぬ。『神の瞳』に、見透かせないモノなどありはしない」

まさに一触即発の空気。

さすがにこの場では空気を読んだのか、『月詠』も何も言葉を発しない。

そして一陣の風が吹きぬけ、全ての音が鳴り止んだ瞬間、二人の体はブレた。

レイは瞬迅の上位技、瞬迅・翼によって圧倒的なスピードを持ってアギトに突進する。

アギトはそれを完全に読んだかのように身体を左へ反らしつつ、横を通り抜けざまに剣を振り切るレイに『月詠』を振り下ろす。

ギーン！……………しかし、その剣はレイの黒羽によって逸らされ、しかもレイは有り得ない速さで白羽をアギトの心臓へと突き刺した。

「くっ……………ナメるな、人間！！お前の行動は、全て視えているぞ！！」

瞬間、アギトの身体に纏われた銀の魔力が一気に放出され、レイは大きく後方へ吹っ飛ばされた。

神の瞳……それは、瞬間での未来を垣間見ることさえ可能な目。全ての能力が跳ね上がる解放状態に持ち込む目。神剣である『月詠』の持つ《未来視・時詠》と合わせれば、敵の攻撃のほとんどを見通し、見透かすのだ。

レイが吹っ飛ばされ、激しい攻防は一時、止んだ。

ここまで、およそ一秒弱。まさに、瞬まばたきする合間の出来事だった。

吹っ飛んだレイの方向には、モクモクと砂煙が立ちこめ、その衝撃の強さが判る。

だが、異様なほどに多く立ちこめる砂煙……アギトは、このおかしさに気付いていた。

「……上、か」

そう言つてアギトは自身の銀色の魔力を集中させ、上空に最大出力の魔法をぶつ放す。

名をつけるべくもない、ただただ純粋な魔力を放つただけの一撃。それが、上から飛来する未知の魔法にぶち当たった。

上空から来た魔法は、レイからの魔法。

いつの間にか上空へ退避していた、無傷のレイが放つた魔法。無詠唱での……いや、無詠唱だからこそ放てる、最上級限界突破魔法。

名を、《リミット・ブレイク限界突破》。

それは、通常込められる魔力の限界を、『気』まで込めることによ

つて超える魔法。

詠唱によつてではなく、ただ純粹な想いを込めて創られた魔法。ルナルトとの戦闘で最終的に使つた全魔力を拳に集めた魔法………それには全く届かないまでも、通常の最上級といわれる魔法を遙かに超える威力を持つた魔法だった。

………だが、それでも二つの閃光は拮抗する。

蒼き奔流と、銀の奔流の拮抗………それ即ち、アギトの力はレイの全力に勝るとも劣らない力を有するということの意味する。激しく素早い戦闘は、見守っているシャルロットたちの目に触れることさえ許されず、ただ激しい閃光が目を焼くのだ。

「埒が明かないな……！神の使い、まだ俺と殺り合うのか？」

アギト

「………俺の目的を忘れたとでも言うのか？大人しく消されている」

繰り返される激しい激突と、交わされる神速の黒刀と白黒二刀。

一瞬の間に行われる、数十にも及ぶ斬り結び。

その斬り結びによつて生まれた、闘技場を紅く彩る二人の鮮血。ただ純粹に激しく、ただ純粹に完成され、ただ純粹にぶつかり合うような騙し合い。

バラバラなようでも纏まっており、おかしいようで正しい。

うるさいほどに衝突音がするかと思えば、感覚が麻痺したかのよう
に全ての音が閉ざされる。

………そんな矛盾の海。

それはおそらく、魔法によつて形成される矛盾。

矛盾が支配する戦闘は、やはりどのような言葉でも言い表せないまでも、凄まじく激しいことには変わりなかった。

「………ぐっ………確かに、このままでは決着がつきそうもないな」

「はあ……はあ……そうだろう？次で決めて、神アキトの使い！」
「……………いいだろう。望むところだ」

そう言い合い、二人は立ち止まって詠唱を始めた。

『次で決める』……………即ち、本気の一発をぶつけ合うということ。
通常の戦闘ではありえない『立ち止まる』という愚行。

それがなんの躊躇いもなく出来るのは、既に二人が互いを認め合っている証拠なのか、それとも…。

二人の詠唱はタイミングよく終わり、同時に全てを解放する。

『神威真刀流』二刀剣舞・拾しゅうの型改変、次元断空斬・真

《……………彼の者に滅びの絶望を
夜天閃月やてんせんげつ・絶ぜつ…！

！

次元を切り裂くというより、破壊するといった方がいいような、強力な魔力を宿した双剣。

銀として収束し、高密度の魔力となった、至高にして絢爛な銀の煌きを纏う黒刀。

どちらも、自身の魔力と共に、周囲のmanaを吸収させている。

そのmanaが、今までにない強大な攻撃を実現させているというわけだ。

しかし、この行為によって周囲のmanaは枯渇し、大きな傷を負えば回復にかなりの時間を要することになるだろう。

そしてその二つの最強の攻撃が、二者の激突と同時にぶち当たった。

視界は光の白で埋め尽くされ、全ての音はかき消える。

白かと思えば黒なのか？耳をつんざくような、この音はなんだ？

真白ましろにして無音。しかし、それは漆黒にして騒音でもある…。

やはり、強大な魔力同士のぶつかりで生じるのは、大きな矛盾心に描かれた？想い？によって構成され、実現される魔法。

その二つの大きな？想い？が激突することで、その矛盾は生じざるを得ないのだ。

やがて、その矛盾は終わりを告げる。

全ての白が視界から消え、全ての黒も視界から消える。

“完全”なる無音と、“完全”なる騒音が、“完全”に止む。

……………そして、秩序は戻ってきた。

消えていた白が視界に戻り、消えていた黒も視界に戻る。

乱れた音の秩序が、“完全”に整い、心地よい静けさが戻ってきた。

闘技場の中心地。そこに立つ影は二つ。

これほどのことをしても、まだ決着がつかないのか…。

そう思えるほどに時間が経った頃、“一つの影”が倒れ臥す。

“未だ立つ影”より幾分か小さい“その影”は、誰が見ても端整と言えるであろう顔立ち、そして……………銀に煌く髪と、蒼い瞳を持っていた。

「……………認める…気に…なった…か…？」

“倒れた臥した影”は、返事をしない。

「……………俺は…この…力を…仲間を……………恋人を……………護る……………ぐつ

シャルロット

…ため…だけに…使う…と…誓おう…。 …俺を…消す…のは
…いい加減…諦め…る…」

続けられた言葉に、返される言葉はない。
だが……。

“倒れ臥した影”は、確かに右手を挙げ、口を動かしていた。
その口の動きを読み取れる者がいれば、こう訳していたに違いない
…。

認めよう。神の瞳で視て、剣を合わせることで判った。
お前の心は、どこまでも純粹に大切な者を想っているということが、
な。だから認める。お前の本質は、清濁併せ呑む“独自の正義”で
あることを

………レイが、神の代行者に完全勝利した瞬間だった。

真白にして無音。(後書き)

次回の投稿は、水曜日です。

それではっ (^ ^) ノシ

決着、傷を癒しましょう。(前書き)

なんか、シリアスに終わらなかった…。

サブタイも微妙……。

ま、まあとにかく！ 本文をどうぞ！！

決着、傷を癒しましょう。

闘技場の中心地。そこに立つ一つの“漆黒の影”。

“倒れ臥す者”を見下ろし、満足そうに微笑む。

激闘の末に勝ちを？ぎ取り、認められたことに対する純粋な喜びからの笑みだ。

……………そして、その漆黒は膝をついた。

無理もない。“倒れ臥す白銀”もさることながら、“漆黒”の傷も深いことから。

既に気絶している“白銀”と違い、意識がある“漆黒”は、珍しく余裕の全くない表情で膝をつき、肩を大きく上下させている。

そして、とうとう意識は保ちながらも地に倒れ臥した。

「レイっ……………！！！」

“漆黒の少年”に駆け寄るのは、彼の愛しき“蒼の少女”。

シャルロットは、すぐ近くにいるシエラに頼み、転移で観客席からレイが臥す場所に運んでもらい、一番にかけつけたのだ。

他のメンバーもシエラの転移によって近くまで来ており、テファやエリシア、シエラやフェリスも心配そうにレイを見ている。

周辺にマナはほぼなく、レイ自身も魔力をほとんど使い果たしている。

つまり、少しでも重い傷は、それだけで致命傷となりうるのだ。

それを察したシャルロットは、それが微力すぎるとは思いながらも、自身の魔力を使ってレイの回復に臨む。

「癒せ、癒せ！我が魔力よ、大いなる意思のもとに慈愛を発揮し、傷を癒せ！ ヒール！」

癒しの魔法の中では初級であり、もつとも簡単な魔法。それでも、かなりの癒しを与える魔法であるのだ。

……しかし、レイの傷はほとんど癒えない。

傷が大きすぎるのだ。マナに頼って自己治癒能力を上げることすら出来ないのだ。

いくら強いとはいえ、人間の身でその傷はかなりの痛手だ。

「どきい！そのままじゃ危ない！ウチと兄貴が治したるからアంతは退いてや！」

「いやああ！レイが！！レイが死んじゃう！！！」

「……聞き分けないこと言っちゃダメだよ。ここは、僕たちに任せて」

フェリスは、取り乱したシャルロットに、いつに無く真剣に語りかけた。

やつのことで少しの冷静さを取り戻し、シャルロットは少しその場所から退き、シエラとフェリスが回復魔法を行使する場所をつくる。

それでも、シャルロットの不安は抜けない。

……それもそうだろう。彼女は、レイがここまで傷ついている様をここまでまざまざと見せ付けられたのは初めてなのだから。

だが、その不安を拭い去ってやるのも、もちろんレイなのだ。

必死に意識を繋ぎとめ、気だるげながらも左手を上げてシャルロットの頬を撫でる。

「……俺は、大丈夫、だ。心配、など、する必要は、ない、ぞ？」
単語ごとにぶつ切りになっているような言葉だが、それなりに意志と力がこもった声。
そして、シャルロットへの想いが込められている声だった。

「だから、泣く、な。俺、は、いつだって、お前と一緒に、いて、やるから」

レイは言葉を続け、シャルロットの不安も随分薄れてきた。

「まだ意識は強いようやな。とりあえず安心や。……じゃあ、回復魔法いくで、兄貴？」

「うん、いいよ、始めよう」

「《癒せ、そして重なれ！我らが魔力よ、大いなる意志のもとに限りない慈愛を与え、生命を脅かす全てに対する癒しであれ！

オール・キュアライト！！ハーツ！！》」

二人で行われる二重詠唱。

彼らは魔族なので、ガンツとセリーナが行うモノよりも効果が高い魔法が生まれる。

当然、レイの傷は驚くべき早さで癒されていき、彼は安心して意識を失って、規則正しい寝息を立て始めた。

「ふう、成功や。……全く、無茶すぎやで、アンタは。これだけの人に心配されとんのが分かつたらんらしいな」

シエラはそう言って、シャルロットだけでなくテファやエリシアの方を見やった。

「だよねえ。レイ君って、意外と罪作りな人間だよね〜」
「えっ、あの、勝手に惚れて、勝手に憧れて、勝手にミス・タバサとの仲を応援しているだけで、レイ様は全く悪くないですよ!!!」
「私も……ちよつと嫉妬しちやいますけど、大丈夫です。レイさんは優しいですし、悪くなんかありませんよ」

フェリスの言葉に反論するのはエリシアとテファだ。

……シャルロットは、すでにレイの膝枕を開始しているため、言葉はない。

「う〜ん、やっぱりレイ君はかなり想われてるんだねえ。まあ、確かにカリスマ性は高いよね〜」

「兄貴！分析してないで神の使いも助けるで！レイは、こいつを殺す気いなんてなかったみたいやし」

『神の使いじゃなくて、神の代行者なの！間違えないで！それと、早く治してよね!!!』

「ん〜、ええとアンタは……『月詠』やったっけ？そんなんどっちでもええやろ？」

唐突に口を挟んできた『月詠』に、シエラは『ああ、そういう剣もあつたよな〜』という感じで問いかけた。

そして言葉の内容もさることながら、その言い方もお気に召さなかつたようである……。

『よくない！“神の代行者”と言えるほど、アギト様は神に近いお方なの!!!』って、それより早く治してよ!!!』

「分かつた分かつた。慌てんなや。認めたるし治したるから」

『言い方が適当!!!もつとちゃんと言いなさい!!!』

「治して欲しくないの〜？」

シエラと『月詠』は口論を始めてしまったが、フェリスの問いかけ……というか半脅しにより、『月詠』は大人しくなった。

「じゃ、兄貴。さつきと同じ魔法、魔力的にいけるか？」

「ん〜、大丈夫だよ〜。でも、帰りの転移はシエラお願いねえ」

「お安い御用や。いくで」

そして二人はもう一度詠唱を始めた。

その頃、眠るレイがいる方では…。

「あなたたちも、レイを心配していることに変わりはない。もっと近くに来ていい」

絶賛膝枕中のシャルロットが、エリシアとテファに声をかけていた。

「え…いいんですか？タバサさんはレイさんと二人つきりでいたいんじゃない？」

「そうですね…お二人の邪魔は出来ませんよ！」

「別に邪魔じゃない。レイは、私のことを裏切らないと信じているから。……心配しているのなら、近くに来て問題ない」

シャルロットはそう押し切り、二人を呼んだ。

結局は、二人もレイの近くへ寄った。

「やっぱり、レイはカッコいいと思うノノノ」

唐突に、シャルロットは呟いた。

おそらく、レイを好きになった者同士で、“レイ談義”で盛り上がりたかったのだろう。

「確かに、レイ様ってカッコいいと思いますう！」

「目鼻立ちもくつきりしてますし」

「だけど、一番魅力的なのは、“瞳”」

「ああ！分かりますう！！鋭いのに、とても惹かれるんですよ、レイ様の瞳って……！」

「あの真っ黒でキツイはずの瞳に、優しさが灯る瞬間はすごく……いいと思います／＼」

……… 本場に“レイ談義”で盛り上がってしまった。

そんな三人娘のことを、呆れた目で見やる者一人。

「……………それ、楽しくないやろ、絶対」

アギトの治療を終えたシエラだ。

いつにもまして的確なツッコミで、確かに……と言わざるを得ない言葉だが、全く以っておもしろい言葉ではない。

要するに……。

「シエラ、ツッコミ担当なんだから、もっとテンション上げてツッコミなよ。そうすれば、もう少しおもしろくなると思うよ」

ということらしい。(フェリス曰く……だが)

「ウチはツッコミ担当やない言うてるやろおお！それに、テンション上げればおもしろくなるゆっわけでもないしな？！ええか？ツッコミっちゅうのは………はっ、なんでウチがツッコミに関してこんなに熱く語っとんねん！！ウチはツッコミ役やないわ！！！」

「ん、今のは………ツッコミかボケ、どっちなわけ？」

「……………ノリツッコミの派生、天然にして的確。そして、結局

はツッコミを使用したポケにあたる」

いつの間にか、シャルロットまで口を出してきた。

「なんや、ウチはどこまでいってもツッコミやって言いたいんか？
！…つか、アンタはレイの話で勝手に盛り上がったたんちゃうんか
！！それに、アンタの言うてること、ちょっとズレとる！！……
だいたい、“ツッコミを使用したポケ”って一体なんや！！ツッコ
ミなんか、ポケなんか、はつきりせい！！！」

「……………訂正。やはり、あなたはツッコミ以外のなにものでもない
シャルロットがそう言えば、同調する者は必ずいる。」

「シエラさんは、天性のツッコミ役の称号を得た！ですう！！」
「本当に、天才的だと思います。……………私はいらないですけど」
「うん、確かにティファニアちゃんにはシエラと違って、ツッコミ
スキルなんてない方がいいよねえ。強いて言うなら、癒し系キャ
ラ？……………もちろん、シエラにはツッコミスキルは必須だよ？」

うん、全員が肯定した。

「イジメか？！イジメやる！？イジメ以外のなにものでもないやる
？？！ウチはツッコミ役って認めてない言ってるやるおおお！！
！！！」

シエラの惨めな叫びは、闘技場の上に広がる青空に、どこまでも虚
しく響き渡ったとか。

決着、傷を癒しましょう。(後書き)

はい、困った時の“シエラ落ち”です(笑)

次話からは、シエラがいつもとは違う形で活躍……するかもしれない
せんw

よろしくお願いします。

次回、土曜日です。

それではっ (^ ^) ノシ

とりあえず『投げ所』へ（前書き）

三時間強、投稿が遅れてしまいました（汗）
すみません。

さて、気を取り直して、本文をどうぞ！

とりあえず『拠り所』へ

果てしなくどうでもいい会話がコロッセオではなされていたのだが、そのカオスも漸くの収束を得た。

「さあ、帰るで。みんな、用意はええな？」

取るに足らない会話がやつとのもので終わり、ツッコミの仕事まで一段落したシエラが、皆の帰還を促した。

当面の目的は、ヴィットーリオたちを捕らえているであろうルイズたちとの合流だ。

シエラの言葉に応えるように、シャルロット、テファ、エリシア、フェリスがシエラの近くに行く。

…と、そんな行動の後、一つの変化が起きた。

「……ッ！」 「…グッ…！」

ガバツつと、ほぼ同時レイとアギトが目を覚ましたのだ。

「レイ！ よかった…！」

「シャルロット…。心配、かけたな」

今まで倒れていたのが嘘のように上体を起こし、駆け寄ってきたシャルロットを抱きしめるレイ。

その様子を、未だに先ほどの戦闘による疲労がとれていない様子のアギトが、気だるげに見て、呆れる。

「……完全に回復している、か……。やはり、俺の方がくらったダメージは大きかったらしいな……」

「いや、そこおお？！ 普通、あの二人のいちやつきっぷりに呆れるハズやるおお！！？」

『アギト様は人間があそこまでの力を完全に制御することに驚いてるの！……まあ、確かに呆れるところは、そこなのかもしれないけど、アギト様にはアギト様の考えがあるの！』

「アンタの言い分や、神アギトの使いの考えなんて知らんわ！ウチはただツツコんだだけや！！」

シエラの役目は、やはりツツコミ役でしかないようだ。

それを察し、フェリスやテファ、エリシアがシエラいじりを始める。

「やっとシエラは自分がツツコミ役って認めたんだねえ〜」

「ええ？！ まだ認めてなかったんですか？」

「どこからどう見てもツツコミ役ですう！！」

「ち、違いわ、ぼけえ！！ ただ、必要に迫られてツツコんだだけで……って、なんでウチがツツコまなあかねん！！ん？ これもツツコミに入る？！ もうどうしたらいいか分からん！！！！」

どうでもいいけど、早く移動していただきたいモノです……。そんな空気を読んでか、レイがすつと立ち上がる。

「何を騒いでるんだ？ さっさと帰るぞ。そしてアギト、お前とはいくつか交渉すべき点がある。後で少し時間をとってくれ」

「……魔族のことだろう？ 排除を辞めることは、あまり気乗りせんが……まあよい。……後日、交渉に応じよう」

「感謝する……と、一応言っておこう。今は、とりあえずサイトたちを回収しにいくべきだ。……いくぞ」

レイの言葉に反応し、皆が彼の周辺に集まる。……アギトも例外ではない。

「《ワールド・テレポート!》」

『世界の扉』以外の方法で、『世界渡り』をする。

この魔法は、見知った『気』のもとにしか跳ぶことは出来ないが、消費魔力は通常より少なくて済むモノだ。

今回は、サイトの『気』を辿って跳ぶようで、皆の影は一斉に消え去った。

ヴィットーリオに勝利したサイトたちは、とりあえず彼と使い魔をユリアナの魔法で拘束、さらには意識を混濁させ、『拠り所』まで転移していた。

サイトたちが『拠り所』に到着すると、それに示し合わせたように『渡り人』が、その存在を頭あたまにした。

「どうやら、成功したようですね。?…レイさんたちはまだですか。……ふむ、他の人物と交戦なさっているのですか?」

現れて早々、彼は皆に話しかけていた。
その問いに答えるのは、サイトだ。

「なんか、すげー強そうな銀髪のヤツと戦ってるよ。他のメンバーも何人があつちにいってる」

「ほう、異世界に跳んでいるわけですね? そろそろ帰ってくるのではありませんか?」

「ええ、そうね。レイなら、ほとんど無傷の状態で、そろそろ帰ってきてもおかしくないわ」

重ねられた『渡り人』の質問には、ルイズが答えた。

「団長さんは、どんな傷でも帰ってくるまでに治しちまうからなあ」

「あの人や魔族さんたちの魔力なら、瀕死の傷も治る、です。少しズルイほど、高性能、です」

「というか、人外と言っんじゃないかい？」

「言いすぎ……でもないわね」

上から、ガンツ、セリーナ、ギーシュ、モンモランシーの言葉だ。

やはり、レイの強さが人外認定であることは常識になっているらしい。

「レイにはタバサとの約束があるから、そう簡単には死ねないものねえ」

キュルケがそんなことを呟くと、『投げ所』の風景がいきなり歪み始めた。

どうやら、サイトの目の前の空間に歪みが生じているらしい。

「どうやら、レイさんたちが帰還するようですね。………それにしても『ワールド・レポート』とは、なかなか難易度の高い魔法を使いますね」

『渡り人』の呟きと共に歪みは収束し、七つの影が姿を現した。

戦闘を終え、『ワールド・レポート』を行使したレイと、シャルロットたちだ。

先ほどの『渡り人』の呟きも聞こえていたらしく、転移を果たした

レイが声をあげる。

「そこまで難しい魔法じゃないさ。『世界の扉』を開くより、消費魔力が少なく済むしな」

「それでも、難しいモノですよ。なにしろ、異世界にある『気』を辿らなければいけないのですから。相当見知った『気』でないと、感知することも出来ないのでは？」

どうやら『ワールド・テレポート』は、想像以上に難易度の高い魔法だったようだ。

「ああ。昔からの親友であるサイトと、シャルロットのもとへ行くぐらいしか出来ないだろうな」

大抵の魔法を使いこなすレイでも、二人の人間のもとへしか飛ぶことが出来ないらしい。

それだけで、難易度の高さが伺える。

「やはり、団長の使う魔法は奥が深い、です」

「そうだよなあ。俺らは、二重詠唱して、やっと上級の魔法が使える程度だし」

「つか、レイ！ 俺にも魔法教えるよ！！」

「お前の魔力量は少なすぎる。前に言っただろう？」

レイの言葉に、サイトはやっぱり落ち込む。

さらに…。

「もう、使えない使い魔ね。レイはタバサにメロメロだし、あんたは使えないし……やっぱりサモン・サーヴァント、失敗したかしら？」

冗談で、Sつ気の強い笑みをこぼしつつ放った一言だが、サイトにはかなり効いたようだ（笑）

「ががあん」

「そう落ち込むな、サイト。……また鍛えてやる」

ニヤリ……と、妖しい笑みをこぼし、レイはサイトの肩を叩く。まるで『次の特訓……覚悟しておけよ？ ふふふ……』と、脅すように。

……それが、トドメとなった（笑）

サイトは、恐怖（笑）のせいで、気絶したのだ。

「なんだ、使えないのね」

「レイに鍛えてもらえるのだから、喜ぶべき。サイトは全然わかってない」

ルイズの呟きが一つ、そしてシャルロットもサイトへの不満をもらした。

さらに、ユリアナもシャルロットに同意を示す。

「確かに、レイさんに鍛えてもらえば、かなりの成長を見込むことが出来ますものね」

「ゆ、ユリ姉、でも人間の身ではキツイんじゃない？」

「レイさんなら、その辺の調節はしっかりなさるハズですわ」

確かに、と皆が頷いていると、気絶しているサイトの口から苦しげな声。

「い……嫌だ……やめてくれえ……そんな攻撃……死いぬううう！！」

！」

もはや、寝言の域を超えている。

そんなサイトの状態に不満が多いようで、レイが呟きを一つこぼす。

「せっかくシャルロットとの時間を削ってまで鍛えてやろうと言うのに、薄情なヤツだ」

「なら、もう削らないで……………もっと一緒にいたい／＼／＼」

「ああ、いつもお前と一緒に……………」

もう、ボケすぎだ（笑）

ん？ そういえば、ツツコミがない？ それに、アギトも先ほどから無言を貫いて……………いや、既にこの場にはいない。

『投げ所』についた途端に、アギトは二階の部屋まで退避してしまつたらしい。

シエラは、それを追つたのだ。

アギトを追い、二階に来たシエラは、独りで呟きをもらしていた。

「ヤツが入ったんは……………ここやね。って、なんでウチは追いかけてんねやろう……。レイも気付いとったハズやし、それを放っておいたなら、ウチが来る必要はなかったのになあ」

それでも、シエラの中では一階に戻る、という選択肢は生まれなかった。

……………そして、何故か緊張する心を抑えながら、シエラは扉をノックするのだった。

とりあえず『拠り所』へ（後書き）

シエラのツツコミ以外の活躍しそうな予感w

お楽しみに！

それではっ (^ ^) ノシ

シエラとアギト（前書き）

一日遅れ……とは違うものの、随分、投稿時間が遅れてしまいましたね…。

すいません（汗）

それでは、本文をどうぞ。

シエラとアギト

扉をノックしたシエラの心臓は、いままでに感じたことが無いほどに跳ね上がり、返事が聞こえてくるまでの数瞬は、一時間にも二時間にも思えるほど長かった。

「……なんだ、魔族」

中からは、シエラのそんな緊張など全く気にもしていないような、そっけない言葉が聞こえてきた。

「え、いや……いきなりいなくなったもんやから、気になってなあ。

……あの、入っちゃダメか……？」

「……なぜだ？ 俺は魔族を殺そうとしている。ここに入れば、存在が消えるかも知れんぞ……？ そんな危険を冒す必要はないだろう……」

「いや、まあ、そうなんやけど……なんか、なあ。……それに、アンタが忠告するってことは、今はとりあえず殺すつもりはないんと違うか？」

自信はなさげだが、口調だけはしっかりとして、シエラは扉の向こうにいる彼に問いかけた。

しばらくの沈黙が場を支配し、やっとのことで声がかかる。

「……入れ」

それは肯定。

やはり緊張する心臓を抑えながら、シエラは扉を開いた。

「……………まあ、座れ」

その部屋は、特に普通の部屋とは変わらない調度品が並べられ、それでも落ち着いた雰囲気のある部屋だった。

いや、他の部屋と同じ物が、同じように並んでいるだけなのだが、……………それでも、他の部屋と何も変わらないその部屋の様子に、シエラはなぜか安心した。

シエラは、アギトに勧められるまま、一つのソファに腰掛けた。アギトはその向かい側にあるベッドに腰掛けていた。

「……………それで…なんの用だ？」

「用っていうか……………なあ。……………あつ、そういえば『月詠』はどうしたん？ この部屋にはないみたいやけど」

シエラは自分でも用がないのに来てしまったことを疑問に思いながら、逃げるようにふと気付いたことを訊ねた。

「……………亜空間にしまつてある。あいつも二つの刀を亜空間にしまつているだろう？」

“あいつ”とはやはりレイのことだろう。

「……………だが、なぜそんなことを訊く？……………もつと他に用がないなら、帰ってもらいたいのだが……………」

「そんなつれないこと、言わんでほしいわ……………。どうせ、レイを認めつつちゆうことは、仲間になんねやる？ ええやん、ちよつとばかしここにいても」

何故か、願いを込めたような瞳で、シエラはアギトを伏し目がちに

見つめた。

「……………なぜ俺を構うんだ。放っておけばいいだろう？……………それに認めたとはいえ、あいつと一緒に行動するとは限らんだろう。そして、認めたのはあいつだけ……………魔族は、未だに俺の任務の対象だぞ……………」

「……………まだ、ウチらを…殺すつもりなんか？　そもそも、本当に最初からウチらを殺そうとしてたんか？」

沈黙。

シエラの疑問は普通ではありえない。

実際に、殺そうとしていたから、レイはアギトと全力で戦ったのだから。

「……………愚問だな。俺は、神によって創られ、半分でも神の血が流れている『神の代行者』だ。……………そんな俺が、神の意向を無視するだけでも？」

「……………そもそも、“神”ってなんなんよ。神が望んだから、ウチは殺されなアカンの？……………だったら、ウチは神なんて大ッ嫌いや」

シエラの言葉に、アギトは目を細める。

だが、彼女はそんな彼の反応を気にも留めず、話を続ける。

「だってそうやる？　ウチらはなんも悪いことやつとらん。例えば兄貴。兄貴は、自分の身を護るために、武器を創ってきただけや。ユリアナやアスラだって、魔法師団長に着任して間もない。レイを襲ったのは、二人の初任務みたいなもんや。そんな二人が、いつ悪いことをする暇があった？　ウチだって、別に悪いことばっかしてきたわけじゃないしな。……………みんな、生きるのに必死やつたんよ」

シエラの言葉に、アギトは苦虫をかみ締めたような表情で、反論する。

「……………それでも、神は異分子を」「神」、「神」ってうっさいねん！」「…?!」

シエラはアギトの言葉を遮り、激情に身を任せて言葉を紡ぐ。

「アンタには自分の意思つてもんはないんか?! 神の意向やからつて、なんでアンタはなんの疑問も持たずに殺しにかかる?! もっと自分の考えを持ちい!!……………アンタの行動は、最初っからおかしかったんや。アンタは全然ウチらを殺したいなんて思ったらんように見えた。レイだつて、それに気付いとつたから“認めさせる”なんて生温くて、あまいこと言ったんやと思うよ? アンタの全力の攻撃は、全部“殺し”やなくて“屈服”させるためのもんやろ? だから、もう一度訊くで……」

アンタは、ホントにウチらを殺したいなんて思つとるん?

「……………確かに、俺は別にお前たちを殺したいわけじゃない。むしろ、生きて欲しいとも思う。神は間違っているのではないか、そう思ったこともないことはない。……………だが、神の言葉は俺にとつては絶対だ。逆らうつもりはないぞ……」
「だったら! なんでそんな悲しそうな顔すんねん!! やりたくないなら…間違つてると思うなら! それが神でも反抗しろや!!」

アギトは、何も答えられなかった。

そう、アギトも彼らを消すことには疑念をいだいていたのだ。

その証拠に、アギトの表情はとても辛そうで、本当にシエラたちを

殺したくはないと、そう思っているようだった。

だが、それでも『神の代行者』にとって真の“神”の意向は絶対。それを破ることは……。

「……出来ない。俺には、神に逆らうことなど……出来ない」

それは否定。

それがアギトの答えだった。

……たとえそれが選びたくない道だとしても、彼が選んだのは神への服従だったのだ。

「……見損なっただ。アンタはもっと芯の強いヤツやと思っと思ったけど……ウチの考え違いのようやな。表には出さんかったけど、ホントはアンタの戦つてるところ見て、ちょっと憧れを抱いてたんよ？ ……でも、もうええんや。何をするかはアンタの自由。ウチはそれにしっかり抵抗させてもらうだけやからな」

シエラは何故か悲しげに、しかし淡々と、言葉を紡いでいた。そして、ただ……とまた話を続ける。

「アンタのレイとは違う種類の強さには、憧れとつたんやけど………やっぱ、レイのが数段すごかったみたいや。悪いな、変に期待して。……ウチがバカやったよ」

そう言って、シエラは勢いよく扉を開け、この部屋から去って行ってしまった。

その眠まどろみに、一つの煙けむりを浮かばせて…。

シエラとアギト（後書き）

次回、金曜日に投稿します。

解決へ向けて。(前書き)

……また、定時から遅れてしまいましたね(汗)

しかも、出来に納得できない…。

まあ、それでもとりあえず本文をどうぞ！

解決へ向けて。

シエラとアギトの間で不和が起こった次の日。

レイとアギトの交渉の場が持たれた。

傍聴者は、シャルロット、テファ、そしてシエラの三人だ。

サイトやルイズ、キュルケなどは参加してもおかしくなさそうだが、久しぶりにギーシュやモンモランシーと騒ぎたいらしく、『投げ所』の一階、酒場部分にて宴会のようなモノを開いている。ガンツやセリーナ、エリシアもそれに参加しており、盛り上がるのだろう。

ちなみに、ユリアナとアスラナは一応護衛として宴会の席に身を置くつもりらしい。

そして、フェリスはなにやら妖しい武具の創製に力を入れている。

レイとアギトの交渉の場は、トリスタニアの方にある『投げ所』内部だ。

外見は工房のような場所だが、中は至って普通の部屋であり、真ん中には大きなテーブルと、まるで出席人数が最初から分かっていたかのように、人数分…つまり、五人分の椅子が並べられていた。

「さて、交渉とは言うが、ほぼこちらの条件は呑んでもらうぞ。…こちらとしても、仲間を失いたくない」

レイは全員が席についてたことを確認し、話し始めていた。

「……………俺は、神託を受けている。神の意思さえも覆すような説得案を出さない限り、お前の条件を呑むことは不可能だな…」

アギトの答え……………神の意思……………それを聞くだけで、シエラ表情は不機嫌なモノになる。

今度こそは神の意思に反抗し、自分の意思を貫いてくれるのではないか、そう思っただけで出席したシエラだったが、それは既に後悔に変わってしまったのだ。

「でも、シエラさんたち魔族は、皆さん優しいですよ？ ハーフエルフである私を全く差別しませんし、悪いことをするような人たちでもありません」

反論するのはテファ。

しかし、アギトは眉一つ動かさず、淡々と異を唱える。

「……そんなことは関係ない。異分子であることには変わらず、『魔』の血が流れることの否定にもならない。……よって、俺が意見を翻す可能性は無きに等しいだろう……」

「そんなこと言い始めたら、あなたはレイだって『異分子』だと言っていた。レイを認めることが出来たならば、シエラたちを認めてもいいはず」

シャルロットがアギトの唱えた異をさらに否定するが……。

「……ヤツに関してはもともと、その生死を決める最終決定権は俺にある。そこに神の意思などは関係ないために、俺は生かすことを選択したのだ。……別に間違ったことは言っていないだろう？」

一応の正論で、軽くないなされてしまった。

そして、シエラは未だに沈黙を貫いている。……先ほどから、続けるようにアギトをちらちらと見つめてはいるのだが。

と、ここでレイが唐突に、随分簡単なことだったな、と言わんばかりの表情で話します。

「どうやら、この件は、すぐにでも解決可能らしいな。誰の意見も
翻すことなく、全員が納得出来る結果を期待可能だ」

「…それは、どういうこと？」

可愛く小首を傾げ、シャルロットはレイに訊ねた。

レイは彼女の頭をなんとなく撫でてやりながら、その問いに答える。

「まあ、結局はアギト自身が望むことも、俺たちと同じ…というわけだな。……そうだろう、アギト？ お前は、俺の仲間になつて
いる魔族たちを殺したいとは、少しも思っていないハズだ。今まで
は疑念だったが、先ほどの口調から確信に変わった」

前日のシエラも、同じようなこと言っていた。……たとえ同じ言葉でも、やはりこの言葉は大きい。

なんせ、自分の意思は、彼やシエラの言う通りなのだから。

「……違う、と言えば嘘になる。だが、やはり俺に神の意思から
背くことは出来そうにないぞ。……申し訳ないが、魔族たちには消
えてもらつしかあるまい」

だが、それでもアギトの答えも変わることはなかったのだ。

……常とは違う、悲しげな表情を必死に隠して。

そして、沈黙を守り続けたシエラが、とうとう口を開いた。

「……またそれが…！ アンタはそれしか言えんの？！ ウチは
確かに死にたくないからこんなこと言ってるだけかもしれん、自分
勝手に生意気で理不尽な願いなのかもしれん！！……でも、ア
ンタは誰かを殺したくなんてないんやろ？ それなら、なんで自分

の意思に背く？ なんやよく分からんけど、アンタがそんな悲しうな力才すんの、嫌なんや……。アンタには、いつも堂々とクールにいて欲しいんよ。……………って、ウチ、何言ってんねやるうな……こんなこと言うつもりや無かったのに。レイ、ちよっと変わってくれ」

長すぎる言葉を、彼女らしく一気に言いきり、勝手に疲れ、そしてレイに説得を譲った。

……………シエラは、自分でも何が言いたいのか分からなくなってきていたのだ。

「いや、ここはお前が言いな。むしろ、お前が言うべきだ」

それでも、レイの言葉はこんなモノだった。

その言葉を聞き、アギトは訝しげな表情でレイに眼光を据える。

「……………先ほどの言葉で、俺の意見は翻らなかつた。これ以上、この魔族に交渉させるのには無理があるのではないか？」

「違う。ここは、レイの言う通り、シエラがそのまま説得を続けるべき」

「その方が、二人のためだと思います」

レイの思惑を理解した聡いシャルロットとテファも、シエラを促すような言葉でアギトの言葉に反論した。

「い、いや……なんでウチが……………」

いつものキレが全くない、覇気ゼロのシエラは、若干パニクリながら俯いてしまった。

アギトは口を開かない。

シエラの言葉を待つように。もっと、強く自分を止めてくれる時を、ひたすら待つかのように。

そしてシエラは意を決し、もう一度口を開く。

「……いや、開こうとした時、ちょうどアギトが話し始めた。

先ほどのまでの、全く話し始めようとしめない空気は、全て消え去っていた。

それは随分唐突で、不自然な切り替わり方だった。

「……殺しをしたくないわけではなく、お前たちを殺したくなくなっただけだ」

「え……？ それは、どういうことや……？」

あっけに取られたような表情で、シエラは聞き返した。

「……お前たちを見てみると、無害としか思えん。……挙動不審な弟と、それに付きっきりの姉、マイペースな武器職人。そして、お前のようなおせっかいなツッコミ。……こんなヤツらを、消そうなどと思えなくなっただけ。……いや、バカバカしくなってきた、という方が正確か」

アギトは、淡々と本心を語ってゆく。

彼はやはり、シエラたち魔族を殺したくないのだ。

さらに彼は、言いにくそうに話を続ける。

「……まあ、一番殺す気になれないのはお前だ。おせっかいで、ツッコミで、正直鬱陶しいが……何故か、邪険に扱うことが出来ない。いや、お前にならもっとおせっかいを焼いてもらっても構わないと思え始めてきた。……甘くなったものだな、俺も」

「……甘くなんてないで。アンタは、自分の正しいと思うことを貫いてるだけやろ？ ……そっちの方が、絶対カッコええよ」

最後の言葉は、ぼそっと、小さく吐息をつくような声で付け加えられた。

……だが、そこは半分でも神の血が流れているアギト……完全に聞き取っていた。

「……な、何を言っているんだ」

「ど、動揺するような新たな一面見せられても、全然キョンとなんてこおへんからな！ ほ、ホントや！！」

もし、シエラが第三者なら、確実に『お前はツンデレか！』というツッコミが入れるような言葉だった。

「シエラさん、壊れてますね……」

「これで、真つ当なツッコミ役がいなくなった」

「と、同時にシエラの需要もなくなったな」

「……ご愁傷様」

今回は外野になってしまった三人は、ちょっと良い雰囲気になった二人をからかうように、とりあえずシエラをからかった。

「なにが“ご愁傷様”やああ！！ うちの需要はツッコミだけやないで！！ 見てみい、この愛らしい顔！！ メンバー内のマスコミ的存在や！！」

「……驚いた。おせっかい焼きなお前は、ナルシストでもあったのだな」

「ちょ、ちょっとした冗談やないか（汗）……あの…嫌わんといて…？」

「…………別に、嫌うつもりなど毛頭ない。通常ならば、関わることすら願ひ下げなのだが…………何故か、お前なら許せる…………いや、そのまま……………と、本当に何を言ってるんだ、俺は。とうとう壊れたのか…？」

さらに良い雰囲気を作りかけたアギトは、本当にわけが分からない、とでも言いたげな表情で、自分の言ったことを思い返していた。

レイはそんな二人を見て、一人呟く。

…………… もちろん、アギトにすら聞き取ることの出来ないような、小さく、小さな、小さい声で。

「ここまでくれば、もう大丈夫だろうな。…………まさか、軽い恋愛感情がここまで役に立つとは思わなかったが、結果オーライというヤツか」

そう。名言はしていないが、アギトはもうこちらへ寝返ったようなモノだ。

魔族の消去などという彼の意思に反する行いをすることはないだろうし、シエラとの仲も、ゆっくり進展してゆく可能性は充分にある。とりあえず、仮に停戦協定が結ばれのと、ほぼ同義だということだ。

ロマリアでの長く壮絶な争いは、このようにして解決に向かってゆくのだった。

解決へ向けて。(後書き)

このままいくと、ロマリア編が終わったら長期の休載になる可能性が高くなってきました…。

どうか、ご了承を……………そしてお気に入りには消さないください。

さあ、トリステインに帰ろう。(前書き)

.....ロマリア編終了です。

そして、ストックが完全に切れ、話の先が全く思いつかなくなりま
した。

ここから先、一ヶ月……最悪、もっと長い休載に、もしくは不定期
更新で続けることになってしまいますが、ご了承ください。

さあ、トリステインに帰ろう。

交渉を終えた一同はその日、ロマリアの『抛り所』へ戻り、サイトたちが騒ぐ宴会に参加して盛り上がり、そして夜が明けた。

レイとアギトは宴会の後にも少し意見交換の場を設け、今後の方針は完全に決まっている。

レイは、最終確認でもするように、アギトに語りかける。

「だが、本当にいいのか？　ここに残らなくても」

「……ああ。ブリミル教の改革については、信頼できる者を残してゆく。悪くない結果を生み出せるだろう。その上、お前たちと行動した方が最大危険異分子である魔王を潰しやすいからな」

そう。レイはアギトとの交渉により、ブリミル教の改革を執り行うこととなり、その上アギトを仲間に取り入れることにも成功していたのだ。

ちなみに改革の内容は、貴族の特別視を少しずつ緩和、最終的にはなくしていくような、平等を目指すための改革だ。

「ええ、本当はうちのシエラと離れたくないだけでしょ？　素直じゃないなあ」

……と、フェリスは二人の微妙な関係を察知していたらしく、ニヤリと……しかしのんびりと笑い、からかうように問いかけた。

「ち、違っわ！　アギトがそんなこと思っついてついでくるわけないやろ！……まあ、もしそうなら嬉しいんやけど」

やはり、最後の一言はとても小さな声で。
そしてやはり、その声はアギトには聞こえていた。

「……む……俺は、お前と一緒にいれば若干の暇つぶしくらいには
なると思っていたぞ……」

「つまり、両想いってことですか?! おめでと〜ございますう!
!」

エリシアは、やはり空気を読めないらしい。
アギトも素直じゃないといつかなんとだろうか…。

「ち、違う言つとるやる! ……だいたい、アギトが迷惑って思う
ハズや」

「なら、彼が迷惑に思ってなければ、あなたは歓迎なのねえ?」

色恋と言えばキュルケ、である。

やはり、彼女もこの珍しい会話に参加を始めた。

そのうちにルイズやモンモランシー、ギーシュにサイトまでもが加
わって、かなり荒れてきた。

「どうしてこうなった…。さっさとトリステインに帰りたいんだが」

「レイ。もうここまできたら、私たちもくつろぎたい」

「そうだな。……よし、シャルロット。こっち来い」

シャルロットを呼び寄せ、そしてしっかりと抱きしめる。

「いや団長おお!! あんたまで荒れ始めたら、話が全く進まね
えよ!! 団長さんがメンバーを引っ張っていくリーダーだって自
覚してくれよおお!! ……!」

「さすがにここまで荒れ様は、看過できない、です。なんとかし

ていただきたい、です、団長」

ガンツは激しく、セリーナは超冷静に、ツツコミを入れる。

……だがやはり、ツツコミ役がシエラでないことに違和感を覚えるのは、作者だけなのだろうか？

いや、それはないだろう。もう一度、シエラがツツコミ役に戻ってくることを願うまでである。

「いや、絶対にやったらん！　ウチはもう、ツツコミから解放されたんやああ！！」

ツツコんでますけどね？　しかも地の文に（笑）

「いや、それがツツコミって言うんじゃねえか？」

「そうね、何に対してツツコんでるのは、未だに理解出来ないけど」

サイトとルイズからは、的確なご指摘をいただきました。というかシエラ。あなたは今、確実にイタイ人です（笑）

「ツツコませとんのはアンタやるおお！！！！」

「えっと、あの…ホントにシエラさん、大丈夫ですか…？」

テファには、本気で心配されてしまう辺り、やはり本当にかなりイタイ人物に成り下がってしまったようだ。

「……………やはり、こいつの言動は飽きない、な」

アギトさん、その眩きもどうかと思いますよ？

というか、ここには状況をカオスから救ってくれる人物はいないの

か？……とでも言いたくなるようなのが現状だ。

だが、どういうコトにも、不変なモノは存在しない。
今回のカオスにも、一つの変調を来たすモノが現れた。

「ハ口お　月詠だよん　実は擬人化、出来ちゃったりしてえ〜」

一同の目の前には、黒い髪に黒い瞳を持つ、ゴシック調のドレスを着た少女が。

彼女が言い張ることを信じるのなら、アギトの得物である『永遠神剣、第四位・月詠』らしい。

「……………やつと来たか、月詠。後のことは、万事うまくいっているな？」

「はい、アギト様！　全て何もかもオールオッケーなの」

アギトの『信頼の出来る者をロマリアに置いていく』……………これは、アギトがレイたちについていくと決めた時の言葉だ。

ブリミル教の改革において、指導者的立場の者は必要であるがための処置だったハズだ。

……………だが！　月詠はないだろう。

いくら意思があるとはいえ……………いくら永遠神剣と呼ばれる大層な代物であるとはいえ……………いくら擬人化が可能とはいえ！……………彼女に任せるのは、些か悪ノリが過ぎる気がする。
その思いはレイにとっても同じらしく……………。

「おい、アギト。……………こいつに任せるのか？」

「……………ああ。何か、不満でも？」

「ないよな、レイ？　ないって言えや！！」

とりあえず、シエラは黙ろう。

アギト至上主義に属していることは、もう理解してるから、ホントに黙って？ 勝手に動かないで？

と、そんな愚痴をこぼしつつ、話を元に戻そう。

不満があるのか、と問われたレイが答える前に、声を発する人物が一人。

「か…か…可愛いですわ！！ なんてしよう、この愛らしさ！！ お人形さんなのですか！！？」

ユリアナが目をキラッキラさせて、月詠の脇を抱え、持ち上げる。

「うわっ、ちょ！ 何すんのお！！」

「ゆ、ユリ姉！ いい、いきなり、どどど、どうしたの??!!」

擬人化した月詠は慌てて大声を出し、弟であるアスラナはいつも以上に拳動きぶどうって、ユリアナを問い詰めるように声を出した。

……そのユリアナは、上気した顔で月詠に頬をスリスリして、至上の幸福（笑）に浸っているのだが。

レイはそんなユリアナの新しい一面に若干引きながらも、アギトに声をかける。

「本当に、改革はコイツに任せて大丈夫なんだろうな？」

「……ああ。月詠の精神年齢は低いが、それなり優秀………なにより俺の言ったことは全てこなす。悪くない結果を残すハズだ。………武器が必要となれば、召喚魔法で呼び出せばそれでいいしな」

アギトの答えは肯定だった。

彼が肯定するのなら、確かにそうなのだろう。

レイは既にアギトを信用できる人物であるという判断を下しているので、彼の言葉を素直に受け取り、トリステイン帰還前の最終確認を始めた。

自身とシャルロットの他に、サイト、ルイズ、キュルケ、テファ、ユリアナ、アスラナ、シエラ、フェリス、ギーシュ、モンモランシー、ガンツ、セリーナ、エリシア、そしてアギト………全員がこの場に集合していることを瞬時に確認し、レイは『拠り所』の奥に小さく声をかける。

「『渡り人』、世話になったな。……………それと、ヤツの判断は正しい……………それだけ言っておく」

“ヤツ”というのは誰なのか、下された判断とはどんなモノなのか、そして何故それを『渡り人』へ告げたのか……………彼の思考を読み取ることは、誰にも出来ない。

レイは呟きを残してすぐに総身に魔力を漲らせ、未だ騒いでいる一同を尻目に転移魔法を発動させ、トリステインへと帰還するのだった。

たくさんの人間たちが消え去ったその箇所を見つめ、嘆息するひとが一人。

「そうですか、“漆黒の彼”は私の存在がどういうモノなのか、完全に理解しているようですね……」

落ち着いた紫のフードを、もう一度目深に被り直し、彼は言葉を続ける。

「ですが、“白銀の彼”があのような判断を下すことこそが私の狙い。……成長してくれて何よりですよ、アギト」

その言葉と同時に、やはり彼と『拠り所』の影は跡形もなく消え去るのだった……。

魔族戦へ向け…。(前書き)

久しぶりの投稿ですが、残念ながら復活できるワケではありません。むしろ、出来そうもないので、とりあえず出来た途端に投稿します。

……………そうでもしないと、ストックがたまることなどなく、復活も難しいでしょうから。

これからは不定期な更新となってしまうかもしれませんが、よろしくお願いします。

魔族戦へ向け…。

トリステインへ戻ってきたレイたちは、いずれ勃発するであろう魔族との全面戦争に向け、戦力拡大に力を入れていた。

早くガリアに行き、魔王とのバトルを隠密に済ませた方が良いでしょう。に思われるかもしれないが、一応の用心は必要……つまり、レイたちが攻めている間にハルケギニアに兵を差し向けられるより、迎え撃つような戦法をとる方が得策、と考えたのだ。

当然、ハルケギニアには多大な被害が出るのだから、ほとんど準備が出来ていない状況で攻め込まれるよりかは、幾分かマシであるはずだ。

「今日は、お前たちにさらなるレベルアップを果たしてもらおうと思う。いいな？」

声をかけるのはレイ。この場でその話を聞くのは、サイトやルイズ、キュルケ、テファといったメインメンバーと、ユリアナ・アスラナ姉弟。もちろん、シャルロットもレイの傍に寄り添っている。

ちなみに、ギーシュなどは成長の見込みナシ（まあ、ルイズたちと比べて、という前提であり、時間をかければかなりの成長を望めるのだが）とレイは判断したようで、ここにはいない。アギトとシエラは………まあ、ご想像にお任せしよう。ただ、二人は一緒にいる、とだけ記しておく。

うん、ヤツら、何気に仲がいい。

そしてフェリスについても、ここでの特記は控えておこう。ただ、怪しげな行動に力を入れているようだ。

「レベルアップ？ 前の強化訓練だけじゃ足りないのか？」

サイトは、以前にレイによる強化訓練を受けている。それでもレイは、さらに上のレベルアップを施すというのだ。

「ああ、おそらく…だが、魔王は下級魔族までもけしかけてくる可能性が高い。魔族の絶対数は極端に少ないとは言え、侵略には充分の力を有する。……………その場合、交戦できる人物は少しでも多い方がいいだろう?」

「確かに、そうね。でも、虚無魔法は祈祷書を読めば大丈夫だし、私が出ることって少ないんじゃない?」

「そうですね…。それに、あまり特訓しすぎると、魔法のための精神力が…」

ルイズの疑問はもつともだ。テファも同意し、虚無魔法の燃費の悪さについても訴える。確かに、既に成長の見込みはないように思われるが、レイはそうは思っていないようだ。

「それでもないさ。やってみれば分かる」

「……………なんか、怖いわあ。すごくきつい修行が待っている気がするわよ?」

……………キュルケの言うことも正しい。たぶん、超きつい修行を用意しているだろう……………そう思わせるような“ニヤリ”をしてみせたのだから。

そして、恐怖とは伝染するものである。もちろん、すでに上位魔族であるユリアナ・アスラナ姉弟は全く恐怖しないし、シャルロットも、そして一応テファも、レイがなすことに恐怖抱くはずもないので、恐怖が伝染する人物など他に二名しかいないのだが。

「やややあばいいいいっ!! 死ぬ、死ぬの、俺? 死ぬのおお

「??！」

「ちょ、サイト、そんな、あ、慌てないでよ、こっちまで不安になつてくるじゃない！」

結局、二人とも慌てすぎだ。

「まあ、冗談はともかく。今日は別に修行的なことをするわけではない。とりあえず、俺はお前たちを信用して、通常ではありえない方法で戦力を底上げするつもりだ。……悪用するなよ？」

どうやら、今回レイが取る方法は、だいぶチートな方法のようだ。

「レイ、あれをやるの？」

シャルロットは問いかけた。そして“あれ”とはなんなのか。

「ああ、あれだ。……おそらく大丈夫だと思うが、気をつけるよ？」

「分かってる。でも、前に見たとき、レイは平気そうに見えた」

「そうでもないさ。実際、あれはかなりつらい。保つのは十分が限界だな」

「レイさん、“あれ”ってなんですか？」

不意に、ユリアナはレイに声をかけた。ユリアナたちも、話にはついていけてなかったのだろう。意味が分からない！ という状況にあるサイトたちと一緒に、ユリアナとアスラナも困惑気味のようだ。

「ああ、説明しなければな。“あれ”というのは……」

覚醒召喚のコトだ。

「かか、覚醒召喚?!　む、無理だよ!　あれは相当強い人間じゃないと、気がふれちゃう!!」

アスラナは激しく抗議する。当然だ。“覚醒召喚”とは、とてもリスクの高い秘奥であり、魔族にはマネできない人間の切り札なのだから。

「だからこそ、お前たち姉弟なんだ。俺と、お前たちの力で制御し、実力が伴わない、かつ生身の人間にも行使可能な簡易覚醒召喚を実現させる……分かったか?」

「……………そもそも、覚醒召喚ってなによ?」

そういえば、ルイズたちはレイの覚醒召喚を見たことがない……そう思い出したレイは、軽く説明を………する気にはなれず、シカトすることにした。

「さて、では早速始めよう」

「ねえ、聞いているの?　レイっ!」

「聞いてない。さあ、始めるぞ」

始める、そして力を手に入れるとは言うが、その実、レイの覚醒召喚のように膨大な力をその身に宿すわけではない。弱い魔獣の力の一部を、例外的に、そして恒常的に、レイとユリアナ、アスラナで召喚を果たすというわけだ。

レイの言葉を受け、ユリアナとアスラナも仕方なく頷き……そしてレイが唱え始めるルーンに、それぞれの魔力を滲みこませてゆく。

「《汝ら、主なき持たざる者よ。しかして、彼の者らに力を与えう

る者どもよ。我、レイ・クロカミの名の下、ユリアナ・L・アーヴィン並びにアスラナ・D・アーヴィンの調停を受け、命ずる。我らの意志に従い、彼の者らに祝福を
汝らの欠片は、常に彼らと共にある
」

蒼麗の魔力が。純白の魔力が。明緑の魔力が。混ざり、溶け込み、光る魔方陣を形成する。それは、確かに強い魔力を孕んでいるが、それでいて優しい光を放っていた。

「きれい……」

誰からともなく、そんな声が漏れた。ただ、流れるような、無機質なように優しいソプラノは、シャルロットの声だったのだろう。そしてその声は、確かに光に力を与えた。

「ほう……珍しいこともあるものだな。声で魔力がさらに安定した」

レイは呟き、柔らかく隣の蒼髪を撫でる。

……そして手を離し、手を魔方陣にかざす。

「仕上げもしなければな」

「ちよつとレイ！ 確かに綺麗だけど、大丈夫なんでしょうね？」

「ルイズ、心配するな。………キュルケとサイトも、俺を信じる。

テファも、大丈夫だな？」

「……分かった。レイが言うなら、大丈夫だ」

「そうね。ルイズも、大丈夫よ」

「………まあ、そうね」

「大丈夫です、レイさん」

ルイズはおそらく自身に取り込まれるであろう、魔方陣から溢れ出

る力に若干怯えながら、了承する。

「よし、では仕上げる。≫ 汝らの欠片たる力よ。我に応えよ。我が導きにより、宿るべき主の元へ ≪」

レイがそつと手を振り、魔方陣から放たれていた光は、そこから勢いよく溢れ出る。そしてそれは五つに別れ、それぞれが小さな光の塊として、シャルロット、サイトとルイズ、キュルケ、テファの身体を包みこんだ。

「……ちよつと、くすぐつたい」

「ふつ、そうかもな。だが、そのうち収まる。過剰な力によって気がふれぬよう、コントロールもしてあるしな」

「そう。なら大丈夫。……ん、収まりそう」

ルイズとサイト、キュルケやテファも、レイとシャルロットのやり取りを聞きながら大人しくしていると、彼らを包む光は次第に薄れ始めた。

「レイ。これ、消えちやいそうだけど大丈夫なワケ？」

「消えるんじゃない。身体に取り込まれてるんだ。……今、ルイズの吸収は終了したぞ」

レイの言葉どおり、ルイズを包む光は吸収されつくした。……『虚無』が“拒絶”ではなく、むしろ“吸収”することを選んだのだろう。その結果、他の者たちより早く吸収を終えることになった。……そして、やはりその見解は正しいようで、テファの吸収も直後に終わった。

そして、ルイズの吸収が終わって約二十秒。全員の吸収が終わった。

「これで、簡易的な覚醒召喚は終わりですわね？」

「も、もう暴走の可能性もないし、せ、成功……………だよね？」

「ああ。成功だ。……………というわけで」

レイは身を低くして走り、全員の視界から消えた……………。

キイイインツ！！

そして彼の突き出す魔剣・黒羽は、サイトの首筋近くで……………デ
ルフリンガーによって受け止められていた。

「え？　なんで……………俺の身体、勝手に剣を受け止めた……………?!」

サイトは、驚きを隠せない表情で、戸惑っている。

「完全に成功だ。……………サイトに与えた能力は、直感的危機回避能
力だからな」

直感的危機回避能力……………それだけ聞けば、大したことがないもの
のように聞こえる。だが、侮るなかれ。その能力は……………。

「俺の全力を、無意識下で止める……………」

無論、レイにも覚醒召喚という奥の手が残されている上、魔力と“
気”による身体強化で能力の底上げも可能なため、全ての攻撃を防
げるワケではないが……………確かに強い力を宿したのだ。

「す、すごい……………。レイの攻撃、全く見えないのに……………サイトは危な
げなく止めた……………」

「レイさんの、全力を…」

キュルケとテファも、驚きを隠せないようだ。……………レイの攻撃を防げるということは、下手すると上位魔族の攻撃さえも防げるということなのだから。

そしてルイズは、目をキラッキラさせて自分の能力ちからの説明を待っている。

「よし、確認も済んだことだし、全員の能力ちからを説明しておこう」

サイト：《直感的危機回避能力》

自身に向けられた攻撃に対し、致命的な攻撃を自動で受け止める。当然、その瞬間の身体能力や動体視力は跳ね上がり、連続して使えば身を酷使しすぎてしまうこととなる。

シャルロット・キュルケ：《高位魔法同時行使能力》

レイの使う魔法で、上級に値する魔法（最上級は不可）を、同時に数発、放つことが出来る。その際、詠唱は必要なく、魔法の真名を叫ぶことで発動可能である。

しかし、魔力の総量が増えるわけではなく、一度の魔法でトライアングルの魔法数回分の魔力を消費することになる。

ルイズ・テファ：《効率的魔力消費能力》

虚無属性の魔法は、膨大な魔力を消費する。しかし、あれだけの効果を発するのに、そこまで膨大な魔力を消費する必要はないのだ。通常では、どれだけ効率的に魔力を運営しようと、定められただけの魔力は消費しなければならぬのだが、付与された能力により、消費魔力を大幅に削ることに成功した。無論、全力で魔力を注ぎ込むことも可能なので、今までよりもさらに凝縮された威力の高い魔法を使用することが出来る。

「こんなところだ。……………便利だが、決して使い方は誤るなよ」

これで、準備は整いつつある。

魔族との交戦は、もうすぐそこまで……………迫っているのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3665o/>

An isolated black

2011年2月24日03時11分発行